

青立狩 高一・一学期編

—青潟大学附属シリーズ—
高校編
第五シーズン 1

舞夜じょんぬ

溶けかけた雪がまた窓辺に凍りはじめていた。昨日の卒業式では足元がぐしょぐしょになるくらいだったというのに。乙彦は居間のストーブ前に片膝つき、新聞紙の上でスニーカーを乗せて手入れに専念していた。

「おとひっちゃん、そろそろ始まるよ」

「わかった」

母の声に腰をあげ、すぐにテレビのスイッチを入れた。

朝十時から一時間弱、放映されるのは青潟市公立高校入学試験合格者発表の特番だと承知している。兄も弟も、今日は通常通りの授業で学校に向かっている。父も仕事、いるのは母だけ。台所から一仕事終えた母が、ざぶとんを用意して乙彦の隣に座った。

「雅弘くんは自信があると話していたんだよねえ」

「わからん」

「みんな、受かるといいねえ」

「大丈夫だろ」

簡素な返事で済ませ、乙彦は汚くなったぼろ布を新聞紙の上に置いた。

——あいつらが全力尽くした結果を見るのにあたって、俺が中途半端な格好で待つのは失礼だ。

たとえブラウン管の向こうに張り出された結果であったとしても。

それは乙彦のけじめでもある。

青潟の公立高校入試の場合、三月六日に試験が行われ、公立中学卒業式翌日の十六日に発表が行われる。どうしてそんな微妙な時期に設定したのだろうか。卒業式前に発表された場合、当落の状況によって生徒の人間関係にヒビが入るからではないかとか、いろいろ言われている。もっともそれを言うなら私立の合格者もまた同じではないかと乙彦は思うのだが。

乙彦が青潟大学附属高校英語科から合格通知をもらったのは、つい三週間くらい前だった。

この時期、不合格者として過ごしたとしたら、さぞしんどかっただろうとは思う。

「あれ、最初は青潟東だねえ」

母がのんびりした声で、テレビ画面の黒い文字を読み上げる。

「あんたも本当はこっちだったんだけどねえ」

ちくり、と何か響く。乙彦は素早くぼろ布をつかみ視線を逸らした。母も何も気にしていないかのように、ひとり画面の縦文字を読み上げている。

「東高（とんこう）には、あの子が受けたんだっけ？ ほら、あんたと一緒に生徒会やってた、ほら、あのかっこいい男の子」

なんと、母はあの総田幸信が「かっこいい」男だと認識しているらしい。

頭に来ると言いたいところだが、がまんする。画面を凝視する。右に消えていく生徒と受験番号の羅列を目で追いながら、乙彦は「総田幸信」の名を追った。確か水鳥中学で青潟東を受ける

のはあいつだけだったはずだ。本来だったら母の言う通り、自分も受験するつもりでいたのだが、担任の先生から忠告されて断念した。

——俺が受験を辞退すれば、その分別の奴が合格できるわけだから、気を遣えっただけな。

ごもっともな意見だけれども、一度願書を出した以上はきちんと受けるのが受験生としての義務じゃないかと乙彦は感じていた。先生たちの強固な意見を受け入れざるを得なかったのは、いわば総田幸信に対する最後の餞でもあった。自分が青潟東に合格するかどうかは水物だけれども、少なくとも総田は乙彦の顔を見ないですむだけ、平常心で受験できるはずである。ほぼ三年間、生徒会で天敵同士だった自分とは、できるだけ接したくなかっただろう。

「あら、あったよ、総田くん」

母の声が明るい。

「よかったねえ、これで水鳥中学の子、まずはひとり、合格だねえ。おとひっちゃん、これから学校行くんだったら、ちゃんと総田くんにおめでとうと言ってあげるんだよ。わかったかい」

「わかってる」

そのくらいの良識は持っているつもりだ。

次に青潟西、青潟南……と東西南北の学校名が続いた。それぞれ同じ学校の生徒は七割がたの確率で合格しているようだった。すべての生徒名を把握しているわけではないけれども、少なくともみな、納得する学校には収まっているようだった。

「いやあ、でもね、みんな公立でよかったよねえ。みな滑り止めのお金、払っているわけだから安心だろうけど、やはりできたら公立に行ってほしいよねえ」

いったい母は何を言いたいのだろう。悪意があるのかないのかわからない。乙彦は画面に集中する振りをした。

「あんたはとにかくとして、青潟だと私立に行くというのはね、やはり、あんまり見栄えいいもんじゃないしねえ」

悪かったな、そう言いたい。

「おとひっちゃんはね、まだ青大附属だから自慢できるけどねえ、他の学校だったらそれこそ、公立から落ちてしかたなくって感じになるだろうし。東西南北の学校だったら制服がないけど私立はみな、制服あるからねえ。あれ着ているだけで、公立から落ちたんだってことがばれてしまうしねえ」

「関係ないだろ」

むかついてしまう。母が脳天気語る様子を、あっさり流せない。

「公立と私立なんて、どうだっていいだろ」

「だからおとひっちゃんは別だって言ってるの。どこかの地域では私立の方が上だとか、女の子だとお嬢さん学校だからとか言っているけど、やはり、一般的にはねえ、そういうもんよ。公立って何ぼってね」

——悪かったな。どうせ俺は私立だ。

乙彦もわかっているつもりだった。母が口にしてるのは金のかかる私立高校を罵倒している

わけではない。ただ、青潟市の高校入試に関して多くの人たちが感じているであろう、本音に過ぎない。

青潟市の場合、公立高校に対する信仰が非常に厚く、なぜか私立高校を滑り止め扱いする傾向が強い。母の言う通り、本命は公立高校で、落ちたらしかたなく私立へ、という認識が大方の生徒に浸透している。もちろん入学金の額とか、制服の有無とか、いろいろあるにしてもだった。

また、私立高校受験にしても、受験日が二月の中旬のどれか一日に集中しているため、結局私立同士を併願ということができない。結局公立を一校、私立を一校、工業関係の学校に進みたい生徒のみ、高等工業専門学校を受験、という流れとなる。

ただし、一校だけその「公立信仰」からかけ離れた高校が存在する。

乙彦はその学校を受験し、三週間前に合格した。

だから、今、靴の手入れをしながら、ストーブの前で正座してテレビに見入っている。

——青潟大学附属高校。

本来ならば、中学で募集を行い、補充が出た時のみ高校での募集をかけるという方式だった。定員三十名弱だったはずだ。乙彦はこの追加募集にすべてをかけ、三年間の中学生生活を過ごしてきた。もちろん本命は、青潟のトップ公立高校、青潟東としてきたけれども、最後の最後に願書を提出したのは青潟大学附属高校だった。

合格通知をもらってから、両親の許しを得て、入学手続きをすでに終えた。

これがどれだけ関崎家にとって重大なことか、わからなくもない。

家計にどれだけ、負担がかかるか、理解できないわけがない。

だからこそ、決めていた。

青潟工業高校の合格発表が始まる前に、乙彦は母に尋ねた。

「母さん」

「なんなの、ほら次、雅弘くんの学校だよ」

「その、雅弘の父さんとこの店に、俺の話、してくれた？」

母はきっと忘れているのだろう。自分の親だから言うわけではないが、この人は三人の息子を育てていながらまったくもって脳天気というか、いいかげんというか、そんなところがある。だからこそ、家計の不安も全く見せずに「ああいいよ、おとひっちゃんが青大附属に行きたいんだったら行けばいいよ」と言ってくれるのだが、実際関崎家の経済状況がどうなっているのか、乙彦は気付かないでもないのに。

「あれ、雅弘くん、まだかねえ」

「母さん俺の質問答えろよ」

「ちょっと待ってなさい。画面どんどん流れていくから見落としたりしたら困るでしょう」

乙彦はしかたなくブラウン管に目を戻した。青潟工業高校合格者発表。男女別に名前と受験番号が流れていく。確か雅弘の受験番号は三百番台だったはずだ。二百番台が終わり、いきなり三百番が抜け、三百一、三百五と、妙な感じで飛び飛びの番号が重なっていく。

「三百十五番、よっし、雅弘あったぞ！」

片手を握り締め乙彦は大声で叫んでいた。隣の母が両手をぱちぱち叩きつつ、
「よかったねえ雅弘くん、すぐに電話、かけてあげなさいよ。お祝いだねえ」

「いるわけないだろ。合格発表見に行ってるんだ」

相変わらずどこか抜けている母の言葉をあしらいながら、乙彦はもう一度尋ねなおした。さっきの質問にもう少し、具体的要素を付け加えた。

「母さん」

「おとひっちゃん電話してあげなさいよ、ほらほら」

「だから、雅弘とこの店に、俺がアルバイトしたいって話、してくれるって言ってたろ。あれ、どうなったんだよ。先週の段階ではもうおじさんたちに話してくれてるって聞いてたけど。やっぱり俺が直接話した方がいいのか」

ほっと母が膝を打った。とぼけていたのか、それとも忘れていたのか。

「あ、そうだそうだ。その話だけどねえ」

そそくさと立ち上がりながら、それでも母はきちんと結果報告をしてくれた。どうやら単に忘れていただけだったらしい。裏はない。そういう人だ。

「佐川さんもねえ、おとひっちゃんならぜひきてほしいけど、ただ、雅弘くんの友だちが店で働いているのを見るのはやっぱり、落ち着かないだろうってことでね」

「そんなの気にしねえよ」

「あんたがしなくても、向こうさんは気になるもんよ。それでねえ」

電話台の引出しからプリントらしきものを取り出してきた。

「ちょうど、青大附属のまん前に、古本屋さんがあるんだそうで、そこと佐川さんとこと付き合いがあるらしいの。そこは年寄りのご夫婦が経営しているお店だそうでね、ひとり、体の動く人が欲しいという話していたんだってね」

「古本屋？」

げげんに思いつつも母の話のまま聞いた。

「そこでまず、午前中の六時くらいから学校行くまでの八時くらいまで入ってもらって、そこで荷物を本棚に並べたり分けたりする仕事をしてもらうってのはどうだろうってね。どうもお年召してるから、あまり遅く人がきても困るらしいんだけど、おとひっちゃんならまあ、朝も早いのが慣れているし、朝アルバイトしたら放課後は自由だし、それはそれでいいんじゃないかという話でね。もしおとひっちゃんがそれでよかったら、話を通しとくよって、佐川のおじさんが話してたのよ」

「青潟大学附属高校の近くか」

繰り返したのは、まだ口の中でその学校名が馴染まないから。

「まあ、ちょっと六時というのは時間としても早すぎるから、あんたがどうしたいかにもよるけどね。ただまあ、お年よりは朝が早いし、なかなかこの時間帯のアルバイトさんが捕まらないと嘆いてらしたそうだし、もしあんたがよければ、そのあたりがいいかなということらしいわよ」

「母さん、その話、今日の夕飯まで待ってもらっていいか」

乙彦は立ち上がった。もう合格発表速報はすでに青潟工業の分が終わり、次に青潟商業へと移行している。たぶん合格発表が終わってから、公立高校受験者の殆どは担任たちに合否報告を行うはずだ。雅弘も、へたしたら総田も、これからまっすぐ水鳥中学へと向かうはずだ。雅弘をとっかまえて、

「雅弘、よくやったな、おめでとう」

その一言と、あとはすれ違った奴らとお祝いの握手をしてもいい。総田と顔を合わせる可能性というのは……なくもないのだが、もう卒業で縁も切れる。それならきちんと筋を通して一礼してもいい。

「これから、学校行ってくる」

「あら、どうしたの」

まだ汚れが落ちてないスニーカーを片手にぶら下げ、乙彦はジャンパーを羽織った。かなり冷えている。こわばったマフラーも衿に巻いた。

「雅弘に、お祝い言ってくる」

「ああそうね、それがいいわねえ。あら、ねえおとひっちゃん、そういえば五月ちゃんはどこ受けたんだっけ？」

スニーカーのかかとを踏みそうになった。かろうじて答えた。

「確か……青潟商業」

と、雅弘は言っていた。乙彦が確認したわけではない。

「じゃあ、見落としたのかしら」

母の呟きを乙彦はあえて聞き逃した。たぶんそれしか考えられない。

「五月ちゃん、名前、商業のところに載ってなかったんだけどねえ。でも五月ちゃんみたいにしっかりした子なら、落ちるわけないしねえ」

——当たり前だろう。

母のたわごとなんて聞いていられない。玄関を開けるとそこには白い雪がうっすらと積もっていた。父、兄、弟がかき回したはずの足跡も、なぜか綺麗に化粧されたまま形作られていた。もう、水鳥中学の生徒として学校に向かうのはこれが最後だ。卒業式後、これが本当に最後のけじめだ。あの場所でもう一度、乙彦は告げるつもりでいた。

——俺は、青潟大学附属高校に進学するんだ。

生徒会の奴らにも、雅弘にも、総田にも。

卒業式の際、総田が自分に卒業式答辞の大役を譲ってくれたことには感謝している。また生徒会一同から花束贈呈の際には男ながらも涙ぐみたくなる一瞬もあった。卒業式後の胸に迫るものを正直、押さえきれないものがある。

何度か転びそうになり初めて、まだスパイクが必要な路上だということに気がついた。そういえばもう、靴の裏の刃は引っ込めていたはずだった。慌てて直し、落ち着いて学校までの距離を歩いた。

佐川書店の前まで来た。

——雅弘、帰ってきてるか。

入り口のガラス戸を覗き込んだが、客がまばらながらも立ち読みしているだけで、レジ後ろには見当たらなかった。雅弘の両親に「合格おめでとうございます」の一言を残しておくのが義務かと思うのだが、さっき母からきかされたアルバイトの件もからんでいるし、また後回しにしてもいいだろう、そう判断した。

——別にな、友だちの家でバイトするのが気が引けるなんてことないってのにな。

ずいぶんみな、気を遣ってくれるものだ。別に、乙彦からしたら高校以降自分の学費一部くらい稼ぐのは普通のことじゃないかと思うのだが。できれば家から近い方がいいし、さらに言うなら雅弘とも連絡取り合えると中学時代の連中とも繋がりが保てるし、いいこと尽くめだと思うのだが。

乙彦はそのまま、水鳥中学への通学路に足を向けた。繁華街とはいえ、通学路は人気のない場所だった。近くの「青潟市資料館」の脇を通りぬけ、数名の同級生たちが暮らす家の前を過ぎて、その後数回蛇行すると水鳥中学に到着する。グラウンドの脇にある裏道から今日は入ることにした。下級生たちはまだ終業式まで一週間ほど間があるし、昨日も担任から注意を受けた。必ず、合格報告の際は静かに出入りするようにと。

——立村にあとで連絡しておいたほうがいいか。

二十日に青潟大学附属高校の外部生用オリエンテーションが行われる予定となっている。合格発表以来、まだ学校の門をきちんとくぐってはいない。入学関連の書類はすべて親が片付けてくれたので、実際青大附高の生徒として行くのは二十日が最初となる。

入学発表後すぐに祝福の電話をくれた立村とは、四月から同じ英語科のクラスメートとなる。内部進学者ということもあり、十一月前後に決定していたようだ。それからなにかれとなく乙彦宛てに、試験関連の学内プリントとか使っている参考書のリストなどを手書きで送ってくれた。なんとなく女っぽい書き方なのがあいつらしい、とも思う。

評議委員長を後期に、何かの事情があって降り、書記の仕事に専念しているという噂を聞いた。あえて乙彦もそのことについては尋ねなかった。たぶんいろいろと青大附中では勉強しなくてはならないことがたくさんあるのだろうし、それに専念したのだろうと乙彦は解釈していた。総田がまた、小耳にいろいろ挟んできたようだが、あえて一切聞き流したので覚えていない。どうせ立村とはこれから三年間一緒なのだし、いろいろと話す機会もあるだろう。あいつは本当にいい奴だ。陰でいろいろ噂されているような姑息な真似はしない男だ。

乙彦は歩きながらマフラーを直した。

——どうせ二十日に会うんだしな。その時いろいろ話せばいいだろう。

それまではまず、水鳥中学の仲間たちととことん遊ぼう。優先順位はそちらだろう。

校門前まできて、乙彦はあえて影に隠れた。女子たちがけたたましくしゃべりちらしながら目の前を通っていくのが見えたからだった。顔は知っているが名前がよくわからない女子たちだ

った。どうやら公立高校合格の報せを持って担任にご報告するつもりなのだろう。表情の明るさからして、不合格というのはいないと思いた。

男子連中が数人、ふらふらしながら近づいてきたのを見つけて、ようやく乙彦は声をかけた。

「おつかれ」

「関崎、おい、お前、東高（とんこう）受けてねえだろ」

「来たらずいいか」

言葉の端々にからかい調子が混じる。同じクラスの男子たちの顔を見る限り、やはりみな合格らしかった。まずはめでたい。思わず握手を求めた。

「まあ、私立に行かないですんでよかったってことだなあ」

「そうさそうさ、下手に私立行っちゃったら、一生親に愚痴こぼされるだろ」

「金がかかるってなあ。ほんと、俺んちだってさ、入学予約金ぎりぎりまで払ってくれなかったんだぞ。十万も出せねえよって。ひでえよなあ」

みなそれぞれ好き勝手なことを話した後、乙彦の顔を見やる。ようやく「まずい」と感じたらしい。別に怒っているわけではないが、黙っているだけで威圧感があるならそれはそれでよい。

「おとひっちゃんはなあ、別だよなあ」

ひとりが頷いてそう呟いた。

「私立で許されるのは、青大附属だけだろ。なあ」

「そうそう、露骨に滑り止めじゃねえしさ。なんてったって関崎、お前、英語科全市で二名の中に入ったんだもんなあ、それ、すげえよ！」

いきなり褒めあいが始まる。乙彦にはなんだか妙にくすぐったい雰囲気だった。

「そんな、運だって。それはそうと、お前ら雅弘見なかったか？」

話を逸らしながら、乙彦は視界の片隅にふたりの男子を認めた。

「あ、悪い、雅弘来たから先行く」

「じゃあなあ」

片手を挙げ、乙彦は次に、後ろから歩いてくるでこぼこの二人組に近づいた。極端に背の低い男子は雅弘だと確信している。が、隣の奴は全く予想だにしていなかった。

「お前ら、なんで一緒に歩いてるんだ？」

笑顔で片手を振りながら、スタジャン姿で歩いてきたのは雅弘だった。

隣でやたらと丈の長いガクラン姿をひけらかしているのは、かつての副会長、総田幸信だった。

。

「おとひっちゃん！」

けらけらとあくのない笑顔で飛びついてきた雅弘に、まずは祝いの言葉を。

「雅弘、よかったな」

「あれ、合格発表見てたんだ」

「当たり前だろが」

後ろでそっぽを向いている総田を無視し、乙彦は雅弘の肩を叩いた。

「青潟工業だったら、結構学校も近いか」

「そうだね、青大附属から近いし」

しばらく他愛もない話をしあっていた。雅弘の成績はあまり芳しくなく、特に英語が弱い。そのせいもあってかなり受験勉強では苦勞していたものだった。乙彦も自分の弟分をなんとかして合格させたい気持ちがあり、自分なりに授業のポイントとか問題集の解答集とかいろいろと与えて応援していたものだった。決して頭が悪い奴だとは思わないのだが、学校のいわゆる暗記物試験に向いてないらしい。そんな雅弘が工業高校に進学するというのは、はたしてプラスなのかマイナスなのか、乙彦には判断できなかった。もちろん、プラスであってほしいと祈ってはいるのだが。

「じゃあ、俺、先に行くぜ」

つまらなさそうな声をした。総田だった。生徒玄関に向かおうとしている。乙彦は呼び止めた。

「総田」

「はあ？」

ポケットに両手を突っ込み、金糸で彩られた裾を翻し、総田が振り返った。

かつての天敵。ライバル。同時に、かつての生徒会同志。

けじめをつける。

「青潟東高、合格、おめでとう」

乙彦はそれだけ早口に伝え、背を向けた。雅弘の頭をもう一度軽くぽんぽん叩き、

「お前も早く、先生とこ行ってこい」

もと来た道に戻ろうと、回れ右した。

「関崎」

今度は乙彦が呼び止められた。総田だった。雅弘がまだ乙彦に物言いたそうな顔して突っ立っている。総田はポケットに手をつっこんだままのポーズで、顎を少しあげた感じのまま、にやりと笑った。

「お前こそ、がんばれよ」

言い残し、総田はそのまま、威風堂々生徒玄関をくぐっていった。

足元のスパイクが、つるんとすべりそうだった。ひとつだけ領き、また乙彦は一步、また踏み出した。今度は片腕をひっぱられ、正真正銘、尻餅をついた。

腕をひっぱったのは、雅弘だった。ずいぶん頼りなさそうな眼差しをしていた。

まさか乙彦についてきてほしい、なんてガキっぽいこと言うのだろうか。

雅弘なら言いかねない。だが、中学三年にもなってそんな勘違いしたことするわけにもいかない。

「どうしたんだ」

「ひとつ、頼みがあるんだ」

小声でささやき、いつものどんぐり眼をうるませて、素早く耳元に口を近づけた。

「さっきたんのことなんだけどさ」

「水野さんが、どうしたんだ」

転んだ拍子にぺたっとついた尻のあたりをさすりながら、乙彦は問い返した。

「青潟商業、落ちちゃったんだ」

「なんで知ってる？」

ピントがずれた質問を返してしまった。家を出てくる時母が話していたことを、ちらと思い出した。

「だって、合格発表観にいったの、駅の前だもん。工業まで行ったら落ちた時情けないしさ、それに、他の奴の結果も知りたかったんだ」

「他の奴って？」

「うん、俺のクラスってというか、小学時代の知り合いはみんな受かってたんだ。男子はね。けど、女子がさ。さっきたんだけ」

「お前そんなに全部、チェックしてきたのか？」

なんだか話が微妙にずれてしまう。本当に聞きたいのは、「なぜ水野さんが青潟商業に落ちたのか」なのだが、乙彦が尋ねることはみな、どこか違う部分ばかりだ。しゃべった後で自己嫌悪に陥りそうな言葉が溢れる。なぜだかわからない。

雅弘はこくこく頷いた。また目を潤ませた。

「さっきたんも一緒に合格発表見てたんだけど、やっぱり悲しかったみたいで、泣きながら家に帰っちゃったんだ。たぶん、報告はしなくちゃいけないってわかってるから、来るとは思うけど」

「じゃあなんでお前、一緒に来なかった？」

頭の中でまだ、現状が把握できていなかった。水野五月、三年間連続の生活委員を務め、お下げ髪にはつかねずみのような眼差しというおとなしめの女子。小学時代のクラスメイトで、今は、雅弘の。

——付き合ってるって、言ったよな。

乙彦を見上げるようにし、雅弘は首を振った。

「まだおとひっちゃんに話してなかったけどね、俺、さっきたんと昨日、付き合いをやめるってことにしたんだ。卒業式終わってから」

——付き合いを、やめる？

足元からなにかひたひたと冷たいものがよじ登ってくる。

無言で雅弘のうるんだ目をまた見つめてしまう。

雅弘は小声で続ける。

「さっきたんが嫌いになったとか、そういう話じゃなくて、ただお互い違う学校に行ったらそう

いう付き合い大変になるから、いったん友だちに帰ろうってだけなんだけど。もしそんなこと話してなかったら、俺がさっきたんについて行ってあげようと思ったんだけど、やっぱりそれだとかえて、さっきたん傷ついちゃうなって気がするんだ。二重に、傷つけてしまいそうでさ」
「女子たちは誰かついていこうとしなかったのか？」

男子と女子の別行動というのはわからなくもない。もともと面倒見のいい水野さんがショックで泣きじゃくってしまったというのなら、誰かが恩返しの意味もこめて付き添うことはしないのだろうか。雅弘は首を振った。

「他の子もみな、受かっちゃったからさ。たぶんみんな、声かけられなかったんだと思うんだ。それに、みな、慰めようがないみたいでさ。ほら、みんな、受験で落ちたことないだろう？ 気持ち、わからないんだと思うんだ」

——受験で、落ちたことがない。

ふたたび、耳にびしりと響いた。

合格発表の掲示板で、自分の番号が見当たらない時、何を感じるか。

何度も抜けた番号を探してる時の目。

足元からすべて力が抜けていき、後ろの道路に飛び込みたくなる瞬間。

雅弘の目から、薄い膜のようなものが浮かんだ。

「おとひちゃん、俺も、本当のことという、どうして慰めていいかわかんないんだ。だからこのまま放っておいてきちゃったけど、今、このままだとなんか、まずいなって気がするんだ。けど俺が行くと絶対、さっきたん、さらに泣いちゃうと思うんだ。だから、おとひっちゃん」

言葉を切り、雅弘は唇をぎゅっと結ぶと、黙って乙彦を見つめた。にらむ、に似ていた。

雅弘の言葉を待つ必要はなかった。乙彦は即座に、答えを出した。

「わかった。水野さんは家にいるんだな」

こくっと頷いた雅弘に振り返らず、乙彦は全速力で元来た裏道を駆け抜けた。グラウンドには二年の男子たちがジャージ姿で雪中サッカーに興じていた。去年の今ごろは自分も同じく、雪の中犬ころみたいに駆け回っていたはずだった。その陰で流れたはずの涙を、あの頃の自分は想像することができなかった。ただ今は違う。水野五月に今溢れているはずの感情を、三年前の春、小学六年だった乙彦は青大附中の合格発表掲示板で、すべて身体に染み込ませ、味わったはずだった。

——水野さんの気持ちは、俺しかわからない。

水野五月の家は、自宅からそれほど遠くなかった。

小学校時代何度か雅弘たちと一緒に、なにかの行事で迎えに行ったことがある。中学三年でふたたび同じクラスとなってからは、生徒会副会長と生活委員という繋がりもそれなりにあり、会話を交わしたり、途中まで一緒に歩いたりすることは、ないわけでもなかった。

おそらく、乙彦の付き合いのある女子の中では、もっとも言葉数の多い人だった。

——青潟商業、あと誰が受けたんだ？

商業高校を受験した連中を思い浮かべてみた。

だいたい成績ランクを乙彦なりにチェックしてみた。

——だとすると、私立は青潟女子商業か、まさか可南か？

五月も私立の滑り止め高校を受けていたはずだ。どこに受かったのかまでは確認していないが、とりあえず中学浪人することはなさそうだ。しかし、「行く場所があるんだからいいじゃないの」で片付く問題ではない。青潟の場合、無意識ながらも公立上位の空気が流れていて、よほどの事情でもない限り、私立へ行かせたがる親はそうそう居ないはずだ。乙彦が知らないだけかもしれないが、少なくとも知っている範疇ではそのはずだ。

雪の解けたコンクリートの路にたどり着き、乙彦はまず息を整えた。

ここから五月の家までは、角を曲がったすぐそこにあるはずだ。

確か去年の春だったか、一度だけ水野五月とふたりで歩いたことのある道筋を乙彦は覚えていた。青大附中との交流会が行われた土曜の放課後だった。あの日のことだけは、なぜか鮮やかに記憶されていた。

——行っても、何しゃべればいいんだ？

慌てて駆け出したはいいが、いざ、五月の家を前に乙彦はためらった。

クラスの生活委員に、同級生たちの違反カードや抜き打ちの服装検査情報を教えてもらうとか、そういう話をしてほしくて行くわけではないのだ。修学旅行、たまたま雅弘に伝言を伝えたくて、あいつの付き合い相手である五月に話し掛けるという理由があるわけでもない。とりたてて何かしなくてはならない義務はない。ないのになぜ、こうやって走ってきてしまったのか、自分でもわからなかった。

わかっているのは、今五月が感じている感情と、三年前、自分が青大附中の合格発表帰りに感じたものと、ほぼ同じであるだろうという、それだけだ。

男子と女子との違いもあるだろうが、行きたい学校にふられたという現実を見極めるのがどれだけ痛みを伴うものか、それは経験したものでなければわからないだろう。

だが、それを直訳風に伝えてどうなるというのだろうか。

雅弘も言っていたではないか。

——さっきたんをこれ以上傷つけてしまうと。

と。あいつが昨日、いろいろ思うところあって別れを告げたのは、決して悪いことではないだ

ろう。雅弘はもともと、高校を卒業してからすぐに独り立ちして生きていきたいとかねがね語っていた。あの、どんぐり眼の幼い顔には似合わぬ覚悟のようなものが、あいつにはあった。乙彦もそれを知ったのは一年くらい前のことだった。

だから、付き合いなどで時間を取られる暇がないのはよく理解できる。

青瀬工業の電気科という話だし、それなりに忙しくなる。そのあたりを見通したのだろう。

しかし五月にそれが届いたかどうかは、乙彦にもわからない。傷つけてしまったことは確実だろう。だからこそ、乙彦に「これ以上傷つけないから」という理由で、頼んだのだろう。この気持ちも、乙彦には理解できる。ある意味、男子としての、思いやりだ。

——けど、どうすれば傷つかないんだ？

一年前に、別の女子のことでかなり悩んだことがある。「どうやって傷つけずに遠ざけるか」という問題だったが。その時も精一杯自分なりのやり方で伝えたつもりだったが、どうやら曲解されてしまい、なにやら妙な方向に進んでいる。この件については青大附高に進学してから立村にいい方法を考えてもらおうとしても。

だが今回は。

小学校時代からの繋がりある女子だ。

他の口うるさい女子連中よりははるかに、乙彦に暖かく接してくれた女子だ。

そしてなによりも。

——決して、傷つけてはならない人だ。

乙彦はまず、近所のスーパーに立寄った。制服姿ではあるけれども、それほど目立たなかった。すでに乙彦の青大附高合格は近所の人たちにも知れ渡っていて、顔を合わせるごとに、「おとひっちゃんおめでとう！」

そう声を掛けられる。三年前の失敗を知っている人たちだからこそかもしれない。その度に直立不動で一礼して「ありがとうございます！」と答えるのが常。なにかこそばゆいものを覚える一方で、この言葉をもらうのが三年前だったらとふと思う。

女子が好みそうなものってなんだろう？

総田や雅弘だったら、おそらくチョコレートとかケーキとか、そういうものを買っていくのだろう。今年のバレンタインデーやホワイトデーなどでもいろいろと一部では盛り上がっていたらしいが、乙彦には全く関係のないことと見過ごしてきた。受験真っ最中だったのだ、当然だ。

しかし、お菓子売り場に立って眺めてみると、どうもケーキやらチョコレートやらといったかわいらしい雰囲気のものに、どうしても手が伸びない。第一、これっぽっちで腹が満たされるだろうか？ 男子と女子が違うといえればそれまでだが、一瞬のうちに口に入って消えてしまうのが見え見えだ。

乙彦はしばらく立ったまま迷っていたが、やはり自分の直感に任せることにした。

男子も女子も関係ない。特に水野五月は、くそいまましい女子連中たちとは違い、自分と同じ価値観でもって、話をしてくれた数少ない女子である。だったら、わかるはずだ。絶対に。

乙彦はまっすぐ惣菜売り場に行き、肉コロッケ五個入りを一パック購入した。

あの時、三年前、自分がしたことと少し似ている。

あの日は、帰り路近所の肉屋でコロッケを十個ばかり小遣いで買い込み、道端でやけ食いはずだったから。

つま先で記憶を辿りつつ、乙彦は水野五月の家へと向かった。

家の前には、小鉢で何かの花が数株、飾られていた。

どういう花なのかはわからないが、まだつぼみで咲きかけといった感じだった。奥の枝もまた、ごつごつした幹にいぼのようなものをたくさんつけて、裸のままだった。まだこの家に春は来ていないのだろう。いきなりの冷え込みでつぼみも凍ったのだろうか。

とりあえずは、手元のものだけ渡して帰ろうと決めた。

顔を合わせてどうするというわけでもない。雅弘の話信じれば、五月は泣きながら合格発表の会場を後にしたはずだ。ましてや生活委員である。不良っぽくあちらこちらたむろうとは思えない。帰る場所といえば、家だけだろう。

雪のこんもり積もった庭を横切り、乙彦はよびりんを鳴らした。

がたごとと、奥で物音あり。同じ風に乙彦の喉から音が洩れたような気がした。すぐに開いた。少し驚きつつも、笑顔で五月のお母さんが声をかけてきた。

「あら、関崎くん。おはよう」

天照大神が姿を隠したと同じくらい水野家の中は真っ暗なんじゃないかと覚悟してきていたのに、その笑顔はなんだろう。答えるのに困った。まずは挨拶と礼をしっかりと。

「昨日の答辞、かっこよかったわよ」

「あ、ありがとうございます」

こんなところで答辞の感想なんて聞いたってしかたない。まずは伝えることのみ伝えねば。乙彦は説明の前にまず、スーパーのビニール袋を差し出した。まだ温かい。あげたての匂いが漂う。袋を覗き込むようにして五月のお母さんもきょとんとした顔で乙彦を見た。

「あの、水野さんに、渡してください」

「五月に？」

「はい、では、失礼します」

言うべきことはこれだけだった。あと、何を付け加えればいいのか。

五月のお母さんはもう一度乙彦とコロッケを見比べると、また満面の笑顔を浮かべた。玄関を出てきた時と一緒にいた。

「五月呼んでみましょうか？」

「いえ、いいです」

冗談じゃない。何も言うことなんてない。伝えるべきことは伝えたのだから、これで終わりだ。乙彦は半ば強引に背を向けると、慌ててもう一度、直立不動で礼をした。花が咲きそうで咲かない庭をつつきろうとした。とたん、背を向けてきた玄関からいきなり大爆笑の音が洩れ聞こえた。お母さんだけではなく、どうやら別の誰かも笑っているらしい。全身、ハイビスカスの花

が頭からにゅっと咲いたようで燃え立ちそうになる。乙彦はひたすら我が家へと駆け出した。

——何も、笑うことねえだろうが！

自分でも何しに行ったのかわけがわからなくなっていた。

少なくとも雅弘から事のきっかけを伝えられた時は、水野五月に慰めの言葉をかけようと思っていただけのはずだった。街を歩いているうちに、そんなの欲しい言葉じゃないと判断し、方向転換しただけだった。あんなに大爆笑されるようなこと、したわけじゃなかった。

おそらく、周囲が思うほどに、五月の状況は悲観すべきものではなかったのだろう。もともと五月の両親は明るい人で昨日の卒業式でも同じように「関崎くん、青大附高おめでとう、よくがんばったわね」と笑顔で声を掛けてくれるような人たちだった。今の言動も決して理解できないわけではない。公立高校不合格の娘を罵倒し、もう二度と頭が挙げられないように叩きのめすような人たちではないとも思う。

でも、やはりわかっているようで、わかっていないのではないか。

やはり、伝えるべきことが、あったのではないか。

うまく言葉が見つからない。何か、やりわすれてしまったようなものが残っていた。乙彦は家に向かう足取りを若干緩め、靴の紐を結び直そうとした。と同時に、

「関崎くん」

誰かが目の前の道路から、ひょこんと顔を出した。

乙彦はしゃがんだまま声も出せずに硬直した。

——なんで、水野さんがここにいる？

水野五月が、なぜか目の前に、コート姿で立っていた。

「裏口からきたの」

いつもと変わらぬ、楚々とした風情。どこかはつかねずみに似たこじんまりとした顔の造作。そしてお下げ髪のまま。

「あ、ああ、そう」

ようやく発することができたのは、この程度だった。情けない。

乙彦がわざとゆっくり靴の紐を結び直す間、五月は首を傾げるようにして待っていた。ようやく終わって立ち上がった時、改めてお礼を言われた。

「さっきは、ありがとう」

「いや、なんでもない」

また沈黙が続く。五月は黙っていてもいららするようにはなく、話を始めるまでずっと待ってくれる人だった。乙彦がなかなか言葉を見つけられずにいる時も、静かに様子を見守ろうとするタイプだった。だから、あせって何か馬鹿なことを口走らないですんだ。乙彦の知る限り、そういう女子は五月だけのようだった。

「変かもしれないけど、あの」

「佐川くんから聞いたのでしょうか」

静かな笑みに、乙彦は頷くしかなかった。

「あいつ、青潟工業受かったから学校に来てた」

「そうなの。一緒に見たの」

五月は頷き、黙って歩き始めた。なぜか駅の方へと向かっていた。

「さっき関崎くんがくれたコロッケね、うちのお母さんが付け合せつけてお昼ご飯にするって喜んでいたわ」

しばらくふたりは並んで歩いていた。

ちょうど一年前、青潟大学附属中学評議委員会との交流会の後と同じに、ただ歩く方向が逆というだけだった。

「これから、学校へ行くのか」

「報告しなくちゃ」

五月は頷きつつ、俯いた。

「合格でも、不合格でも行かないといけないから」

さすが生活委員、そのあたりのけじめはしっかりしている。

「その後で、書類も用意しないと」

「書類って？」

乙彦が尋ねると、五月は立ち止まりかすれた声で呟いた。

それまでの受け答えとはまた違った、切ない響きだった。

「私立の入学金、今週中に用意しないといけないもの」

周囲には誰もいなかった。

——入学金か。

乙彦の中で、がつんと何かシンバルのように鳴り響いた。

「どのくらい」

「きっと、高いと思うわ」

声が震えていた。五月の俯く横顔を、乙彦は恐る恐る覗き込んだ。

「それに、制服もシーズンごとに替わるし、持ち物も公立と違って規則があるからそれにあわせないといけないし、それに寄付金もあるし」

雅弘はこの様子を側で見つめたのだろうか？

どうしようもなく、張り付きたかった。ほんの一步だけ、乙彦は五月の側に近寄った。

「うち、お金持ちじゃないから、そんなにたくさん、用意できないわ」

「水野さん？」

問いかけはした。

答えを期待してはいなかった。

すでに、乙彦にはその答えがはっきりと浮かんでいたから。

——水野さんが泣いていたのは、落ちたからじゃない。

雅弘には見えなかったであろう答えが、今の乙彦にはあらわに読めた。

あの、六年三月のあの時の乙彦にはわからなかったけれども、今、中学三年三月の自分には、水野五月の苦しんでいる答えが、ありありと解けたから。

——家族のみんなに、経済的な負担を掛けてしまうのが、辛いんだ。

——迷惑を自分ひとりの力不足で、かけてしまう、それが切ないんだ。

一ヶ月前、青大附高に合格してから自分なりに答えを出した問題を、水野五月の前でもう一度解かされているようだった。

さっき脳天から花開いたハイビスカスが今度は体中の孔から噴き出してくるようで、全身熱くなる。何かを口にしたいくても、できない。乙彦は立ち止まったまま、涙を堪えている五月に向かい、なんだか唇を動かそうとした。昨日の卒業式答辞では、練習したかいあってつかえることなくすらすら読み上げられた言葉が、なぜか、五月の前では舌がこわばり出てこない。同じクラスになってからは、以前よりも自然に話せるようになったはずなのに。いきなり二年前の自分に引き戻されている。

「あ、あの」

どもりながら、乙彦はとっさに浮かんだ言葉を叫んだ。

「それなら、バイトするといいんじゃないか」

口走った後で、さらに背中から真っ赤なハイビスカスが湧き出したかのよう。その場で背を向けて奇声あげて走り回りたくなるのを、必死に押さえた。

「高校に入ったら、俺も、バイトするつもりなんだ。あのつまり」

「アルバイト？」

げげんそうに、五月が呟いた。顔を挙げ、

「関崎くんが？」

「そう、そういうことになったんだ」

目が合い、慌てて逸らし、足元のゆるんだ雪をかき回した。

「雅弘んとこのおじさんとおばさんに頼んで、青大附属の近くにあるっていう、古本屋でバイトするんだ。あの、朝、六時から八時まで働くから、たぶん学校には遅刻しないし」

意味不明、何か取り付かれてしまった。五月に見つめられてさらに妙な発想が頭の中に沸いて出る。原色カラーのやたらとテンション高い言葉だけが、勝手に飛び出してくる。

「それで俺も、青大附属の学費、稼ぐつもりなんだ。あそこも学費、やたら、高いって聞いているんだ」

明らかに五月の目には、乙彦の怪しい言動に戸惑っている色が浮かんでいた。

誤解されているかもしれない。まずいと思う間もなく、さらに言葉は先走る。

「あ、あと、入学したらたぶん、青大附属、奨学金とか特待生とかそういうのがあると思うから、それ探してみようかと思っている」

「奨学金？」

さらに、戸惑いを隠せない五月に、乙彦は頷いた。早口に、そのままに。

「たぶん、私立だったらそういうのがあると思う。だから、そうすれば、学費はそれほど負担しないですむ。だから、あの、でないと、俺も」

言いかけた乙彦の言葉に、五月は初めて首を振った。

「関崎くんみたいに、私、頭よくない。だって青澗商業落ちるくらいなもの」

「いや、そんなことない！」

思わず怒鳴ってしまった。運悪く年配の女性が通りがかった。睨むようにふたりを眺めて去っていった。

「水野さんは、頭悪くなんかない。俺はそう思う」

「どうして」

問われた言葉に、乙彦はそれ以上言い返せなかった。今、ひとたび溢れんばかりにはじけ出した言葉よりももっと伝えなくてはならないものがあつたはずなのに、なぜかそれが出てこない。なんでこんなわけのわからないことばかり口走っているのだろう。

「それは」

「私、奨学金もらえるような成績、取れないもの」

「いや、可南女子ならたぶん問題なく取れる」

いわゆる女子の進学する私立高校のランク付けでは、底辺とされているあの可南女子高校。

校風なんてよくわからないが、噂によると自分の名前と生年月日が書ければそれで合格とも言われている学校だ。そんな学校において、水野五月がそのまま埋もれてしまうわけがない。信じたかった。たまに見かける、スカートずるずる、短めの上着に白いスカーフを短く縛った可南の女子高生たち。あんなタイプの女子がたむろう中にもし水野五月が現れたとしたら、まさに掃き溜めに鶴ではないのか？ 他の誰がなんと言おうとも。

五月はじっと乙彦を見つめた。ゆっくり、こっくり、頷いた。

「ありがとう、関崎くん」

「え」

「今から学校に行くわ」

少し無理目に、それでもあどけない微笑みをたたえ、五月は乙彦にささやいた。

「明日、可南の入学オリエンテーションがあるの。何を用意していけばいいか、先生に確認してくるわ」

「あの、俺は」

「ありがとう。関崎くんのおかげで、最後まできちんとする気持ちになれました」

もう一度下を見つめ、自分に言い聞かせるかのように。

「関崎くん、青大附属って、本当にいい学校だと思うわ。私の会ったことある青大附属の人たち、みな、やさしい人たちばかりだったもの。一生懸命で、友だち、先輩、後輩、みんな大切にしている人ばかりだったわ。頭がいいからといって、威張る人なんて、いなかった。だから、きっと、うまくいくと思うわ」

なぜ、そんなことを口にするのだろう？

五月はまっすぐ顔をあげ、いつもの楚々としたはつかねずみのような表情で乙彦にはっきり言い切った。

「関崎くんには、青大附属のみんなが、心から迎えてくれると思うの。私、そう信じてるから。行ってきます」

背を向け、水鳥中学への通学路をそのまま歩いていく五月を乙彦は見守った。

——行ってきます、か。

同じ町内、おそらくしょっちゅうこれからも顔を合わせることが多いだろう。高校が別だとはいえ、繋がりが途絶えるわけではない。それは雅弘も同じはずだ。もう二度と会えなくなるわけでもない。だから、無理に今、変なことを口走る必要はないはずだ。

雅弘に別れを告げられたいきさつを、無理に聞き出す必要なんてない。

——俺が今、水野さんに何ができるか。

乙彦がこの瞬間、一番知りたいことを問う時期では、まだない。

合格通知と一緒に「入学者オリエンテーション」案内が届いていた。二月下旬に受け取った際、両親ともども仰天したのは、

「入学前なのに、もう教科書買わねばなんないわけなの？ それも問題集から副読本からこんな大量に？」

「冬服夏服それぞれ一着ずつというならまだわかるけど、なんで四着も買わねばなんないの？」

「まあ靴を統一するのはわからなくもないけれどもねえ、ジャージもなんで二着ずつ？」

とにかく、スペアを用意しろという項目がやたらと多い。雅弘にも公立高校の準備状況について聞いてみたが、どこも制服はガクランにシャツのみ、ジャージは一着のみ。こんなに二重に買わされることはない。

母が溜息をつきつつも、貯金通帳を広げて電卓を叩いているのが見えた。

「おとひっちゃんは心配しないでいいからね、まあ、青大附属だからこのくらいの金額は覚悟していたし、お父さんの貯金もあるし」

「あ、俺のお年玉、貯金そのままあるからそれ使って」

乙彦は郵便貯金の通帳を差し出した。特に使うものもないし、もらう額もたかがしれていたものでそんなに貯まってはいない。しかし、ないよりはましだろう。

「いいよ、あんた、これは大学の入学金にきなさい」

やんわりと首を振られた。でもやっぱり溜息は続くものである。

「入学前でこのくらいかかるんだから、入ってからがまた大変だろうねえ」

——まさかこんなにかかるとはな。

入学してから、奨学金の有無を確認し、もし試験を受けられるようだったら受けてみるつもりではいた。しかし、入学の前段階で費用が想像以上にかかる以上、乙彦としても少し早めにアルバイトを

「佐川書店」の店長こと雅弘のお父さんには、古本屋でのアルバイトへの快諾を伝えた。

母と一緒に乙彦も頭を下げた。

「やっぱりねえ、雅弘の友だちがここで働いているというのは、お互い落ち着かないものがあると思うのよ。おとひっちゃんはしっかりしているから、きっと戦力にはなってくれると思うんだけどねえ」

雅弘のお母さんを交えて話をした。お父さんも頷いた。

「いやあ、ほんと向こうさんは助かると思うよ。おとひっちゃんなら太鼓判押して送り出せるしなあ。それに、午前中だけだから学校にもそれほど影響もないだろうし。なあ、雅弘にも見習わせたいよな」

そんなことないだろう、雅弘はすでに、家の手伝いとしてレジ打ちをしているじゃないか。

乙彦がそう言い募ると、ふたりは顔を見合わせて笑顔で答えた。

「おとひっちゃんが来てくれると、雅弘の仕事もなくなってしまうからね。そうそう、古本屋さ

んの情報というのは新刊を扱っているうちのような書店にもかなり影響があるからね。そのあたりも時々顔を見せて、教えてもらえると助かるよ」

そういうものなんだろうか。乙彦は改めて深く頭を下げた。

とりあえず四月からアルバイトという形で今のところ話は決まっている。例の古本屋にはオリエンテーションが終わって次の日にでも、雅弘の父さんに連れられて挨拶に行くことになっている。

しばらくは親のすねをかじりつつ、学費以外の金額を押さえるよう努力しないとならないだろう。同じ英語科に進学予定のエスカレーター入学生・立村によれば、

「よっぽどのことがなければ自転車通学で大丈夫だよ」

と言われている。定期券の必要性はない。

給食も出るはずだし、買い食いする必要もない。

電車鳩のように往復さえしていれば、たぶんさほど問題はないと思われる。

しかし。

乙彦はもう一度オリエンテーション用のプリントを眺めた。

——部活動見学か。

最初から諦めていた。

——無理だな、やはり。

ぎりぎりまで古本屋での早朝アルバイトを迷ったのは、その点においてだけだった。

中学一年の二学期半ばまで、乙彦は陸上部に所属していた。だから運動関連の部活動に必ず「朝練」と呼ばれるものが必要なのは承知していた。朝五時半から授業開始直前までトレーニングを行い、その後放課後夜遅くまで走りこみを続ける。場合によっては先輩たちの特別トレーニング……別名しごきともいうが……を受けることもある。

乙彦の場合長距離専門だったので、どうしても走りこみが多くなる。それは苦痛ではない。しかし、生徒会副会長に当選してからはどうしてもそちらの仕事がらみで練習に時間を割けなくなった。立候補を勧めたのは先生たちなのだから、決してそのことで嫌味を言われることはなく、かえってそちらに力を入れるよう激励された。しかし、二年、三年の先輩たちからは直接張り手を食らわされたり、さらには嫌がらせも受れたりとさんざんだったこともあり、見切りをつけた経緯がある。

決して、走るのが嫌いだったからやめたのではない。

できれば高校入学と同時に再開を考えていた。

——だから走りこみ毎朝続けてたっけのにな。

また溜息が洩れた。雅弘を子分にして、卒業まで毎日早朝トレーニングを続けていたのも、やはり無駄になるのだろう。しかたないことではあるけれども、しょうがない。

早起きは苦にならない。しかし今までランニングを続けてきた時間をそのままアルバイトに持

っていくとしたら、まず朝練に参加することは絶対に不可能だ。

いわば鍛えるために使っていた時間をそのまま、学費に換算するだけのことだ。

前日の夜、立村に電話をかけてみた。

持ち物のチェックを行ったのだが、少し話がかみ合わない。

「あれ？ オリエンテーション、午後からだと思っていたけど」

きょんとした声で立村に答えられ、乙彦も何度もプリントを読み返した。

「いや、俺のもらった紙には確かに、八時半からと書いてある」

「どうしてだろう？」

暫く議論を交わした後、結論としては、

「外部入学者を午前中呼び出し、午後から中学からの進学者と顔合わせという流れなのではないか」

というところに行き着いた。

「青大附属は公立と違う決まりがたくさんあるから、まずそれを説明してから、ということなのかもしれないね」

立村は穏やかに答えた後、

「それでは、午後に」

短く締めた。

立村も自覚している通り、青大附属高校は公立から来る入学者にとって戸惑うしかけがかなりなされているのだろう。制服を大量に用意させたり、教科書を二月の段階で購入するよう指示したり、宿題用の問題集を大量に渡されたり。乙彦には予想もつかない展開だった。

このような状況がさらに待ち構えているというのなら、自分の本能赴くままに行動するのは、家計に多大な負担をかけるだけのことだ。改めて乙彦は気を引き締めた。

——余計なお金を使ってはならない。

——俺は、すっげえわがまを言って、青大附属に行かせてもらったんだ。

財布の中には三千円分、まだ小遣いが入っている。出来る限りこの中のお金は使わないようにしなくてはならない。

次の朝、乙彦はいつものように雅弘をひっぱり回してランニングを行った後、すぐに学校へ行く準備をした。三月半ばとはいえ、かなり空気は冷たい。さすがに雪は解けきっていたが、それでも時折霜が残っている土壌を見かける。思わず踏んでしまう。

「おとひっちゃん、あんた、今日はまずお風呂に入ってからにきなさい」

「いい、シャワーで」

「いいえ、あんた、今日は青大附属のいいとこの子たちと初めて会うんだからね。びんぼくさい格好してっちゃだめよ、ほら、パンツとシャツ用意してあるから、すぐ入りなさい」

まだ兄、弟が寝ている中、乙彦は言われる通り一番風呂に入った。別にそんな気合入れるつも

りもないのだが。それに、「いいとこの子」とはいったいなんぞや？ 立村を代表とする青大附属の連中の性格を見る限り、少しのんびりしたところはあるかもしれないが、それほど上流家庭のお坊ちゃんという気はしなかった。まあ、一汗かいたことだし、さっぱりするのなら、それもまたよしだ。

「じゃあ、行ってくる」

乙彦はさっさとカラスの行水を終わらせた後、自転車にまたがった。慌てて母が追いかけてきた。何を言うかと思ったら

「あのねえ、おとひっちゃん。あんた、あまりお金お金って貧乏くさいこと言っちゃだけだからね」<

「別にそんなこと」

「うまく合わせるんだよ、あんた、馬鹿正直だからねえ」

正直でどこが悪いんだ。乙彦は頷き、そのまま自転車のペダルを踏んだ。湯上りの身体に冷たい風が気持ちよく背を押してきた。

到着までさほど時間はかからなかった。約十分弱か。青大附属の校舎近辺に到着し、まずは校門を潜り抜けた後、「高校校舎はこちら」と用意された矢印に従い自転車をこぎつづけていった。おそらく附属中学の生徒だろう。自転車で反対方向に向かう生徒もいた。コートやジャンパーを羽織っているのもそのあたりの区別はつかない。

——しかし、ずいぶんと身体がかぼかぼするな。

制服がぶかぶか過ぎるといのが正直なところだった。学校の指示通り、冬服を四着用意というのは間に合わなくて、まずは冬と夏、各一着ずつ揃えるだけにしておいた。その代わり、長く使えるようにということでもかなり大きめに仕立ててもらったはずだった。学生服がわりと身体にじっくり馴染んでいただけに、この感覚は気持ち悪い。のりの利きすぎたワイシャツも、縛りなれないネクタイも、みな硬い。

やがて高校校舎へと到着した。合格発表以来だろう。青大附属の場合、中学校舎、および大学校舎が完璧に分かれているせいか、学年ごとの交流が殆ど行われていないと聞く。立村が言うには、「合同で使う機会があるのは、たぶん生徒食堂だけだよ」とのことだが。

——と、いうことは、中学の生徒と会う機会もないのか。

自然と肩から力が抜けた。何度か中学の校舎に足を運ぶ機会があったが、今立っているこの高校校舎から、中学の匂いは感じない。

「青潟大学附属高校・外部入学者オリエンテーション会場はこちら」

また矢印だ。とりあえずは自転車置き場らしきところにつけた後、乙彦はそのまま校舎に入っていた。よかった、上靴を忘れてはいなかった。

すでに先客が三名ほどいる様子だった。現在の高校一年、二年たちがそそくさと自分用の靴箱にスニーカーを投げ入れてのんびり歩いていくのも見かけた。乙彦がしばらくロビーできょろき

よろしていると、黒ぶちの眼鏡をかけた、小太りの男子生徒に声を掛けられた。

「その君、オリエンテーションかな」

ずいぶん砕けた言い方である。

「はい。本日からお世話になります」

「午前中から、ということは、外部で来たのかな」

またずいぶん、なれなれしい言い方でもある。

「はい、その通りです」

「まあまあ、そう硬くならずに。さて、普通科かな、それとも英語科かな」

「英語科です」

ふむふむと黒ぶち眼鏡の男子生徒は頷き、やがてにこやかに笑顔を向けた。

「せっかくだし僕が案内するとしよう」

——別に案内されなくてもいいんだが。

乙彦の頭の中には、すでにきっちりと教室の位置関係が組み込まれていた。子どもの頃からそれは得意なのだ。案内されるまでもない。いつもだったら断るだろう。しかし。

——ここで不要なトラブルを起こさないほうがいい。

自分なりに判断し、乙彦はおとなしく頭を下げた。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「これが僕の、高校最後のご奉公だからねえ」

——ご奉公？

やはり、青大附属、この学校は変だ。よりによって初めて口を利いた青大附高の生徒がこんな奴であるとは。もしもこういう奴が水鳥中学にいたらどうなっていただろう？ 考えてみたが想像がつかなかった。いるわけがないのだから、しょうがない。

「麻生先生のクラスだな。あの先生は悪い人じゃないから安心したまえ。それと、クラスの連中もかなり面白い奴が揃っている。少なくとも陰湿な嫌がらせをしたり、靴に画鋏を入れるような生徒はいないはずだ。まあ、これも僕の印象だけだね」

「あの、なんでそんなこと」

知ってるんですか？ そう尋ねたかった。さっきからちらちらと胸の名札を覗き込もうとし、ようやく黒ぶち眼鏡の生徒の名が読めた。「結城」と金に黒く彫られていた。学年バッチは「2-A」。つまり来年は三年に上がるはずだから、ふたつ上の先輩と見た。

「ああ、それは僕の趣味。後輩はみんな可愛いからねえ。もちろん君も」

「ありがとうございます」

鳥肌が立ちそうだ。何も「可愛い」なんて言葉使わなくたっていいだろう。

「ただ、たぶん戸惑うだろうね」

階段を三階まで昇り、少し暗めの廊下をてくてく歩きつつ、

「この学校は先輩後輩の仲が非常に良くてね。いや、良すぎて困るといった方がいいかな。だから何かがあるとすぐ、後輩を守るために先輩たちが飛び出してくる。いわゆる先輩のいじめとい

うのは殆どない。ないならそれはめでたいことなんだが、いかんせん闘争心にも欠けるところがある」

「闘争心、ですか」

「興味ある？」

にやりと笑うのはやめてほしかった。また鳥肌が立つ。

「うちの学校、運動系の部活動がどうしようもないくらい壊滅しているだろう？ 知ってる？ 知らないならそういうもんだと思っていてほしいんだけどね。たぶん、がむしゃらに何かをしようとする、意志が薄いんだろうなあ。人はそれを、お坊ちゃまお嬢ちゃまの楽園だからというけれどもね」

「はあ」

なんとなくそれはわかるような気がする。

「だが、その一方で仇花というのかな。活発に活動しているのは委員会活動であり、まあ生徒会もかな、ってところなんだ。君、そういう活動、好きかな」

「はい」

即、返事をした。気が楽になった。

「生徒会で副会長二期勤めました」

満足げに頷く結城先輩。もう、先輩と呼んでいいだろう。

「そうかそうか。それは結構だ」

結城先輩は片腕をいきなりぐいと挙げた。

「まあ最初のうちは、外部の生徒の定めってことで、いろいろガリ勉させられるだろうし、苦勞も多いと思うが、まずは最初の一学期を死に物狂いでがんばればなんとかなる。青大附高に合格するくらいだからそうとう賢いと思ゆるが、いかに？」

この人、何か言葉遣い、時代劇がかった。乙彦はこちこちになりつつも答えるしかない。

「一応、学年トップでした」

間抜けだが、事実ではある。

「人間は挫折も大切だよ。この言葉、よおく、覚えておいたほうがいい。外部の生徒が最初ショックを受けるのはそのあたりだからなあ。でも。それはな、しょうがない」

わけがわからず問い返したくとも、どのあたりに意味があるのかわからない。

「そのためにみな、先輩がこうやってうろちょろしているわけなんだ。そういう時はどんどん、遠慮なく声をかけてくれたまえ。失礼、忘れていた。君の名前は？」

「関崎乙彦です。結城先輩、よろしく願います」

フルネームで答えた。口をつぼめてほうほうと頷く結城先輩。

「僕の苗字をすでに覚えてくれていたとは、光栄だ」

「胸のバッジを見ました」

別に驚くべきことでもなさそうだが。過剰に満足している様子にどう対応すればいいのか乙彦にはわからなかった。

「それならせっかくだ。僕のフルネームも覚えていただこうか」

胸から結城先輩は手帳を取り出した。手帳の表でも見せてくれるのかと思ったら、なんとこの人、手帳を開いてなにやら紙を取り出したではないか。

「僕の写真は写りが良すぎて別人と呼ばれるので、あまり見せたくないんだ。それに君のことだから、すでにクラスもチェックしていることだろうしね。僕のプライベート情報を一通りご覧いただけると、さらに何かの折り、声をかけてもらいやすいんでないか」

名刺を受け取った。そういえば名刺、青大附中に交流会で訪問した際、誰かから渡された記憶がある。立村とあと、本条さんとかいう人だったが、そんなのとっくに処分していた。乙彦は片手で受け取ろうとした。とたんぴしと、指先で叩かれた。

「こういう時は、両手で押し頂くのがマナーって奴よ。もっかいプリーズ」

「押し、頂く？」

いわれた通りにもらい直すと、結城先輩はまた満足げに頷いた。

「そうそう、こういうところからいろいろ突っ込まれるのが、青大附属に入学する外部生の定めってところ。落ち込みなさんな。いくらでもうちの学校の連中は、教える準備できてるから。困った時には遊びにおいで。その前にはまず、この名刺をじっくり読み込んでもらえると助かるが、では、また会おう！」

結城先輩はしばらくその時代劇がかった言葉を操りつつ、最後は手を振りつつ背を向けてもと来た道に戻っていった。気がつけば、目の前の扉には「生徒相談室」と札がかかっている、紙に太く、

「外部入学生オリエンテーション会場入り口」

張り紙がなされていた。縦に長くぶら下がっているその文字は、刑事ドラマに出てくる事件の捜査会場にも似た趣があった。

——悪い人ではなさそうだが。

今まで水鳥中学にいたタイプの先輩ではなさそうだった。乙彦にとって先輩とは、いわば陸上部時代にいろいろ足枷をされた苦痛の思い出を与えられた人間でしかない。本当だったら二束のわらじを完璧にはいて暴れまわりたいのに、できなかったゆえの記憶。苦さしか残っていない。だから、後輩の内山が入ってきた時には、決して同じ思いをさせたくないに心に誓ったのだ。もっともあいつは生徒会長に選出されてから、脳天気なアホのキャラクターを目覚めさせてしまい、時代劇マニアの道をひた走っているのだが。いい奴だけに、乙彦としては心配だ。もしかしたら今の結城先輩と話が合うかもしれないが。

改めて受け取った名刺を読み直し、乙彦は絶句した。

——あの人……………？

以下、結城穂積の自己紹介名刺である。

- ・ 結城 穂積 ゆうき ほずみ
- ・ 学年 二年A組
- ・ 8月10日生まれ しし座

- ・現在 評議委員長・「日本少女宮応援クラブ」会長
- ・プレゼントはぜひ、「日本少女宮」に関するグッズを所望。
- ・その他、女性アイドルに関する情報も随時募集中。
- ・五教科プラス三教科、質問いつでもOK
- ・好きな飲み物 いちごミルク
- ・その他困った時はいつでも電話OK
- ・先着五名様に、「青潟大学附属高校ファッションブック」最新版プレゼント中（期間限定）

——この人、何者なんだ？

「評議委員長」という肩書がついたことすら、乙彦の記憶には残らなかった。

思わず、完全なるアホの御代官様ごっこに興じていた後輩の内山を思い出し、乙彦は額を押さえた。やはりここは、乙彦の知らない世界だった。

水鳥中学には「生徒指導室」などといった教室は存在しなかった。

——しごきでもやるんだろか。

乙彦は腕時計を覗きこんだ。まだ八時十分にも到達していない針。早く着きすぎたのかもしれないが、遅刻するよりはいいだろう。まだ手元に残っていた謎の先輩・結城穂積から渡された名刺をポケットに押し込むと、乙彦はドアのノブをひねった。くるりと開いた。

「おお、驚いた。ノックくらいしろ」

いきなり驚かされたのは乙彦の方だった。あわててドアを閉めた後、もう一度ノックをしなおし入り直した。面接の時と同じ要領だ。改めて教室を見渡すと、どでかいソファと低いガラステーブル、そして湯呑と急須のセットが並んでいた。奥の席、いわゆるお誕生席には、顔のてかてか光った眼鏡の男性が、その脇には青大附高の制服を着た男子生徒がそれぞれ座っていた。足が長すぎて、おさまりが悪そう。膝に両手を置いてがっとな足を開いていた。

顔に見覚えはある。乙彦はまず、頭を下げた。

「一年A組、関崎乙彦といます」

じっと見つめられる視線に、まず乙彦は自己紹介を試みた。

面接の時も同じだった。

「あの、ここでいいでしょうか」

使い慣れない丁寧語を使う。

「ああ、君を待っていたんだ。こちらの席まで来い」

ずいぶんこの先生……おそらく年齢からいって教師であることには間違いないだろう……もくだけた人だ。大人だから見下すような物言いはしかたないにしても、なんだか調子が狂いそうだった。乙彦は言われた通り、その先生の向かって左脇まで進み、そのまま座った。真正面にはもうひとりの男子が固い顔をして乙彦を観察している。あまり口を利いたことはないが、何度か交流会で挨拶したことのある男だった。そう、確か、生徒会長だったはずである。

——名前なんて言うんだったかな。

交流会の時は結局、立村と話をすることが多くて、他の青大附属連中と口を利くことはなかった。向こうもなんだか乙彦の顔を覚えていない様子なのが意外だった。それならそれで、初対面のふりをすればよい。

「予定より早いですが、では始めるとするか。藤沖」

「はい、よろしくお願いします」

藤沖と呼ばれた生徒は、腰をかがめるように先生へお辞儀をし、次に乙彦を見た。視線を逸らさずに乙彦も受けた。

「僕は、青大附高英語科一年A組、藤沖勲です。これから三年間、よろしく」

少々しゃちほこばった言い方だが、ぐっと重心が地球の底まで落ちたようなぶれのない声だった。同じくあわせて乙彦も答えた。

「こちらこそよろしく申し上げます」

脂ぎった中年男性教師が、藤沖と乙彦を交互に見やりつつ、大きく頷いた。

「初対面だし、緊張もするだろうが、まずはくつろげ。関崎、まずは茶でも飲め」

「茶？」

そういえばふたりの前にはざらついた感じの黒い湯のみが並んでいる。

「午前中はまず、関崎のために用意したようなものだからな、まずはわからないことをここで片付けられるだけ、片付けておけばいい」

「片付ける？」

鵜飼返ししてみる。言われている意味がつかめない。藤沖は先生の前でそれ以上口を利かず、ただ乙彦の様子を伺うだけだ。なにか言ってくればまた行動の選びようもあるのだが。仕方なく乙彦は疑問を飲み込み、その教師の様子を伺うのみだった。

濃い番茶が熱いまま、目の前に出された。受け取ろうとしてあやうく落としそうになり、口をつけずにおいた。青大附中の校舎でもやたらと淹れ立てのお茶が出されて閉口したことがある。ジュースとかコーラとかそんなものだったら気にしないで飲めるのに、よくわからない学校である。乙彦は目の前の藤沖と同じくらい膝を開き、両手を置いた。

「まずはだ。自己紹介がまだだったな」

もう一度奥の席についた後、先生は身を乗り出すようにして乙彦に話し掛けた。

「私は、これから青大附高英語科の担任を勤める麻生和夫、まずはよろしくな」

次に、麻生先生は胸ポケットからいきなり名刺らしきものを取り出した。

乙彦に手渡した。

「ここに私の住所と電話番号、その他学校内の連絡先が記載されている。何かわからないことがあればここに連絡しなさい」

「あ、ありがとうございます」

そのまま片手で受け取ろうとしたが、また同じく脂ぎった黒ぶち眼鏡の男の言葉を思い出し、慌てて両手を添えた。押し頂き、頭を下げた。

「そんなにしゃちほこばらなくてもいい。それと、今君の目の前にいる藤沖だが」

言葉を切り、促す気配。藤沖も若干馬面ながらも凜とした顔つきでもって受け継いだ。

「関崎くん、僕が今回、君のフォロー係となる。何かあれば、すぐに聞いてくれ」

「フォロー？」

「英語科に入る外部生は関崎くんだけだから、わからないことも多いと思う。僕も、麻生先生も、その気持ちがわからないでもない。だが英語科の生徒たちはみな、君が来てくれたことを歓迎しているんだ」

「歓迎って」

なんだか自分の頭が小学校を通り越して幼稚園児に戻されたかのようだ。朗々と語る藤沖の言葉には謎ばかりが詰まっている。

「英語科で今回、外部入学者として来てくれたのは、関崎くんだけなんだ」

「え？」

思わずふたりの顔を交互に見やってしまった。違う、そんなわけがない。

「俺が見た限り、合格発表では」

使い慣れない「僕」ではなく「俺」に一人称が代わってしまった。

「もうひとりいたはずです」

青大附高合格発表がその日の夕刊に掲載された段階で確認したはずだ。

ふたりいたはずだ。

すぐに返事をしてくれたのは麻生先生だった。頷きつつ。

「ああ、実はもうひとり入学する予定だった生徒のお父さんがな、海外に赴任することとなったんだ。せっかく仲間が出来るはずだったのに、残念なんだが」

——海外に赴任？

海外赴任する仕事なんて想像したこともない。

「ということで、今回外部からきてくれたのは君だけということになる。今日あえて朝っぱらから来てもらったのはまずだな」

藤沖にまた話を振った。慣れている様子で藤沖もつないだ。

「クラス全員のオリエンテーションは昼飯が終わってからだ。それまでにまずは、学校内を案内したいと思う。少し入り組んでいる学校だから、わかりづらいところもあると思うから、そういうことで」

「ありがとうございます」

頭の中で、自分の置かれたポジションをつかみかねていた。

もちろん藤沖も、麻生先生も、英語科入学を果たした乙彦を歓迎したくてこのような席を設けてくれたのはわからなくもない。もし自分が逆の立場だったら当然だとも思う。

しかし、自分が「迎え入れられる立場」ともなると、感覚は全く異なる。

初めてきた場所というのは重々承知している。

自分ひとりで、うろうろしつつ、嗅覚でもって掘り進んでいく、それが普通ではないのか。

何も幼稚園児のように、保護者まで用意して、「わからないことがあったら聞いてくれ」というのは何か、男子に対して失礼じゃないのか。そんな気もかすかにする。

もちろんそんなことは顔に出せないが。

しばらく乙彦は麻生先生と藤沖が交互に話す内容を、注意深く聞いていた。

お茶が少し冷めてみたようだった。まずはごくりと飲み乾した。

「まずはオリエンテーション用の資料なんだが。関崎、宿題は一通り終わらせたか」

「はい」

合格発表後すぐに送られてきた問題集、五教科の宿題として渡されたワークノートを取りだした。麻生先生は受け取り、テーブルの上に置いたまま、

「今日の帰りに、君にだけあと一週間分の宿題を渡すが、これは決して君をいじめているわけではないので、それはよく理解してほしいんだ」

——なんだよそれ、なんでまた。

いくら水鳥中学三年連続首席の乙彦も、宿題を愛しているわけではない。

「まだピンとこないのも当然だろうな。青大附高の授業は、基本として青大附中からエスカレーター式で入ってきた生徒に合わせざるを得ない」

「はい」

「また、青大附中の授業内容は、公立中学の授業内容と大幅に進度が異なる。英語で言えば、一通り文法知識の授業は終わり、高校に入ってからには主に長文読解と作文、あとはヒアリングの訓練一色になるわけだ。しかし公立高校においてはまだ、文法の授業はまだ残っているはずで、君もまだ、習っていない単元がかなりあるはずだ。水鳥中学の学習授業要項をまず見る限りではな」

その可能性はあるだろう。しかし、そこまで差をつけられていると、露骨に言うのには何か意味があるのだろうか。わけがわからない。

「もちろん、それについては私を始め他の先生たちが君のために全力尽くしてフォローを行っていく。あとで説明するが、六時限の授業後、君には一年間、二時間分の補習を毎日行う予定となっている。まずは一年、他の内部入学者たちの授業に追いついてもらえるよう、先生たちが全力で叩き込む」

——本気なのかよ。

また目眩がしてきた。本当は放課後、可能ならば夕刊の新聞配達アルバイトをしようかと考えていたのだが、それも不可能だ。

「最初のうちは授業が何言っているかわけがわからないだろうし、成績の順位も、こういって何だが、かつての自分とはかけ離れていると感じることもあるだろう。だが、そのことは一切心配しないでいい。この一年はまず、青大附属の空気と授業に慣れることに専念してほしい。そのための準備は、私の方で完璧に整えておく」

「俺のため、だけにですか」

「またも麻生先生は顔いた。」

「補習自体はこれから先いろいろな生徒が出たり入ったりするだろう。が、まずはやってみることだな。それからまたゆっくり考えればいい」

——補習なんて、生まれてから一度もやったことないってのにな。

決して、名誉あるものではない。自慢じゃないが乙彦は宿題も忘れたことがないし、もちろん追試も受けたことなどない。補習なんてとんでもない。

なのに、青大附属に入学した途端、補習坊主の扱いをされてしまうとは。

膝をなんとか搔いた。

「次に教科書に関してだが」

もう一枚、手書きのメモを手渡してくれた。そこには十冊ほど問題集の題名が記載されていた

「これは、主に青大附属の生徒たちが日常的に使用している問題集だ。オリエンテーション用のプリントには記載されていなかったが、これはある意味副読本のようなものなので、必ず用意するようにしてほしい。また、英英辞典、ことわざ辞典、その他も」

——また金がかかるのかよ。

家に帰ってまた、母にねだることになるのだろうか。

頭を抱えたい。乙彦は溜息を押し殺した。困ったことになる。これから制服をさらに三着用意しなくてはならないし、おそらく夏服の問題も出てくるだろう。入学前でこれだけかかり、しかも補習のからみで放課後以降のアルバイトもできないとなると、関崎家は火の車だ。さらにこれから弟の進学も考えると、どうにかして捻出するところを考えなくてはならない。乙彦はしばらくその紙を見つめていたが、やがて決心した。

——貧乏くさいといわれたって、うちは貧乏なんじゃない！

「質問していいですか」

乙彦は顔をあげた。

「なんでもこい」

「うち、今すぐ全部用意する金がないんですが、何を優先順位で用意すればいいでしょうか」

あっけにとられたふたりの顔を読み取って、乙彦はあらためて、自分が異邦人であることを自覚した。もう少しオブラートに包んだ言い方をしろと、母は言うかもしれないが事実は事実だ。仕方ないのだ。こんな大金、悪さでもしなければ手に入るわけがない。乙彦は勢いづいて続けた。

「プリントには冬服を四着とありますが、うちにはまだそれを準備する余裕がありません。後日用意するつもりではいますが、今すぐと言われると、困ります。勉強はたくさんしたいし、補習も皆勤するつもりですが、これ以上本を買う量が増えると、制服を買い足すことができません。それと、ジャージもです」

「制服なら、先輩たちが譲ってくれると思うぞ」

気まずい沈黙を破ったのは藤沖だった。最初のしゃちほこばった口調とは違い、真面目ながらも柔らかな空気が漂ってきた。やはり乙彦に向かい、前かがみで。

「生徒会関係で先輩たちに当たってみようか。俺もそれなりに心当たりがある」

「そうかそうか、藤沖、そうしてくれるか」

いきなり頷きあう二人を、乙彦はあっけにとられて見つめていた。さらに藤沖は首をのけぞらせて考えていたが、

「それと、問題集と辞書も先輩たちにあたって聞いてみようか。たぶん、英英辞典とことわざ辞典はわけてもらえるだろう。さすがに問題集は難しいかもしれないが、俺の分をコピーするという手もある。先生、それでいいですか」

「コピーか。できれば直接本を持ってほしいしなあ。わかった、それは私の方でも古本がないか探してみよう」

「先生、僕が古本屋にこれから連れて行きます」

なんと、乙彦をさておいた状態で、話がどんどん進んでいく。

あっけにとられた乙彦に、ふたりはまた前かがみの状態で、メモを取ろうとしつつ尋ねた。

「他に、困っているものはないか？ 関崎？」

「関崎くん、何でも言ってくれ」

——何でもったって、俺が何か言ってどうなるっていうんだ？

しばらく乙彦は麻生先生の説明を聞きながら、頭の中のそろばんを必死にはじいていた。どうやらこの学校でははんぱじゃなく副教材費が掛かりそうというのがひとつ、同時にその教材のほとんどは先輩たちから融通してもらえる可能性があるというのもひとつ。さらに教科書関連はうまくすれば古本屋で手に入れられるというのもひとつ。

なによりも仰天ものは、

——俺の家が貧乏だったのを、全くばかにしないで受け止めてるこいつら。

である。制服四着も購入できないとか、これ以上教科書を買えないとか、そういうタイプの生徒が今まで青大附属に入ってきたことがあるのかもしれない。だがしかし。目の前にいる藤沖にいたっては、留年でもしていない限り乙彦と同じ年のはずだ。フォロー役に選ばれるということからしてそうだろう。

——俺の顔を覚えていないにしてもだ。生徒会長だしな。

なんで藤沖は乙彦のことを知らない風に振る舞い、そのくせフレンドリーに接しようとするのだろう。このあたりも理解できない部分だった。先生がいなければそのあたり、確認を試みたいところではあるのだが。

「ではまず、藤沖に従って、学校内をじっくり回っておいで。それが終わってから一度この教室に戻り、それからあらためて、君の授業スケジュールについて説明したい」

麻生先生に促された後、乙彦はふたたび生徒指導室を出た。藤沖が自ら立ち上がり、ドアを開けて待っていた。

それにしても妙なものだ。

すでに顔見知りで、おそらく何度か話もしたことがあるはずなのに、初対面のふりをしてしまったというのは。普段の乙彦なら先手を打ってさっさと挨拶をしていたはずなのに、なぜかふたりに気圧されてしまい、そのペースに乗せられてしまったといえいいのか。

肩を並べ、ふたりはゆっくり階段を降りていった。かすかに外から運動部の練習している様子が掛け声とともに伝わってくる。それぞれの教室には人気もない。ただすれ違う先生たちに藤沖が、必ず一度立ち止まり、四十五度の礼をしている姿が目立つのみだった。乙彦もあえてそれ

に習った。なにせこの学校の校訓は「紳士であれ、淑女であれ」なのだ。

しばらく黙ったまま一階まで降りると、藤沖は肩を怒らせて深呼吸し、乙彦に向き直った。

「初対面のふりして悪かった」

「やはり覚えていたのか」

「当たり前だろう。生徒会長としてそのくらいは常識だ」

「いや、覚えていたんだったらそれはそれでいいんだが」

どうしてそんなことした？ そう聞きたい。藤沖も少し表情を和らげた。

「麻生先生は青大附中の状況をあまりご存知ないらしい。また、俺も生徒会時代のごたごたを高校まで持っていきたくない。クラスの連中とは所詮そんな小細工する必要もないのだが、先生たちとの付き合いにおいては不必要なことをばらす必要も、今のところはない」

「ごたごたって、なんだそれ」

すでに知り合いである以上、丁寧語を遣う必要もない。

「あとで関崎にも話すことになるだろうが、まずは青大附属の校風に慣れてからでいい。今の麻生先生の話を通して考えると、これから俺が、否応なしに関崎と真正面から話をすることになるわけだ。いろいろ、その時おりに知ることもあるだろう」

つまり、今話す気はないということか。どうも歯にももの挟まったような言い方だ。

乙彦には苦手な思考回路である。

「だが、俺は」

言葉を切り、改めて藤沖は乙彦と歩調を合わせた。

「お前のようにはっきりとものを言う男とは、ぜひ三年間じっくり話をしたい。まずはさっさと慣れてくれ。まずはここが一年A組の教室だ」

しゃちほこばったような口調と共に、にじみ出る熱の温み。春の陽射しにも似ていた。

誰もいない教室のドアをさっと開いた。勢いよく開き、ゆっくり閉じようとするのを乙彦は押さえた。中から溢れてきたのは、真っ白い光の洪水だった。

——まぶしすぎる。

目を細め、ふたたび乙彦は手をかざした。

「あとから麻生先生がプリントを用意するだろうが、五十音順に男女並ぶ形となるはずだ、たぶんこのあたりが席だろう。どうせ二十一人しかいない教室だ。顔もすぐ覚える」

「本当に二十一人しかいないのか？」

その、外国に家族で赴任した生徒がこないということは、そうなるはずだ。藤沖は両腕を組み頷いた。

「うちの学校の英語科は、中途半端なところがある。しかたないだろう」

「中途半端とはどういうことだ？」

藤沖は視線を宙に舞わせたまま、継ぎ足した。

「麻生先生は親の仕事の都合と言っていたが、本当のところは違う」

「特別な理由でもあるのか」

「どうやら、本人の能力に合わせて、父親が海外赴任を選んだらしい」

言っている意味がわからない。まぶしすぎた。藤沖もわかりづらいと判断したのか、すぐに説明を付け加えた。

「英語にとどまらずかなりの能力を持った奴だったらしい。青潟で生活しているのならばもちろん、青大附属がベストな選択肢なのだろうが、世界的な視野から見ると学校のレベルが低いと親が判断したらしい」

「世界的な視野？」

ますます宇宙語状態だった。世界的な視野からというが、青大附属のレベルが低いとはどういうことだろうか。それ以上の学校選択肢というのはあるのだろうか。藤沖はさらに続けた。

「その生徒にふさわしい学校を、青潟だけではなく全世界の中から選んだ結果、外国の学校に進学させた方がよいと、両親が判断し、それを最優先に考えた結果、父親の海外赴任が決まったという、それだけのことだ」

——まぶしすぎる。

視界がまだ白いままだった。乙彦はまだ真新しい自分の制服を見やった。

茶色に薄い黒のチェックが入っているその制服をまとうのに、重ねた日々。

織り込まれた誇り。

それ以上のものを、簡単に選ぶことの出来る同い年の生徒がいる。

「人は人だ。合格発表から俺は、関崎が青大附属に来てくれるのが楽しみだったがな」

その声も、乙彦には白い光にとけて、かすれていった。

教室、体育館、図書室に職員室と、ほぼ知っておいたほうがよさそうな場所を、乙彦は一通りチェックした。所々藤冲到連れていってもらいたい場所を指定したりもして、だいたい場所の把握はすませた。迷うことはなさそうだ。

「だいたい問題ないか」

「ああ、ありがとう」

「わからなかったら聞いてくれ」

親切に藤沖は言ってくれたけれども、乙彦にその必要はなさそうだった。

もともと記憶力には自信がある。一度見たり聞いたりしたものはすぐ覚えられる。試験前日下見でだいたい把握している。

その旨を伝えると藤沖はふむふむうなずき、

「さすがだな」

一言、誉めた。

「だが、こうやって下見させてもらえるのは非常に助かる」

ちらと様子を窺うと、たいして気を悪くしたわけでもなさそうだ。それはそうだろう。男同士だ。言いたいことを言っておかねば損である。藤沖はひとりごちた。

「そのくらいできねば、青大附属に合格というのはそうそうできないだろうしな」

乙彦を先導しつつ、藤沖は笑顔を見せた。

「麻生先生はあんなこけ脅しを言っていたが、所詮最初だけだ。あとはうまくやっていけばいい。やりたいことがあればそれは問題なく達成はずだ。この学校はそういうところだ」

「達成できる？ よく言っている意味がわからないが」

「大人をうまく利用するということだな。一言でいうとな」

「ますますわからないぞ」

なんとなくだが、青大附属の生徒はなんとなく教師を馬鹿にしていた印象があった。それはわからなくもない。交流会の時も顧問の先生が一度顔を出したただけだ。盗聴されているとは聞いていたが、そこまで放置されてるとは信頼されているのかそれとも、無視されているのかわからなくて戸惑った記憶がある。そのことも伝えてみると、藤沖はまたふむふむうなづいた。

「不良を美学とするようなガキくさいことさえしなければ、問題なく目的にたどり着ける。もちろん、それなりの努力は必要だがな」

「問題なく、か」

乙彦は聞こえぬようにつぶやいた。

やりたいことはある。

あっても、壁に阻まれるだけ。

諦めるしかないと溜め息をもらすだけ。それでも、ひとつだけでも見付けたい。尋ねた。

「ひとつ聞きたいんだが、青大附属の陸上部は、どうなんだろう。かなり練習時間取られるのか」

「運動部だし当然だろう。関崎、入りたいのか」

「いや、考えていない」

「なぜだ？」

少し詰問調になる藤冲到、乙彦は慌てた。本当の言い訳をするしかなかった。

「練習の時間がとれそうにないからだ」

「補習のことか。麻生先生がなにか言っていたな」

「それもあるが」

それとアルバイトも。乙彦はあえて言わなかった。もしかしたらアルバイト禁止かもしれない。第一、青大附属にアルバイトで学費を稼ぐ必要のある生徒がどれだけいるだろう？ もちろん藤冲が経済的に苦しい家庭の子息とは思えない。貧乏人をばかにする奴ではないと踏んでいる。しかし、公立中学から進学する自分の立場を理解できるとは思えない。

口籠もり、本当の言葉を捜す乙彦に藤冲はさらに畳み掛けてきた。

「関崎は最初からあきらめるのか？ マイナス要因ばかりに眼を向けてだ」

憤りをひめた声で追求される。乙彦もまっすぐ答えるしかない。単純明快に答えるしかない。

「諦めるしかない」

「始める前からか。一度体験入部するとか考えないのか。その上でもう一度考え直すとか」

叱られるのは正直慣れてない。言い返す。

「最初は事情を話すとか、朝練習だけにするとかできるだろう」

「合宿や大会でいくらか金がかかるか想像つかない」

吐き出すように言うしかなかった。

もちろん藤冲が言うのは正論であり、異存はない。自分が反対の立場だったらそう相手を説得するに違いない。

説明したくなかった。藤冲の善意がわかるだけに、なにごともないかのように振る舞いたかった。

「関崎、お前は誤解しているようだが、青大附属には金持ちの子息だけが集まっているわけではない」

いきなり藤冲は言い放った。乙彦の顔を真っ正面から見つめ返した。受ける乙彦も、頬を引き締め直した。

「関崎、お前が青大附属に対してどういったイメージを持っているかは知らん。一部には裕福な家庭の奴もいないわけではない。だが、それを鼻にかけたり嫌がらせをするような奴はいないはずだ。俺が知る限り、そういった次元の低いことで見下す必要はない。それは人間として当たり前のことだろう。そうじゃないか」

「もちろんそれは承知している」

「承知してないだろう」

藤冲は切り捨てた。

「まあいい。だが俺は青大附属の内部生代表として、お前の誤った思い込みを正していく」

かっとなら顔が火照るのを乙彦は押さえようとした。息ごと飲み込んだ。もっとがっちり言い返したいのに、急所を蹴られたように身動きできない。藤沖の言葉は続いた。

「青大附属の、特に英語科の連中は、関崎、お前が来ることを待ち望んでいるし、みなお前のサポートをしたいと願っている。その準備もすでに整えている。午後に顔合わせしてみればわかる」

押し付けがましくも、なぜか納得させられてしまう。

——こいつが青大附属の生徒会長だったわけだ。

同い年の男子に、自分が勝手な思い込みをしていると決めつけられなければならないのか。また耳まで熱くなってくる。

その一方で藤沖の言う通り、乙彦は証明すべきなにかをもっていない。

「これから生徒指導室に戻ろう。麻生先生がそろそろ、お前の宿題をチェックし終えたところだろう」

落ち着いた声で、藤沖は告げた。乙彦もつき従うしかなかった。

——これが水鳥中学の副会長か。

同じ生徒会経験者のはずなのに、今の乙彦の立ち位置にははるかな差があった。

——俺はこの学校で、どういう風に話をしていけばいいんだろう。

麻生先生は藤沖の予想通り乙彦の持っていったノートとプリントに目を通し終えていた。早い。

「よくがんばってきたな。さすがだ。水鳥中学の先生たちも太鼓判押ししてただけあるぞ」
いきなり誉められた。

いやではない。首筋を掻きながらノートを受け取ろうとすると、いきなり麻生先生は分厚いプリントの束を乙彦の手に重ねた。満足げに、

「少し早いとは思いますが、出来るだけ早く準備を進めた方がよさそうだ。関崎、この春休みは特に予定などないのかな」

脂ぎった顔を向けて尋ねてきた。乙彦は首を振った。

「いえ、ありません。家族旅行は二年に一回の割合です。夏休みの予定です」

「なら話は早い。他の科目の先生たちとも相談してみるが、早急に関崎の補習を準備できるかを確認してみることにしよう」

「それはどういうことですか」

自分で尋ねるよりも先に藤沖が口を出した。かちんとくるがしかたあるまい。

「すなわち、少しでも早く関崎が内部進学者と足並み揃えて授業に参加できるようにするためだ」

「補習は費用がかかるのですか」

藤沖が畳み掛けた。

乙彦は全身が弾け飛んだような衝撃を受けていた。決して口に出せない質問だと自覚していたというのに。

——藤沖の奴、なんでそんなこと聞くんだ？

別に驚いた風でもなく、麻生先生は藤沖相手に尋ね返した。乙彦をちらと横目に観ながら、言い聞かせるように、

「藤沖、うちの学校の補習授業で金を要求したことが今まであったかい」

まず確認を取った。藤沖は首を動かさずに答えた。

「いいえ」

「そういうことだよ、関崎も覚えておくといい」

今度は乙彦に視線を向け、あごで頷きながら麻生先生は説明してくれた。

「青大附属の中では、学びたい生徒にできるかぎり手を差しのべていくつもりだ。塾に通う必要がないように、全力でサポートしていく。だから関崎、君はとにかく何事にも全力で取り組みればいい。そうすればおのずと道は拓ける。それを信じなさい」

麻生先生の言葉を信じてみようか。信じたい。信じなくては入学以前の問題、話にならぬ。

乙彦はひとつ、覚悟を決めた。藤沖に先回りして質問されたくないことをぶつけることにした。

「あの、青大附属に奨学金はありますか」

空気がさっと冷えてしまったかもしれない。

隣の藤沖があっけにとられたまま、乙彦をにらみすえた。

——なんでそんなにらむんだ。俺が何かまずいこと、言ったのか？

ここではそんなことをつっこむ必要なんてない。確認しなくてはならないことをさっき藤沖が聞いてくれたのだから、おそらく乙彦が尋ねても問題ないということだろう。少なくとも、入学取り消しにはならないということだ。

「奨学金はないわけではないが、来年以降に考えたほうがいいな」

麻生先生は少し戸惑った風に頭をかいた。少し油っぽいふけが髪の毛に浮かんだように見えた。

乙彦は畳み掛けた。ここは正念場。まずはストレートにぶつかるしかない。押し通すしかない。

「それなら、奨学金試験を受けるまで僕もアルバイトをして学費を稼がねばなりません。まだ校則を確認してないのでしてもいいことなのかどうかわかりませんが、しないと月三万近い月謝を払いきることは難しいです。アルバイトはどうですか？」

隣で

「どうですか、はねえだろう」

ため息声であきれている様子の藤沖。

どちらにしてもこの学校に通う以上、乙彦がアルバイトを始めるのは決定事項だった。

もしそれが校則違反だった場合でも、やらない限り、この学校には通えない。

雅弘ならおそらく

「おとひっちゃん、隠してこっそりやればいいのに」

とか言うかもしれない。

でも、陰でこそこそやるよりもこの場できちんと話をつけた方がすっきりするものだ。大人もいかげんな野郎でなければ、事情をかならず理解してくれるはずだ。乙彦がアルバイトしたい理由というのはひとえに、「学費」それだけのためなのだ。大学生たちのように遊ぶ金ほしさではない。いざとなったらすべて、学費とアルバイト代との関連を図解して説明する準備もある。

基本として乙彦は校則厳守をモットーとしている。別に真面目ぶりたいわけではない。いつか嘘をついたらばれるのが世の中の定め、そんなことするよりも最初から真っ正直にぶつかるのが一番、逆らう必要のないものには逆らわず、納得いかないものは理論立てて説明すれば大人は百パーセントわかってくれるもの。

が、いたしかたない理由があるのならそれなりの手続きをとるしかない。

奨学金をもらえるならまだしも、現段階においては学費を稼ぐための手段を説得するしかない。

理由があれば納得してもらえるはずだ。確信していた。

「アルバイトは特別な理由がないかぎり原則として禁止だが」

麻生先生は言葉を切った。乙彦の顔を、まぶたぱちぱちさせながら見やり、

「だが、保護者の許可書と、勤務先の責任者とのサインがもらえるなら、その限りではない」

そう付け加えた。気難しそうな表情を浮かべた。

「大丈夫ですか！ それだけでOKですか！ ありがとうございます！」

大声で叫んだ。思わずつかんだままのノートとプリントが手から滑り落ちそうになった。

——なんだ、そんなことか。両親の許可も、もちろん古本屋の許可も、もらうなんてあたりまえのことだ！

乙彦は麻生先生の胸にどんと、補習用プリントを押し付けた。握手のかわりである。青大附属に入学するための手段がひとつ、クリアされたのは確実だ。ぐいぐい押し付けながら頭を下げた。

「ありがとうございます！明日、両親のサインと、それからバイト先のサイン、もし必要ならそこを紹介してくれた人のサイン、用意して持っていきます。もちろん、補習にはかからない時間にします。三年間、授業をさぼりもしません。誓約書、今、ここで書きます！」

詰め寄りすぎたのか、麻生先生は顔をプリントに押し付けるようにし、くくくと笑い声を押し殺していた。何でそんなに笑うのか、乙彦には理解不能だ。しかし理解できないことを無理に知るつもりもない。まずは要求がひとつ、クリアされたこと、それだけで十分だ。

「いや、すまん。こうも真っ正面からバイト交渉をする新入生は、たぶん青大附属始まって以来だろう、だと思っよな、藤沖？」

「僕も、そう思います」

こちらもまた笑いをこらえるような、しかめっつらをしている様子だった。乙彦にはなぜ、ふたりが自分の言動に対してこうも受けるのか謎だった。第一、アルバイトが校則違反かどうかは、先に教師に確認した方が早いに決まっている。親の許可をもらうことくらい、何の問題がある

というのか。やましいことなどひとつもない。

「入学前にきちんとお話すべきことは、すべきだと考えてました。あとで校則違反だと言われるのはいやです」

「ああ、そうだな。まだ生徒手帳準備していなかったな。関崎、もらっていくか」

「ぜひ、お願いします」

早いところもらえるものはもらっておきたい。これはラッキーだ。下手に意味不明な行動を取り他の内部入学連中から白い眼で見られるよりは、きちんと頭に叩き込んでおいた方がいいだろう。記憶力は自分の強み。乙彦はもう一度、ノートを差し出した。

「この上に、載せてください」

載せてもらえなかった。麻生先生が受け取るなり、大笑いして乙彦の頭を思いっきり撫でたからだ。

「いやあ、お前、いい奴だ！ よし、これ以上余計な心配はしないですむな。藤沖、お前に頼む仕事も、あまりないかもな」

「はあ」

——いったい何があんなに面白いんだ？

理由を追求する気はないけれども、わけがわからないのは確かにわからない。

乙彦はすっかり和んだ生徒指導室で、ソファに腰を下ろすことにした。

その後いくつかの注意事項と午後からのオリエンテーションの開始時刻確認を行った後、

「では藤沖、あと一時間くらい、関崎につきあっていろいろ教えてやれ」

言い残し麻生先生は出て行った。

フォロー係、もとい、教育係の藤沖とふたり、取り残された。

——普通、生徒をこのままふたりっきりでおっぼり出したりするものか？

乙彦にはまったく解せなかった。

「生徒をここまで信用しているというのがすごいな」

「いや、あと十分くらいしたら別の先生が挨拶にくるぞ」

ふたりきりになると藤沖もにやりと笑いを浮かべた。

「この学校において関崎は英語科唯一の外部生だ。有る意味、最大級の特別扱いをされているともいえる」

「なんでだ？」

一入学生ひとりではないか。乙彦は首をひねった。藤沖はさっきまでの固い表情を崩し、堂々と膝を割り、向かいにいる乙彦へ身を乗り出した。

「関崎に関してはまず、交流会関連で顔が知られている。これがまずひとつ。次に入試の際、公立中学から英語科に合格できたというのが奇跡的な出来事だったということ。それがふたつめだ」

「奇跡的な出来事と言われても困るが」

「青大附属の英語科用入試問題を覚えているか？ 噂に聞いた限りだと、ヒアリングと面接とそ

れから筆記らしいが」

「ああそうだな」

そこまで聞いて思い出した。そうだった。一年前、立村と交流会を通して知り合い連絡を取るようになってから、いろいろと青大附属の試験関連情報を耳にしてはいた。もちろん試験の横流しなどではない。青大附中の英語授業がいかなるものか、また英語科の授業の内容情報とか、附属生だからこそわかる生の情報を伝えてもらっていた。

断じて、乙彦が要求したものではない。立村が勝手にたくさん、プリントやら問題集やら持ってきてくれたのだ。時には郵便で送りつけてきたこともあった。なんでそこまで親切にしたがるのか乙彦には最初理解できなかった。おそらく立村は乙彦に友情を強く感じていたのだろう。まんざら悪い気もしない。代わりに乙彦は立村に陸上関係のスキルをたっぷり与えたが、果たして役立ったのだろうか。今日会った時に、改めて聞いてみたいことの一つである。

藤沖はするする話を続けた。

「つまり、その時に関崎は、他の受験生たちよりもずば抜けた点数を出したらしい。これはあくまでも噂だがな。仮に英語科で足りないものの普通科の点数でなら受け入れられると判断された場合は、普通科の合格者として扱われるらしい。それをされずにそのまま英語科に回されたということが、すべてを物語っているのではないか？」

——ずば抜けた点数だったのか？

いまひとつ、ぴんとこなかった。入試のことはよく覚えている。問題内容も、英語の答案も、外国人の先生から英語でいろいろ質問されたこともよく記憶している。立村が前もって教えてくれた内容とほとんど変わらなかったのであまり緊張しなかった。もっとも、中学入試の時もまったく同じ状況でありながら滑ったので、確信はできなかったが。

「ああ、あれは、立村のおかげだ」

乙彦はあっさり答えた。嘘ではない。やましくはない。藤沖が少し目をしばたかせた。

「藤沖も知っているだろう。評議委員長だった立村。あいつがいろいろと問題集やら青大附属の話やら、してくれたおかげで俺も、無駄な受験勉強せずにすんだんだ。公立高校の問題よりは確かに難しかったが、あいつがこまめにヒアリングの必要性だとか、授業で使ったテープのダビングだとか、おまえらとこの授業で使っている問題集だとか、いろいろコピーしてくれたから、それほどびびらずにすんだところはある」

「立村が、か」

「ああそうだ」

言葉短くとぎらせた藤沖に、さらに乙彦は一気に続けた。

「俺は公立中学だったから、結局三年半ばで生徒会から降りたが、一番よく連絡を取って交流会の相談をしていたのは立村なんだ。それは藤沖も聞いているだろう。いろいろ問題も起きたが、立村がうまくやり取りしてくれたおかげで、大事にはならずすんだ。あいつってな、けっこううっかりミスとか勘違いすることも多い奴だが、男としてはなかなか根性あると思う。見た目がな、少しがきっぽいけど、本気でやる時はほんとやる奴だ。あいつと英語科でまた三年間組めるというのは、俺も非常に楽しみなんだ」

「そう信じているのか」

藤沖はぼそりとつぶやいた。眼を逸らした。

「お前もあいつの性格は同じ学校なんだししかも生徒会かかわりもあってよく知っているだろう？ あいつは嘘やまがったことが嫌いな、ひたむきない奴だと思う」

——もっとも、かっとなると見境なく人を殴りつけてしまううっかり者のところもあるが。

雅弘を絡めた去年二月の出来事。勘違いした立村が雅弘をストレートパンチで図書準備室に沈めたあの事件。

本来なら親友をぶんなぐったとんでもない奴と思いたいところだけでも、心根の純粹さになぜか憎めなかった。

——まあ、あれは、雅弘も悪かった。勘違いさせてしまうようなことを立村に言っちゃったからな。

新井林健吾の恋人である佐賀はるみに熱を上げていたのも事実らしいが、最後は一途な思いで見つめていた水野五月にほだされて、選ぶべき人をしっかり選んだ。もっとも、今は別れてしまったが雅弘のことだ、水野五月のためを一番考えて選んだ路なのだろう。

水野五月、すぐに頭の中からお下げ髪姿を打ち消した。消しゴム代わりに乙彦はまくし立てた。

「あいつもたぶん、高校入学に備えてだと思うんだが評議委員長から降りて、きちんと他の奴に席を譲ったのは偉いと思う。うまくいえないがやはり、立村は人を統括していくだけの力があるんだろうな。本来なら三年終わりまで続けるつもりだったろうが、同期の奴に譲るというのは、そうそうできることじゃない。人としての器が違うな」

「関崎、いいか」

いきなり藤沖がガラス張りのテーブルを叩いた。揺れたのは番茶の水面。

「フォロー係として今からひとつ注意しておく」

ぎろりと、眼を光らせた。まるで猫だ。ぎょっとした。

「なんだそれは」

「お前が立村とプライベートで付き合いがあるのはよくわかった。お前の目に立村がすばらしい評議委員長として映っているのも理解できる。だが、今お前が話したことを、他の奴らには絶対に言うな。特に、この学校に入学するにあたって、関崎が立村からどういう協力をしてもらったかなどは、死んでも口にするな」

「なぜだ？ 俺は別に、入試問題を流してもらったとかそういうことはしてもらっていない」「関崎がそういう奴でないことは、さっき麻生先生とのやり取りで重々承知している」

藤沖はきっぱり答えた。その後で、

「だが、誤解する奴はいる。特に、立村がらみの問題だと、それは頻著だ。黙っていても他の連中は喜んで誤解したがる。関崎を見て誤解する奴はいないが、立村がくっついていたら白いものも一気にグレーゾーンに進出する恐れがある」

——ちょっと待て。こいつは生徒会長だったはずだぞ。立村も藤沖のことは好意的に見ていた

はずだが。

混乱した乙彦を前に、藤沖は念押しした。

「いいか。今の段階では、立村との付き合いが交流会以上のものだったと知らせる必要はない」

「それはなぜだ？ 俺に嘘をつけというのか？」

「言う必要のないことを、初日に口走る必要はない。それだけだ」

それだけ言い放つと、藤沖は乙彦の手元にある湯のみをひったくり、一気に飲み干した。

他の科目担当の先生たちとも麻生先生と似たようなやり取りを行い、昼食を学生食堂で済ませ、乙彦は藤沖と一緒に一年A組の教室に向かった。予定ではクラス全員の顔合わせを行いその後で、体育館内での入学生オリエンテーションへと続くそうだ。

「内実、内部生の集団だし、いわゆるクラス換えと感覚は変わらないわけだ」

「そうか」

「だが普通科にもそれなりに入学者がいるはずだ。関崎と同じように迎え入れられるはずだ」

「そうなのか」

歯医者 of 麻酔に似たしびれのようなものを感じていた。自分が英語科入学者としては唯一の生徒、それゆえの特別扱い、それは午前中の流れでよく理解した。落ちこぼれさせないために青大附属の教師たちが全力で準備してくれていることもよくわかった。

普通科の入学者もだいたい三十人前後はいるはずだというのに、なぜだろう。

「もちろん関崎とは違い集団でのミーティングだとは思いますが、ひとりひとりに話をする形式なのは確かだ」

藤沖は言い切った。

「外部生を孤立させないことは、教師にとって一種の義務でもある。もちろん生徒にとってもだ」

「すごいな」

それ以外言いようがない。

藤沖は両ポケットに手をつっこむと、ブレザーの肩を怒らせ空を見上げた。

「お前の気持ちはわからんでもない。俺も入学当時はそうだった」

「中学にか」

「理解不能だった。ましてや小学生から中学生に進学してだぞ。混乱するのも当然だ」

「でもなじんだわけか」

藤沖は頷いた。さっき食い終わったカツどん定食の匂いがぶんとする。

「ラッキーだったのは、早い段階で生徒会と関わることができたことだろう」

「評議委員ではなく、か」

顔をかすかにしかめ、藤沖はその体のまま唇をひきしめた。

「委員会は入学とっぴじめで選ばれる運というもんもある。だが生徒会にかかわるには、半年くらい間がある」

「ああそうだな」

思えば自分も最初は陸上部だった。乙彦は自分とほぼ変わらない背丈の藤沖を眺めやった。

「だから悪いことはいわん。関崎」

藤沖は誰もいない教室を見渡しなが、乙彦に言い放った。

「なんでもいい、後期に入ってからでもいい。補習の嵐が落ち着いたら後期以降、なんかの委員でもぐりこめ。俺が思うに、お前は規律委員が向いているように思うが」

「規律？」

「いわゆる、生活委員のようなものだ。遅刻したり服装違反した奴には違反チケットを切るといったもんだ」

——水野さんか。

お下げ髪の水野五月がまたちらついた。すぐに眼を閉じ打ち消した。

「まずは英語科連中を一通り眺めた上で、どう動くか決めるといいだろう。その辺、俺もだいたい把握しているからわからなかったら聞いてくれ。男子連中もそうだが、青大附属は女子に対してレディーファーストを心がけねばならない学校だ。その辺も慣れるまではなかなかしんどいだろうが」

——レディーファースト？

そういえばこの学校の校訓は「紳士たれ、淑女たれ」であった。水鳥中学とは違い、やはりお嬢さま然とした女子が多いのだろう。もっともあまりそんな女子たちと話をしたいとも思わなかった。そんな時間あるわけがない。

「女子と話す気はないからな」

乙彦がつぶやくと、いきなり藤沖が顔を覗き込んできた。笑みはない。たた唇の端につばがしみたような感じで、

「そうか、女嫌いか」

問い掛けてきた。

「無視はしないが」

「少ししんどいだろうな」

顔がゆがんでいるのは気のせいだろうか。乙彦が眼を逸らすと、藤沖はしつこくそれを追った。

「頭の回転が速くて気の強い女子はいろいろ面倒だ。避けられるなら避けた方がいい」

「言われなくてももちろん避けるだろう？」

「いや、それがな」

鼻の下を人差し指でこすりつつ、藤沖はふっと息を吐いた。

「向こうから寄ってくる。逃げるのは至難の業ともいう」

「女子の方からそんなことするのか」

乙彦もうなづいた。

「面倒なことにかかわりあうのはごめんだ」

「ほお、思い当たる節があるのか」

鋭く突っ込まれた。こいつ、ひそかに鼻が利くらしい。急いで否定した。

「いやそんなわけではない」

「無理するな。そのあたりも頼ってくれ」

頼りたくもない。乙彦が黙ると藤沖はそっぽをいきなり向いた。

「関崎と俺の好みは近いとみた」

何が近いのだろう。わけがわからぬなりに見返すと藤沖は急に、はにかむように笑った。

「ま、そう思っただけだ」

しばらくふたりでとりとめもない話をしていた。藤沖も乙彦に聞かれたことは何でも答えてくれたが、英語科クラスメートの個人名については一切触れる気配がなかった。

気の強い女子と、少しぼんやりした感じの男子の二十人クラスだということ。

また、成績もかなりばらばらしいということ。

そして、経済的に恵まれた家庭の子どもが多いこと。

英語科クラス全体におけるひとまとまりのイメージはもちろん湧いた。

ただ具体的に誰がどういう人間なのかは幽霊のように輪郭のみの実感だった。

「立村はかなり英語の力あるんだろうな」

「他クラスの奴のことはよくわからない、そんなことどうでもいい」

過剰に立村について避けようとするのが納得いかない。原因不明だがひっかかる。無理やり話を逸らそうとする藤沖を乙彦は何度も引き戻した。

「お前なんで、立村の話いやがるんだ？ だってあいつ、評議委員長だったんだろ？」

「知っているだろうがあいつは後期、降りている。後期評議は天羽という奴だ」

「だが生徒会長として付き合いはあるだろうが」

「それ以来は一切ない」

「それは不自然だろう？」

乙彦がそこまで問い詰めたところで、藤沖は黙りこくった。

同時に、教室の戸が開いた。冷たい空気がさっと光のように差した。

——誰だ？

乙彦が顔を向けたその先には、髪を二つ分けにした女子がひとり、突っ立っていた。

「関崎くん？」

ぼけっとしたまま乙彦がその女子を見つめていると、後ろから藤沖が助け舟を出してくれた。

「清坂か」

——もしかして、あの、評議の女子か。

顔を覚えてはいた。ただ髪型があの時はおかっぱだったから、気付かなかっただけだ。

「評議委員の、清坂さんか」

フルネームで思い出した。

——清坂美里。

立村と同じクラスの評議委員、交流会の時はバス停まで送ってくれた。忘れるわけがなかった。乙彦は記憶力に自信がある。

「覚えていてくれたのね」

「忘れるわけがない」

どこか言葉が投げやりになってしまった。なんでだろう。

「清坂、お前何組だ」

「B組。掲示板に張り出されてたのが間違っただけじゃね。それよか藤沖くん早いね、どうしたの？」

「朝から来てたが、文句あるか」

ぶっきらぼうながらも、たいして機嫌も悪くなく藤沖は受け答えた。

「そう、じゃあまだ、こずえ来てないみたいね」

「古川は見てないな」

「あっそ。じゃあ、ごめん、ちょっとこずえに用事あったから寄ってみたんだけど。また来るわ」

片手をさっと挙げると、清坂はまたドアの向こうに消えようとした。乙彦はそれを追おうとした。察したのか清坂も振り返り乙彦を待つかのようにし、

「なあに、関崎くん」

すぐに乙彦の苗字を読んだ。向こうも記憶力はしっかり持っているらしい。

「立村はまだ来てないのか」

まずは尋ねた。藤沖よりはわかりやすい返答をしてくれるだろうと判断したからだった。

戸惑った風に清坂も首を傾げた。

「立村くん？ まだ会ってなかったの？ もう会ってるかと思った」

「昨日電話したっきりなんだ」

ちらと清坂は藤沖を見やった。唇をきゅうと引き締めるようにし、また首をかしげた。

「藤沖くんの事情はわかってるから、向こうもわかってるから、あまり気にしないで」

さらりと声をかけた。藤沖も知らん振りを決め込み、露骨に背を向けた。同時に乙彦の袖を引っ張ると清坂は、

「じゃあ関崎くん、ちょっと来てくれる？」

そのまま廊下のど真ん中を歩き始めた。

——いきなり何するんだ、この人は。

さっき藤沖にささやかれた「頭の回転が速く気の強い女子」の典型が、清坂美里なんじゃないだろうか。

——そして確かこの人は立村の。

「何ぼおっとしてるの。早く、みんな揃わないうちに」

せかされ、乙彦はそれ以上考えるのをやめた。女子がらみのことはよほどのことがない限り考えない方がいろいろと楽である。

一年前、立村が青大附中の評議委員長だった頃、水鳥中学生徒会との交流会をめぐりいろいろとトラブルが起きた。当時、乙彦は水鳥中学生徒会副会長ということもあり仲裁に飛び回ったものだった。その際に一番連絡を取り合ったのが立村で、その縁が今だに続いている。

水鳥中学側が生徒会、青大附中側が評議委員会を代表とする打ち合わせは、両校ともに何度か行われ、結局次の代から正式な交流会が発足した。その下地をこしらえたのが自分らであるとい

う自負は持っている。

その他、乙彦の想像できないところで感情的な問題があちらこちらで起こりしょっちゅう振り回され偉い目にもあったが。女子が絡むとろくなことにならないという経験も、十二分に味わった。それでもやはり、無事に収まったのは代表が鷹揚な性格の立村だったからだろう。乙彦が副会長に在任していた頃に限って言えば、それ以上の混乱も起こらずに済んだはずだ。

「立村くんね、C組で他の男子たちと話してるんだ。中学で一緒だった奴が多いからね」

「まだ英語科の教室には来ないのか」

「うん。ちょっとね。来辛いんだろうね」

清坂は言葉を濁した。どうも立村がらみの話には、にごった匂いがする。

こういうのはあまり好きではない。白黒はっきりつけるしかない。

「藤沖もやはりすっきりしないこと言っていたが、立村が何か問題起こしたのか」

「やはり聞いている？」

また、あいまいな返事だった。嘘はつきたくないのできちんと答えた。

「立村がからむと白もグレーゾーンになるとかなんとか言われているが、何かあいつ誤解されているのか」

「鋭いよね、藤沖くん。言うことは間違っていないよ。別に誤解はされてないんだけどね」

無理に笑顔をこしらえた風に見えた。やはりごまかしているようだった。いらいらする。

「立村くんも、言い訳しないからしょうがないの」

「ということはやはりなにかあったのか」

「同じクラスになるんだからたぶんわかるんじゃない？ 藤沖くんも教えてくれるよ」

清坂はふっと立ち止まり、乙彦をまっすぐ射た。

「でも、関崎くんは立村くんのこと、いい奴だと思ってるよね。それだけでいいじゃない。ちょっと待ってて」

乙彦が問いかけようとするのを軽く振り切り、清坂美里はすばやく教室のドアを開けた。

「立村くん、ちょっと来て！ 貴史、悪いけど立村くん、ちょっと借りてく」

やたらと「ちょっと」を繰り返す清坂の背を乙彦は見つめていた。

——なんで俺がこうやって、引っ張りまわされるんだ？

水鳥中学時代は決してありえなかったポジション取りに、まだ慣れることができなかった。

清坂と入れ替わりに立村が姿を見せた時も、まだその麻痺した感覚を消せずにいた。

制服姿の立村は立ち振る舞いも控えめで、動く際の空気の揺れがほとんど感じられなかった。

「立村、久しぶり」

「こちらこそ」

ブレザーの裾も袖も長めで、なで肩の身体からするっと抜けてしまいそうに見えた。何度か青大附中時代の立村と直接会っていたけれども、こうやって同じブレザー制服をまとい向かい合うと、どこことなく照れくさい。中学時代は学ラン姿で向き合っていたせいか、どうも自分が借りてきた猫状態のようではない。

「これから、英語科で三年間、よろしくな」

「こちらこそ」

また、立村は同じ言葉を繰り返した。浮かんだ表情はやわらかく、どこことなく遠慮がちに見えた。

「さっき清坂さんに連れてきてもらった」

「そうだよな。そう言った」

「午前中は藤沖がいろいろ案内してくれた」

「そうなんだ、ならほとんど問題ないな」

首をかすかに縦振りし、立村はまたやさしげに見返した。藤沖の名を聞いてもさほど驚いた風でもなかったところみると、やはり気のせいなのだろう。誤解なのだろう。話せばわかる程度のことだろう。続けて尋ねた。

「藤沖がお前のことなんだか誤解しているようだったんだが、もしあれなら俺が間に入ろうか」

「いいよ、そんなの」

「いや、たぶん話せば誤解も解けるだろう」

「誤解じゃないんだ。関崎、それとさ」

乙彦は立村の、静かながらも厳しい口調に驚いた。

「しばらく俺と直接話をしないほう、いいかもしれないな。藤沖がいるなら困ることないと思うし」

「はあ？」

言われた意味がまたわからない。全く動じない立村の表情に、思わず声を荒げてしまった。

「お前と話を何でしちゃいけないんだ。立村、やはり何か誤解されてるのか？ やはり一度話をすべきじゃないのか」

「いいんだ。附中時代のことだし、思い当たる節もあるからさ」

立村はしばらく首を振った後、もう一度暖かく乙彦に話し掛けた。

「帰ったら、電話するよ。その時何かわからないことあったら、直接聞く。ただ」

「ただなんだ？」

「俺と話していると、悪い先入観を植え付けてしまう可能性があるんだ。いろいろやらかしたから。特に女子にはさ」

もう一度立村は、一呼吸置いて乙彦に告げた。

「関崎に俺が、迷惑かけるようなことはもう二度と、したくないんだ。その意味、わかるよな」
——わかるわけないだろ？

評議委員会時代の雅弘を巡るいざこざか？

さらに言うなら、立村自身がしでかしたとんでもない出来事が何かあったのか？

「おい、立村、何があったんだ」

「とにかく、先にA組へ戻った方がいい。藤沖なら人望もあるから、英語科連中の受けもいい。俺と話しているよりも何千倍もいいはずだ」

すっきりしないまま、乙彦は立村がふたたびC組の教室に戻っていくのを見送るしかなかった。

英語科全員二十一名が一年A組の教室に収まった。知り合いの顔はというと、当然藤沖と、そして立村のみ。

立村は一番最後に後ろのドアから静かに戻ってきた。際奥の窓際席に突き、いろいろと話をしている様子だった。他の連中もみな中学から内部上がり同士、それぞれ盛り上がっている。乙彦ひとりだけぽつんと取り残される格好となるのも仕方ない。頼みの藤沖も立村の前席に回っている。男女混合あいうえお順、の川の字型に並んでいるのだが、やたらと机の間に余裕がある。

——落ち着かないよな。

それでもすべきことはまだある。まずは麻生先生からもらった生徒手帳の校則を読み通した。思ったよりも厳しい縛りはなさそうだった。

気になるアルバイト規定についても、先ほど麻生先生から聞いたとおり、「家庭上の事情の場合」はそれなりの書類を提出することで問題なく行えそうだった。制服に関しての細かい規則も、乙彦にはごくごく自然なことに思えた。

——ブレザーにネクタイ外すのはやはりまずいだろう？

——学ランなら改造服とかもあるだろうが、ブレザーでそんな間抜けなことしたら笑えるぞ。

もっとも女子は髪型からヘアアクセサリから、かなり細かい決まりが存在するようだった。肩につく髪の毛はどんな形でもいいからまずは縛ることとか、前髪は眼にかかると視力低下の原因になるので分けるか、もしくは切るか。わりと納得できる内容ではある。青大附属はいいとこの子どもが行く学校とされているけれども、いわゆる勘違い校則はひとつもなかった。

——無理に校則をかえる運動なんてしなくてもいいわけだ。

かつて水鳥中学時代に、副会長同士、総田幸信と丁丁発止の激しい戦いを繰り返してきた。校則改定賛成派の総田と、真面目一本の乙彦とでは、もちろん話が合うわけもない。生徒会顧問の萩野先生が頭を抱えるほどのバトルが日々続いたが、結局総田が一步引く形となり、お互いのプライドも守られる形で卒業となった。

——今なら、まだ総田のやりたかったことも、わからないわけじゃない。

やり方がどうしても乙彦にはなじめなかつただけ、納得いかないことには筋を通したい。それは同じだったのではと、今なら思う。

——どちらにせよ無理に動く必要はない場所というわけか。

校則反対と声を上げる必要のない環境ならば、乙彦も無理に動くつもりはない。まずは学業専念、アルバイト一本でいこう。

麻生先生が入ってくるのと同時に、藤沖の声が響いた。

「全員、起立！ 礼」

「今日は念願の、一年A組英語科全員集合と相成ったわけだ」

額の汗と油が席からもわかるくらいにじんでいる。麻生先生は教壇に立ち、ぐるりと生徒全員を見下ろした。

「まだオリエンテーションまで時間があるので、まずは新しいメンバーを紹介するとしてよう。関崎、こちらどうぞ」

いきなり名指しされ、しかも「こちらどうぞ」などと女性っぽい言い方に、乙彦はまず固まった。周囲が拍手をする気配あり。そういえばさっきまで藤沖と話をしていた時は誰も話し掛けてこなかったが、露骨な「無視」のムードはなかった。

「まあ緊張するな。さっきと同じような要領でいい。まずは自己紹介を頼む」

「はい、わかりました」

気合を入れるために、まずは腹から返事をした。また斜め後ろから華やいだ拍手。神社で打つ拍手のようなものも混じっていた。

勢いつけて立ち上がる拍子に机が前につんのめった。危うく押さえた。今度は笑い声が響いた。全身熱くなるがかりうじてこらえた。麻生先生の呼ぶ場所へ、足音響かせてまずは立った。

「改めて紹介しよう。関崎、乙彦くん、水鳥中学出身だ」

乙彦も改めて、二十人のクラスメートたちを眺め直した。こうやってひとりひとり顔を見つめていくと、藤沖の言う通り「男子はぼんやりしたお坊ちゃんで、女子は頭の回転が速く気が強い」というのがなんとなくわかる。男子が口を半開きにしてぼかんと乙彦を眺めているのが多い中、女子はまるで値踏みするかのようにならみつけてくる。正直、やりづらい。

「ただいまご紹介に預かりました、関崎乙彦です。よろしくお願ひします！」

堂々とまずは言い放った。最初が肝心だ。転校生が来た時と同じように振舞えばいいと思うのだが、どうもそれだけだとつまらないような気もする。というか、転校生の自己紹介というものはいつも型どおりで、どういう奴かが全くわからないまま終わってしまう。もちろん休み時間を通じて交流を深めればいいことなのだが、乙彦にはどうも解せなかった。目立つ気はないのだが、どういう人間か、どういう考え方をもち、どういう風にクラスでなじんでいきたいかくらいは、きっちり告げておきたい。休み時間なんて待ってられない。

後ろの黒板を見やり、まだ何も書いてないことを確認した。教壇にあがり、さっさと名前を縦に書き込んだ。

——関崎 乙彦

いきなりふうっとため息が洩れたのはなぜか、考える間もなかった。

「麻生先生、オリエンテーション始まるまでまだ時間、ありますか」

「あるぞ。十分な」

「三分以内で終わらせます」

きちんと断った後、乙彦は麻生先生の立っていた位置、教卓を占拠した。笑いをこらえながら降りる先生にはあとで詫びを入れておこう。深く息を吸った後、乙彦は軽く机を叩いた。卒業式の答辞と一緒に。

「午前中に藤沖くんから、英語科のクラスメートがみな、僕を待ち構えているから心するようにと指導を受けました」

台本のないしゃべりは苦手なはずなのに、なぜか言葉が浮かんでくる。

「そのとおりだと、今思いました」

乙彦が話す度、女子たちがつぶやいているのが聞こえる。そんなの気にしない。

「俺は、三年前、青大附中を受験して不合格でした。だから今回、受かったときは三年ごしの願いがかなって、本当にうれしかったです」

とうとう一人称が「俺」になってしまったが、勢いは止められない。

「けどその反面、俺が受かったかわりに落ちてしまった受験生もいたわけで、きっとその人は三年前の俺と同じ気持ちでいるんじゃないかと思います。それと先週、公立高校の合格発表で俺は受けなかったんですが友だちはほとんど受験していて、それで、やはり受かった奴落ちた人もいて」

なんでそんなことを口走っているのか、自分でもわからない。

「あの、それでまた、麻生先生と藤沖くんから学費がものすごくかかるという話も聞いてます。それで、さっき、アルバイトの許可をもらうことになりました」

いきなり「ほおっつ」と響いたのは男子の集団だろうか。乙彦は向かって右隅の席にいる立村に視線を向けた。礼儀正しく両手を膝に置いたまま乙彦を見つめている。その前で藤沖がいらんでいるのは気のせいかな。

「もちろんいろいろ書類を出さねばならないのですが、きちんとやるつもりです。あ、アルバイト先は、学校前の古本屋です。ここで俺が言いたいのは、俺がこの学校に行くにあたって、たくさんの人たちの協力があったということです」

舌がもつれる。が、言うておかなくてはならない。藤沖と目が合った。

「学費もそうですし、うちの両親が兄弟あとふたりいるのに俺を青大附高に行かせてくれたことはものすごく感謝してます。ですからたぶん、これから先、学校の行事とか学校祭とか部活とかいろんなのでなかなか、他の人たちに合わせられないことがあるかもしれませんが、それは決してクラスのことをないがしろにしたいからじゃありません。俺はただ青大附属に通い続けるために、やらねばやらないことをやっているだけです。最初の一年は補習とか、アルバイトとかで参加できないかもしれませんが、このクラスの一員として全力を尽くしたいと思ってます。本当です」

乙彦はもう一度深呼吸した。上ずってしまう言葉を少し押さえた。もうひとつ、言うておかねばならない。

「これからいろんなことを聞いたり、俺は結構単純馬鹿と呼ばれてたんで勘違いしたこと言ったりするかもしれませんが、俺は青大附属の一員として、一刻も早くすべてをマスターしたいと思ってます。それまで、時間をください」

まっすぐ、もう一度、立村に視線をやった。穏やかに見つめている。

「そうだ、あと、もうひとつなんです、この学校に入学する前、俺は青大附中でしょっちゅう行われた交流会に参加してました。水鳥中学の副会長としてです。あ、引退してましたがその時は。とにかくそれがきっかけで、評議委員長だった立村くんと友だちになって、青大附属がどうい学校かいろいろ教えてもらってました。あ、違います。

入試情報を横流ししてもらったわけではありません」

藤沖に絶対しゃべるなど言われたことをここであっさりばらすのは、最初から決めていたことだった。

もちろん藤沖には感謝している。いい奴だとは思う。

しかし、立村とは実際一年前からの付き合いなのだ。

青大附属への再挑戦も、またそのための情報も、なによりもまっすぐなぶつかり方も。

他の連中がなんと言おうが、立村はいい奴だ。誤解をされているだけなのに、陰口を言う立場には立ちたくない。

「だから、俺は青大附属を、入学する前から好きで、きっとクラスメートのみんなも、まだ会ったことのない生徒も、先生も、あとあっそうだ、結城先輩という三年生の先輩も午前中親切に案内してくれました」

脈略がないが、ついつい口走ってしまう。

「青大附属で過ごす三年間を、俺は最高に充実させたいです。これから三年間、よろしくお願ひします！」

両手を教卓におき、乙彦は呼吸を止め、ぴっと礼をした。顔を上げる前からあふれんばかりの拍手が教室内に響いたのを感じた。そして顔を上げたとたん、斜め右に、身動きしない立村と思いきり顔をしかめている藤沖の顔が見えた。目と目が合ったとたん、唇端をちょこっと挙げて笑った。両手でまた拍手のような拍手を贈ってくれた。

——やっぱり、藤沖は話のわかる奴だ。

いつのまにか頬が紅潮していたのだろう。汗が額に浮かんでいた。油っぽさならたぶん、麻生先生とほぼ変わらないだろう。肩に誰かの手が置かれた。壇上から降りようとする乙彦を押さえた。

「ということでだ。最高の自己紹介だったな。関崎」

「はい、最高です」

「そうかそうか。みんな、今の話はだいたい七十パーセント、全部関崎が午前中話したことなんだ。基本としてアルバイトは学業の影響があるのですすすめたくないんだが関崎は、これから外部入学生が受ける地獄の補習ノックをしっかりとやってその上でやり遂げると、宣言したんだ。もちろん宿題もすべてパーフェクトにこなしてきた。勉強はとにかく、あとはまあ、このキャラクターだな。これ以上は何も言わないぞ。もう関崎、お前は青大附属一年A組英語科の、かけがえないメンバーだ。これこそよろしく頼むぞ！」

背中を一気に押し出され、教壇からころげおちた。危うくこけそうになる。また笑いが起こるのは女子たちから沸いたものか。声が飛んだ。

「いい男だねえ、あんた、噂には聞いてたけどね！」

——いい男？ なんだいったい？

乙彦はその声の方向に顔を向けた。藤沖の後ろに座っている女子がひとり、ピースサインを送ってきた。

「ところであんた、童貞？」

——今、なんて言った？

「古川、もう少しお前も女らしくしろよなあ」

こういう場面の場合、普通なら空気が冷え切って発言した女子はつるし上げを食うのが普通ではないのか？

のんびりした声で注意する麻生先生が、全く怒っていない。余裕がありすぎる。

——川上タイプの女子か。

水鳥中学時代の生徒会会計でかつ、総田の彼女だった川上寿々を思い出した。やたらと色気を振りまこうとし、何気なく乙彦をばかにした口調で「副会長がねえー」とつぶやくタイプの女子だった。水鳥中学生徒会室なら思いっきり「いいかげんにしろ！」と怒鳴るのが常だ。なのに、なぜかそこまで血が昇らない。いつもの自分じゃないみたいだった。

古川と呼ばれた女子は、肩をすくめて同じく笑顔のまま、先生に一言詫びを入れた。

「先生ごめん、ちょっと刺激強すぎた？」

なんと古川というこの女子、下ネタを教師にも投げつけるというつわものだ。

「前から言っているだろう。男子は純情なんだぞ」

古川がまた何か口に出そうとしたのを乙彦は、拳手で止めた。こちらを見、古川が同じ人懐っこい笑顔を向けた。

「いきなりじゃあ びびっちゃうよね」

「いや、そういう意味ではない」

すぐ側の席だ。乙彦は近づき、古川の座っている席脇に立った。自然と見下ろす格好になる。後ろで心配そうに見守っているのが立村で、古川の前で笑いをかみ殺しているのが藤沖だ。

「聞かれたことには答える」

「ほおほお」

息を呑む気配がする。きっちり告げた。

「自分の行動に責任を取れず親や先生たちを巻き込んでしまううちは、童貞でいいと俺は思う」

一瞬、古川は目を丸くした。唇をつぼめた。ゆっくりとつぶやいた。

「な、る、ほ、ど、ねえ。恐れ入りました、ねえ立村、あんたが見込んだ奴だけあるよ、関崎って」

またにやっと笑うと、振り返り立村に声をかけた。返事はなく、ただ立村がほおっとため息をついたのが聞こえた。

様子をそれ以上伺うこともなく、乙彦は自分の席に戻った。拍手の音を聞き分ける必要もなく、目の会う男子女子ほとんどがやわらかな笑顔だった。気がつくやうに片手で握手を求める男子がいた。

——俺、何か、変なこと、言ったか？

曲がりなりにも一年A組のメンバーとして受け入れられそうだという予感だけ、確信した。

オリエンテーションの内容についてはとりたてて目新しいところもなかった。しいて言えば、みな羊のように大人しく、教師たちにつっかかたりもせず、みなぼんやりと言うことを聞いていた、という程度だろうか。簡単な服装検査、および外部生への激励の言葉、四月に向けての学業奨励、そのあたりはすでに午前中間かされていた。繰り返しに過ぎなかった。

一通り話も終わり、入ってきた時と同じように一年A組の教室へ整列し戻った。

乙彦は後ろから二番目、一番せいたかのっぽは藤沖だった。

廊下に出てからようやく言葉を交わした。

「今日はこれで終了のはずだが」

藤沖もたいくつそうにあくびをしつつ、続けた。

「入学式後、すぐに授業が始まるからな」

「そうなのか？」

初耳だった。ふつう入学式のあとはみな記念撮影を家族でした後、食事会というパターンではないだろうか。両親が異様なほど楽しみにしている。

「基本的にお前にとっての入学式は今日だと考えていい。さすがに今日はこれから授業なんてふざけたこともないだろう。だが、補習のスケジュールは渡されるはずだ」

「そうだな」

乙彦だけ早めに補習授業が用意されるという話は、午前中、麻生先生からも聞かされていた。驚きはなかった。

「それとだ。教科書についてだが」

藤沖の口調は少しくぐもっていた。

「古本屋で仕入れるか先輩たちからまわしてもらうか、だが」

教室に入る寸前、早口に囁いた。

「結城先輩に声を掛けられたのだったら話は早い。すべてそちら経由で相談したほうがいい」

——あの、いちごミルクの「日本少女宮」って人か！

乙彦が啞然としている中、みなもとの席に戻っていく。結局入ったのは最後だった。

麻生先生がさらに顔をぎらつかせ、ハンカチで額を拭いながら現れた。

「では、教科書と補習についての資料を渡すぞ。今日はとりあえずこれで終わりだが、これからびびしいくからな。みな覚悟しておけよ。英語科は普通科と違ってかなり問題集もいろいろな授業も異なる。しかも二十一人しかいないときた。気を抜くなよ。よいな」

「はい！」

また甲高い声をあげる女子がいる。麻生先生もにやっと頷いた。

「古川、よい返事だ。よーし、よーし」

どうやら古川こずえというその女子は、一種のムードメーカー的な役割を果たしているようだ

った。「あんた童貞？」などといった信じがたい言動とは裏腹に、先生たちおよび同級生たちからは受け入れられている。乙彦にはまだ、理解しがたい存在ではあった。

「それとだ。関崎もさっきの自己紹介でかなりみなに馴染んでくれたようだが、やはりわからないことはたくさんあるだろう。なんでも遠慮なく教えてやってくれ。関崎も、まあこんなくだらないこと聞くまでもないと思うかもしれないが、細かいことをきっちり確認する習慣は今からつけておいたほうがいいぞ」

——さっきの話で十分だと思うんだが。

少なくとも乙彦には、さしあたってプラスすべき情報はなかったように思う。

「では、教科書準備を早めにしておくように。それと、立村、お前は少し残れ」

乙彦は肩越しに振り返り、教室の隅で静かに腰掛けている立村を見やった。

こっくり頷いていた。相変わらず藤沖は無視したままだった。

——このままでは、よくないな。

確信した。

自分がおせじにも敏感な方だとは思っていない。またこの学校で不必要な人間関係のごたごたに巻き込まれたくないという本音もある。なにより面倒くさいし時間がない。

そんな乙彦でも、現状の立村がいかにも孤独な状況に追いやられているかはだいたいわかる。オリエンテーションの時も、また教室においても立村はほとんど言葉を発しなかった。並ぶ順番が前から三番目だったこともあって、その点離れていたからというものもあるのだろう。乙彦も話し掛けるきっかけがつかめなかった。

——とにかく、奴に話し掛けておく必要はあるな。

うまく言えないのだが、乙彦としては受け入れられない空気が流れている。

自分自身の周りに、というわけではない。

さっきの自己紹介を通じて、なぜか女子たちから「よろしくね！」と声を掛けられたり、他の男子たちからも「お前やるじゃん」とか背中を叩かれたりもする。乙彦自身は受け入れられているような気がする。

しかし、立村はただ黙って、大人しくもぐりこんでいるだけだ。

全く口を利かないわけではないにしてもだ。

——藤沖が言っていた通り、何かがあったんだろう。

その何かを追求すべきかどうか、迷った。

あとで電話をかけて、直接聞いてみるべきか。

立村のつきあい相手である清坂美里は、

「同じクラスなんだから、きっとあとでわかるよ」

とか言っていたけれども、そんなに時間を食わせて待つよりも、本人の口から現状認識をしてもらい、その上で乙彦がうまく循環油となるほうがいいような気がする。

少なくとも、このままクラスで浮いたままだと、仲間外れおよびいじめの対象にならないとも限らないだろう。早いうちに芽は摘んでおいたほうがいい。

「起立、礼」

「さようなら」

全員の挨拶が終わり、藤沖の号令と共に乙彦は立ち上がった。

すぐに立村の席へ行こうとした。しかし捕まった。

「ちょっと、悪いけど、そこの快男子」

話し掛けられたのは二回目だった。藤沖より先に、かの「あんた童貞？」発言の女子が乙彦に駆け寄ってきた。

「ちょっと顔、貸してほしいんだけどね」

「顔を貸すとは」

にっこり笑顔と反対に口調は悪っぽい。制服は着崩さずきちんとしている。くるくると動く眼と、やんちゃな口調に乙彦はまず、堅く答えた。

「今日、時間ある？」

「おないだろう、古川あいな、関崎の担当は俺なんだが」

「担当もなにも、幼稚園児じゃないんだからそうそうくつつくのもどうかと思うけどね。藤沖、あんたにもあとで、ちょっと話があるんだけどそれはまた明日連絡するから。じゃあ今日は、関崎を借りてくわ」

——俺は物じゃないだろう？

どうも、この「守られる」感覚が気持ち悪くてならない。

いつもだったら自分が下級生たちを守る立場でいたはずなのに、この学校では思いっきり子ども扱いされているような気がしてならない。断るべきか。乙彦が口をごもごもやっている間に、古川はまた笑いかけてきた。

「あ、じゃあ、立村、あんたももう少ししゃっきりしなさいよ。溜まってるんでしょ、その顔観てたらわかるよ、ほらほら、春なんだから」

——女子が男子に言う言葉か。

空白時間、頭の中に出来た。その隙を逃さず古川は乙彦の背中をどんと叩くと、

「まずは、私が珈琲一本おごるわよ。さ、行こ」

——おごるって、そんな金どこにあるんだ？

溜息をついた立村が、乙彦に小さく頷いて見せた。そのまま、行け、ということだろうか。

「何か用なのか」

廊下から半ば強引に生徒玄関へ連れ出され、そのままわけのわからぬまま大学棟へとひっぱり出された。午前中藤沖に案内されていたので、目的地が大学生協の学食だということだけはなんとなくわかった。しかし古川は入り口の缶珈琲を自動販売機で買った後、

「大学の教室、どっか空いてるはずだからそこ行こう」

いきなり大学校舎へと向かっていった。

「それはまずいだろういくらなんでも。俺たちはまだ高校生にもなっていないし」

「いいのよ。聞いてよね。うちの学校、正式な単位認定はされてないけれども、飛び級みたいな

扱いされてるって。ほら、立村そうじゃないのさ」

「飛び級」の意味がわからない。頭を下げるのは癪だが仕方ない。教えを請う。

古川はけたけた笑いながらも、あっさりと説明してくれた。

「たとえばさ、立村のように尋常ならざる語学の天才野郎だったら、はっきり言って高校の授業だって退屈じゃない。たぶんあいつ、英語科の授業半分寝ているだろうね。だったらもっと高度な授業に出させてやろうってことで、あいつ中学の頃から大学の授業を受けさせてもらってるわけよ。もちろん、それで何かってのがあるわけじゃないけれどもね」

「大学の授業をか」

「他にもね、同じクラスの男子で金沢ってのがいるんだけど、あいつもまあ、すごいのよ」

聞いてもいないのに古川はぺらぺら喋りつづける。

「金沢は一年の頃から、わが校の天才画家として有名でね。よくわかんないけど賞をいっぱい獲ってるのよ。で、なんかわかんないけど有名な画家のお坊さんにも認められてゆくゆくはその道を極める予定なんだよ。だけど、この学校でそれ勉強するってのは、できないよね。だから大学の美術がらみの授業を特別に受けさせてもらってるわけよ」

「そんなのがあるのか」

初耳だった。もちろん立村が人並み以上に英語の成績がよいとは噂で聞いていた。しかし、大学の授業を受けさせてもらえるほどとは。想像がつかないが大学の授業とはどんなものだろう。古川は尋ねるまでもなく説明してくれた。

「もっとも、大学の授業は中学よりもいいかげんで楽だと、ふたりとも言っていたけどね。それはともかく、うちの学校はやりたいことがあるなら、なんでもさせてくれる、そんな自由なところがあるってわけよね」

「そうか」

言葉が途切れたのを幸い、すぐに尋ね返した。

「で、それには費用がかかるのか」

「費用？ ああ、それは聞いたことないけどね。立村に聞いてみたらどう？ けど立村の英語関連に関してはそんな話、聞いてないけどねえ」

「じゃあ、もし仮に、俺がそういうのを受けたいってことになったら、受けさせてもらえるということなのか？」

どきどきしてきた。大学という響きが、どこかに隠れた糸を弾いたようだった。

古川はあっさり答えた。

「そうだと思うよ。麻生先生もさ、前からやってるオリエンテーションでも話してたけど、もしやりたいことがあるんだったらそれなりのことは準備してもらえるはずだよ。ありがたいよね。ま、私みたいな奴だったらな一んもないかもしれないけどね」

話が逸れた、とばかりに古川は両手をぱんと打った。

「とにかく、教室を押さえるから、すぐに行こう、それからよ話は！」

清坂美里に続く「頭の回転が速い、気の強い女子」の二連発。午前中は感じなかった疲れがどっと出てきそうだった。

——悪い奴ではなさそうだが。

古川はすぐに空き教室を見つけ、そこに座った。。

「そうだよ、ね、大学、今は休みだからね。空いてるよどこも」

熱い缶珈琲を手渡され、まずは一服した。乙彦も鞆を脇に置いた。

「大学ってこんな感じなのか」

「そう。たぶんゼミだったんだろうね」

口の字型に並んだ席は、いかにも大学といった雰囲気だった。古川はまず、ドア付近に座り、白い机で足を組んだ。細い足首に目が行ってしまい、慌ててそらした。

「一応、立村や美里、あと杉本さんから関崎の話は一通り聞いてるってこと、まずは言っとくわ」

光が背中に流れる感触あり。古川と直角に座る格好で、乙彦は膝に手を置いた。

「いきなりで驚いたとは思うけどさ、私からすると関崎のことはそれほど、初対面って感じじゃないわけ。ま、さっきは少々びびったと思うけど、あれがいつもの私だからね。時間たてば慣れると思うけど、悪意はないってことで。それはともかく」

——悪意があるとかないとか言う問題じゃないだろう？

少なくとも「あんた童貞？」発言にいたっては。

「今日、いきなりここに連れ出したのはね、うちのクラスの状況と、あと杉本さんのことなんだけど」

ぐっと締まった瞳の奥に乙彦は、逃れられないものを見た。

——杉本梨南。

逃げつづけてきたこの現実にととう、向かい合う時がきた。

「私にもこの問題、責任の一端があるからね。ほら、杉本さんが持っていったっていう葉牡丹あるでしょ。あれ、私のうちから持ってってもらったもんなんだ。けしかけたのは私よ。だから、それでいろいろと面倒なことになっていたら、ごめん。まずあやまっとくわ」

——葉牡丹。

あの、奇妙なほど毒々しいキャベツの花。

美しさよりもむしろ、重たいものが残った植木鉢。

「ああ、あれはきちんと世話されている」

あわてて乙彦は言いつくろった。嘘ではない。雅弘に促されてあの日、すぐに水野五月の家に持っていったのだ。大切にされているはずだ。古川も少し驚いた顔をしたけれどもすぐに口を開いた。

「ああそうなんだ。じゃあさ、ひとつ確認したいんだけどさ。関崎は杉本さんのこと、どう思っているわけ？」

「どうと言われても、そんなこと考えたことがない」

当たり前だ。この一年近くひたすら、受験勉強と生徒会活動に徹してきたのだ。暇がない。

「へえ、女子のことも？ すけべなことも？」

「当たり前だ」

少し声を荒げてしまう。

「そうか、真面目だねえ。ま、真面目だから杉本さんはあんたにほの字なんだねえ」

なんとも思わぬように古川は流すと、前かがみになり乙彦に迫った。

「じゃあはっきり答えてほしいんだけど、関崎は杉本さんのことが好き？ 嫌い？」

——何考えている？

「正直に答えてよ。あの杉本さんのこと、一緒にいたい？ いたくない？」

目を白黒させてしまっている自分が情けない。喉から言葉が出てこない。さらに古川は畳み掛ける。思わぬ言葉がぽんと飛び出しそう。押さえる。

「言い方かえるっきゃないか。つまり関崎は、杉本さんと話してみたい？ それとも話したくない？ これなら答えられるでしょ」

迫られた勢いに押されてしまった。

「……話すことが、ない」

嘘は言えなかった。事実だった。

「そっか。やっぱり、そうだったんだ」

肩を竦めると古川はゆっくりと一息ついた。

「杉本さん、二回目の失恋決定か。可哀想だけど、しかたないか」

やさしい口調だった。

杉本梨南。一年前、青大附中で行われた交流準備会の時に、いつのまにか一目ぼれされてしまったらしい女子の名だった。忘れてはいなかったが、この学校へ足を踏み入れた段階ですぐに記憶を封じてしまっていたかのようだった。できればすべて過去のものとして忘れてしまいたいページでもある。

——なんで俺のことが気に入ったのか、いまだにわからん。

記憶力は悪いほうではないのだが、なぜか杉本梨南に関わるものだけはさくっと処理されてしまっている。本当だったら、女子から好意を持ってもらえるというのは名誉なことのはずなのだが、杉本梨南という女子の個性がどうも乙彦には受け入れられなかった。

杉本梨南の性格が一般的女子とかなりかけ離れているからというわけではない。噂話をすべて鵜呑みにする気にはなれない。ただ会った時、一度だけ話をした時、確信したのは一つだけ。一緒に話をしたいとは思えない。それだけだ。

「関崎の意志がはっきりすれば話は早いね、それならやっぱり初志貫徹といくか」

古川が立ち上がり、背を向け窓へと向かった。乙彦もつられた。その場で立ち尽くしたままでいた。

「単刀直入に言うとね、杉本さんと立村をくっつけたいと、そういうことよ」

「なに？」

「青大附中のごたごたを丸く収めるには、これしかないよ、多くの連中が思っているってわけ。」

なんでかわからないよね、だからそれを説明したくてここに呼んだというわけよ」

「ちょっと待て！」

記憶が混乱している。女子同士のことなら知ったことではないが、なぜここに、立村の名が出てくるのだろうか。いやなによりも。

「立村には、その、いわゆる付き合い相手がいたんじゃないのか？」

覚えている限りだと、確かあの、清坂美里相手ではないのか。

もちろん立村はそのことを声高に言うことはなかったけれども。

「美里のことを言ってるの？」

「そうでなければ、誰がいるのか」

「ごめん、説明不足だったね。つまりね」

古川こずえは振り返った。乙彦に今度はやわらかい眼差しを向けた。

「あのふたり、いわゆる惚れたはれたの関係じゃないのよ。私には理解しがたい関係なんだけどね、それで今のところ、なんとかうまく行ってるみたい」

「なんだその関係とは？ まさか、それで今、あいつが叩かれてるのか？」

教室内で感じた、立村を疎外する空気と関係があるのだろうか。古川は否定せずにまた乙彦の向かい側に座りなおした。

「それはあるけど。でもしょうがないよね。好きになれなかったんだからさ。立村は杉本さんのことしか目に入ってないんだから」

「でもふたりは付き合っていたんだろ？」

好きでなければどうして付き合っているのか、乙彦には理解不能だ。何度も繰り返した。

「そういう付き合いをするには、それなりの真剣な気持ちがあつてのことだろう。ましてやあの立村だ。軽い気持ちで何かするとは思えない」

「そうだね、軽い気持ちじゃあないよね。立村は」

古川が何度も頷きつつ、それでもはっきり言い放った。

「立村ね、卒業式で英語の答辞を読んだって話、聞いたことある？」

「いや。そこでなにかしくじったのか？」

首を振った。

「じゃあ、何かそこで事故でも起きたのか。緊張して壇上から落ちたとか」

「まさか。こういっちゃなんだけど、立村の語学能力は天才の域に達してるって噂だよ。実際、すらすらと暗誦したよ。私らには全くわからない言葉でね」

よくわからないのは古川の言葉なのだが、その辺は放っておく。

「答辞は完璧だったんだけど、最後の最後にね、やらかしてくれたわよ。我が弟よ」

「弟？」

ひっかかる言葉を問い返すが、答えないで先に進む。

「あそこまで堂々とやってのけられたら、全校生徒、誰もあんぐり口あけるしかできないわよねえ」

「だから、何やらかしたんだ」

古川こずえは大きな溜息を肩ごとついた後、告げた。

「やっちゃったのよ、全校生徒の前でさ壇上の上で。杉本さんに実質的な告白、しちゃったのよ。キスしたり、その場で押し倒されなくてよかったと思うよ。そのくらい、本気全開だったもんねえ、あいつ。二年間の想いが爆発したって感じ」

——実質的な、告白？

「もちろんね、そのものずばりじゃないけどさ。ただあいつのここ半年の行動を粒さに見つめてきた青大附中ブラザーズ&シスターズにとっては、そう受け止められても、しかたないよね。美里もそれ、わからないほど鈍感じゃないよ」

「一体何を言ったんだあいつは！」

だんだん何か、繋がってくるものがある。だが女子の言葉ではあちらこちらの穴をつぶせないままで終わる。古川にかがみこみ乙彦も問い詰めた。

「藤沖たちに軽蔑されるようなこと、あいつ、何をしたんだ！」

「それとこれとはまた別。今から全部説明するよ。それから改めて、考えようよ。それともうひとつ、なんで私がこんなことしてるかっていうとさ」

ゆっくり、背を正した。

「柄じゃないし笑ったっていいよ。私ね、一応、前期の評議委員やることになっちゃったわけよ。これから先クラスをきちっと守り立てていくために、事情を説明する義務を感じてるわけ。あ、それとさ、今のところ男子評議は藤沖で決まってる。そのことも忘れないでおいてよね」

——「あんた童貞？」の女子が、評議委員か？

立村の「卒業式壇上での告白事件」よりも、乙彦には古川こずえの立場の方がもっと謎だった。息を飲んだのを古川は別の意味で取ったのか、

「立村のこと、そんなに驚いた？ そうだよな、とにかく、仕切りなおして最初から説明するから、しっかり聞いてな！」

笑うことなく、真剣な眼差しのまま語り始めた。

古川こずえの話によれば、やはり立村は中学時代相当なことをやらかしたらしい。
だがしかし。

「それは、ちょっと違うんじゃないか」

何度も、途中で言い返したくなることも多々あった。

「立村が卒業式の壇上で、いわゆるそういうことを言ったというのは、具体的にどういうことな
んだらうか」

まず、確認したかったのはその点だった。

「具体的ねえ、やっぱり男子って理屈っぽいよねえ」

ひとりごちながら、それでも古川はきっちりと思い出してくれた。

「立村はご存知の通り語学の天才だから、英語で答辞を読むよう先生たちから指名されていたの
よね。藤沖が読み上げる答辞を、英訳して読むようになって言われたみたい」

「藤沖が答辞を読んだ？」

少し混乱した。答辞を読む奴がそんなにいるのか。こずえは首を振った。

「違う違う。藤沖は卒業生代表としてノーマルな原稿を日本語で読む担当。うちの学校はね、や
たらとイベントとか特別出演とかこしらえたがる傾向があっせ。そのこともあって、特別ゲス
トに立村が選ばれたてわけ。英語の弁論大会みたいなものよ」

なんとなくわかるような気がした。

「で、すらすら暗誦した後、いきなり私たちの担任だった先生がね、感極まっちゃたわけよ。そ
うよねえ、今思えば、立村って一番問題を起こしてきた生徒だったし、反抗してた奴だったわけ
だしね。よくやったと思ったんでないの？」

「反抗？ 問題？」

ますますわからない。立村と今まで話をしてきたイメージでは、特段不良っぽいところもなけ
れば、相手構わず噛み付く奴でもなさそうだ。ただし、いったん血が昇ると押さえられないとこ
ろもあるようなので、そのあたりが担任に対して出たというのだろうか。

「私ら聞ってる生徒たちにはさっぱりわかんなかったけど、どうやら立村、英語版古文で読み上
げたらしいのよね。わかる？ 英語版古文？」

「わからん」

「でしょ」

全く意味不明だった。英語の古文なんてあるのだろうか？

古川は噛み砕くように説明した。

「つまりね、英語にも日本語における古文と同じような言語があるらしいのよ。そんなの知った
ことじゃないけど。たまたま立村は大学の授業にしょっちゅう出ていて、その言語をマスター
しちゃったらしいんだ。よくわからないよねえ、で、大学の教授に頼み込んで藤沖の書いた原
稿を、そのまま古文化してもらい、読み上げたってわけ」

「それに意味はあるのか？」

乙彦には、全くその必然性が理解できない。

「ないよ。少なくとも私らにはね。あとで先生から聞いたことだけど、どうやらうちの担任、大学の教授から前もってその話聞いてみたいなのよね。立村はこっそり自分で自己発電してすっきりしてはい、終わりのつもりだったらしいけども」

自己発電、ときたものだ。意味はわかる。赤面する。

「ばらされちゃあね。こっそりしこしこやってて、いきなりお母さんが部屋の中に入ってきて、エロ本取り上げられたようなショックだったんじゃないの？ 関崎、あんたも男だからわかるよね」

答える必要はない。嘘は言わない。古川はあっさり流して話を進めた。

「とにかく、それでぶちぎれたのかどうかわからないけど、立村はいきなり日本語に戻って、『古文で読んだ理由は杉本さんに勧められたからです。感謝します』って堂々と言い放っちゃったのよ！ これが愛の告白でなくてなんという？」

「いや、事実関係を伝えただけだろう」

乙彦はぼつりと自分の判断を述べた。

「答辞を現代英語ではなく古い英語で読み上げるためのきっかけがその彼女だとするならば、礼を言うのは当然のことだ」

「わかってないねえ」

古川は溜息をついた。

いや、どう考えてもそれは発想の飛躍だろう。

今聞いた限りだと、立村は単にアイデアをくれた杉本梨南に対して感謝の意を伝えただけのように思える。たまたま壇上でそれを口にただけであって、どうしていきなり「愛の告白」に繋がっていくのかがわからない。もっとも乙彦からすれば、「答辞を英語の古文で読め」という発想の生まれ出るところからして理解不能である。自分より一歳年下の女子に、というのも全くもって不可解だ。

「文字通り取ればね、ただのお礼かもね。でも、その前にも立村、いろいろ前科があるからさ。式場にいた連中みな、あーあって思ったんじゃないかってね」

「全員に確認を取ったわけではないのだから、すべてとは言い切れないのではないか」

このあたりもやっぱり、極論に感じる。

古川は立村と三年間同じクラスということもあってそれなりに思うところがあるのだろう。だがよく考えれば、それも勝手な憶測に過ぎない。今乙彦が聞かせてもらった時に感じたような「単なるお礼」と受け取った人間も、決して少なくはないだろう。

「まあね、私も卒業生在校生に突撃インタビューしたわけじゃないからね」

素直に古川は認めた。

「ただ、立村が何かの折にはしょっちゅう、杉本さんを守るため駆けずりまわっていたのを見て

いたらね、そう判断するしかないじゃないの」

「守るため……か？」

以前、新井林健吾とその彼女たる女子と一緒に話を聞かせてもらい、杉本梨南という子がかなりの問題児であることは聞き知っていた。だからといってそれを鵜呑みにはしたくないが、噂が出てくる以上はそれなりのきっかけがあるのだろう。

「いじめ問題か」

「ともいうけど、たぶん加害者が誰になるかは人によって異なるよね」

ずいぶん古川こずえという女子は冷静である。頬杖をついた。ほぼ初対面の男子に対してずいぶんこれは、なつっこい態度ではないだろうか。

「先生たちはみな杉本さんが悪いと思ってるし、立村は杉本さんを守りたいと思ってる。今ははっきり言えるのはこのあたりだけなのよね。たぶん私がいくら説明したって、ぴんどこないんじゃない？ それにさ、あんた、杉本さんと付き合う気ないでしょ」

答えられず黙っている。

「だったら、自然消滅を狙うしかないよね。もっとも杉本さんはいまだに関崎のことばかり想っているし、それが心の支えなんだからさ」

「いや、すでに話はしたはずだが」

「話？」

げげんな顔で、あごを頬杖の手から外す古川こずえ。乙彦は続けて説明した。

「そういう付き合いをするつもりはないと、話したつもりだ。一年前のことだが」

本当のことである。

「俺は受験勉強と生徒会でそれどころではないと、はっきり伝えた」

「あっそ、そうなんだ。じゃああんたの中ではもう、杉本さんの件は終わっているわけねえ」
思わず頷いたのは、事実、その通りだからだった。

一年前、水鳥中学で行われた例の交流会後、体調を崩し保健室に運ばれた杉本梨南。

あの時雅弘に手を挙げた立村を必死に止めた乙彦は、頼まれて保健室に連れて行かれた。

「杉本に、一度だけでいい、はっきり、本当のことを言ってやってほしい」

今思えばそれが、古川の言う立村の感情の表れなのかもしれない。

「今まで杉本という女子は、一度も男子から人間扱いをされたことがないんだ。真正面からお礼を言われたこともなければ、好かれたこともない。そんな杉本に初めて、きちんと接してくれたのは、俺の知る限り、関崎しかいない。けどさ」

立村は片手を少し火照らしたまま、さらに訴えてきた。

「それは、関崎には関係ない。だからせめて、一度だけ、人間らしい態度で接してやってほしいんだ。それだけなんだ。うちの学校の男子連中はたぶんこれから先、杉本にやさしくしてやることはないだろうから、一度だけでいいんだ」

と。

人間らしい態度、というのがどういうものなのか、正直わからなかった。乙彦としてはただ、

出されたお茶にはありがとうと感謝を伝え、帰る時には挨拶をした、それだけだったのだが。いったいどこが気に入られたのだろう。もしや、あいさつすらしてもらえないくらいいじめられていたということなのか？ それとも、そうされるべきなにか理由でもあったのか。

「杉本も話をきちんとすれば、わかってくれるはずなんだ」

それを乙彦は信じた。信じたつもりだった。

——それが伝わってなかったのか？

「関崎、そういうことなわけね。わかってないねえ」

簡単な説明をただけなのだが、古川はさらに溜息を大袈裟についた。

「悪いけどあんた、女子とつきあったことないでしょう」

「ないが、それが悪いか」

「悪くはないけどねえ、今後この学校をエンジョイするためには、少くく女子の心理をつかんでおかないとまずいよあんた」

古川こずえの言葉は少し呆れ気味だった。

「どういう話をしたかわからないけどね、杉本さんが実際、男子に好かれていないのは事実よ。それは認める。その中で関崎ひとりが紳士の態度を取ってくれたのも、あんたの思いやりよね。でも、女子ってのはね」

自分だって女子のくせに、その他人事のように言い放つのはなぜなのか。

「一度でもやさしい態度を取られたら、夢見ちゃうものなのよ」

「夢を見る？ 寝てないのにか」

ふきだす古川。なんで理解できないところで受けるのか。

「つまり、杉本さんは生まれて初めて、男子に人間らしい扱いをしてもらえたわけよ」

「立村は違うのか」

「立村とはまた話が別。もっと付け加えると、立村レベルの男子ではなくて、頭がよくて生徒会役員で運動能力も抜群、しかも男前ときたら、恋しないわけないじゃないのよ」

「誰のことだそれは」

全く意味不明だ。それも「男前」って誰のことだ？

ますますこの、古川こずえという女子は謎である。

「女子心」のレクチャーをさらに深く、古川は掘り下げていった。

「付き合う気もない、そういうことを伝える場合はね、最初から冷たく接すればいいのよ。もしくは、『俺には好きな子がいるから君とは付き合えない』ってね。そりゃ、傷つくかもしれないよ。泣かれるかもしれないよ。でもね、しょうがないじゃない。好きな子がいるんだから、諦めるしかないよね」

「そんなのいなかったからしょうがないだろう」

いわゆる、雅弘や総田のような付き合いとは縁がない。

「だけどさ、『勉強が忙しい』とか『受験に専念したい』とか言われてごらんなさいよああた。

受験って一生続けるわけじゃないんだよ。一年経ったら終わるんだよ。そうしたらさっそく次、どうするわけ？ 受験を終らせたならチャンス到来！ってなるじゃないのよ」

「確かにそういうことになる」

言葉通り受け取ればそういうことになる。

「でも、関崎、あんたは終わった後、もう一度考え直す気はなかったんでしょ？」

もちろんである。

「だったら、最初から杉本さんには『どんなに好きになられても、俺は君のことを好きになれない』くらい、言っちゃえばよかったのよ。あえて悪役になってね。そうしたら、女子は泣くだけ泣いて諦めるから」

「そういうものなのか？」

乙彦としては真実の部分だけを伝えればよかったと思ったのだが。

「あんたも、これから先女子たちから大モテになること確実だからアドバイスしとくけどさ」

溜息をまたつきつつ、古川は一瞬悲しそうな目をした。

「いい男がいて、どんなにこっちが想っても好きになってもらえなくて、それでも可能性がないわけじゃないからあきらめられないって状況、これは辛いんだよね」

「経験あるのか」

一般論とは違う、奇妙な重みを感じる。

「あるよ。ま、これも直にばれることだしねえ。私も三年間、クラスのいけてる男子をおっかけまわした経験があるからね」

いきなり、経験談に突入するのはどうしたことか。居心地の悪い思いを感じつつも乙彦は黙っていた。身動き、できなかった。

「すぐに切り替えなんてできないよね。あいつが好きになってもらえないから、しかたなく別の男子になんて目がいくわけじゃあないんだよ。特に、同じクラスでさ、そいつのいいところが日ごとにたくさん見えてきてさ。もちろんどじったところも見てるし、いつも完璧かっこいいわけじゃないけど、でも、やっぱり私の男を見る目は確かだったんだって思い知ってさ。そういう男子に一度惚れちゃったら最後」

「そいつは、最後まで」

乙彦は尋ねた。古川も頷いた。

「そう。だからいい男なんだよね。自分の好きな子が別の男子をおっかけてて、応援するしかないのに親友としてくっついていてさ。でも、いくら私がかわりになるって言っても、無理な話なわけよね」

「それは当然のことだ」

男としては当たり前だろう。好みでない女子に付きまとわれるのは迷惑だ。

「だから、一度思いっきり人間性を否定されるくらい嫌ってくれればね、こっちだってあきらめがついたかもしれないけど、あいつは最後までいい男だったからね」

「そんなひどいことをしないと、あきらめてもらえないものなのか」

乙彦には、全く理解しがたい女子心理のレクチャーだった。

乙彦はただ、杉本梨南に自分の本心を伝えただけに過ぎない。

ただ、受験勉強で忙しくて恋愛事にかまけている暇がないと。

また、あの頃はまだ、公立の青潟東に進むことも選択肢に入っていたのでそれを伝えた。もちろん青大附属も候補ではあったけれども、あえてそれを口にしなかったのはやはり家計の問題だ。隠したわけではない。

誠実に訴えたつもりだったのだが、それも伝わっていなかったのか。

古川こずえの語りはまだ続く。

「ここいらではっきり言っちゃうけど、杉本さんのことを立村が好きなのは、中二の頃からみんなには丸見えだったのよねえ。ほんとよ。杉本さん以外、女子じゃないってくらい、毎日ちょっかいかけたりかばったりしてたのよ。評議委員会で一緒だったというのもあったんだろうね。たぶん美里もそれ、気づいていたんだね。立村が杉本さんにつきあいかける前に、美里が告白してむりやりカップルになったのよ」

どうのことだろう？ わからない。つきあいをかける前？

「取られると思ったんだろうね。時間差攻撃。まあ立村もああいう性格だし、しかも恋愛についてはガキだからね。告白されたら最初の相手を選ぶのが義務だと思っていたところがあったみたいなのよね。美里を選んでからはしっかり、一筋にご奉仕していたんだけどもね」

ご奉仕？

「そう。ほんのご奉仕よ。もっとも杉本さんは立村のことを、ただの先輩としか思ってなかったからそれでトラブルが起こったわけでもないけど。ただ立村はそれ以来、先輩として杉本さんをかばうよう、女子たちに声かけしたり、何かあったらすぐに駆けつけたりしてたのよ。美里もそのあたりは承知していたから、がまんしてたのよ」

「それはかなりひどいな」

立村について、である。これはへたしたら二股と呼ばれる行為ではないだろうか。それを許していた清坂美里にも疑問符がつくが。こういう誠実でない行為をする奴ではないと信じたいのだが。

「ただ、あまりにも杉本さんを巡る問題がごたごたしすぎていたのもあって、それがきっかけで立村は評議委員長から引き摺り下ろされたのよ。もちろんリコールとかそんな形じゃなくてね、きちんとした民主主義に基づく投票で、だった、らしいけど」

「そういうことか。だから藤沖はあいつを嫌っていたのか」

藤沖の名が出てきたところで、古川は慌てて手を振った。

「違う違う。藤沖がぶちぎれたのはまた別の理由よ」

「別の理由とは？」

ここまでしゃべってくれた以上は最後まで聞き出さないと幕が下りない。

「立村が小学校時代かなりいじめられていて、いじけ虫だった頃にガキ大将とけんかして、大怪

我させてしまったっていう、本当なんだかどうなんだかわからない話があつてね」

「いじめられていたのか、あいつは」

口にしてみても、やはり、と思う。立村にはどこか、つっこめるような隙がある。

「らしいでしょ、ほんと。私からしたら、あんないじけ虫ががんばって対決したってこと自体、よくがんばったって褒めたくなるけどね。少なくとも私の弟だったら、あやまりにはいくけど、ちゃんと頭なでなでしてやるよ」

乙彦も頷いた。いじめられていた奴が立ち上がったただけなら、そんな怒ることもないだろう。藤沖はそんなに心の狭い奴なのか？

「ただその時、相手の男子に後遺症が残っちゃったらしいのよ」

「でもあやまったんだろう？ 弁償もしただろうし」

古川こずえは首を振った。

「藤沖が激怒したのはそのあたりよね。つまり、立村は、卒業にその事件をやらかしてしまい、相手に謝ることもせず逃げ出したらしいってことよ。しかもその事件を入学際に青大附中に報告しなかった。つまり、ずるをしたってこと。そこらへんよね」

「そういうことか」

腑に落ちた。藤沖が立村を無視するのも、当然のことに思えた。

「ばれてないことはないと思うよ。特に傷害事件じゃない。親同士で示談になったんでないの？」

ずいぶん大人びたことを古川は言う。

「その噂は私たちも中一の頃から聞いていたし、偶然にもその怪我させられた男子の彼女がいたりして、立村もかなり痛めつけられてたなあ。必死に隠そうとして姑息な手段をとったのもかえってまずかったんじゃないの。でも、その時懸命にクラスの男子たちが立村をかばったのよ。女子は美里を除いてみな敵だったから。男子も結構クラスで分裂してたけど、それでもこの件に関してはみな協力しあって立村がクラスから浮かないように、手を回していたのよ。そのリーダーがね、羽飛ってといういい男なんだけど」

妙ににやける理由がわからない。

「男子たちの言い分としては、あれは『決闘』なんだから、男と男の勝負。闇討ちじゃないんだし、もちろんいろいろ不手際があったのは認めても、立村を攻め立てるのが正しいとは思えない。ってね。でも女子からしたら、そんな傷つけておいてさっさと逃げるなんて男の風下にも置けない、そういう意見が圧倒的。一步間違えるといじめになりそうなところを、ほら、その羽飛が押さえたんだ。カッコよかったよなあって思うよ、ほんと」

やたらとその「羽飛」とかいう男子のことばかり褒める。

「でもどっちにしても、立村は女子から受けがあまりよくなかったしそれはそれでしかたなかったとは思うんだ。その事件は一年でさくっと終わっていたはずなんだけど、またその後で杉本さんがらみの問題が勃発しちゃって、めんどうなことになっちゃたってわけ。立村もさっさと、その男子に土下座して謝ってけりをつけときゃよかったのに、そんな逃げ回ってるからかえってわ

「わけかんなくなるんだよね。私が男子だったら、ケツ一発浣腸してやって、ぶん殴ってもらって握手して抱き合って終わりにしてこいって、言っちゃうね」

かなりきわどいことをさりげなく言い放つ古川こずえ。やはり乙彦にとって、謎の深い人物になりそうだ。

「いじめられていた復讐をしたということだな」

「そういうこと。恨み、深かったみたいねえ」

いじめられていた、という点をもし鑑みるならば、立村の気持ちを汲み取ることもできる。

「関崎、あんたならどうしてた？ 藤沖の立場に立って、今のような話聞いたら？」

乙彦はしばらく口を閉ざしていた。すぐに答えが出ない。実際、立村のうけた「いじめ」がどの程度かにもよるが、傷害事件となってしまうならば、それはざんげするしかないだろう。その一方で相手ともきっちりと話し合いをすることにより分かり合える部分も、あるのではないだろうか。

——総田とのことも、近い部分があったな。

ふと思い出した。水鳥生徒会副会長同士で、当時は天敵だった総田幸信のこと。

乙彦は思いつくまま古川に答えた。

「俺の経験でいうと、どんなにむかつく相手であっても、最後にはわかりあえる、とまでいなくても、互いの考えを理解しあえる時があるとは思う」

「ふうん、そういうもんなんだ」

「受け入れられなかったとしても、真剣にぶつかり合えば、必ず伝わる。友だちにはなれなくても、憎しみは消える。そんな気はする」

「じゃあ、さっきの質問に戻るけど、立村に対してはどうする？ 藤沖みたいにシカトしちゃう？」

「いや」

顎を揺らす程度に振った。

「一発ぶん殴るかもしれないが、そのあとあいつにつきあって、その、怪我させた奴のところに行って、謝らせる。状況によっては、仲裁に入る。そのあと、とことん立村に本心をしゃべらして、それで和解させる」

「出来ると思う？ そんな理想論」

「俺は、できると思う」

今度黙ったのは古川こずえだった。天井を見上げ、しばらく考え込んでいた。

「それならさ、関崎、悪いんだけど」

腹に決めた、という風に次の言葉は飛び出した。

「今すぐじゃなくていいからさ、その時がきたら、あの昼行灯元評議委員長をぶん殴ってくれる？」

「殴る必然性がない」

「たとえじゃないのあんた。つまり私が言いたいのはね。このまま藤沖と私が一年A組を仕切っ

ていくことになる、立村が浮いちゃうわけよ。いじけ虫だからなおさらね。藤沖だってそう軽々とシカトを解くとは思えないしさ。だったら、せめて、なんかの機会があったらあのボケに一発怒鳴りつけてやって、いいかげんいじけるのやめなって言ってやってほしいってことよ。三年間私も美里も羽飛も、口がすっぱくなるくらい言いつづけてきたけど、結局あまり利いてないみたいだし。最終兵器はやっぱり、関崎しかいないんでないのってことになったわけ」

「最終兵器？」

藤沖が憤る理由もわからなくはない。立村がそういう行動を取った理由もわからなくはない。だが、傍目からみたら一種の「無視」である。

「私らはそういう男子がらみの問題からは手を引いて、とにかく杉本さんの応援に専念させてもらうから、悪いけど、関崎、立村の軟弱なところを君の気持ちいいくらいまっすぐなストレートパンチで、ぶっとばしてほしいのよね。ほんと、附属上がりであいつに対応できる奴、もう手駒なくなっちゃたしね」

男子として余計な手出しをすることに抵抗はある。ありがた迷惑だろう。

しかし、古川の言い分にも一理ある。

すぐに答えは出せない。まだ頭の中がぐるぐるしている。

「少し考えさせてくれ」

時間稼ぎだけ、なんとかすることにした。

頭の中で計画していた学費調達計画は、入学前から頓挫した。

——うちがそんなに金持ちなわけないだろ！

信じられないことだが、なんと関崎家の収入だと、青潟市からの育英奨学金は出ないのだという。どういう計算しているのか、乙彦にも理解できない。先日母が市役所に書類を持って申請をしたところ、あっさりと断られたという。

「もうねえ、うちの場合はお父さんもしっかり仕事しているし、住宅ローンもないし、財産もそれなりにあるはずだし、と決め付けられてしまったのよ。世の中もっと大変なご家庭もいらっしゃるのですよ、とかきっぱり言われてねえ。ほら、うちの次男坊、青大附属に入ったでしょう？

私立はお金がかかるからできるだけそうしたいとこなんだけどねえ」

母が長電話しながら愚痴っているのを、乙彦は盗み聞きした。

——金がかかるのは承知の上だが。

しかし、自分の頭にも青潟市の育英奨学金を含めた計画は組み込まれていた。自分なりに市役所や図書館で調べてそういうものがあるのだとは聞いていた。しかし、母の言い分によると関崎家はしっかりした稼ぎのある、裕福な家庭と判断されたらしい。もちろん、父は勤勉に働いている電気メーカーのサラリーマンだし、一軒家もローンはないらしい。生きるには困らない、食うには確かに、困らない。しかしだ。

——兄弟三人もいるってのに、金が余っているわけないだろ？ 市職員、そのあたりも考えないのかよ？

文句を言いたくともわが身は十五歳、まだ義務教育を終えようとしているだけ。

——これはなんとかしなくては。

あらためて乙彦は、アルバイトおよび青大附属内の奨学金研究に勤しむ決意をした。

「出かけてくる」

まだ受話器を握り締めたまましゃべっている母に言い残し、乙彦は家を出た。用事はある。佐川雅弘の父である「佐川書店」店長と一緒に、アルバイト予定先である「みつや書店」へ挨拶に行くためだ。

「おとひっちゃん！」

脳天気飛びついてくるのは雅弘だった。ちょうど店も空いて来た頃、どうやら雅弘の奴、ゴムの伸びきった生活に徹しているらしい。心なしか、少しだけ原色遣いの服を纏っているようにも見えるが気のせいだろう。真っ赤なトレーナーとジーンズというのは、雅弘にしては珍しい。

「父さん待ってたよ。じゃあ行こうか」

「おい、お前もか」

「うん、父さんが行ってもいいって言ってたんだ！」

どうもこいつ、ガキなのか年相応なのかわからない時がある。少なくとも乙彦に対して接する時は、かなり幼児がえりっぽい口調でしゃべる。そのくせ、総田をはじめとする生徒会連中とつ

るむ時はきりっと締まった言い方でなにやら語っているし。そのあたりがわからない。

まずはレジブースに入っている雅弘の父に挨拶をした。

「おとひっちゃん、じゃあそろそろ行くか」

「遅くなって申し訳ございません」

約束した時刻よりも十分早めに来たつもりだったのだが。

「いや、早ければ早いほどいいんだよ。じゃあ雅弘と一緒に車に乗ってなさい。それにしても」

乙彦を上から下までじいっと見やり、

「制服を着てきたんだね。えらい、えらい」

どこがえらいのかわからない。やはり、一種の、礼儀だろう。

雅弘に案内されて店裏側の車庫内の車に乗り込んだ。トランク部分がやたらと広い仕事用の車である。後部座席の奥に押し込まれるかっこうとなった。

「あのさ、おとひっちゃん、青大附高、どうだった？」

落ち着くやいなや、まず最初に質問してきたことがこれだ。やはり興味津々なのだろう。

「どうだったって」

「オリエンテーション、やったんだろ？」

そんなこと話、しただろうか？ たぶんちらっとしゃべったかもしれないが、雅弘が記憶しているとは思わなかった。実際昨日、オリエンテーションに出かけてきたわけだから、嘘ではない。乙彦としてはどこまで話すべきか迷うところでもある。

「ああ、一応な」

「やっぱり、すごいとこだった？」

「あさってから補習が始まる」

これも事実なので言うしかなかった。

「ええ？ もう、そんなことするんだ」

「青大附属の奴らはものすごく進んでいるんだそうだ」

以前から立村の口からも聞いていたことだが、こうやって自分で説明してみるとなんだかやりきれない。

「そうなんだあ。じゃあ、来週さあ、みんなで中学最後の遠足行こうって話出てるんだけど、出れないね」

いつだ、と尋ねる前に勝手に答えていた。

「そうだな、無理だ」

遊ぶ金なんてあるわけがない。

しばらく雅弘は、一緒に工業高校へ進学する友だちの話をしていた。青湊工業に進学する生徒は男子ばかり五名ほどだった。雅弘と直接接点があるとは思えないタイプの奴だったが、意外と仲良く情報交換をしているらしかった。如才ない性格である。

「俺は建築科だから、のこぎりとかかんとか、とにかく大工さんになるつもりでやるしかないかなって感じなんだ。そういうのは得意だし、なんとかなるかな」

「そうか」

自己分析が完璧だ。これだけ頭の働く……成績には結びついていないが……雅弘のこと、どうせだったら普通高校に進めばよかったのにとおぼろげにはいられない。公立でそれほどランクを下げなくても普通科は見つかっただろうに。しかしこれも雅弘のこだわりらしい。早く卒業し、一刻も早く独立したい。それが雅弘の望みだった。

「あと三年がんばって、いいところ就職して、一人暮らしするんだ。ちゃんと自分の生活するんだって決めてるんだ」

「おじさんはどう言ってるんだ？」

「ああ、そうしろって」

答えはあっさりしていた。この幼い顔に重ならない確固とした意思はどこから来るのだろう。

「おとひっちゃんは大学、行くんだろ？」

「もちろんだ」

思わず言ってしまう、口をつぐんだ。もちろんなんて言えるわけがない。

「奨学金を取ればの話だが」

「そうか、お金かかるんだよね」

雅弘もあっさり流した後、

「けど、おとひっちゃん頭いいから、いくらでも奨学金もらえるよね」

ぼそっと呟いた。

雅弘の父が運転する車でだいたい五分程度。自転車で十分程度の距離だからさほど変わらない。

「店主さん夫妻にはちゃんとおとひっちゃんのことを話してあるから、安心して行けばいいよ」

さっきとはうってかわっておとなしくなってしまった雅弘に代わり、乙彦はいくつか質問を浴びせ掛けることにした。直接「みつや書店」の店主夫妻に尋ねるのも、初対面ではなんだなというように。もちろんすでに、時給五百円の朝五時～八時までの三時間勤務、月二十日間のシフトで約三万円。だいたい月謝をまかなう程度の額となることは聞いているが。

「じゃあ、土日はないということですか」

「もともと店を開けてないからね」

運転しながら頷く佐川書店の店長もとい雅弘の父。

「立地の関係もあって、お客さんの殆どは青大関連の学生さんらしくてね。たまに土曜は開けることもあるらしいけれども、基本として日曜は休みなんだ」

「仕事は主にどんなことですか」

「たぶん、運ばれてきた古本を本棚に並べたり、他の古本屋まで物々交換したりとか、そのくらいだろうね。店番するのはまた別のバイトを雇うと話していたし」

「別？」

もし自分に補習の予定がなければ、放課後も二時間くらいなら入ることができると思っていたのだが。察したのか雅弘の父はにこやかに続けた。

「みつわ書店さんから聞いた話だと、毎年青大附属の高校生か大学生をふたり雇うことにして、そのうち朝番と昼番にわけていく形式を取っているらしいんだ。どうも、すでに別の子のシフトが決まっていて、おとひっちゃんの場合ぎりぎりでもぐりこめたらしいんだな」

もっと早くわかっていれば、昨日のオリエンテーリングの段階でもう少し麻生先生と話を詰められたのだが。しかたない。まずは毎月の月謝をまかなえることに感謝しよう。

「時間帯のことを考えるとただ古本の片付けだけとは思えないが、それもまたよしとするか？」

「はい、もちろんです」

「いい返事だ。ほら、ついたぞ。それと雅弘、お前はここで待ってなさい」

てっきりくっついてくるつもりでいたらしい雅弘が、口を尖らせた。

「ええ？ 俺、だめなの？」

「当たり前だろう。遊びに行くんじゃないんだ。それともこの辺、ぶらついてるか？」

「そうする」

かなり不服そうだが、父の命令には逆らえず、雅弘は反対側のドアから降りていった。

「十五分くらいしたら戻ってくるから。置いていくなよ」

話をだいたい聞いた感じだと、それほど難しいことを要求されるわけではなさそうだった。一度もアルバイトの経験がない乙彦にとって想像できないことではあるけれども、雅弘のように一日中レジ打ちをするわけでもなく、愛想笑いをする必要もないのならば、それはそれで気が楽なような気もした。腕力は人並みに自信があるつもり。荷物運びぐらいならお手の物だろう。

青潟大学校舎のどでかい建物を左脇に見上げながら、乙彦は佐川店長に導かれつつ「みつわ書店」へと足を踏み入れた。もろ、目の前だった。昨日、本当なら藤沖に古本屋へ連れて行ってもらい教科書を安く見繕う予定だったが、例の古川こずえによって遮られた。ついでだしチェックしてみるのもよかろう。

「ごめんください、佐川ですが」

見た感じ、教室二部屋分もあるだっ広い売り場にまずは驚いた。古本屋というともっと狭く小さいものではなかろうかと思うのだが。乙彦がきょろきょろしていると、

「はあい、お待ちしてましたよ」

白いドアの向こうから、小柄ななりのおばあさんがひとり、ちょろちょろと出てきた。どことなくねずみを連想させるものがある。灰色のうわっぱりで、いわゆる「もんぺ」のようなものをはいている。

「今日は仕入れでうちの人出かけているですんで、どうもすいませんね」

「こちらこそどうも。例の、アルバイトの子を連れてきたんで」

あわてて乙彦も頭を下げた。にこやかにおばあさんも頷きつつ、

「佐川さんのお墨付きの子なら、安心ですよ。まあまあこちらに来て、お茶でもどうぞ」

——店は大丈夫なんだろうか。

ちらとレジのありかを探すと、白いドアの脇でひとり、てきぱきと手を動かし本の整理に没頭している男性がいた。大学生だろうか。その辺の年齢の見定めが難しい。

「久田くん、じゃあ店よろしくね」

「わかりましたー」

目を向けず、その久田という男性は積み上げられた本を一冊一冊より分け、時折布で表紙をこすり続けていた。

「今のバイトさんが本当によくやってくれてねえ」

おばあさんは腰を曲げたまま、まず佐川店長、そして乙彦に番茶を出してくれた。

「本当だったらもっと続けてほしいところなんだけども、やはりきちんとしたところに就職したんだったら、それはそれでおめでとうと送り出さねばならないし」

「アイデアマンだったようですね」

佐川店長が相槌を打った。おばあさんもにこにこしながら、時折店を覗き込みつつ、「毎日本棚と店掃除を徹底してくれたのも、売りものの本をこまめに磨いてくれたりしたのも、この店を改装する時に白っぽい今風の設置にきなさいと言ったのも、久田くんですからねえ。この歳になると、なかなかわかりませんでね」

話の端々をつないでいきだいたい把握した。久田さんという学生アルバイトが、さまざまなアイデアを出して店をよくしてきたということだろうか。かなりの綺麗好きと見た。また、七年間というアルバイト期間を計算してみると、やはり乙彦と同じように高校一年から大学四年までここにいたということになる。

「久田くんはひとりでこの店切り盛りしてくれたのでねえ、それは助かったのだけど」

おばあさんは言葉を切り、改めて乙彦に尋ねた。

「本当に朝五時から八時までで大丈夫なの？」

「はい、大丈夫です」

本当なら放課後も出たいところなのだが。補習さえなければ。

きっぱり答えたところで、また佐川店長が乙彦について簡単に紹介を続けた。

「うちの息子とは幼稚園の頃からのつきあいですんで、人柄は折紙つきですよ。本当にいい子です。青大附属に今年から通うことになってね、それで学費を自分で稼ぎたいということで。本当だったら遊びたい盛りだろうに、偉いと思いますよ。本当に」

——稼がないと通えないだろう。

「ところで、放課後はまた別の子を雇うんですか？ 久田くんの穴を埋めるとなるとまた大変でしょう」

「それがねえ、二月くらいにねえ、いつも来てくれる大学の先生が、甥っ子さんかいとこさんか、とにかくやはり、青大附属高校に今年入学するという男の子をバイトさせたいという話でもって、決まってしまっていたんですよね」

「ほうそれは」

つまり、乙彦よりも早くということか。

「もともと附属中学の子で、この春から下宿することになって、できるだけ早いうちに社会経験をさせたいということもあつたらしいですよ。でもあまり目を離すと年頃の男の子だから何をすらかわからないし、バイトもしっかりしたものの方がいいということで。久田くんにも今、しっかり仕込んでもらってますよ。でもやはりねえ、朝早いのはちょっと辛いみたいで」

おばあさんの顔がその話をする時、心なしかほころんでいるように見えた。

「ほうでは、もう、仕事はさせているわけですね」

「といっても、荷物運びと、本の汚れとりくらいですかねえ」

ということは、早めに自分も仕事の準備に取り掛かったほうがよさそうだ。

佐川店長に渡しておいた学校関連の書類にサインをもらった後、もう一度出勤時刻の確認を行った。来週の月曜から出勤。朝五時。

「まずは久田くんに紹介しておくわねえ」

腰を曲げたまま、灰色のおばあさんはもう一度ドアを開き、

「久田くーん、悪いけどちょっと来てもらえる？」

呼びかけた。ぶっきらぼうに、

「わかりました」

声が聞こえると同時に、ぼろ布を片手にエプロン姿の男性が現れた。もう全身真っ黒。顔は赤いにきび跡でいっぱいだった。店内の白っぽい雰囲気とは不釣り合いに思えた。

「こちら、来週、朝の当番専門で入ってくれる関崎くん。今年青大附属に入学するそうなのよねえ。あと一週間だけど、よろしくね」

「よろしくお願いします！」

乙彦も立ち上がり、深く礼をした。無言で顎だけしゃくるような礼をした久田さん。なんとなく無礼に見えたが、先輩とはそういうものだと思っていたので腹も立たなかった。

「一年生？」

「はい」

「じゃあ、南雲とも一緒の学年なんだ」

「誰ですか」

げげんな顔を一瞬見せ、久田さんはおばあさんにもう一度尋ねた。

「青大附属の、一年？」

「そうなのよ、南雲くんは附属上がりだけど、関崎くんは高校からなのよね」

「はい、英語科です」

よくわからないが、もう一人の昼当番が南雲という同学年の生徒であることはわかった。

久田さんの表情がみるみるうちに明るく笑顔に溢れたのに、次の瞬間驚いた。

「そうかそうか、高校受験組か、英語科か！」

乙彦があっけにとられている間に、久田さんはいきなり乙彦の手を取り、両手で握り締めた。かさついた指先で少しちくちくした。

すぐに店へ出ていった久田さんに、おばあさんはいくつか注釈を入れてくれた。

「久田くんも、青大附属に高校から入ったのよ。それも田舎からねえ。だから、結構苦労したみたいなのよ。馴染むのに時間もかかったみたいで、だからこの店がうちみたいな感じだったようなのよ。ちょっと変わった子だけど、根はいい子だからねえ」

あまり余計なことを言わないほうがいいだろう。とにかく、うまくやっけていくに越したことはない。会話はすべて佐川店長に任せたまま、乙彦は黙ったまま両手を膝に置いていた。

嫌われはしなかったようだ。月曜以降、教科書を仕入れられるかどうか相談してみよう。

「お疲れさん、じゃあおとひっちゃん、帰り道なんか食っていくか？」

「みつや書店」から出てきて後、いつのまにか車の中で寝ていた雅弘をたたき起こし、佐川店長の運転のもと、近所のファミリーレストランまで向かった。雅弘も食べることに関しては異存なく、

「で、で、どんな感じだった？」

根掘り葉掘り聞きたがる。こういうところはまったく、小学校時代の雅弘と変わっていなかった。

「なんか、うまくいきそうな気はする」

それだけ伝えたと、乙彦はまず手帳を取り出した。やるべきことをひとつひとつ、予定表に埋め込んでいった。

- ・明日から午前中補習。
- ・月曜日 朝 五時からバイト
- ・教科書の仕入れ
- ・同学年の昼当番（南雲）という生徒に挨拶をする

——それから。

脇から覗き込んでいる雅弘に気兼ねして、さすがにもう一件は書けなかった。

- ・立村に連絡を取り、入学前に事情をすべて聞きだすこと。

なんでも早めに処理しておくに、こしたことはない。

残された春休みは早朝から八時まで「みつや書店」に、八時半からお昼までは青大附属高校の補習授業に費やされた。午後からはほぼフリーだし、それなりに雅弘たちと遊んだりもできるのだが、やはり連日の朝四時起きというのはしんどい。

——今からへばってちゃ、学校始まってからどうするんだ。

自ら叱咤激励しつつ、毎朝眠い目をこする。

——どちらにしても、結論は見えているな。

部活動、できるような余裕、あるわけない。

乙彦はあっさりと、かすかな希望を捨て去った。

「おはよう、さあやるぞ。関崎、昨日と同じようにまずは、掃除から始めるぞ」

自転車をこいでいる間になんとか目と身体がしっかり覚め、朝一番の「おはようございます！」の一声をかけると、久田さんはすでにエプロンをかけたまま、バケツを手渡した。からっぽ。もちろん、水を汲むところから始まる。

店外脇の水道蛇口をひねり、バケツを水で満たし、店の入り口から戸口、さらには床まで綺麗に水拭きを行う。当然、いわゆる雑巾がけスタイル。細い書棚の間をすり抜けるようにして、白い息を吐きながら店内を往復する。教室や廊下と違い、障害物が大量に積み上げられているので、そのあたり時間がかかる。古本がなぜか床に置かれていないのが、なんとなく古本屋らしくなかった。なぜなのかはわからない。

久田さんの命令に背く気もなく、まずは一仕事水拭きが終わる。休む間もなく次の指示が飛ぶ。

「バケツの水を捨ててきたら、次はその本棚をからっぽにしろ。からぶきんでその棚を丁寧に拭くんだ」

壁際の本棚から本をすべて取り出し、床に置こうとすると怒鳴られた。

「何やってるんだ！ 本に水は大敵だろう！ こういう時はまず、ダンボールを探して来てそこに入れるんだ」

「すみません」

悔しいが間違っていたのは自分だ。乙彦は言われた通りダンボールを広げ、その中に本を詰め込んだ。どうもいきなり下級生に逆戻りし怒鳴られることに慣れていない。

この一週間ほど、毎朝水ぶき掃除、最後に久田さんの言う通りに本を並べ替え、時には本の表紙を柔らかい布でこすったりと、細かな作業を繰り返してきた。

「いやー実に、綺麗だ」

両腕を組み久田さんが満足げに頷く。

どこかでこういう反り返った態度を、見かけたことがある。

「もう少し時間があれば、もっと教えたいことがたくさんあるんだが」

「教えてください」

「だが時間がない」

乙彦の補習については久田さんも十分承知していて、余計なことを口にせず送り出してくれた。だから話をほとんど交わす暇もなかった。天地創造ではないが、六日目で一段落し七日目に安息日、といった感じだろうか。

「だが関崎、君は物覚えが速い。じきに慣れるだろう」

七時半になんとか一通りの仕事を片付けた後、久田さんはレジ台の上に積み上げた古本を押しえつけながら続けた。

「俺がこの仕事を始めた頃はいわゆるぶつつぶれそうな小さな店だったんだが、なんの縁かどんどんでかくなっていったわけだ。ある意味俺が作った店とも言うな」

そういえば、六日間の間一度も、「みつわ書店」の店長さんは顔を出さなかった。

時折、おばあさんが腰をかがめて乙彦たちに熱いお茶を出すくらいだ。

実質、久田さんが仕切ることによって存在している店、と考えていいのかもしれない。

「少なくとも朝は、俺ひとりいれば十分だ」

乙彦も頷いた。ひたすら掃除に没頭している間、久田さんは古本のより分けを行い、乙彦に並べ方を指示するだけだった。そのくらいなら適当になんとかかなりそうな気はする。

「四月以降は俺が居なくても別の誰かにその辺を管理するように頼んでおくから心配しないでいい。たぶんひとりで仕切るのは来年まで待つことになるだろうし」

「ひとりで、ですか」

まだ六日間しか仕事していないというのに、なぜそんなことを言い出すのだろうか？

もちろん、期待してもらえるのは非常に心高鳴るものもあるのだが。

乙彦が戸惑うのを、にきび面の久田さんは顎で頷きながら、

「俺はこの店に来てから丸七年もの間、世話になったわけだが、ここは青大附属以上に学ぶべきものが多い場所だった。それは言えている」

「そうですか」

アルバイトが相当性に合っていたのだろう。手持ちぶたさ、ただぶらんとぶら下げたまま話に聞きいるだけ。

「関崎、君、学費のために働くと聞いていたんだが、本当なのか」

「はい、その通りです」

嘘を言うわけがない。店長さんたちにもすでに話してあっただろう。雅弘の父さんが。

「とすると、一月、三万円必要というわけか」

「はい」

もちろん計算済みだ。まだこまごまとしたものがかかるだろうが、それでも最低限月謝はまかなえるだろう。

「そうか、だとすると、この仕事を最低でも三年間は続けるつもりなんだな」

「もちろんです」

しばらく久田さんは黙った。片手で髪の毛をかきながら、エプロンからちりを払った。

「そうか、学費なんだな」

「たぶんこれだけではすまないと思うのですが、青潟市の奨学金がもらえない以上は自分で稼ぐしかないからです」

「ああ、あそこは審査が厳しいからな」

詳しくそうな久田さん。頷きながらレジ台を叩いた。

「青大附属は特に、意味不明の用途使用金が多い学校だ。面倒見がいいのは認めるし下手な塾に通うよりも学力はつくだろう。しかし、ほんとかかるぞこの学校は」

「覚悟しています。補習がなければ本当は、放課後もバイトするつもりでした」

もちろん陸上部に入るつもりはなかったし。

「同じ高一でこれだけ考え方が違うのも珍しい」

ひとりごちた久田さんは、天を見上げて溜息を吐いた。

「放課後で思い出した。もうひとりバイトがいると言っただろう。南雲とかいう、やたらしゃれのめした軽そうな奴なんだが」

「軽い、のですか」

全くそのあたり想像がつかない。もしや、総田に似たタイプだろうか。久田さんはいまいまして唇をゆがめた。

「おそらく、直接店で顔を合わせる機会はないだろうし、あいつに任せる仕事は限られている。本の受け渡しと、あとは掃除くらいだろう。まあ、あいつに俺はそれほど期待しちゃいないんで、関崎ほどみっちりとは教え込んでいないがな」

「あの、久田さんは」

乙彦は以前から疑問に思っていたことを聞いてみた。

「この店で七年間と伺いましたが、朝と放課後、全部出ているのですか」

「二年からは皆勤賞だな。授業はともかく、青大附高みつや書店科では全優もらえるぞ」

何か満足そうな顔で、久田さんは乙彦を見やった。どうやら、もうひとりのバイト・南雲よりも乙彦は気にいられたらしかった。その辺、よく、わからない。

「俺がこの店に入った頃は、店長も奥さんもまだ足腰苦勞なくてきばき動いていたんで、言われたことをそのままやるだけでよかったんだ。今の関崎と同じように、店の掃除をして、言われた通り本を並べるだけでな。ところが、俺が二年に入る春休みに」

言葉を切り、声を潜めた。

「店長が、あたっちゃったんだ」

「あたるって」

「脳卒中で倒れたんだ」

「でも、今は」

「リハビリのかいあって、少しは動けるがな」

そうか。だからあまり店には顔を出さないのか。

「品物の受け渡し程度なら問題ないんだが、朝の仕事とかができなくなっちゃった。それプラス

次の歳は、奥さんのおっかさんが倒れた」

あのおばあさんだろうか。違うらしい。

「老人が老人を介護つつうすげえことになっちまった。もちろん奥さんは俺たちが学校に行ってから店をきりもりしてくれるけど、それでも大変だろう。で、そういうわけで、実質的にバイトの俺がこの場を仕切ることになったわけだ」

「本当ですか？」

言ってみて、でも本当なのだからと改めて思う。もうひとつ疑問を提示。

「あの、久田さんがバイトに入る頃はこんなに店、大きくなかったんですか」

待ちました、とばかり久田さんは指をピストル型に整え、「ビンゴ！」と打った。

「俺が提案したわけなんだ。この店、これだけ広いのに半分以上倉庫として使っていたからそれは勿体無いってな。それだったら全部、並べるだけ並べて、本棚だけ用意して、それで売るのはどうですかってな。まあ最初は冗談のつもりで軽く言っただけなんだが、一週間後、なぜかこういう形に改装されてたってわけだ。俺の提案を丸呑みしてくれたとな」

「本当ですか」

本当だから、こうなっているのだろう。返事をせずに、しみじみ店内を眺めまわしている久田さんを見れば、答えはおのずとわかる。

「ここまで俺を買ってくれちゃ、バイト料以上の成果を出さないとまずいだろう」

久田さんはさらに思い出話を続けた。

「というかだ。バイト時間内で完璧に出来るとは考えられないわけだから、俺としては責任を感じ、さっそく売上アップを図る準備をしたということだ。まず、右側、さっき関崎にいじってもらった棚、見ろよ」

連れていかれた。丁寧に埃をはらい並べた棚には、大学の教科書らしきものが大量に並べられていた。一週間勤めてみてなんとなく気付いたのだが、この店においてかなりのウエートを占めているのは、大学と高校の教科書や参考書類だった。小説やビジネス書、その他もないわけではないが、それほど美しくディスプレイされているわけではない。

「この棚の特色を述べよ」

口頭尋問の如く、久田さんは尋ねた。

「教科書だらけ、あの、大学の」

「そうだ。大学の場合、教科書は教授の書いたものであることが多い。つまり、教授は毎年学生に教科書を買わせるのが一種の仕事のようなものだ。だがその教科書を百パーセント読むかというと、そうとは言えない。授業によっては、一切教科書を使わず教授のおしゃべりに費やされる場合もある」

「そうなんですか」

なんだか非常に無駄なような気がするのだが。久田さんが手に取った「生物学」の教科書を受け取り、ぱらりとめくり、すぐ後ろの奥付を見た。なんと定価三千元なり。

「大学には、一般教養科目というものがある。毎年同じ内容の話が教授が繰り返す場合もあれば

そうでないこともある。が、この生物学の授業については、そうそう違いはないはずだ。必然、試験内容も毎年同じ、レポート提出で終了だ。変化ないということだ」

「レポート、提出？」

ますますわからない。乙彦がわけわからなくなればなるほど、久田さんは張り切る。

「大学の授業では、中学高校と違って、定期テストといったものがないんだ。多くても前期後期にレポートを提出させるか、少なければ年に一度の試験のみ。楽といえば楽だが、厳しいといえば厳しい。復活のチャンスがないからな。ただ、青澗大学の一般教養科目はほとんどが自前の教授の授業だから、毎年内容は変わらない。手抜きともいう。どういうことかわかるか」

「わかるようでわかりません」

「正直でよろしい」

高校の授業も始まっていないのに、なにをいきなり大学の話に乗るのだろう。こちらとしては毎日、四科目の授業補習で頭がかなりオーバーヒートしている状態だということに。

久田さんは教科書を元の場所に戻し、指でつつと背を撫でた。

「今年も新生がそのまま持ち上がりという形で入ってくる。大学の入学金もそれなりに高い。なぜか制服を買わされる。そんな中で節約できるとすればどこだ？ まずは教科書だな。内容も対して面白くなく、使うこともほとんどなく、かといって買わないといろいろ面倒、となるとみな、できるだけ安く手に入れようとするだろう？」

「わかります」

「つまり、そういうことだ」

「生物学」「倫理学」「法学」それぞれやたらと分厚く、値段も相当しそうな教科書の列を眺めながら、久田さんは説明した。

「教科書を定価で買おうなんて馬鹿なことをせずに、できるだけ安く手に入れられるところを探す。しかもそれが予想以上に綺麗な状態だったらなおさら、嬉しいだろ」

「確かにそう思います」

藤沖がちらっとそんなことを話していたような気がする。なんとなくわかる。

「特にこれから四月いっぱいには大学のオリエンテーションだ。教科書を探しにくる学生が増えるだろう。となると、そういう学生のご用達ということで、売り場を用意するというのも、またありなんじゃないか？」

なるほど、そういうことか。

——教科書を売る。

買う、という概念自体まだ乙彦は受け入れられなかった。教科書とはふつう、配られるものだという認識だった。しかしよく考えると、中学までは義務教育なのだから当然としても、高校以上は希望者のみの進学なのだから、金を出すのも当然だろう。青大附属が他の学校以上に金のかかる学校だとわかっていてもだ。

だから、藤沖は参考書を古本屋で手に入れるよう助言してくれたのだろう。

「みつや書店」が参考書類などで豊富な在庫を保有しているというのも、今、久田さんが話し

たことを鑑みると納得する。

「久田さん、あの、じゃあ教科書をみな、卒業生が売りにくるのですか」

尋ねてみた。そんなに深い意味はなかった。

「そう、よく気付いたな」

いきなり褒められて戸惑う間に、久田さんは別の棚へと移り、また一冊本を取り出した。革張りの英英辞典だった。

「大学生の多くはこういっちゃなんだが、勉強なんてしない。いわばレジャーランド化しているっていうのがうちの大学だ。青潟近辺ではエリート大学だのなんなのと言われているが、一步外に出てみればわかる。こんな学校、青潟以外では学歴も能力も通用しないってな」

ま、まだ早いが、と呟きつつ。

「教科書も辞書も、試験対策で使用したらそれで終わりだ。院に進むならまだしも、とりあえずは就職したらそれで用無しだ。一冊三千円もする教科書を大量に押し付けられてだ。使わない、ゴミにしかならないようなもので場所ふさぎするのは、ふつう、いやだろう？」

「はい」

部屋が狭い我が家。切実なる問題だ。

「捨てるよりは売ってもらった方がささやかながら小金になるし、こちらはまた、必要な時に売ればいい。在庫が溜まるとまあ別の問題になるんで、できるだけ四月五月のうちに売り切る、これも腕だな」

「どうやってそうするのですか」

「店頭に並べる、こうやって綺麗にディスプレイする、というのもあるが、一番効果的なのは直接大学の知り合いに口コミしてもらい、情報を流してもらう方法だ。サークルや授業、あとそうだな、チラシとかだな。俺は授業の合間にそれぞれのクラスへ売り込みに行ったりしたが、いやほんと、爆売したぞ。去年はここに並んでいた教科書関連が一冊残らずさばけて在庫がなくなったからなあ」

「ここに並んでいた本が、すべてですか」

またも頷く久田さん。この人に限って、法螺を吹いているとは思えなかった。

——俺、ひとりでこれからそこまでやるのか？

正直、聞いているうちに気が重くなるのを感じる。

もちろん、縁があって得たこの仕事、本気で打ち込む気持ちは十二分にある。

時給以上の成果を出すのも、やぶさかではない。その点、久田さんの姿勢は尊敬できる。

水ぶき雑巾がけも、本棚整理も、まったく苦にはならない。

しかし、「うちの本を買ってください！」とばかりに、クラスメートに声かけまでしなくてはならないとは。もちろん需要と供給の関係が理解できないわけではないけれども、そこまでして売らねばならないものなのだろうか。

「まあ、関崎、そこまでやらなくてもいい。俺も就職してからしばらくはここに顔を出すつもり

だし、少しずつ教えていくつもりではいるが」

「ありがとうございます」

まだまだ久田さんも語りたりないようだったが、乙彦の補習時刻が迫っていることもありしかたなく戸を開けて送り出してくれた。ひょいと道の向こう側、少し遠めのゴミ捨て場を見やり、「あらら、また来たかあいつら」

乙彦に指差した。

「燃えないゴミの日はいろいろと怪しい奴らがうろつき出すから、注意しておいたほうがいいぞ」

「怪しい奴ら、ですか」

乙彦が覗き込むと、久田さんは指を指した。

「燃えるゴミの日も朝いるんだが、このところ結構、ゴミの中から使えそうなものを盗んでいく連中が多いんだ。最近顔覚えてるしな。捕まえようとしたらいくらでも捕まえられんだが、いかんせん法律では禁止されてるかどうかわからん。ゴミをもらってどこが悪いという価値観の連中だしな」

「ゴミを、盗む？」

乙彦にも理解できなかった。聞き返すと、

「つまり、ゴミの中から、古道具屋なんか売り払って小金を稼ぐというシステムだな。最近夜中にゴミを捨てる奴が多いから、明け方から今くらいの時間を狙って、こっそり頂戴していく輩が多いということだ。俺もかなりがめつくやってきたつもりだが、ゴミあさりまでしてものを手に入れるような姑息な真似はしたことがない。しかもだ」

腕組みをし、仁王立ちした。にらみつけるその眼差しが怖い。

「リヤカーまで持ってきて運んでいくのには参ったよな」

「ゴミ、でも、やはり、泥棒になりますか」

「なるさ。処分されるまではな」

久田さんが怒るのも無理はない。盗みは法で禁止されている、それ以上に人間としての許しがたい行為だろう。乙彦も共感したいのだが、

——けど、ゴミということは、いらぬから捨てたのであって、もし使えるようだったら拾うのは再利用ということで、問題ないのではないか。

もったいない、そう思ってもう一度使うのはかえっていいことではないだろうか。

「関崎、そうだ。自宅で大切に使うというのなら、俺も大目に見る。しかしだな」

首を振り、乙彦を押し出し、また指さした。

「あの女、覚えておけ。どうもうちの学校の生徒らしい。一年くらい前だったか、やたらと大量に大学の教科書とか辞書とか持ってきて売ろうとしたんだが、たまたま燃えるゴミの日でこっそりくすねた代物らしかったんだ。俺がたまたま見ていたのに気付かなかつたらしい。そんな姑息なやり方までして売りに来るのが気に入らなかつたんで、怒鳴りつけておっぼり返したらそれきり来なくなったが、やっぱり味占めてやがるらしい」

黒っぽい格好で、ゴミ袋を覗き込み、周囲をきょろきょろ見回しながら触ろうとしているのが

見える。顔は見えないが、確かにスカートをはいている。青大附属の制服だろう。

「俺が見ているのに気付いてないな。気付いたらさっさと逃げるんだが」

「うちの学校、ですか」

「そうだ。人間として、ゴミをあさるまで落ちたくはない。俺がこの店を出てからもしかしたら、またほとぼり冷めた頃に顔を出すかもしれないが、その時は追っ払ってやれ。場合によっては学校に通報してもいい」

「けど誰だか俺にはわかりません」

とにかく青大附属の女子であることはスカートだけで判別つくのだが、髪の毛がほぼ刈り上げに近いこと、また顔が見えないこともあって見当がつかない。

「一回、顔を見れば忘れない。あの強烈な醜さというかな、深海魚が死にそうになった時のような出っ張った目とか歯並びの悪い顔とかな。俺が店で見た時は中学の制服を着ていたから、もしかしたら関崎と同じ学年かもしれない。南雲には言っても無駄だが、関崎、もしそういう不正をやろうとしている奴がいたら、堂々と告発してやれ。万引き本を売りに来る奴らも、ゴミからあわよく金をせしめようとする奴も、この『みつや書店』には出入りさせたくない。それが、俺のポリシーだ」

言われるがまま、乙彦はゴミ捨て場にまだうろつくその女子の姿を目に焼き付けた。

はたして深海魚のような飛び出た目なのか、そのあたりは読み取れなかったが、時折丸めるその背に、なにかかしら漂ってくるのは、生ごみに近い匂いのようなものだった。

「注意します。わかりました」

戸を閉める前に、乙彦は改めて久田さんに答えた。もう一度振り返った時、すでにその女子の姿は見えなくなっていた。

バイトが終わってからの補習も、とりあえずは今日で一段落する。八時半から授業が始まり、とりあえずは昼間で終わる。その後はみな、挨拶だけして教室を出るといった流れである。

てっきり教室に固めて授業を行うのかと思っていたのだが、

——これってほとんど、個人授業みたいなもんだな。

一年A組の教室に、ごちゃっと一年生の何人かが集められ、そこから呼び出されているいろいろな場所で指導を受けるといったスタイルだった。乙彦の場合は英語科ということもあり、概ねが麻生先生対応だったけれども、他の普通科クラスの場合は数人まとめて図書室での授業とか、職員室へ連れて行かれるとか、そういう形が多いようだった。

一週間以上も通っていると、顔と名前は一致してくる。

また、中には外部生以外にも、内部進学生も混じっているらしかった。

「名倉、今日はこれで終わりなのか」

普通科の外部入学者のひとり、名倉時也に声をかけた。女子が概ねの外部入学者において、数少ない男子入学者が名倉だった。二十人くらいいる普通科入学者の中で男子は十名いるかいないかだろうか。話を聞いた限りだとみな、外部生は四クラスにすべて振り分けられているという。

「ああ。これで帰る」

「次は入学式だな」

名倉は厚い胸板を少しそらせるようにして頷いた。あまりしゃべらない男だが、二、三、質問を投げかけているうちに気心がなんとなく知れた。特にプライベートの話をするでもないのだが、あまりちゃらついたことは好きでなさそうなところに好感が持てた。居眠りを必死に堪えてほったをつねっている授業中の姿に、乙彦は惚れた。

「そうか」

すっかり忘れていたかのように名倉は呟いた。咳き込みながら鼻をすすった。あわててポケットからティッシュを取り出し、乱暴に鼻を拭いた。

「確かB組に入るんだな」

「そうだ」

短く答える名倉に、乙彦はなんとなく問い掛けた。ノートと補習用プリント、また入学式際提出予定の宿題ノートをまとめて鞆に押し込んだ。

「外部の奴はクラスでひとりかふたりか」

「いないわけではないが、よくわからん」

どうやら名倉も乙彦と同じく、女子とあまり関わりを持ちたくないタイプの奴らしい。乙彦の記憶している限り、確かB組には外部入学者があと五名ほど入るらしいと聞いている。男子は名倉ひとりだけのはずだった。たまたま乙彦は自己紹介のチャンスを与えてもらったということや立村と付き合いがあったこともあって、ふたりの女子と会話するはめになったけれども。おそらく名倉はこの学校にさほど馴染みがないのだろう。

「知り合いがないから、一から構築していくのは大変だな」

乙彦はひとりごちながら、教室を出て行く他の連中に手を挙げて挨拶代わりにした。女子たちも乙彦を無視したいとは思っていないようで「おはよう、おつかれさま」くらいは言ってくれる。だが、名倉はどうもそのあたりの挨拶になれていない様子だった。

「いないわけじゃないが、それも面倒だ」

ぼそっと名倉は呟いた。

「知り合い、いるのか？」

「いる」

短く答えると名倉も荷物を鞆に詰め始めた。

「いるが、話をそれほどしたい相手ではない」

「そうか」

要するに友だちではないということだ。そういうのはよくあることだ。

「中学時代の知り合いとか、そんな感じか」

「ともいえるし、違うとも言う」

齒にももの挟まった言い方をする。

「そうか、それは大変だ」

人それぞれ事情があるのだろう。それは乙彦の知ったことではない。しかし、大変だという共感のみする。

「関崎はこの学校に友だちが、いるか」

どうも名倉の口調は、不自然に途切れがある。補習が始まった当初から気になってはいた。

「いる」

広義で言えばオリエンテーションで出会ったばかりの藤沖も対象となるだろうし、厳密に言えば立村は一年以上の付き合いである。だからそう答えた。

「そうか」

「だが女子たちのように無理やり親友作りをする必要はない」

「もっともだ」

乙彦の断言口調に我が意を得たりと思ったのか、名倉は大きく頷いた。教室を出て、しばらく黙ったまま歩いた。雅弘のようになにかかしらべらべら「おとひっちゃん、あのさあ」とか喋りつづける奴はそういないが、それでもまたよしと思う。男とはそういうもの。女子とは違う。

「ところで、聞きたいが」

また奇妙な口調で名倉は顔を乙彦へと向けた。それまでは真正面を向いていたのに、いきなり身体を傾けるようにした。

「なんだ」

「英語科を選んだのはなんでだ」

「たいしたことじゃないが」

いきなり問われても困る。一応、乙彦はオール5の成績だったこともあり、とりたててどこに進みたいとも思わず、なんとなく選んだというのが本当のところだ。もっとも、語学も嫌いでは

ないし、むしろ英語を完璧に使いこなせるようになれば、大学進学にもプラスになるだろうと考えたからだった。今のところ、そのくらいか。

「特に、何になりたいとか、そういう目標はないんだな」

とぎらせつつ名倉は呟いた。

「これから探していくための三年間だと俺は思う」

「そうか」

「名倉は、あえて普通科を選んだのか」

また正面に目を据え、名倉は頷いた。

「医学部に進むには、理科、数学、この二科目を勉強しないとまずい」

「医学部って、お前、医者になるのか？」

思わず問い返してしまった。しかも、全く戸惑うことなく頷き返す名倉にも仰天した。正直、名倉のような妙な雰囲気をもつ医者にかかる勇気が、今のところ乙彦にはない。悪い病気見逃されそうじゃないか。ぼーっとしているようにみえるから。適性適所の問題じゃないだろうか。もちろん思いついただけでまだ口には出さなかった。

「うちは金がないから、医学部の専門高校には進めない」

いきなり名倉は、またわけのわからないことを言い出した。医学部の専門高校とはなんなのかもわからない。第一、青潟にあるのだろうか？

「だが、青大附属ならなんとか入ることができる」

——おい、青大附属の月謝と入学金ならたいしたことないとも言いたいのか？

バイト料一ヶ月三万円を月謝に振りむける予定の乙彦には聞き捨てならない発言でもある。

「理系を目指せば、医学部は受けられる。歯科医でもいい」

「おい、でもなんで」

生徒玄関に出て、すのこで靴を履き替えながら、名倉はわけのわからぬ顔で、きっぱり断言した。

「医者になれば、医者の嫁さんをもらえると聞いた」

——医者の嫁さん？

名倉の言葉をそれ以上深追いせず、乙彦は校門で分かれた。いや、まったく理解できない。一週間同じ教室で、暇な時に話した程度ではあるが、あの朴訥でぼんやりした雰囲気の名倉が、すでに進路を定めているとは。しかも、どう考えても信じがたい「医者」を目指しているとは。もちろんそれにはそれなりの事情があるのだろうが、

——医者になれば、医者の嫁さんをもらえるからか？

まったく持って、理解不能である。しかも、青大附属程度なら学費はまかなえるけれども、世の中にはさらに医学部専門で勉強する高校があるらしいとも言う。これもまた、乙彦には理解しがたいことのひとつだった。

——よくわからない。

とはいえ、名倉は決してむかつくタイプの男子ではなかった。

ぼんやり話を聞いていて、鼻を時折ティッシュでかんだりしているせいか、女子たちからの覚えはお世辞にもいとはいえないようだが。男子として付き合う分には、これからいろいろ話をしてみたい奴でもある。なによりも高校入学の段階で、やりたいことが決まっているのは素直に尊敬できるではないか。

——俺も、この三年間で、探し出さねばならない。

改めて乙彦は、まだ雪の残る水色の山々を眺めた。足元だけじゃない。月謝のことだけじゃない。もっと、先を見据える必要が、あるはずだ。

この日はもうひとり、会う約束をしている奴がいた。

補習最終日の昼間、大学校舎の学食で待ち合わせるようになっていた。

行き方は間違えない。さっそく乙彦は鞆を握り直し向かうことにした。

なんでも、大学の教授に呼ばれていると聞いている。名倉といい、そいつといい、全く乙彦の知らない世界を知っている奴らばかりだ。

そいつはすでに、人の少ない学食前にて、文庫本らしきものを開き壁にもたれていた。

乙彦はすぐに、駆け寄った。

「立村、遅くなり悪かった」

顔を挙げ、立村ははにかむような笑顔を向けた。少し遠慮がちに見えた。

「いや、俺の方が早すぎたからさ。それはそうと、どこかで食べようか。なにか買っていくか」

「パンとかそういうもんがあればそれでいい」

納得顔で立村も頷いた。何度か立村とは学外で会い、その際も缶ジュースとコロケの買い食いにして止めていた。青大附属の連中とは補習期間中何度か食事をする機会があった。親にも「おとひっちゃん、あんまり貧乏くさいことしなさんな」とたしなめられていたこともありそれなりに付き合いしたが、定食三百円なんて高いものを毎日食うほどの余裕はなかった。

「それならさ、俺の知り合いの店で、ただで食べさせてくれるところがあるんだけどさ。あんみつとかそういう甘いものしかないけど、それでよかったらそこいくか」

「あんみつ？」

腹はすいている。もちろんあんみつで満たされるとは思えない。さらに言うなら立村のおごりというのもひっかかる。いくら経済状況が乙彦より恵まれているとはいえ、同じ十五歳の財布事情、わからなくもない。立村は首を振りながら、少しずつ学食から離れて歩き出した。

「いや、そういうわけじゃなくてさ。親の繋がり、いつもただで食べさせてくれる店が学校の裏にあるんだ。そこでよく、俺も友だちと話す時、食べるから特に問題ない」

「でもな、そういうものはやはりきちんと支払わないと」

「俺も払ったことないよ、その店では。それに」

言葉を切って、ちらっと上目遣いに立村は呟いた。

「少し関崎にも話しておきたいことがあるからさ。学内だといろいろさしさわりがあるしさ」

——要はそのあたりか。

前から気になっていたけれども、忘れていたことがいくつか思い出される。

あまりべたべたこっそりというのは乙彦の流儀に反するが、今回に限っては立村とじっくり話すのも悪くはあるまい。

「わかった。じゃあ、今回はごちそうになる。ありがとう」

少しほっとした風に、立村の肩が静かに動いた。

前から気にはなっていた。なぜ、立村が英語科で少しずつ浮いた存在だったのかを。

古川こずえからある程度の事情は聞いていたし、さらに藤沖との不自然な態度などもいろいろと考えさせられるものがあったから。

しかし、立村本人が取り立てて言い訳をしない以上、周囲が一方的に言い募っている内容を鵜呑みにするわけにはいかなかった。特に、今後のことを考えるとするならば。

——女子のように誰が好きとか嫌いとかそういう問題は抜きにしても。

——同じクラスである以上、妙ないじめとかそういう流れに与するのは抵抗がある。

連れていかれたのは、学校裏の林を抜けたつきあたり道の側にある「おちうど」という小さな喫茶店だった。喫茶店、というのは語弊があるかもしれない。見た目はいかにも明治・大正あたりの和洋折衷建物といった感じの、お嬢さま雰囲気。どう考えても乙彦がひとりで足を踏み入れたくなるものではない。また「おちうど」という言葉自体も、習字のくずし字のような感じなので、読める奴読めない奴、それぞれいるんじゃないかとも思う。

「本当に入っていいのか。それに、本当に」

ただで食べられるなんて、そう聞きたかった。ぼったくられそうな予感がした。

立村はまたはにかむような笑みをうかべて首を振った。

「小学校くらいの頃から、手伝いすることが多くてさ。その関係で、バイト料代わりにただで食べさせてもらっているんだ」

「バイト料か」

「親の関係でなんだけどさ」

それ以上は説明せず、立村が引き戸を開けた。最初に猫の通り道程度にあけ、次にそろそろと開く。なんというか、礼儀正しいのは悪くないのだろうが、立村がやるとどうも弱々しく見えてしまう。腰をかがめて入る必要もないのに、そうしないと怒鳴られそう。立村の後について、乙彦も続いた。

「いらっしゃあい、あら、かあさくん」

「こんにちは。今日、席、空いてますか」

遠慮がちに尋ねる立村。戸口からすぐ目の前には濃い緑色の着物を来たおばさんがレジ裏に立っていた。いかにもこの店のおかみさん、とわかる。向かって左側の客席を覗き込んでみると、やたらくしゃくしゃした女子っぽい感じのテーブルとソファが並んでいた。日本風なのはわかるのだが、やたらと金色が目に入るのが落ち着かない。基調は黒なのに、花柄がソファにあし

らわれていたりしているせいかもしれない。場違いだ。

「かあさくんのためにちゃんと開けてあげるわよ。今日は、いつものお嬢さんじゃないのね？」

「友だちです」

いきなりぶっきらぼうな口調で答えた立村だが、乙彦と目が合うやいなや、すぐに声を和らげた。

「じゃあ、好きな席選んでいいですか。奥のソファで」

「いいわよいいわよ、遠慮しないで」

客なのだから遠慮する必要はないと乙彦は思う。しかも顔なじみなのだからもう少し背をぴんと伸ばして挨拶したっていいだろうに。どうも立村は何事においても腰が低すぎる。このあたりがいろいろとトラブルを起こしている原因なのではないだろうか。

乙彦はおかみさんに一礼すると、立村の後ろについて最奥のソファ席に向かった。やたらときんきらきんが目立っていた席だ。しかもわざわざついたてまでついている。せせこましいことである。

腹持ちのよさそうな食べ物はメニューになかった。立村の勧めもあり、ずんだ餅セットと冷たい番茶のセットを頼むことにした。それだとサービスでデザートがつくらしいのだが、それもあまり期待できそうにない。

——こんなだったら学食の定食の方がよかったんじゃないだろうか。

それでもせっかくご馳走してもらう以上は、お礼を言わねばならない。

「どうもありがとう」

もう一度頭を下げると、向かいの椅子席に腰掛けた立村は、

「口に合わなかったらごめん」

また自信なさげな声で頷いた。礼、に近い。

「青大附属の関係者に聞かれたくなかったからさ、ちょっと」

なにがだろう、とは思う。しかし思い当たる節がある以上しかたない。立村がおかみさんにずんだ餅セットとぜんさいセットを頼んでいる間、乙彦は改めて立村の顔を観察してみた。こうやってまじまじと、義務感持って眺めるのは初めてだ。

——なんてっかその、もっと堂々とできないもんか。

もともと背はそれほど高いほうではないし、色も白い。髪型も特にあやをつけているわけではないのだがきちんと整えられている。それに、

——なんでこんなにきちんとシャツにアイロンかけてるんだ？

立村が父子家庭育ちという話は、何かの折りに聞いていた。諸般の事情で家事一般はすべて請け負っているとも。だが立村の折り目正しい制服姿は、どう見ても男がひとりで整えたものには思えなかった。

神経質な性格らしいとは前から思っていたが、男子のくせに何も汚れのない格好というのは、絶対にありえないものだ。乙彦も同じ制服とコートだが、すでに裾には泥が跳ねているし、袖口も少し黒っぽくなってきているのがわかる。

注文を取り終わったおかみさんは、乙彦にもまた笑顔を向け、下がっていった。

立村が口を切ったのは、数秒の沈黙の後だった。

「もう噂では聞いていると思うけど、最初のうちは表だって俺と話をしないほうが、いいかもしれない」

——こいつ、ちゃんとその問題は片付けたらろうが。

藤沖、古川からすべて話は聞いている。特に古川こずえの語る話については、いろいろと考えさせられるものもある。だがそれは、すでにオリエンテーションの中で片付けたはずだ。乙彦は一年A組の教壇にて、きっちりと、立村との繋がりを伝えたではないか。少なくとも、いやがらせやいじめらしきものは、受けていない。要するに、どう付き合おうが問題ないということじゃないだろうか。

「そんなこせこせしたことをする気はない」

「関崎はすごいと思う。俺も、感謝している」

一度、立村は持ち上げるように続けると、

「だけど、関崎の今後、青大附属で生活していく上では、俺と話をする機会が多いというのは、マイナスになると思うんだ」

「それはどうしてだ。評議委員長を落とされたからか」

「やはり知ってるだろう」

俯き、視線を逸らす立村。どことなく腕と背中が痒くなってくる。

「何か、トラブルをクラス内で起こしたからか。確か、宿泊研修だからで」

「その通りだ」

「卒業式に、何かやらかしたからか」

「もうそこまで知っていれば、言うことないだろう」

完全に俯き、立村は一度呼吸を整えるように胸のあたりを叩いた。その仕種がどことなく女子っぽくていらいらした。

「中学から持ち上がってきた生徒は百パーセントとっていいくらい俺の失態を知っている。もちろん俺はそのことについて言い訳する気もない。俺が無能だからしかたない。だけど、それで周りの人たちがいやな思いをするのは申し訳ないというか、嫌なんだ」

「周りの奴らが嫌な思いをしたと、どうして決め付けられる？」

問い詰めた。どうもささやくようなこの口調といい、自信なさげにいじけているその姿が気色悪い。

「嫌な思いをしたらその段階で言う。その時にお前が直せばすむことじゃないか」

「いや、理屈じゃないんだ。一応、同期の男子はみないい奴で、俺のことを嫌わないでくれている。それはそれでいいんだ。だけど、女子と下級生には、毛虫のように嫌われていると言っている。これは感情の問題であって、理屈で説得できるようなもんじゃないんだ」

「もちろん、好き嫌いというものはあるだろうが」

乙彦もそこまで言って、ふと黙った。そうだ、水鳥中学副会長・天敵かライバルか、水と油か

、あの総田に対しても乙彦は同じ感情を持ったはずだった。

「だが、それはそれ、これはこれだろう」

熱い番茶の注がれた湯飲みを片手で握り締め、乙彦は続けた。

「人間同士の相性はあるにしても、同級生としてやっていく以上は、それなりに話をしてくださろう。そこまで腐ったクラスには思えなかった。俺の目では、だが」

「関崎、お前、人間として、出来すぎてるよ」

立村は手をテーブルの下に隠し、俯いたまま首を振った。

「何度も言うようだけど、俺は今までやったことにおいて後悔はしてない。担任には嫌われたし、下級生たちや女子全般には軽蔑されている。それに関しての責任は取る。だけど、関崎はまだ俺が青大附中時代に何をやらかして嫌われたか、正確なことをたぶん知らないだろう？ 噂では聞いていても」

「古川からは聞いたが、決して馬鹿にするような言い方ではなかった。むしろ、友情の一環に思えたが。もちろんおせっかいな女子はいろいろと面倒なので、ある程度距離を置くべきだとは思うが」

あえて、下ネタの嵐だった内容については伏せた。「自家発電」なんて昼間の言葉じゃあないだろう。話をした限り立村もそれほど下ネタの会話が得意なほうではなさそうだ。

立村は少し顔を挙げ、口許をほころばせた。

「古川さんの言うことは正しいよ。あの人は、いわば俺にとって、姉さんみたいな人だからさ」

「姉さん？」

「そう、俺にそっくりな弟がいるって話してたな。ご愁傷様としか言いようないけどな」

全く想像がつかない。どうでもいいので話を飛ばした。乙彦なりに、言うべきことは確かにあるような気がした。

「立村、お前の言う通り、俺は正確なことを知らない。だが、それがなんだというんだ。俺は自分の目を見たことを信じるが、悪意のある噂話は聞き流したい。少なくとも古川はお前の味方に思えるし、さらに言うなら他にもいろいろとお前のことを応援してくれる奴がいると聞いている。もちろん、気の合わない奴がいるならそれはそれでしかたない。だが」

もう一度、思い出したのは総田幸信。ガクラン裏に縫い取りの龍を施した姿。

「怒鳴り合っても、罵り合っても、もちろん憎み合っても、かならずどこか、通じるものが見つかる時がある。俺はそれを、自分で経験している。絶対にこいつとは地の果てまで嫌い続けるだろうと思っていた奴を、理解できる瞬間がある」

「どうしてそう断言できる？」

少し癪に障ったようだ。立村がぐいと、乙彦を見やった。手ごたえありだ。続けた。

「交流会で会ったことあるだろう。俺の同期で、水鳥の副会長をやっていた男」

「確か総田、とか言ってたな」

覚えていたらしい。なら話は早い。

「俺が生徒会副会長をやっていた頃、俺とあいつとは、天敵同士だった。絶対に受け入れられないタイプの奴だった。考えても見ろ、あいつは生徒会役員のくせに制服着くずすわ、風紀を乱す

ようなことやらかすわ、酷かったんだ。女子をとっかえひっかえして付き合ったり、またいろいろ、手抜きをしたがるようなことを、やらかしたりと」

「なんとなくわかるような気がする」

話の方向が変わってしまったせいか。つい一瞬前の挑むような眼差しが消えていた。

「だが、任期が終わり、生徒会から離れて、あらためて後輩たちの活動を見守っているうちに、俺はひとつ、大きな間違いを犯していたのだと気付いたんだ」

「大きな間違い？ 関崎がか？」

気弱な口調で、それでも尋ねてくる。まだずんた餅セットは来ない。

思うことを、食べ物到着の前に告げてしまおう。

「お前も知っているだろうが、水鳥中学の生徒会長は、内川といって一年時からの続投だ。かなり無理やりなやり方だったと思うが、俺は最初、あいつの後ろについて、最初の一年いろいろ手伝ってやればよかったと思うていたんだ」

あのひ弱そうな、今日の前にいる立村よりもおどおどしていた内川。

「関崎先輩、俺、そんなの無理です、生徒会長だなんて」とかうるうる眼で訴えていたような奴だった。陸上部ではいつも最下位。そんな奴だけでも、生徒会で改めて鍛え直せばきつと思いやりのある……総田よりも常識のある……生徒会長として育つだろうと見込んだからだった。

しかし、読みは外れた。乙彦にとっては屈辱ながらも、生徒会にとってはいい方に。

「内川が自分の意志で生徒会をひっぱっていくようになったのは、俺が手取り足取り教えたからじゃないと、認めるしかなかった。総田があいつに、自分の力で好きなようにやれと突き放したから、なんだ。あいつに自信をつけたのは悔しいが、総田だったんだ。俺じゃなかったんだ」

もう過ぎたことで、痛みもなく記憶が甦る。むしろ、さらりとした風のようなもの吹く。

「いろんなことがあったし、俺も三年後半は受験勉強一色だったから、総田に伝えることはしなかった。だが、もし今、あの頃にタイムスリップできるのなら、俺はもっと総田と正面から向きあって、話をしていくことができたはずだ」

「それは関崎だから出来たことだよ」

また、恨めしそうな眼差しに戻る立村。

「どうしてそう決め付けられるんだ？ 立村、お前が何をしたかは正直、どうでもいい。過ぎてしまったことだ。今タイムスリップを例えに出したが、現実問題 そんなものは使えない。俺ももう、総田と顔を突き合わすことはないだろう。だが、これから先、新しい場所でやり直すことはできるはずだ。少なくとも俺は、ふたたび総田のようなちゃらちゃらしていて軽そうに見える不良と出会ったとしても、中学時代のようなガキくさい行動はとるつもりはない」

「関崎、それはお前だから」

「いいかげんにしろ！」

声が思わずでかくなる。まずい、幸い人は誰もこちらを見ていない。ずんたもちもまだだ。ひくっと肩を竦める立村を目の前に、押さえることができず乙彦は立ち上がった。両手をガラスのテーブルに置き、立村の弱弱しいまなざしを見据えた。

「俺だから出来たと勝手に決め付けるな！ 立村、俺がお前のことを、過去のひとつやふたつ知ったからといって、見下すような人間だと思ったのか！」

また、立村は俯いた。首を小さく振った。

——だから、そういうところが女々しいっていうんだ！

いや、この言葉「女々しい」は正しくない。

青大附属の女子は「頭の回転が速く気の強い」ことで知られると藤沖は話していた。だから決して、「女」の特許ではない、この態度。

「嫌われたとしても、それがなんだっていうんだ！ 中学のことがどうであっても、関係なくしゃべる奴はいるんだろ？ それならそれで十分じゃないか！ 俺はそのうちのひとりでありたい。それが悪いか！」

もっと言うべきことはあるはずなのに、言葉が籠った。

立村がおそろおそろといった風に顔を挙げ、もう一度首を振った。

「関崎、本当に、俺と表立って話をするということは、損をするんだ。俺と関わることによって、俺は」

か細く、今にも消えそうな声で、それでも立村は乙彦の眼を見上げた。

「中学で、全校生徒から嫌われる生徒を、作ってしまった、これは事実だ」

「そう断言できるのか？ できないと思うぞ」

「できる。だから言うんだ」

立村はもう一度、震える声で言い切った。

「俺はもう、他の誰にも、嫌われ者なんかになってもらいたくないんだ、関崎」

——ふざけるな、こうなったら意地だ。

乙彦はテーブル越しに立村の顔面近くまで顔を寄せた。

「悪いが俺は、お前の提案を受ける気はない」

片手をこぶしにし、もう一度テーブルを叩いた。もちろん、響かない程度に押さえた。立村の表情におびえが走った、それを乙彦は確かに見た。

ようやく、ずんた餅セットとぜんざいセットが熱いお茶と一緒にテーブルに運ばれてきた。

「まずは水入りだ」

目の前でまだ手つかずのまま、項垂れている立村を尻目に、乙彦はすきっ腹にみどり色のずんた餅を放りこんだ。思ったよりもどんぶり一杯、量があった。うまかった。

すでにオリエンテーションを通じて実質的入学式は終了したものだと思っていた。

それゆえに、朝バイト後に出席した入学式に対しての感慨は全くといっていいほどなかった。感じようがなかったといった方が正しいだろうか。

「どうだ、関崎、入学式を迎えるにあたって感想は」

一年A組の教室で二度目の整列を行っている間、麻生先生が何気なく声をかけてきた。

「はい、嬉しいです」

とは答えたものの、やがて始まる入学式の内容にはあまり興味を持てなかった。

「……これだけか」

両親も本当は入学式に参列したがっていたのだが、乙彦のたつての頼みで結局来なかった。

別にいい歳して親にくっついてきてほしかったわけではなく、立村を通じて青大附属高校独特の入学式ムードを聞いていたからだった。まさにそれは正しかった。

「まあ、この学校の場合だと、基本として内部持ち上がりの生徒が九十パーセントを占めるわけだから、入学式といってもそれほど厳粛なものはないだろう」

後ろで藤沖が丁寧に注釈をいれてくれている。

「その残り十パーセントの立場はどうなんだ」

「しかたあるまい。すでに馴染んでいる奴に今更派手なもてなしをしても、他人行儀な気がするだけだ」

言われなくてもわかっている。すでに乙彦は、「新入生」「外部入学者」というレッテルを半分はがしかけたくらいに、1Aの中で馴染んでいた。少なくとも自覚としてはある。

「一応、校長と青潟の教育委員長挨拶と、あとは在校生挨拶、新入生代表挨拶か」

「そうだな。本当の意味での在校生挨拶は、来週の対面式だろう。こちらはかなり燃える」

「そういうものなのか」

藤沖は含みをもった言い方で、乙彦に頷いた。

「お膳立てされた話なんか聞いたところで何が面白いというんだ。それよりもそろそろ、関崎も覚悟を決めた方がよさそうだ」

「何を？」

ちょうど教育委員長の祝辞が終わった直後だった。私語を交わしていても目立たずにすむくらい、体育館内はざわめいていた。

「明日のうちにクラス内の委員を選出することになっているのは知っているな」

「聞いてはいるが」

立村、および古川から流れは聞いていた。しかし、もう半分内部生で決定しているという噂だが。乙彦がそう言いかけると、

「男子規律委員のポストが空いている。そこにもぐりこむがいい」

また、ざわめきが止んだ。乙彦もさすがにこれ以上私語を慎んだ。

——規律委員のポスト？

——だが、古川が話していた通り、評議委員は藤沖と、古川のふたりと聞いていたが。

中学時代から学級委員と生徒会役員以外の「役付き」となったことのない乙彦には、今ひとつぴんとくるものがなかった。いわゆる「規律委員」とは水鳥中学で言う「生活委員」とイコールであると聞いている。と、するならば。

——違反カードを切ったりするわけか。

正直、あまりそういうのは好きではない。

ぎちぎちの校則遵守野郎と馬鹿にはされてきたけれども、乙彦にはそれなりの美意識があって、それゆえに徹していただけだった。決して周りの連中が揶揄するような「教師へのおもねり」なんかではなかった。しかし、生活委員ともなるとその評価から逃れることはできないだろう。それよりもむしろ、評議委員のようにクラスをまとめ、意見を吸い上げ、一年A組に活気をもたらす立場の方が自分には向いているような気もする。

ここまで考えて、乙彦は苦笑した。

——俺はやっぱり、上に立ちたい人間なんだな。

まだ入学したばかりだというのに、クラスの今後など真剣に考えている。

——この学校でなんとか授業についていけるようになるまでは、勉強のことだけ考えるところか。何よりもこの学校で、奨学金なり特待生なり取らないとなんないしな。

経済観念からくる今後の計画は、次のアナウンスで霧消した。それどころではない。

「在校生歓迎の挨拶。三年A組、結城穂積」

——おい、あの人か！

黒ぶち眼鏡で真四角の頭が、遠くからもよく見える。大柄ながらもどこかずんぐりむっくり体型のせいか、こぶりに映るのは気のせいか。乙彦がぼかんと眺めているうちに、壇上で結城先輩はマイクを丁寧に直し、全校生徒に向かってにやっと笑った。

「新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。私、青潟大学附属高校三年A組、結城穂積と申すものです」

——いいのか、あんな砕けた言い方で。一応、この場は入学式だが。

どう考えても結城先輩の口調は、厳粛な場にふさわしいものではないように思えた。なによりも笑顔がいけない。乙彦もつい先だって、水鳥中学の卒業式で答辞を読んだが、さすがに笑う余裕はなかった。それは礼儀に反していると感じたからだった。もちろん送辞を読んできた内川も、意味不明のにやにや笑いなどはしなかった。義務として、きちんと緊張したまま読み終えたはずだ。

「何人かのみなさんにはすでにご挨拶済みかと思いますが、ほとんど顔なじみ、といったところでしょうか。ここでは堅いこと抜きで参りましょう。先生方、少々僕に、お時間をいただければと存じます」

——一応、了解を得てるわけだ。

これが水鳥中学だったら誰かが止めに入っただろうに。

信じがたいが、教師たち……麻生先生も含めて……みな、穏やかに微笑んでいる。これでもいいのか。いいのだろう。身体が妙にこそばゆい。

「と、いうことでまずは青大附中から附高に進学するにあたり、一番変わっていく部分はどこかといいますと、まず先生たちの対応ですな。これ褒めてるんですよ。いいですか」

結城先輩は軽く言っただけだ。

「今まで中学では、みな頭をがっちり押さえつけられ、なんでこんなに規制されねばならないんだといらいらしていた人も多かったでしょう。私事で恐縮ですが、僕は中学時代、かの悪評高い評議委員会長を務め、しっかりと『委員会最優先主義』なる定義をこしらえて参りました。それでみなさん、おそらく、かなり、大迷惑を被ったのではないかと思います。その辺はこの一年できっちり償わせていただきますんでお許しをば」

——償うっていったい。

全く持って、この結城先輩という人の全体像がつかめない。

もちろん、立村から結城先輩が青大附中時代基礎となった「評議委員会最優先主義」の提唱者であることは聞いていた。かなりの変わり者であることも。またアイドルグループ「日本少女宮」の熱烈なるファンであることも。

だがなんで、そんな恥ずかしくなるような自分をさらけ出せるのだろう。

少なくとも乙彦の知っている男子で、好きなタイプの女子について語るができる奴は、そうそういなかった。かの問題野郎だった総田幸信だって、さすがにアイドルについては燃えていなかったはずだ。

「まずみなさん、中学時代はそれぞれ委員会活動、もしくは生徒会活動に燃えておられたことと思います。んで、その肩書のある人はしっかり握り締め、またある人はスタートダッシュで出遅れてしまったことに対してめげている人もいるのではないのでしょうか。まあ、青大附中の委員会はいわゆる部活動と一緒に、一年前期に選ばれたものが大概は持ち上がりとなり三年間過ごすのが定説。二年以降にデビューしたい人たちもですね、これだとよほどの理由がない限りめぐりこめずに不完全燃焼つう人も、多いことでしょう」

——それは聞いていたが。

すでに立村が前もってレクチャーしてくれたことではある。あるがしかし、来賓も聞いている中そこまで語る必然性が理解できない。

「はっきり申し上げます。今まで積み重ねてきた『委員会』であり『生徒会』およびすべての部活動における肩書は、たった今の段階で、全部、消去しました。そう、今ここに並んでいる新入生のみなさんは、内部進学生も、外部からはるばるやってきたみなさんも、みな同じスタートラインに立つわけです」

ちらと、乙彦の方に視線を向けられたような気がした。気のせいだろうか。

「それはすなわち、くだらないプライドやエリート意識など、どこかの世界におっぼっとなっていて、頭を真っ白くした後に、再チャレンジしていただきたい、そういうことです。いやあ、青大附属という学校は、先ほど校長先生およびご来賓のみなさまからお言葉を頂戴した通り、

青潟のエリート養成学校だと言われております。僕にその自覚は残念ながらございませんが、おそらく第三者からしたらそう見えるのでしょう。それは誇り、なのでしょう」

ちくっと刺さる。その言葉。おちゃらけているようで、何かが響く。

「もちろん、青大附高生である誇りは持つべきでしょう。しかし、天狗になってはいけません。それは僕も日々、強く感じていることなんです。新入生諸君、君たちは確かに難しい勉強をして、試験を乗り越えて入学してきたわけですが、おつむの程度がイコール、人間性と繋がらないこともみなご承知でしょう。自分たちがいわゆる『選ばれたエリート』だなんていう勘違い意識をできるだけ早くとっばらって、自分をゼロの状態に一度持っていて、この三年間もう一度自分を見つめなおそうではありませんか！」

——この人、結構真面目なこと話しているかもしれない。

だんだんこの人がわからなくなってきた。真面目なのか、それとも純粹に「アホ」なのか。

「非常に喜ばしいことですが、青大附高には今春、新しく仲間に加わってくれる外部入学者のみなさんがいらっしゃると聞いております。これは嬉しいですよ。やはりね、こうやって新しい息吹が芽生えていくのを観るのは、おじさん、もとい、先輩としても非常に喜ばしいことでもあります。そうそう、最後に、外部入学者のみなさん」

また、乙彦に視線が向けられた。首が露骨に向いていたから確実だ。

「この学校の誇ることができる点をひとつ、申し上げておきましょう」

前置きがわざとらしい。

「男女問わず、青大附属の生徒たちは、先輩と後輩との関係が密です。一步間違うとこれは危ないのではないかと思われんばかりに、ですね。ですがこれを利用しない手はないでしょう。この学校の二年、三年連中はみな、新入生諸氏に対し、自分の得てきたノウハウを一刻も早くつぎ込みたくてならなくて、うずうずしているはず。ということでみなさん。お付き合いのある先輩がいる人はその人から、誰もいなかったらとっかかりは僕、結城からでもどうぞ、ぜひぜひコミュニケーションを取ってみてくださいな。いわゆる、上級生のしごきとかいじめとか、そういう卑劣な人間関係だけはないと、そういう誇りは持っている学校ですんで、そこのところ、みなさま、よろしゅう！」

一礼した。こぶしを挙げて満足のポーズ。

——やっぱりこの人、すごいかもしれない。

乙彦が呆然と壇上を眺めている間に、生徒たちの嵐のような拍手が館内を埋めていった。驚くべきことに、教師の一群も笑顔で拍手を送っているではないか。

——というか、この学校、やっぱり、変すぎる。

「結城先輩は、青大附属中学における『委員会最優先主義』を打ち立てた人だというのは、聞いているか」

聞いてもいないのに藤沖が耳元で囁いた。乙彦も椅子に腰掛けたまま振り返った。

「ああ、一応」

立村から、とは言わずにおいた。

「その弊害が、俺たちの代でいろいろあったわけだ。たぶんそのざんげだろう」

「弊害とは？」

「じきにわかるだろう」

それ以上藤沖はつまこんだ話をしなかった。

「俺が他の先輩たちから聞いた話だと、中学とは違い高校では毎回、民主主義にのっとりやり方で委員を選出しているという。なぜかわかるか」

わかるわけがない。首を振るのもしゃくなので黙っていた。藤沖は続けた。

「附中時代のやり方がまず通用しないシステムが組み込まれているからだ」

「システム？」

「つまり、トップの委員長がこれは、と思った生徒を指名して次期委員長に任命するといったシステムが、附高の場合通じないようになっているわけだ」

「なんでだ？」

「まず、附中時代と違うのはクラス分けだろう」

なるほど、腑に落ちた。英語科という特別クラスがあるわけだから、それは当然だろう。

「つまり、高校だとばらばらになるから、ということか」

「そういうことになる。附中ではよきにしろわるきにしろ、三年がみな持ち上がりという形となっている。もちろん英語科もそういう流れなのだが」

藤沖は言葉を切り、くるりと見渡した。

「附高の場合、普通科限定だが、毎年クラス替えがある。委員は毎回、選ばれ直されなくてはならない。よって、三年連続同じ委員で上がるのは難しい。もちろん英語科を除く、がな」

——そういうことか。話はよくわかる。

乙彦はすぐに飲み込んだ。立村から前もって聞かされていた青大附中独特の制度、「委員会を部活動化」は、プラスの面もあるけれどもやはりマイナス面も多大だったのだろう。それゆえに立村は評議委員時代、生徒会への「大政奉還」を行ったといわれる。もっとも最終的にそれを完結させたのは、後期評議委員長だった天羽だとは聞いている。

「クラスも、どうやらそれを意識して組み替えたいらしいな」

またも、藤沖は知った風に呟いた。よくわからない。

「どういうことだ？」

「この学年の一クラスに、なぜか元評議委員が全員組み込まれている」

「言っている意味がよくわからないが」

「つまり、C組だ。あのクラスには天羽、難波、更科、轟、といった名物評議委員たちがみな詰め込まれている。しかも極めつけが南雲までいる。ああ、悪い。関崎、どこまで名前を知っているかわからないんだが」

「いや、だいたい」

天羽が立村の後を引き継いだ評議委員長で、難波がやたらと理屈っぽい議論をけしかけてくる奴で、更科が周囲を和ませる愛嬌のある奴で、というくらいは覚えている。しかし女子は……轟ってだれだろう。乙彦の記憶では他にももっと女子がいたような気がするのだが。確か清坂美里

はB組と聞いていたはずだ。

「ああ、清坂は例外だ。C組には羽飛がいるからな」

確か古川との会話で出てきた苗字だった。

「清坂は羽飛と仲がいいからな。先生たちもいかげんそこらで引き離さねばと考えたのだろう」

「そういうことを考えるのか」

まったくよくわからない。いや、教師たちの発想が、ではない。

——そこにたどり着く、藤沖の推理能力が。

「まだ女子評議はいたような記憶があるのだが」

「いたが、やめた。もしくは消えた」

急に藤沖の口調が、冷えたような気がした。

「関崎も最初のうちはその辺に触れずにいたほうがいい。トラブルになるだろう」

饒舌だった藤沖が、急に黙り込んだ。同時にアナウンスが流れた。

「新入生代表、轟、琴音」

ちょうど噂話の中で登場した謎の人物だった。

「うわあ琴音ちゃんなんだ」

「なんでなんで？」

「ってことは、今年の奨学生は轟さんが獲るわけ？」

「なんか、意外よね」

いきなりのささやき声が女子たちから溢れた。乙彦も耳を澄ませた。女子の噂話自体に興味はないが、「奨学生」の話題がでてきた以上、関心を持たずにはいられない。壇上にあがるその女子の姿を認めた瞬間、何かが繋がった。

——あの女子だ！

小柄でかつ、髪の毛を限界までくりくり刈り取り、同時に背を丸めるようにしてマイクに向かうその女子。横顔も、正面から観た顔も、おそらくスカートをはいていなければ女子とは思えなかっただろう。唇と目が落ち着きなく動く。どことなくざわざわする。

「あの女子も評議だったのか？」

何度か参加した交流会において、あの顔を見た記憶はない。立村も話題にはあまり出さなかった。話をしている間に私語を交わすのはいけないとわかっているにもかかわらずにはいられない。

「そうだ。覚えてないのか」

乙彦は頷いた。藤沖もかすれた声で、私語ともいえないくらいの小声で。

「そうだな。あの時は轟が裏方を志願したはずだ。だから表立って働いていたのは、一年後輩の連中だけだった。特に女子はな」

「三年を表に、出さなかったということか」

「そういうことだ」

言われてみればそれもわからなくもない。一生懸命お茶を出したり、ものを運んだりしていた女子の中に、今壇上に上がっている轟の顔は見かけなかった。その後の打ち上げでも。

「あいつはまあ、悪い奴じゃない。女子にしては話がわかる」

「そうか」

違う、何かが反論している。乙彦は記憶をまさぐりながら、その飛び出た目と口、そして落ち着きなくきょろきょろするその挙動を見つめていた。彼女の新生代表挨拶など、聞いてはいなかった。

——あの、ゴミ捨て場でうろうろしていた、あの女子だ！

記憶力には自信がある。

久田さんが「要注意人物」として指名した、ゴミ漁りで得た収穫物を古本屋に売ろうとし、怒鳴られたというかの女子。間違いなかった。ちらと戸口でその姿を見ただけだが、その背丈といい、髪型といい、すべてが一致していた。

——同学年だったわけか。

決して忘れられないであろうその顔。

乙彦は目に焼き付けた。

館内はまだひそやかなつぶやきを消すことが出来ずにいる。型通りのつまらぬ挨拶を終わらせ、轟琴音は壇上から降りた。女子たちを中心にどこか冷ややかな空気が流れてくるようだった。やがて話が終わると堂々とおしゃべりが再開された。

「藤沖、ひとつ聞きたいんだが」

今まで一方的に聞かされる立場だった乙彦が、今日はじめて、質問に転じた。

「さっきから女子が奨学金のことをやたらと言いつけていたが」

「ああ、そうだ。知らなかったか」

こともなげに藤沖は答えた。

「青大附中内部進学者の中で、極めて優秀な成績を納めた生徒には、高校三年分の授業料が免除される仕組みとなっているんだ。奨励金といったほうが正しいか」

——だから奨学生なのか。

心がぐさりと掘り起こされそうだった。狙っていただけに、理不尽だが悔しい。

「本来ならば学年でトップを取り続けた生徒がもらうのが自然だ。だが今年は少々事情が違っていたわけだ」

「事情とは？」

「つまり、学年トップを取っていた水口という生徒が、他の高校に進学してしまった」

また、家族で留学でもしたのだろうか。

「知っているだろう。水口病院。あそこの御曹司だ」

「あまり良い噂は聞かないが」

藤沖は声を殺して笑った。

「そこのお坊ちゃまは非常に賢く、将来病院を継ぐために医学部進学専門の高校へ留学した。今年はふたりほど、その学校に進んだこともあって、外部生が若干多く入学できた部分もある」
——それとは関係ないだろう。

乙彦は黙って聞いていた。

「学年トップが消えた後、内部生の間では誰が奨学生となるのかで話題が沸騰していた。二番以降はいつも入れ替わり立ち替わりだったからな。おそらく激戦になっただろう。でだ。この入学式で新入生代表になる生徒が、毎年恒例で奨学金を手に入れているということもあり、みなそのあたりにおいて興味津々だったと、そういうわけだ」

藤沖は自分で言い終えた後に頷き、乙彦を見ながら付け加えた。

「俺としては、順当な選出だったと思うがな」

ゴミ捨て場で粗大ゴミおよび古本を漁り、背中を丸めて走り出していたあの女子。それが。

——青大附中きっての才媛とは。

人間として、人の恥部を決して決して口にすべきではない。乙彦の矜持だった。

まだ、昼間の「みつわ書店」状況を見ていなかった。前から気になっていたことなのだが、やはり放課後担当となる南雲とは顔合わせをしておきたかった。

「バイトだろう。そんなに気合を入れなくてもいいだろう。朝は朝、と決まっているんだろう？」

入学式後、藤沖にクラス有志との昼食に誘われたのを断った時、怪訝な顔で聞かれた。

「いや、最初だからこそきちんとしておくべきではないかと思うんだ」

乙彦は次回こそお誘いを受けると約束した後、思いついて尋ねた。

「ところで、南雲とはどういう奴か知っているか？」

「かなりあいつは有名だぞ。まだ耳にしていないのか」

少し驚き加減で藤沖は肩を竦めた。

「ああ、全くな」

「無理に先入観を持つ必要はないと思うが」

口籠もる様子に、やはり久田さんの対応が今ひとつという理由を感じる。

「中学時代は規律委員、かつ委員長だった。それだけでいいだろう」

「かなり硬い奴なんだな」

「硬い、か」

口許を緩ませるようにして藤沖は俯いた。笑いをこらえているようにも見えた。

「俺はあまり、人間関係において先入観を押し付ける気はない。関崎、人はやはり、自分の目で見ただけの本音が本当だと思うぞ」

さあっと血が頬に上がってくる。その通りだ。全くだ。

「悪かった」

「あやまる必要はない。それではまた、明日にでもゆっくり、話そう」

対して気分を害したようでもなく、藤沖は背を向けて五人ほどの英語科一年A組有志たちと一緒に、学生食堂へと向かった。当然その面子の中に、立村はいなかった。

——藤沖の言う通りだ。先入観を持って人を見るべきではない。

いつも立村に尋ねると、大概の場合いろいろと詳しい情報を用意してくれるし、場合によってはいろいろ出合いの準備などもしてくれる。評議委員会と水鳥中学生徒会との交流会においても立村がいろいろと手を回してくれたからこそ、うまくいったところもある。

だが、そのために。

——俺が、先入観を持ってしまったというのも、否定できないわけだ。

もともと乙彦は、人間を勝手に決め付けるという考えが嫌いだった。といいつつも、中学時代は未熟ゆえに、理解できない奴……たとえば総田など……を「最低の女たらしかついいかげん野郎」と決め付けてしまっていた。これが誤りだと気付くのに三年もかかったという自分が情けないが、今は同じ過ちをもう犯したくない。

たとえどんなに、自分が理解できないタイプの奴であっても、他人から与えられた先入観を元に判断するのだけは、もう避けたかった。

なのに無意識のうちに、つい情報を求めてしまう。

久田さんからしょっちゅう、南雲に関する悪い情報だけを受け取っているから、なおさらだった。四月に入り本来なら久田さんは、就職先で新人研修を受けているはずなのだが、なぜか朝早いのは平気とあって今だに「みつや書店」へ通いつめている。しかも、一切バイト料をもらわずに、だ。乙彦に対しては非常に好感度大らしく、いろいろと細かく教えてくれるしそれ以上に励ましてくれる。しかし、口からもれる南雲への感情は日ごとに悪化しているようにも見える。

——立村と仲がいいのだから当然悪い奴ではないだろうな。しかし久田さんからすると相当いいかげんで仕事も適当で頭が軽い男なんだそうだ。

毎日南雲に関しての罵倒を聞かされているうちに、自分の中で確固たる先入観が出来上がりかけている。それはまずい。だから。

——これから三年間世話になるのだから、きちんと俺の方から挨拶したほうがいいだろう。

すでに南雲も乙彦と同じ時期から昼間のバイトを始めているはずだ。おそらく、入学式後にもう、スタンバイしているだろう。いいチャンスだ。行ってみよう。

特に前もって、連絡を入れることはしなかった。

学校からすぐ側の「みつや書店」には、思った通り学生が群れをなしていた。今朝乙彦がすみずみまで拭いた教科書専用棚の本は、ほぼ半分近くが売り切れていた。久田さんが言うには、一部予約の入っている本も出てきているという。

——久田さんは凄いな。

あらためて思う。三月から四月、および五月の大学オリエンテーション期間中は、大学教科書および高校参考書を買求める学生客が増えるのだそうだ。その兼ね合いもあり、乙彦がバイトをはじめてからはほとんど教科書の並べ替えが日課となっていた。汚れていたらけしゴムで消し、細かく題目別に分ける作業。単純ではあるが、いつのまにか本の題名が頭に焼き付いてくる。自然と動かす手も早まる。以上、久田さんのお褒めの言葉も増えてくる、といった感じだ。

——でも、いつまでも久田さんに頼るのはよくないだろう。

久田さんもすでに他の企業に就職しているのだから、それなりに忙しいだろう。どうもこれからはばらくは、朝のみ……どうやら出勤前……の手伝いはしてくれるらしいが、乙彦としてもあまり口出しされるのは面倒なところもある。できれば早いうちに、昼当番の南雲と直接連絡を取り合って、情報交換を行ったほうがいいのでは。そう考えていた。

黙って本棚をうろうろしていく。「いらっしゃい」とかそういう出迎えの言葉はない。

所々、乱れている棚を直す。ほとんどが青大附属高校の生徒のようだった。乙彦の見知った顔はなかった。一番受け渡し場所に近い本棚に張り付き、乙彦はそっと覗き込んだ。

「はいな、どうもありがとうございます！ お次の方、どうぞ！」

愛想がいいわりにさっぱりした声がさらっと響いた。

よくよく覗き見ると、レジ側には人が五人ほど並んでいる。男子学生もいるが二名ほど女子も混じっている。どうも気になるのはその周囲にまた五人ほど女子がひそひそ話をしていること。乙彦と同じく遠目で見守っている様子だった。

売れているものは殆どが教科書のような感じだった。学生以外の客もいないわけではないのだが、あまり居心地よくないのか隅の方で立ち読みをしているか、そそくさと立ち去るかのどちらかだった。

「あ、たしか『チャート』の青い表紙の奴。あれ、全部売り切れちゃったみたいなんです。すみません。じゃあ入ったら、うちから連絡いれますか」

「必ず、入れてくださいよ」

受け答えしている内容に耳をそばだてた。どうやら話の内容からすると高校二年らしい。「チャート」というのがどんな本なのかわからないが、たぶん参考書かなにかだろう。ずいぶん切羽詰った話し方である。

「いやあこればかりは、運っすね。でも努力します。予約入れておきますんで、こちらに名前と電話番号、よろしくお願いします」

「届けてもらえますか」

かなり声音が怖い。南雲らしき男子はそれほど困った顔もせず、さらりと説明を続けている。「うーん、どうでしょうねえ。俺もバイトなんでそこまでの権限ないしわからないんですが、じゃあ店長に大丈夫かどうか聞いておいて、それからあとで電話ってことでいいっすか」

「絶対に、お願いします」

乙彦は南雲の顔をもう少し近づいて観察することにした。ありがたいことに、女子たちがたむろって居るおかげでまだ見つからずにすむ。

——あれが規律委員長だったのか？

決して乱れているわけではないのだが、髪の毛がコリー犬っぽい感じにさくさくまとめられていて、不良っぽく見える。頭を動かしても全然乱れていない。そのくせ手つきがしゃきとしていて、どことなくテレビに出てくる芸能人のようだった。アイドル歌手、特に男性芸能人は殆ど知らないと言断してよい乙彦だが、なんとなくちゃらちゃらしている雰囲気があるのは感じられた。

——立村もああいうタイプの奴とつるんでいたのか？

割と話のわかるいい奴だということは聞いていたが、少なくともそのあたりは共感できない。もちろん話をすればまた違った発見もあるのかもしれないが、今のところ乙彦の第一印象は久田さんとほぼ同じものだと思える。

——先入観を持って見てはいけないとわかっているのだが。

総田とも違う違和感がバリバリ伝わってくる。第一、仕事をする時に「俺」を使うだろうか？

「俺、バイトなんで」なんて責任逃れするようなこと言うだろうか？ なによりも。

——やれって言われたら出来る限りやるってのが常識だろう。

やる気ないのか、それともバイトだったら手抜きをしてもよいと考えているのか。

もし知り合いだとしたら、ためらうことなく割り込んで「いいかげんにしろ！」と怒鳴っているだろうが、同じ「バイト」の立場。しかも店長か久田さんでないと判断できない内容。乙彦は耐えた。

それにしてもなんで女子の取り巻きがやたらといるのだろう？

しばらく南雲は客をさばきつづけ、女子には「俺しばらくここでバイトすることになったんで、なんかあったら声かけてよ」などと、外見にぴったりの誘い言葉をかけたりなどしていた。時折おばあさんが顔を出して手伝っているが、なんとなく愛想が南雲に対してはよさそうに見えた。笑顔を交わしながら、

「あ、いいっすよ。俺、ひとりでやれますし。あ、そうそう帰りなんですけど、俺、なんか買ってくものあったらいきますよ。バイト代、なしでオッケーです」

やはり南雲にとっては、歳を取っていても「女」であれば優しくすべき存在なのだろう。天性の女ったらしなのだろうか？

客が途切れ、乙彦が改めて南雲に近寄ろうとした時、いきなり女子がまた横切った。おばあさんがひっこんだ後だった。

「南雲くん、どうも」

乙彦は本棚に張り付いた。隠れる必要などないはずなのに、身体がいきなりそう動いた。どこかひび割れた、アヒルのような声。

「ああ、轟さん、どうもっす」

南雲の語調は他の女子たちに対するものと全く代わらなかった。ずっと女子の一群が一步引いたように見えた。それでうまく乙彦も隠された。

「悪いんだけど、これいくらくらいで、買ってもらえる？」

——あれだ。確かに。

名前も、姿形も、よく覚えていた。

入学者代表挨拶をしたばかりの、やたらと目の飛び出た、猫背で丸刈りカットのその女子。

——轟、琴音。

苗字も名前とその佇まいとのずれで、決して忘れることのできない女子が、そこにいた。

両手でよっこらしよと、大きな紙袋をレジ台に載せた。

「かなりの大漁だったんだけどね」

——やはり、そうだ。

すでにこれは、確信犯だ。

南雲はその袋から一冊ずつ本を取り出していった。きれいな状態の教科書類だと一目でわかる。カバーつきのもの、箱入りのものも混じっている一方、もうこれこそ「ごみ」として処分するのが常識ではないかと思えるボロボロ本も入っているようだった。

「うわあ、これはすげえわ。どこで見つけたの」

「まあね、いろいろと」

「ほんと、大漁っすね。そのまんま、捨てるもんかねえって感じ」

「三月くらいからね、ちょくちょくチェックはしていたんだけどね」

「いやあ助かるよ」

どうやら会話からして、このふたり顔見知りらしい。それも軽口たたき合える程度の繋がりはあるようだ。しかも轟さんの言動を一切否定していない。つまり。

——ゴミ漁りの結果の品物として、受け入れを許可しているということか。

轟さんと南雲との会話はまだ続いていた。

「ほんとはもっと早く持ち込むつもりだったんだけど、いろいろと面倒でさ」

「基本としてここ、昼は俺が担当だから、黙って持ってきてくれたらそれでいいじゃん」

「サンキュ、助かる」

「じゃあ今から、どんぐらいになるか計算してもらおうんで、ちょっと待ってて」

さすがに二週間も経っていないバイトに買い取り金額を計算させることはないようだ。南雲は袋に本をしまい直し、裏に引っ込もうとした。

無意識に乙彦は壁となっていた女子たちの群れから、頭を出して割り込んだ。

「ちょっと待て！」

南雲と轟さんが無表情に乙彦の方を、無言で見た。

「これは久田さんから禁止されているはずだ」

「はあ？」

きょとんとした顔で、袋をだっこしたまま南雲が乙彦をまじまじと眺めた。

「もしかして、あの、ここで朝バイトしてるとか？」

「そうだ」

きっぱり答えた。ぴんときたのか南雲も「はいはいはい」と三回きっちり頷いた。

「りっちゃんから聞いている。そうかどうもどうも。俺、放課後担当の南雲。これから長い付き合いとなるけどよろしく！」

「俺は関崎だが、その前に、久田さんからの伝言を伝えておかないとまずいんだ」

けんかを売るつもりはない。乙彦は語調を和らげた。

「聞いてないかもしれないが、ゴミから拾ったものを持ち込まれたら、それは買い取ってはならないという決まりなんだ。久田さんがそう言った」

轟さんは無表情のまま、乙彦を見据えた。女子ににらまれてもそれほど怖くはない。関係なく南雲にだけ続けた。

「だから、出所がそういうところだとわかった段階で買取の手続きをするのは、違反になる」

「違反もなにも、別にそんなこと、俺、聞いてないけどなあ」

とぼける南雲。特に怒った風でもない。

「だって俺たちバイトだろ？ バイトだから判断できることとできないことがあるだろう？

そりゃあ関崎があの人にいろいろ指示だされてるんだったらそれはしょうがないけど、俺はなん

も聞いてないわけだし。俺が判断するんじゃなくてさ、他の人に任せる内容じゃないのか？ 俺はそんな話、全然聞いてないよ」

本当なのだろうか。久田さんは南雲と相性が合わないと言い募っている。かといってそんな大切なこと……「ゴミ捨て場から拾った本を転売する客は断ること」……をいい逃したとは思えない。

「だから、俺の判断じゃなくてさ、裏でみんなやってもらおうよ」

南雲は轟さんにちらっと片手で拝んで見せた後、さっさと奥に戻っていった。

「すいませーん、本持込みあるんで、お願いしまーす！」

——いや、間違っている。南雲の考えは、間違っている。

注目がいつのまにか乙彦と轟さんに集まっている。さっきまで南雲へ甘い視線を送りつけていた女子たちが、今度は轟さんを見つめつつひそひそ話をしていた。そんなのに興味などない。轟さんと見つめ合うのも落ち着かない。決着をさっさとつけるべきだ。

最初に石を投げてきたのは轟さんだった。

「転売していると、どうしてそう断言できるのかな」

落ち着いた声だった。それでいて眼光鋭い。気味悪いものを感じる。

何かのボタンが押されたような気がした。

「補習最終日の朝に、向こうのゴミ収集所で袋を弄っているところを見た」

轟さんは黙った。目つきは変わらなかった。

「俺だけじゃなく、久田さんが顔を覚えていて、絶対に持ち込まれた場合は売るなど指示を出された。ゴミ捨て場のものであっても、回収されるまでは捨てた人のものだ」

久田さんに言われたことを、なぜ自分は無意識のうちに復唱してしまうのか、わからない。

ただ、言わねばならない、正義がある。

「拾って持ち込んだということは、盗みに等しい。青大附属の生徒として、それを受け入れることは、絶対にできない。犯罪者にしてしまうわけには、絶対にいかない。ゴミ捨て場にすぐ、戻して処分すべきだ」

……と、久田さんが言っていた。そう付け加えるべきだった。

ギャラリーたちのひそひそ話はさらに膨らんでいる。

轟さんは無言のまま乙彦をにらみつけていた。壇上で見た、奨学金授与者たる才媛ではなく、つめの汚い、小柄で貧相な雰囲気的女子が、そこにいた。

「轟さん、問題なし。じゃあ買取ってことで、よろしく」

交わされた言葉を一切知らない南雲が、脳天気な顔で裏から戻ってきた。

「どうもありがと」

乙彦に今度は南雲が片手で「ごめん」のポーズを取り、さっそくレジの手続きを取り始めた。女子たち中心のざわめきだけが、乙彦の背にちくちく響いた。そしらぬ顔で出されたプリントに

サインをしている轟さんの重たさだけが、乙彦の腹にじわっと座っていた。

——本当に許されて、いいのか？

久田さんに言われたことではなかった。

その通りならばやはり。

——盗んだものに、なってしまうんじゃないのか？ それを買うこの店も、罪を逃れられないんじゃないのか？ 本当に、それでいいのか？

「よお、来週さあ、FMヤング広場の公開録音があるんだってさ」

「へえ、じゃあ行ってみっか。藤沖、関崎、お前らも来るか？」

藤沖はちらと乙彦を見やると、首を振った。いつものようなぶっきらぼうな言い方で、

「そろそろ俺も準備すべきことがあるからな」

「そうかそうか、そろそろなあ」

みな納得顔で頷いているところを見ると、それなりの何かがあるのかもしれない。乙彦に水を向けたような雰囲気なので、改めて答えた。

「悪い、俺も放課後例の如く、バイトがある」

「苦学生、がんばれよ」

ぽんぽんと肩を叩かれるのも、今はそれほど痛くなかった。

「俺もバイトやりてえよなあ。いいな関崎。学校からも親からも自由じゃんか」

入学後一週間、もう誰も乙彦を「外部のお客さん」として見る奴はいなかった。

カレンダーで数えると入学後七日分埋まっている計算となるが、乙彦からするとすでに半年以上は経っている感覚がある。クラスメートとの交流も、また毎朝のアルバイトも、放課後の補習も。はるか前から続いているような気がしていた。

——思ったよりもなんとかなるものだ。

人数が少ないことと、英語科という特殊性もあり、殆どのクラスメートと会話は交わっていた。藤沖を中心とするグループに属する形となり、自然、他クラス方面からの連中とも顔合わせも行われた。それなりに乙彦の噂は流れていたようで、特に「はじめまして」の挨拶も必要なく会話に組み込まれていった。

もともと、話といえば、他愛のないものだ。

——青大附属といえども、みな中身は同じだ。

テレビ番組やらラジオの公開録画やら、そのあたりの情報を交換しつつ、時間が合えば一緒に出かけようと誘う、まずはそんな感じだった。女子たちがいなくなると、もう少し裏に入った情報も交換することになるけれども、それも中学時代とほぼ変わらない。青大附属の生徒だからといって極端にきわどくなることもなく、みなさらりと流している。感心した。

——誰もが誰も、総田のような女好きではないということだ。

「関崎、お前結局、部活はしないのか」

昼休み、たまたま給食食器を給食室に運んだ際、着いてきた藤沖に問われた。

わかりきったことだ。答えは一つである。

「時間がない」

「そうか」

「かわりに規律委員会に入るつもりなのでそれでいいとは思っている」

藤沖は頷きつつ、一緒にぶら下げてきた給食バケツをガラス越しに置いた。

「やはり立候補するか」

「そうすることに決めた」

てっきりすぐに委員選出を行うものかと思っていたのだが、一週間しっかり間を置いているのが疑問だった。古川こずえによれば、

「かなり前から評議委員が私と藤沖ってのは決まっていたのよ」

との話だし、藤沖からも入学前からしょっちゅう、

「お前は規律に行った方がいい。生真面目な奴だからな」

とアドバイスを受けていた。正直どんなものだろうか、と迷いがないわけではないのだが、それはそれできっかけとして面白いだろうとは思う。制服の乱れを細かくチェックしたりするのは正直、性に合わない。だが部活動が出来ない以上しかたない。

「それでだが、後の委員はどうなるんだ」

「もう出来レース状態だ」

藤沖は片腕をぐるりと回し、肩をもんだ。

「お前が規律をやることになれば、あとはみな、自動的に納まる。評議、規律、美化、音楽、それと体育と保健か。状況によって学校祭関連の委員が出てくるかもしれないがそれはその時考えればいいだろう」

「そうだな、確かに」

なかなか切り出せず迷った。乙彦の知りたいことはもうひとつあって、どうやらそれは禁句になっているようだった。

「これからロングホームルームだが、俺のやりたいようにやらせてもらえればいい」

藤沖はあっさりと言ったのけた。

「誰も文句は言うまい。ましてや関崎に関してはな」

——なんだか妙な感じだ。

日々思う。こんなに自分が好意的に受け入れられた経験は数少ない。

水鳥中学時代はいつも、「あの糞真面目生徒会副会長が」と蔑まれ、比較されるとすれば大抵あの総田とで「総田先輩は話がわかるのにあのシーラカンス関崎は」と顔をしかめられる。てっきりその状況が青大附属に進学してからも続くのではと危惧していた。

たまたま、藤沖のチームに紛れ込めたからという部分もあるのだろう。

また、乙彦が開き直って自分をさらけ出すのが早かったせいもあるのだろう。

今のところ、自分の判断は間違っていないようだった。

——ばれて困るものなどひとつもない。だったらまるごとさらけ出してよし。

——俺は、嘘といんちきは嫌いだ。正々堂々と勝負に出る。

自分とは別世界の部分もないわけではない……経済事情などは特に……が、精神的な要素においてはどうやら、彼ら彼女らとは波長が合いそうな気がしていた。

「藤沖、それでひとつ聞きたいんだが」

口に出そうとしたが、藤沖に遮られた。

「悪い、後にしてくれ。これから俺は職員室に用がある」

聞いてもいないのにわざわざ注釈までつけて。

「応援団結成の手続きについて、これから確認しないとならないんだ」

そういえばさっきも、藤沖は「準備すべきことがある」などと口にしてた。

「応援団か」

「詳しくはまた話そう」

きちっと敬礼をした後駆け出すように階段を駆け上がっていく藤沖。見送りながら乙彦は、少しぬるぬるした指先をズボンの端で拭った。

五時間目ロングホームルームを使い、一年A組の委員選出が行われる運びとなっているのは前から決定していることだった。麻生先生も、

「ある程度顔と性格を鑑みた上で選ぶなり立候補するなりしたほうがいいだろう」

と、オリエンテーションの段階で話していた。ただ藤沖や古川の言う通りほとんど根回しは終わっているのだろう。

評議、規律、美化、音楽、体育、あと保健。

図書委員がないのかと聞いてみたところ、これも局活動という扱いで「図書局」に有志を募る形での運営になるという。同じことは放送委員にも言えることで、やはり局となる。

二十人中十二名が委員というのは、割合としてかなり多い。

とりあえず乙彦は流れに任せることにし、席についた。まだ五十音順の席並びなので、どうしても古川からちょっかいを出されるのが頭の痛いところでもある。

「あのさあ、関崎」

「なんだ？」

「もう藤沖から聞いてると思うけど、規律の件はよろしくね」

まじまじと古川こずえを眺めやった。目が大きいのは決して悪くないのだが、古川の場合どことなくそれが威圧感として伝わってくることもある。

「どうしたのあんた。もしかして、立っちゃてる？ そんなのどうでもいいけどさ」

「規律がどうしたというんだ」

わけがわからないなりに尋ね返した。

「とにかく、規律委員へ立候補してもらえればそれでいいわけよ。そうすれば、無事話は収まるわけだからさ」

「古川、ひとつ聞きたいんだが」

もっと話したさそうだった古川に乙彦は声を潜めて尋ねてみた。

さすがにこれは、藤沖のいない時でないと、聞けない。

「今回、立村はどの委員に入るんだ？」

黙ったのは、答えに窮したせいなのか。

古川は顔を横に向け、唇を少しかんだ。噂の主、立村の姿はなかった。まだ昼休みも終わって

いない。いつも教室から姿を消していることが多いのは乙彦も気付いていた。

「あいつも、委員やるんだろ？」

「やるわけないよ」

大きく溜息を吐き、古川こずえは机を指先で叩いた。髪の毛を耳もとで軽くかきあげた。

「元評議委員長だよ。それがね、中途半端な委員で満足できるかって思う？」

「委員に序列はないと思うが」

「関崎にはまだわからないかあ。そうだよねえ」

ぴりりと走る痛いものがある。乙彦はさらに問い返した。

「わからないことはあるが、だから聞いているんじゃないか。最初から無知扱いするな」

「ごめんごめん、そう怒らないで」

「怒ってなんかないが」

笑って古川も流してくれた。

「本当に青大附中時代の三年間、いろいろあったのよねえ。だから、しょうがないのよ。まあ、一年前期に関しては私と藤沖のふたりでうまくやっていくから安心してよ。もし何かが起こるのならば、それは後期以降だろうなあ」

全く女子の語り口は理解不能である。ただし、古川が実はそれなりに物事を考え、友人たちへの情にあつい女子であることも、乙彦は理解しているつもりである。

「立村は教室に居ないことが多いが」

「ひとりになりたいのよ。ロンリーソルジャーって奴ですか」

意味不明の英語を口にした後、古川は会話を断ち切り、いつのまにか戻ってきた藤沖の席へと向かった。鐘が鳴ると同時に後ろの扉から、立村が足音を忍ばせて入ってきたのを乙彦はすぐ、気付いた。

——確かに、いろいろあるとは聞いていたが。

立村からあのこじられた喫茶店「おちうど」でずんたもちを食った日からもう二週間近く経とうとしている。乙彦自身は決して態度を変えたつもりもないし、挨拶も必要以上にしているつもりでもある。しかし、立村自身が息を潜めるように身動きしているのを見るたびにいらいらしてくるのは気のせいだろうか。

——自分で、仲間外れになるようなシュチュエーションをこしらえているだけではないのか？

一週間、授業以外で立村と接する機会は殆どなかった。二十一人しかいない教室の中において、ひとりひとりの言動が目立つのはしかたのないことではある。しかし、立村の場合、よほどのことがない限り存在が全くないかのように振舞っている。乙彦の記憶によれば、立村が声を発したのを聞いたのは、英語のリーダーの授業で、英文暗誦をさらっとやってのけた時だけである。よくわからないがネイティブイングリッシュとはこういうことなのかと、感動すらしたものだ。

しかし、給食の時もひとりで席についているし、仲間と組んで話すこともない。

まあ男子の場合はひとりで食うことが殆どなので、女子のように机を組み替えておしゃべりす

ることもほとんどない。そんなに目立つことはないのだが。

——しかし、これでいいのだろうか？

——いじめてはいないし、向こうがそう望むなら仕方のないことなんだろうが。

このままでは、立村が完全にクラスの外になるのも、時間の問題に思えてきた。

かといって何か手段をと考えるほど、乙彦にも余裕はなかった。

「では、これからA組のクラス委員選出を始めるが、みな準備はできたか？」

麻生先生が指揮を取り、チョークで「評議・規律・美化・音楽・体育・保健」と筆圧強く書き込んだ。

「もうみなよくご存知かと思うが、あえてひとつだけ忠告しておく」

ぐるりと、あの脂ぎった額を教室一杯に回し、

「中学と違い、クラス委員は三年連続で任命されることなど殆どないと考えてもらいたい」

ちらと乙彦の後ろへと視線を飛ばし、

「入学式で三年の結城も話したから覚えていると思うが、委員会は決して部活動の延長ではないし、クラスのために活動するいわば公務員、難しい言葉でいうと公僕のような立場だ。クラスに貢献し、その上で自分を高め、同時にクラス全員からの適性判断を受ける。そういう意味において、中学独特の部活動とは違うと考えてほしい」

今ひとつぴんとこないが、みな真剣に聞き入っているところは納得すべきところもあるのだろう。乙彦は黙って膝に手を置いていた。

「ここでまず、前期委員を選ぶことになるが、お互いの状況が変わることによってまた入れ替わりもどんどん行う。また、適任者でないと俺が判断した時は、改めてこのようなロングホームルームを行い改選も行うつもりでいる。つまりだ」

女子の一部が囁き始めた。「そこ、静かに」と一言注意した後、

「俺は決して青大附中独特の委員会部活動主義が悪かったとは思わない。話に聞く限りだと、結城もかなり努力して、全校生徒のプラスになるような組織を構成したというしな。それは俺よりもお前たちの方がよく知っているはずだ。しかし、その組織に甘んじてきた結果いろいろな問題が生じているとも聞いている。つまり、新陳代謝がうまくいかなかったということだな。同じ状況下のもと、水がよどんだまま、入れ替えが進まなかったという問題が起こったわけだ。中学入学の段階で、誰が適性を持っているのかわからないうちに、なんとなくのりで決めてしまい、よほどのことがない限り人員の入れ替えができなかったという事実も、それぞれのクラスの問題として、存在していただろう」

——立村がそんなこと話していたな。

乙彦は立村に振り返った。とたん、周囲の女子たちほとんどが同じように立村を冷たい視線で射ているのにぎょっとした。首をみな不自然に曲げている。立村本人は机を見つめたまま黙って俯いている。

「あえて、こんなつまらん話を委員選出の前にするかというのだ。どうしても中学から上がってきたお前からすると、今までのパターンで選びたくなるだろう。過去の実績ももちろんあるだ

ろう。過去の経験もあるだろう。だが、そこでひとつ考えてほしい。一度、全く自分の考えていなかった委員に立候補してみるのもまた悪くないし、半年やってみてこれが自分に合わないと判断したら、相談するなりして次の道を考えることもよしだ。ただ流されて、向いていないのを承知の上でただらだと過ごすのだけは、やめろ」

「先生、ちょっといいですか？」

いきなり立ち上がったのは古川こずえだった。あっけらかんとした声で、

「麻生先生、簡単にまとめちゃうとこういうこと？」

「なんだなんだ古川、水差すな」

かなり面白くなさそうだが、それでも怒鳴らない。発言を許している麻生先生。

「つまり、あれでしょ。評議にせよ規律にせよ、私たちクラスメートが委員それぞれの適性をしっかり観察して、『あ、こいつアウト』って思ったら不信任にしろってこと？　なんかそれ、人間としてどうかなって思いますよね。それよか、単純にクラス委員は毎回入れ替えするので心ずるように、って一言ですむんじゃないかって思うんですけど」

「古川、それはちょっと、誤解だ」

両手で「座れ、座れ」と空気を机に押し付ける仕種をした。「ねえ？」と乙彦に囁きながら腰掛ける古川を、なぜか麻生先生はやわらかく見つめた。

「いいか、古川、それからお前ら。今まで中学では、自分自身が何に向いているかとか、どういう科目が得意かとか、そういうところをあまり深く追求しなかつただろう？　それは当然だ。中学のうちは迷うのが当たり前だ。だがなあ、もうそろそろ高校生ともなれば、自分自身で何を求めて何が必要かを真剣に考えても、いいんじゃないかなと」

「だからそれと委員選びとどこ関係あるのかがわからないんですよね」

さらにからかい調子でつつこむ古川こずえ。漫才っぽいのりで場が和む。

「ただそれを自分ひとりで追求するのには、まだ限界がある。幸い、委員会などを利用する形でいろいろな仕事や行事を経験し、もしそこで別のことに興味を持ったならば、その時はたとえ任期の途中であっても申し出てほしい。同時に、自分が気付かなくとも他の奴から見て、『あいつは評議よりも保健の方が向いている』などと感じた場合もあるだろう。そういう時に方向転換するチャンスを与えるのも、これはクラスメートとしての義務だ」

——先生何言ってるかよくわからないぞ。

古川こずえではないが、やはり回りくどい。わかりづらい。

なぜ、こんなただらだ文句を言い続ける必要があるのだろう？

乙彦は天を見上げた。とにかく、すでに立候補先は決まっているわけだから。

それから少しだけ麻生先生のわけわからぬ繰言が続いたが、

「先生、早く決めようよ」

わざと甘ったれたような口調で急かす古川にとうとう陥落した。

「わかったわかった。お前らもその辺、大人だからなあ」

「じゃあ藤沖、早くやろうよ」

答えず藤沖が立ち上がった。麻生先生に一礼して、

「では僕が、司会していいでしょうか」

渋い声で尋ねた。

「そうだな。ではあとはまかせた」

四角い頭を左右に振り、藤沖はまず教壇にのぼった。麻生先生が脇のパイプ椅子に腰掛けるのを待ってから、

「では、一年A組のクラス委員を決めます。やりたい人は立候補してください」

にこりともせず、ジグザグに視線をクラス全員へと振り、読み上げ始めた。

「先に、評議委員男女二名。まず、藤沖が立候補します」

ためらうことなく黒板に「評議 藤沖」と書き込んだ。

「それと私もだけど、いい？」

古川こずえはさっさと手を挙げた。

「古川、よし。じゃあ次は規律だが、立候補者は？」

——俺が手を挙げていいのか？

さすがに迷った。いくら藤沖に勧められていたとはいえ、外部生の自分である。これがもし、公立高校の場だとしたらまた別だろうが。迷うとは自分らしくない。少しためらういきなり藤沖が露骨に乙彦へ声を掛けてきたではないか！

「関崎は？」

出来レースばればれである。

「やらせてもらいたい気持ちはある」

「あるなら、さっさと手を挙げろ」

乙彦が手を挙げる前に、「規律・関崎」と綴られてしまった。

——これでいいのか？

そっと周囲を見渡した。古川が親指をぐいとし、「OKよ」サインを送っている。他の連中も殆どが納得顔に見えた。とりあえずは、藤沖が話をクラスに通してくれたということだろう。ここまで裏工作ばればれだと、さっきあれだけの演説をやってのけた麻生先生も相当おかんむりかと思いきや、

「関崎、いいぞ」

短く、満足げに呟き、頷いていた。

——適性どうのこうのってあれだけ言ってたてのに、よくわからないぞ。

てきぱきと、藤沖の指名でもってA組の委員が埋まっていった。女子の顔は古川以外みな同じに見えるのであまり興味を持たなかった。男子は藤沖の決め台詞、

「お前、やるだろ？」

で全員OK。あっという間に委員すべての席が埋まった。

予想通りだった。たったひとつを覗いては。

——立村がなぜ、どこにも入らなかったんだ？

誰一人、クラスの連中たちは違和感を感じずにその事実を受け入れている。

——あいつ、もと評議委員長だぞ？　なのに、委員になぜ入らない？

乙彦はもう一度立村に振り返った。興味なさそうに窓の外を眺めている横顔を、いらだたく見つめた。

鐘が鳴った。任命されたばかりの藤沖がさっさと、

「起立、礼」

と号令を掛けた。適当にみな頭をぶらつかせた後、外へ飛び出そうとする。少しタイミングをずらす形で立村も教室から出て行こうとした。乙彦も思わず追いかけてしようとした。

「あわてなさんな、男子が早くいっちゃうのっていろいろとまずいよ、あれでもさ」

「古川、やはりおかしいだろう？」

乙彦は古川に問い掛けた。すでに出来レースとはわかっているけど、やはりこのもやもや感は消せない。立村がまるでいなくても構わない展開だったのが、一年A組英語科のジクソーパズルを組み立てている自分としても納得いかない。

「立村と藤沖の間に面倒なことがあるのは承知している。だが、このクラスで、元評議委員長をないがしろにするというのは、酷すぎやしないか？」

「ああ、まあね。麻生先生も露骨だったし」

ほつれ毛を耳にかける仕種をし、その指で古川は唇に「しー」と当てた。

「麻生先生は立村嫌ってるからね」

「そういうことはないだろう。教師がえこひいきしてどうするんだ」

「あんた気付いてないの？」

やはり女子の話は飛躍が多すぎてついていけない。なぜ、麻生先生の話が出てきて、しかも立村を嫌うなんて展開になるのだろうか？　乙彦の考えを全く無視して古川は続けた。

「あれ、みんな立村をまかり間違っても委員になんて選ばないよっていう牽制球よ。まあ、みんなそんなことだ一れも思ってなかったし取り越し苦労だけどもね」

「だからそんなこと、ありえないと言っているだろう？」

それより、クラスの連中がなぜ無視するのか、とそう問いたいだけなのだ。なぜ古川はわけのわからない話に持っていくのだろうか。

「まあまあ落ち着いてよね。立村も自分の立場よくわかっているから、これからすぐ一仕事して教室に戻ってくるわよ」

「一仕事？」

「あいつには、あいつにしかできない仕事というのがあるのよ。ほらほら、黙ってみてなさいよ。いい？　絶対、口出しするんじゃないよ。それと、今教えたこと、まかり間違っても藤沖には内緒だからね」

まだ教えてもらっていないのだが。約束は守る。乙彦は黙って席に戻った。

女子たちとでかい声でがはは笑いをしている古川に、立村が近づいてきたのは休み時間終了間際だった。小声で何か囁いた後、ノートの切れ端のようなものを机の上に載せた。席に戻る際、乙彦にもまた、紙を一枚、すっと差し入れた。

「これは、なんだ？」

問い掛けた。差し出された紙には立村独特の楚々とした文字が走り書きされている。見た目、女子の文字というより、和歌をたしなむ人風の文字というべきか。

「たぶん、あとで役立つ時がくるから。しまっておいて」

それだけ早口で耳打ちすると、立村はすっとその場を離れた。

——これは、なんだ？

まず見つけたのは、自分の名前。

・一 A 規律 関崎乙彦

全クラス分の各委員決定者がずらりと並んでいた。急いで書いたものだが読むには問題ない。立村の行為の意味を問う前に、乙彦はつい知っている名を探してしまった。そこにはいくつか、記憶に残る名前が残っていたから。

・一 B 規律 清坂美里

・一 C 評議 羽飛貴史

・一 C 評議 轟琴音

・一 C 規律 南雲秋世

何はしゃいでるのか、女子席で古川が嬉々としながら他の女子たちと語っているのが聞こえる。

「よっしゃあ！ これは凄いよ。すごいラッキー！ 評議、羽飛と一緒にだよ！ けどなんでだろうね、なんで美里、評議じゃなくって、規律に回っちゃたんだろう？ あとで美里本人から何があったのか聞いてみるよ。いやーさ、私もさ、評議やるってことになってから、絶対美里と同じ委員で盛り上げられるかなって思ってたんだよね。ものすごく、予想外な展開だよ。なんで琴音ちゃんなわけ？」

「こずえちゃん、不思議だよねえ。美里がなぜ落とされたのかなあ。それよか、やっぱり元規律委員長はあっさり選ばれたね。南雲くん、いいよねえ」

元規律委員長はあっさり選ばれたのに、なぜ、元評議委員長はあっさり蹴られたのだろうか？ 因縁まわりつく名前をあえて見ない振りをして、乙彦はもう一度立村を目で追った。何を考えたのか、頷いてかすかに微笑んだ。

委員選出のあと、中途半端に数学の授業が一コマ入り、そのまま流れて委員会へと続く。

「いきなりだが、まあがんばれ」

藤沖に肩を叩かれ、乙彦は大きく息を吐いた。

「規律の面子を見る限りだと、思ったよりも附中で委員をやっていた奴が少ないようだ。もちろん南雲は委員長だし外せないとしても、ほとんど初対面ののりでいけるだろう」

——やはり見たんだな。

乙彦が立村から受け取った、「一年全クラス分委員名簿」を見ないことにはその科白は出ないだろう。確か古川こずえが手にしていたのは見たはずだが、決して立村とよい関係とはいえない藤沖が、どうして知っているのだろう。

「いきなりハブにされるようなことはない。安心しろ」

「いや、心配はしていないが」

妙に過保護なのりの藤沖に、若干じりじりする気持ちがないわけでもない。そんなの無視しいて藤沖は腕時計を覗き込んだ。

「わからないことがあればまた明日にでも聞いてくれ。たぶん今日の委員会は自己紹介と委員長選出だけで終わるだろう。二、三年でその辺は片付けてくれるはずだ」

——もちろん、ろくすっぽわからない一年が立候補するとは思っていないが。

聞いてもいないことを藤沖は朗々と述べ立てた。

「ところで委員会が終わってからは、暇か？」

「暇なわけがない。補習があるに決まっている」

「いや、今日は特別にないはずだ」

聞いていなかった。てっきり準備万端整えて補習のつもりできたのだが。もちろん休みなら嬉しいが、顔には出したくない。藤沖はそしらぬ顔で続けた。

「青大附属において、委員会活動はいろいろあるにしても、やはりメインになるところではあるだろう。特に初対面の時にはな。念のため、俺が聞いといてやろう。どちらにしても終わったら1Aの教室で待ち合わせよう。いろいろ語るべきところもある」

ところどころ硬い表現を混ぜつつも、基本はフレンドリー、かつ強引。

まだちりちり言う心奥のほつれを押さえつつ、乙彦は片手を挙げて教室を出た。

——それにしても、藤沖はなぜ、やたらと俺に構ってくるのか。

男子の友情として、これは珍しい形である。

大抵の男子はつかず離れず、適度な温度を保ちつつ、遊び感覚で繋がっていき、時折本音をもたらしたりもするにしても、相手の面倒を見たがることはそうそうなかった。例外として乙彦には、弟分の雅弘がいたからそれなりに気遣いはしてきたつもりだが、自分の性格として雅弘的側面はないはずだ。なぜ藤沖がいろいろと先回りするのか、そのわけがわからない。

もちろんそんなことはたいしたことでもないし、未知の世界である青大附属の道先案内人とし

て感謝すべきところもあるのだが。だが、なんとなく。

——俺ひとりでも問題ない場面だってあるだろうに。

青大附属に入学し、少なくとも男子連中とは慣れた。補習の関係もあって、先生たちからも覚えがよいように感じている。しかし、藤沖が乙彦に対する接し方はどうも、「弟分」の匂いがしていけすかない。

——まあいい。はっきり言っておく機会もあるだろう。

乙彦は廊下の右通路ど真ん中をつきっていった。規律委員会は三年B組の教室で行われるのだと聞いていた。

しかし、南雲が一緒なのか。

こちらの方がかなり、重たい。

先日、轟琴音を挟む形でやりあった後、気まずさもないわけではなかったが、「みつや書店」のおばあさんがうまく間を取り持ってくれたのでそれ以上のぶつかり合いはせずすんだ。なぜかおばあさんの前では言いたいこともしっかり飲み込み、ただ愛想のよいところだけ見せていたようだし、轟ももらうものももらった後はさっさと店から出て行ってしまったし。乙彦ひとりがヒートアップして間抜けな気持ちになっただけだった。

規律委員で一緒になるとわかっていたら、ああいう出会いもせずすんだだろう。

運の悪いことだ。

しかも南雲という奴が、

——第一印象で人間性を決めるのもおこがましいとは思うのだが。

どうも、軽い。見た目が芸能人っぽくみえるとか、やたらと髪の毛を癖つけているとか、なんとなく男子の汗ではない香りが漂うとか、どこを取っても乙彦に相容れられる要素はない。ライバル比較で言えばあの総田幸信でさえも「硬派」に映ってしまう。できれば、付き合いはしたくないタイプである。

だがどちらにしても、バイト先および規律委員会で顔を合わせるようになったのはしかたあるまい。嫌なのはお互い様だろう。早いうちに、埋め合わせる必要がある。

——喧嘩を売ったのは俺の方だし、むかつくが俺が頭を下げるしかないだろう。

どんなに価値観が違っていても、三年間それなりに付き合っていくわけだ。

間違っていることはこちらから正す。どんなに痛くても、乙彦の主義は通さざるを得ない。

——その上で、また話を持っていけばいい。

なんだか胃の重たくなる結論ではあるが、出たしまえばすっきりした。乙彦は三年教室に向かい階段を昇っていった。踊り場の窓からは、春らしく桜の枝がつぼみだけつけて張り付いている様子が窺い知れた。まだ満開まで、時間はかかりそうだった。

「関崎くんも規律委員なんだね。一緒に入ろうよ」

廊下で数人、他学年の集団が固まっているのを横目に窓辺へ立ちんぼうしていたら、声をかけられた。知っている顔ではあった。清坂さんだ。会釈した。

「立村くんから聞いてるよ。よろしくね。私も規律初めてだから、正直どうなるかわかんないんだけどね」

「立村から聞いたってどういうことだ」

清坂さんはつややかな髪の毛を両脇耳にかけながら答えた。

「それぞれのクラス委員が決まった後、立村くんがすぐに全クラス調べてくれたんだ。それで、私も名簿もらったの。ほら」

見ると、乙彦のもらったものと同じ、走り書きのレポート用紙だった。立村はコピーして主だった奴に配っていたということか。

「俺ももらったが」

「やっぱりね」

にっこり笑った。あっさり答えられたので、乙彦も次に言葉が見つからない。

「立村くん、きっとすぐにみんなを安心させたかったんだなって思うな」

「安心させる？」

ますます意味が理解できない。女子はいつもわけのわからないことを言うものだと改めて認識はしているけれども、慣れることがどうしてもできない。それに清坂さんといえば、いろいろ立村と何かがあったはずだ。詳しいことは古川からしか聞いていないので判断しかねるところもあるが。そんなにあっさり友だちとして答えられるものなのだろうか。

清坂はすっと目をそらした。俯き加減で笑みだけは滲ませるようにして呟いた。

「ほら、立村くんってふつうの人より、感じすぎるところがあるでしょ」

「よくわからないが」

「私たちにとってはたかがそのくらいのこと、ですんでしまうことを、立村くんは大変なことだと感じてしまうみたいなんだ。私、本当はよくわかんないんだけど。きっとね、いきなりわけのわからない委員にあてがわれてしまった人たちのこと、考えてたまらなくなっただと思うんだ。だからあんなに急いで調べて、作ってくれたんだと思うのよ」

改めて清坂の手に残る手作り名簿へと目を落とした。

「五時間目が終わってからね、すぐ立村くん、B組に来てくれたんだ」

全く変わらない爽やかな口調だった。

「たぶん私が評議になると思ってたみたいでね。規律になるって聞いたとたん絶句してた。立村くん、考えていること全部顔に出るからね。でもすぐに、A組の規律委員が関崎くんだから大丈夫だよって言ってくれたんだ」

「あいつがか？」

どこがだろう？ もちろん、水鳥中学生徒会副会長としての仕事振りを評価してくれたとすればありがたく受け取りたいところだが。乙彦は戸惑いながら耳を傾けた。

「それからすぐC組とD組に行っているいろいろ調べてくれたの。まあ、C組の評議が貴史だったのはねわからなくもないけど。しょうがないかあ。C組には天羽くんだっているのに、差し置いて評議だなんてね」

「天羽？ そういえば天羽は後期評議委員長だったんじゃ」

言いかけると、清坂美里は頷いた。

「そうよ。天羽くんも規律に出たかったらしいけど、元規律委員長だった南雲くんがいる以上はしかたないよね。似合わないけどなぜか体育委員に回ったみたい。似合わないよね」

曲がりなりにも、元委員長クラスの男子はそれなりの委員職についてたようだ。全く聞いていないし知らない名前だらけだというのに、清坂はさらに続ける。

「それと、美化委員が更科くんで、音楽委員がなぜか難波くん。C組になんで評議委員が固められちゃったんだろうって不思議に思うんだけど、なんか、らしくない委員をおしつけあってるみたいで笑っちゃうよね」

名前を出されてはじめて気付いた。そうだった。天羽をはじめ、更科、難波、みな評議委員として交流会に顔を出していたはずだ。

「だがなぜ、立村はどこにももぐりこめなかったんだ？」

「わかんない。出たくなかったのよ、最初から」

あっさり清坂は流した。おしゃべりなくせに女子は、肝心要のところをちっとも言おうとしない。消化不良で胃がぐるぐるするようだった。

「関崎くんと組になってるのって、堤さんでしょう？ 私、あまりよくわかんないんだけど附属上がりの子はみな委員がどういうものか知ってるはずだから、関崎くんは心配しないでいいよ」

「そんな不安はないが、だが」

相当、頼りなさげに見えるのだろうか。藤沖にしろ清坂にしろ、ずいぶん言い方をするものだ。全く気付いていないのも女子特有のくせなのだろう。

黙った後、清坂はきょろきょろと周囲を見渡し、そそくさとC組の前で手招きしている男子の側に寄っていった。見ると、乙彦と同じくらいの背丈で若干前髪を残してあとはスポーツ刈りの男子が突っ立っていた。見たことのない奴だ。

「美里なあ、なにしくじったんだよ」

いきなり名前で呼んでいる。しかも額をこつと指でつついている。かなりなれなれしい態度である。清坂も払いながら片足でそいつの足を踏んづけている。

「しくじってなんかないわよ。しょうがないじゃないの。あとで説明するわよ。とりあえず評議委員がんばってよね。あの天羽くんを差し置いてなったんだからね」

乙彦から一メートルくらいしか離れていない。声はまる聞こえだ。もっと声を潜める内容じゃないだろうかと思わずにはいられないが、耳を澄ましてしまう内容でもある。

「しゃあねえだろ。まあ天羽とは一騎打ちだったけどなあ」

「琴音ちゃんと組なんだもんね。まあ、やりたいようにやれば」

「冗談じゃねえよ。俺だって美術部入らねばなんねえし」

いきなりけたたましく笑う清坂、何度も手を打って最後にそいつの肩を叩きつづけた。背伸び加減で不安定、バランスを崩しそうになっている。

「あんたが美術部？ 似合わないっつらないわよね。あ、そうそう、A組はこずえだよ、あと藤沖くん」

そう言ったところでひょいと清坂が振り返った。ちらちら様子を伺っていたのを気付かれてい

たのかもしれない。清坂と一緒にしゃべっている男子も乙彦に向かい、「よお」と片手を挙げた。

「知ってるでしょ。水鳥中学の関崎くん」

「ああ、立村の言ってた」

ここまで紹介されたのならば、自分でもきっちり挨拶せねばならないだろう。礼儀だ。乙彦はあらためて向かい合うと、そいつと同じく片手を挙げた。

「関崎というが、これからもよろしく」

なんだか硬い口調になってしまったが、そいつはあっさり笑顔で頷いた。

「立村から聞いている。心配すんな。それはそうと、あいつどうしてる？」

声を潜めたとたん、いきなり後ろからすっとんきょうな声がかかった。

「はーとばー！ 早く教室、入りな。委員会、始まっちゃうよ！」

——古川の声だ。

聞きなれた噂の「下ネタ女王」の声。同時にそいつの名前がああ、羽飛だということも改めて認識し直した。

「今から行くからそう騒ぐなよなあ」

頭をかきながらもまんざらではない様子で、羽飛はもう一度乙彦に「じゃ、また」と声をかけた。清坂がC組の扉に目を遣っているすきをねらい、ひょいと頭をはたくようにして羽飛は反対側の扉からもぐりこんでいった。

——こいつが古川の、いわくの奴か。

からかう気はなかった。ただ、少しだけ古川こずえにいたわりの念が沸いた。

——あれだったらもう、勝ち目、ないな。

乙彦もあまり恋愛沙汰に詳しいほうではない。だがどう見ても羽飛の態度は清坂に気のあるものとしか思えなかった。諦めたい気持ちも、わからなくはない。

「さ、私たちも入ろうよ」

「いいのか？」

それには答えず清坂はさっさと乙彦の腕を取りひっぱっていった。さっき羽飛とやたらべたべたしているのが目についたのだが、どうやらこの女子は男子誰にでもそういう接し方をするようだ。思わず払った。振り返った清坂の目が引きつった。

「どうしたのよ」

「あまり触るのは誤解を招くだろう」

「え？ なんで？」

「いや、なんでもないが」

どう説明すればいいのだろう。男子の視点からすると羽飛の態度はかなりなれなれしすぎる。幼なじみだから仲がいいと決め付けるのは危険だが、たぶんたいして考えてはいないのだろう。しかし、まだ顔を合わせて数回の……もちろん立村の元つきあい相手だったというのものもあるだろ

うが……女子に対して、乙彦がそこまでしたいとも思えない。

「ふうん、変なの。とにかく、これから同じ委員なんだから、よろしくね」

あっさり引き下がり、清坂はすでに席についていた他の女子たちと話をし始めた。それなりに顔見知りもいるのだろう。二年、三年は女子のみ全員揃っているようすだったが、男子はまだほとんど来ていなかった。一年C組規律委員の南雲も、まだだった。

——やはり、南雲には謝らないとまずいだろう。

二席後ろを振り返り、乙彦はまず心積もりをした。

轟さんの件については久田さんも納得済みで、かえって褒められた。しかしながらやはり偉いのは店主。さからえないのだからあきらめよ、とのお言葉を賜った。つまり、負けは乙彦の方だと割り切りなさいという判決だった。

正直悔しくないわけがない。

だが、ここできちんと頭を下げておかないとこれから三年間、卑屈な思いでアルバイトを続けねばならなくなるだろう。規律委員として半年一緒に働くのも何かの縁だ。これは自分からきちんと向きあっておかねばなるまい。

隣の席で無言のまま本を読んでいる堤さんに目をやった。

英語科の同級生でありながら、今まで一度も話をしたことがなかった。かなり大人しそうな女子という印象はあるのだが、見た目が大雑把な感じがして、ちょっととっつきにくそうに見えた。うまくいえないのだが、女子特有のしゃれっけがないといえればいいのか。髪の毛をひとつにまとめているけれども、ほつれ毛がぼさぼさしているとか、それなりにきちんと制服を着ているのだが、なぜかブレザーのボタンが互い違いになっているとか、ブラウスはちゃんとアイロンがかかっているのだが、覗いた襟ぐりには汚れがびっちりついているのが見えるとか。ぱっと見た目ではわからないだらしなさを感じる女子だった。必然、話をするきっかけもない。

——だが、委員である以上、きちんと挨拶をしておいたほうがいいだろうな。

タイミングがつかめず、それも後回しにしておいた。

「関崎くん、どう思う？」

斜めひとつ後ろから、清坂が声をかけてきた。堤さんを差し置く形で乙彦も振り返った。B組の清坂と比べてみるとやはり、女子っぽさの匂いが違うと感じる。髪の毛のゆるる際の輝き方がその差だろうか。それとも時折漂う花のような香りだろうか。

「なにが？」

「委員会にしては、静かだと思わない？」

また意味不明の言葉を発している。B組隣の席にいる男子にも同じように相槌を求めた。

「だって、二年も三年も、みな、しーんと黙ってるよ。委員会なんだからもっとしゃべったっていいのにね！」

隣の席の男子が両腕を組みうーんと唸る。首を振った。

「いや、そんなもんだろ。もっともまだ、真打が来てないからなあ」

「東堂くんも言うね」

——B組規律は東堂というのか。

頭にひとりずつ名前を組み込んでいき、乙彦は真後ろの男子に挨拶代わりに頷きを返した。相手も乙彦に「噂は聞いてますぜ」とさらっと答えた。特に目立つことをしたつもりはないのだが、いつのまにか情報は他クラスにも流れているということなのだろう。立村経由なのだろうか。それとも清坂、藤沖、古川経由だろうか。黒ぶち眼鏡がど真面目なのかそれともコメディアンなのかわからない中途半端な顔立ちの男子は、清坂に答えた。

「ここだけの話、奴が目当てだろ。規律を選んだ女子のほとんどはなあ」

「まあね」

「奴が入ってきたらすげえ騒ぎになるぞこりゃ」

「想像はつくわよ。でも無理なのにな」

清坂の声はいつのまにか小声にちぢこまっていった。

——そんなに騒ぎになるようなことなのか？

乙彦の疑問は次の瞬間、あっさり氷解した。

「遅くなってすみません、どうも」

後ろの扉をそっと押して入ってきたとたん、二年と三年の女子一同が一気に振り返った。そおっと足音忍ばせて入りたかったのだろうがそうは問屋が卸さない。まだ顧問の先生が来ていないのが救いだ。乙彦は思いっきり身体をひねった。目と目が合った。無視というほどではないが、すぐに逸らされた。

「早く座れ、ほら」

後ろの東堂が手招きするのに、鮮やかな笑顔で片手を挙げる。どうも附属上がりの連中は、挨拶として右手を挙げるのが癖らしい。と同時にすすすと一年男子の並ぶ席に向かい鞆をすんと置いた。少し茶色っぽい髪型は、いかにも美容院でやっていただきましたという雰囲気でも飾られていたし、ネクタイも心持緩んでいる。それでいて汚らしさがない。乙彦の隣に座っていてやはり南雲を食い入るように見つめている堤さんと着くずし方はさほど変わらないのだが、だらしなさがぎりぎり見えないのはさすがとしか言いようがない。

すぐに席につくかと思いきや、先頭、一年A組、乙彦の脇に立った。思わず立ち上がった。向こうからわざわざ足を運んでくれたのならば、すぐに頭を下げればいい。運がよかった。感謝だ。

「南雲、この前は、申し訳ない」

いかげんなあやまり方をしたくなかった。顔をしっかりと見つめ、乙彦は頭を下げた。九十度、しっかり腹までまげて礼をした。二年方向からまたざわめきが聞こえた。

「どうしたの関崎くん」

清坂が問うのを無視し、乙彦は続けた。目の前の南雲は口を丸く開け、きょとんとしたまま突っ立っている。

「いきなりつかかったことについては、俺も反省している。これからも同じ仕事をする者同士

、よろしく頼む」

これでよかったのか？ 言い方がまずかったのか？

南雲は首をひねるようにして、次にきょろきょろと周囲を見渡した。耳元で、「悪いけど、俺に謝るよりも、轟さんに頭下げておいたほうがいいと思うなあ」「は？」

後ろの東堂が聞き耳を立てているのも構わず、南雲は乙彦の肩に手を当て、無理やり椅子に押し戻した。男としては小声だが、おそらく隣の堤さん、および清坂、当然東堂にも聞こえていただろう。

次の言葉に、乙彦は絶句した。

「どうもね、あのことがきっかけで、轟さん奨学生から外されたらしいからさ。詳しいことよくわかんないけど、世の中、壁に耳有り障子に目有り、ほんと大変だから、気をつけたほういいと思うよ。俺も人のこと、言えないけどさ」

南雲はそれだけ言うとそそくさと自席に戻っていった。

——奨学生から、あの女子が、外された？

慌てて南雲に東堂が仔細を聞きだそうとしている。斜め後ろの清坂も同じく。それにまた聞き耳を立てているのが見え見えの堤さんがいた。一年附属上がりの生徒たちの興味とは反対に乙彦は、南雲の言葉に何が意味されているのかを探っていた。

——それと、俺と、どう、関係あるんだ？

わからない。答えが見つかる前に、教室前扉が開き顧問の先生が入ってきた。

——どちらにせよ、俺はその轟さんに謝らなくてはならない、それだけだ。

——この学校に入ってから、なんでこんなに頭下げなくちゃなんないんだ。

頭の中に鉛のおもりを付けられたような日々が続く。乙彦は黙って教壇を眺めていた。噂よりもだいぶ穏やかに、初回委員会は進んでいて、いつのまにか二年と三年同士の間で委員長と副委員長、書記まであっさりと決まっていた。当然、知らない名前ばかりだったので興味も持てない。隣の堤さんが後ろの三人に露骨な顔して聞き耳立てている様子が丸見えだった

一通り事情を聞いた後、斜め後ろの席で清坂美里が言い放った。

「なあんだ、誰のせいでもないじゃないの、そんなこと」

他の一年男子たちがぼかんとしたまま清坂を見つめる中、規律委員会のトップを選任しているにも関わらず、口は動きつづけていた。

「なんか南雲くんの言い方だと、関崎くんのせいで琴音ちゃんが奨学金を受けられなくなったように聞こえたけど、違うよね。そんな証拠なんてどこにもないじゃない。単に」

「清坂さん、きついねえ」

南雲の合いの手もわりとクールだ。B組規律委員の東堂も頷いている様子だ。先頭で彼らに背を向けている乙彦には見えないが。。

「要するにこういうことでしょ？　ずーっと学年トップだった水口くんが青大附属から出て行っちゃったから、二番の人に奨学金を出すわけにはいかないって、そう学校側が決めただけなんでしょ？　なんでそれを関崎くんのせいにするわけ？　理由、わかんないよそんなの」

「そりゃまあそうっすけどねえ、ただタイミングがなあ」

南雲の言い分は決して乙彦を責めているように聞こえなかった。むしろ、運悪く正論をかざしてしまったゆえに、そのとばっちりが轟琴音に向かったというだけの事実関係を説明したに過ぎない。だから乙彦もそのまま、自分の心を静かに抱え持ったまま背を向けていたのだが。どうして女子はそう単純に決めたるのだろう。時には複雑なことを言い出したりするくせに。全くもって、理解できない。

立村から聞いていた「青大附属の委員会活動」とは、

「とにかく先輩が後輩の面倒をきちんと見るというのが慣わしなんだ」

だそうだが、今のところ規律委員会においてそういった気配は何もない。オリエンテーションとっぱじめにかの結城穂積先輩の強烈なお迎えを受け、心半分期待と不安もなきにしもあらずだったのだが、あっさり終わった。特に誰かに声を掛けられるでもない。二年、三年の規律委員たちはわさわさと教室から出て行くものあり、集団で固まっては、

「ねえねえ、これからアイスクリーム食べてかない？」

などとはしゃいでいる声あり。おそらく来週以降に詳しい内容が説明されるのだろう。

——規律イコール、水鳥でいう「生活委員」だから、週番とか何かやらされるんだろうな。

朝一番、生徒玄関で遅刻の取り締まりを行い、抜き打ちで服装・持ち物検査を行い、帰りは職

員室前で週番が集まって反省会を行う。確かそういう内容だったはずだ。

——となると、自然と上級生になっていくにしたがって、生徒会との接点も増えるか。

「生活委員」イコール、本来繋がっていくひとりの女子が頭の中に浮かんだ。

——水野さん、もうあの学校に慣れたらどうか。

意に染まぬながらも、けなげに微笑んでいた、お下げ髪の水野五月が水鳥中学のセーラー服を纏ったまま、目の前に漂っていた。

「関崎くん、途中まで一緒に帰ろ？」

水野五月の幻は、おかつ髪の子供によって霧散した。声もはるかに張りのある響き、決して誰にも似てない空気を纏っている。まだ教室には一年規律委員が座ったままだというのに、つかつかやってきて目の前に突っ立っているというのは、かなり目立つ。本来規律委員の相棒となるべき東堂も、また南雲もきょとんとしたまま清坂を見つめている。

「いや、別用がある」

「べつよう？」

乙彦の言葉を繰り返して、清坂はぶんぶんと首を振った。

「だって今日、バイト、ないでしょ？」

「ないが、他の用事がある」

——藤沖と待ち合わせていると言った方がいいのか？

ほんの数回顔を合わせただけの女子に、なぜ詳しい説明をしなくてはならないのか。あえて最低限の答えだけ交わした。清坂はかなり不本意そうな顔で唇をひんまげている。その背から覗き込むように堤さんが目を光らせている。

東堂が助け舟を出してくれた。感謝だ。

「あのなあ清坂、まずは元D組同士で一度、クラスのことについてだな、話し合う必要あるんじゃないか？ 南雲、お前もそう思わんか」

「あ、そっか。そうだね」

あっさり清坂も引いた。乙彦は目で東堂に感謝の意を伝え、素早く立ち上がった。こういう場、特に女子がやたらと入り混じっている場所に長居していても碌なことが起こらないのは経験済みだ。気心の知れた藤沖にまずは会って、奴の話を聞くほうが先決だ。約束は守るべきもの。後出しの誘いを断るのは決して間違っていないはずだ。

「けど、今度少し時間ちょうだいね。話したいことあるから」

「これから規律委員で半年間一緒なわけだから、話す機会はあるはずだろう」

言い残し、乙彦は南雲あてに一礼し、教室を後にした。南雲もあっさり、

「まあ、気にせんでも、なんとかなるっしょ。お互いこれからもよろしく」

気持ちよく挨拶を交わしてくれた。

——あれだけきつい一言ぶつけておいて、それはないだろう？

軽いのか、それとも計算高いのか？ 乙彦には理解しがたい人間の一人になりそうだった。

一度、雅弘と顔を合わせてみたい、そんなことをふと思った。廊下に出たとたん、清坂に聞き忘

れていたことを思い出したが、また戻る気にはなれなかった。

——立村の現状を、清坂はどう考えているんだろう？ あれでいいと思っているのか？
行きがけの会話で考えるに、やはり、納得はしている様子だったが。

補習自体は教師曰く「想像以上にみな進んでいる。夏休み前には十分、内部進学生の進度に追いつくことができるからこのまま気を抜かずにがんばれ」とのことだ。外部進学生たちの補習自体、少人数ということもあって、わからないことがあるとすぐにワンツーマンで教えてもらえる。しかも、教え方も教壇の上からではなく、直接机の脇で説明してもらえる。これはメリットが多かった。他の生徒たちの前で自分の弱点をさらけ出さなくてもよいというのは、青大附属の校風に慣れず混乱状態の乙彦にとって気が楽なことだった。

とはいえ、やはり、補習のない放課後、そして教室には妙な圧迫感が残らず、清しい。

乙彦は一年A組の教室に戻った。他にも誰かいそうかと思いきや、いるのは藤沖ひとりだけだった。

「よお」

「遅れてすまない」

「たいしたことじゃない。今日は委員長選任だけだろう。規律はどうだった」

規律委員長が誰かを聞かれたのか、そう思って委員会用ノートを探す。藤沖は手を振った。

「違う違う。関崎の正直な感想を聞きたい」

「感想、か？」

どう答えたらいいのか迷うところだが、正直に答えるしかないだろう。

「思ったほどではなかったな」

「思ったほどではないとは、いかに？」

古風な言い方で藤沖は訊ね返してきた。

「噂に聞いていたように、上級生が下級生を面倒見たがったりする傾向が一切観られなかった。むしろ、中学とほとんど同じ乗りのように思えたが。もちろん委員会初日だからかもしれないが、全く仕事の説明がなかったのが物足りない」

「そうだな、それは言えている。評議委員会も同じだったが、まあこれは特殊だろう。お前も知っている通り、評議委員長は予定通り結城先輩で決まった。あとは先輩の演説だけだ」

「そうか」

想像がつくだけに、興味深い。

「だが、結城先輩はかなり手ごわい相手であることも確かだ。それはよく覚えておいたほうがいい」

また藤沖は先輩ぶった口調でもって話を続けた。何度も思うことだがその、目線を上にさせられるような雰囲気は正直、乙彦は苦手だ。

「評議委員会はほとんどが持ち上がりで決まるような感じではあるな。二年、三年に関して言えば俺の知っている先輩たちのほとんどが、どこかの委員長、もしくは生徒会役員を務めているわけだが。だいたい話をすり合わせてみて見えたところによるとだ」

回りくどい言い方で藤沖なりの分析が始まった。乙彦もとりあえずは黙って拝聴することにした。

「まず、C組に元評議委員が終結してしまったというのは、学校側の意志らしい。中学の轍を踏まぬようにしたいという教師たちの考えが表面化したということだ。これはこの前やたらと麻生先生が語っていたから、わかるな」

——単に立村を委員にしただけではないのか。

古川こずえの読みに賛同しなくなっていた乙彦は黙っていた。

「その結果、中学時代評議委員を経験したことの無い羽飛という男が、元評議委員長を務めた天羽を破って任命された。同時にB組でも番狂わせが起こった」

「清坂のことか」

「その通りだ。やはり本人も気付いていたようだな」

——立村が教えたらしいからな。

やはりしばらく黙っていたほうがよさそうだ。乙彦は頷いた。

「B組の女子評議はなんと、外部から入学してきた奴だった。お前、補習で顔合わせたことあるだろうがかなりこいつは面白い奴だ」

女子に対して「奴」をつけてしまうのは共感できた可能性が高い。「さん」でもって片付けるのはやはり他人行儀である。しかし乙彦にはその女子の顔が思い浮かばなかった。女子とは数人を覗いて最小限の会話しか交わしていない。興味もない。

「清坂も三年間評議を勤めてきていてそれなりに評価もされてきていたはずだ。だが、女子の間で不評だったのがたまたま露出してしまったということで、微差ではあるが落とされた。もちろんすぐに規律へ切り替えてそこはうまくもぐりこんだが、これはかなりの事件として評議委員会内では受け止められている」

「つまり、それはどういうことなんだ。元評議委員が高校の評議委員会にもぐりこめなかったということが、そんなに大事件になるのか」

「なる」

きっぱり藤沖は言い切った。

「結城先輩としても、一年のクラス編成をチェックした段階でもう少し元評議が集まるものだと見込んでいたらしいが、この状況だと全く予測が立たないと感じているようすだ。暫くは二年、三年中心で進めていくのでそれはそれで問題ないと思うが、半年ごとに人選が変わる可能性を考えると、なかなか難しいと感じているようだ」

「それはそうだろうな」

「さて本題に入る」

さっさと入ってほしかったのだが。乙彦は藤沖に促され、窓辺に腰掛けた。戸を開けているせいか、制服の隙間から冷たい風がすうすう入る。ベルトを締めなおしたい気分だった。

藤沖も隣に腰掛けた。目の前には扉が閉じられたまま。誰もいないと目に伝わる。四角い頭を何度もかきながら、藤沖は声を低くした。

「関崎、後期の評議委員を引き受けてもらいたい」

——いきなり何考えてるんだ？

驚きで声も出ない。尻が窓辺から落ちそうになり慌ててしがみついた。

「そう驚くな」

「驚かないわけがないだろう。まだ一週間しか経っていないんだぞ！」

「いや、半年はあつという間だ」

「まだ規律の流れもつかめていないというのに、まさか、なにをいきなり言い出す？」

「理由はこれから説明する。かなり長くなるから、その辺は覚悟してくれ」

覚悟も何も、頭の中で発するべき言葉が見つからず、舌がぱきりと固まっている。

藤沖は意にも介さず、話を進めた。どうもこの冷静な態度がいらいらするのはなぜだろう。

「俺は、青大附高に入ってから、応援団結成を頭においていた」

前からちらと聞いてはいた。藤沖は両腕を組み、視線を扉上へと向けた。OHPで何か壁に映し出されているような眼差しだった。

「中学時代からそれは考えていたが、いろいろあり生徒会活動で忙殺されてしまった。これは俺の計算違いでもあるが、もちろんそれに後悔はない。それはそれで自分にとってプラスだったと思う。だが、俺が本当にやりたかったのは、学校や委員会連中と切った張ったの勝負をかけた、生徒会の女子連中と喧嘩したりすることではない」

言葉を切った。

「俺は、自分の身体を張って、青大附属全体の意気を高めたかった。つまり、青大附属という学校内、隅から隅まで行き渡るような気迫を漲らせたいと考えていたんだ」

「つまり、それが応援団結成なのか」

わかるようで、わからない。それならば素直に生徒会へ入るのもひとつだし、現在の評議委員会で全力を尽くすのが一番早いような気もするが。

「委員会にせよ、生徒会にせよ、結局は自分たちの利益が優先される。もしくは教師たちとの戦いかだな。俺はせせこましいところで無用な戦いはしたくない。むしろ、全校一丸となり、運動なり学校祭なり、もしくは勉強なり、それぞれのフィールドで活躍している奴らに関係なく応援し、それが青大附属全体の情熱として燃え盛る、そういう学校を作り上げたいと本気で考えていた。そして、やっとそのチャンスが巡ってきたはずなんだが」

乙彦を見た。まるで「お前の世話をするために」と言わんばかりに。失礼な言い草だと思うが、あえて言葉には出さないでおく。

「計画はやはり、狂ったというわけだ」

「なぜだ？」

なんとなく言いたいことはわかるような気がする。首筋から背にかけて風がすり抜けていく。氷のようで冷たい。肩を叩かれ、そのまま手を置かれた。

「俺は、やはり生徒会長の鎧を脱ぐことができなかった、そういうことだ」

——生徒会長の鎧だと？

乙彦が水鳥中学時代、自分の器にそぐわぬと考えてあえて避けたその座。

憧れがなかったとは言わないけれども、後輩・内川に譲ったことを後悔はしない。

ただ、生徒会長が重荷だったというのは理解できない。

重荷というよりも、誇り、武器、そうなるべきものではないのか？

聞き捨てならぬ。乙彦はぐいと藤沖を見返した。訊ねた。

「生徒会長だったことを、悔いているのか」

「まさか、それはない。充実した日々だった」

すぐに否定すると、また肩をぽんぽん叩いた。手を離そうとはせず、視線はやはり、目に見えぬ壁のOHP画面の向こう。藤沖の瞳に映るものを読み取ることはできなかった。

「生徒会に関わると自動的に上級生たちとの繋がりが増える。先生たちとも同じことだ。さらに先輩たちが附属高校に持ち上げればそちら方面からも情報が流れてくる。つまり、俺は早い段階で、青大附高生徒会役員としての行動を求められていたということだ。もちろんそれは誇りに思うべきことだろう。だが、俺のやりたいことの邪魔になるのも、また事実だった」

「やりたいことが、その、応援団か」

別に生徒会をやりながらでもできないことではないように思えるのだが。

「そうだ。中学二年に上がった段階ですぐ立ち上げるつもりだったがその時は生徒会役員だったこともあり身動きが取れず、二年で生徒会長に選出されてからはもう言うも及ばぬといったところだな。幸い先生たちには、生徒会長の立場を利用して話し合いをちょくちょく持って、将来は応援団を立ち上げたいという俺の意志を伝えてある。先輩たちにも同じくだ。おそらく、邪魔をする奴はいないだろう。仕事を除いてはな」

「仕事とは、評議委員会のことか」

「そうだ」

藤沖は頷いた。手はまだしつこく肩に置かれたままだった。

——いいかげん外してもらえぬものか。重いんだが。

振り払うわけにも行かず、乙彦はくしゃみをして自然と肩を揺らすそぶりをしてみせた。

「あ、悪い」

やっと気付いたのだろう。手を揺らすようにしながら、藤沖はまた頭をかいた。

「内部生のみで行われたオリエンテーションの初日のことだ。麻生先生に俺ひとりだけ呼び出され、四月以降の一年A組をひっぱっていく上で前期評議委員を務めるよう指示を受けた。この前の麻生先生が話した内容とは矛盾しているとも思うが、実際リーダーがいないとまずいという判断もわからないわけではない。それに前期のみなら、まあなんとかなるだろうということもあり、俺は引き受けた。ついでに外部生の案内役もおおせつかったわけだが、こちらは特に抵抗なく受けた。後悔はない」

「それはどうも」

ありがたいことだが、やたらとしつこいような気がするのはなぜだろう。

「さっそくクラスメートの顔ぶれを見直し、まず女子でひっぱり役にふさわしい古川を指名した。あいつは下ネタ女王とか呼ばれていて特に委員経験もないが、女子の中では一番話もわかるし男子の間でもなかなか気持ちのいい奴として評価されている」

——気持ちのいい奴、なのか？

疑問は飲みこむ。

「次に他の委員連中をピックアップした。これも、あっさり決定した。だがここで俺ははたと、頭を抱えた」

「何をだ」

本当に両手で頭を押さえている。藤沖の口調が固いくせに行動がコミカルなのが笑えた。

「これはあくまでも俺が評議委員であればこそ、きっちりとおさまったことだ。だが、もう俺は委員会活動にも生徒会活動にも足を突っ込む気はない。もちろんクラスを支えていくことに異存はないが、本来やるべき応援団の結成をこれからは最優先で考えていきたい」

「いいんじゃないのか。評議をやりながら応援団をやっても」

また背中に手を置かれる。やたらと触りたがる奴だ。くすぐったい。

「関崎、お前は青大附属特有のこだわりをまだ理解しきっていない」

「それほどでもない、思うが」

「一度委員活動で頭角をあらわしたら最後、さっそく上級生たちから次期委員長へのお声がかかる。うちの学校は上級生のリンチなどといった意味不明の暴力こそないが、委員活動もしくは生徒会活動という名でのひいきは正々堂々で行われている。もちろん断ることもできるが、この学校で支援を要請することもできなくなるのは痛い」

「支援か」

「そうだ。応援団結成に当たっては、一年のうちに立ち上げるつもりだ。だが下級生がいない。来年まで待つしかない。その間、上級生から下手な反発を食ったら最後だ。つぶされないと限らない」

それはわからなくもない。中学時代、陸上部でしごきを受けた経験者の乙彦は頷く。

「無用の喧嘩をふっかけたくはない。むしろ応援団が存在することは上級生たちにとっても望ましいことなのだと、今は訴えているところだ」

「たとえば」

「結城先輩にはすでに了解を得ている。あとは二年にどう話を持っていくかだが、結城先輩が味方ならば十中八九うまくいくだろう。あの人のカリスマ性は想像を絶するものがあるからな」

——確かに。

「だがどちらにしても、俺以外で評議を任せられる奴をこれから探さなくてはならない。いくつかの案もないわけではなかったが、天は俺を見放さなかった。つまりだ」

藤沖はすっと飛び降り、乙彦の前に立った。すべてを語り尽くしたかのような清清しさに満ちている。それが外のグラウンドや中庭ならば素直に受け入れられるものなのだろうが、締め切った教室の中でそんな顔をされても、乙彦は困るだけである。

「関崎、お前こそ、このクラスを率いるにふさわしい人材であることを、ここで宣言したい」

「いや宣言しなくてもいい。褒めてもらうのはありがたい」

かゆくなりそうな言葉に思わず手首をかく。

「最悪のパターンも思案していたが、関崎が俺の後釜に入ってくれるのならば、なんら問題はない。俺は心おきなく青大附属の応援団結成活動にすべてを費やせる」

「いや、その前に俺は現在、規律委員なんだが。藤沖、お前に勧められたからというものもあるが」

「これもすべて、俺の計画通りだ」

ぎょっとすることを、藤沖は続けて言い放った。もちろん眼差しは爽やかなまま。

「いきなり外部生がわけのわからない中評議に入って疲れるよりも、まずは前期のうちに青大附属の委員会活動がどういうものかを把握してほしい。その上で後期、俺が降りた時にためらうことなく立候補してほしい。もちろん、前期の段階で俺は関崎に、評議委員会に関してすべてのノウハウを与えるつもりだ。また、お前も規律委員会でいろいろと繋がりを作っておけば今後の評議委員会活動においてプラスになることは請け合いだ」

「ちょっと待ってくれ。まだ規律委員会が終わったばかりだぞ」

「何よりも、関崎の強みは」

さらに信じがたいことを、藤沖は連呼した。

「お前は女子受けがすこぶるよい。それでいて俺たち男子の間でも評判がよい。青大附属にきて一週間だが、お前の名前、もしくは顔を知らない奴はそういない。水鳥中学から単騎、乗り込んできたナイスガイと誰もが認識している」

「ナイス、ガイってなんだそれは」

それに「女子受けがよい」とはどういうことだろう？ 藤沖、もしや、何か悪いものでも食ったのではないだろうか。酒を飲んだのか、アヘンでもやったのか。乙彦が水鳥中学時代、女子たちから「あのアホシーラカンス」とこけにされていた事実を知らないらしい。

「いいか。今回、評議委員会の人選を考えてみる。なぜC組の評議が天羽でなくて羽飛に決まったのか？ 簡単に言えば、天羽の元評議委員長という経歴よりも、女子受けのよく力も十二分にある羽飛が評価されたからだ。なぜB組の清坂がぽっと出の外部生に評議の座を奪われたのか？

あいつも男子たちと馬鹿やるのが好きな奴だが、女子同士は今ひとつしっくりいってないらしい。そのあたりが敗因だ。まだたくさん同じような例はあるが、なんにせよお前の女子受けのよさは、利用しないことはない」

「勘違いしていると思うぞそれは」

女子だけではない。この学校の男子も、いったい何を言っているかわからない。

やたら目を輝かせて乙彦を説得しようとする藤沖に、ただぼかんとしたまま、足をぶらつかせるだけだった。

乙彦は窓から降りた。ひとり高いところで座っていても、足が地に付いていない以上正しい判断がしかねたからだった。自分の舞い上がりやすい性格も、ちょっとおだてられるとすぐその気になってしまういいかげんさも、周囲からさんざん指摘されてきていた。認めたくないが事実だ。中学の欠点を持ち込みたくはない。

「藤沖、ひとつ聞きたい」

頭の中でまずは、きちんと聞くべきことを整理した。深呼吸を二回。見えないように行い、乙彦は片手を握り締めた。

「なんで、うちのクラスに元・評議委員長がいるというのに、無視をするんだ」

理由はある程度把握しているつもりではいるけれども、いつも曖昧にはぐらかされてしまう。どうもそれは落ち着かなかった。

「藤沖が立村を軽蔑したい気持ちはわからなくもない。だが、いきなり全く何もわからない外部生の俺に、次期評議委員といった重大任務を任せたるのには疑問がある」

藤沖の口調を少し真似してみた。

「そうじゃないのか？」

「お前を高く評価したからだろう、それとなぜあいつとなんの関係があるんだ？」

何度か同じ質問を投げかけたことがあるような気がするが、いつも藤沖本人からははぐらかされるかもしくは拒絶されるかのどちらかだった。だが、乙彦からしたら、

——そこまでかたくなに拘るお前の方が変なんじゃないか？

そう思わずにはいられない。

「もし俺が藤沖の立場だとしたらだ。いきなり入学したての外部生に半年後の話など、まだしなないと考えるからだ」

「だから何度も言うだろうが」

「俺の能力を見極めたというが、まだ一週間しか経っていないのに人間性を決め付けることができるのか？ 仮に俺が、立村の時のように裏切る結果となる可能性もないわけではないだろう」

もちろん、隠し立てなどするつもりはない。だが藤沖の考えでいくとちょっとしたことで乙彦もあっさり最低評価を下される可能性だってある。

「それはない。俺の目は正しい」

藤沖は肩を何度も揺らすようにして否定した。

「俺はもともと人間を見る目がある方だ。能力のある奴は男女関係なく評価する。またそうでなくては青大附中の生徒会長などやってこれなかった。その俺が関崎、お前を高く評価した、だからという話では終わらないのか？」

「藤沖、俺が水鳥中学時代何をしてきたかを知らずにそれを言い張るのは間違っている。もちろん後ろ暗いことなど何もしていないし、調べられても困らないつもりではいるが、それでもいきなり短期間で人間性を決め付けるのはおかしいぞ」

口にすると突然息が詰まる。身体の中から「ふざけるな」と駄目押しされているみたいだ。重

ねて藤沖もまた追求してくる。

「俺が間違っているというのか？ 自分に自信がないなどとふざけたこと言うんじゃないだろうな」

「もちろんそれはない」

——ないが……。

うまく言えなかった。藤沖がなぜここまで激しく訴えようとするのか、乙彦の脳内では分析不可能だった。分析なんてしない。乙彦なりの代行案を述べる。

「俺の人格うんぬんはどうだっていい。だが俺がもし藤沖の立場だとしたら、少なくとも現段階で次期評議委員を選ぶなどといったことはしない。俺も元生徒会副会長だ。そのあたりはよくわかっている」

元・生徒会長、元・生徒会副会長。「副」のつく差でまた心がじりじり音をさせる。

乙彦は一度、言葉を切った。

「後期委員の選出はいつぐらいの予定だ」

「九月から十月にかけてだろう」

「生徒会役員改選前だな」

突然、藤沖がはっと、乙彦の眼を睨み据えた。

「お前、まさか」

——なんだなんだ？

全く思っても見ない言葉で、話は思いっきり直角に折れ曲がった。

「生徒会を、狙っているのか？」

——なんでそちらの話に持っていくんだ？

初対面では気がつかなかったがこの、藤沖勲という男、実は結構おっちょこちょいなものかもしれない。いかつい面とは正反対に、うっかり野郎なのか。それとも隠れ妄想野郎なのか？ 乙彦はもう一度藤沖の顔を黙って見つめた。肯定のつもりではないけれども、早合点男らしき藤沖はいきなり頷いた。どうやら乙彦の判断は、間違っていないようだった。

「そうか……生徒会役員狙いだったか……」

藤沖も黙ってくれたので、乙彦なりにまた、作戦タイムを取ることができた。

今まであちらこちらで得た「青大附属極秘情報」をつなげてみると、入学前から藤沖が乙彦に積極的な接近を試みた理由が窺い知れた。

——応援団結成のために、俺を利用しようとしたというのか？

しかし、それはあえて否定したかった。乙彦の辞書に「友だちを利用する」といった例文は存在しないし、そういう奴とはまず最初から付き合っていないはずだ。そこまで自分の友人鑑識眼は狂っていないはずだ。

はあっ、っと息を吐いて肩を落とす藤沖を眺めつつ、乙彦は頭の中を整理した。

こいつに限って、利用なんて姑息な真似をするわけがない。応援団を本気で結成したかったのだろう。気持ちはわからなくもない。乙彦も水鳥中学時代、周囲からはピエロ扱いされつつも精

一杯の努力でもって、学校祭の先生VS生徒座談会を企画したのではないか。いろいろ物笑いにされたけれども、あの時燃やした真っ赤な炎は消えてはいない。

もし藤沖の胸奥に、あの学校祭フォークダンスと同じような紅炎が燃えていたとするならば、乙彦は決してそれを非難できない。炎を絶やさぬよう薪をくべる手伝いをするに違いない。乙彦の信じる自分が正しければ、それを受け入れたいと思う。

いや、受け入れなくては。自分が友だちを選ぶ上での判断を、否定することはできない。

——知らないところで手を回されていたというのはむかつくが、気持ちはわかる。だが、今、この時期になぜいきなり、そんなことを言う必要があるのか？ 藤沖もまだ、やるべきことがあるだろう？ 二十一人しかいないとはいえ、英語科をこれからどうやってまとめるとか、それに。

ひとりですっと姿を消した、五時間目後の立村の姿を思い浮かべた。

片手に一年クラス委員一覧の綴られた紙を持ち、手渡していったあの様子。

——やはり、あれはまずいだろう？ いくら藤沖が納得いかないとしても、立村をあのまま孤立させて、いろんな行事……そうだ、まずは宿泊研修がある、そのあたりをやっていいのかとか、麻生先生のどう考えてもあれはまずいと思われる言動とか。あれこそ一学期のうちに片をつけねばならない問題じゃあないのか？

いかなる理由があろうとも、仲間外れを出すのは人間として絶対に許してはならない行為だ。藤沖には個人的感情をまず差し置いて、クラスの空気をよりよくするための義務があるはずだ。乙彦が評議委員だとしたら、まず、それから手をつける。

まずはそれからだろう？

勘違い野郎の藤沖に、それを訂正するのは、今は止めておく。

まず奴が、何を考えているのかを確認したい。

「関崎、悪かった。確かに前が生徒会へ立候補するつもりならば、俺の提案は早とちりだった」

——今でも十分早とちりだと思うが。

しばらく無言だった藤沖だが、頭をかきながら無骨な顔をゆるませた。どうやら落胆はしたものの怒ってはいないらしい。

「確かに前が水鳥中学の副会長だ。そう考えるべきところだった。外部生であろうとも書記もしくは会計だったら一年の段階で出られるはずだしな。悪かった、悪かった」

「いや、謝られてもこちらが困る」

——そんなこと全然考えてないってのに。

乙彦の心声を一切気付かず藤沖は思い込みロードを突っ走る。気持ちを落ち着いたのかどうなのか知らぬが、

「ただ、それなら、お前は今すぐ、会っておくべき人がいる」

「いや、それは別に急ぐことでもないだろう」

「いやいや、今日関崎は補習がないのだから？」

言われてみるとその通りである。頷いた。

「明日は補習だろ？」

同じく頷く。

「ならば、すぐに行くべきだ！」

力が入った。藤沖は再び乙彦の肩を叩いた。

「お前、確かオリエンテーションの朝、結城先輩と話をしたと言ってたな」

肩の皮を掴まんばかりに握り締めるのはやめてほしい。やめろという前に事実を挙げられ答えるのが先。ゆえに「離せ、痛い」を伝えるタイミングがずれる。

「話はした。名刺ももらった」

「評議委員会の時も結城先輩はお前についていろいろ聞いてきたしなあ」

ひとり納得顔で斜め下を見つめやり、

「どちらにしても、俺を通せば結城先輩はすぐに会ってくれるはずだ。来い、すぐ行こう」

「いやいきなりというのは失礼じゃないのか？」

話をしたといっても、たかが一度だけなのにずいぶん藤沖は性急である。急ぎの用事なのか？ それか？ 何よりも先輩に対していきなりこちらから決め付けるような行動は避けたほうがいいのではないのか？ 先輩というものが、理不尽でかつ非常識なものとして刷り込まれているのだろうか。自分でも驚くくらい強い抵抗が粘っている。藤沖は当然、何も気付かない。

「いいか関崎、お前はまだ青大附属の校風を知らないから驚くだろうが、上級生の大半は下級生に対して紳士として接することを心得ているんだ。これは将来俺たちも同じ振る舞いをせざるを得ないが、少なくとも今までいわゆるしごきを受けた経験はない。上級生がらみのトラブルも生徒会内では全く経験ない。むしろ面倒なのは下級生だがそれはどうでもいい。とにかく、お前は俺の言うことを素直に聞いて、結城先輩と一度話をすべきだ」

「断る、それは」

「いいから、ここに座ってろ！」

突然、藤沖の全腕力が乙彦の両肩にすじりとのしかかった。

今まで「同級生」でしかなかったはずの藤沖に、何かが乗り移ったかのように。尻に触れた椅子。そのまま押し付けられた。有無を言わせずとはこのことか。

「おい、お前何をする」

怒鳴りたいのに力が入らない。藤沖の目つきが違う。口の端がかすかに上がっているので笑っていることはわかるのだが、それ以上に乙彦の知る、炎らしきものが浮かんでいた。

二年前見たあの学校祭、フォークダンスの紅炎が、映っていた。

「いいか、今から俺は結城先輩に連絡を取る。それまでここにいろ。動くなよ」

太陽の周りをゆらゆらしながら覆っているあの紅炎に乙彦は完全にやけどを負わされていた。そうでなければいくらなんでも、素直にこっくりと頷いてしまうなんてこと、ないはずだ。あの水鳥中学生徒会副会長・別名「単細胞のシーラカンス馬鹿」と蔑まれた乙彦が、自分よりはるか

に堅物で勘違い野郎の藤沖の言うなりとは、誰も思わないに違いないから。

——なぜ、言い返せないんだ、俺は！

藤沖はもう一度振り返り、指差して命令した。

「いいな、待ってろ、動くなよ！」

藤沖が去った後、乙彦は立ち上がり両腕をぐるぐる回した。叩かれつづけた肩がこわばっている。完全に身体がコントロールを失っている。藤沖がいる間感じていた奇妙な圧迫感が少しずつ抜けていく。同時に窓辺から淡い夕陽がゆらいですべりこむのが見えた。

——俺は何をやってるんだいったい。

この学校に入って以来、自分が自分でなくなっているような気がする。

経済的な差があるとか、価値観の違いとか、そういうものでは片付けられない何かがある。

もちろん、憧れて入った学校だ。まだ夢見がちにい判断しているところもないわけではないし、それ以上にまぶしすぎて目を細めているだけなのかもしれない。これからゆっくりと慣れていけばいいと安易に思っていたが、流れる窓辺の景色は自分の想像以上にめまぐるしく変わっている。乙彦の知らないところで勝手に物語が紡ぎ出され、いつのまにかその登場人物として作者たる藤沖の筆で押さえつけられている。

——これが、俺の高校生活なのか？

藤沖の炎がもし、自分のかつて燃やしていた情熱と一緒に燃やせばそれを否定することはできない。しかし、一緒にその紅炎にあぶられた奴の気持ちはどうなるのだろう？ 一緒に燃え滾ればそれでいいのだが、まだ身体に油が染み込んでいない中でいきなりの点火、それはないだろう？

——なんであいつは俺を弟分扱いしようとするんだ？

決して望んでいた扱いではない。なのに、藤沖の手でしっかとコントロールされてしまっているひ弱な自分が、教室でぽかんとアホ面しているわけだ。しかも、反抗もできない。こんな自分が果たして、かつての関崎乙彦だったのか。認めたくない。

——こんな生活を、俺は求めていたのか？

椅子と机と一緒に蹴った。もちろん手加減はした。こぶしで思いっきり殴ったのは机だけ。指が痛いだけだった。ばかばかしい。

——仮に藤沖が後期評議委員を降りるとしたら。

乙彦はすぐに答えを導きだした。これしかない。普通ならまず、これしかないはずだ。

——問題がなければすぐに元・評議委員長だった立村にお鉢が回ってくるはずだ。

来ならば、それが自然だろう。しかし誰もそれを言い出そうとしない。

もちろん他の連中が乙彦の力を見込んで絶対多数で選んでもらえるのならば、その時は喜んで立つ。だがその際はかならず、

——規律委員に立村を押し込むに決まってるだろう。

空いた男子規律委員のポストを、藤沖は誰で埋めようとしたのだろう。今までの話だと絶対に立村が入ることはありえない。だが、もしも乙彦が評議におさまったとしたら……。

突如、むくむく湧き出す炎が腹の底から湧いた。

思わず仁王立ちした。

全身がすっと、真っ直ぐな一本の炎として、しっかりと立った。

知らず知らずのうちに足を踏ん張っていた。

——そうか！

この感覚、思い出した。

そうだ、二年前の水鳥中学生徒会にて感じたこのひらめき。

頭で考えることしか知らなかった乙彦が初めて知った、稲妻のひらめきだ。

あの時、なぜ当時一年坊主だった内川を生徒会長に立候補させるという名案が浮かんだの
だろう？ 普通の乙彦なら絶対に思いつかない案のはずだ。たかが陸上部の後輩で、のほほんとし
たよわっちい男子を、なぜ乙彦は会長として「育てよう」などと思ったのだろうか？

理屈では繋がらなかったあの発想。唯一、総田をぎゃふんと言わせたあの案を思いついた時と
、感覚は一緒だった。

——藤沖の案を呑み、俺が次期評議委員になれば、自然と規律のポストが空く。

——そうすれば俺の推薦という手でもって、藤沖に文句を言わず立村を規律委員に押し込む
ことができる。女子がなんと言おうと、俺は評議委員だ。青大附属のクラスにおいてトップの地
位の間人となる。そうすれば、立村の立場はもっとよくなる。俺の力で。

藤沖が評議委員である以上、今の立村はいろいろ気を遣いそのまま目立たぬ格好でいるだろう
。それが本人の望みならば仕方がないとも言えるが、乙彦は知っている、あいつがあれで終わる
ような男じゃないことを。青大附属上がりで最も多く顔を合わせてきたのは立村の人間性にいや
みなものを感じなかったからだ。藤沖に対して感じたのと同じく、乙彦は自分の人間目利きを自
覚している。決して、間違っていない。このままで終わらせてはまずい男だと、乙彦は理屈
と直感両方で判断している。

何があったのか、所詮誰から聞いても本当のところはわからない。

乙彦は、自分の培った判断を、そのまま選ぶだけだ。

——それは、決して、間違っていない。

根拠のない自信は、ある。

窓辺でもう一度流れ込む夕陽を見上げた。雲が思ったよりも早く横に進んでいく。四月は暮れ
るのもまだまだ早い。冬空気が若干残っている、その冷やかさを乙彦は吸い込んだ。身体が
震え、咳き込んだ。ブレザーの奥にかいた汗が冷たく凍ったようだった。

——中学の時と同じ過ちはもう犯さない。

待つ。乙彦は言い聞かせた。

「関崎、待たせた。いたか、いたか」

「待ってると言ったのはお前だろう？」

文句を言うだけの余裕が生まれたようだった。藤沖が教室に戻ってきたのは十分後だった。夕陽交じりの冷たい空気は身体に染み渡り、藤沖へのわけわからぬ苛立ちも冷えていた。

「結城先輩だが」

藤沖はまた肩をぼかぼか叩いた。

「今すぐ来いとのお沙汰だ」

「今すぐ、って本当か？」

「そうだ、今すぐだ。来い」

「ちょっと待て、どこへ行く？」

行くもなにも、藤沖がまた強引に腕を取り教室からひっぱり出そうとするのに反抗する。藤沖も立ち止まり、奴にしては早口に続けた。

「これから結城先輩の家まで案内する。どうやら結城先輩は関崎と話をしたいらしい。先ほどの話も伝えてある。意志があるにせよないにせよ、一度先輩の部屋まで連れて来いとのことだ」

「先輩の部屋とは」

自宅に行けというのか？ 足をつっぱるとさらに藤沖が腕を引いた。

「いいか。先輩の言うことはみな絶対なんだ。特に結城先輩は、青大附高における最大のキーマンだ。この人を通せば大抵のことはうまくいく。特に関崎、お前は早い段階で結城先輩に一目置かれている。これはすごいことだ。とにかく来い。俺の言うことを聞け」

「バスか」

「チャリだ。だいたい二十分くらい漕げば着く」

命令口調も、勝手に決められたルールも、今の乙彦には怖くなかった。

——俺には俺の、考えがある。

短絡的な発想でしかした古本屋でのしくじりを、糧にしない乙彦ではない。かっとなりわめきちらし、勘違いしてすつとぶガキではない。あの冷たい空気と流れる夕陽を見つめた後、乙彦の中で何かが切り替わった。いささかはしゃぎがちの藤沖に乙彦は、今日一日従うことにした。

——まずは、後期評議委員になってから、どう動けばいいかを考えよう。

乙彦は一年A組次期男子評議委員の打診を、自分ひとりで受け入れた。

四月には雪なんて降るわけないのに、藤沖の自転車にくっついて走っているうちに目の前をちらちら白いものがちらついて消えた。ハンドルを取られそうになるが、うまくこらえた。

「そろそろだ」

「わりと近いな」

だいぶ身体がなまっていたのがわかる。ふくらはぎが腫れてきている。気付かれてたまるか。乙彦は自転車から降りた。あちらこちらに汚れた雪の塊が残っているで、幼稚園の遊び場程度の芝生が広がっていた。きちんと刈り取られているから、草むらではないだろう。

「その辺に自転車をつけておけ」

「ここに、か？」

「いつもそうしている」

藤沖は慣れた風に、その芝生へ自転車を下ろし、茶色い木造の建物横に自転車を留めた。丁寧に鍵をロックした。

「ここでいいのか」

「そうだ。ちなみにこれはいわゆる雪隠というものだ」

「せっちゃん？」

「結城先輩の部屋から一番近いトイレだ」

確かに昔、「雪隠」という言葉が存在したらしいとは聞いているが。疑問を口にする前に藤沖は、例の如く丁寧なレクチャーを行ってくれた。

「結城先輩はほら、あの家に住んでいる。よく工事現場で使用するようなプレハブの物置を自分専用の部屋にして生活しておられる」

「あそこか？」

観れば言われた通りの、白っぽく屋根が平らな物置小屋がちんまり建っている。だいたい大またで歩いて十歩くらい先だろうか。かなり薄汚れている。

「一人暮らしか」

「とも違う。結城先輩の御自宅は、ほら、もっと向こうの大きな建物だ」

視線を斜め上に向けてみると、確かに二階建ての潇洒な建物がでんと建っている。雰囲気としてはベルサイユ宮殿……ほどではないにしても、かなり手が込んでいる。少女漫画の花を背負った背景が似合いそうだが、乙彦の記憶する結城先輩にはどう考えても不釣合いだ。

「間違っアベックが彷徨い込むこともあるそうだ」

「なぜだ」

「まあ、そういうことだ」

よくわからないことを藤沖は付け加えた。

「とにかく結城先輩の指示により、俺はお前を連れてきた。連れてきたのはいいのだが、俺は玄関先で失礼する」

「お前も一緒に呼ばれたんじゃないのか」

てっきりふたりセットでと思っていたのだが。藤沖は首を振って、肩を竦めた。

「結城先輩はお前と話をしたらしい。おそらくいろいろと言って聞かせたいこともあるのだろうな。俺は今まで何度も結城先輩とあの部屋で話をしたことがあるので、今のところは遠慮しておく。俺の仕事は今日、お前を連れてくることだけだ」

妙にそこだけ力が入っているのが不気味だ。

「それならそれでいいが」

「関崎、ひとつ聞いておきたい。お前の好みは」

いきなり藤沖は真剣に訊ねてきた。

「好み？」

「芸能人で好きなタイプなどはいるのか」

「いないが」

ぶっきらぼうに答えた。

「『日本少女宮』は嫌いか」

「知っているだけだ」

あれだけ人気の高い少女アイドルグループを知らない方が変だろう。一通り顔はすべて見分けられる。だが、それだけだ。巫女の衣装を着て全員で踊る「巫女ちゃんになりたい！」

くらいはメロディも歌も覚えている。

「そうか。アイドルに拒絶反応はないな」

「そういうことか」

名刺の内容を思い出し納得した。安心させておいたほうがいい。乙彦もかつての自分とは違い、ある程度律することができるのだから。

「藤沖、心配しなくてもいい。結城先輩の前で芸能人を罵倒するような愚かな真似はしない」

「いや、俺が心配しているのはそんなことではないんだが」

そこまで言いかけ、藤沖は大きく溜息をついた。

「まあ、男同士だ、たいしたことはないだろう」

ひとりごちた後、背中を押した。

「入り口で俺は帰るからな」

なぜそこまで強調するのか、その理由は藤沖がドアをノックし返事と共に開けたとたん初めて理解できた。

——あれは、なんだ？

のれん、だということはわかる。しかし、布ではない。

ストレートヘアで真中から前髪をまっぴたつに分けた女子が、玉ぐしを片手に投げキッスしている。人物がプリントされている部分が妙な膨らみ方をしている。そう、白い襟に赤いはかま。その胸元と頬とが加工されて少しゆがんでいる。

「先輩、関崎を連れてきました」

「おお、ご苦労さん。さあさ、入った入った」

藤沖はそ知らぬ顔でそのまま乙彦の頭をのれんに押し込んだ。妙にどきんとする。靴をそのまま脱ぎ捨て、直接繋がった部屋をぐるりと見渡してみる。結城先輩がどこにいるのかわからない。だいたい六畳程度のこじんまりした洋室ながら、自分の部屋よりもせまくるしく感じるのはなぜか。壁、床、窓その他びっしりと巫女姿の女子がべったり張り巡らされているからだ。部屋一面が細胞分裂したかのよう。生物の授業で蛙の卵の細胞分裂に近いものではなかろうか。見ていると具合悪くなりそうだ。しかも匂うのはやはり、男子の汗くさいもの。透明ビニールシートが敷いてあるのに気付き、なんとか安心して足を踏み込ませる。思わず振り返り藤沖の姿を探すが、一瞬遅く戸はぴたりと閉まっていた。

「やあ、再会できたねえ、さあさ、ここにお座り」

少し甲高いながら穏やかな声音が斜め前から聞こえた。

——どこだよ？

「ほら、ここだよ」

——見分けられないはずだ。

結城先輩は例の女子がプリントされた抱き枕の上にまたがり、おいでおいでをしていた。黒いトレーナーにジーンズ姿といういたってまっとうな格好ながら、その行動はやはり謎だった。

「あ、先日はありがとうございました！」

視界がちかちかして頭の痛い中、乙彦は少し目を細めてお礼をまず言った。

——藤沖の奴、本当に帰りやがって！

勧められて腰を下ろし正座した。缶コーヒーを出されてしばらく黙っていると、

「二度目ともなればもう慣れたであろうが、さすが礼儀はしっかりしているのう」

また偽お公家さまのようない方で乙彦に語りかけてきた。

——この部屋に入るのがいやだったんだ、きっとそうだ、だから逃げたんだ！

視線のやり場に困る。はたしてどこに目を向ければいいのか。 「日本少女宮」なるアイドルグループが巫女さんの衣装を売りにしていることは知っているが、まさにその写真を……もちろん顔が違うのはわかっているがそれが誰かは覚えていない……ありとあらゆる場所で目を見ると、だんだんそれ以外の女子を見たくなる。もちろん中には巫女衣装以外にもビキニの水着などを着ている写真も混じっている。不覚にも、心中、反応してしまいそうな瞬間を覚え慌てて自制する。鼻血なんて出そうもんなら、青大附属高校で一生の恥さらしである。

「藤沖から前もって話は聞いていたが、なるほどな。そういうことかな」

「生徒会狙いというわけではありません」

「ほお、やはりそのあたり狙っているのか？」

おもしろそうに結城先輩は頷いた。明らかに誤解している。このまま藤沖と同じ勘違いをされたら話がややこやしくなるのは目に見えている。慌てて否定する。

「いえ、違います。藤沖は僕が生徒会に立候補したがついていると思っているようですが」

「初耳だなあ」

のほほんと結城先輩は、股のところで微笑んでいる巫女さんの口を撫でた。

「僕はただ、規律委員会でまず、いろいろなことを学びたいと考えて、それで」

「規律はちょうどいい委員会だと思うよ。藤沖にもそう話しておいたけどねえ」

——ちょっと待て、藤沖が結城先輩と話をしたというのか？

頭の中が混乱しそうになる。ここでつっぱしってしまうのが以前の乙彦だったけれども、今はそんなガキじゃない。冷静に、ゆっくりと、告げた。

「僕は、まだ青大附属にきて一週間です。だからこれから先、他の外部生たちについていくため、まず委員会で少しずつ学んでいこうと思っています」

「そうかそうか。そうだなあ。一年の面子を見た限りだと、南雲が順当に上がって来て、お神酒徳利で東堂がきて、清坂ちゃんがきてと、なかなか面白い感じじゃないか。結構、附中時代はみな有名人だからねえ。やつらを見ているだけでも青大附中の人間模様を読むのに役立つと思うよ」

「いえ、人間関係は決め付けられるものではないです」

言い返すのは先輩に対して失礼と言われるかもしれないが、藤沖のように勘違い一直線になってしまうよりはちょっとだけむっとしてもらった方がましだ。

「ほお、それはなぜに」

怒らずに、結城先輩は乙彦の顔を覗き込んできた。用心深く乙彦も続けた。

「人間関係は、作っていくものだと思うからです。先入観をもって観てしまうというのは危険です」

「確かに一理あるわな。さあさ、まずはコーヒー、飲め飲め。本当はもっと甘いもんが欲しかったんだが、我が家でダイエット指令が出ているもんでね。苦いがしょうがなかろう」

——確かにいちごミルクよりは苦いだろうな。

「いただきます」

乙彦は一気に飲み乾した。その間に結城先輩は、レコードの準備をし、針を落とした。部屋のてっぺんあたりに潜んでいたスピーカーから、エネルギー的な音がかんがんと流れた。

——み・こ・ちゃんに、なりーたーいーわたーしーの、ゆめのーやしーろーへ。

芸能人に疎い乙彦でも知っている。「日本少女宮」のデビューシングル「巫女ちゃんになりたい！」の歌い出しだった。

「ところで関崎くんとやら、『日本少女宮』の中では誰がタイプかな？」

「しょっちゅうメンバーチェンジしているようなので今はわかりません」

実は弟が、「日本少女宮」のプロマイドを机の中に押し込んでいるのを見つけて、とりあげつつ覚えただけのことだった。あまり歌のうまくない中学生から高校生の女子たちを中心に、巫女の格好でアイドルソングを歌う。乙彦からすると歌のうまい連中はアイドルになれないのだという認識となる。みな髪の毛がロングのストレートなのでよくよく顔を見ないと分別しづらいが、それでも小柄なタイプの中学生はなかなか悪くないと思っていたりもする。

聞かれた以上は答えねばならないのだが、やたらとメンバーチェンジの多いグループ……どうやら高校を卒業した段階で引退か脱退をしているらしい……なので、よくわからない。

「写真を見れば好みはわかります」

「じゃあ、これはどうだ！」

ファーストアルバム「巫女ちゃんになりたい！」を手渡された。おそらく初期メンバーだろう。乙彦はひとりひとり指でなぞっていき、最後に指差した。この子だと思う。

「僕はこちらの方がタイプです」

「ずいぶん地味な子選んだねえ」

地味かどうかかわからんが、一番日本風の顔立ちではつかねずみのようなあどけない感じ。結城先輩はふむふむと頷きつつ、改めて呟いた。

「そうかあ、久美ちゃんねえ。君もやっぱり、面食いだねえ」

——それは人間を顔で決め付けているということか？

さすがにそれは黙っていた。

しばらく結城先輩は一曲一曲、さりげなく音程がぴっちり合った声で歌っていた。こういうアイドルマニアの奴が歌うのは下手なのが常識だと思っていた。しかしまあ、結城先輩は想像以上にうまい。

「お上手ですね」

お世辞でもなく素直に伝えたところ、結城先輩も単純に喜んでくれた。いきなり足にはさみっぱなしのクッションに乗るよう誘われたが、それは丁重にお断りした。

「関崎くん、君は歌わないのか？」

「音痴です」

嘘ではない。聞くのは好きだが歌うと一本調子になるのだ。笑われる。

「いいぞ、腹の底から声を出すのは」

「もしやるなら応援団の方が向いています」

少し辟易していたところもある「日本少女宮」。だんだん夜も闇。早く帰りたいところだが、おそらく結城先輩も乙彦にアイドル談義するため呼び出したわけではあるまい。藤沖をからめるかたちで話を引き出したかった。予想通り結城先輩は藤沖の名を出した。

「藤沖と応援団でもやるのか」

「いえ、部活動は基本的に無理です。バイトしてます」

「ああ、そんなこと言っていたなあ。どうだバイトは」

「おもしろい、です」

言葉を切った。それよりも。

「ただ、仕事をする以上はもっと苦労しなくてはならないと思います。まだ、楽しんでいるだけでは、仕事じゃないと思います」

正直な気持ちだった。結城先輩がけげんそうにこちらを見る。

「まだバイトをはじめて二週間ですが、覚えることがたくさんあって面白いです。ですが、仕事

というものはもっと汗水流して苦労するものであって、楽しいなどとふぬけたことを言っているはいけないと、思ってます」

「それは、君のお父上がそういうのかな」

「はい」

嘘ではない。実際父は疲れ果てた顔して毎日家に帰ってくる。バイトをする以上はきっと苦しい日々が待っているのだろうと覚悟をしていたが、思ったよりも軽い日々。これでいいんだろうかと、思わずにはいられない。

「楽しくていいんだよ」

いきなり、結城先輩が甲高い声で言い放った。流れている「日本少女宮」の歌よりも迫力があるのは生だからか。息を飲んだ。

「仕事は、何はともあれ、楽しいのが一番だ。いいかい関崎くん。世の中、仕事が大変だとか苦しいとか辛いとか、いろいろ陰気な言い方してくる奴らがいるが、そんなのに飲み込まれちゃあ、いけないよ」

「でも実際は」

「仕事は楽しくしちまうものなのだよ、関崎くん。仕事だけじゃあない。勉強も、委員会も、日々の生活もみな、自分の力でだねえ、どんどん楽しくスパイスを振り掛けるのがコツ。そういうもんだよ」

「先輩のお父上がそうおっしゃったのですか」

問い返すと、結城先輩は大きく頷いた。

「我が父上も、楽しむことに関しては天才的能力を持っているからねえ。だが君の場合、いろいろとネガティブなことをふっかけてくる輩が多そうだ。藤沖にもこれからきっちり、指導をしておかねばなるまいがまた今度いちごミルクを振舞いつつ教えることにするとして。まずは関崎、君だなあ」

いきなり呼び捨てだ。正座しなおした。背を伸ばした。

「つまりだ。いったいどこの誰に君は、『仕事は辛い』と刷り込まれたのかな」

「たぶん、両親」

「それは残念。だが、今君は、バイトが楽しくてならないだろう？」

「だからそれは」

「まずは先輩を立てたまえ。で次。関崎、君は委員会に関してどういうイメージを持っていた？ 大変だとか、またいいかげんだとか、変人ばかりだとか」

——これは試されてるかもしれない。

鈍感な乙彦も、ここまであからさまに突っ込まれたら答えるしかない。

「全力投球せねばならない場所だと思ってます。たとえどういう委員会であってもです」

「全力投球、ねえ」

しばらく考え込むように、クッションを両手でもみほぐす結城先輩、次に向けられた視線は鋭いものだった。覚悟はしていた。

「どうしてそういうイメージを持ったのかな」

「はい、中学の頃、何度か評議委員会と交流会を持ちました。その時に青大附中の評議たちと話してて、俺、ええと僕の想像していた委員会活動とは打って変わって、みな、手抜きしてない、苦労しているという印象を受けました」

「主に誰と話をしたのかな？ 評議だとおそらく」

言いかけた結城先輩を遮り言い切った。

「はい、前期評議委員長だった立村と、よく話をしていました。あと体育大会前には、三年の学級対抗リレー選手に選ばれたらしくて、俺に、指導を請いにきました。俺は元陸上部です」

けたけた笑い、クッションの顔を何度も抱きしめる結城先輩。

その後、また鋭い眼差しに戻った。乙彦を手招きした。しかたなく近づいた。動くたび、足元の巫女さんたちが笑顔で恨み目を向けているようだった。

「少々話すと長いことになるが、関崎くん」

「はい」

「立村とは同じ英語科だったね」

「はい」

「なら、奴とはできるだけ距離を置いた付き合いをするようにしなさい」

ここだけは命令だった。ぐいとあごを引き、乙彦は問うた。

「なぜですか」

「君の御両親と一緒に。御両親は決して君に、仕事について悪印象を与えようとは思っていなかったに違いない。だが、結果として、仕事は辛いものというイメージを植え付けてしまっただろう。悪意はない」

「あったら困ります」

失礼な。自分の親になんてこというんだ。言い返そうとするが次の言葉に追いやられる。

「それと同じことだ。関崎、立村も決して悪意はない。おそらく素直に自分の言動を口にただけだろう」

言われている意味がわからない。謎かけのようだ。言葉が詰まった。

「だが、それは関崎、君にとって悪い暗示だ」

「立村がですか？」

繰り返すと、結城先輩は大きく頷いた。

「僕が、青大附中で評議委員長を務めていたことは知っているね」

「はい」

自己紹介でもそう言ったじゃないか。覚えている。

「当然、立村がどういう奴かを見てきたからこそ、言えるが」

「立村を無視しろというんですか！」

声が荒立つ。まあまあ、と肩を叩かれる。

「適度な距離を置くべきだと言っただけだよ、関崎くん」

また「くん」付けに戻った。大きく溜息をつきつつ、結城先輩はひとことひとこと、ゆっくりと口を開いた。

「立村は決して悪気があってやるわけではないが、一緒に行動したり話をしたりすると、大抵の相手は疲れ果てる。疲れるという表現は正しくないな。なぜか、運を吸い取られるような感覚に捕らわれる」

「俺はそんな気ないですが」

「よく聞くんだよ、君」

結城先輩はまたも繰り返した。

「運を吸い取られるというのはだね、自分が楽しくてはいけないような気にさせられるってことなんだ。今、関崎くん、君は仕事を楽しんじゃいけないと思っている。同時に委員会も全力投球しなくてはならないものだと思っている。楽しさのかけらも感じられないだろう」

「いや、充実感は」

「無理しちゃいけない。いいかい、君はさっき、『先入観』という言葉を出したけれどもね、先入観というのは、無意識のうちに刷り込まれるものなんだ。自分がいつ、その先入観を持って人を観ているのかを改めて意識しなさい。もし、立村から何も聞いてなくて委員会に入っていたとしたらどう思っていたかい？ こういったら南雲たちに半殺しに合うだろうが、規律とは、公立でいう生活委員のことだよ。週番だとか、違反カード切りとかだよ」

水野五月の顔が浮かび、消えた。そして水鳥中学の腕章も。

「元生徒会副会長の君としては、それほど、力こぶ作らなくてもやっていけそうな気がしなかったかい？」

——先入観か。

「立村にかかると、すべての出来事は必死に、顔をしかめて戦わねばならないものとして映る。本来ならばもっと脳天気に行っていけるし楽しめるし、苦労も実は快感。しかし最初からそんなマイナス思考が頭の中に刷り込まれていたら、どうするんだい？」

——でも、それは。

「まあいい、これから少し、おじいさんの長話に付き合ってもらおうよ。いいね」

有無を言わせぬ口調で結城先輩はレコードを裏返した。

結城先輩は抱き枕からいったん降り、冷蔵庫からいちごと牛乳を取り出した。床に置きっぱなしだったミキサーをざっと水洗いし、スイッチを入れた。もちろんそれが何を意味するのかは乙彦にもわかる。ががが、と激しいミキシング音の後、どろどろのいちご牛乳の出来上がりとなるわけだ。

——ほんとに、飲むのかよ。

さらに取り出したるは、ビールジョッキ。中ジョッキとみた。

——あれ、二人分だろ？

乙彦の問いは発せられぬまま、一人分としてそのいちごミルクはなみなみと注がれた。

「さ、まずは一杯。かための杯ともいうな」

「いただきます」

約一リットル近く入っていると思われる。

「あの、砂糖は入ってませんか」

「入れなくても甘いはずだよ。温室栽培とはいえかなり熟れているからね」

そんなことを聞いたつもりではないのだが。

乙彦は覚悟して飲み干した。確かにそれは、さっぱりしていて、喉にするりと流れていった。想像していたよりも、美味しかった。

飲み乾すのを待たず、結城先輩はまた「日本少女宮」の抱き枕にまたがった。ぐい、とくちばしのように枕の先を持ち上げた。

「今は昔の物語だが、さて」

結城先輩の言葉は、いちごミルクから正反対のベクトル。

乙彦は口に残るいちごの繊維らしきものを舌でかき回し、聞き入った。

「僕はね、関崎くん」

語りかけながら枕の端をもみしだくのが、妙にいやらしい。

「いろいろあって部活動に参加できない身の上なんだな。決して心臓が悪くて野球やサッカーに命を賭けられないとかそういうわけではないが。とにかく青大附中に入学する前から僕は、決して部活動に参加してはならぬ、授業が終わったらまっすぐ家に帰り勉強すべしとのお達しを受けていたんだ。まあ、広い意味で言えば、君とほぼ変わらないね」

「はあ」

少し意外ではあるが、でも委員会にはこれだけ顔を出しているわけではないか。

「だがそんなつまらない中学時代なんぞ、僕は過ごしたくなかった。とにかく抜け穴を見つけねば、そういう発想でもって、僕は委員会活動に目をつけた。委員会といえばまずは、ある意味義務として放課後残ることが許されるし、部活動代わりとしていろいろと行事にも参加できるというものでありだ。それを思いついたのは中学入学直後。いやいや、僕の鋭い頭脳には驚くだ

ろう？」

すごい抜け穴である。十二歳にしてそんなことを考えていたとは。乙彦は頷いた。あわてて「すごいです」と付け加えた。

満足げにまた、上に枕を反り返らせる結城先輩。しかもしっかり枕にまたがったままだ。古いギャグだが、白鳥の頭を股間につけた姿を連想しそうになる。

「だがいかんせん、僕が青大附中に入学した当時、委員会とは実に寂しい組織だった。前期、後期にわかれてはいるが、大抵ちょっと目立つ生徒かもしくは成績がそれなりにいい奴か。当然、毎回入れ替わるのもごくごく普通のこと。それなりに顔を合わせるけれども、そんな盛り上がりもない。ただの知り合いでしかない。これは、寂しいよな。寂しいよ」

「それがいわゆるふつうの、委員会活動ではないのでしょうか」

乙彦も、生徒会に立候補するまではそれが普通の委員会だと思っていたし、さほど驚きはない。

「部活動に参加してればねえ。でも与えられた環境でベストを尽くすしかないのもまた現実なり。さて、僕は考えた。ここで委員会という貴重なグループをもって、どうやって部活動と同じような盛り上がりをごしらえていくかとね。まずは同級生とお友だち、上級生にごますり、そのあたりを意識的に行った結果、なんと半年間で雰囲気が一気に変わったという、ミラクルマジック。僕はそんな変なことをしたつもりないけどね」

「変というより、変わったことをしたからそうなったのではないのでしょうか」

思ったとおりのことを乙彦は答える。

「面白いねえ、関崎くん。そうだね、その通りかもしれないなあ。僕はただ、何をやりたいかを聞き出していただけなんだけどねえ。イベントっぽいものや、仮装行列をやりたい、ビデオ演劇をやりたい、そういう声を拾い上げて行って、先生たちにできるだけさりげなく『やりたいんですが』と声をかけただけなんだよ。そしたら、できちゃったと」

「あ、観たことがあります。『忠臣蔵』」

「ほほお、それは驚きだ。なぜに」

「立村に、交流会の時、ビデオを見せてもらいました」

ぴよんぴよん結城先輩は、抱き枕の上で跳ねた。

「ほお、では僕の、吉良上野介も見たということだねえ」

「え？」

結城先輩は枕から降り、本棚から一冊、分厚いアルバムを取り出した。真四角で重たい、ダークグリーンの革張りだった。

「ほら、なかなか、いい男だろう？」

集団写真の一枚を指差した。つるつるした透明ビニールの下で、額に太く赤マジックで切り傷をつけた結城先輩の笑顔を見つけた。隣には緞帳を抱えてピースサインしている男子……黒い羽織だけでもうそれが大石内蔵助だとわかる……や、烏帽子に水色の着物と袴で無表情のまま座っている立村や……一度観たのでそれはすぐに判別つく……などなかなか面白いものが映っていた。

「すごいです」

「だろうだろう。僕が二年の絶頂期だった頃だね、これは。ビデオで細かく一場面ずつ撮っていくという『ビデオ演劇』といった代物なんだが実に奥が深くてね。舞台を借り切って演じるよりも、まずコストが掛からない。次に衣装代ももちよりですむ。僕のうちにビデオカメラがそれなりにあったので、それだけでいいという。撮り終えた場面はすべて、後日、放送委員に力を借りて給食時間、毎回流してもらおうというのもなかなかだろう」

「それは」

おそらく乙彦たちが卒業後、現在生徒会長の内川が怪しい時代劇・ラジオ演劇の企画を練っていることだろう。あえて何も言えないでいる。

「話が早いなあ。先に行こう。つまり、僕のこれから語る主人公がこの、大石内蔵助を演じた奴なのだよ」

会ったことがあるような気がした。目を閉じて、一瞬思い出す。

「……覚えてます。本条先輩ですか」

「おや、『ほんさと』のことを覚えているのかい」

「一度だけですが、立村と一緒に会った記憶があります。交流会の最初の段階だったと思います」

当時、顧問の先生の仲介で交流会準備を行うこととなり、まず最初青大附属中学の生徒会室へと向かった時、立村と一緒に「現・評議委員長」として紹介されたのがその本条先輩だったはずだ。その後も立村の口から「本条先輩、本条先輩」となんども飛び出してきたのを乙彦は聞いていた。

「君も知っておろうが、青大附中の関係は縦社会でね、先輩と後輩との関係が実に密なんだ。決していじめたりリンチをしたりすることはないが、誰かひとり、一番尊敬できる先輩を見つけて教を請うのがしきたりなんだ」

いわゆる「パシリ」というものか。中学時代のいやな記憶。

「基本として、すぐ下の代をひとり、仕込む。それが上級生としての義務でもあった」

「わかります」

俺も内川をそうするつもりだったんだが……と口にする間もなかった。

「僕のかばん持ちとしてこき使うつもりだったのがね、こいつは反対に先輩をパシリにしちまったのだよ。大笑いだろう？」

「それで、問題は」

笑えない問題だろうが。

「なかったよ。なかなか快感だった」

また結城先輩は抱き枕をもみもみしだした。なぜかわからぬが、胃が重たくなってくる。

すべて立村経由で聞いたことばかりなのでなんとも言えないが、その本条先輩という人は一学年上で、当時は敏腕の評議委員長として謳われていたと聞いている。また、立村が心酔している相手で、何かがあると「本条先輩だったらどうするかな」と呟いているのを何度か耳にしている

。乙彦からするとそこまで思い入れる理由が理解できない。自分以外の第三者を含めた上でものごとを判断する、といった価値観が自分にはない。

おそらく青大附属特有の、結城先輩の言う「縦社会」が他の学校以上に強いのだろう。

ただ、自分が陸上部で経験したような厳しいしごきではなさそうだ。

人を見た目で判断するのは危険だが、結城先輩が後輩に対してうさぎ跳びをグラウンド十周という指示をすることは思えない。

「僕と『ほんさと』とは一年違いの先輩後輩だったわけだが、かなりガッツのある奴だったしまあいろいろ人生あるもんだ。けどね、もともと持っている目立ち根性もいい形で発揮されて、『ほんさと』は三年間充実した中学時代を送ったというわけなんだな」

「評議委員長ですから」

口に出してみたが、結城先輩はあまり話を聞いていないようだった。

「だが、ひとつ、僕はあいつに対して、間違っただけの認識をもっていたようだった」

「間違っていたってどういうことですか」

礼儀として問い返す。

「とにかく押しの強い奴だったから、多少のことではめげないだろうとたかをくくっていたんだなあ。なにせ先輩に対しても平気で『これは絶対おかしいんじゃないっすか』とかなあ。いや、敬語なんて使うことあったか？ とにかく言いたい放題だったあいつがだ。ある時期を境にころっと性格変わってしまったのだよ」

「そのきっかけは」

「わかるだろう？」

わかるようでわからない。結城先輩は説明してくれた。

「立村との出会いだったんだなあ、今ならわかる」

ちょっと待て。その本条先輩と立村とがよい上下関係を保っているのは知っている。

しかし結城先輩の口調だとそれはマイナス以外の何者でもないように聞こえるのだが。

「青大附中の評議委員長は三年終わりまで任期が続く。まあこれは僕が考えたことなんだけどね。部活代わりの活動だもの、ぎりぎりまでやってたいじゃないの。で、当然『ほんさと』にもそれを期待した。つうか、そういう形に定めた。その代わり二年に入った段階で自分の覚えたこと、まあ帝王学って奴ですか、それを注ぎ込んだ。あいつの方が残念ながら上だったんで、僕の三年目はあいつのかばん持ちになったが」

笑った。結城先輩も楽しげに頷いた。

「そのうち、あいつがいきなり次期評議委員長を立村にしたいと言い出したのだよ」

「それは当然じゃないですか」

「君もそう思うかね」

青大附中出身者の多くが立村に対して見せた表情と同じものを、結城先輩は浮かべた。顔を少ししかめるように、一瞬無表情となる。

「『ほんさと』と立村が一時期『ホモ疑惑』を囁かれていたのは有名だったが、まさか本気とは思わなかったのだよ。なにせあいつは女子との関係がお盛んで、今だに僕もあいつを越えられないというのがね、笑えるが」

笑えないと思うが黙っていた。

「立村には付き合っている女子がいるはずです」

絶対にそれは噂に過ぎないはずだ。結城先輩も頷いた。

「そうそう、あくまでも冗談、冗談。ただ、普通の上下関係よりは親密だったなあ。とにかくだ、あいつは立村を偉く気に入ったあげく、なんとしても自分のプライドにかけて評議委員長に育て上げたいと、まあこういったわけだ」

「実際、評議委員長になったはずですよ。前期だけですが」

口を挟むと、結城先輩は目を枕のプリント部分に落とした。乙彦がその視線の先を追うと、どうやら顔のあたりとなるらしい。

「『ほんさと』はねえ、必死だったのだよ。いやほんと。僕はもちろんのこと同期たちもみな反対した。現役評議委員長の頃から僕は立村を粒さに観察してきたつもりだが、どうも上に立つだけの器がないように思えてならなかったんだ。もちろん、真面目で熱心で先輩がたの言うことはよく聞く。人間関係も男子連中限定で考えればうまくいっていたようだしな。ただ、どうも、僕にはぴんとこなかったんだよ」

「どこがですか」

「あまりよい表現とは言えないが、人の顔色をうかがいながら胡麻を吸っているようにしかね、見えなかったわけなんだよ。自分の思うことを特に口にせず、いつも他の連中に合わせて目立たないように行動していて、なんとかして人に好かれようとするその、卑屈さがね」

ずいぶん厳しい言い方をする人である。立村に対してのみ、だ。

「もちろん、可愛い後輩だ。そんなことでいじめたりはしない。いろいろ事情もあったのだろうし、頷けなくもない。むしろそんな奴だからこそ、『ほんさと』がうまくかばってやって面倒みてやるのがいいのかもしれない、とは思っていた。性格が悪いわけじゃないからなあ。だがね、弟分と次期評議委員長とは別なはずだ。そこんところを分けて考えられる奴だと僕は『ほんさと』についてそう思っていたんだが、甘かったのだよ」

「弟分と、次期評議委員長」

繰り返してみる。結城先輩の言いたいことはなんとなくだがわかる。

乙彦にとって大親友の雅弘を、あえて生徒会役員に引きずり込まなかったのもその一点にある。もっとも一年下の内川を口説いた理由を問われると言い訳できないが。

「そうだよ。評議委員長としては、やはり上に立つだけの器が必要。目配り、気配りもさることながら、天性の明るさだねえ。ほら、『日本少女宮』の初代リーダーだったマコちゃん。彼女は歌もうまくないし、顔も正直、その辺の女子って感じだったんだけどね。ただ彼女が真中に立って玉ぐしを笑顔で振りかざした瞬間、どのステージでも空気が変わるんだ。どんなに親と大喧嘩した後でも、数学の赤点で留年しても、マコちゃんの一振りですべて忘れられる。そんな雰囲気だねえ。まあ野郎にそれを求めても気持ち悪いだけだがね。『いくぜ！』と一声かければ『い

ったるか！』と返事が返ってくるような、そんなキャラクターでなくてはならなかったんだよ」

「リーダーとは人それぞれ、異なる形があると」

言いかけると、結城先輩はきっぱりと首を振った。

「と、『ほんさと』も言い切った。あいつ曰く、自分のばりばり型リーダーとは違った形での評議委員長を、立村で見てみたかったらしいのだが、それはあくまでも言い訳だな。あいつはただ、立村を次期評議委員長に育てるという名目で、他の後輩たちとは一線を引きたかったらしい」

「他の後輩たちと一線ですか」

「そうなんだよ。僕も『ほんさと』を遠くから観察するようになってようやく理解した。あいつはね、本当は強がっていただけなんだってことをね。もし見る目のある後輩があいつに近づいてきたら最後、ガキっぽい顔を見られてしまう。それを恐れたんだな」

乙彦には全く理解できなかった。

「すみません。俺、全くわかりません」

きちんと伝えるのが礼儀だと思った。頭を下げた。

「まあまあ、わかるところだけでよし。忘れてもよし」

やはり結城先輩は怒らなかった。

「とにかく『ほんさと』がそこまで言うのなら、ってことで傍観の立場を取ったわけなんだが。その結果、評議委員会は一気に崩壊の一路を辿り、生徒会に主権を握られ、最後にはごくごく普通のつまらん組織に格下げされたという、寂しい現実が目の当たりとなる」

「交流会は立村の発案です」

「もちろんそれはわかるとるがね」

さりげなく乙彦もフォローをいれてみるが遮られた。

「いろいろな事件が起こったがそれはまた別の時にしよう。僕も当事者でない以上正確な判断はできないがね。だがそれを責める気はない。立村は精一杯努力を重ねたし、もちろんすべてが失敗に終わったわけではない。立村の持つ器の範囲内では、上出来のはずだ。だがね」

言葉を切った。ずっともみもみしてた枕からも手を離れた。少しだけ放心。

「今の君に理解しろとは言わないが、覚えていてほしいのだよ。世の中には、幸せになりたくない人種というのが存在するんだ。ラッキー！とか、やったぜ！とか、そういう言葉を発したとたん、『それはまずい、不幸にならんといけないぜ』と懸命に自分の立場を惨めにしようとするタイプの人間がね」

「そんな不毛な人間がいるんですか」

深く溜息をつき、結城先輩は頷いた。

「そう、不毛だよ。人生は楽しくなくちゃおもしろくないというのが僕の人生訓だが、反対の考え方を持つ者も世の中にはいる。とにかく不幸でなくてはならない。苦労してこそ一人前。脳天気にはらへらしているなんて最低だ、そう思い込んでいる。それはそれで人それぞれ、責める気はないし、人生いろいろあればまた変わる。だが」

また言葉を切った。言うべきかどうかまよっているようだった。

「そのどん底にいる相手を無理やりひっぱりだそうとしたとてうまくいくものではないのだよ。
なあ、関崎くん」

「つまり立村が、その不幸な人間なのでしょうか」

回りくどい言い方だが、核になる部分はそのあたりか。

「君はせっかちなねえ。まあいいよ。そうだからね」

結城先輩はあっさり認めた。

「だったら、悩んでいる時に手を差し伸べるのは、先輩としても友だちとしても当然のことではないでしょうか」

「いや、それは違うよ」

またきっぱりと、結城先輩は首を振った。

「もちろん手助けするのはよいことだ。よいことなんだがその場合には条件があってね、自分がその相手の持つ闇の部分に引きずりこまれないようにすることが大切なんだ。同じ立場に立つのではなくてね。手を出してあれやこれやするんじゃなくてだ。そっと見守る、立ち上がるまで見守る。それに徹した方がお互いのためなんだ」

「でもそれは無責任ではないですか？」

具体例がないから自分でもうまく掴み取れない。だが、結城先輩の言うことは、自分が安全な場所に立って人を助けろということのようだ。それと立村の評議委員長指名の件とどうつながるのかぴんときないが、言うしかない。

「自分だけ安全なところにいる、白々しい建前ばかりしゃべって、それで相手がどん底に落ちこちていくのを見守るだけというのは、やはり変です。ていうか、人間として、最低ではないですか」

「『ほんさと』もそう言い返してきたね」

驚きもせず、結城先輩は乙彦に語りかけた。

「自分なら、どつぼにはまった立村を救ってやれるとヒロイックなことを考えていたのだろうよ。あいつはそういう奴だ。自分が身体を張って守ればなんとかなるとね。だが、立村の持つ独特の陰気さは、どうやら『ほんさと』を引きずり込んでしまったらしい。どんなに救おうとしても、自分から立ち上がろうとしない限り、どうしようもないのだよ。ただ待つしかない」

「相手が死にそうになっててもですか！」

飲み乾したジョッキを膝で倒していた。こぼれてはいない。思わず叫んで、その勢いだった。

「仮に自殺したら誰が責任取るんですか！ たったひとりにしちまって、遠くで様子見してて、気がついたらいなくなったら、見殺しにしたのは俺たちだと思います」

「厳しい言い方だけどね、他人のせいにはできないんだよ」

また結城先輩は、厳しい声で答えた。

「ヒントを与えることはできる。たとえば僕のように、さりげなく『日本少女宮』のサイン入り生写真を分けてやったり、いちごミルクをおごってやったりとかね。だが、最終的に立ち上がるのは立村本人の意思だ。もしあいつが無理に立ち上がることを望んでいないのならば、僕たちはただ見守るしかないのだよ。もしくは引きずりあげるだけの力を身につけるか。それは決して、

たやすいことじゃあないと思うよ」

結城先輩に乙彦は詰め寄った。すいと枕の後方に下がった結城先輩に、乙彦は枕の先頭、顔真中に座り込み問い詰めた。

「じゃあ、俺がもし、立村のような奴を太陽の下に引っ張り出すことが可能だったら、無理に無視する必要もないってことですか」

「無視とは言っていない。自分がマイナス思考に引きずられないだけの距離を保てというだけだよ、関崎くん。悪いがもう少し、枕の位置をずらしてくれないかな。顔に、あの、そのふとももがねえ、くつつくのはねえ」

そんなの無視して、乙彦は膝詰めしさらに続けた。枕にプリントされた「日本少女宮」少女の顔を膝で挟みつけるかっこうになる。

「あの本条里希ですら、卒業後は立村の影響から逃れることができなかった。青大附属で、評議委員会で、またまた恋愛沙汰。僕の見限り立村は本当に恵まれていたんだ。でも、立村はそれをそのまんま、受け入れることができない子だったんだよ。『ほんさと』が僕たちの反対を押し切って評議委員長にした段階で、せめてそれをありがたく頂けばまだここまで地獄を見ることはなかっただろうよ。清坂と付き合った段階で別の迷惑女子に目を向けることさえしなければ。だが、立村は自分が与えられたラッキーを素直に受け入れることができず、それに付き合わされた『ほんさと』も結局は、マイナスの考え方しかできなくなってしまったというわけなんだよ。ほんと、これは話すと長くなることだが」

「それはその先輩の自業自得では」

「違う『ほんさと』は、もっと楽に、高校生活を楽しんでいいはずだった。無理に公立を選ばなくてもよかったんだよ。楽に、そう楽な道を選んでもよかったはずだったんだ！」

なぜそこまで激しく訴えるのか。その差に戸惑いつつも乙彦は答えた。

「あえて苦勞をしようとするその姿勢を責められるべきではないと思います！」

何かを口に出そうとし、結城先輩は眼鏡を外した。

眼鏡の枠で隠されていた細い眼差し。悲しげに見えた。

「おやおや、僕もついつい喋りすぎてしまったようだね」

いきなり目が三日月型にとろりとまるまった。

「関崎くん、おじいさんの昔話ってのは、眠くなるものと決まっておる。まあやりたいようにやってみるのもよからうぞ。僕も一度しくじったことは二度と繰り返さない主義の持ち主でね。たぶん、なんとか、なるでしょうぞ」

LPレコードをかけたままのプレーヤーが、針をじりじりさせて空回りしている。結城先輩は針を上げ、レコードを両手で丁寧にひっくり返した。

「藤沖もなんか文句を言うかもしれんが、立村のことについては、君のやりたいようにやればいい。ただあまりにも目にあまる場合は、失礼ながらひっぱりあげてぶん殴らせていただくことになるかもしれないが、まあそれはその時。そうよの。僕もまだまだ若者よ、説教じじいになる

にはまだ早い」

——十分説教じじい化しているような気がするけどな。

乙彦は黙って抱き枕から降りた。振り返り絶句した。

「もう一杯、さあ、出来たてを飲んでいきなさい」

結城先輩の手作りいちごミルクが、新しいジョッキになみなみと注がれていた。

結城先輩の家から午前様で帰り、その後三時間の睡眠を取ったのち「みつや書店」へ急ぐ。

二杯分のいちごミルクが消化されていないのか、やたらと腹の調子が悪い。それでも身体を動かしているうちにだいぶこなれてきたものの、やはりいつもの調子とは言いがたい。

三時間の仕事がこれだけ長く感じられたのも、今日が初めてだった。

それでも片付けるべきものは片付け、だるさが残る中まっすぐ青大附高へと向かった。今日は幸い規律委員の週番当番ではなかった。職員室前の廊下で朝から集まらねばならないのだが、それは考えなくてもよかった。運動部、吹奏楽部の朝練が終わり教室へ戻ろうとする連中にまず挨拶をし、乙彦は一年A組の教室へと向かった。

——地震か？

やたらと足元がぐらぐらする。

——まあ地震だったら、緊急放送が流れて外に出れって言うだろう。

考えるのもおっくうだった。頭を何度か振り前を見やると、藤沖が窓辺によっかかる格好で待っていた。

「よお」

「おはよう」

昨日、結城先輩の館へ案内してくれたはいいが、全速力で逃げ出していった、実は結構とんでもない奴だ。一言言ってやらねばなるまい。乙彦は藤沖の顔を軽く手で方向変換させた。もちろん、自分の顔真っ正面である。

「お前なんで俺をあんなところに置きっぱなしにした？」

「怒るな。実際結城先輩とはそれなりに語ったんだろう？」

それは事実である。認める。

「夜十一時近くまで話を聞いた」

「そうかそうか。どうだった？」

また藤沖特有の、押し付けがましい兄貴風を感じて乙彦は顔を逸らした。もちろん手も藤沖の顔から外した。

「どうもこうもない。真面目に今後の青大附属高校についての見解を聞かせてもらっただけだ」

「もちろんBGMは『日本少女宮』でか」

その通りである。結局あの後、結城先輩は今まで発売された『日本少女宮』のアルバムを次から次へとレコードプレーヤーの上に重ねていったのだから。

「で、当然、いちごミルクでの杯を交わしたというわけか」

「杯ではない。ピアマグだ」

全く反省することもなく、藤沖は膝を叩きつつ、声を出さずに笑った。

「では、円満に話し合いは行われたというわけだな」

「そういうことになるだろう」

話をしているうちにまた、地震らしき地響きを感じた。二回目だ。やはり、これはなにかあるんじゃないのか。

「藤沖、今、地震がなかったか？ 震度3くらいのようなのだが」

確認の意もありまずはたずねてみた。目の前の藤沖はわけがわからないとばかりに足を二、三度踏みしめた。

「地震なんてないだろう。お前なんでそんな」

「さっきも揺れたようだぞ。二回も余震があるということは、これからまた大きな揺れがきそうな気がする」

まったく意味不明とばかり、藤沖は首を振った。

「関崎、地震があったのはおそらく、結城先輩の部屋でだろう」

「いや、それはなかったと思うが」

言われた意味がわからない。昨日の夜は特に地震が起こった記憶もないが。

「それはそうと、関崎、来週の實力試験の準備はしているか？」

話の矛先を変えられた。しかたなく乙彦もそれにつきあった。

「しているが」

「實力試験が終われば今度はゴールデンウィーク明けに新歓合宿だが準備もいろいろ必要だろう」

あまりそのあたりは考えていなかった。

「一泊二日か。確か学校の合宿施設を使うと聞いていたが」

「その通りだ。今年は費用削減でずいぶん安上がりだ」

藤沖はやはり、詳しいことを聞いているらしい。乙彦が耳に入れていたのは、新歓合宿が一泊二日らしいということだけだ。行き先も実は確認していなかった。もし泊り込みになるのならば、バイトを休まざるを得ないだろうという予想はしていた。

「それについても後でいろいろと、話し合いたいところだ。實力試験についても、まあいろいろあるからな」

「わかった」

「何かあれば聞いてくれ」

言い返して面倒なことになるよりも、まずは足元のぐらつき……あの後もまだ続いているような気がする……で少し酔いそうな感覚がある。気のせいなのだろうか。まずは席につきたかった。

他のクラスメートたちと挨拶を交わした後、乙彦はかばんからものを出す前に顔を押し付け、まず目を閉じた。

「悪い、寝させてくれ」

「仕事疲れかよ」

「そんなところだ」

しかし簡単に言うことを聞くような連中でないのも承知していた。背中を突つつくわ、脳天に

なぜか拳骨を押し付けられるわ、耳元に息を吹きかけられるわで結局寝られるわけもない。むかつくことに藤沖もそれに加わっている。肩を揺らすようにして、

「ここで寝るとまじで授業中起きられなくなるぞ。目を開けろ」

またいつもの兄貴分感覚で声をかけてくる。

「起きたいのは山々だが、今は死ぬほど眠いんだ」

毎朝四時半に家を出てバイトに専念し、腕をつねりながら授業中目を開け、その後の予習まで目を覚ましたままで過ごした二週間あまり。

中学の頃、陸上部に入っていた時ならばそれはたいしたことないとも思えるのだが、やはりしんどい。でもそれを言うてはならない。男ならば決して、それを許してはならない。

とはいえ……。

眠い。どうしようもなく頭が痛い。

「関崎、ならばこうしよう」

藤沖は乙彦のわき腹をつんつんつついた。

「お前が居眠りしているようなら、俺が叩いて起こしてやろう」

「なぜだ」

眠気に襲われつつも乙彦は生返事を返した。

「お前は今、寝るわけにいかないだろう？」

「ああ？」

また見下ろすような口調で言う。

「実力試験のためにも、そうだろう？」

「確かに」

返事はしたけれども、すでに意識が朦朧としている。

「安心しろ、お前がちゃんとついていけるようにしてやるから」

——その「やるから」ってなんだ。

ぴりぴりする苛立ちすら、もう感じることもすらできないほど、眠い。

——そりゃあ、実力試験も、なんとかせねばならないのはわかっている。わかっているからそうしているんじゃないか！

藤沖にまた説教されるのはいらいらするが、正論だからしかたがない。

入学前のオリエンテーションでもいろいろと麻生先生から話を聞かされていたけれども、外部生の場合どうしても最初の実力試験では割を食うことが多いという。もともと授業のカリキュラムが公立中学と異なっていたことやその他いろいろな遅れの問題もあるから、しょうがないといえましょうがない。でも、最初からみそっかすのまんまでいるつもりもない。もちろん学年トップになることは難しいかもしれないが、せめて五番以内、いや十番以内には入りたいのが情というもの。水鳥中学で一度もトップを譲ったことのない乙彦にとってそれは絶対に、許しがたいことである。

——だから、寝てられないってのはわかっている。

わかってないのは、自分の瞼だけだ。さっそく始まった数学の授業中、乙彦の開いた教科書の文字がやたらとゆがんでみえる。内容は「数学Ⅰ」とあるけれども、途中どこかすつとばされたような問題ばかりで、授業だけではついていけない。ここでは答えだけを必死に写し、放課後の補習で確認をするように心がけている。ただし、一度でも聞き逃したら終わりだ。解き方が理解できないまま流されてしまう。これはまずい。

——まずい、どこまで進んだ？

先生の顔と黒板の文字が二重線に見える。目をこすり、腕をつねり、また背を伸ばす。その繰り返しているつもりだった。いきなり首筋にとんがったものが刺さった瞬間また目が開いた。首筋を撫でてみるとシャープの先でつついたらしい藤沖のあと。

——善意なのはよくわかるが。

振り返り藤沖に礼を伝えるのが、また面倒だ。

しばらく藤沖が乙彦を起こすべく、こまめにシャープ芯でつぼを押ししてくれたおかげで一時間目、および二時間目まではなんとかあった。休み時間に廊下で深呼吸をしたりラジオ体操の最初の一部をしたりすることで、だいぶ目もさえてきた。

「次は現代社会の授業だが、あれも眠くなるな」

「確かにそうだ」

先生の一方的な語りの授業ほど退屈なものはない。むしろ数学のように解き方や方法などを細かく説明してもらって授業の方が睡魔に教われずにすむものだ。藤沖に言わせれば社会の授業とは、定期試験の際に出てくる問題を読み取るだけのものだという。

「大丈夫だ、俺が山かけしてやるからな」

別に頼んだわけでもないのだが。それに言い返すよりもなによりも、ただ眠い。

休み時間も終わり乙彦は教室に戻った。四時間目までなんとかがんばれば、五時間目は体育だ。さすがに体育だったら寝ているわけにもいかないのが強制的に目も覚める。

席に戻り際、最後列で顔を上げて立村と目が合った。

——結城先輩の言う通り、立村とは距離をおくべきなのか？

考えたくもないことを思い出してしまった。舌が思い出すいちごミルクの味いだった。

何度も首筋に藤沖の自称「愛の鞭」が飛ぶ。

乙彦もなんども目をこすった。

——まずいな、これは。

ほとんどノートに文字が意味をなさない状態だった。その一方で頭の中によぎる言葉。

——一緒に話をしているだけで、相手の運を吸い取るなんて、そんな奴がいるわけないだろう？

結城先輩の語った言葉が脳のどこかをちくちく突き刺す。そんなこと考えている余裕なんてない、実力試験でそれなりの結果を出すことが自分の義務のはずなのに。

——ネガティブな発想にひっぱりまわされるほど、俺が弱弱い人間に見えるのか。そんなこ

とはない。

——だが、確かに……。

朦朧とする頭の中で、また何かちくりと首がひりついた。と同時だった。

斜め後ろの方で誰かが立ち上がる気配がする。

「先生、よろしいですか」

——立村の声か？

同学年にしては礼儀正しすぎる、それゆえに距離を感じる言葉遣いだった。

「どうした立村」

「関崎くんが気分悪そうなので、保健室に連れていってもいいですか」

藤沖のいる方を慌てて向いた。無然としたままシャープを握り締めていた。その後ろで立村が、さほど響かぬ声でさらに続けていた。乙彦にちらと視線を投げかけながら。

「ここから見ていて、関崎くんがかなり体調を崩しているように見えたので、保健室まで連れて行きます」

「関崎？」

あわてて乙彦は、先生の顔を見上げた。

「気分が悪かったのか」

——いや、ただ眠いだけです。

そう答えようとした。が声が出ない。瞼と同時に頭の上の方でわんわんと何か鐘の音が鳴り響いているようだった。

「体調が悪いのなら、保健室で少し休んだほうがいいが、立村、お前保健委員でないだろう？保健委員に連れていってもらいなさい」

「はい」

立村は素直に席へついた。同時に関崎をちらと見やり、こっくりと頷いた。すぐに保健委員の小折が入れ替わり乙彦の側に寄り、

「余計なこと言うな。とにかく外へ出ろ」

半ば強引に腕を持ち上げられ、

「せば、関崎を連れていきます。まじですげえ熱なんで」

はったりとしか思えない言葉を残し、教室から引きずられていった。先生も何も文句を言わなかった。

A組の保健委員男子に付き添ってもらう形で乙彦は教室を出た。

「単なる寝不足なんだが、それでもいいのか」

「ああ大丈夫、お前さ、昼まで寝てろよ」

保健委員の小折は乙彦の足取りをちらちらみやり、小声でささやいた。

「立村も言ってたけどお前、ほんと、死にそうな顔してるぞ。こういう時はみな、暗黙の了解で保健室で寝てもいいことになってるんだ。藤沖はあんましこういうの好きじゃねえみただけ

どな。立村がうまく手を回してくれるからその辺大丈夫だろ」

——立村が手を回してくれた？

戸惑いながらも乙彦は聞き返した。まだ眠気覚めやらぬ中、小折の言葉は信じがたい形で耳に流れ込んできた。

「そ。さっき三時間目始まる前あたりにさ、立村から一言声かけられてたんだ。関崎がぶっ倒れるかもしれないからそのときは保健室へGO！だってな」

「三時間目か」

「そうそう。立村ってさ、ほんとかまいところ目が利くからなあ」

——目が利く以前に、なんで俺を？

乙彦にはやはりわからなかった。保健室に連れてこられて、すぐに体温計を渡され計った段階で小折がつぶやいた言葉がこたえだった。

「やっぱしなあ。三十八度近くも熱だしてたら、そりゃあ、眠いわな」

即刻、保健室のベットに寝るよう養護教師から指示を出された。昼まで寝てみて、それから体調によってはや引きすることを考えろ、とのことだった。

「じゃあまあ、先生に言っとくよ」

保健委員の小折はふむふむ頷きながら、保健室から出て行った。

——また、地震かよ。

「先生、揺れてますか。今朝から二回くらい地震があったようなんですが」

目を閉じる間際にまた激しい揺れを感じた。保健の先生に尋ねたら即答された。

「地震なわけがないでしょう？ 関崎くん、あなたのめまいのせいよ。余計なこと考えないで、まずはさっさと寝なさい！」

寝た、寝た、とにかく寝た。

といっても自分でその自覚はなかった。気がついたらベッドの側には母が両手を腰に当てて乙彦の顔を見下ろしていた。天井の黄緑色に、白い蛍光灯が溶けているようだった。薄い掛け布団がぐしゃぐしゃ、とにかく寝ていたという事実だけは、認めざるを得ない。

目が少しねばっこい液で開きづらい。

「おとひっちゃん」

開口一番、母はいつもの名を呼んだ。

「ったく、いつかこうなるんじゃないかと思ってたよ、もうねえ」

——だからその名前で呼ぶなよな！

幼い頃、雅弘によって付けられたその呼び名。青大附高には似つかわしくない。

乙彦は思い切り顔をしかめた。

それでやめてくれる母でないことはわかっている。

「あんた、さっきからいびきかいてぐうぐう寝ていたけど、ほら、先生にお礼言いなさい。それと、ほら、お友だちに」

「誰？」

藤沖だろうか、それとも保健委員の小折だろうか。

寝返りを戸口側に打ち、乙彦は視線を彷徨させた。居場所なさそうな顔で立村が体重計の側に突っ立っていた。手元を見ると、鞆と手提げをぶら下げている。

「立村？」

慌てて身体を起こした。同時に強烈な頭痛がきいんときた。ぱたりと枕に倒れた。保健の先生が近づいて来て、いきなり体温計を脇に挟むよう指示をした。しかたない。そうする。

「ほらほら、関崎くん、無理しないで。まだ熱、下がってないでしょう？」

「このくらい大丈夫だと」

「思わない思わない。まだ具合悪そうな顔しているくせに。お母さん、そういうことですのでお呼び出ししたわけなんですけれども」

言葉を途中から父母用丁寧語に切り替える、その技に唸った。

「いえいえ、本当にこちらこそうちの息子がもう御迷惑をおかけして。この子一度何かに熱中し出したらもう、わき目振らない子なもんですから、たぶんそれでぶったおれたんでしょうねえ」

——「子」じゃあねえだろう。

ちらと立村と視線を合わせた。恐る恐るといった風に近づいてくる。立村は保健の先生に何か言いたそうな顔で、

「先生あの、荷物」

尋ねた。母が鞆と手提げに気付き、すぐに奪い取った。何も引ったくることはないだろうが。

「ありがとう、ありがとう。おとひっちゃん、あんたもほら、礼」

「あ、悪い」

立村はすでに、乙彦が雅弘から「おとひっちゃん」と呼ばれていることを知っている。隠す必要もない。だがなぜか母の口から飛び出す「おとひっちゃん」という響きがどうも甘ったるく聞こえてしまうのはなぜだろう。

手を少しぶら下げるようにし、小声で「補習、どうする？」と聞いてくる立村。

そうだった、今日はまだ金曜だ。補習授業がまだあるんだった。

「出られるわけないでしょう。そのくらいわかるでしょう」

びしりときつい言葉で立村をたしなめた後、保健の先生は乙彦に一杯、コップの水を手渡した。

「まずはこれ、飲んで。タクシーで帰ったほうがいいわ」

それはまずい。そんな不経済なこと、誰ができるか。自転車置きっぱなしなんだがそれはどうするんだ。思わず口に出そうになるのだが、いかんせん熱が口腔をねばねばさせているのか、舌が回らない。母は頷いた。

「バスだと、やはりきついでしょか」

「三十八度も熱があるんですよ。それはちょっと」

熱うんぬんの問題ではない。我が家がそんなに軽くタクシーなんか使えるような家計でないことくらい自分でもよくわかっている。父がいる時なら、自家用車を出してもらえばいいけれども、平日の午後にそんなことできるわけがない。乙彦はもう一度身体を起こした。

「いい、俺、バスで帰る」

「そうもいかないでしょう、しょうがない」

——ほらな、しょうがない、だろ。

乙彦は母にちらと目で合図をした。さっさと帰ろう、というところだ。補習についてはいくら乙彦といえどもこの具合悪さの中で受ける気にはなれない。幸い保健の先生もはや引きOKしてくれているのだから、それならありがたく頂こうと思う。

母は慌しげに戸口へ振り向き、早口で答えた。

「早く帰りたいんだけどねえ、ただほら、担任の、ほら、ええと」

「麻生先生か」

「そう、麻生先生がねえ、いい機会なので一度お話したいことがあるそうなのよね。だから少しあんたも待っててよ」

「待ってろってここで寝てろってことか」

「そういうことよ」

後の一言はやはり保健の先生だった。

「関崎くんが寝ている間にね、麻生先生がいらしてそう仰ってたわよ。大丈夫よ、悪いことじゃないみたいだから」

——悪いことなんぞ、してないが。

不本意ながらも乙彦は横たわった。母が薄いかけ布団をかけてくれるのがこっ恥ずかしいっらない。側で立村が無表情で乙彦を見据えているのが不気味だった。

「立村くん、まだ用あるの」

「はい。授業のノートコピーと、あと規律委員関係のことで」

また言葉を途中で切った。どうもこの立村という奴、文節を途中で終わらせるくせがあるようだ。女子に多い言い方かもしれないが、男子でそれをやられるとすこしいらっとくる。

「じゃあまだ時間あるのね」

「はい」

保健の先生は立村を手招きすると、奥にしまってあったパイプ椅子を引っ張り出し、ベッドの枕もとに置いた。座るところをぽんぽん叩いた。

「ならば、ここで少し話してれば。そうね、どうせ関崎くん、お母さまが帰ってくるまで待っているわけだし、時間つぶししててもらったほうがいいでしょう？」

「はい」

立村は頷くと、ためらうことなく椅子に座った。乙彦をちょうど真上から見下ろす格好となる。落ち着かないので起き上がろうとするがまた、激しい目眩で動けない。

「だから、無理しないで、ではお母さま、そろそろ行かれますか？」

「お世話になります」

母も丁寧に腰を曲げてお辞儀をし、ついでに立村にも声をかけた。

「いつも、ありがとうねえ。今度うちに遊びに来てね」

「ありがとうございます」

社交辞令にしては生真面目に立村も礼を返した。

保健の先生は次に訪れた剣道部の生徒を世話するため、急ぎ早に教室から出て行った。どうも体育館で稽古中に手を竹刀で叩き、その際に打撲か骨折かしたらしい。

「悪いけどすぐに戻ってくるからね」

寝ている乙彦と側にいる立村とふたりに告げ、足早に先生は出ていった。先ほど母は麻生先生に呼ばれて出て行ったし、保健室には今のところ他に誰もいなかった。

「生徒だけで放置していて、はたしていいものかどうかって感じだよな」

立村が見送った後、ぼつりと呟いた。

「信頼しているんだろう」

乙彦も同感だった。実際問題として生徒の自主性に任せるとはいえ、それなりの劇薬が並んでいる保健室に生徒をふたりっきりにしておくというのは、かなりの信頼関係が必要だと思う。中学の保健室ではこういう事は滅多になかった。それを伝えると立村も頷いた。

「関崎が信頼されてるからだろう」

信頼されてるも何も、まだ自分は入学して二週間経つか経たないかだというのに、ずいぶん買いかぶられたものだ。乙彦は天井を見上げた後、立村に顔を向けるべく寝返りを打った。

「俺は必要以上に買いかぶられているとは思いますが、お前の方はどうなんだ」

立村は無言のまま、乙彦を見下ろしていた。無表情ながら口許にちらとひきつるものが走っていた。見逃しはしなかった。

「実力以上に見下されていると思うぞ」

はっきり伝えた。

授業中にみっともなくもぶっ倒れたのは情けない。しかも同級生の機転で運ばれたというのが男としては一番こっぴどかしい。その相手が藤沖ではなく立村であったことは、わずかながらもほっとする部分ではあったけれども、だ。

しかもこうやって今、しっかりと見下ろされている。藤沖のように説教をかまされるのは、今の乙彦としては避けたいが、立村のように無言で不満そうな顔をして側にいられるのも重たかった。同じ釣り合いのシーソーに乗りたい。

「さっき、小折から聞いたが、俺を保健室に連れて行くというのは前もって準備していたということだな」

「悪かった。あまりこそこそしたくなかったんだけどさ」

あっさり謝ったのでなかなか次の接点が見出せない。

「朝から気分悪そうだとは思っていたんだ。関崎のことだから、ぎりぎりまで我慢しているんじゃないかと読んだだけだよ」

「お蔭で久しぶりに死んだように眠れた」

また沈黙が続いた。窓辺から入ってくる風に、冷やかかさな感触が混じっていた。

「そこまで気が回るのに、なんでこっそりと、なんだ？」

しかたない、自分から口火を切るしかない。立村はまた静かに見下ろした。

「いい機会だから聞きたいんだが、お前、クラス委員が決まった時もすぐ陰に回って情報を集めていただろう？ なぜなんだそれは」

「別に陰でというわけではないけど」

口籠もる立村に乙彦は畳み掛けた。喉がふくれて太い声が出る。

「もちろんそれはありがたいことだし、俺も助かった部分はある。だがなんでお前、背を丸めているのか、それが俺にはどうも納得がいかない」

「丸めているわけじゃないよ」

「いや、そう見える」

乙彦は言い切った。

「事情がいろいろあるのは他方面からも聞いている。一概に立村が委員関連に顔を出せないのも確かにわからなくもない。それはわかる。だがそのくせ、しっかりと裏ではいろいろと手を回しているのは、傍から見てもあまり気持ちよいものじゃないぞ」

「悪かった、わかってる」

早めに話を切り上げようとするのが見え見えで、腹が立つ。熱がさらに籠る。

「逃げるのは立村、お前の悪いくせだ。いいか立村、お前このまま陰で立ち回るのはいいが、それで満足できるのか。元評議委員長としてどうなんだ」

すごんでみたが効果はなかった。

「一度でもトップに立った者として、お前、向上心はないのか」

「漱石でもあるまいし」

意味不明な言葉で切り返された。流して次にいく。

「とにかく、クラスでなんも委員にならないで過ごすことではたして満足できるのか」

「俺の器じゃないよ」

またさらっと流された。立村は身体を動かさずにただ静かに見下ろしていた。

「中学時代は全く前情報をもらうことなく選んでいたから、俺みたいな何にもできない奴でも評議委員長になれた。それは事実だ。けど本当になるべき人間はちゃんとして、後期になりそれが認められた。俺は本来の評価をされた、ただそれだけさ」

「だからって、それだけで三年間評議委員に選ばれたわけじゃ」

言いかけると立村はかたくなに首を振って続けた。

「青大附中の場合は、よほどのことがないと一年前期に選ばれた委員から外すことはないんだ。麻生先生も選出の時、しつこいくらい言っていただろう。附属上がりの生徒は無意識のうちにそう思い込んでいるから、それは違うんだってことを何度も植付けようとしているんだってこと」

「それは先生の問題であって、お前自身の問題じゃねえだろう！」

乙彦は起き上がった。熱なんぞかまってられやしない。汗ばみながらも背が冷たい。寒気で身体がかじかむ。

「でも動いているのは事実だろう。こうやっていろいろと手を回したりして、満足しているだろう。やはりもともと評議委員の体質が染み付いているからだろ？ もちろんそれが悪いとは言わないが、陰でこそこそしていると結局は嫌われるぞ」

「もう嫌われなれているからあまり気にしないよ」

感情もなく、さっぱりと。二の句が告げずに沈黙が続くけれど、無理にでも話を続ける。

「どんなにクラスのためによくしてくれようと、きちんと顔を表向けしてやらないと大抵の奴らはみな不愉快に思う、それは当たり前のことじゃないか。立村、お前が嫌われなれていると思込んでいるのは、俺からしたら違うと思う。お前がもし、堂々とクラスの連中に『クラスのために協力します』と宣言して、その上でいろいろなことをする分には誰も嫌な気はしない。陰でこっそりと、というのが不人気の理由だというのが、どうしてわからない？」

結城先輩にしても藤沖にしても、立村に対してどうも疑念が消えないのは、おそらくそのあたりが原因だろう。立村のしていることそのものは非常にありがたいことである。前もって全クラス委員情報をもらえたのは助かった。こうやって仮眠をたっぷり取らせてもらえたのも感謝している。しかし、なぜもっと堂々と、はっきりと言わないのだろうか。言えない理由でもあるのだろうか。

隠し立てする必要があるとは、乙彦には到底思えない。

また、こうやって陰で立ち回る奴は、大抵見下されることが非常に多い。

表立ってわめくことにより嫌われるデメリットもあるが、それ以上に陰の存在というものは見過ごされ、過小評価される。

雅弘も本当ならもっと高く評価されてしかるべきなのに、成績が下位だったのと生徒会役員に立候補しなかったという二点によって、単なる乙彦の弟分のままだった。今思えば雅弘のため

にも、半ば強引に引っ張り出して乙彦と一緒に生徒会をやらせてもよかったのかもしれないと、熱烈に思う。

立村はしばらく黙りこくっていた。保健室内の体重計がきらきら光っているのがまぶしかった。逆光か立村の姿は白く、紙一枚のようにぺらぺらに見えた。やがてゆっくりと顔をあげた。

「陰だからできることだってあるんだ」

一言だけ搾り出すように呟いた。

喉にひっかかる重たい鉛のようなものを吐き出したかった。

「もちろんそれは認める、だがお前のしていることは表でやっても十分問題ないはずだ。むしろそれの方が女子たちも立村のことを認めるだろう。今の状況が変わる、絶対に」

「絶対に、か」

自嘲気味に立村は呟いた。乙彦と向かい合うのを避けるように視線を逸らし、ネクタイを直すそぶりを見せた。時間稼ぎをしているのは見え見えでなおさら腹が立つ。

「そう断言できるのは、何を根拠に」

「俺が中学で乗り越えてきたことだ」

「関崎が乗り越えられたとしても、俺ができる保証なんてないだろう」

「なぜそう、決め付けるんだ」

堂堂巡りが続きそうだったその時、立村がいきなり乙彦を斜め下から見上げた。首をかしげているのだが、顔の曖昧な線が消え、顎のあたりが細くなった。いきなり顔が変化するわけでもないのに、とがった眼差しが錐のようだった。

「関崎、それなら俺も言いたいことがある」

その睨みつけるような瞳を乙彦は一度、ちらと見たことがあった。

「いきなりなんだ、言いたいことがあるなら受けて立つ」

「今、お前はあまり目立たない方が本当はいいんだ。少なくとも半年くらいの間は」

「何を言いたい。きちんとさえ」

立村はブレザーの襟に指を滑らせた後、手を膝に置いた。唇が一文字になり、やがて細く動いた。

「C組の轟さんのこと、聞いているか」

思いもがけず出てきたその名前。立村の言葉は優しく響いた。

「関崎が悪意をもってしたことではないことは俺も承知している。だが、あれはまずかった」

「なぜだ？」

当然のことをしただけだ。久田さんに指示されたことをきちんと実行しただけだ。南雲から流れた情報なのだろうか。当然の如く問い返した。

立村が今度は真正面から、ぬめりのある大きな瞳で乙彦を見つめ返した。にらんではいなかった。

「奨学金がないと、彼女は青大附高に通うことができない。そのくらい追い詰められているんだ」

その後の言葉はするすると、立村の細い唇から糸を引くが如く手繰られていった。
かいた汗のせいなのか、今度は腕と腹が冷えていく。

「うちの学校の奨学金は、中学時代成績が学年トップだった生徒に支給されることとなっているのは、聞いているよな。だが今回、トップを走っていた水口という生徒が別の高校に進学したこともあって、自動的に二番の轟さんがもらうはずだった」

「すでに聞いている」

耳がタコになるくらい聞かされた奨学生指名なしの顛末。頭が割れそうだ。

「本来なら中学の段階でもらいたかったはずなんだが、ずっと二番手のためそれが果たせなかった。だから今回は一番のチャンスだったはずだ。だが、思わぬところで足をすくわれた」

「俺が悪いとでもいいたいのか？」

認めろ、いいかげん頭を下げろ、そう言わんばかりの口調に、激しい反発を覚える。もちろん乙彦に責任が全くないとは言わない。もう少し場所を選べばとか、女子たちが少ないところでとか、反省すべき点がないわけじゃない。

でも、基本として乙彦がしたことは、責められるものではないはずだ。

認めたくない。誰がなんと言っても。

立村は首をかすかに振った。

「轟さんが苦労しているのを、特に同期の男子たちはみな知っていた。女子たちはどう思っていたか全くわからないが、陰でいろいろと古本を譲ったりして小銭稼ぎに協力していたはずだ。いじましいと思われるかもしれないが、轟さんはそうでもしないと自分の使える小遣いが手に入らない。これは、青大附属の生徒として生きていく上で必要不可欠なことなんだ」

「だが、ゴミ漁りは犯罪だろう。窃盗だろう」

「わからない。だが、そうしないと青大附属にいられないくらい苦労しているんだ。だからこそ奨学金をもらうために努力してきたのに、あっけなく消えてしまったわけだ」

「生活に困ったら違反をしていいのか？ それは違うだろう？ 他にも方法があるだろう？ 俺みたいにバイトをしたっていいじゃないか。俺だってうちがお世辞にも金あるわけじゃないから、こうやって少しでも学費を稼いでいるんじゃないか！」

こうやってなぜ責めるのか？ 立村の重たい瞳に喉が締め付けられそうだ。まるで自分のしたことが犯罪のような目で見ると言いたかった。

「関崎、お前は知らなかったんだ。だからしょうがない。たださ、これだけは忘れるな」

駄目押しの言葉をつないだ。

「轟さんは一年の男子たちにたいへん頼りにされている人なんだ。女子の反応と違って、おそらく一部の男子たちは関崎を悪者扱いする可能性がある。ほんの二、三人程度かもしれないが、もしこれから先関崎が何かしくじったとしたら、そのチャンスを突かれる恐れがあるんだ。よくわからないかもしれないけどさ」

「何を言っているのかよくわからない」

実際、全く理解できない言葉の羅列だ。あの、深海魚のような目つきの轟に、どのような吸引

力があるというのだろう。

「内部の奴らのことを調べていなかったのは悪かったが」

「だからそれを責めてはいないんだ。よく聞けよ関崎。俺が言いたいのはただひとつだけなんだ。後期までとにかく目立たないようにしてろってことだけなんだ。後期に入れば生徒会だってある、夏休みの学校祭実行委員会だって参加できる、けど今の段階で関崎が目立ちすぎると、一部の連中がお前を敵扱いしてしまう可能性があるんだ。だから」

全くもって意味不明すぎる。話の脈略がつかめない。

「俺がなぜ、敵に回される？」

立村は唇を閉じた。同時に天井を見上げた。蛍光灯だけがばかばかしいくらい意味のない光をそのままからせていた。

「つまり、お前は俺がそのわけのわからない連中に食いつかれないように、陰で立ち回っているというわけか？」

答えは帰ってこなかった。青大附属の連中は誰も、完璧な答えを返してくれない奴ばかりだった。

もし、乙彦が想像している通りとするならば、立村は轟琴音の一件を知った段階でいろいろと他の連中をけん制するなり情報を集めるなりしていたのだろう。どういう事情なのかはよくわからないが、轟の家庭事情が乙彦と似たような形で逼迫していたのも事実なのかもしれない。だが、だからといって、店の決まりごとを破っていいわけがない。奨学生を下ろされたということも本来なら乙彦に非はないはずだが、気持ちの上でどうしても頭を下げておきたい部分は確かにある。だが、それだけだ。立村が心配すべき問題ではない。

「だからそういうのは陰でやるべきではないだろう。立村、俺ならこういう場合きちんと、表に出して話し合いを持つ。その連中が誰なのかを教えてもらえれば俺がきちんと説明しに行く。もちろん簡単には理解してもらえないかもしれないが、とことん話せばきちんとわかるはずだ。特に男子ならばな」

女子ならまた別だと思ふものの、あえてそれは口にしなかった。

「話し合っても理解できないことだってあるに決まってるだろ！」

珍しく立村の口調が荒々しさを増した。

「いいか、関崎、理屈じゃない、正論じゃない。確かに関崎からしたら、バイトをして学費を稼いで生活すればいいという考えかもしれない。けど、それができない人だっているんだ。ほら、わかるか、関崎」

いったん、首を傾げるようにして睨みつけた後、

「タクシーで家まで帰るという選択肢がある関崎と、ない轟さんとは違う、だから根本的に話が違うんだよ、それくらいわかれよ！」

立村がそこまで言い放った時だった。

「立村くん、いいかげんにしなさいよ！」

保健室の戸が開き、女子の姿が見え隠れした。声だけがとんがっている。聞き覚えある声ではあった。立村と顔を見合わせ、一瞬のうちに表情を静めた。片手で立村が乙彦を制するような合図をし、素早く立ち上がってその女子の元に走った。

「清坂氏、先生今いないけど」

「ばかね、私、保健室自体に用事あるわけじゃない。ったくもう！ さっきまでずっと探してたのに、どこいるかと思ったらこんなところで喧嘩してるなんて、何考えてるのよ」

「喧嘩じゃないんだけどさ」

さっきまでのいきりだった口調とは大違いである。やはりあのふたりは付き合っていたのだろう。別れたというのはデマなのかもしれない。また熱がぶり返してきそうなのと、面倒なことに巻き込まれたくないのとで素早くベッドへ横たわった。

一歩遅かった。

「関崎くん、具合悪いんでしょ。どうしたの、なんか立村くんに喧嘩ふっかけられたの？ たくもう、あの人ってわけわからないよね」

——訳がわからないのは俺のほうなんだが。

いつのまにかベッドの脇……背を向けているので正確な位置は不明……に立っているらしい清坂美里が何か囁きかけている。

「ちょうどよかった、今ね、一年の規律委員が一度集まってお食事会しようよって話が出てるんだよね。だから関崎くんにも声かけようと思ってたんだけど、明日とかあさってとかは、無理だよね」

頷くしかなかった。

「風邪引いてたらそうだよね。うんわかった。それでね」

何かばさばささせている気配がする。知らん振り、知らん振りと繰り返す。

「もし、何か立村くんにわけわかんないこと言われたら、私に相談してもらっていいから。置いとくね」

小声で、耳元に息がかかるくらいに。全身がしっとこわばった。

「それと、こういう名刺、作っといたほうがいいよ、あとで教えるね」

またばたばたと鞆を開け閉めするような気配の後、

「立村くんも、関崎くんを見習わなくちゃだめだよ。ほら、じゃあね」

清坂は最後まで騒々しく空気をざわつかせて出て行った。

「ほら、これ」

もうさっきまでの陰悪な会話なぞ忘れたかのように、立村が紙のような何かを拾い上げ渡してくれた。

「名刺、作れっていうのは、正論だと思うよ」

手渡されたそれには、清坂美里の名前とふりがな、住所と電話番号が手書きで綴られていた。水色の、なんか北欧の国旗を思わせるような十字の台紙だった。

「名刺、って必要か」

「たぶんこれからは」

乙彦は受け取った。立村の顔を横座りしたまま見上げた。困った風な笑みは、すでに教室の立村と同じものに戻っていた。

土曜日、有無を言わず学校を休まされた。

「熱が下がらないんだからしょうがないじゃないの」

母は氷枕をタオルに包み、よいっしょとばかりに頭の下へ押し込んだ。

「人様に風邪移す方がもっと迷惑なんだから、おとひっちゃんあんた少し寝てなさい」

「俺が迷惑かけているっていうのかよ」

憎まれ口を叩くものの、頭が割れんばかりに痛いとその言葉すら突き刺さる始末。

「おとひっちゃんも人の子だなあ」

兄も信玄袋に大工道具一式を詰め込み、面白そうに眺めつつ学校へ向かった。

「今日のおかずは俺の好きなもんになるよなあ、わあい」

弟も唸っている乙彦を見下ろし、あかんペーをして去っていった。

しばらく乙彦の食べたいものばかりを食卓に並べてもらっていたものだから、弟はいつも割り食っていたという気持ちが強かったらしい。食べ物の恨みは恐ろしいものだ。今日一日は味のほとんどないおかゆしか食べられそうにない。

——生き返ったら見てろよ。

目眩が続く午前中、乙彦はひたすら毒づき続けていた。

——まったく、あんな無様な格好みせやがって！

自慢じゃないがこの十五年ほど生きて来て、保健室でぶっ倒れるなんてことはこれまで一度もなかった。健康第一ほぼ皆勤賞の人生だったはず。それがこのざまだ。しかも入学してたった一ヶ月でひっくり返ってしまうときた。極めつけが高校生のくせに情けなくも親に迎えにきてもらう始末。これが恥でなくてなんであろう！

——しかもタクシー使うなんて何考えてるんだよ！

思わず母相手にわめき散らしてしまったのはいいが、喉もやられてしまい今は何も言い返すことができずにいる。薬の効果もあってかやたらと喉が渴き、水分ばかり取っている。これで何杯目だろう。母に呼びかける。

「母さん、水」

かすれた声だが、しっかりと母には聞こえたらしい。すぐに麦茶ポットを一リットル分運んで来て、枕もとに置いた。

「少し食べたらず薬飲みなさい。おかゆあるよ」

「まだ食いたくない」

「薬そのまま飲んだら、胃、悪くするでしょや」

熱さましを飲むためにしかたなくおかゆを一杯すすった。鮭のふりかけを味付けに、口に運ぶ。

「麻生先生もあんたを褒めてたけどねえ、ただ身体だけは気、つけなさいよ」

「つけてるだろ」

「何言ってるのおとひっちゃん。朝は早いわ、夜ふかしはするわで、寝る時間あんたあったの？」

今まではそれなりにこなしていたんだから平気だ。いや、平気だったはずだった。

母は乙彦の食べ終わった茶碗をお盆に載せ、手拭で額の汗を拭いてくれた。

「お兄ちゃんたちには禁句だけどねえ、あんたには言わないとねえ」

大きな溜息をひとつ。白い錠剤のタブレットをそのまま麦茶ポットの隣に置いた。

「勉強ばかりして、身体壊したらもともこもないんだからね」

母の言う通り、乙彦はがむしゃらにつっぱしってきたつもりだ。自分で尻に鞭を入れ、すさまじい勢いで三月末から四月一杯まで駆け抜けてきたつもりでいる。理由は明白で、青大附属の生活に慣れるという究極の義務、それに尽きる。たいしたことじゃないとは思っていたのだが、あの強烈な眠気と脳天を突き刺すような激痛の嵐から察するに、相当無理をしていたのかもしれない。

——けどあのくらいでへばってられるか！

幸い土日はバイトが休みなのでなんとかなるが、月曜までにはこの体調、なんとかせねばなるまい。乙彦は一気に二杯麦茶を飲み乾し、もう一度氷枕を後頭部にぴたりとあてた。正直あまり、冷たさが伝わってこなかった。

「それでねえ、おとひっちゃん」

母が今度はトイレットロールを一巻き、持ってきた。

「麻生先生がお話してくださったけれども、今度の実力試験の結果であまりおろおろするんじゃないってねえ。最初の一年は中学の時みたいに毎回一番なんて取れないかもしれないけれども、それはそれで順調なんだと思いなさいってねえ」

——なわけないだろうが！

全く母は何もわかっていない。顔を背けて寝た振りをした。

——俺も何度も言われたぞ、そんなことは。けど、俺がもしもいいかげんな順位で墮落してたらどうなる？ 今年しかたないにしても来年、奨学金狙えないんだぞ。月謝はバイトでまかなえるかもしれないけど、それ以上にこれから死ぬほど金がかかるんだぞ！

母に八つ当たりするのはお門違いだとわかっている。でも思わずにはいられない。ひりつく喉に鞭打って乙彦は吐き出した。

「寝るから、一人にしてくれよ」

ほっといてくれ、まずは、そういうこと。

しばらくうとうとするうちに午前の陽射しはだんだん熱くてらてらしたものに変貌していった。夢を見ない時は全く見ず、時々とっぴょうしもなく口に出せない映像を目にすることもある。ゆれてもいないのに床ががたがた鳴るのも、汽車の発着音もみな、肌から伝わってくる。乙彦は何度か寝返りを打ちつつ目を閉じたままだった。

家族のいない部屋は、かえって落ち着く。

——同窓会とか、まだ早いのか。

頭を一本の飛行機雲のような思考が横切った。

——水鳥中学の同窓会、ゴールデンウィークあたりにやらないのか？

まだ一ヶ月しか経っていないというのに、まだまだ時期が早すぎるとはわかっているけれど、むしように何か語りたかった。バイトの都合もあって通学時に顔を合わせることもない。雅弘も新しい学校の連中と盛り上がっているようだし、それぞれがそれぞれの高校生活を謳歌しているのならば何も言うことはない。

——で、俺が弟分かよ。

まだ慣れない自分のポジション取り。藤沖が悪い奴とは思っていないけれども、今まで自分が意識していた関崎乙彦とは違った視点で見られてしまう。それがまだ着心地の悪い洗濯のりぱりぱりのシャツといった感じで、落ち着かない。かといって新参者の乙彦が藤沖を差し置いて余計なことをしでかせばまた、面倒なことになるだろう。藤沖も奴なりに、自分の考えがあり、また乙彦への友情も感じているようなのだから。

——どうせなら、俺を応援団に誘うとか、そういう形で話してもらえればよかったんだが。

どうせ委員会活動が精一杯であり、部活動には参加できないことを承知で、それでも藤沖には同等に扱ってもらいたかった。女々しいが恨みかもしれない。

少し寝て、葉も気持ちよい具合に効いてきた頃だったろうか。隣の部屋で電話のベルが鳴った。一度鳴るとどんなに深く寝入っていても目が覚めてしまう、狂暴な音だ。すぐに母が出ている話をしている様子だった。

「はいはい、どちらさんですか？ あらあら、お友だち？ ああ、乙彦ですね、今寝てますよ、起こしましょうか？」

雅弘だろうか？ いや違う。雅弘相手なら母から「ああおとひっちゃんね、よかったらお昼出すから食べてって」くらい言うだろう。なんとなく電話口の口調が控えめなのは気のせいだろうか。誰だろう？ 乙彦は身を無理やり起こし呼びかけた。

「誰？」

話している最中で乙彦の疑問には答えてくれない。まだ話しつづけている。

「あらら、でも悪いわ。そんな遠くから。まあそうですか？ なら乙彦を起こしておきますので、どうぞ無理なさらないでね。ありがとうございます」

誰か来るのだろうか？ 受話器を置くと同時にもう一度乙彦は怒鳴った。

「母さん誰？」

そそくさと襖を開けた母は大きな溜息を吐いた。

「おとひっちゃん、なんか羽織ってなさい。今からね、学校のお友だちがお見舞いに来るんだって。もう部屋も散らかってるしいきなりで困ったわねえ」

「学校って誰？ 雅弘？」

「雅弘くんだったらそんなに気遣わないわよ。青大の子みたいよ。ほら、クラスの評議委員の藤沖くと古川さんだって。あんた知ってる？」

もちろん知っている。その前に一気に胃が痛くなったのは風邪薬が合わなかっただけではない。慌てて部屋を見渡すと、もう今からでは片付けが間に合いそうにない散乱状態。自分の机と荷物だけはそのまま机に投げたままにしてあるのでさほどでもないが、問題は兄と弟のエリアだ。三人兄弟で現在は八畳分を三分割する形で使用している。それぞれが角を取って分居しているのでそれはそれで慣れてはいるのだが、それでも男くささ満点の鬱陶しさは否めない。兄は工業高校御用達の木工道具が机の上に散乱しているし、現在受験勉強中の弟は勉強道具ならぬプラモデル雑誌が床一杯に広がっている。決して乙彦も片付けがうまいほうとは思っていないが、それでもまだ奴らに比べれば、まし、といったところか。

「ここに来るってたのか？」

「住所わからないだろうからって断ったよ。でもちゃんと、青潟市の地図があるからたどり着けますって自信満々に断言されてねえ。困ったねえ。今からお菓子用意しておかなくちゃ、買い物行ってくるわよ。おとひっちゃんも少し身支度しておきなさい。女の子が来るなんて、ねえ、もうびっくりよ」

母は物凄い勢いでまくし立て、乙彦の返事を待たずに即、家を出た。

——藤沖かよ……！

たった一日だろう。それも土曜日だ。もちろんあいつがクラスの評議委員であることを考えると全く想像がつかないことではないにしても、でもそんなすぐに見舞いに行くなんて発想がまず、信じられなかった。

それになぜ。

——古川も一緒か？

これもまた、母ではないけれども「びっくり」というより、信じがたい発想だ。

いくら同じクラスであっても、ただのクラスメートの見舞いに、女子と一緒にくっついてくるというのも。乙彦からすれば、藤沖から電話が来るであろうとは想像していた。奴の生真面目な性格上、土曜分のノートコピーを用意してくれたとか、連絡事項があるとか、そのあたりの報告はしてくれるだろう。また立村も後からこっそり電話をよこすだろうとも。だが、直接お見舞い道中しに来るとは、まず乙彦の発想ではありえないことである。

藤沖だけならそれなりにだらんとパジャマ姿で寝転がっていてもいい。

しかし、古川まで来るのなら、露骨に胸をはだけた格好でいるわけにもいくまい。

乙彦はすばやく薄手のTシャツをタンスからひっぱりだし中に着込んだ。上からパジャマを羽織り、床に散らばる三人分の靴下類を弟の机下に押し込んだ。

時計を見た。ちょうど十二時半。ということはすでに二人、青大附高を出発しているということか。

——やってらんないな。

たかがお見舞いに対してそこまで気遣いする必要あるのか、自分でもわからなかった。

不思議と身体を動かしているうちに、けだるさやめまいはすうっとひいていった。むしろうっ

すらと汗ばんでくるのが心地よく、寝すぎたゆえの頭の重さもだいぶ落ち着いてきた。やはり自分はただ横たわっているよりも、身体を動かしている方が向いているのだろう。

母が戻って来て台所でばたばたやっている間に、もう一杯麦茶ポットからお茶を飲み空にした。少しすっきりしたのでまずは横になった。同時にまたけたたましくチャイムが鳴り響いた。家の中だけではなく、外にまで響き渡るのが響感がいい。

「はいはい、あらあら遠くからどうも……おとひっちゃんですか？ 今起きたところなんで、どうぞどうぞ上がってくださいな。ほら、こちらですよ」

ずいぶんよそ行き声で上ずっているものだ。母がいきなりお上品口調にしようとしてうまくいっていないのが、横たわっている乙彦にも伝わってくる。身を起こし、かけぶとんの上に両手を置いた。客人を待った。呼吸ひとつ置いて、じっと襖の向こうを見つめた。

——だから母さん、その呼び方するなよ。

襖の向こうからは「おじゃまします」とふたり男女の声が連なり、その後で大人しげに「おじゃまします」という別の女子声が続いていた。ふと身体が引きつる。

——確か、母さん、来るのは藤沖と古川の二人だけって、言ってなかったか？

今耳にした声は、乙彦の分析によるとどう考えても三種類のはず。

「失礼しまーす！」

襖を開けたその向こうには、三人確かに青大附属制服姿の男女が並んでいた。男子ひとり、女子ふたり。そのうち一人は古川だったが、もうひとりなぜ混じっているのかすぐには理解できなかった。

——清坂？

昨日、枕もとでもらった名刺をどこかにやってしまったことに今気付き、慌てて額の汗を拭いた。まずい、清坂美里もセットでくっついてくるなんて想像もしていなかった。

「遠くから、ありがとう」

まずはそれだけ伝え、乙彦は三人から見えない片手で敷布団の端を握り締めた。

三人まずは、藤沖、古川、そして清坂の順番で並び枕もとに座った。女子ふたりがきょろきょろと乙彦のいる兄弟部屋を眺め回しているのが勘に触るがしかたない。まずは藤沖にもう一度お礼と詫びを伝えた。

「気を遣ってくれたのか、ありがとう」

「いや、当然だ。評議委員としてはな」

さらりと答え、藤沖はまず鞆からコピーをまとめて取り出した。

「まず、数学と理科、それから英語の補習とノートだ。だが無理しないでいい。渡しておくだけだ。たぶん来週の実力試験に出てくる内容だから目を通しておけばいい」

「すまない」

開いてみると、ほとんどがノートの写しだった。しかもやたらと詳しい。ただ黒板を板書しているだけではなく、ところどころ別のメモも残っている。だが藤沖の文字ではなさそうだ。特に英語は、非常にわかりやすい大きな文字で綴られている。筆記体とゴジック体、両方を活用して

書き分けている。

「藤沖、このノートなんだが」

「あ、これね、うちのクラスの片岡が書いたのをコピーさせてもらったんだよね」

古川が即答し、にっと笑った。

「うちのクラスであいつ英語二番でしょ。だから強引にコピーよ。ちなみに数学と理科はまた別の奴。うちのクラスよりもB組とかC組とか、そっちの方に得意な奴固まってるから、そっちからコピーさせてもらったほうがいろいろといいじゃない？」

ねえ、と清坂の方に同意を求めるべく頷くと、今度は清坂がまくし立てた。

「そうそう。今日、こずえから聞いて私も、関崎くんに関律委員会のことで話あったんでついできたの。でね、一応週番の順番と一年生会のことで」

言いかけた清坂を制したのは藤沖だった。ありがたい。

「それは今すぐでなくていいだろう。それよりもだ、関崎、本当に大丈夫か」

女子の声よりも、今は藤沖の男くさい見舞い文句の方が耳にやさしかった。

「本当にすまない。月曜には復帰する」

「何かあったら相談してくれ」

何度も聞かされた同じ言葉を発し、運ばれてきた茶菓子に手をつけつつ、しばらく四人で他愛もない話をし続けていた。母がちらちらと古川と清坂を見るのがいらいらするがあえて無視をした。麦茶ポットを半分空にしたあたり、母が襖の向こうに消えた段階でいきなり古川が人差し指で「しーっ」と周囲を静ませた。

「関崎、あんたさあ、今ほんっとねえ、大変だろうからさあ」

脇に置いた手提げ鞆から古川は、まず紙袋の端を三角にして覗かせた。

「青大附高に来て一ヶ月、疲れてるんだよ、ねえやっぱ」

次に藤沖の顔をにんまりしながら覗き込んだ。無表情で見返す藤沖。清坂が古川の鞆に手をかけながら、

「ねえ、こずえ、なに、なに？」

急かす。

「まあ、私たちが帰ってからゆっくり見てよ。お勉強の道具は藤沖が用意してくれたようだし、女子としては別の角度からのプレゼントってことで、どうぞ」

ゆっくりゆっくり「ちらりらりん」とか歌いながら白い袋を取り出した。A4版、薄めの紙に何か雑誌らしきものが入っているようだ。両手で受け取った。

「ありがとう」

同時に藤沖が素早く手を出した。ひったくられた。乙彦も逆らわなかった。

「あのな、古川。なに考えてるんだ。いくらなんでもお前は女子だろう」

「まあね、本当は評議委員たる藤沖の管轄だとは思ったんだけどねえ、ま、いいでしょ。美里には目の毒だからこれはあとで関崎だけで使ってもらえばいいし」

藤沖が歯軋りしそうな顔で唇の端を片方ぐいと持ち上げた。全く動じないのは古川こずえ。そのまま紙袋を開こうとする藤沖をやんわりと止めた。しかしそばには清坂がぐいぐい古川の腕

を引っ張っている。

「なによなによ、私の前では見せられないもの？」

「当たり前でしょうが！ あんたねえ、男子の事情くらい少しはわかってるんじゃないの美里」

「なによその男子の事情って！」

妙にいきり立つ清坂の髪がぐるぐる揺れ、初めて気付いた。清坂は今日、髪をふたつに分け、高く耳の上で結んできていた。小型犬でそういうタイプのがいたような気がする。やはり同じような髪型で整えていた、一年前会ったある女子のことを思い出したのは必然だった。三人で一冊、雑誌らしきものを無理やりひっぱりあいしている間、乙彦は清坂美里の髪の毛にお下げ髪を重ねて見ていた。

現れたるは、白いセーラー服姿の美少女が微笑む見目麗しき表紙なり。

「なんだこれは？」

乙彦よりも先に口をあぐりあけつつ、それでもページをめくる藤沖。

——やはり、そういうものか。

怒る気はしなかった。

——さすが藤沖と古川、ここで漫才やるというわけか。

話の展開からしておそらく「下ネタ女王」の古川が用意してくる雑誌とはその系統のものだろうと想像はしていた。頭痛を押さえつつも、なんとなく先は読めていた。

しかし古川の女王なり思いやりも理解できぬわけではなかった。

なによりも、本音では、嫌いではない。

今度は乙彦の方がポーカークフェイスを気取る番だった。意外にも藤沖が興味津々でページをめくりつづけているところが面白い。てっきり「古川！ お前何を考えている！ 仮にもお前、評議だろ！」くらい怒鳴るのではないかと思っていたのだが。話が全くわからない奴ではないのだ、やはり。藤沖もまんざら、堅物 オンリーの男ではないのだ。

「なあにじろじろ見てるのよあんたさ、藤沖、あんたも相当溜まってるを見たね」

お得意、「下ネタ女王」の突っ込みが始まった。幸い乙彦に話の矛先は向かなかった。なんとなくわざと「向けていない」という方が正しいような気がしていた。乙彦は黙ってふたりの掛け合いを聞いていた。古川の隣で少し顔をこわばらせている清坂が、無言で座っていた。そ知らぬ振りしていた。

「興味ないとは一度も言ったことないが」

「やっぱ男だねえ。まあね、今回用意させていただいたのはわりとエッチ度が低めのものにしたんだけどさ。関崎、古本屋さんだから古い写真集は仕事の合間にちょこちょこ読めるんではないかって思って。だったら新品の方がねえ、気持ちとしては、落ち着くかなって思ったわけよ」

当然の如く乙彦も言い返した。

「工作中はそういう暇などない」

「あっそ、そうだよねえ、関崎は真面目だもんねえ。でもさ、真面目な奴ほどいろいろとストレス溜まってるとだよ。自覚ないみたいだけどね。藤沖、あんたもそう思ってなかった？ 男子たるものやっぱり、相当、くるかなあって思ってなかった？」

話を振られた藤沖が堅い顔しつつ真面目に答えた。

「思いやり感謝するが、そういうものは女子ではなく男子が用意すべきものだ」

「あーらそう、じゃああんたさ、今度の新歓合宿、ちゃんと男子トイレにこういうもの用意するの忘れるんじゃないよ。覚えてるよね私たちの修学旅行さ。ちゃんと男子評議が一クラスに一冊ずつ、一発抜き用の写真集もってきたって話、聞いているでしょうが」

あっけらかんと語りつづける古川の心臓の強さ。かといってなぜかむかつかないのは人徳だろうか。突撃見舞いで普段ならいらいらするところなのだが、不思議と古川こずえに対しては女子への不快感を感じる事が少なかった。その理由もなぜかはわからない。はっきりしているのは下ネタトークの雨が降り注いでも、乙彦は無理にやめさせたいと思わないというそれだけだ。

「ああ、難波からそれは聞いたが、あいつが持ってきたのは『日本少女宮』の写真集だった。あれは使えない」

やはり生真面目に返事をする藤沖。観察しているうちにだんだんこのふたりのかけあいが面白くなってきた。学校ではやたらと世話好きの硬派を通して藤沖だが、本当のところは勘違い野郎で実はちょっとばかりスケベなところもある愛すべき男ではないのか。応援団を結成するために乙彦へ近づいてきたなどというけれども、実のところ順番が逆な理由なのではないだろうか。この一ヶ月、いらいらするところもあったけれども、我が家でじっくり観察してみれば藤沖、こいつはなかなかわかりやすく面白い男である。対等に古川の下ネタトークを交わす態度も、気持ちよし。

藤沖はぱらぱらとめくり終えた後、「俺の好みではないが」と余計な一言を付け加えて乙彦に戻した。雑誌名は「いもうとがっぱい」。見た感じ、芸能人というよりもクラスの女子たちの中でちょっと見た目可愛い子を集めた、投稿雑誌のようだった。

「どうもありがとう。ふたりの気遣い、恐れ入る」

乙彦も生真面目に礼を返した。吹きだす古川は、膝詰で乙彦の隣に近づき、適当にど真ん中のページを開いた。

「そーいや関崎にまだ聞いてなかったよねえ、あんたの好み、どんな子なんだか」

「別にそういうのはない」

「藤沖はプロのモデルタイプの可愛い子でなくちゃ、だめだって言ってたよねえ」

その言葉にも全く動じない藤沖。堂々と頷いた。

「写真をとらせるならばそれなりのルックスがないとな」

「はいはい、あんたは素人アイドル嫌いだもんね」

藤沖とからかいあいながらページをまためくる古川の指先を追いながら、ふと視線が止まった。目をそらそうとして、また清坂美里と目が合った。ふたつわけした髪が揺れていない中、ぎゅーと絞り込まれたような瞳に打たれた。

もう一度写真に目を落とすと、そこには同じく二つ分けして、清坂よりも長めに結い上げたセ

ーラー服少女の写真がひろがっていた。顔形は全く異なっていたけれども。

清坂がいきなり立ち上がった。

「こずえ、あんまり長居したら失礼だよ、帰ろ！」

唇を真っ直ぐかみ締め、頬を紅潮させ、片手を握り締めたままだった。勢いよくて立った拍子に空気が揺れた。

「どうでもいいけど、関崎くん、こういう本、人前で読んじゃだめだよね！」

矛先が突然乙彦に向いた。思わず尻を布団の下で位置直した。

「だって、こういう本って、女の子のこと、見下すような写真ばかりだし。変な格好ばかりしてるし。女子がいるところでこういうの、広げたらだめだよ。それに関崎くん、規律委員なんだし！」

いきなり脈略のない発言にぎょっとした。

さっきまで古川の側でじっと黙りこくっていたから妙だとは思ったのだが。

清坂は唇を尖らせさらに続けた。古川を責めた。

「こずえも、いくらなんでも関崎くんにこんなの持ってってどうするのよ！」

「私、いつもお見舞いの品、雑誌に決めてるって知ってるでしょうが。立村だって羽飛だって南雲だって」

「でもでも、それ、男子同士ならいいけど！」

「美里もなにいきりたってるのよ。藤沖だってOKしてきれたんだからさ」

しっかり頷く藤沖。乙彦にちらと目配せした。女子の言い分はうるさいぞ、との合図とみた。

「でもでもでも！ 関崎くんがこういうので喜ばないかもしれないじゃない！ほんと、恥ずかしいっらないじゃない！」

「別にアダルトビデオを持ってたわけじゃないし。そんなかっかしないでもいいじゃん。美里、なにいきなり清純ぶってるの。いきなり規律委員になっちゃったからってそうそう焦らなくてもいいじゃんねえ」

怒らず交わす古川こずえの口調に、だんだん空気も柔らかく凪いできた。こういう場だと大抵誰かがヒステリーを起こして收拾がつかなくなるのが常だ。藤沖もだんまりを決め込んでいるのだが、それもそのはず、古川が全く動じていない。どんなに二つに結った髪を揺らして清坂が訴えてもどこ吹く風。ゆえに、苛立ちも感じずにすむ。

乙彦はしばらくふたりのやり取りの様子見した後、雑誌を開いたまま声をかけた。

「一ヶ月しか付き合いないのに、わざわざ見舞いに来てくれるだけでもありがたいのに、こうやって話をして盛り上げて、さらに土産まで用意してくれるクラスメートに、感謝するのは当然だ。ありがたいと思っている」

また何かを言いたそうに口を開きかけた清坂が、息を飲んだ。乙彦に首をかすかに振るような仕種をした。乙彦は続けた。

「規律委員ならば学校では読んではいけないだろうが、部屋の中では別だろう。それに、特に問

題もなさそうだ」

実際見た感じ、中高校生男子向けの雑誌であって、特にいわゆるエロ本といった本ではない。下ネタ女王古川が選んだにしては柔らかい内容だろう。何よりも、みんな服を着ている。

「もしもっと過激なものを持ってきたのだったら俺もこの場では開かなかったが、こうやって気遣ってくれるのならば、一ページでも読むのが感謝の意を表す方法だと思う」

「関崎くん、何言ってるのよ」

ようやく清坂が言葉をかすれた声で発し始めた。乙彦へは少し呆れ顔を向けていた。

「もちろん学校に持ち込むのはよくないが、ここでは別に問題がないと思う。ありがとう」

古川および藤沖にもう一度改めて礼を言った。古川がにやっと笑い、耳元でささやく。

「なんだかなあ、照れるよ、もう」

背中を思いっきり叩かれ、乙彦はくるっと布団にもぐりこんだ。悪いが清坂にそれ以上言う気もなかった。藤沖がかすかに笑みを浮かべているのに片手で答え、乙彦は横たわったまま菓子を進めた。せっかくのカステラなのに干からびてしまう。麦茶もまだだ。

「ほらほら美里、カステラ食べようよ。まったくねえ美里、何もたまたまあんに似た写真を広げたからってぱにくることないでしょうよ。もうねえ、美里、敏感なんだから」

「そんなんじゃないってば！」

乙彦は慌てて本を閉じ、枕の脇に裏表紙を向けて置いた。遠慮なく食いだした藤沖を尻目に、さらに古川は乙彦にしか聞こえない声で囁いた。

「美里ってエッチなこと言われるとかあっとなっちゃう子だから、規律委員会ではその点、注意しといたほうがいいと思うよ」

「なんだそれは」

「つまりね」

溜息交じりに、それでもはっきり古川は説明してくれた。

「さっきあんたがじいっと見てた写真、美里にそっくりだったでしょ。あれ見て、美里逆上したのよ。やらしい目であんたが見てるんじゃないかって怖かったみたいよ。まあそんなわけじゃないってわかってるからね、その辺気にしないでよ」

思わず清坂の横顔を見つめた。横目でじろりと乙彦を責めるように見返された。

——別にそんなつもりじゃなかったんだが。

気まずい中、自分の視線がまた清坂美里のふたつ分け髪に向いていく。

別に変な意味ではないのだと説明する気もなかった。

普段はお下げにしていた髪を、雅弘に告白を決意した時初めて結ったというふたつ分け。一年前、水野五月はそう説明していた。雅弘が密かに想いを寄せていた青大附中の一年下女子に似た髪形にしてみたかった、そう話していた。

清坂美里の今日の髪型が、たまたま似ていただけ。雑誌のグラビア一枚、同じ髪を結っていただけ。記憶が甦っただけ。清坂美里に説明する義務はない。

ひとまず一夜明けて熱も下がり、家族がスーパーへ買い物へ出かけたお昼過ぎ、乙彦は身支度した後外に出た。まだ治りかけだというのに遊びにほたほた出て行こうなんて、親がいたら絶対に許してもらえないだろう。乙彦からすればひとりでテレビをつけっぱなしにしたまま横たわってぐうたらしているよりも、外の空気をたっぷり吸い込んで鋭気を養うのが一番だとも思う。まあ、宿題を片付ける方が先と言われればそれまでだが、それはまたあとでなんとかかなるだろう。

——それにしても日が照ってるな。

トレーナーだとそろそろ汗をかきすぎてしまう。中は半そでのTシャツでもよいくらいだ。上にやや厚めの黒いシャツを羽織り、駅前までまず歩いてみることにした。いつものパターンで、まずは「佐川書店」に寄ってみるのも手だろうか。

——いや、今日はまずいな。

雅弘に声をかけてみるのも一案だが、佐川書店の店長さん……雅弘の父さん……と顔を合わせればかならず「みつや書店」の話になるだろう。そうなったらまたいろいろと話が弾みすぎて抜けられなくなる可能性もある。乙彦は格好の話し相手になってしまう。暇な日だったらそれでもいいが、病み上がりの自分としてはできればそれは避けたい。

運動不足解消をかねてランニングをしたいところだが、どうも息が上がっている。

しかたない。その辺を散歩していれば、誰か中学時代の友だちと行き会うことだろう。

会わないなら会わないでもいい。バッティングセンターに行くのも手だ。

ゴールデンウィークに一度、雅弘を始め仲の良かった中学時代の連中と、公園でドッチボール大会をやろうと話していたのだが、なんとなく立ち消えになっているのが気に掛かる。乙彦も本当だったら仕切り屋としてきちんと連絡を取り合いたいのだが、いかんせんバイトと補習の嵐のため何もできずにいる。誰かがなんとかしてくれる、という甘い発想は通じないのも、奴らとの永年の付き合いでよくわかっていることだ。かくなる上は一学期の中間試験後をめどに集まろうと考えている。

——しかし誰も連絡よこさないよな。

野郎同士の付き合いはそんなものだけでも、雅弘くらいは「おとひっちゃん、どうしてる？」くらい電話をよこすもんだと思っていた。工業高校といえば乙彦の兄が通っている学校。兄のようにわりと大人しい奴もいれば、バリバリのヤンキーも揃っていると聞く。雅弘の性格として果たしてあの校風が合うのか、いささか心配なところもある。元兄貴分としては聞いてみたいこともないわけではない。しかし全く音沙汰なしというのはどういうことだろう？

昨日までまだ冬の気配が残っていた街が、一転して春の陽気に染まっている。桜もようやく満開となり、時折頭に降りかかる。電信柱のあちらこちらには商店街の提灯がぶら下がり、今日明日が花の見ごろとばかりに揺れている。近所のおばさんに声をかけられそうになりすぐにちよろっと横の小路に入ってみたりもする。やましいことをしているわけではないが、やはり母にばれ

ると後々面倒だ。

昼食はすでに母の用意してくれたおかゆをすすって終わらせていた。はっきり言うが全然足りない。小銭入れをまさぐって、コロッケを三個ほど購入した。くちくなくなったところで駅前通りに出ようとしたが、今度は青大附属の制服を着た連中がうろついていたのでまた別の道に飛び込んでしまった。いや、これもまずいことをしているわけではないのだが、顔を合わせるとまた面倒な奴がいるかもしれない。女子だし、また自分の気付かないところで覚えられていたりしたらこれまた恥ずかしい。青大附属の敷地内ならまだ仕方ないが、ここ水鳥中学通学圏だとその、いわゆる、「認識の違い」の差に気付かされそうでこれまたみっともない。すいすい、水鳥中学の通学路を辿って歩くことにした。通学路はあえて繁華街から外れた道を使うように指導されていたから、ここまできるともう静かだった。

しかし、誰とも顔を合わせなかった。

水鳥中学時代の友だちはおろか、相性最悪だった連中、さらに下級生たちとも遭遇しなかった。もちろん同年代の男女はそれなりに繁華街をうろちょろしているのだが、この辺にすんでいる連中は誰もいなかった。すれ違うのはほとんどが近所の人かもしくは幼児・小学生くらいだった。なんだか拍子抜けしてしまった。

——まあいい。今度雅弘を捕まえてみるか。

ブランコやジャングルジムで遊んでいる小学生たちを横目に見ながら、さらに奥へと進んでいった。かつて三年間通った道だけでも、実のところ細い路地にはあまり足を踏み入れたことがなかった。寄り道をしなかったと言い換えてもよい。伝書鳩のように学校と家との往復で過ぎたわけだ。でも今ならば、もう寄り道が校則で禁止されているわけでもない。

せっかくだ、知らないところを探検してみよう。

ひとりだからできること、乙彦はさっそく試してみることにした。

——あの路地の奥に確か、なんか建物あったよな。

小学時代に社会科の校外授業で連れて行かれたっきり、入ったことのない「青潟市郷土資料館」という地味な建物が潜んでいるはずだった。

一度立ち寄っただけとはいえ、道筋を忘れるわけがない。

道端の桜並木と街路樹に挟まれた通りをてくてく歩き、曲がりくねった道にもぐりこんですぐに辿り付いた。木目のたて看板に「青潟市郷土資料館」とどでかく黒い文字で彫られているのですぐわかる。近隣の街並みがわりと普通の住宅地と子ども向けの公園のみということもあり、全く人気がないわけではないのだが、知り合いはいなかった。確か、昔使われていた海鮮問屋の蔵を再利用したものとかで、三角屋根に白い漆喰、真中に屋号が残っている。見た目は目立つが、中はごく普通の博物館だったのであまり印象には残らなかった。

入り口で入館料百円を払い、すでにもいであったチケットの半券を受け取る。

そのまま中に入ってみると、以前来た時と同じく青潟市近郊の立体地図やら、水害の歴史やら、成り立ちやらがたくさんパネルとして掲示されていた。遺跡らしきものも、半ば壊れかけた形

で存在している。歴史はそれなりにあるもんだと思ったくらいでそれほど興味あるものでもなかった。もともと乙彦は歴史があまり好きではない。歴史よりも未来。そういうタイプだ。

人気は殆どないが、中でかすかに声がする。やはり誰か物好きがいるのだろう。すれ違いに五十代くらいの男性がメモをとりながら粒さに地図を観察している。歴史関係の本をまとめたコーナーにもまた一人、白髪の男性が座っていた。とてもだが花見の盛りに覗き込むような施設ではない。

——なんか陰気臭いな。

乙彦およびではない世界ということだけはよく理解した。百円が高いのか安いのかは判断つきかねるが、どちらにしてももう来ることはないだろう。元を取るためまずはぐるっと回るだけ回ってみようか。そう判断し、館内の「青潟市立体地図」という、かなり精緻な地図を一通り見ようと、ふとソファに目が行った。

目を疑った。

茶色のソファが立体地図を背にする形でちょこんと置いてある。

ふたり、無言でこちらを見ている。

「雅弘？」

思わず発した言葉に、すぐ答えが帰ってきた。

「おとひっちゃん」

やはりそこにいるのは佐川雅弘当人だった。チェックの黄色いシャツにジーンズ、やたらと髪の毛があやついているように見えるのは気のせいかな。乙彦が立体模型を回って近づいてみると、そこにはお下げ髪姿で黙って頭を下げている女子がいた。一瞬誰かわからなかった。名前が即座に出てこなかった。

「あの」

「関崎さん、こんにちは」

雅弘よりも戸惑っては居ない様子で、その女子は立ち上がり一礼した。

「佐賀さん、か」

「はい。青大附高ではこれからもお世話になります。どうかよろしく願いいたします」

青大附中現生徒会長、佐賀はるみが雅弘の隣で礼儀正しく顔を挙げた。

——髪、なんでこんな形にしてるんだ。

髪型が違うからわからなかった。雅弘の隣でお下げ髪にして座っている女子といえば、乙彦の記憶内にはひとりしかいなかったし、その女子が顔形を変えて座っている可能性も今は殆どないはずだったから。佐賀はるみの顔立ちは可愛らしさというよりも凜とした気品がある。一年前、新井林健吾と一緒に座っていた時とは違う、一本すっと立ったような竹の雰囲気だった。

かぐや姫でもないのに、なぜか舌がこわばる。

なぜだか自分でもわからない。

「おとひっちゃん、あのさ」

「お前こそどうしてここに」

しばらく無言で乙彦と雅弘はにらみ合った。

「俺、たまたま学校の宿題で調べなくちゃいけないことがあってそれでさ」

「もうそんなややこしい宿題が出てるのか」

それはまずありえないことだろう。あるとすれば社会の歴史関連だろうが。その事実の真偽よりもなぜ雅弘が、見え透いた嘘を言わねばならないのか、そちらの方に興味がある。乙彦はさらに畳み掛けた。

「それだったらなぜ、佐賀さんがいる？」

「それはさ、たまたま」

妙である。あまりそちら方面には不案内な乙彦ではあるけれども、女子とふたりで人気のない博物館のソファーにて語り合っているのはやはりおかしい。仮に相手が水野五月だとしたらまだわからなくもない。一時期ふたりは付き合っていたのだから。しかし、今雅弘の隣にいるのは、すでに交際相手がいる佐賀はるみである。学校も違う。もちろん生徒会関係での繋がりがあったのも事実だし、ほんの一時だけ雅弘が彼女に熱を上げていたのも乙彦は知っている。とはいえ、一年前のこと、いきなりなぜ再燃しねばならないのかわからない。

「関崎先輩、あの、私、今日、関崎先輩にどうしてもお話をしたくて佐川さんに相談していたんです」

不穏な中、すすっと割り込んできたのは佐賀はるみだった。いきなり乙彦に対して「先輩」をつけている。雅弘に対しては「佐川さん」と「さん」付けなのが奇妙だった。

「私、関崎先輩が青大附高に来てからどうしても一度、直接お話したかったのですが、先輩のいらっしゃるクラスには古川先輩とか立村先輩とかいらっしゃって、なかなかいい機会が見つからなかったんです。藤沖先輩を通してとも思ったのですが、やはり事情が事情だけにどうしても、うまく切り出せなくて」

お下げ髪を揺らさずに、落ち着いた声。壇上で出す声と同じなのか。聞き入る。

「私、どうしても、お話したかったんです」

念を押すかのように佐賀は一度言葉を切った。

「梨南ちゃんのその後のことです。関崎先輩とかなりかかわりのあることなので、どうしても」
隣で雅弘がうんうん頷いていた。そうか、そういうことなら話は通じる。雅弘は一年下で現在青大附中の評議委員長である新井林健吾とも付き合いがある。そちら経由では話ができなかったのだろう。しかたなく雅弘経由ということならば、理解できなくもない。

「そうか、ならここで聴かせてもらったほうがいいか」

「はい。そうしていただけるとありがたいです」

予定通りの言動なのか、それともハプニングなのか。判断つきかねるものがありつつも、雅弘は佐賀はるみの隣に腰掛けた。雅弘が乙彦にだけわかるような目配せを送ってきた。理由があるならこれ以上文句を言う必要もない。

隣に座った時、かすかに桃の香りがした。

「実は、梨南ちゃん、今、不良っぽい女子たちと付き合っているんです」

いきなり切り出された。乙彦と杉本梨南とのつながりが希薄なのを知っているかわからない。

佐賀はるみから杉本梨南につながる理由も言われてみなければ気付かなかった。つまり、そういう程度の認識しかない。頷くしかない。

佐賀はすでに乙彦が杉本梨南とそれなりのかかわりがあるという前提のもと話しつつづけていた。

「梨南ちゃんは二年の段階でE組という特別クラスにまわされて個人指導を受けてきたのですが、この四月からまた私のクラスB組に戻ることになったんです。私たちもそれは歓迎すべきことだと思っていますし、クラスみんなが梨南ちゃんを刺激しないように注意深く振舞っているのです。今のところ問題はないんです。ただ」

「ただ？」

「たいていそういう場合は問題があるというのが繋がる言葉「ただ」。

「どうしてもB組の子たちが相手にしづらくなったので、梨南ちゃんは別のクラスの人たちと遊ぶようになりました。それはそれでいいと思います。ただその子たちというのが、いわゆる『不良』と呼ばれる人たちで、先生たちが持て余しているタイプの人たちなんです」

「不良か」

「一瞬浮かんだのは総田幸信とその配下。」

「青大附属には基本として、悪いことをする人はいないと思っています。もしそういう人がいたら早い段階で退学か転校しているはずなんです。でも、私の代にはなぜか、陰でいろいろ違反をしている人たちが多くて、噂もあまり、いいものではありません」

「先生を殴るとかそんな感じか」

「暴力ではないんです。もしお目こぼしを受けているとすれば、彼女たちが周囲に迷惑をかけていないからだと思うんです」

「迷惑？」

「校舎破損および因縁付けとかか。水鳥中学の価値観でいうとそのあたりだろうか。佐賀はるみは笑顔のまま首を振った。

「私が耳にした話ですと、女子の場合その、外でお小遣いをもらうために声をかけてもらってご飯を御馳走してもらったりとか、そのあといろいろとか、そういう話です。その子たちは学校であまり目立たないので、陰でこそこそしているようです。気付いていないこともないとは思いますが、むしろそういう子たちよりも梨南ちゃんの方が学校内で目立っているのです。そちらに集中してしまうようです」

杉本梨南については殆ど乙彦も関心が持てなかった。それだけのことだが佐賀はるみは執拗に「梨南ちゃんが」と繰り返す。

「新学期が始まってから梨南ちゃんはその子たちと一緒に帰ったり、遊んだりしてます。もちろん彼女たちと同じように髪の毛を染めたり、教室をこっそり出ていったりはしませんし、成績も相変わらず学年トップのままです。まだ、真面目なところは変わっていません。でも」

言葉を切り、乙彦を見つめた。片手をお下げの房に当てた。

「おそらくこのままだと、梨南ちゃんは彼女たちの価値観に染まってしまおうと思うんです。クラスの人たちは梨南ちゃんとはつかず離れずの関係のままだし、もう私と話をするのもいやみたくで

すし、私も生徒会活動で忙しくてこれ以上梨南ちゃんの面倒みる余裕はないですし」

それはそうだろう。

「でも、一度は一番の仲良しだった梨南ちゃんを見捨てることはどうしてもできません。だからこれから私のできる範囲において、梨南ちゃんを見守っていこうと思っています。ただその時何をすればいいのか、私にはまだわからないんです。もう少ししたら今度は修学旅行ですし、一緒に行動するグループはたぶんその不良の子たちと一緒にでしょうし、それに」

また言葉を区切った。隣で雅弘が食い入るように佐賀を見つめている。

「梨南ちゃんは、クラスの男子たちには嫌われてますけど、大人の人には好かれそうな気がします。もし周りの子たちが梨南ちゃんをおだてあげたりしたら、もしかしたら同じようなことをするかもしれません。そんなことして穢れてしまうのはいやなんです」

「穢れる？」

言われた意味がわからない。オブラートでくるんでいることが何かはどことなく感じ取れなくもないのだが、具体的に何かを説明してもらわないと困る。

「関崎先輩、噂で聞いてませんか。青潟の駅前近辺の繁華街で、中学生の女子たちが陰である、その」

「売春か」

思いついた言葉を口にただけだが、佐賀は頬を両手で押さえて黙りこくってしまった。うつむく姿にこちらの方が焦る。

「いや、違うか」

「いいえ、そうです。関崎先輩のおっしゃる通りです」

今度は乙彦が硬直する番だった。雅弘だけがぎょときょとと自分および佐賀を交互に眺めていた。言葉を挟もうとしない。

青潟駅前を校区とする水鳥中学では、多少なりとも噂で流れてはいた。

どこかの中学生たちが制服をコインロッカーに詰め込み、私服に着替えてそのまま不良連中とろろうろし、たむろう話を。もちろん噂でだが、かなりの信憑性を持って他の生徒たちの話を耳にしていた。なんでも、お付き合いで一時間女子を独り占めすると、三千円かかるという。その額が高いのか安いのかはさておいて、乙彦には信じがたいことである。

しかし、あくまでも「噂」であって、実際そういうことを平気でできる同世代の女子がいるとは思えない。少なくとも自分の身の回りでは想像しがたい。水鳥中学はもとより、青大附属においてもだ。

——いや、先入観で物事を見てはいけないぞ。

——まずは冷静に話を聞いておくべきだ。

「つまり、その不良と呼ばれる連中は、そういうことをしているということか」

まずは確認を取ることにした。あの楚々とした風情の佐賀はるみの口から「中学生売春」という言葉が出てくるのがまず信じられない。話の流れからいくと、おそらく彼女をかつていじめたらしい杉本梨南に対する複雑な感情があるようだが、それでも一度は親友だった彼女をかばい

たいという気持ちは素直に素晴らしいと思う。

そう、友情というのは、そういうものだ。

たとえ一度道を踏み外した友としても、やはり心を許しあった以上は一生繋がっていくものだろう。男子の乙彦ですらそう思うのだ、ましてや感情最優先たる女子はなおのことだろう。

佐賀はるみははにかむように俯き、ちらりと雅弘の方をみやった。すぐに視線を戻した。

「噂なので私も判断できないのですが、その子たちが駅前近くの、その、あまり雰囲気よくないところで遊んだりしているのを見た生徒は多いようです。青大附中の生徒は露骨にそういう不良っぽい子たちをいじめたりはしませんが、なんとなく避ける傾向はあると思うんです」

「いじめはせずに、避けるのか」

「そうです。ただそれがいいのかどうか、わからなくて」

言葉を切りつつ、また雅弘をちらと見た。

「私、本当だったらそんな人たちと関わるのはいやです。でも、梨南ちゃんがこのまま不良の子たちと一緒にとんでもないことをしてしまったら、私、見殺しにしたことになってしまいます。きっと梨南ちゃんは私のことを許してくれないでしょうし、それはしかたないことです。でも、私は梨南ちゃんと一時期は親友だったんです。間違った方向に進みそうな友だちを止める義務はあると思うんです」

「で、何をしたいんだ？」

いつも思うのだが、女子というものは一体何を要求してくるのかわからない。

おそらく乙彦の直感でいくと、佐賀は杉本をなんとかしてまっとうな道に戻したくてならないのだろう。それを懸命に説明しているのは理解できる。しかし、なぜ改めて乙彦に話さねばならないのだろう。それも、雅弘と一緒に。

隣で真剣な顔をして聞いている雅弘にも問いただしたい。

なぜ、こんなところで、人目を避けるように落ち合っていたのかと。

全く戸惑うこともなく、それでいて押し付けがましくない口調で佐賀はるみは答えた。

「私、思い切って、言おうと思うんです」

「何を」

「そんなことしていたら、梨南ちゃん、関崎さんと面と向かって話ができなくなるわって」

「なんで俺の名前が？」

何をいきなりそんなわけのわからない展開に持っていかうとするのだろうか？ またお下げ髪の房の根元に手を当てる佐賀はるみ。どう答えればいいのかわからない乙彦、そして隣でまた黙って様子を見やる雅弘。

真後ろの立体青潟市地図がぶっ倒れてきてもおかしくない展開に、また熱がぶり返してきそうだった。汗をじんわりかいていることに気付く。

「今日、関崎先輩にどうしてもお話ししようと思ったのは、私、ここできちんとお願いするつもりだったからなんです。私何度も立村先輩の名前を出して注意したつもりなんですけれども、梨南ちゃん、立村先輩だと全然ばかにして言うこと聞いてくれません。でも、関崎先輩にふさわしくない行動だ、と言えはきっとわかってもらえると思うんです。でも」

背を伸ばし、じっと乙彦の目を見つめた。思わず受け止めたとたん、身体の奥で何かがかちっと繋がった。考えても見なかった生理現象のようなものだった。慌てて止めたくても止められなかった。ただ黙ったまま佐賀はるみの言葉を聞くだけだった。

「関崎先輩、私、生徒会長としてももちろん、梨南ちゃんの元親友としても、決して御迷惑をおかけしません。ただ、私が梨南ちゃんを真っ直ぐな道に引き戻すために関崎先輩の名前を出すことを、許してほしいんです。たぶん、梨南ちゃん、中学三年の間は決して関崎先輩を追い掛け回すことはないと思います。でも、心の奥でずっと思いつづけているはずですよ。思いつづけているからこそ、その人にふさわしくなりたいと、女子なら思うはずですよ。だって、そういう先輩だと私も思うからです」

——そういう先輩、か。

もう何も他のことは関係なくなった。今目の前で、お下げ髪で真摯に語るひとりの女子しか目に入らなかった。誰かの姿と重なるのがわかる一方、明らかに違う自信のようなものもある。それに押されていた。

「関崎先輩、どうか、梨南ちゃんを救うために私にお名前を貸してください。お願いします」

「名前を貸すたって、そんなのは断る必要ないんじゃないか」

それだけ返事するのがやっとだった。

「別に、会話の中で出てくるのだったら、それが自然だろう」

雅弘が助け舟を出してくれた。おそらく本人は気付いていないだろうが。

「おとひっちゃんの言う通りだよ佐賀さん。気にしないでいいって。おとひっちゃん、そういうことに神経質じゃないし、怒らないよな、ね、そうだよね」

少しばかり馬鹿にされているような言い方だが、嘘でもないので静かに頷いた。

「それにしても雅弘、ひとつ聞きたい」

「なんだよおとひっちゃん」

「なんでこんなところで会ってたんだ？」

語尾が荒くうねっているのに、自分で発してみても初めて気がついた。

なに、焦っているんだろう、自分。

思えば雅弘は前から、この佐賀はるみという女子に熱を上げていた。

たぶん好みのタイプではあったのだろう。どこことなく礼儀正しくそれでいて芯の通った、心根の優しい少女というのはもともと雅弘の好むところだろう。いや、男子なら誰でも好きになるに決まっている。総田のように訳のわからぬ川上女史のような奴を選ぶ男子もいないわけではないが、それはごくごく例外とあってよい。

しかし手が届かないと気付くとすぐ、かねがね想いを寄せてくれていた同級生の水野五月を受け入れ、一年間付き合ったというわけだった。それは親友としても嬉しく思うところがあった。男女ともに好かれるタイプの水野五月ならば、乙彦の親友たる雅弘にふさわしい。中学卒業後別れたとは言うけれども、それはいわゆる惚れた晴れたの関係ではなく、これから先それぞれの学校でベストを尽くそうという意味での前向きなものだったのではないかと乙彦は解釈している

。しかし、やはり、自分のタイプと重なってしまうと、どうしても執着が取れないものなのだろうか。噂を聞く限り、佐賀はるみは今だに新井林健吾と付き合っているはずだし、相変わらずの高嶺の花のはずである。無理やり付き合いをかけるなんていう非常識なことを雅弘がやらかすとは絶対に思えないので、何か訳があるとは思うのだが。

「おとひっちゃん、なんか勘違いしてる？ 佐賀さん今日たまたま、うちの店に本買いに来てくれて、それでうちの父さんから小遣いもらって、よかったら少しその辺散歩しろって言われて、それでなんだよ。佐賀さん歴史が好きだって話してたから今日ここに連れてきただけだって」

「だからといってこんな陰気な」

ソファ前をを通り過ぎる年配の男性がじろりと乙彦を睨み、去った。

「いや、だって外、青大附属の人たちがたくさんいるし、佐賀さんの知り合いだってたくさんいるんだよ。俺は水鳥と工業の連中と顔合わせでも困らないけど、佐賀さんは生徒会長やってるし、また変な誤解受けて新井林くんに怒られたくないよ。新井林くんいい奴だし、俺、友だちでいたいしさ」

友情を強く訴える雅弘の言葉、信じぬわけにはいかなかった。

——そうだ、雅弘は何よりも、男同士の友情を大切にする奴だ。ガキの頃から、そうだった。

無言で見据える乙彦の隣から、すっと立ち上がった佐賀は、正面に立ち丁寧な礼をした。

「ありがとうございます。関崎先輩に今日お会いできて、うれしかったです」

立ち上がろうとするのを首振って制し、もう一度今度は雅弘に礼をした。

「佐川さん、ありがとうございました。また本を買いに立ち寄ります」

お下げの束が自然に下がり、また上がった。結びのゴムが薄い桃色だったことに気付いた。桜色のワンピースに白い手提げバック。佐賀はるみの髪ばかり見つめていて服装に全く気付かなかったことに気づき、乙彦は思わず赤面した。

——顔ばかり見ていたわけじゃないが。

「うん、じゃあ、新井林くんによろしくね。おとひっちゃん、せっかくだしこれからどっか外で、他の奴誘ってバドミントンやろうか」

追いかけるでもなくあっさり見送る雅弘の表情に、なぜかほっとした。

やはり、男同士の友情を重んじて、その上で女子への思いやりをも忘れない奴が雅弘なのだ。水野五月のこれからを案じ、親友の行く末を心配する佐賀はるみを応援したいと思う、そういう奴なのだと思う。

「いや、いい。雅弘せっかくだ。今日はここで少し、学校のこと話聞こうか」

乙彦は無理やり雅弘をソファに座らせた。この機会に詳しく、青瀬工業高校の状況について相談にのってやろう。悩んでいないわけがない。ましてや新しい環境で馴染むには時間がかかるだろう。そういう時こそ親友たる乙彦の出番である。

——俺は雅弘の兄貴分だった男だから。

当然のこと。雅弘も素直に座りなおし、力が抜けたようにふにやりと笑った。

ゴールデンウィーク後の一年生宿泊研修の準備で、評議委員たちはやたらと忙しそうにしていた。藤沖、古川も席を温める間もなくあちらこちらに飛び回っていたし、放課後も他の委員たちと打ち合わせをしたりして、ほとんど乙彦と話をする時間はなかった。

もっとも乙彦も、補習と規律委員の打ち合わせなどで忙しかったし、詮索することも別に必要ないと思っていた。もっとも規律委員が宿泊研修で持つ役割は特にないらしく、今のところは出発前の持ち物検査およびその抜け道チェックについて相談するに留めていた。

そのあたりはすでに中学時規律委員長だった南雲が、準備万端整えていた。

「ま、そのあたりもうまく打ち合わせておいてもらえるとさ」

一応は規律委員の端くれではあるが、南雲からすると乙彦の存在はまだほんの石ころに過ぎないらしい。大抵の相談は同じ一年規律の東堂に持っていっているようだ。乙彦がかろうじて聞き知ることができたのは、頼みもしないのに清坂美里がいろいろ話をしてくれるからだ。

「南雲くんももっときちんと説明すればいいのに。ほんと、手抜きだよな」

「何が手抜きなのかよくわからないが」

生真面目に問い返すと、清坂は他の規律委員たちがいなくなったのを見計らい溜息をついた。

「関崎くんだって何がなんだかわかんないよね。私とかだったら元評議委員だからある程度わからなくもないけど。ほら、宿泊研修出発前の持ち物検査、あれ、先生たちからやるって言われているけれども、やはり禁止されてても持っていきたいものってあるじゃなあい？」

「なんだそれは」

現金を少し多めに持っていきなさいとかそういうことだろうか。

「何って、ほらお菓子とか、ね、あるでしょ。やっぱりそういうものあるよ。だからそのあたり、検査する規律委員の方で見逃すようにしなさいってことよ」

「そういうことか」

乙彦もそのあたり、話のわからない男ではないつもりだ。

中学時代、生活委員会の行う抜き打ち服装検査の予定をさりげなく流したりすることは、生徒会を經由していろいろ行われていた。もっとも乙彦は積極的に関わったつもりはなく、むしろ総田たちが動いていたようだが、あえて見て見ぬふりをしていた。

「そうなのよ。けど、そんなのはっきり言ってもらわなくっちゃわからないよね。私だってわかんないよ。関崎くんだって困るよね。規律委員だからきっちり検査をしなくちゃって思うし、でもそれだとまずいでしょ。ほんと、以心伝心要求しすぎ！」

何をぶんぶん怒っているのだろう。「ね、行こう」と乙彦の腕をつついた。

「東堂くんも南雲くんと仲いいからそれで通じているのかもしれないけど、他の子たちどうするのよ。ね、関崎くん、もし何かわからないことあったら聞いてよね」

「ああ、ありがとう」

できれば清坂美里には聞きたくない。そういう本音は押し隠した。

清坂の言うことはまんざら間違っていないくもない。

南雲が乙彦に対して若干冷ややかな視線を向けているのもなんとなくわかる。

——完全に価値観が違う奴だな。

轟琴音の一件もちろんなその一因だが、同じ店でバイトをしているというのにそのあたりの話題が全くない。お互いあえて顔を合わせないようにしているところもあるが、それにしても不自然なほど顔を見ようとしない。

もっとも附属上がりの連中はそんなところ無頓着、あまり気にすることもない。

むしろ清坂のようにいらしている内部生の方が一部らしかった。

乙彦は清坂と肩を並べて歩いた。規律委員会の後は基本として補習はない。やはりほっとするひと時でもあるのだが、いかんせん相手が女子というのに息が詰まるのを感じる。こういう時語り合うのはできれば、野郎同士でありたいと強く思う。

「評議委員会もそろそろ終わる頃だと思うが」

できれば古川こずえと一緒に帰る、とか言って離れてほしいと願うのだが、

「いいよ。評議なんて関係ないもん」

きっぱり答え、乙彦の後ろにつく。

「会えば会ったで話はするけどね、どうせ私は規律だから口出しするなって言われるのがおちよ。知ってる？　うちのクラスの評議委員の子」

知らない。そのあたり、全く想像つかない。他の委員がらみ情報は、たぶん立村あたりに聞けば人物辞典のごとく教えてくれるのだろうが、そこまではする気もない。

「なんかね、頭に来る」

相槌は打たずにおいた。何かいらしているのだろうという気はするが、女子のおしゃべりはどこへ飛んでいくかわからない。聞き流しておくのが一番だ。

「関崎くん、聞いている？」

「ああ」

でも耳から流しているつもりではいる。それでもしつこく清坂は語り始めた。

「知ってると思うよ。彼女、外部入学だもん。物凄く試験でいい点数取って入ったから、きっと周りからひいきされているんだと思うんだ。それにうちのクラス、女の先生でしょ。どうも私、嫌われちゃってるみたいなんだ。ほんと、あそこまで露骨に私を無視することないじゃないって思うよね」

——無視されてる？

古川からちらっと聞いたことはあるが、それほど興味を持てる内容ではなかった。

「委員を決める時だって、いきなり自分から立候補するんだよ！　外部生なんだからいきなりって大変だと思うし、だから私の方が自分から出たのにね」

「立候補するのに内部も外部も関係ないと思うが」

少しいらいらする。何様のつもりかと問いたくなる。まるで乙彦が外部生のくせに規律委員に立候補してしまったのが悪いかのようだ。

「関崎くんは規律だからまだいいよ。基本としてね、青大附属の評議委員は外部の人がいきなり

参加して理解できるようなもんじゃないと思うんだよね。もちろんやりたいってことだったらそれはそれでいいけど、せめて後期からとか、そう思うよね。。なのに、いきなりよ。いきなり立候補して」

悔しそうに唇をかんでいた。悪いが同情できない。その外部生がどういう女子なのか、全く記憶にないがおそらく乙彦と同じように素早く青大附属に慣れたかったのだろう。その努力こそ認めこそすれ、罵倒する気はさらさらない。

「だが、正当な多数決で選んだのならそれはそれで覚悟があるはずだ」

「それがね、違うの！」

清坂はまたきつと言い返した。

「うちのクラス、なんかわかんないけど私のこと嫌いな女子ばかり集まっているの。ほんと、今思いつきり孤独かもね。もちろん私だって悪いところあったかもしれないけど、何もね、露骨に女子みんなが彼女に挙手するなんて、思ってもみななかったわよ。男子はいい奴多いし、話もできるけど、なんでよりによってあんなクラスに私、押し込まれなくちゃなんなかったの？って言いたいよ。まあなんとか規律委員にもぐりこめたからよかったけど」

すのこで靴を履き替える間やっと離れることができた。乙彦は生徒玄関前に広がる赤紫の夕日を眺めながら、首を振った。言葉は出さずに置いた。

——女子のやっかみは面倒だ。

清坂美里に対しての本音だった。

確かに清坂は休み時間しょっちゅう古川を訪ねてA組の教室に居座っている。

単に古川と仲が良かっただけだろうと安直に考えていたのだが、今の話を聞く限りかなりきつい状況に置かれているようで驚いた。

また、今も付き合っているのかどうか不明だが、立村にもそれなりに声をかけている。時折一緒に帰ることもあるのだろうし、険悪な関係ではないのだろう。

自分のクラスにいたがらない理由は今の話でわからなくもないのだが、

——そんな居づらいクラスの評議委員なんかやらなくてよかったとでも思えないのか？

そう思ってしまう。

むしろ規律委員を背負わされてしまった方が悲惨だと、思わなかったのだろうか。

最初から立村のように委員を避けるという手もあっただろうに。清坂の言い分を聞いている限りどうも、自分が選ばれなかったことへの憤りというよりも八つ当たりのように思えてくる。もちろん評議委員を中学時代しっかり勤めてきたのだし、次回もぜひという気持ちはわからなくもない。しかし、選出したのがクラスの意志である限り、それは素直に応援すべきではないだろうか。それが潔い態度だろう。

——それにだ。

なぜ乙彦にそんなことを訴えるのだろうか？

——俺になんでそうも話し掛けるんだ？

立村繫がりというのはわからなくもないが、いきなり他クラスの清坂が自宅まで見舞いにやってきたのも不可解である。規律委員だからといえばそれまでだが、連絡関係だったら休み明けでも構わないわけだし、ずいぶんと過剰な言動である。

——別にそれはそれでかまわないんだが、けどな。

どうもこの清坂美里という女子、乙彦にはつかみかねるキャラクターの持ち主だ。

とにかく今は、清坂が何か言葉を求めているのだから、それにふさわしいことを言う必要がある。乙彦は息を鼻から噴いた後、きっぱり告げた。

「クラスの意志なんだ、それを受け入れて潔く協力するのが当然じゃないのか」

清坂は立ち止まり、はっきりとした不服の意志をほおいっばいに膨らませた。

明らかにご機嫌を損ねたようだが、別に清坂がどう思おうと乙彦には関係ない。自分なりの冷静な判断を告げただけである。

「関崎くん、きつとうちのクラスの状況知らないんだよね」

「知っていようがいまいが、今の話を聞けば誰でもそう思うんじゃないのか」

「冷たいこというね」

「冷たくはないと思うが。規律委員に選ばれたことを誇りに思えばいいだけだ」

面倒だが、あたりまえのことを告げる。

「そりゃあ、そうよね。そうだけど」

むくれたまま清坂は、それでも首を軽く振ってつかかかってきた。

「だけど、クラスの女子たちが総出で私に嫌がらせするってのはどうかと思わない？ そりゃ私だって、あまり性格よくないかもしれないけど、せっかく協力したいと申し出たのに断るなんて、それ変だと思わない？」

このあたりは仔細を聞かないことには判断できない。乙彦は黙って頷き促した。

「つまりね、私ができるだけ協力したいなって思って、評議委員ってのはこういうことなんだって説明したりするじゃない？ たとえばね、まず先輩たちと仲良くしなくちゃいけないから挨拶しなくちゃとか、他の評議の人たちに紹介とかね。けどそんな必要ないって言い張るのよ！ せっかく、私がね！」

——ありがた迷惑だから断っただけじゃないのか？

乙彦は遮った。

「余計なお世話だろう。俺もそうだが、自分で少しずつ覚えていく方が無駄がない」

「けど、青大附属なのよ！ 青大附属って公立と違うんだから」

「違うかどうかはそいつが判断することだろう」

要は清坂、自分が蚊帳の外に置かれたのが悔しくてならないだけではないのか。もちろんわからないわけではないのだが相手からしたらたまったもんじゃないだろう。

「よくわからないが俺としては、清坂には同情できないが」

「同情してほしいんじゃないかって！」

さらにぶんむくれる清坂、どうやって離ればいいかわからない。こういう場合のあしらい方を乙彦は学んでいなかった。第一、そこまでしつこく言い募る女子と今までこうやって話したことなんてなかったから。

——とにかくなんとか離れよう。

できれば古川あたり……清坂とわりと仲のよい女子……とすれ違えればベストだが、そんな偶然を頼むわけにもいかないだろう。

「こういう話は俺ではなく、もっと親しい相手と話すべきだ」

もう一度きっぱりと告げた。

「なんで俺にそういうことを話したがるのかわからないし、共感を求められても非常に困る」

「ただ聞いてくれればいだけなのに！」

「俺はその女子評議がそんなにまずいことをしたとは思えないんだが」

外部生だから、なおさらに、とは言わずにおいた。

「ひどい、なんで？　なんでそんないやな言い方するのよ！」

「傷つけたら申し訳ない。だが俺は」

「まるで立村くんみたいな言い方するね！　もういい、知らない！」

——どこが立村に似てるんだ？

少々問い返したい気もないわけではないが、止める気もなかった。清坂美里はもう一度乙彦をにらみ返してもものすごいスピードで校門まで駆け抜けていった。たぶん乙彦が本気出して走らない限り追いつけないくらいにだった。女子にしては足が速い。

——評議になれなかったんだったらその段階で諦めて、運動部に入ればよかったんじゃないか。

全く関係ないことをふと思った。

同時に覚悟した。

——このままで終わるわけがないだろうな。

清坂の言い分が不愉快とは思わない。思わないが、少し感情的になりすぎているのではないか。要は乙彦の言いたいことはそれだけである。

クラスで本当は評議委員に選ばれたかったのに、クラスの同意を得られなかった。その事実を受け止め切れていないのだろう。その一方で、なんとかして自分を評議委員と同格に位置付けたい、そう思う一心で現評議の彼女にアプローチし、あっさり撥ねられる。これもわからないことではない。

乙彦も、もし藤沖の言動に裏表を感じていたとしたら同じことをしたに違いない。かなり鬱陶しく思う時もある。だがあえて何も言わないですんだのは藤沖のおめでたき勘違い男たるところにあったのだろう。少なくとも藤沖は乙彦をねたんではないのがよく伝わってくる。

屈辱だろうがその事実を受け止め、真っ直ぐ歩いていく。

——水野さんのように。

どうも最近、忘れかけていた水野五月のお下げ髪が頭の中にちらついてならない。

ほんのささいなことがきっかけですぐに浮かび上がる。

今の清坂美里の言葉にしても、また先日青潟市郷土資料館で顔を合わせた佐賀はるみの髪型ひとつにしても。

ちらちらしてついいらだってしまう。おそらく、水野五月本人だとしたら全くそれは感じないのかもしれないが。わけがわからなかった。

——だが古川あたりが黙ってないだろうな。

女子の場合親友に愚痴をこぼしあうのが常識である。

古川こずえが清坂美里の場合、対象だろう。

しかも古川は我がA組の下ネタ女王ときた。次の日あたり古川からたんまりとお叱りを受けるのは目に見えている。下手したら第二の女子の敵になってしまう可能性だってある。轟琴音の事件が乙彦の失言にあったと知られても幸い、他の女子たちはたいして反応することもなかったが清坂の場合はそうもいかないだろう。きっと鬨蹙を買うに違いない。言い訳をするつもりはないが、面倒だ。

乙彦は自転車置き場に向かった。すでに清坂の姿はなかった。自転車置き場に寄らずに校門を出たということは、バスで帰ったのだろう。

——明日、謝っておく必要はあるかもな。

傷つけたことについては謝るつもりでいた。

自転車を漕ぎながら第一の曲がり角でハンドルを切った時、向こう側からいきなり大声で声をかけられた。思わず急ブレーキ、歩道につんのめりそうになる。振り返るとやはり予想通りの女子がいた。

——こんなに早く現れるかよ。

絶句するしかなかった。

「関崎、あんた人の恋路邪魔してどうすんの」

——頼むからそなどでかい声で叫ばないでくれ。

こういう相手には同じように言い返すしかない。

「誰の恋路を邪魔したというんだ」

すれ違うバスの中から誰かが窓を開けて見下ろし、指差して笑っているのがちらと見えた。

気付いてないのか古川こずえは、さらに声を張り上げた。

「もちろん、私と羽飛に決まってるじゃないのさ！」

——なんでだ？

頭の回転が一瞬凍りつく。その間に古川は自転車用の横断歩道を素早く渡りきり、いきなり乙彦の頭を平手ではたいた。もちろん本気ではない。髪の毛がばさりと揺れる程度だった。

「あんたねえ、なんで美里を泣かしたわけ」

「泣いていたのか？」

怒ってはいたと思うが、涙は想像外だった。古川も唇を尖らせ、肩をがっしりつかみながら続

けた。

「しょうがないから、美里は羽飛に預けてきたわよ」

「預ける？」

ほら、あぶない。早く歩道に上がりなさいよ、そう言いながら古川は乙彦に手招きし、

「まずは降りなさいよね。あんた、いったい何やらかしたわけ」

「やらかした、というわけではないが」

意見は言ったが、「やらかし」てはいないはずだ。だが女子の観念は理解できないので判断しがたい。古川はいつもの調子でまくし立てた。もう一ヶ月、慣れている。こちらの態度はまだ余裕で受け止められる。

「まず自転車から降りて、その辺でまず話を聞こうじゃないの。もうねえ、せっかく私だって羽飛とふたりっきりラブラブ帰り道楽しんでたのに、いきなり美里に飛びつかれて泣かれたらしょうがないじゃないの。美里の面倒見るのはひとりしかいないじゃないの。しかたないから私が抜けてきたわけよ」

——面倒見るって、どういうことだ？

「あんた前私が話したこと覚えてないでしょ。美里と羽飛はね」

言いかけたことを、乙彦はすぐに遮り言い切った。忘れていたわけなんてない。

「性別を越えた大親友なんだろう。この前古川から聞いた」

——俺の記憶力を疑うなというんだ。

「だからよ。あのふたり、限りなく夫婦に近い親友なもんだから、私じゃ手に負えないの。あーあ、関崎、あんた私にジュース一本くらいおごりなさいよ。苦学生だって百円玉ひとつくらい、持ってるでしょ！」

予想していることは、想像を絶するほど早く実現する。

——もう一度説明するしかないか。

乙彦はポケットから黒い小銭入れを取り出した。四百円入っていた。

「学食行こう。あそこだったら七十円で飲めるからさ」

舌打ちしつつ、それでも古川はあっけらかんと自転車の方向を学校に向け直した。

古川相手に事の起こりを説明する方が、清坂の慰め役に回ってしまった羽飛より楽だろう。

——とりあえずは、百円の缶コーヒーをおごるとしよう。

「で、何がどうしたってわけよ」

「怒らせたただけだが」

古川こずえは深く溜息を吐き、乙彦の渡した缶ジュースをこくんと飲んだ。

「なんで怒らせたか気付いてないよねあんな」

「理由は大体見当ついている」

いつもの学生食堂だが、今日は夕方にも関わらずかなりの賑わいだった。席を押しやるのもやっとでしかも相席。古川はたいして気にしていないようだが、乙彦としては少しばかり気を遣う。女子がらみの話はできるだけ人のいない場所でしたほうがよさそうな気がするし、もともと乙彦は地声が大きい。うっかりばれてしまったら大変だ。

「ああ、今夜ね、大学の人たち、新歓のお花見やるんだって。お酒が入るから大学生以下は禁止なんだけどね。でサークルの新生を集めて、親睦を深めるんだって」

「詳しいな」

「毎年のことだもん。で、陰でかならずひとりかふたり、急性アルコール中毒で病院に運ばれるってわけ。なんだかねって感じよ」

よく知っているものだ。青湊大学の学生については全く想像がつかない。久田さんのイメージでは夜桜で酔っ払うといった風情でもないし、いったいどういうことなのか返事に困る。

「あーあ、私だってね、本当は今夜ゆっくりデートの予定だったのに！」

「悪かった」

——別に俺が頼んだわけではないんだが。

ちろっと横目で乙彦をにらんだ後、古川は指でOKサインを出した。

「いいよ、今日は夕方のデートをしたんだってことで納得しとく。ってことで、関崎、詳しい話、聞かせなさいよ」

要は清坂美里が一方的に激怒してしまったという、それだけの話だ。

「もちろん俺も言い方を考えるべきだったとは思いうし、それは反省している。だが」

伝えた内容については嘘はない。

一通り説明した後、古川こずえは「どうすんのこれ」、一言呟いた。乙彦に話し掛けるというよりも自分に言い聞かせるかのようだった。

「謝るつもりだ。もちろんだ」

「そういうんじゃないかって、関崎、あんなね、彼女今までいなかったって言ってたよねえ」

「そうだが」

確認しながら古川は押し進めるように質問してきた。

「じゃあ、水鳥中学時代は女子をかなり怒らせてきたでしょう」

「怒らせたことはほとんどない」

小学時代はまた別だが、中学時代は女子とほとんどとっていいほど接触しなかった。同じク

ラスで礼儀正しく話し掛けてくる女子にはもちろん返事をするが、乙彦が自分から、というのは殆どなかったはずだ。よって、怒らせるもなにもない。

「経験なしなんだもんねえ。童貞以前よね」

だから人前でその「童貞」などと口にするのはいかがなものか。

注意すべきか迷った。タイミングを逃し古川は指をぼきぼきならしながら、

「今までは硬派を通してきてよかったと思うよ。まあね」

「別にそのつもりはない」

「けどね、これから青大附高で生活していく以上、それでは話が通じないよ」

「通じないとはどういうことだ？」

指で缶を弾いた。

「神経質になれとは言わないけどねえ、少しは女子の気持ちも慮りなさいよって私は言いたいわけ。わかる？ 美里に限らず、他の女子に対してもすべて。これ、『紳士たれ、淑女たれ』っていううちの学校の校訓だよ」

——どこが関係あるんだ？

校訓に反しているなら反省するしかないが、どうも古川の言い分は理解が難しかった。

「世の中例外はあるかもしれないけど、ふつうの女子はまず、話をとことん聞いてもらいたいもんなのよ。正しいかどうかは別としてね。あんた、美里がいきなりなんかからんできた時、何求めていると思った？」

求めていると言われても理解できない。乙彦は答えなかった。古川の返事の方が早いからそれを待てばいい。

「何してほしいか少しは考えたのかって聞いているの」

「アドバイスじゃないのか」

「ばっかねえ、関崎、根本的に女子を知らなすぎ。この調子だと被害者を美里以外に大量生産しちゃう可能性大だよ。ったくねえ、まず説明するから聞いてなさいよ。黙ってな」

缶をテーブルに置き、周囲に聞こえわたりそうなかい声で始まった古川の「女子の心について」の講義。幸い、夜桜見物で盛り上がっているらしい周囲の大学生たちには一切聞こえなかったらしい。乙彦は拝聴した。

「まず、女子の話はどんなに間違っていようがなんであろうが、まずはとにかく聞くこと。わかる？」

頷いて聞いている旨、まずは伝える。

「そりゃあね、美里も八つ当たりしてたとは思いうよ。静内（しずない）さんだったっけ、B組の女子評議、彼女に完璧水をあげられててさ、親切のつもりでしたおせっかいを思いっきり撥ね退けられて、誰かに『うんうん、そうだったんだ、わかるよ、すっごくむかつくよね』って言ってほしい気持ちだったんじゃないの。だからさ、こういう時はそう言ってあげるべきだったのよ、わかる？」

「わからない」

口を挟むなどはいわれたが異議を唱えたい。

「どうしてさ」

「親切のつもりが実はおせっかいだったと古川も認識しているんだろう。それを間違っていると伝えるのが本来の役目じゃないのか」

「役目？ 誰のよ」

「友だちとしてだ」

古川こずえは首を振った。缶を握った。

「あんたさ、美里がそんなこと聞きたいと思ってるか、考えた？」

「考えるもなにも、間違っていることに対していいかげんな答えはできないだろう」

乙彦は繰り返した。

「もちろん清坂が苦勞していることは聞いている。それは大変だろうとは思う。だが、そのB組の女子が責められる筋合いはないだろう。実際清坂は規律委員に選ばれたわけだし、そこで全力を尽くせばいいことだ」

「あんた、正論だね」

「正論で悪いか」

ぐうの音も出ないだろうと思いきや、

「悪い。絶対悪い」

両手でxを作った。

「男子ってどうしてこんなことで引っ掛かるんだろうね。悪いけど美里はそんな正論聞きたくないの。正論よりもむしろ、傷ついた自分を癒してほしいの。ただそれだけなんだよ。あんたは美里に何も責任取るわけじゃないんだから」

「それはおかしい」

なんでそんな意味不明なことを言うのだろう。間違っていることをきちんと伝え合ってこそ、本当の友人ではないのか。

「あんたもしつこいねえ。そうだよ、正論は基本として正しい論だもんね。あんたの言いたいことはわかる。私もはばかりながらあんたと考えは一緒」

「だったらなぜだ」

意外な反応に乙彦も言葉が詰まった。

同じ考えだったらなぜ、賛同しないのだろうか。

「私も女子としてはそうしてほしい時あるからね。お互い様。まあ言うべき時ははっきり言うよ。けどね、今回の件についてはまだ様子見てとこだし」

「様子見？」

「だから黙って聞きなさいよ。つまりね、美里がなんで評議委員になれなかったかってことがね、私もまだ把握できてないわけよ。例の静内さんがすんごい秀才であつという間に菰田（こもだ）先生のめんこになっちゃった、その理由がね」

その女子評議の苗字が静内だということだけは覚えた。

「美里がもともと女子たちから総すかん買いやすかったのは事実だしねえ。男子とはうまく行ってるんだけどさ。ほら、羽飛と幼なじみなもんでかなりそちら方面でもやっかまれてるのかもね。けど、それならなんで、いきなり外部生の静内さんがしゃしゃり出て来ているのかが私もわからないのよ。関崎、静内さんのこと、覚えてる？」

記憶になかった。外部生だけが集められた補習がないわけではなかったが、女子の顔は興味がない限りじっくり見ることもなかったから。

「そうかあ。まあとにかくね。静内さんが美里よりも高く評価されてしまったことで、立場がないってのは想像つくよね。プライド、傷つくよね」

「そうだな」

もちろん、自分が間違っていることを認めるのは辛いことである。

しかし、だからといってなあなあで済ませていいことにはならない。

これから先その静内という女子に対して、清坂がまた余計な手出しをした場合、話がこじれる可能性だってあるわけだ。話し合えればもちろん解決はするだろう。しかし、女子のことだ。そのあたりは断言できない。

「要するに美里は、あんたに正論でお説教なんてしてほしくなかったの。だから適当に流してやればよかったのよ。一生付き合うわけじゃあないんだからさ。それよかむしろ、なんか楽しくなるような話でもして気をそらしてやればよかったのよ」

「相手が真面目に話しているのに茶化せてことか」

——かえって失礼じゃないのか？

「失礼じゃあないよ。かえってそれの方が美里もほっとしたと思うよ」

全く理解できない。頷くのも苦痛だ。

「たとえばさ、あんた、相手が本命の彼女で、あんたも将来結婚を考えているとかそういう関係だったらまた話は別かもしれないけどね。考え方ぴたっと合っていないとまずいし、男としてそうするのはわかるよ。けどね、あんた、美里とそんなに長い付き合いじゃあないし、しかも彼氏なんかじゃない。そんなことを真剣に話されても美里としたら、何様のつもりって思って当然じゃないの。いい、関崎。彼氏と友だちとはそこんどこ、違うんだから」

「立村だったら、かまわないのか」

反動で飛び出した一言に、思いっきり古川は顔をしかめた。見た感じ、しわくちゃばばあと呼びたくなる。

「ランクが上のお友だちだから、そのあたりははっきり言うかもね。あいつなりに。あと羽飛とか私とかも。けんかしたって元に戻る間ならそれはそれでいいよ。けどあんたと美里はそうじゃないでしょうが」

「そうだな」

不承不承乙彦は受け入れた。確かに、彼氏彼女でない。

古川の言い分によると、彼氏彼女の付き合いをしているのならきっちり指導するのもひとつだが、単なる委員会の同期程度ならば余計なことを言うべからず、らしい。そのくせ古川自身は

まず例外として置いているのだからたちが悪い。乙彦が言うべきことをきっちり伝えただけなのに、結局自分が悪者にされてしまうわけだ。間違っていることは間違っていると伝えることがなぜ悪いのか、正直飲み込めない。清坂相手だけでなく、他の女子であっても……古川であってもだが……おそらくそうするだろうに。

「とにかく、この件は一件落着。あんたは余計なことにくちばしはさまないでいた方がよいかことよ。ほんと関崎、あんた入学してから一ヶ月経つけどずいぶん女子とのトラブルが多いねえ。そんな手、早そうに見えないのに」

「早いわけがないだろ、俺は」

言いかけた乙彦を古川はすぐ制し、唇を両端、持ち上げた。

「バイトと補習とでそんな暇ないって言いたいんでしょ。あんた自身はそう思ってるかもしれないけどねえ、周りじゃあ、そんな風になんて見てないよ。私もずいぶんあんたに関するいろいろな情報を耳にしたけどね。もう水鳥の関崎ったら全校生徒に名前知れ渡ってるよ。まさに仁王様君臨って感じでね」

「別にそんなことは」

また遮られる。缶の尻でこつこつテーブルを叩きながら、

「自覚がないのがやっかいだよ。公立中学から青大附属に入っただけでも目立つのにさ。バイトの許可を麻生先生に直訴するわ、自己紹介では笑いを取るわ、そうだ、なによりも結城先輩の弟分にされてるしさ。あ、それ自覚ない??」

「そんなつもりではないが」

初耳である。結城先輩の部屋に遊びに行っただけで、「弟分」などといった大それた扱いはされていない。古川は缶を握りつぶしながら笑った。

「お呼び出しを食らった段階でもう、目をつけられてるって理解しなさいよったく。普通だったらさ、元評議委員長だった立村か天羽に声をかけるでしょうよ。それがさ、いきなりの外部生よ。あの結城先輩が本気で仕込むつもりだってこと、もう上級生の間では知れ渡ってるんだよ」

「立村じゃだめなのか」

つぶやくとうんうんと頷いた。

「結城先輩、立村を評価してないからね全然。本条先輩っていう有名な伝説の評議委員長のことは知ってるよね。あの人公立高校に進んでから、結城先輩特定の男子生徒を仕込もうとはしてないのよ。それがね、いきなりじゃない。そりゃ大ニュースよ」

噂だけが一人歩きしているだけじゃないのか。そう言いたくなる。

「なわけないわよねえ。さらに、轟さんに対して正論でぶちかました一件。話聞いた時はてっきりあんた、女子から軽蔑されるかと心配してたんだけどさ、蓋開けてみたらあらら、あんたの方がずっと票集めてるじゃないの。たぶん轟さんの件は、『ごみあさり』っていうところが、潔癖症女子から嫌われたんだらうね。私の聞いている限り女子からはあんたの悪口一言も聞いてないよ」

——そんなわけないだらう！

自分ひとり、言葉を発せず、ただ唇だけを動かした。

「まあ、轟さんは男子たちからなぜか受けがいいから孤立することはないだろうけどね。けどあんまりやりすぎたら今度は足をすくわれるよ。いい？ お姉さんらしくアドバイスするとだねえ」

「悪いが俺には姉がない、兄と弟だけだ」

また吹き出した古川。面白いことなど言っていないのにだ。

「こういうところがあんた面白いのよ！ とにかく！ あんたはこれから、怒涛のごとく女子たちから色目遣われる運命にあるんだからさ。妙なことでしくじらないようにしときなさいよ。はっきり言って、結城先輩の後ろ盾があれば今年一年はうまくいくよ。青大附高で生きていくならそれは大切だからね」

「後ろ盾なんかほしくもないが」

「そんな血迷ったこと言うんでないの！ 結城先輩があんたを応援したがつってるんだから、それはありがたく受け取りなさいよ。それとさ」

ずいぶん果てしなく古川こずえのお説教は続くものだ。

「ここだけの話だけど」

ちっともここだけの話じゃない大声だった。そうしないと聞こえないからしかたないのだが。「後期評議を藤沖から引き継ぐつもりだったら、一緒にやってく私が少しは楽になるようにやってほしいのよね」

「聞いていたのか」

藤沖もちらと、根回しをしているとは聞いていたがやはりそうなのか。いきなり肩をぽんと押された。

「ばっかねえー、知らないわけじゃないこのこずえ姐さんが。今日わざわざデートをすっぽかして関崎に説教してるのはね、十月以降の波乱な日々に向けて、心積もりしていただきたいってただそれだけよ。誰が羽飛とのデートを」

そこまで言いかけ、すぐに飲み込んだ。どうやら言い過ぎたと反省したらしい。

「とにかくあんたは黙っていてもニュースの種になる男なんだから、まずは様子見しな。そろそろ宿泊研修の準備なんだけどね。今回は藤沖と私が全部段取り組むから他の委員にお願いすることはほとんどないはず。この機会にじっくり青大附属がどんなところかをつぶさに観察しなさいよ。あんた、口より手が早いタイプだよ見た感じ。とにかく最初は黙ってなさいよ。あんたが騒ぎ立てなければ、火種は大きくなるからね」

「火種なんか蒔いていないが」

「あんたが落としてるの。馬糞みたいにぼとぼと」

汚い比喻である。

「南雲がいろいろ規律委員として指示を出すだろうから、しばらくはそれに逆らわない方がいいよ。多少納得いかないことがあっても、まずは黙ってな。たぶん南雲のことだから、男子の多用達工口本を各クラスに一冊用意させる手はずを整えているんじゃないの。ほーら関崎、あんただんだん頭にきてるでしょ。違反してるって。そこをがまんするのよ。いい、わかる？ うちの学校が今までどういうふうにして委員会活動やらクラス行事をやってきたかを、まずは見なさ

いよ。余計なこと口出さずにさ」

——余計なこと、なのか？

「あんた今、一番いい時なんだよ。いい関崎、まだあんたはいい意味でも悪い意味でも『外部』の人なわけ。だからわからないことはどんどん聞いてもらってOK。美里と静内さんの関係も、立村がなんで麻生先生にあそこまで嫌われてるかも、藤沖がなんで応援団に命賭けてるかとか、結城先輩がなんでアイドルマニアになったのかとか、とにかくいろんなとこにあんたもぐりこめるのよ。妙なことやらかして、出入り禁止にさえならばければ外部生の特権を生かしているんなことできるのよ。まさかと思うけどあんた、青大附属の内部生に劣等感なんか持ってないでしょうねえ」

「なんだそれは」

怒るもなにも、いきなりすぎて戸惑うばかり。

「あ、これ捨てて。空だから」

缶を受け取り後ろのゴミ箱に捨てた。

「どっかの立村とは違ってそういう心配はないと思うけどさ。ただね、関崎、あんたは運良く静内さんと違って相手にやっかまれない性格だから。そのまんまでいけばただぼーっとしている内部生よりもずっと人気出るよ」

「歌手じゃないから人気はிரないが」

「ああ欲しいのは学費ね。ま、これは冗談だけど。無理に青大附属の校風に馴染む必要はないってことを私は言いたいだけ。あんたはそのまんまで青大附属から両腕広げて迎え入れられてるんだってこと、忘れるなって。忘れるとねえ、ほら、立村みたくいじけちまうから」

どこかひっかかる「いじけちまう」なる言葉。思わず見返した。

「あいつはね、青大附属から満面の笑顔で迎え入れられていながら、自分から逃げ出してとうとう相手からも愛想つかされちゃた大馬鹿野郎なのよ。自業自得といえはそれまでだけど、ほっとくわけいかないっしょ。悪いけどそんなお馬鹿さんを二人も抱えたくないからさ」

「それは立村に対して失礼なんじゃないか」

「さあね、とりあえず話は終わったところで、ほら、さっさと行こ。ここにいるとどっかの大学のサークルにとっつかまっちゃって、未成年アルコール中毒にさせられちゃうよ。バージンは奪われなと思うけどねえ」

最後はやっぱり下ネタで締めた。

促されて立ち上がり、学生食堂の入り口に戻ろうとし、立ち止まった。

目の前に青大附高の制服を来た女子がいる。私服大学生ばかりが集う学食だけにやたらと目立った。

「関崎くん」

呼びかけられて、乙彦は頷いた。向こうから近づいてきた。よく見ると後ろには背の高い男子

が突っ立っている。横向きに、ニヒルなシルエットが夕陽に冴えた。顔はよく見えなかった。当然、その女子の表情も伺えなかった。逆光だ。

「さっきはいきなり、ごめんなさい」

真正面に立っただのは清坂美里だった。泣いてはいないように見えた。古川に脅かされてひやひやしていたのだが、どうやら取り越し苦労だったらしい。

「ああ」

あっさり返事するしかない。それにしてもなぜ、わざわざ戻ってきたというのだろう。

清坂はしばらく黙ったまま乙彦を正面から見上げていた。

「あのね、関崎くん、この前ね」

いきなり話の方向転換をし出すのについていけず「は？」と問い返すと、

「お母さんが『おとひっちゃん』って、呼んでたでしょ？」

——いきなりなんだよこれ！

見るとかなり離れたところで古川がベンチに腰掛け様子を見ている。声は通らない距離がある。清坂だけが八十センチ、七十センチ、六十センチと少しずつ距離を縮めようとしているのに気付き、一歩、片足、引いた。

「私も、そう呼んでいい？」

見上げた瞳に、何か痒くなりそうな何かが体に伝わった。気持ちよいものではなかった。

「だめだ」

反射的にそう答えていた。

「悪いが、中学時代の習慣は青大附属に持ち込みたくない」

「私、ただ」

「申し訳ないが、やめてくれ」

乙彦は背を向け、一言だけ重ねた。清坂の瞳からまた何かが揺れそうなのを、あえて見ぬふりし、

「さっきは言い過ぎた。悪かった」

縮められた距離を乙彦は美里から一気に広げた。足早なのは他意などない。背を向け、古川に向かい片手を挙げ、食堂から出た。

薄いもやのような橙色と桃色の光が溶け合い、満開の桜を照らしていた。桜はピンクではなく、薄い灰色に広がって見えた。乙彦はもう一度振り返った後、首を全力でぐるぐる回し自転車置き場まで歩き始めた。大学側の広場から、校歌を朗々と歌い上げる声が響き渡った。もう夜桜の下、大学生たちの酒盛りは始まったようだった。

——校歌、早く覚えないとならないな。

まだ校歌についての説明は受けていなかった。入学式で流れたのを聞いただけだった。

——少なくとも、新歓合宿までには。

乙彦はまだ校歌を歌えない青大附高生だった。

予想はしていた。前もって麻生先生や藤沖からも釘は刺されていた。

「最初の実力試験結果が出て、腐るなよ」と。

だからといって最初から諦める気はさらさらなかった。だから全力を尽くした。二ヶ月前の高校受験勉強貯金もまだ残っているはずだったし、入学してからも補習はほぼ完璧に出席してきた。授業だって風邪での早引きさえなければほぼパーフェクトだったはずだ。

——俺のどこが、悪いんだ？

今まで見たことのない点数が赤ペンで綴られた答案を五枚、ひっくり返しつつ乙彦はしばし、放心した。

英語、五十五点。

数学 六十八点

理科 六十二点

国語 四十九点

社会 七十五点

——嘘だろう？

現実を見つめよと言われても、これは酷い、酷すぎる。

生まれてこの方、九十点以下の点数を取ったことはなかった。

唯一しくじったのが四年前の青大附中入試のみ。

それでも自己採点では決して絶望すべき点数ではなかったはずだ。なのに、なぜ。

——なんでだよ。

読み返すこともできず、右端を折り返したまま畳み込んだ。

本当だったらすぐに破り捨てて忘れてしまいたい。見たくもない。しかし点数は記録されすぐ自宅に送り返されることだろう。親の手元に届くだろう。おそらく、失望させてしまうに違いない。

——こんなんじゃ俺はどうしたらいいんだ。

まだ学年順位は発表されていなかった。教室内がまだ答案返却直後の騒がしさに溢れている中、乙彦はただ机のカンペンケースを見つめていた。

五教科まとめてクラス担任が返却するというのも妙ならば、答案用紙を所定の専用ファイルに閉じて教室におきっぱなしにするというのも理解しがたい。青大附高の方針には今だついていけないところが多々あった。

「いいか、よく聞けよ」

ゴールデンウィーク前日、よりによって気の重たい帰りのホームルーム。

心なしか麻生先生の額には汗がだらだら状態で光っていた。

「今日はきちんと答案をファイルして帰るように。さすがにゴールデンウィーク前、こんな問題を読み返したい奴もいないだろうしな。だが終わった後は覚悟しろよ。問題を脳にちりめん皺ができるくらい押し込むからな」

——意味がわからないぞ。

比喩が意味不明なまま、乙彦は麻生先生の顔から視線を逸らした。汗がこちらにもうつってたらだら状態になりそうだ。

「しかし、今日の結果がすべてではないぞ。今回結果がよかった奴、悪かった奴、それぞれの思いがあるだろうが、大切なのはこれからなんだ。これから死に物狂いで頑張ることができるかどうかは鍵なんだぞ。安心して手抜きをするか、やばいと発奮して必死に勉学に勤しむかによって、それぞれ変わってくる」

——ついていけないのか、これで。

少なくとも国語四十九点を挽回する方法が見出せない。

「だがな、現段階において、自分がどのくらいの位置付けをされているのかはしっかりと見つめる必要がある。何が得意で何が苦手なのか、そこからは目をそらすな。点数を見るのではない。どういう問題によって足をすくわれたのか、それをじっと見つめること。それが大切だ。では、今日はこれで終わる。諸君、楽しいゴールデンウィークを過ごせよ！」

——楽しくならないだろうが！

乙彦はしばらく膝をいじくりながら唇をかみ締めていた。放課後、いつものように補習授業に出なければならない。先生や先輩たちに指導してもらうのは苦にならないが、今日の試験結果を話題とされるのは耐えがたかった。

「関崎、どうだった」

世話焼き藤沖は帰りの号令をかけ終えるやいなや、即、乙彦の席に駆け寄ってきた。そんなに嬉々として飛んでこなくてもよかろうに。内心忸怩たるものを感じつつ、それでも乙彦は立ち上がった。とにかくこの場はなんでもない風を装う。

「きつかったな」

「やはり洗礼を受けたか」

——なぜ、そういうわかったようなことを言う？

最近藤沖の兄貴分的口調にも慣れつつあったのだが、やはり精神的ダメージが強い時には避けたかった。聞こえないふりをするつもりだったがやはり突っ込んでくる。

「この前も話したが、決して落ち込むことではないぞ」

「落ち込んでいい点数というのがやはりあるだろう」

とてもだが藤沖の前で国語四十九点というのを口には出せない。女子たちが教室からまとまって出て行くのを見送りながら、藤沖はさらに喋りつづけた。

「今回の試験内容は、内部生の俺たちでもかなりきついというものだったから、当然だ。特に英語、あれをあっさり解ける奴はそういないだろう」

「立村は満点取ってたが」

個人点数を発表したわけではない。ないのだが側の席で古川が、

「立村、あんたの答え見せてよ。どうせ模範解答なんでしょ」

とか口走りながら無理やり立村から答案を奪い取っていたのを目撃しただけだ。その右端あたりに小さく「100」と勢いよい文字が走っていたのも。

「人は人、それぞれだ」

藤沖はあっさりとした。

「問題がすべて英文で、しかも半分以上は英作文というのは、はっきり言って公平ではない。関崎はこういう問題を解いたことあるか？」

「ない。英語の問題は日本語で書いてあるのが普通だと思うが」

答案を最初に配られた時、頭の中が凍りついたのは日本語が一文も載っていない問題用紙だったから。それを読まねばならない、そこから躓いた。しかも後半半分はまるまる英作文ときた。長文読解かつ英文での要約。ただでさえ出された長文の内容が意味不明なのに、それを要約というのはどうすればいいのかわからない。適当につないで意味が通るようにしてはみた。そのつもりだったが結果は数字としてはっきり現れた。現実だ。

「藤沖、附中ではやはりあのような問題がちょくちょく出たのか」

信じがたいが聞いてみることにした。補習には遅れてしまうかもしれないが、聞いてみないことには動けそうにない。ついでだ、根を生やしてしまおう。

「ああ、ある。附中の場合だいたい中学二年の段階で文法関連の授業は殆ど終わる。理由は考えたことなかったが、今思えばそれ以降英作文とスピーチの授業ばかりやってたからそのあたりが原因なのかもな」

「文法の授業が終わるって、どういうことだ？」

「俺にそれを聞かれても教師じゃないしわからないが。ただ、中学三年からは作文をやたらと書かされたぞ。それを全部読み上げさせられ、恥をかかせられ、また赤ペンを入れられるという胃の痛くなりそうなことをやらされるわけだ。一応、リーダーというものはあるんだが、主にそれはスピーチの練習みたいなものだ。とにかく大変だ」

半分以上藤沖の言いたいことが理解できないが、とにかく公立中学の授業よりも進んでいるということだけはなんとなく伝わった。

「次に、数学についてだが」

頼みもしないのに藤沖は次々と結果分析を行っていった。いったいこいつは何点くらい獲ったのだろう。こちらは聞かれたくないので聞く気もないが、気にはなる。

「あれも一応、附中では習った問題だが、微分・積分なんぞまだ公立ではやっていないだろう。ああいうのを外部生と比較するのはかなり不公平だ。関崎、お前は決して恥ずかしいなどと思う必要はないんだぞ」

——余計なお世話だ。

朗々と語る藤沖を横目で見ながら、改めて数学の答案に並んでいた問題を頭に浮かべた。もともと数学は得意だったし、運良く補習で習ったばかりの問題が出てきたのでなんとか点数を稼ぐことはできた。五教科内唯一八十点以上を狙えると思っていたのだが、返ってきた点数が六十八

点というのはあまりにも悲惨である。

「数学が得意な奴は多いが、それでも五十点取れば御の字だ。赤点で恥ずかしいことはないぞ」

「赤点とはどのくらいだ？」

「四十点以下だ。それ以下だと追試だ」

寒気が走った。ということは、あと九点足りなかったとしたら乙彦は国語の追試を受けるはめになっていたというわけだ。

「まあ、近いうちに科目別の成績上位者が廊下に張り出される。それを見ればだいたいの点数差はつかめるはずだ。安心しろ」

その他、藤沖なりの解釈を込めた各教科ごとの説明が続いた。乙彦なりにまとめてみると要点としては、

- ・青大附中の生徒たちは一応経験したことのある形の設問だった。
- ・ただし外部生にはわからなくて当然。
- ・選択肢を選ぶ問題ではなく、直接文章として綴らせる形のものがほとんど。
- ・五十点取れば御の字。今回は赤点を取らなかつただけまだまし。

附属上がりの藤沖ですらそう言うのだ、外部から来た乙彦が頭を抱えてもそれはしかたのないこと、そう言いたいのだろう。ありがたき友情だとは理解している、頭では。しかし、それでは自分が納得できない。

「藤沖、お前が俺を勇気付けようとしてくれているのはありがたい」

まずは礼を述べた。

「だが、それでもってろくな点数が獲れなかった自分を正当化したくはない」

「関崎、お前」

乙彦は頷いた。これだけは断言したかった。

「俺はまだまだ、努力が足りない。これからもさらなる努力をしつづけねばならない。それだけのことだ」

とりあえずは明日から始まるゴールデンウィーク中もしっかり勉強に励め、ということなのだ。そう乙彦は受け取った。

先日の日曜に雅弘と相談し、中学時代の友だちを集めてドッチボール大会をやろうと計画していたのだが、それもやめて勉強に集中すべしというご沙汰なのか。しかし、この一ヶ月ほどやたらとしゃべったり語ったりと「頭」だけを使うことが多すぎて、身体がなまってきているのを強く感じている。病み上がりというのものもあるのかもしれないが、とにかくはっちゃけて暴れたい。むしように感じている。ゆえに、ドッチボール大会は絶対に出る。

となると、残りの時間をすべて勉強に費やせということか。

そうはいかない。今回は久々に家族旅行という大イベントが用意されているのだ。

二泊程度だが、それでもしっかりとハイキングは予定している。

こんなところで教科書持ち込んで英単語の暗記なんぞしたくもない。

「ドッチボール大会って、お前」

簡単にゴールデンウィーク中の予定を説明するやいなや、藤沖はいきなりしゃがみこみ咳き込み始めた。咳き込んでいるのではない、笑いこけているのだ。

「何そんなに受けている？」

笑う必然性が感じられず乙彦が問うと、藤沖はゆっくり立ち上がりつつ、両手を机に置いて俯いたまま喉仏を揺らした。

「この歳になってドッチボールか、そんなに燃えるか」

「しょうがないだろう。バレーやバスケットやネットが必要だし、さすがにこの歳で鬼ごっこはしないだろう。バドミントンは一対一かダブルスか、どちらにしても偶数人数でないとできないし、となるとベストなのは円陣組んでドッジだろう。間違っているか」

「間違っていない、いないが」

笑いはまだ収まらず、藤沖はその笑みを浮かべたまま乙彦に尋ねた。

「たとえばどこか遊園地に行くとか、街でたむろうとか、そういうことは考えないのか」

「考えるわけがない。金がかかる」

夢のない答えが不満だったのかどうかはわからない。藤沖は黙り、溜息をついただけだった。

「関係ないが藤沖」

せっかくなので乙彦も以前から思うことを伝えてみた。

「俺はいつも不思議に思うのだが」

「なんだ？」

不承不承藤沖が顔を上げた。藪睨み気味に。

「どうして青大附属の奴らは、やたらと一対一で語りたがるんだ？」

非常に疑問に感じていたことだった。

「女子ならまだわからなくもない。しゃべるのが好きなんだろう。だがこの学校に来てから男子もやたらと真面目に語ってくる傾向があると感じているのだが、何か理由があるのか」

「真面目に語るのはいやか」

当てこすっているつもりはない。乙彦はすぐに否定した。

「そういうわけではない。時と場合による。俺は基本として嘘なく真っ直ぐぶつかってくる人間は好きだ」

「ならなぜ、そんなことを聞く？」

説明するにしても、いい言葉が見つからない。少し考えた。

「語り合うのも悪くはないが、それ以上にもっと身体で勝負するようなことをもっとしたほうがいいと俺は思う。たとえばこういう休みの日、外で意味もなくたむろうよりは走ったり野球したりする方がずっと面白いだろう。残念ながら今は二チーム分の人数を集められないので野球やソフトはできないが、そういった方がもっとクラスの団結を図ることができるんじゃないのかと

思う」

ここまで言い切った後、苦笑した。

——俺は二年前の総田と同じことを言っているらしい。

フォークダンスか座談会か、大もめにもめた二年前の学校祭を思い出した。

あの当時は乙彦が熱く語り合うこと、総田がフォークダンスで盛り上がることをそれぞれの立場から主張し、ぶつかり合った。結果としてはどちらも行き、どっちもどっちの決着となったのだが、二年たった今ならば総田の主張も受け入れられる。頭と身体、どちらも動かさなくてはバランスが取れないのだと。

青大附属の連中がもともと、頭を使ってしゃべりたがる傾向にあるのは、一年前の交流会前後から感じてはいた。

もともと立村がそういうタイプだったし、他の評議委員たちも懸命に自分の言葉でいろいろと難しいことを訴えて来ていた。さらにいうなら入学後、一対一で面と向かって説教されたり語られたり愚痴られたり、その連続に少々食傷気味でもあった。

特に、この前。清坂美里の場合。

——ああいう場合は何か運動でもして気分を発散させるのがベストだ。男子でないならバッティングセンターにも行きづらいかもしれないが、誰かに愚痴るよりは健康的じゃないのか。

どうも、ぶつけられる自分に疲れが溜まって来ているようだ。

さらにいうなら藤沖に対しても同じことを感じている。面と向かっていう気もないが、今のように試験の傾向と対策について語りつづけるよりも一緒にグラウンドを走ろうかと誘うとか、もっと別の方法があるはずである。

言うならば、「頭でっかち」。

「そうか、身体を使えか」

「俺はそちらの方がいい。だからドッチボールのような単純な球技の方がよい」

藤沖はそれでも、やはり頭を使った話をしたかったようで最後に締めた。

「いいか、関崎」

「なんだ？」

「もしもこれから先、授業についていけないと感じるようだったら何時でも声をかけてくれ」

しつこいくらい言われてきたことだけに、聞き流そうとした。回り込んで真正面に立たれた。これだけは言わねば、と仁王立ちされてしまうとしかたない。聞くしかない。

「これは、俺の本心から言わせてもらいたい」

「本心？」

「俺は、青大附中において、授業についていけなくなった奴を何人か見たことがある。それと、ついていけなくなった結果学校を退学になった奴もいた」

——退学。

瞬間、耳の奥がびんと鳴った。

「うちの学校は決して問題児だからといってすぐ放校にするような無責任なことはしない。しない、それでもついていけそうにないと判断した場合は、他校に流される。実際、本人の意思とは別に他の女子高に進学するように勧められ、結局そうせざるを得なかった奴もいたんだ」

——女子高か。

女子なのに、相手に「奴」を使うのがアンバランスだ。

「そいつは学年の誰よりも真剣に勉強していたし、懸命に努力もしていた。それでも、ついていけず、附属高校に上がることを許されなかった。そういう奴もいる」

「そんな真面目人間がなぜ」

藤沖の目からみて「真面目」だとしたら、相当なものであろうに。

「どこの高校に行ったんだ？」

「可南女子だ」

再び、乙彦に耳鳴りが生じた。可南女子、知っている女子のいる学校だった。

耳鳴りしていても全く気付かれず、藤沖は視線を窓辺に移していた。顔を覗き込まれずにすんだのは幸いだった。

「関崎も知っているだろうが、可南女子は青潟の私立高校でも最低ランクとされている。青大附中からの進学というのはまずありえないことだとされている。しかし、彼女の進むことのできる高校はそこだけだった。推薦で進んだと聞いている」

「それはもちろん、推薦しかないだろう」

学校ランクは一応頭に入っている。藤沖の言葉に嘘はない。

「だが、もっと早い段階で誰かが手を差し伸べていれば、彼女は青大附属の中で過ごすことができたかもしれない。あくまでも仮定だ」

「先生たちは何もしなかったのか？」

それは教師の仕事だろう？ 問う乙彦に藤沖はやはり視線を彷徨させたまま続けた。教室内には誰もいなかった。

「担任は、彼女のためにこそこの学校を出るべきだと言い張ったと聞いている。青大附高に学力の伴わないまま進学しても、恐らく途中でドロップアウトするだろう。それだったら早い段階で彼女に合った高校へ進学させて、ふさわしい場所で過ごすべきだ。噂ではそう訴えたと聞いている」

「だが、それでも可南女子以外にも選択肢は」

「なかったはずだ。俺はなかったと聞いている」

藤沖は断言した。いつのまにか「奴」が「彼女」に切り替わっていた。

「関崎、どうしてもこれだけは言っておきたい」

髪をかきあげながら藤沖は乙彦に向き直った。

「俺はもう二度と、成績が理由で退学になる生徒とすれ違うのはごめんだ」

「いや、俺は退学する気はないが」

「いいから聞いてくれ」

言葉を挟めなかった。

「バイクで事故った、煙草すっているのが見つかった、シンナーやらかして御用になった、そのあたりの理由ならば俺も納得する。自業自得だ。だが、例の彼女に関して言えば、本人の努力と根性を誰もが知っているだけに、せめてなんとかできなかつたものかと誰もが感じているはずだ。これは、青大附中上がり連中がみな、悔いと共に感じていることだろう。だから、だ」

——なにが、「だから、だ」なんだ？

混乱しつつ、それでも乙彦は藤沖の瞳を正面から受け止めた。それが義務だと思ったからだった。

「お前も気付いただろう。うちの学年の連中がみな、必死に外部生を手助けしたがるのがなぜか。やたらとお前を呼び止めたり、気安く接したりするのは、もう二度と学校に馴染めず退学していく生徒を生み出したくないからなんだ。これは古川も、清坂も、おそらく女子連中みなそうだろう。男子である俺も同じように感じているんだからなおさらだ。もっとも関崎ならそんな心配なんてないと誰もが思っているようだし、俺も九十九パーセントは安心している。いるが残りの一パーセント」

「いや、百パーセント俺も退学したいと思うことはないと思うぞ」

乙彦は言い切った。退学、とんでもない。誰がするか。親に泣く泣く出させた入学金、なぜ無駄にするか。

藤沖がまた、乙彦の方に手を置いた。

「彼女にも、俺たちは、そう思っていた」

首を振った。

「死のうとするなんて、百パーセントありえないと思っていた。それでも」

「自殺したのか！」

「いや、未遂だった」

最後に視線を足元に落とし藤沖はうなだれた。ほんの一瞬だった。

辛気臭い話が続くのも何かと思ったのだろう。藤沖はさっさと話を切り上げ、
「じゃあ、休み明けに」

片手を挙げて去っていった。乙彦も無言で答えた後、改めて試験答案の挟まったファイルを脇に挟み、移動することにした。

補習室は毎回教室が指示される。今日は一年D組だと聞いている。

補習といっても席について授業の続きを聞くというやり方ではなかった。最初のオリエンテーションではそういった形の授業が中心だったのだが入学式以降は全く方針が変わったらしく、ほぼ一対一で複数の先生および大学の学生たちが補習教材の解き方をひとりひとりに説明する方式となった。教師であろうが大学生であろうが、みなわかりやすく説明してくれるし、さほど緊張感もないので乙彦としてはどちらでもよかった。

適当に空いている席につき、教室内でうろうろしている先生か学生を呼び止めて、
「すみません、これからこのプリントを解きます」
と声をかけるとすぐ、ワンツーマンレッスンが始まる。

教室にはすでに、十五人ほどの生徒がばらばらに腰掛け、プリントに向かっていて。みなひとりひとりに大学生たちがつききりで説明を行っていた。毎回大学生たちの顔ぶれが異なるので、名前もまだ覚えられなかった。今日の担当教師は麻生先生だったので、まずは挨拶して席についた。乙彦に気付くやいなや、すぐにかげよってきて例のあぶらぎった額を近づけてきた。

「関崎、ファイルの答案は持ってきたか？」

「はい」

不承不承答えた。

「それなら今日は英語の答案を分析することにしよう」

「分析、ですか」

できれば大学生相手の方がまだ、気も楽なのだが。麻生先生は時計をちらと眺め、
「そろそろ片岡が来るから、それまでまず問題の読み直しを行ってろ」

腰を上げて扉を爪先立って様子伺いした。

——片岡？

もちろん名前は知っている。同じクラスだが、まだ最低限の会話しか交わしたことの無い大人しそうな男子だった。藤沖グループメンバーではないが、かといって他のグループに所属しているわけでもない。ただやたらと他クラスの女子がやってきて絡んでいるのだけは目にしていた。あまり興味がないのでそれ以上のことは不明である。

どちらにしても今まで片岡が、補習に来たことはないはずだった。

——まあいい。あまり話をしたことの無い奴と一緒にいるのも悪くはない。

乙彦は英和辞書をひっぱり出し、単語一句をこまめに引いて行った。青大附属に入学して以来指定の辞書を……もちろん「みつや書店」で手に入れた中古だが……使用しているのだが、使い慣れないのと文字が小さいのとでかなり勝手が悪い。それでも毎日引いているので指には馴染んできたけれども、それでも今まで使用してきた中学生専用辞書とは違い頭が痛くなる。

「よし、片岡、こっちに來い」

三行程度訳しなおしたところで麻生先生が声を挙げた。ちらと、他の生徒たちが目を向けずぐに戻した。女子たちだけが露骨に目を背けたのが目立った程度だった。

入り口に小柄な男子がひとり、立ち尽くしていた。麻生先生が片手で手招きをした。

「そんな突っ立ってないで早く來い。それと、ファイル、持ってきたか？」

「……忘れてました」

「ったくなあもう！ 早く取ってこい」

少し声を荒げると、片岡はまん丸い目を見開き、こくりと頷き、ダッシュで姿を消した。

「本当にまだまだガキだなあ、あいつは」

呆れた風に麻生先生は呟くと、乙彦に指示を出した。

「ここ、三人で座れるようにするから、机を向かい合わせにしろ」

自分の分はわざわざ教卓のパイプ椅子を確保している。めくっている途中の辞書を急いで閉じ、乙彦も言われたとおり向かい合わせに席をくっつけた。たぶん片岡と顔を合わせることになるのだろう。こういう密着型のやり方は本当を言うとあまり好きではない。

無事片岡がファイルを持って戻ってきたところで、さっそく麻生先生との答え合わせが始まった。問題そのものが英作文中心ということもあり、確固とした答えがあるわけでもない。また片岡も自分の答案を隠したままで、わざわざ幕を張るような形で顔を隠している。

——なんだこいつは。

麻生先生がいなければこのあたりで一言、たしなめてやるころだ。

「つまり、関崎は正確な作文をこしらえたが、単語の選び方を間違えていたというだけだ」

点数がずたずただった理由を尋ねもしないのにさっそく説明してくれた。

「ということでだ。はっきり言うと関崎、これからお前が意識しなくてはならないのは英語うんぬんよりも、自分で思ったことを正確に伝えることだ。それも説得力ある形で、論理的にだな。むしろ日本語の小論文を先に学んだほうがよさそうだ」

締められた。あっさりと。目の前で片岡は相変わらず答案で顔を隠している。透けてちらと見えたのは赤ペンの「90」という数字。どうやら、立村の次席はこいつらしいと見た。

「それと、片岡」

次に麻生先生は片岡の答案をさっと手元から引き抜いた。「あ、あ」と声を出しながらぼかんと手を伸ばそうとしている片岡を、ぴしゃっとはたいた。

「なにが、『あ、あ』だ。本当にガキだなあ。とにかく片岡、お前がなぜ今回満点を取れなかったか、わかっているな？」

「はい」

「本当にわかっているのか？ お前。お前の書いた英作文はきちっと論理がまとまっていて、それでいて正確なんだが肝心要のうっかりミスが多すぎるんだ。なんでピリオドとアポストロフィエスの抜けがこんなにあるんだ？ これで十点も引かれるなんて、はっきり言ってアホだぞ」

「すみません」

ふたたび麻生先生は片岡の額をちょんとはいた。

「謝る問題じゃないだろうが。お前、英語の力はあるんだから、そんなくだらんことで点数落とすなって言ってるんだ。わかってんのか」

「はい」

「わかってなさそうな顔してるなあ」

あきれ顔の麻生先生は、それでもにやりと笑い、黙って答案を片岡に返した。

「いいか、片岡。お前のこれからの課題はだな、まず答案を見直すこと。それを三回繰り返すんだ。それだけで最低限、ピリオドは見落としなくできるはずだ。今のところお前が一番、英語学年トップに近い地位にいるんだからな」

渡したその手で片岡の髪の毛をがしがしと撫でた。横にぐらぐらゆれている。いやならいやとはっきり主張すればいいのに片岡きたら、そのまま黙ってされるがままになっている。

——やはり立村は目の敵にされているのかもしれないな。

しばらく麻生先生と片岡とのやりとり……いや、麻生先生が一方的に片岡をじゃらして遊んでいる……を眺めながら、乙彦は自分の答案を読み直した。英文を読み返す気はなかった。先生の言う通り自分の欠点は日本語にせよなんにせよ、作文なのだと自覚していたからだ。それ以上に思うのは、

——麻生先生は本当に立村のことが嫌いだな。

この一点でもある。

まだ口に出さぬ計画のひとつとして、立村を後期規律委員に押し込むというものがあり、乙彦なりに道を作るつもりでいた。まだ自分でも規律委員としての仕事を全くしていないのにそんなこともおこがましいが、二学期後半から藤沖の跡を継ぐ形で評議委員に納まるわけだからそのくらいの計画は立てたっていいだろう。ゴールデンウィーク後の新歓合宿でまずはクラス全員と完璧に交流して流れを作るつもりでいる。

だが、ここでもやはり、マイナス要素を発見することになった。

——きついぞこれは。

藤沖はうまく丸め込んでくれるというし、古川こずえもある程度事情を理解してくれている。肝心要の立村についても自分から立候補こそしないかもしれないが、指名されればそれなりに覚悟もするだろう。そのあたりは心配していなかった。

ただ、想像以上に立村の評価ががたがたに下がっているのが気がかりだ。

入学後一ヶ月経つにつれてその状況が顕わになるのがなんともいえない。

うっかりしくじったら最後、計画は水の泡にもなりかねない。

——うまくやらないとまずいな。

乙彦には慣れない根回しを、やはりやらないとまずそうだ。胃がずんと重たくなった。

「関崎、じゃあ次だ。お前数学の答えは持ってきたか？」

思いをめぐらせている間に麻生先生は話をどんどん進ませていた。片岡も乙彦をちらとも見ずに黙ってファイルをいじり、ぐしゃぐしゃになった答案を取り出した。

——人のことは言えないが、ずいぶんしわくちゃにしたもんだ。

口を尖らせた風にして、片岡は机でその皺を伸ばした。

俯いてばかりいるのであまり読み取れなかったのだが、こう真正面から観察してみると片岡の顔はかなりかっちり顔立ちが整っている風に見受けられた。欧米の映画スターを思わせるような彫りの深さが鼻筋と口許にはっきりとある。だがその瞳が問題だった。雅弘似のどنگり眼なのはまあいいとしても、やたらときよときよとしていて落ち着きがない。黙っていたらどこぞのスターとでも振るまっていられそうなのに、この態度はいったいなんなのだろう。見ている方が時折、むずむずしてくる。

「次は、関崎、お前がこの解き方を説明しろ。できるだろ？」

「問3ですか？」

聞き返した。もちろん成績もいいわけではない数学の結果ではあるが、他の科目よりはましである。

「あの問題を解いたのは、うちのクラスでお前だけなんだ」

「え？」

意外だ。こんどはこちらがぽかんと口を開ける番だった。

「まず、説明してみろ」

はあ、と頷き乙彦は、ノートを横におきそこからめくり、罫線を見捨てて一気に解き方を解説していった。ひとつひとつ、矢印で方程式をつないでいきながら、目の前の片岡より麻生先生に向かって話していった。

「つまり、ここでXが二乗となって、結果こうなったというわけです」

片岡はあまり興味なさそうな顔でちんまり座ったままだった。嘘でもいいからもう少し関心持った振りしろ、そうがなりたくなるのは自分だけだろうか。

「よし、よくわかったか片岡。お前ももう少し真剣にやれば、いくらでも解けるようになるんだぞ。いいか。桂さんにも連絡しておくが、ゴールデンウィークだからといってあんまり遊びまわらないように、だ。話聞いているぞ。神乃世町に帰るんだらう？ これからな」

別にそんなどうでもいいことまで引っ張り出さなくたってよさそうなものを、麻生先生は一言一句含めるように言い聞かせた。片岡の頭を時折撫でるような仕種をするのが、他人ながら目障りに感じた。男子たるものそうそうおつむを撫でられるのは嬉しいもんじゃない。

「わかりました」

「宿題も桂さんに説明しておくからな。それと、だが、あまりな」

ふ、っと麻生先生は乙彦の視線に気が付いたらしく言葉を濁した。

「どちらにしても、お前のこれからの課題は、細かいミスをなくす、これだな。いいかよく覚えておくんだぞ。それにしてもなあ、お前ももう少しクラスの奴らと一緒につるめ。ほら、関崎、少し数学と英語お互い教えっこしたらどうだ？」

また訳のわからぬことを言い出す麻生先生。青大附属の関係者が口走ることの殆どはわけのわからぬことだと承知しているけれどもそれにしても、しかし、話が飛びすぎているじゃないか。別に教え合うのはいいことだと思うのだが、外部生でしかもクラスの状況もよくわかっていない乙彦にいきなりお見合いさせるとするのは、何か違うような気がする。

「先生、あの」

立ち上がり別の生徒の方へ向かおうとした麻生先生を、止めようとしたのは片岡だった。

「もう帰っていいですか。もう、桂さん迎えに来てると」

「安心しろ。桂さんにはこちらから連絡を入れておく。自動車電話の番号は頂いている」

——自動車電話？

未知の言葉があふれ出ていた。いったいなんなんだろうか。自動車に電話がついていること自体がまず理解不可能である。電話とは通常、家に、黒か赤か緑か、もしくは公衆電話ボックスの中に鎮座ましているものではないのか？

実際、補習の生徒たちもいつのまに教室いっぱいになっていたのと、フォロー役の大学生たちの手に負えない問題も多々あったらしく、麻生先生が立たねばならなかった理由はわからなくもなかった。いつもだったら乙彦もあっさり見送って、自分のわからないところを手当たり次第大学生に聞くことだろう。

しかし、指示は、「片岡と教えあえ」とのこと。

確かに英語の成績はよさそうだが。あのわけのわからない英作文問題でちゃっちゃと高得点を獲っているのだから、立村の次ということは言えるだろう。教えてもらえるならそれにこしたことはない。

「片岡、悪い」

もしかしたら乙彦のためにあつらえてくれた席なのかもしれない。それならば礼儀正しく受け入れるのも一興だ。乙彦は腹をくくってまず、礼を言うことにした。

「これから、いろいろ世話になると思うが、よろしくたのむ」

「何を世話になる？」

きょとんとした眼がどことなく雅弘に似ていた。顔立ちだけがやたらと端正なだけに、その目つきだけが相変わらず浮いていた。

「俺はどうも、英語が人一倍弱いようだ。で、片岡は人一倍英語が得意なようだし、なら教えてもらうのもいいと思うんだが、どうだろうか」

「教えるもなにも、俺わかんないよ」

びくっとしたまま、片岡が早口に答えた。鼻の下をぼりぼり搔いてから、

「補習に呼ばれたの、初めてだし」

「あ、そうなのか」

やはり、麻生先生が用意した友情と学業のお見合い席と見てよいようだ。

「それなら、いい機会だ。どちらにしても新歓合宿では話をするつもりでいた。それが前倒しになっただけならそれでもいい」

説明をしておいたほうがおそらく片岡にはわかりやすいだろう。乙彦なりの心遣いを込めたつもりだったが、片岡は相変わらず仏頂面をしたまま口を尖らせたままだった。

とはいえ、露骨に嫌われたわけでもないようだし、片岡も聞かれたことには素直に答える奴だったので、会話はそれなりに成り立った。

「神乃世町から青潟に引っ越したのか？ さっき先生が話していたことだが」

「小学校卒業まではそこにいたんだ。今でも母さんだけそこに住んでる」

「片岡ひとりで、青潟に住んでるのか？」

「親戚の人と一緒に住んでる」

ははあ、たぶん先ほど出てきた「桂さん」という人が、その親戚なんだろう。

そのくらいは読める。乙彦はさっさと一人合点して話を進めた。

「じゃあ中学から、下宿してるようなもんなのか」

「下宿じゃなくて、マンション」

取り立てて特別という風でもなく片岡は答えた。少しずつ会話がほぐれてきたようだった。

「迎えに来るとか話していたがあれはなんだ？」

「ひとりで帰るなって言われてるから、しょうがない。迎えにくるんだ」

——かなりの坊ちゃんだな。

すでにもう、経済観念の差については慣れた。

「でもそれだと、いろいろ不便じゃないか？ たとえば友だちと話をするとか、それからコンビニ寄るとか」

「それは連絡しとけば大丈夫」

——そんなことも親戚に連絡するのかよ。

少し前、古川からちらっと聞いた記憶が残っていた。確か片岡はどこぞの洋服屋の御曹司だとか何とか。とすれば片岡の発言も納得する。経済観念の土台からしてまず違うだけのことだ。驚くべからず。乙彦が知りたいのは奴の裕福な生活うんぬんではなくて、片岡という男子がどういう性格で、何を考えているのか。その程度だ。

ところどころ会話の途中で頷いたり、早口に説明を混ぜ込んだり、慌てて舌がもつれたり。片岡なりに乙彦の質問へ答えようとしているのは伝わって来ていた。

まんざら悪い奴でもなさそうだ。自分から乙彦の家庭事情をあれこれ聞こうとはせず、聞かれたことだけきちんと答えるだけ。そこのところがどうも物足りなく感じるところもでもある。そういう点からみるに、かなり用心深い奴なのかもしれない。

「けどどうしてだ、そんなに英語ができるんだ」

「出来ないよ。だってまだ、二番だし」

——そんなこと聞いてねえだろが！

啞然としつつも片岡の間抜け顔を見ていると憎めない。なんで「二番」だなんて訳のわからないことを言うのだろう。となると、英語限定トップは立村。つまり片岡は立村に次ぐ語学の秀才なのだろう。それならば、麻生先生がなぜ乙彦に片岡をあわせたのかどことなくわかる。

「二番なんてそうあっさりと言えるのか」

「一番獲りたいんだけど、なかなか、取れないんだ」

またあっけらかんと、毒のある言葉を発する片岡。本人は毒だと気付いていないのだろうが、額面通り受け取ればこれは「立村からトップの座を奪いたい」発言だ。もちろんその意欲は買うにしても、いきなり外部生の乙彦の前で言い放つべき言葉ではない。

「だから英語塾行ってる」

きた、やはり塾だ。お坊ちゃまは違う。まぜっかえす気もなく頷いていると片岡はさらにたんと続けた。

「けどそこだと文法やらないで、ずっとクラスの人たちとしゃべるだけだから、試験には役立たない」

「クラスの人？　しゃべる？」

「うん。クラスの人たち、外国の人ばかりで、中国とか韓国とかタイとかフィリピンとか、そういうところの人たちばかり。みな大人だから共通語がみな英語になっちゃうんだ」

——こいつの言っている意味が、わからねえ。

頭の中は片岡ワールド一色。乙彦の知らない世界が奥深く広がっていく。

「けど、やっぱり英語だけは一番獲りたい」

「なんでそんなこだわる？」

こだわりたい気持ちはわからなくもないので、軽く尋ねたつもりだった。

「俺から見たら片岡、お前かなり英語のレベル高いぞ」

「けど、英語科はあいつを超えられないからまだまだなんだ」

——あいつと来たかよ。

なんだかいやな予感がする。そんなの無視して片岡はこっくり頷いた。

「英語科でトップになったら、喜んでもらえるし」

「そりゃ親は喜ぶだろうな」

乙彦も本音では、そりゃ、獲りたい。しかしここで言い放つほど心臓も強くない。

——この片岡って奴、いったいアホなのかそれとも単純なだけなのか、よくわからねえ。

結局乙彦は、英語を教えてもらうことも、また数学の問題を教えることもせず、一通り片岡のひととなりを観察するだけに留めた。それはそれでなかなか面白かった。どことなく小学校時代の純朴だった雅弘を思い出した。雅弘はやはり一般的な男子だったのできっちり社会常識も人間関係の機知も学び素直に成長したが、この片岡という男子、どうも本来学ぶべきものをすっかり落っことして高校生になったという印象がある。

——小学生とは言わないが、なんだかガキっぽいな。

悪意が全くなさそうだけにその言動だけがもったいない。

——いろいろ事情もあるんだろうがな。

少なくとも乙彦が接したことの無いタイプの高校生だったことに変わりはない。

「じゃ、また休み明けにまたな。その時に神乃世の話でも聞かせてくれ」

「わかった。おつかれさま」

片岡は校門を出てすぐ、附属中学の並ぶ校舎へと駆け出していこうとした。すぐに立ち止まった。向かい側でクラクションが鳴っていた。乙彦が自転車を引き出しペダルに片足をかけながら校門から顔を出したとたん、不意に何かが飛んできた。石つぶてのようなものだった。避けようとしてばたっと落ちた。笑い声が聞こえた。

「これ、神乃世のまんじゅう。おいしいよ」

目の前には真っ黒くつややかな車が一台、留まっていた。助手席には片岡がいつのまにか座り込んでいた。運転座席には黒ぶちめがねをかけた「いまから葬式にいけます」といった黒尽くめの男性が、そして奥座席にはやはり、黒い服を纏った女子がひとり、座っていた。ちらっと観ただけだが、おかっぱ髪で額を出していた地味な雰囲気の子だった。

片岡が席から乙彦に投げたまんじゅうだった。

「あ、ああ、ありがとう」

「おつかれさま」

助手席から顔を出した片岡は、今までどこに隠してきたんだと問い詰めたくなるような笑顔を浮かべて手を振った。今までの仏頂面はなんだったんだろうか。車のハンドルを握ると人格変わるとよく聞かすが、片岡の場合助手席に腰かけるだけでハイテンションになるんだろうか。変わった性格である。悪くはないが。

乙彦はもらった白いまんじゅうをすぐ口に押し込んだ。

神乃世がどんなところだかよく知らないが、確かに餡がみっちり詰まっていて、食べ応えはあった。見た目がどこにでもあるような酒まんじゅうだったのに、かんでみると意外とやわらかくて弾力もある。

——なかなかあいつ、面白い奴だ。

とりあえず、お見合いをセッティングしてくれた麻生先生には感謝しておこう。

最後に口を押さえるようにして降りてきた立村に乙彦は、

「大丈夫か」

月並みな言葉で尋ねた。黙って首を振り、数回咳をした後、片手で握り締めていたハンカチで口を覆い直しふらふら歩いていった。到着後すぐ、クラスごとに整列しなくてはならないのだがどうもそれができる状態ではなさそうだった。

「ほらほら、保健委員、早くどっかに連れてきなよ」

古川こずえが保健委員に声をかけている。

「えー？ 俺があ？」

「しょうがないでしょうよ。あいつの状況みたらもう脱水症状ぎりぎりだってわかるでしょうが。バスの中でもう何もなくなるくらい吐き続けてたんだからさ。まずは寝せないとまずいでしょよ」

「けどそんななあ」

「早く追っかけて、ほら」

背中をどんとひっぱたかれ、仕方なさそうに男子保健委員は立村の背中に近づいていった。何か声をかけてみるが、立村から拒絶されたのかまた戻ってこようとする。ふたたびこずえに蹴りを入れられそうになり、一步飛んだ。

「無理やり襟首ひつつかんで、まずは保健の先生ところに連れてきなよ。それよか麻生先生かなあ」

「麻生先生が筋だろう」

隣で藤沖が、男子連中をざっくり眺めながら冷静に正論を言う。

「そうだけどさ、当てにならないじゃないの。行きだつてさ」

返事を待たずにさっさと宿泊施設の玄関前まで走っていった藤沖を見送り、古川は乙彦ひとりにぶつけ出した。

「立村がひとりで後ろの席に避難した時も、勝手にしろって顔してたじゃないの。まあね、あれだけ酷く酔ってたところろに見たら、きっと周囲にもうつつちゃうからね。あいつもそのあたり気を遣ったんだろうけどさ」

「しかし乗ってから十五分くらいであんなに車酔いするものか？」

確か、先頭の席でひとり座っていた立村が麻生先生に、

「すみません、本当に酔ってしまったようなので、後ろの席で横になっていいですか」

と頭を下げ即、鞆を抱えて後ろにもぐりこみうめき出した時はさすがにみな青くなったものだった。かろうじて醜態をさらけ出すことはなく、いわゆるお手製のエチケット袋でなんとかしのいだようだったが、やはり相当な苦しみようだったことは想像がつく。みな、知らん顔をしていたもののやはり気分は滅入る。バスガイドがいるわけでもなく、しかたなくみな意味もなく喋りあうだけだった。

「前から乗り物酔いしやすいとは聞いていたんだけどね、立村って」

いつのまにか二人で並んで歩いていた。古川も女子と付き合いがあるのだろうに、なぜ乙彦にひつつくのだろうか。まあいい、事情は聞いておいたほうがよい。

「ただ、なんだかんだいってバスの中でみな合唱大会やったりゲームやったりしてたからね。気も紛れていたんだろうし、羽飛や美里もいたからね。でも今回はちょっとさ」

「そういうことだな」

乙彦は立村が保健委員に連れられて先にホテル内へ入っていくのを見届けた。古川と話をしている間に誰かかしら手配をしたのだろう。とてもだがこれから、

「ドッチボールなんてやってる気力ないよね」

「やるのか？ 本当に？」

問い返すと古川は大きく頷いた。

「藤沖も乗り気だからね。まあ、立村がああ状態だったら参加するとは思えないし、もともとうちのクラス二十一人だからこれで男女混合チームが十人ずつ、半々になるし。あいつには悪いけど、まずはしょうがないんじゃないの？ それにしてもねえ、藤沖もいきなり面白いこと言い出すよね。各クラス対抗円陣ドッチボール大会だなんてね。笑っちゃう」

笑えない乙彦は黙っていた。

藤沖にドッチボールを発案させたのは、明らかに乙彦だと自覚していたからだった。

新歓合宿の内容は二泊三日日の予定だった。

さすがに乙彦もそこまで捻出できなかったのも、今回に関しては両親に費用を任せる形とならざるを得なかった。非常に口惜しい一方で、父の、

「おとひっちゃん、お前はできることを十分しているんだ。安心して行って来い」

一言に救われたような気もしていた。正直この時期は弟の合宿や兄の授業関連で使う器具の用意とかで物入りのはずなのだが、全くそんな気配すら感じさせない。自分なりにできることをする努力はしているが、それが大河の一滴に過ぎないという現実にも気付いている。この合宿中、みつや書店へのアルバイトも必然的に休まざるを得ない。

「関崎、荷物を置いたらすぐに集合だ。お前が一番ルール知っているはずだから仕切れよ」

まずはホテル内の各フロアへと向かい、乙彦は藤沖に問い返した。

「俺が何を仕切れというんだ。とりあえず今朝の段階で荷物検査は終わらせた」

もちろん、南雲の指示通り、着替え関連の荷物には手を触れないようにして、こっそり持ち込むことに関しての逃げ道をこしらえて、だが。

「規律委員としてはそれ以上の仕事はない。が、一年A組のメンバーとしては最大の仕事がある」

「なんだそれは」

「ドッチボール大会、勝利だ」

勝利だ、と言い切られても困る。なぜ藤沖は四角い顔に妙な気合を込めて発するのだろう。

「関崎、ゴールデンウィークは燃えたんだろう」

「それなりにな」

雅弘たち水鳥中学の友だちと連れ立って、公園で派手にボールをぶつけ合ったのは今だに腕と膝に感覚がしっかり残っている。別名、筋肉痛とも言う。手は抜かなかった。

「それならば、今回も俺たちの圧勝だな」

自信ありげに藤沖は鼻の穴を膨らませた。乙彦も本来ならもちろん、と言い放ちたいところだが、正直言うと若干の不安がある。一ヶ月体育でA組連中の運動能力を観察してきたところ、言っちゃなんだがいまひとつ敏捷性に欠ける印象を持った。今のところ乙彦が陸上関連の競技ではクラス一のタイムを誇っているが、果たしてこれが他のクラス連中に通用するかどうか……非常に読みづらいところではある。

いや、なによりも藤沖に少し期待はしていたのだが。

「ひとつ聞きたいんだが、青大附属ではあまり部活動に力を入れていないと聞いたが」

遠まわしに聞くのもなんだが、さりげなく乙彦は尋ねてみた。

「そうだ。だから中体連ではいつもぼろ負けだ。最近はそれでも少しずつ力をつけてきているとは聞くが、俺たちの代は悲惨なもんだった。競争心が失せていたからな」

「そうか、だからあまり誰も、体育の際に燃えないのか」

「その通りだ」

いかつく答えた藤沖は、ふと乙彦に意味ありげな視線を送ってきた。

よくわからない、まずはしっかと見返した。

「火をつけるのは、関崎、お前だ。頼んだぞ！」

いきなり背中をどつかれ、つんのめった。

——俺が火をつけるってどんな風なんだ。

みな、乙彦に妙な期待を持っているような気がする。もちろん、それが励みにならないとは言わないが、あまりにも露骨だとこちらの方が白けてしまいそうになる。

部屋はみな、一部屋大部屋を使う形となっていた。すでに立村だけが布団を敷いてもらいあお向けに横たわっているのが見えた。障子の陰で、ちょうど出入り口の側。入り口のトイレに頭を向ける形だが、直接出入りする際には邪魔にならないような絶妙な場所にいた。

「しかしな、今年はホテルじゃねえのか」

低い天井を見上げたため息をつく奴らがいる。

「そうだよなあ、初めてだよなあ。学校の宿泊施設なんか使うのはな」

「ほんと。なんかわびしいってな」

立村の様子を伺いたかったのだがまずは、元気な連中と話をする。

「ホテルなんか使ったことあるのか？」

みな、乙彦の顔をまじまじと見つめ、大きく頷いた。ひとりが「あ」と気が付いた風に口を開き、

「関崎は知らんわな。そだ、そだ」

すぐに説明をしてくれた。

「中学の時は、みな近くの旅館とかホテルとか、そういうところを利用してたんだ。二年の時は自

分らで泊まる場所を決めてな」

「ちょっと待ってくれ。自分らで泊まる場所を決める？」

「そ。クラスによって泊まりたい雰囲気ってあるだろ？ 俺たちは大部屋オッケーだけど、中には小部屋でないと言だって言い張るクラスもあったりしてさ」

「ああ、D組なんかそうだったよなあ」

完全に日干し化して横たわっている立村にかがみこみ、「な、立村」と声をかけた。返事をせずに目を閉じたまま。乙彦も近づいてみたが、呼吸が荒かった。真っ白い顔のまま苦しそうに息をしていた。これ以上問うのは人間として思いやりなさすぎだろう。

返事がないということは、語ってもかまわないということだ。そう判断したのか、さっそく続きを語り始めた男子連中。車座になり、荷物を小脇に抱え、あぐらをかいた。藤沖が乙彦に「悪い、これその辺に置いていてくれ」と囁きさっさと部屋から出て行ったのを見送り、自分も続いた。

「中学二年ったら、宿泊研修だろう？ 宿泊研修に生徒が口出しする権限なんかあるのか。うちはなかったぞ」

「公立はねえよ。やっぱ青大附属だし」

わかりきった前提条件。「公立」と「青大附属」との落差は大きい。

「評議委員が主導して、どこに行きたいか、どんな宿に泊まりたいか、で、何をしたいか、全部決めるんだ。俺のとこだと女子がやたらめたら強かったから、ファンシーな海辺のペンションとやらに詰め込まれたぜ。ま、安かったからよかったけどな」

「ペンション？」

絶句した。もちろん「ペンション」がどういうものか想像つかなくはない。だが、修学旅行なり宿泊研修なりといえば、やはり原点は「旅館」だろう。この部屋のような大広間、畳の上でごろんと横になるのが普通だろう。立村が起きていれば「お前のクラスもそうだったのか？」と話を振りたいところだがいかんせん、相手は死んだように寝ている状態だ。

「で、立村のクラスはどうだった？」

「ああD組な。D組はすごかったよなあ。立村が全部ビジネスホテル選んで、そこでツインルームを取る形にしたんだと。これ、先生たちからは度々感だったらしいぞ」

「そうそう。けどそれでも、OKが出てしまうのがやっぱ、青大附属だよなあ」

——ビジネスホテルでツインルームを取る？

いつものことだが話の展開についていけずにいる。青大附属では、合宿ごときにビジネスホテルを使うのか。乙彦にはビジネスホテルというのがどういうものなのか知らないが、まず修学旅行で使うことは考えられないような選択肢であることは感じていた。

「汽車を使うかバスを使うかも全部、評議が決めるんだがな。あの時も立村、こんなにへろへろに酔っ払ったか？」

車座の中にどうやら立村と同じクラスの奴はいないらしかった。

「それにしてもなあ、たった一時間しか乗ってねえのになあ」

かすかに、囁くような声が布団からした。

「余計なお世話だ」

立村の、渾身振り絞った意思表示だった。

すでに乙彦も青大附属独特の文化には驚かなくなってきた。経済観念うんぬんでびくついては楽しめるものも楽しめない。クラスの連中もなぜか、乙彦が自分で学費を稼いでいることに対して深く尊敬の念を感じているようで、取り分けて何かいやみをいう奴はいなかった。その点は安心していた。

しかし、こういう時にふと出てくる、一步進んだ経験を知ると、どこからか焦りがにじみ出てくる。修学旅行の際にももちろん、自由行動の計画を立てて先生に提出し、その通りに行動したことはある。しかし、たかが三時間程度。もちろん宿の決定権などあるわけもない。青大附属の修学旅行自由時間というのは、本当の意味で「自由」だったらしいし、それで特段問題も起こらなかったらしい。大抵の中学ならば、

「中学生を野放しにするなんて、なんて無責任な！」

と絶叫される内容ではないだろうか。それがうまくいくところに「青大附属」というものがあるのかもしれない。

——俺だって、やれ、と言われれば、やれたはずだ。

自信はもちろん、ある。やることを許されなかったからやらなかっただけのことだ。

しかし、その自信と、実際「やり遂げた」者との差は歴然としているのもまた事実。

——今度、夏になったら、一人旅の計画を立ててみよう。

ゴールデンウィーク中の家族旅行でリーダー争いを父・兄と自分の三つ巴でやらかしていただければ、こいつらに追いつくことはできない。

一応、藤沖からは第一日目の予定をバスの中で逐一説明してもらっていた。しばらくクラスの男子連中と、干からびた立村の寝姿とを交互に眺めながら乙彦は予定を確認した。

「これからまず、クラス内ドッチボールの選抜戦を行うわけだが」

藤沖の説明によると、まずクラスのメンバーを適当に混ぜ合わせ、その上で男女半々の混合二チームをこしらえる。その上でドッチボール予選を各クラス内で行い、そこで生き残ったチームがくじ引きで勝ち抜き戦を競っていく。ただ英語科はどうしても人数が少なめなので、勝ち抜き戦となった段階で普通科のチームは人数を減らさざるを得ない。でない不公平になる。

「ほおお、俺たちの人数に普通科連中が合わせてくれるってことか。少々優越感がなきにしもあらずか」

「不公平でないように、男女ともどもこれからくじを引くんだそうだ」

「立村がぶったおれているから、問題なくフィフティ・フィフティになるな」

倒れている立村も異論を唱えなかった。

——本当は身体動かしたいだろうに。車酔いしやすい体質でものも因果だな。

乙彦はそっと片手を立てて、立村に無言の詫びを入れておいた。目を閉じているので気付いていないようだった。

「午前中にクラス予選を行った後、昼飯食って、その後でまたってとこだな」

「まだ十五分くらい時間があるぞ」

腕時計をそれぞれ覗き込んだ時だった。

「わりい、立村、いるか？」

どやどやと乗り込んでくる他クラス集団に、思わず身がまえた。いや、身構えたのは乙彦だけだった。A組の男子どもは特に驚いた顔もせず「よお」とかなんとか声を掛け合っている。見たことのある顔ぶれだが、こうやって同じ部屋で会話を交わすのは久しぶりの連中だ。

——天羽、難波、更科。

元・青大附属中学男子評議委員の顔ぶれを忘れてはいなかった。

もっとも乙彦を覚えているわけではなさそうで、すれ違ってもたいして声もかけてこなかった。おそらく忘れているのだろう。少し場所をこしらえるべく、窓辺にA組男子は輪を作り直し座った。ひょいを見ると、隣にはいつのまにか片岡がいた。音も立てずに身軽なことだ。

髪の毛をスポーツ刈りにした天羽が、片岡の顔を覗き込み、

「お前、うまくやってっか」

ぽんぽんと頭をはたいた。真剣に頭をなでさする片岡に、また天羽は何かを囁いた。乙彦には聞き取れなかった。

「元気だよ」

返事をする片岡。少しイントネーションが変だった。

「お前の愛だよ、愛」

「そんなんじゃ」

意味不明な会話を交わしている間にも、めがね面の難波とやたら小型犬風の愛想のよさをふりまく更科が、立村の枕もとにかがみこんでいた。

「お前、たった一時間でへろへろしてんじゃねえよ」

「……悪かった」

「謝るんじゃねえ。それよか、お前、起きられるのか」

結構きついことを言っているようだが、難波の奴、意外と友だち思いではないか。側で相変わらずにやにやしている更科が、難波の肩に両手を置いて立ち膝して話し掛けている。

「それよか、夕方、いつものあれ、やる？」

「……そうだな」

また、死にそうな声で返事をする立村。

「とにかく、無理すんじゃねえ。ドッチボール終わったら俺たちからこっちにくる」

「……いや、たぶん起きられると思う。こっちから行く」

あえて場所を移動したのも、彼ら三人がやたらと秘密めかした会話をしたそうに見えたからだったが、なにやら意味ありげなことを口にしてしているようだった。クラスでなんとなく浮いているままの立村だが、休み時間はいつもC組で語り合っている様子だった。もう少しA組連中と積極的に馴染んだほうがいいんじゃないかと、他人事ながら乙彦は思うのだが、立村にはまた別の理

由があるらしい。

しばらく片岡相手に話を振っていた天羽が、突然乙彦に興味ありげな視線を送ってきた。慌てて受け止める。全くの初対面では決してない。

「よお、お久しぶり」

「ああ。挨拶が遅れてすまない」

軽いようだが、目つきがやたらと鋭いのが気に掛かった。そういえば確か、天羽は立村がわけありで評議委員長から降りた後、後釜に入ったと聞いている。でもこうやって見舞いにくるのだから、特に気まずいことはないのだろう。交流会で何度か顔を合わせてそれほど印象はなかったのだが、やたらと人を笑わせたがるところが妙にひっかかっていた。うまく言えないのだが、「作り笑い」に似ていて素直に笑えるところがなかった。総田とはかなり話も合い盛り上がりしていたようだが、乙彦とはどうも住む世界が違うような人種に思えた。結局乙彦は立村としか連絡をとらなかったわけだが、仮に天羽が評議委員長だったとしたらここまでの交流は取れなかっただろうとも思う。

まあ、それはそれ、これはこれ。これからは同期だ。

「規律委員はなかなかしんどいだろう？」

「いや、面白い」

正直に伝えた。

「持ち物検査がか？」

「いや」

かみ合わない会話、やたらと重たい。内容はくだらないものなのに、話すだけでしんどくなる。天羽が評議委員長となった後期評議委員会、いったいどういう風に進んだのだろう。全く想像がつかなかった。

「まあ、なぐっちゃんがいるからなあ。ま、これからもよろしゅう、お願いいたします！」

わざとらしさを感じる明るさでもって、天羽は頭をかきつつまた一礼した。

同時に、難波が鋭い目で乙彦を見やった。

更科がやはり作り笑いでもって、乙彦に小首を傾げてみせた。

——俺、何か、あいつらにしたか？

横たわり、弱々しい声で会話を続ける立村との距離はまだ感じない。

ただ、何か天羽たちのかもし出す空気に、強烈な違和感を覚える。

総田や川上たちともまた違う、独特の冷ややかさがある。

冷たくどろりとしたヨーグルトのような、すっぱい匂い。

——たいしたことじゃない。まあいいか。

そんなことを気にしては青大附属独特の文化を受け入れることなんてできはしない。

もともと、細かいことを気にする性格ではない。天羽たちのことはさておいて乙彦は、隣の片

岡に、

「この前迎えにきた人、親戚の兄さんと妹か」

まず尋ねた。まずは会話のきっかけを見つけたかった。後部座席に座っていた大人しそうな女子はおそらく、片岡の妹だろう。

顔を下に向け、片岡は首を振った。

「そうじゃない」

それ以上、答えなかった。乙彦も今はそれ以上尋ねなかった。合宿関連の定めで夜はたんまり語り合うことになるだろう。その時にでも聞けばいい。

制服で到着したこともあり、みなすぐジャージに着替え、徒歩で十五分ほど歩いた先にある小高い丘で、まず準備運動をした。運動部の人間にとってはごく普通のことなのだが、みな手抜きしているように見えてならない。アキレス腱をしっかりと伸ばしておかないと大変だ。乙彦が入念に身体をほぐしている間、他の生徒たちはみなおしゃべりをしながら軽く膝屈伸をしている様子だった。

「おい、みなもっと真剣にやれ、怪我するぞ」

女子に聞こえるように、でも呼びかけるのは男子に。

「たかがドッジボールだってのに、そんな気合入れる必要あるのかよ」

A組ではないが声がする。からかい口調だがきちんと言うべきことは言っておかねばなるまい。適当に顔を上げ、乙彦は言い返した。

「足くじいたら、ここから十五分もかけて歩いて帰らねばならないんだぞ」

誰かに背負ってもらうなんてみっともないまねできるわけがないだろう。乙彦の正論に反論は返ってこなかった。

どうも他クラスを含めてこのドッジボール大会へのやる気はかなり薄そうな気がした。

藤沖が意欲たっぷりに推薦したというドッジボールだが、いかんせん青大附属の連中にはがきっぽく思われたらしく、正直みななんとなく、しかたなく、そんな倦怠感が漂っていた。

——だが、ここで本気を出したとすれば、きっと勝てるということになるぞ。

勝負事、負けたくてやる奴はいやしない。

乙彦は藤沖に話し掛けた。

「やるならとことん、やるしかないな」

「よっし、任せとけ」

まずクラス予選を、円陣くんでさっさと済ませることにしよう。乙彦は体育委員が先導してルール説明をするのを黙って聞いていた。一応男女混合チームで二チーム。各クラスで予選を行い選出メンバー十人をまず選ぶ。そのためにクラス予選というものを設けており、そこで勝ち抜いたチームがクラス代表として参加する形となる。もっとも勝ち抜き戦だから決着は意外とあっさりつくのではないだろうか。乙彦なりに分析はしていた。

——まず、なんとしてもできる限り陣内に残るしかない。俺ひとりでやるしかないぞ。

まずはクラスの対抗戦を終わらせることにした。赤と白、鉢巻で色分けしたチームがみな円陣を組みそれぞれのメンバーと気合を入れるため、手を伸ばし、

「ファイトー！ オー！」

乙彦先導して掛け声を掛けた。みな、しっかり声を出してくれたのはありがたい。

まずクラス予選。

乙彦の読み通りだった。あっさり勝ち抜いた。

男女混合でみな、手を抜きたがる奴ら……主に女子……がわざと当たって輪の外に出て行くのはしかたないとしても、みな面倒なのか疲れているのか、覇気がなさすぎる。それでも乙彦側のチームには藤沖もいるし、意外と片岡がちょこまか動き回ってくれてしっかりボールを取ってくれたのでそれなりの形はついた。しかし、これはいったいなんなんだろうか。

——お前らいったい！

男子たちはきちんと仕事をしてくれたと思いたいが、女子たちのいいかげんぶりといったらなんなんだろうか！ あまり意識することもない女子たちではあったが、まともにボールとじゃれついていたのは古川こずえくらいである。時折、「あれ？ 社会の窓、開いてるよ！」とかひっかけのやじを飛ばして油断させようとするしたたかさも備えていたがさすがに相手チーム女子、ひとり奮戦には限界もあるのだろう。

「ちょっと一、関崎、あんた思いっきり私のケツめがけてシュートすることないじゃないの」

一段落してみな、握手を交わした後、思いっきり背中に蹴りを入れられた。

「それもさ、手抜きもしないんだよ。こいつレディーファーストって意識ないよね」

「悪かった。試合の際は男女平等だと考えていたんだ」

言われてみると最後のひとりということもあり、乙彦なりにパワー全開にせざるを得なかったのは確かだった。とは申せ、古川には悪いことをしたとは思う。すぐに機嫌直したのか古川は、隣にいた藤沖にもぼんぼんと背中をたたき、

「ま、私をここまでいたぶったからには、きっちりA組優勝して戻ってきなさいよ。いいね」

「いたぶったつもりはないが」

「だってバックだよ、やらしいよねえ」

「どこがいやらしいんだ」

笑いを噛み殺す藤沖をよそに、乙彦は何度か古川の意味不明な言葉を問い返した。

A組はもともと人数も少ないので勝ち抜いたチームメンバーがそのまま、次のクラス対抗戦に駒を進めることになる。しかし他の普通科クラスにおいては、クラス対抗戦用に数人減らさねばならないこともあって、少々話し合いが必要なようだった。

「すごく無理なシュチュエーションだと思わないか、それに無駄な時間じゃないか」

「しかたあるまい」

藤沖とスポーツ飲料を交互に口にしながら、乙彦は他クラス連中のもめている様子をそっと見やった。

「こういう形にでもしなければ、他クラスとの交流はなかなかできないだろう。うちの学校の問題点として、クラス内でのつながりがやたらと濃いのに対して、他クラスとは委員会経由でしか繋がれないというところがある。俺なりにそれは考慮したつもりだ。先生たちも俺の提案をそのまま吞んでくれた」

「そうか」

ただなんとなく……乙彦をからかう気持ちも交えて……ドッジボールを選んだわけではなさそうだった。そこのところ、ひとつ、ころっとほっとした。

「これもいつか、関崎に話しておくべきだと思っていたのだが」

またいつものもって回った口調で、藤沖は続けた。

「クラスという単位ではなく、一年生一丸という形にまずはできないものかと考えている」

「一年生、一丸か」

汗を拭いた。まだ汚れが目立たないジャージが、気持ちよい程度に埃っぽい。

「そうだ。つまりだ。青大附属というのは以前から委員会主導という流れが強かった。委員会だけは一年の集合体だが、委員会に参加していない生徒にとっては全く別の話だ。それぞれ自分のクラスだけで静かに過ごすのが普通だった」

——それはまずいいのか？

藤沖の言いたいことがわからず、乙彦はもう一度じっくり聞くことにした。

「だが、それではまずい」

藤沖は言い切った。まだ揉め事が終わりそうにない女子たちの口論が聞こえてくる。

「だが、そんなもったいないことをしてはならない。三年間が無駄になる」

「無駄？」

「そうだ。いいか関崎。俺たちの三年間はまだ始まったばかりだ。一年だけでも百人以上、三年まで含めると三百人。公立ではどうかかわらんが、三百人のネットワークをそれぞれがこしらえることができたなら、きっと凄いことができるはずだ。ほんの二、三人の仲良し連中で終わってしまうよりもずっと、いろいろなイベントや実験、そんな大袈裟でなくとも人間関係としてもっと深みのある付き合いができるはずなんだ」

だんだん藤沖の熱い語りの理由がつかめてきた。決してその発想は嫌いではない。

「だから、まずは一学期の段階で、一年だけでもクラスという名の枠を取り外したい、そういうわけだ」

「そういうことか」

乙彦は飲み終えたスポーツ飲料をベンチに置いた。ハンカチで額の汗を拭き直した。息は整った。いつでもスタンバイOKだ。

「そういうことなら、俺も喜んで協力しよう」

「お前がいてくれれば、百人力だ」

本当にそう思ってくれていることが、藤沖の口からは紛れもなく伝わってくる。

いろいろ癖のある男ではあるが、こいつを嫌いになることはないだろう。

乙彦は先に立ち上がり、藤沖と、側でひとりぼつねんと座っていた片岡に声をかけた。

「さあ、じゃあウォーミングアップいくぞ！」

いろいろもめていたクラスはどうやら、B組のようだった。それも女子たちだけが固まってあだこうだ言い合っていた。いったい何があったのか気になるころではある。古川あたりなら詳しく状況を教えてくれるかもしれないが、なんだか余計なことをくっつけてくる恐れもあるのでやめておいた。

藤沖がA組代表として自らじゃんけんしに向かった。いわゆる「グットッパーで合った人！」

という形のシンプル組み合わせじゃんけんだ。四人、組代表が何度か「合ったーひと！ひと！ひと！」と繰り返しているところみると、なかなか合わなかったのだろう。

——できればC組は避けたいところだ。

横目で他クラスの自組予選を垣間見て願っていた。やる気のなさげな青大附属でありながら、C組だけはやたらとみな盛り上がっているように見えたからだった。さっき、立村の見舞いに顔を出した連中……天羽・難波・更科もいれば、評議委員長である羽飛もいる。男女混合ではあるが、どうやら轟琴音は負けチームの方にいたようで練習には混じっていなかった。

正直言って、A組のチーム連中とは燃えさかり方が全く異なる。

——あいつらに当たったら、きついかもしれない。

だが負けるために試合をするわけでは決してない。もしもC組チームに当たったとしたらそれはその時、正々堂々ぶつかるしかない。

隣にいつのまにか突っ立っている片岡に、乙彦は話し掛けた。

「お前、結構、身、軽いだろ」

「やせてるって言われる」

何か勘違いした返事が返ってきた。思わずこつんと頭を小突いてやった。嫌がらなかった。

「そんなこと言ってるんじゃない。それよか片岡、お前はできる限りボールに手を出さずに逃げろ。お前が狙われたら俺がフォローに回って全部受けてやるから。とにかくぶつからないことだけ考えて、逃げまくれ」

「逃げるだけ？」

きょとんとした顔で、片岡が乙彦の顔を見上げた。やっぱりどنگり眼は雅弘似だ。詳しく説明する必要もないだろうが、簡単に伝えておくことにした。

「片岡がたぶん俺たちのチーム内で一番身軽だから、最後まで円陣の中で生き残れば絶対勝利が転がりこんでくる。お前の場合、ボールを避けるのはうまいが、受け取って投げるのがいまひとつだ。受け取るのは藤沖もいるから安心して逃げまくれ」

つまり、片岡を生かす形にし、藤沖と乙彦が攻撃に回る、そこに勝機があるとみた。

片岡はよくわけわからなげに頷いていた。英語限定学年二番の、それなりに秀才。だがやっぱりこのぼんやり加減を見ていると、なぜかほっとする。

「よっし！ C組だ！」

藤沖の奴、大喜びで片手を挙げアピールするではないか。つられて他の連中も「おーっ！」と盛り上がる。乙彦からすると勝利の可能性が若干狭まったのだからもっと落ち込んでも止さそうなものだが。しかも、女子たちがやたらとはしゃぎまくっている。

「ねえねえ、南雲くんもいるのよ」

「そうそう、羽飛も混じってるっし！」

ここは古川のはしゃぎ声。

「それにしてもすごいよね。天羽もいるし、これは見物よね」

もしや女子連中は、最初からドッジボールで戦う気などさらさらなくて、ただお気に入りの男

子たちを応援したいだけなのかもしれない。そんなのどうでもいい、いいのだが、やたらと腹のところがごろごろしてくるのは気のせいだろうか。

「相手に不足はないぞ」

藤沖は完全にやる気まんまん、燃えている。

「女子連中はみな、C組の応援に回るだろうが、それは定めだ。諦めろ」

「そういうものなのか？」

「あとは関崎、お前の勝負だ」

またもわけのわからないことを藤沖は口にした。

とにかく、圧倒的にC組の男子が人気者というのだけはよく理解した。

南雲相手というのも、仕方のないことだろう。

しかし、それであっさり負けたいとも思ってはいない。

さあどうするか。

乙彦はまず、観客をぐるりと見渡した。そんなにギャラリーがいるわけでもなくて、せいぜい審判役の先生たちがホイッスルを首に掛け片手を挙げて目立つくらいだ。女子たちの声援がC組寄りだというのもしかたないことだとは思いますが、それでもしかたなくA組陣地に固まっている様子である。そこからまかりまちがってもC組男子の応援……特に南雲あたり……なんぞしないでほしいと思う。

出陣直前、乙彦は古川を手招きした。

「何よ、あんた、最高の試合前になんか用？」

おそらくいとしの羽飛を応援したくてうずうずしているのだろうが、

「一言だけ言っておく」

きっちりと釘を刺す。

「事情は理解しているつもりだ。だが、試合中だけは頼むからA組を応援してやってくれ」

「はあ？」

言われた意味がわからないとばかりに古川は口をぽかんと開けた。

「応援しないとでも思ってるわけ？」

「事情はだから、理解している」

好きな男子を応援したい気持ちはわからないでもないが、しかしだ。

「うちのクラスの連中も頑張っている奴は頑張っているんだ。それを理解してもらいたい」

古川は大きく溜息をついた。欧米人風に肩を竦めてみせた。

「あのさ、関崎。あんた何勘違いしてるか知らんけどね」

いきなり尻をはたく。避けるのが遅かった。逃げ足も早かった。

「応援されないって決め付けるのはどうかと思うよ。ま、私ひとりでうちのクラス女子分応援したげるから、そういじけなさんなって！」

「いじけてなどいないが」

言いかけて立ちすくんだ。古川の奴、いきなり投げキスを二本指で決めたではないか！

チーム全員、まずは整列し、礼をした。

真向かいには先ほど顔を合わせた天羽が、にやにやしなから立っていた。藤沖を先頭にしているのはやはり、評議委員としての立場を慮ったもの。その正面、乙彦の斜め右には古川こずえの想い人、羽飛がいた。乙彦には目もくれず、やたらとガッツポーズの練習をしている。もう勝つつもりでいるのだろうか。

「悪いが、この勝負はもらったからな」

「それはこっちの科白だって、藤沖も本気だなあ」

南雲はどこにいるのかと探すと、意外にも女子たちが並ぶ最後列に立っている。

本当は規律委員として、というよりも、みつわ書店のアルバイト同士として情報交換をしておく必要を感じているのだが、どうも向こうから避けられているような気がする。まあこの合宿中チャンスのひとつかふたつはあるだろう。

「まずはお手並み拝見といくか」

つぶやき声は、天羽だった。乙彦隣でぼけっとしている片岡にやたらと笑いかけていた。同じクラスだったのだろうか。こういう時ふと、自分が外部入学の人間だと感じる。

ホイッスルが鳴った。みな、一目散に自分のポジションについた。乙彦は当然、陣の中で戦う方を取った。女子たちはみな、陣の外からの攻撃組に回した。こうすることにより体力の劣る女子たちを保護する形ともなるわけだ。

——最後まで残るのはおそらく、俺と片岡か。

とことん逃げまくり、そこからチャンスを広げよう。

「厳しい戦いだが、頼んだぞ」

乙彦はもう一度片岡に呼びかけた。素直に膝の屈伸をしていた片岡は、きょとんとした後、「わかった」

すぐに了解の返事をよこした。藤沖が唇を一瞬への字に曲げた。

試合開始。

乙彦の読み通り、陣内に入った男子同士の一騎打ちといった色を帯びてきた。予想できないことではなかったが、完全に女子たちは蚊帳の外、外からも攻撃はできるのだが、あえて乙彦はそれをさせない作戦に出た。ボールを中であしらいつつ、直接攻撃を行い、遠慮なく叩きつぶしていく。このやり方しかない。

C組の面子もどうやら同じ作戦だったようだ。ただ少し違うのは、女子の数が男子よりも若干多いため、どうしても陣内に入れざるを得ない状況にある。早い段階で乙彦と藤沖が手加減したボールでもって女子を討ち取り、いざ、男子のみの対決となる。

「疲れてるか、藤沖」

「いや、大丈夫だ」

見た目通り敏捷性に欠ける藤沖が、すぐに消えるのは時間の問題だろう。乙彦なりに計算はしていた。また予想通り片岡のすばしっこさは見事だった。時折流れてくるボールをあえて外し、

乙彦がフォローしやすいように動く。応援の声がなぜか、片岡に対しては届かないのがもったいないくらいである。

「片岡、ナイスだぞ」

「こんな感じかな」

やはりとろとろした話し方のままだが、結構こいつ、ボール競技では使える奴かもしれない。頭の隅に置いておくことにした。

「やべっ！」

いきなり藤沖が尻餅をついた。足元にボールがどろどろ転がっていく。慌てて拾い乙彦はまず、陣外で待つ女子にアイコンタクトを取った。女子の中でもそれなりに運動能力がよさそうな奴はいる。すぐに気が付いたのか手を伸ばす。

——手を伸ばしたらだめだ！

C組男子連中がすぐに、先読みしてボールフォローに回った。これはまずい。

「藤沖、すぐ投げる、受け取れ！」

囁きかけ同時に藤沖に向かい投げつけた。遠慮なく、C組男子のふくらはぎをかするよう。バウンドさせて、しかもそれが藤沖の立ち位置に間に合うように。

「ちくしょう！」

誰に当てたのか、声で気が付いた。どうやら天羽のようだった。大袈裟に「ちくしょー！」と両手を挙げて陣の外へと出て行った。周りの女子たちが落胆している様子も伺えた。

「関崎、取ったぞ！」

乙彦の読み勝ちだった。わずか二人のみの生き残り。乙彦は時折片岡に、

「逃げろよ、とことん逃げろよ！」

囁きかけながらボールの先をとことん追いつづけた。現在C組は三人生き残っている。羽飛と南雲と、またひとり。これをつぶすのは、結構骨である。

と、その時。

「関崎くん、その調子！」

聞き覚えのある声が飛んだ。

耳に刺さった。

あやうく足がつんのめりそうになるのを堪えた。足元をかすめそうなボールが、片岡によってかろうじて拾われた。指示を出す間もなく片岡は真正面から南雲を狙った。

「片岡やめろ！」

止める間もなかった。悲鳴がすべてのクラス女子から湧いた。

そのボールを真正面から受け止めようとした南雲が思わず両手からこぼした。慌てて拾う羽飛との間に会話は全くなかった。南雲は両手を合わせてC組連中の集まる場所に一礼すると、笑顔で素早く陣外にスタンバイした。

「片岡、お前本気で狙ったな」

「うん」

短く答え、片岡はまたすばしこくちょろちょろ動き回りはじめた。本来ならばこのガッツ溢れるプレーにもう少し、称賛があってもいいと思うのだが一切ない。疑問を覚える間もなく乙彦はあとふたり、どうやって討ち取るかを素早く検討した。その間もなくまた片岡に飛んできたボールを、乙彦がフォローする間もなく拾い上げ、もうひとりを調理した。

——片岡の奴、こいつ、本当に、本気かもしれない。

意外なところで本気を出す奴とめぐり合えた。不意に湧き出す腹の底からの快感。

「よし、片岡」

乙彦はもう一度、耳に囁きかけた。

「もう俺は何も指示しない。お前、あいつを討ち取れ。正々堂々とやっちまえ」

「うん、わかった」

一瞬だけぼかんとした後、片岡は大きく頷いた。

と、また同じ声が飛んだ。

今度は誰の声か、ぴんときた。

「関崎くん！ やっちゃえやっちゃえ！」

ボールを保持しているのは天羽だ。天羽は同じ陣外にいるめがね男の難波にパスしようとし、露骨に乙彦狙いで勝負にきた。こういう場合は受けるのが乙彦だが、逃げなくなった片岡がすぐに奪い取った。乙彦があっけに取られている中、片岡はまた真正面から羽飛を狙おうとしていた。運良く、気付くのが遅れたのもあってか、羽飛がなぜか余所見をしている。ほんの一瞬の間だった。尻をもろ狙う格好で片岡は一投、同時に横座りした羽飛。

「あいつってえー、くそおー、まじでこれ痛えよ、ほんと」

両手をぶら下げて、あっけに取られている片岡と、転がったボールを慌てて拾いにいく藤沖。勝負あり、みな拍手喝采と思いきやどうも消化不良のざわめきのみ。その後つけたしの拍手とホイッスルが鳴り響いた。

強敵C組を下す勝利だった。

決勝進出。

——といっても、結局勝ち抜き戦だな。

ホイッスルに従い、みな一列に並んで握手を交わしあった後、乙彦は不意に呼びかけられた。たまたま今度は顔を合わせたのが羽飛だった。

「関崎、お前運がいいよなあ」

「運だと？」

負け惜しみだろうか。むっときて顔を見上げるが羽飛の表情にそのようなあくはない。

「さっき、美里に応援されてただろ？」

頭の回転がずっと止まり、かたまった。気付いていないのか羽飛は、さっき握手した手をぶらぶらさせて白目を出してみせた。

「前から言われてるんだぞ。美里に応援したら、そいつの居るクラスは大抵勝つんだぞ。俺が中

学の頃は美里がずっとクラスに居たから、結構勝負事は強かったんだがなあ。ちくしょう、あいつ俺を裏切りやがったぞ、あとでなんかおごらせてやらねばなあ」

「恐喝はよくない」

乙彦は首を振った。

「たとえ一円でも、金をせびるのはよくないことだ」

「ああ？」

あきれ顔で羽飛は乙彦の眼を見つめた。

「ジョークだってのに、なんでわかんねえの？」

「悪かった、気付かなかった」

「あのなあ関崎」

何かを言いかけ、その拍子に羽飛の目が厳しく光ったのを見た。

「まあ、がんばれや、最強軍団、C組を倒したんだ。次は絶対、勝てよ！」

肩をぼんぼん叩かれた後、同じくC組集団とからまりながら羽飛は自分のクラス席に戻っていた。

——なんで清坂が応援してくれたんだ？

もちろん、その声が清坂美里だということは気付いていた。

応援が嬉しくないわけはなかった。しかし、どこか足がもつれたのも事実。羽飛がのたまうように、「勝利の女神」の声には聞こえなかった。羽飛も幼なじみを鼻屑目で見るのはいいが、少し勘違いしているのではないだろうか。

もっとも、A組女子の応援もあまり目立たないものだったので、唯一の名指しコールに高ぶりを覚えたのも事実ではあるが。乙彦は振り返り、B組女子が集まって騒いでいる一角を探した。清坂美里の姿を探そうとした。やはりお礼をいう必要はあるだろう。また、あれだけ目立つ女子のことだ、おそらく次の試合では顔を合わせることになるだろう。少しもめていたようだが。

乙彦が目に向けた先に、清坂美里はいた。

ひとり、安座していた。

なぜか、他の女子たちから離れていた。側にやってきて羽飛がなにやらちょっかいをかけ、叩く真似をしている。しかしその集まりにB組の女子はひとりも混じっていなかった。白い鉢巻を外し、ふくれっつらをして、

「関係ないでしょ！ どうせ私、次は出られないんだから！」

ポロシャツの裾をたらんと出したまま、また膝を抱えて羽飛を見上げ、何かを訴えていた。

乙彦がそれ以上かかわる隙はなさそうだった。次に対戦するB組チームの様子を観察すべく視線を移したとたん、何かがぴんと鳴った。

——あの女子が、もしかして静内という人か。

ストレートの長い髪の毛を耳より下にひとつ結わえ、前髪をきちんと横分けし、他の女子たちと微笑みながら語らっている女子がいた。顔は覚えていたが、さほどインパクトのあった女子で

はなかった。オリエンテーションの時から何度も教室を同じくしていたはずなのだが記憶にあまり残らないというのは、そういうことなのだろう。

しかし、半そでシャツ姿で、さらさらそよぐような笑顔を振りまいているその女子。

他のB組女子たちがほっとするような顔でもって語りかけている。

清坂美里を無視する格好に、どうしてもなってしまう。

二分割状態。違和感が第三者の乙彦からもありありと浮かんた。

——清坂がやたらとこだわっている女子が、彼女か。

見た目、とてもだがそんな気の強そうな、せっかくの親切をつき返す、そんな女子には見えなかった。ただ、清坂のかもしれない空気よりもストレートヘアの女子を取り巻く穏やかな雰囲気には少しだけ興味を持てた。

——確か、同じ外部生のはずだが。

「あの女子の名前、知っているか」

藤沖を捕まえ、乙彦は小声で彼女の名を尋ねた。

「ああ、清坂のライバルだな。なかなか話のわかる賢い女子だ」

なぜ知りたいかは言う必要もなかった。藤沖はすぐにその名を口にした。

「静内、菜種」

——しずない、なたね。

一度聞けば、決して乙彦は忘れない。

「悪い」

一言礼を伝え、乙彦はそれ以上の話を断ち切った。

B組とのドッジボール学年王座決定戦は、あっさりと決着が付いた。

なんのことはない、最初からB組側がシャッポを脱いでいただけである。

「お前ら本気で来るんだもん、とつてもだけど俺たち急造チームには無理ってことよ」

たいして汗もかいていない顔して、東堂が乙彦に話し掛けた。ついでにタオルも提供してくれた。まずはクールダウン、水筒の水を分けてもらう。ベンチに腰掛けた。

「なんで本気で来なかった」

正直なところ、乙彦としてはかなり不完全燃焼の試合だった。

仮にも決勝なのだ。

しかもみな、それなりにクラス内の壮絶な生き残りをかけてレギュラーの座を勝ち取ったはずである。なぜ、気合を入れようとししないのだろう。結局、本気で勝負の気持ちが最後まで緩まなかった乙彦たちA組が、たった五分ですべて片付けてしまったというわけだ。

あまりぐちぐち言いたくないが、同じ規律委員を務める東堂には文句のひとつでもつけたくなる。

「第一、なんで女子ばかりを陣内に入れて、男子連中が外に回ったんだ。あれだったらどのクラスと当たっても勝ち目がないだろう」

「ああ、それなあ。それ、清坂も文句言ってたなあ」

脳天気には東堂は返す。どうもこいつ、体育の授業を通して観察してみても、今ひとつやる気が感じられない。やたらと輪の外から掛け声だけはかけていたが、本来ならばもっと身体を動かすなり、ボールをもっと気迫もってぶついたりすべきではないだろうか。そのあたりの判断も、理解しかねる。

乙彦がさらに問い詰めようとするのを嫌ってか、東堂はのんびりと言い訳を続けた。

「俺たちD組とやったろ。その時は男子が中に入ってやったんだけどな。ただ、どうしても女子たちに不満が溜まっちゃったみたいなんだ」

「勝てば不満も消えるはずだが」

「いや、たまたまチームに残った女子連中はもっとおてんばしたかったみたいなんだが、やはり思いと実力とは伴わなくてな。本来なら俺たち男子メインで組み立てるべきところだったんだが、やはりなあ」

よくわからない。A組ドッジボールキャプテン……と、いつのまにか呼ばれていた……の乙彦としては、なにがなんでも強い勝ち方をするためには、ある程度の情を捨てざるをえないと考えていた。もちろん、女子たちのすべてが運動音痴なわけではない。能力のある奴だけを選び、その上で面子を調える。それがベストなのではないだろうかと思うのだ。

男子と女子、体力腕力に関しては、どんなに男女同権を訴えたところで勝ち目はないだろう。

「いやいや、みんなどうせ、ここは楽しく盛り上がるためのものであって、真剣勝負じゃあないってことだな。俺としては最初からこの勝負、捨ててたし」

「それはちょっと違うんじゃないか」

何度も繰り返す乙彦だが、のんびんたらしと話をはぐらかす東堂からは結局、本気の言葉を受け取ることができなかった。

「うちのクラスは勝つことよかもっと、最優先課題があるんだよ」

大きく溜息をつきながら、東堂は視線をB組女子たちの群れに留めた。

「先は長いぜ。ほんとにな」

——何が長いんだ。

とはいうものの、乙彦なりにB組女子たちの小競り合いがしちめんどうくさいものだということとは理解できた。

なんだか、清坂美里からも聞かされている。

古川こずえからも、一部藤沖からも。

規律委員の東堂としても、いろいろ面倒くさいこともあるのだろう。

だが基本として、女子たちのトラブルには首を突っ込むべきではないと乙彦は考える。

帰りもまた、十五分くらい歩いて宿に戻った。

全く関心のなさそうだったA組女子たちも、やはり優勝というのは嬉しいのだろう。やたらと上機嫌にはしゃいでいた。整列して戻るわけではないので、みなそれぞれ気の合う連中と集って歩いている。乙彦は相変わらず藤沖と肩を並べ、

「さて、到着したらまず、昼飯だ」

「何を食うんだろう」

「ま、到着してのお楽しみってとこだ」

どうも藤沖は昼食の内容もすでにお見通しらしい。

「非常に、まずいとか、言わないだろうな」

「ヒントを与えるか」

もったいぶって藤沖は両腕を組んだ。

「まず、俺たちは先に、シャワーを浴びるか風呂に入るかのどちらかをせねばならん」

「風呂か」

「一風呂浴びてから。まあこれだけで大体は見当がつくだろう」

当然のごとく藤沖は、乙彦が正解を出すのを待っている様子だった。

——風呂と昼食とどう繋がるんだ？

答えられるのが当然、とでも言いたげな目線に乙彦も意地になる。急いで自分の知る限り、ありとあらゆる仮定を導き出す。

「ものすごく高級な料理を食いに行くのか？」

まずはひとつ、試してみることにした。さんざん暴れた後、風呂に入るもしくはシャワーを浴びるのは当然だが、まだ太陽が南中高度に達していない午前中、時間帯としても少しそれは違和感がある。第一風呂に浸かったら最後、もう動きたくなくなるではないか。

それでもなお、風呂に入る理由となると、

「それなりにまっとうな格好をして出かける義務があるということだな」

「鋭い。その通りだ」

自分なりの推理を提示してみた結果、藤沖は満足したらしい。それ以上の問いを投げかけることなく、自分ひとりでまたぺらぺら喋り出した。

「つまりだな、今回の昼飯は単なる腹を満たすだけのものではない。校訓『紳士たれ、淑女たれ』を実体験で感じるためのイベントなんだ」

「実体験？」

「そうだ。関崎、お前は今まで、一流レストランなどで食事をしたことがあるか。ディナーコースなどを食べたことはあるか？」

「ない」

ディナーコースに続く動詞が「食った」というのは何か違うと思う。そのくらいは乙彦も認識していた。が、それだけだ。

「これから俺たちが連れて行かれるのは、そういうところらしい」

「味は悪くないんだろうな」

結局そのところに関心が行く。あと、

「和食の場合、おかわりはできるのか？」

まさか茶碗一杯で我慢しろなんて無碍なことは言うまい。藤沖は声を立てて笑った。

「それはわからん。そういうことができるような空間かどうか、俺も知らん」

——妙に料理ばかりちょこちょこ並んでいて、実は全く食った気がしないなんてとこじゃないだろうな。

なんだか腹の虫が猛々しく泣き喚きはじめたような気がした。胃の奥がきゅうとしぼむ。

「お前ら、部屋でごろつく前に、十分以内で風呂に入れ！ さっさと身体を洗ったら即外に出ろ。もちろん、すっぽんぽんでなく制服を着るんだぞ！」

一年A組の面子が全員揃い、宿の玄関で全員整列した。すぐに列はほぐれ、それぞれのクラスごとに担任が集め、咳払いをしつつ指示を出した。

麻生先生は生徒からつかまれる前に素早く落ちをつけた。

当然他の男子たちから押し殺したような笑いが起こった。

「それと、頭もちゃんと撫で付けろ。靴下は履き替えろ。まかりまちがってもだな、さっき履いてきたものをそのまま使いまわすのだけはやめろよ」

ここいらで少し、「えー？」と不満の声があがった。もちろん、男子である。

「これからお前らが食いに行く場所は、普段なら決して足を運ぶことができないような店だということは、お前らも理解しているな」

誰も「わかりません」とは言わない。どうやら知らなかったのは乙彦だけらしかった。しゃくだがしかたない。乙彦は挙手して仔細の説明を求めることにした。外部生、何も知らないゆえの特権だ。

「どうした関崎」

「先生、もう少しその店について説明してください。全く知らないまま行くのはどうも俺だけです」

「ああ、悪かった関崎」

先生も乙彦の立場についてはかなり気を遣ってくれている。それが鬱陶しく感じることもあるが、今の場合はそれがプラスに働く。

「中学でも経験のある奴は多いだろうが、今回もまた、高級料理屋なりレストランなりで料理を頂くことになる。が、中学の時と異なるのは、全員が一軒の店でずらりと並んでいただくのではない」

いきなりざわめきが起こった。A組の生徒たちの驚きももちろんそうだが、隣でまた固まっているB組女子たちからいさかいの声があがったからでもある。麻生先生は全く気にすることなく説明を続けた。

「集団で食うのは夕方、この宿で十分だ。今回お前らが経験するのはだ、先ほどのドッジボール大会の決勝に勝ち残った二チームが同じ店を選ぶことになる。そして前の試合で戦い負けたもの同士がまた同じところで飯を食う。残りの、つまりクラス決勝で負けちゃったチームだな。それぞれがじゃんけんで二組に分かれて行きたいところを選ぶ」

「先生、選ぶということは、すでに店が決まっているということですか？」

意味がわからないわけではないが、まず普通は考えられない話だ。

藤沖が助け舟を出してくれた。

「関崎、店は最初から四軒と決まっていたんだ」

「だが俺は聞いてなかったぞ。ドッジボール大会の成績が即、昼飯の順番に繋がるとは」

他の生徒たちもそのあたりは気付いてなかったらしい。藤沖は首を振り、麻生先生に確認するかのように質問した。

「つまり、今回の目的は、ごほうびがあることを生徒たちに隠した上で、どのくらい全力を尽くすかを見る、ということでしょうか」

「まいったなあ、そうだな、その通りだ」

他クラスたちのざわめきが収斂されていくかのよう。だんだん静まり返るのが伝わってくる。歩いた後の汗が蒸発しているかのようで少し気持ち悪かった。乙彦は藤沖と麻生先生とのやり取りを聞いていた。

「僕も評議委員会でそのような話はちらっと聞いてましたが、決定ではないということであえて誰にも話さずにきました。言うのもなんですが、クラスメートに嘘をついていたようで、あまりよい気分ではありません」

「そうだな、もっともだ」

「先生、このあたりの事情を説明していただけませんか。筋が通ってれば僕たちもそれなりに納得します」

——なんだか出来芝居のような気がする。

ふたりのやり取りを粒さに見つめつつ、乙彦はなんとなく胡散臭さを感じていた。藤沖に問題があるとは思っていない。あいつは隠し事ができない性格だ。乙彦が頼まなくても勝手にペラペ

ラ本心を話してくれるようなおめでたい奴だ。しかしその一方で、不必要な騒ぎを乙彦が起こさないようにうまく立ち回ってくれているところもある。余計なこと、と思うこともあるけれども、あえて様子を伺うことによって自分の立場が優位となるのもまた事実だった。以前の乙彦ならば割り込んで、どんどん自分の言い分を押し切ることができたけれども、「弟分」扱いされている今はそうもいかない。

しかし、腹が鳴る。

——説教はどうでもいいから、まず食いたいと思わないのか？

乙彦はそっと振り返った。一部で不満そうなふくれっつらをした奴らもいないわけではないが、みな素直に返事を待っているのが、一番の驚きだった。これが青大附属だったのだと、改めて思った。

他の先生たちと目配せした後、麻生先生は全員に向かい手を伸ばし、頭を均すようにぺたぺた空を叩いた。

「ドッジボール大会が行われると聞いた段階で、本気で勝負しようと思った奴はどのくらいいたか、まず聞きたい。それなりにクラス内の予選も行い、人数の少ない英語科にあわせるということであえてレギュラーを絞り込む。そしてクラス対抗の意識をもって戦う。本来ならば、ここで、『優勝チームには昼食の店を一番最初に選ぶ権限を与える』としておけば、お前らは燃えただろう。それは承知している」

言葉を切った。女子たちがひそひそ話をしはじめた。止めはしないで麻生先生はゆっくり、言葉を選びながら続けた。

「しかしあえて今回、先生たちは『ごほうび』を隠して行った。これには十分意味がある。つまりひとつのことに對して、見返りないのに本気で取り組めるかどうか、まずそれを見たかったわけだ。非常に歯がゆかったが、その結果は順位という形ではっきりした」

「でもそれはだまし討ちではないですか」

ちっとも刺のない口調で藤沖はとつとつと尋ねた。それに呼応して麻生先生も冷静に答える。「そうだ。もちろんそれは申し訳ないと思っている。このような『だまし討ち』は今回限りにしたい。だが同時に、空腹のところすまないがひとつだけ頭の隅においてほしい」

真面目な口調が相変わらず似合わない汗まみれの額。

口のゆがみがなぜか感じられず、まっすぐ聞こえる麻生先生の声。

「たとえ他人のくれる褒美がなくとも、自分自身の誇りを持って真剣に打ち込むことのできる人間に育ててほしい。おそらくこの中には、クラス予選で敗退したけれども真剣にぶつかった生徒だっているだろう。努力が認められなかった生徒だっているだろう。結果最優先というのはそういう生徒たちの努力を取りこぼすことになる。しかし、あえて今回はきっちりと結果を出したチームと、出していないチームそれぞれの褒美に差をつけさせてもらう」

初めて「うそー!」「ふざけないでよ!」「ずるい!」と女子中心に叫び声が上がった。他クラスの先生たちがしかりつけているもののやむ気配はない。全く麻生先生は動じなかった。

「今回は優勝、準優勝、それぞれ一チームずつが行きたい店を与えられた四軒の店から選んでも

らう形となる。そしてランチの内容は優勝チームの方が一ランク高いものになる。それは純然たる差だがあえてそれを受け入れてほしい。なお、料理店そのものはどこも美味だ。それは心配しないでほしい。ここで学んでほしいのは、『勝利者はたくさんある中から自分のほしいものを、選べる』この一点だ。いいか、わかったか」

「わかりません！」

突如、異議を唱える声が高らかに挙がった。

その声の先を探した。

B組だった。

手を挙げたままその者は、ジャージ姿のまま真っ直ぐ麻生先生の元に近づいてきた。

「美里、何めだってんのよ。早く食べるほうが先でしょうに」

古川こずえのあきれ顔を重ねながら、乙彦は清坂美里の後姿をぼんやりと眺めていた。何か面倒なことになりそうな予感がした。

「先生、今回みんなが怒っているのは、ごほうびの内容じゃないんです。最初からドッジボール大会を単なる親睦の機会として考えていた人たちの足をすくったってことなんです」

「だからそれは説明したろう。その褒美なしでどこまで本気に」

言いかけた麻生先生を清坂美里は遮った。

「違います。もちろん先生たちの言いたいことはわかります。でも、クラスの中でそれぞれの価値観が違った場合、どんなに努力してもその人たちは高級料理食べられないわけですよ！ そうしたら、努力している人たちがいたとしても、その人たちは諦めなくちゃいけないってことですよね」

「そうだな、そういうことになる」

意外にも麻生先生は否定しなかった。

「それに、最初から参加できなかった人はどうするんですか。その人たちは食事できないんですか」

「そういうことになるな。不戦敗だ」

——立村は連れていけないわけか。

やはり元彼女、それなりに気遣いをしているのだろう。

清坂美里の舌鋒、さらに激しさを増した。

「先生たちは最初から、生徒たちとの間に差を広げるようなことを考えていたということですね。青大附属と一緒に過ごす人たちが、最初からこんなに差をつけられるなんて何か変じゃないですか。たかがお昼一食かもしれませんが、そのことによって無意識のうちに差別されたと思って腹を立てる人だっているはずですよ」

「あの、なあ」

麻生先生は一言で黙らせた。

「腹を立てたり、むかついたり、怒ってもらうために、俺たち教師はこのドッジボール大会を計

画したんだ。もう一度言う。『勝利者は、選択肢がたくさん得られる』この真理だけだ」

全く理解できないという無然たる表情で、清坂美里は突っ立っていた。

すばやくB組の女性担任が清坂の肩を抱くようなそぶりをしたが、すぐに清坂は振り払った。「みんな平等に扱うって先生言ったじゃないですか！ 最初からそんな差別をしいんですか！」

まだ文句を言いたそうにむくれていた。やがて無理やり腕を曳かれ、清坂はしぶしぶB組の女子集団に戻されていった。

——勝利者は、選択肢をたくさん得られる。

風呂場に向かう準備をしながら乙彦はもう一度その言葉をかみ締めた。

「恐ろしい学校だな」

乙彦の代弁を藤沖がかわりに隣でしてくれた。

「麻生先生はとっぴじめから、努力と根性によって扱いに差が出てくるということを伝えたかったらしい。まあ俺からしたら、棚からぼたもちだが。風呂からあがったらまず、選択肢の料理店を選ぶとしよう。できるだけ腹持ちいいのを選びよキャプテン殿」

「しかし、それで他の奴らが納得したとは思えないが」

清坂美里の罵倒が耳にまだ残っていた。そのことを伝えはしなかった。

「そうだな。明らかなる差別だからな」

藤沖は同意しつつ、乙彦を風呂場に入るようタオルを投げかけた。

「だが、先生の意見に同意したい気持ちもある」

「なぜに」

乙彦の問いに藤沖はにやりと笑っただけだった。

「本当に、俺でいいのか？」

藤沖は麻生先生と顔を合わせ頷きあい、乙彦と他の連中に言い放った。

「いいか、これから決定権は、ドッジボールキャプテンだった関崎に渡る。関崎の判断には百パーセント従うこと。これは、今回限りの約束だが、いいか、守れよ！」

麻生先生も納得した風に、一枚のコピー用紙を手渡した。

「まずは関崎、お前が仕切れ。好きなように」

——本当にいいのか、だったらやらせてもらおうか。

まずは、優勝チームの特権、昼食の店選びだ。さてなににしよう。

乙彦が最初に選んだのは、中華料理の店だった。

「えー、なんでそんな脂っこい料理食べなくちゃなんないのよ！」

やはり予想通りの反発が返ってきたのは納得だったけれども、すべて乙彦なりの考えがあつてのことだった。説明しないと自分でも落ち着かない。一刻も早く食べものにありつきたい胃袋をなだめながら、乙彦は優勝チーム、準優勝チームあわせて二十人のメンバーに向かって訴えた。

「今回、和食、洋食、中華、ラーメンという種類の中からどれかひとつ選べということだったんだけど、やっぱりみんなで輪になって食えるもんの方がいいと思ったんだ。その方が公平だし、値段の高い安い関係なく食えるし、腹もちもいい」

乙彦の言葉によくわからないような反応を返す連中。やはり伝わりづらいのだろうか。なんだか落ち込みそうになるのは、空腹の限界に達していたからだろう。もう十二時半を回りただでさえエネルギーを消耗したばかりの乙彦には、説明すらしんどかった。

「一応、優勝チームが一番高級な料理を選べるらしいと聞いてるけど、そんなの俺は味音痴だしわからない。そんなことに拘るよりも俺としては、せっかくこうやって同じ場所で戦えた奴らと、話をたくさんしてみたいと、思ったわけだ。できればみなごたまぜにしてだ」

「ほう、ごたまぜにな」

おもしろそうに合いの手を入れる麻生先生。どうやら麻生先生が今回は先導してくれるらしい。もちろん食事と一緒にするらしい。あいかわらず脂ぎった顔の麻生先生のため、同じ油っぽい中華料理を選んだわけでは、決してない。先生に対しては礼儀正しく答えるしかないので、乙彦は「はい」と一言入れて、また他の連中に向かった。

「正直、青大附属にきて一ヶ月経つけど、まだ俺には何がなんだかわからないんだ。第一、合宿でいきなり、みんなの昼飯を選べとか言われるなんて、想像もしてなかった。しかも勝った奴が優先して選べるなんて、なんか凄すぎる。けど、やはり、直接話をして教えてもらったりなんなりした方がどうやら覚え、いいみたいなんで、この機会を逃したくないというのもあってだ」

吹きだすのは女子たち。つい熱くなって語ってしまう。にやついているのは藤沖。きょとんとした顔して見上げているのは片岡だ。この中に古川こずえがいないのは、スケベネタを投げかけられないだけかもしれませんが、少々刺激がなさすぎて寂しくもある。

「ということで、料理のランクについてはちんぷんかんぷんなんで、とにかく腹持ちのよさそうならラーメン食って、餃子食ってって感じで」

中華料理といえば餃子、春巻き、ラーメン、麻婆豆腐くらいしかイメージが湧かない乙彦だが、いわゆる「大皿料理」というものが存在することは知っている。大きな皿にたっぷりと料理を盛り付け、ぐるぐる中のテーブルを回しながら、みな好きに小皿へとよそっていく。それさえあればあとはなんとかなるだろう、そんな感じでもあった。

「というわけで、今回はそういう理由から、中華料理を選びました。以上」

まばらな拍手を受け止めつつ、藤沖にまた一声かけられた。

「俺だったらさっさと多数決で決めたがな」

「それも考えた」

一番楽なのは全員から「和食がいい奴手挙げて！洋食がいい奴手挙げて！」と挙手をさせて数える方法だろう。極めて民主主義なやり方だ。しかし、これだとおそらく意見がまとまらないだろうし、全員が満足することは不可能だろう。いや、何よりも。

麻生先生が「さあ、決まったところで先に行くぞ、行くぞ」と全員を立つよう促した。おそらく一番腹が減っているのは麻生先生だろう。

乙彦も立ち上がり、藤沖の問いに歩きながら答えた。靴を履き、後ろにくっついている片岡にも聞こえるように。

「同じ部屋でだ。みな顔を突き合わせてだ。よくわからんが値段のランク差がはっきりしたものを除き見しながら食うのは、なんか嫌だったってだけだ」

「なるほど」

大きく頷いた藤沖。

「そうだな。俺たちは優勝チームだから、褒めてつかわそうとばかりに一番金のかかる料理を食っていてもいいが、準優勝チームだっているわけだしな」

「そうだ。もちろんそれは決まりなんだから当然だとは思うんだが同じ部屋でそういうのはなかなかしんどいと思う」

「だからか、そんなのがわからないような大皿料理の中華を選んだのは」

「そうだ。洋食や和食のコース料理ってのがどんなもんだか俺は知らんが」

一皿ずつ用意されるというのは知っている。が、それだけだ。

「本当にそれだけか？」

含みを持った声で藤沖が尋ねた。わけありの様子、少々気になる。

「それだけだが」

「それならいい」

いったい何を言いたかったのだろう？ あまり細かいことを考えず乙彦は片岡に声を掛けた。

「お前、何を食いたかった？」

「ラーメン」

いきなり何を言い出すのか、こいつもよくわからない男だ。あいかわらずきよんとした顔、特に女子たちの前では一言も発することがないのだが、さっきからなにやら乙彦に言いたいこと

があるらしく、一生懸命口を動かしている。

「だって、あそこのラーメン、とんこつで、ものすごく、おいしい」

「にんにく臭くなりそうだな」

片岡がさしているのは、四種類の店のうち、一番価格的に安く見えるラーメン屋のことだった。かなり意外である。乙彦も片岡とは短い付き合いながら、こいつが相当ないいとこのぼんぼんであることを知っている。それでいてなぜ、いきなり庶民の味方、ラーメンなのか。片岡は頷きながら続けた。

「この前、桂さんに、すごく美味しいラーメン屋があるから食えって言われて、それで連れてってもらったんだ。ここ。店、汚いけど、美味しいよ」

——店が汚かったら女子は近づかないだろう。

「ほう、そうか。そんなにうまいのか？」

興味を持ったらしい藤沖が割って入ってくる。片岡も戸惑いながら小声で返事をする。

「ぎょうざも手のひらくらいあって、物凄く大きい」

思わず乙彦も片手を広げて覗き込んでみた。

「ほんとうか？」

「ほんとだよ」

全く嘘のない目で、片岡も両手を広げて見せた。

しばらく空腹を紛らわすためにしゃべりつづけていると、やがていかにも中華料理店といった感じの真っ赤な建物に着き当たった。金銀きらきらまぶしい門構えの大型店だった。麻生先生が素早く入って行って二、三話をした後、全員を手招きした。

やはり優勝チームが先頭で入るべきだろう。乙彦はまずA組チームを招きよせて中に入れた。次に東堂が率いるB組チームに続くよう指示をした。

「なんか豪勢だな」

すれ違い際に東堂もこっけいに顔を膨らませ、囁いた。

「東堂悪い、全員、交じり合って座る形にしてほしい」

「はあ？」

「同じクラス同士で固まりあうんじゃなくて、だ」

「オーライ」

短い会話の中で、B組チームにも乙彦の意を伝えた。

最後に入った乙彦を、麻生先生が待っていた。

「さて、どんな風に席につかせようか。関崎よ」

「A組B組、男女ばらばらで座らせます」

「ほうほう」

「今回の目的は、他クラスとの交流だからです」

「というよりも、お前の顔を売るためかな」

少々不本意な言葉。思わず顔を覗き込むと麻生先生は乙彦の肩を数回叩いた。

「お前にだけ言っておこうか。この豪勢なランチ、単なるごほうびと違うぞ」

「どういうことですか？」

言われた意味がわからなくなり、硬直した。満足げに麻生先生も両腕を組みながら、

「つまり、これも、授業の一環ということだ。じきにわかる」

——全くわからねえよ。

授業であろうがなかろうが、とにかく乙彦としては、一刻も早く、飯を食いたい。

通された部屋は、だいたい六畳くらいの、やたらと朱色があちらこちらに塗りたくられている派手な装飾品が並んでいるところだった。犬なのかそれとも虎なのか龍なのかよくわからない生物が足元に転がっていたり、かと思ったらどでかい壺があちらこちらに置かれていたり、足元のじゅうたんがやたらとやわらかくて思わずつんのめりそうになったり。

高級店というところに足を踏み入れたのは、乙彦の人生において、おそらく、初めてだ。

予想していた通り、大きな丸テーブルの上にぐるぐる回る台が設置されていた。これは親戚の結婚式会場で見かけたことがある。まだ何も載っていなかった。注文しないと並ばないのだろう。さらに腹の虫が鳴いた。

「さあ、どうする、関崎」

全員、まだ誰も席についていなかった。

乙彦が入室するのをいまかいまかとばかりに待ち受けていたようだった。

東堂も乙彦の伝言を女子たちに伝えたのかどうかわからない。手持ちぶたさできょろきょろしていた。藤沖が乙彦の次の言動を楽しみにしている様子で囁く。

「じゃあ、先にB組の人たち、先に席に着いてください、で、ひとりぶんの席を空ける形で、座ってください。その間に、A組が座ります」

つい、ここで丁寧語を振りかけてしまうのは、場の効果か。声が上ずってしまった。乙彦を覗きみてB組の連中が笑った。自分でもなぜ、こんなに甲高い声だったのかわからない。

「じゃあ、A組、着席」

つい出た号令みたいな口調。大爆笑。赤面が止められない。隣で麻生先生も笑っている。

せっかく自分に藤沖や麻生先生、A組、B組の連中が任せてくれたことなのだから、きっちりやらねばと肩に力が入りすぎている。自覚もしている。

でも、やはり、先頭に立って指揮を取るたびに思い出す、一年前のしゃきとした張りのある気持ち。懐かしいのではなく、恋しかった。一ヶ月ですっかり「弟分」かつ、後追いの外部生としていじけた気持ちが、なぜかこの一時間ちょっとですうっと消えた。

なぜ、藤沖が評議委員にも関わらず、自分に手綱を渡してくれたのか。

なぜ、麻生先生が乙彦のやりたいようにやらせてくれているのか。

勘繰りすぎると答えもそれなりに出てくるようだが、そんなのは正直どうでもいい。

リーダーとして、自分の足で立った瞬間、地の土からじわりとしみとおってくる感触が、乙彦に久々甦って来ていた。スタミナが、腹ペこのままでもしっかり蓄えられている。

先に他の連中を座らせるつもりだった。それがリーダーの勤めだと思っていた。
そして自分は、適当に空いているところに座る。そうするつもりでいた。
目の前で、ひとりの女子と目が合うまでは。

——静内、菜種。

髪の毛をあっさりと一本にまとめ、後ろに流しているだけの女子だった。
現在評議委員で、清坂美里をあっさり破って今B組の女王さまだとも。
いや、それはどこまで本当なのかわからない。

しかし、はっきりしているのは、乙彦が今まで何度も顔を見かけていたにもかかわらず静内菜種のことを、覚えていなかったという事実である。

——なぜなんだ？

顔と名前は一度会えばきっちり覚える自慢の記憶力。それなのに。

乙彦は一步前に踏み出した。他のA組連中が戸惑った風に動こうとしない。藤沖も、片岡も何も言わなかった。ただ静内の近くで話をしていた女子たちがふと乙彦の顔を見上げた。明らかに戸惑っていた。

——話してみればわかるだろう。

黙って静内菜種の左隣に席を取った。静かに横を向いた静内にはまだ声をかけず、乙彦は後ろで立ちすくんでいるA組連中を手で促した。

きょとん、でもなく、びっくりでもない、ただ感情静かに乙彦の方を向く静内。

静内菜種の顔を乙彦は遠慮せずにまじまじと見つめた。

「あの、外部生の補習には来ていたか」

切り出した言葉も、しゃれてない。口にした瞬間の後悔をすぐに静内は打ち消してくれた。

「来ていたけど」

語尾がやわらかく震えていた。

「そうか、そうなんだ」

乙彦の記憶に残っていないその顔は、うりざね型のどこか懐かしい博多人形の面持ちをたたえていた。白いのか、それとも目が細いだけなのか。美人ともブスとも言いがたい。ただ特長のない顔立ちだった。だからといって、覚えていないわけがない。

——なぜ、覚えてないんだ？

頭の中を何度もぐるぐる巡る疑問を打ち消すため、乙彦はじっと静内の瞳を見据えた。店員がコップの水とウーロン茶のポットを並べていく。注文は麻生先生が担当してくれるらしい。まだメニューは来なかった。

「俺も外部生なんだ」

「私も」

改めて自己紹介するのも不自然だった。わけのわからぬ動悸が続く。乙彦が次に口走ったのは決して意識した言葉ではなかった。

「中学、水鳥なんだ」

「私、棚氷中学よ」

——隣の学区なんだ。

水鳥中学と棚氷中学とは、密接した学区の学校だった。

声にもただ女子というだけの、やわらかなだけの響き。

記憶に残せないありふれた姿と声と顔のはずなのに。

——なんで俺、覚えてなかったんだろう？

静内菜種はその目立たぬ顔立ちと口元で、乙彦に向かい穏やかに微笑んだ。

周囲が少しざわめき始めている。乙彦と静内との間に流れる空気を感じた女子たちだろうか。なんだかかあとなるのは頬だけだった。乙彦は立ち上がり、飲み物の注文を取るべく手を挙げさせようとした。と同時に静内も、

「では、飲み物、何にする？」

やはり目立たない口調と声で、女子たちから注文を取っていた。いつしかふたり、並んで立ち動いていた。意識はしていなかったのに、なぜか、同じ行動をとっていた。

コップにウーロン茶は注がれたが、重々しく麻生先生より、
「これから食事をする際は、紳士として、また淑女として振舞うことを忘れるな。いいか、男子は隣の女子に対してレディーファーストを心がけること。それは習ったな」

乙彦が全く習っていない行動を要求された。レディーファーストってなんだ？

「女子もいつものように人の前に手を伸ばしてはしたなく食べ物を取るのではなく、隣の男子によそってもらうようにしろ。いいな。このランチはあくまでも、学校の延長だということを忘れるな」

——頼むから早く食わせてくれ！

周囲の声なき叫びをみしみしと身体に響き渡らせつつ、乙彦は片手で菜ばしを取る準備をした。他の男子たちも、いや女子たちも同じように見えたが、唯一隣の静内菜種だけは大人しく話を聞いて、手を膝の上に乗せていた。

「では、いただきます！」

「いただきます」

挨拶もそこそこにみな、さっそく盛り合わせの大皿にかぶりつこうとしている。一応は男子たちに与えられた指示もあり、隣同士さっそく麻婆豆腐やら小ぶりの餃子やらシュウマイ春雨をみな、とりわけ合っている。どことなくぎこちなく、中には取り皿から落っこす奴もいた。

とりあえずは真似すればよさそうだ。乙彦は顔を突っ込みたいのをこらえ、まず隣の静内に尋ねた。

「何、取る？」

「春巻がいいな」

言葉を交わしてまだ三分くらいしか経っていないのに、静内の口調はざっくばらんだった。それでいて押し付けがましくないせいか、乙彦も余計なことを考えずに春巻を二個、さくっと取り皿に載せた。箸でつかんでみて驚いた。ふにやりとしていない。ぱりぱりして、しっかり箸で摘むことができる。

「ありがとう」

さっそく次に静内が乙彦に盛ろうとする。

「何がいい？」

「あ、じゃあ、酢豚、多めに」

とにかく肉っぽいものだけ食いたい。慌ててウーロン茶をがぶ飲みした。

「じゃあ、これだけでいい？ これからたくさん並ぶから」

「並ぶって、何が」

「料理。きっと、どんどん入れ替えられるはずだから」

——入れ替えられるってなんだそれは。

受け取り、乙彦は余計なことをそれ以上考えずにまずは一皿、平らげた。

ふと、空いた皿に、春巻がひとつ、ぽんと載せられた。隣の静内からだった。

「どうぞ」

「あ、ああ」

嫌いだったのかそれとも乙彦の激しい食欲に同情したのか、その辺は定かではない。

あっさりとするのが一番のような気もする。

にっこり微笑むあくのない静内の顔を見ていると、ふと「おかず」という言葉が頭の中に浮かんだ。

「ごちそうさま」

瞬時に飲み込み、小声でお礼を言った。口の中に広がった春巻の味は、今まで食べたものと違い脂っこくなく、皮もあっさりぱりっとしていた。食ったことのない、味だった。

しばらく食べまくるだけの時間が過ぎた。

決して麻生先生の言う「レディーファースト」を怠ったつもりはないのだが、それ以上に空腹が耐えがたかった。それに尽きた。決して乙彦だけの現象ではないはずだった。

斜め前で底なしに麻婆豆腐を平らげている藤沖もいれば、たんめんの汁を会話なしにすすっている片岡もいた。片岡の場合ご愁傷さまとしかいいようがないのだが、隣は麻生先生だった。女子には無視されているようだったが、麻生先生とは妙に盛り上がっている様子だった。

静内の言う通り目の前の回る大皿はさっそく入れ替えられ、毛色の変ったほうれん草入りの餃子やら、シュウマイと思って噛むとやたら熱い汁が口に広がるものだとか、燕の巣入りのスープだとか、乙彦には未知の世界だった料理がどんどん並んだ。デザートに当たる杏仁豆腐をとりわけた段階で、ようやく胃も満腹となったようだった。

小ぶりの茶碗にジャスミン茶を注がれ、乙彦はそっと隣の静内に顔を向けた。

食べつくしてる間、静内には「次はどれを盛る？」以外の会話をしていなかったような気がする。当然なのだが、だが、それだけだとなんだか変なような気もしてきた。

ジャスミン茶というのは花が素になっているものらしい。そんなの知ったことじゃない。やたらと臭いようだが、口の中はさっぱりした。

「学校、慣れたか？」

ふっと飛び出した言葉に、自分でも驚いた。ふつう、女子にそんな馴れ馴れし言い方、したことない。失言。急いで杏仁豆腐のさくらんぼを口に放り込む。静内はやはり杏仁豆腐をちりれんげで掬いながら言葉を返した。

「まだ入学して一ヶ月だから、大変」

「だな」

隣で別の女子がちらりと乙彦を見やる。気付かない振りをした。

「こんなとこで食うのって、普通のことなのか」

「棚氷中学ではこんなことなかったな」

「だよな。水鳥でもなかった」

杏仁豆腐も、スーパーや母の手製のものと違い、甘すぎなくて、腹いっぱい胃にもするり

と入った。美味しいのだが、発する言葉の次元が違っている。

「なんだか毎日が『不思議の国のアリス』みたい」

——なんだ？ 「不思議の国のアリス」？

世界名作に疎い乙彦には、なんのことだかわからない。自慢じゃないが本を読むならノンフィクションに限る。想像の世界は全く意味不明だ。

するすると杏仁豆腐を口に運ぶ静内は、ほんのわずか頷いた。

「いつのまにか時計を持ったウサギにひっぱり込まれて、いろいろな不思議な言葉いっぱい聞かされて、いつのまにかランプの女王の裁判に巻き込まれたり、気がついたら女王にされそうだったり、もうめちゃくちゃ」

小声だった。近くと同級生たちに聞かれるのを、さすがに恐れたのだろう。

「つまり、わけがわからないということか」

「そう。一言でいうと、そうなる」

静内はジャスミン茶をこくりと飲んだ。美味しそうでもなく、ただ義務的に。

——その「アリス」とかいうのはよくわからないが。

ただ言葉の意味をその通りに捉えれば、よく理解できる。

女子たちの発言は基本としてわけのわからないことが多い。感情が溢れていて、理解してほしいとばかりに投げつけられ、本来ならふつうの会話として用いられる言葉に二重、三重の意味が付け加えられ、混乱を生じる。

それがなぜか、静内の用いる比喻にはそれを感じない。

むしろ、その通りと受け止められる。

——女王の裁判、気がついたら女王。つまり清坂がらみの問題だな。

まだ初めての会話から三十分も経っていないのに、自然と話が結びついていく。もちろん乙彦ももって静内のライバルたる清坂の事情を聞き知っていたからこそ、理解できたところもあるだろう。

しかし、ここでなんともなしに淡々と杏仁豆腐をすする静内菜種。

むかつ腹を立てているわけでもなさそうだし、醒めているわけでもなさそうだ。

ただ、あることをそのままあるがままに受け止めている様子。

乙彦はもともと当てこすったり探りを入れたりするのが得意なほうではない。

いくなら直球を投げる。

「評議委員に選ばれたことか」

だから聞きたいことを、そのまま聞いた。さすがに静内もすくう手を止め、乙彦にげんげんな眼差しを与えた。言葉はなかった。やはりまずかったろうか。しかし投げた言葉はもう取り戻せない。続けるしかなかった。

「うちのクラスの藤沖が評議委員なんで、よく話は聞いている。選ばれる時、大変だったらしいとかなんとか」

「そうなんだ。すぐに噂になるのね」

「いろいろな情報は耳にしているが、みな一方的な話ばかりで公平さに欠ける」

「そう思うのね」

静内はイエスともノーとも言わなかった。

「でも、青大附属は不思議の国だからこそ、面白いなどは、思う」

ここで少し声を弱め、

「……ように、してる」

語尾に、乙彦のどこか奥が震えた。

——不思議の国か。

場所が場所だけにはっきりと口にはできないのだろう。

清坂から女子たちの信任を一気に奪い、いつのまにか評議委員に選ばれてしまい戸惑っているというのが正直なところなのだろう。しかも全く未知の大陸に上陸したコロンブス状態で混乱している状態。もちろん乙彦のみた限り、静内は女子たちとうまくやっているようだし、唯一清坂に噛み付かれる時以外はなんとかうまく流しているようだと言いつつ聞く。こうやって話を聞いてみると、さもありませんと思う。

——だが、それはしんどいだろう。

乙彦は話を変えた。

「中学の連中とは遊んだりしてるか」

「してる。やっぱり楽」

短く、さっぱり、温かく静内が返事した。かなりぶっきらぼうな質問に、特にむかつく様子もなく、答えるからこそ、どんどん話が弾む。

「俺も、この前ドッジボール大会やった」

「優勝した？」

「もちろん」

短い言葉のやり取りなのに、あっという間に繋がっていく。いくら言葉を重ねてもぶつ、ぶつと切れていく清坂や古川とは異なった雰囲気の流れ出した。

「水鳥の公園で仲間と集まったんだ」

「水鳥の公園って、青淵郷土資料館の近く？」

いきなり静内が思わぬところに繋がってきた。思わず頷くと静内は今までのさっぱりした表情と違う、少し笑顔を繰り出した。風呂敷で包んでいた果物をさっと目の前に差し出した、そんな新鮮さがあった。

「私、よく行くの。あの資料館」

「俺のうちの近くだ、あそこ」

「水鳥中学の校区よね」

「けどあまりあそこには行ったことがない」

「それ、もったいない！」

その迫力、勢い、突然過ぎる。乙彦に一気に接近しそうなほど、目を輝かせた。

「青潟の歴史って、調べると面白いのよ」

「歴史が得意なのか？」

「得意じゃなくて、好きなの」

ふと、静内ははっと自分に振り返り周囲を見渡した。ついでに乙彦も様子を伺った。

視線がいつのまにか、集中している。

藤沖、片岡もぼかんとして乙彦の顔を見つめている。

——やばい、なんだこれ。

気がついてあとの祭りだった。いつのまにか静内とふたりの語り合いは前でさらされていたことに、気付かなかった。同時に静内がふっと自分の頬を撫でるような仕種をした。

食事が一段落し、麻生先生の合図で席を立った時。

「さっき、ひとりではしゃいでしまつてごめん」

ちょっといたずらっぽい表情を静内は浮かべた。あれからひたすら無言で杏仁豆腐に向かって一言も口を利いていなかった。さすがにあの場所であれだけの興味津々視線をむけられたら何も言えない。

「あ、いやなんでも」

「でも、関崎くんと話せて、ほつとした」

せきざき、と発音する時、少しどもるように口にした。覚えていないのかもしれない。

「ああ、そうか」

「ちょっとだけ、不思議の国から戻つてこれたような気分」

「あっそっか」

気の聞いた言葉が出てこなかった。

「あの、その『不思議の国のなんとか』ってなんなんだ」

「アリスって読んだことない？」

「わからない」

そんな女子好みのものなんて普通男子が読むわけない、そう言い返してもよかったのにそうできなかった。

「男が読んで面白い本か」

「わからないけど、貸そうか」

「頼む」

いつのまにか乙彦は頼んでいた。静内もあっさり頷き、A組の女子たちの列に混じっていった。一時間足らずの会話で、時を忘れたのは青大附属に入学して以来、初めてのことだった。

藤沖がすぐに寄つて来て、耳元に注意を囁いた。

「随分鼻の下を伸ばしていた様子だが」

「そんなことはしていない。いわゆるレディファーストを行つただけだ」

「お前なんか勘違いしてるんじゃないか」

最初はしかめっ面で説教しようとしたのだろうが、乙彦の返す言葉に呆れたのか笑い出した。
「関崎が自分から女子に話し掛けるとは誰も思っていなかったからな、驚いた」

「驚くようなことはしたつもりはない」

言い返しながらも、藤沖の鋭い視点には乙彦もたじたじとなった。

否定は出来ない。今まで女子たち……古川なり、清坂なり……が自分から近寄って来て話し掛けてくるパターンとは違う形を作ったわけだ。それは自分の意志であって、流されたわけではない。それを笑うのだったら腹を決めて認めるしかないわけだ。

だが、たまたま隣にいた女子と話をしただけであって、それ以上の何者でもない。

乙彦が黙り込むと、藤沖はまだ顔をにやけたまま、こくこく頷いた。

「さてこれから凄い噂になると思うが、覚悟はしておくように」

「噂とはなんだ」

「わかっているだろう」

そう決め付けられても乙彦にはわからない。藤沖も説明をそれ以上しようとはしなかった。

「まあ、相手は悪くない。露骨な嫌がらせはないだろう」

「藤沖、何を言いたいんだ」

「外部生同士でかつ、女子とうまくやっている静内だったら、女子連中の嫉妬の嵐も受けずにすむだろうということだ」

ますますわからなかった。さっきまで静内と比喻交じりの会話を交わしていた時に比べて、また回りくどくこんがらがった言葉遣いに乙彦はいらだった。無言を通した。

とりたてて深い会話を交わしたわけではない。古川や清坂を相手にした時のように、心をぐりぐり抉るような話をしたわけではない。むしろ上っ面に過ぎない会話だけだった。静内菜種との会話は、彼女の外見とほぼ変わらず、目立たない内容だったはずだった。

なのに、なぜかポイントの単語だけが、しっかり残っている。

——青瀉郷土資料館。

——不思議の国のアリス。

——女王の裁判。

何かを訴えかけるようなものはなく、ただ淡々と呟くだけ。それも比喻として。

ただ伝わってくる。確実に、何か静内の言葉を運んでくる。

「藤沖、お前は世界文学に詳しいか」

本を貸してもらう前に、あらすじだけ聞いておこう。乙彦は藤沖にそれとなく尋ねた。

「一般常識としては」

「そうか、なら『不思議の国のアリス』とはどういう話か知っているか？」

「お前知らないのか？」

さっき静内も、「なぜ知らないの？」とばかりの表情を浮かべたが、藤沖もまたその倍げん

な顔で乙彦に問い返した。

「そういうファンタジーものは俺は興味ない」

「いや、それ以前として、読まないのはまずいんじゃないのか」

藤沖はぶつくさ何か言いたそうだったが、乙彦の求めているあらすじをさらっと述べた。

「イギリスのアリスって子が、いきなり時計を持ったウサギを追っかけていくうちに穴ぼこに落ちて、そこからわけのわからん連中とのおたごたごたに巻き込まれていって、最後は夢から醒めて終わるって話だ」

「空想の世界にタイムトリップするという奴か」

まるでテレビアニメの世界である。藤沖は否定しなかった。

「ま、そう考えてもいい。ただイギリスにはいわゆるマザー・グースというわらべ歌があって、その言葉遊びでもって楽しむ物語でもある」

「言葉遊び、か？」

ますますわからない。が、別の回路が開いてきた。

これ以上、「アリス」の仔細を聞き出さなくてもいい。そんな気がした。

「わかった、ありがとう」

乙彦はさっさと話を終わらせた。

——不思議の国。

青大附属はワンダーランド。

その題名だけで、事足りた。

静内菜種が貸してくれるであろうその本は、「不思議の国」へのパスポート。

それ以上のものではない。

——どちらにしても静内とは、もう少し詳しく事情を聞く必要がある。

同じ外部生だ。杏仁豆腐を食いながら語れなかったものを、もう少し掘り下げたい。

思えば入学してから、外部生の連中と膝突き合わせて話をする機会が少なくなっていた。名倉時也とも最近は無沙汰だし、行動するのも大抵は藤沖と一緒に易きに流されているような気がこのところしていた。

この機会に一度、乙彦は外部生の同期と、情報交換したかった。

——だから、際当たっては。

決して変なことでもないはずだ。静内菜種とふたりで語り合いたいと感じることは。藤沖が揶揄するように、決して変な噂になることでもないはずだ。ワンダーランドに飛び込んで戸惑う外部生同士が情報交換し合うことは、決して余計な詮索をされるようなことでもないはずだ。決して、決して。

腹いっぱいいい気分に戻ってきた後、まさか、

「じゃ、お前ら全員、短パンとTシャツに着替えろ」

麻生先生に命令されるとは思っても見なかった。

もちろん、中華料理チームのみである。女子はかろうじてジャージで許されたようだが、みな男子連中はすね毛丸出しの格好で行かざるを得ない。そんなの気にしちゃいないが、どういうことが待っているのか、不吉な予感があった。

「せめてなあ、膝丈にしてほしいよなあ」

呟く男子たちの声を聞きつけた麻生先生は、ひとりひとり軽く頭をはたいていった。

「あとで後悔するぞ。一時間前たっぷりゴージャス気分を味わったんだ。覚悟しとけ」

乙彦は素直に覚悟することにした。藤沖と顔を見合わせ、なんだかバランスの取れないTシャツとランニングパンツのセットで宿を出た。まだ体調が優れないらしい立村は、部屋の隅で眠りつづけたままだった。誰も気を遣わずにばさばさ着替えをしたにも関わらず、一切身動きしなかった。

本当はA組の片割れチームが何を食ったのか興味しんしんだった。

「いいな、絶対あそこの餃子、美味しいんだよ」

片岡が乙彦にだけ、小声で囁くのを耳にした、というのもある。

「そうか、餃子か」

乙彦の呟きに藤沖も相槌を打った。

「さっきから片岡、食い意地張ってるようだが、そんなにうまいのか」

「うん」

藤沖に対しては控えめな片岡でもある。

いろいろ事情があるとは聞いているが、なぜ乙彦にだけ片岡が懐いてくるのか不思議だった。藤沖や立村と違い、麻生先生の肝いりで友情を培うこととなったふたり。しかしそれが決して嫌ではない。こういうのも、まあ、悪くはない。したいようにしとけばいい。

「それにしても関崎、ずいぶん楽しそうだな」

またさりげなく突っ込まれる。言いたいことはわかっている。さっきの静内菜種とのことだろう。帰り道でやいのやいの言われたけれども、そのあたりはクールに無視したつもりだったが、すぐにまた顔を合わせる羽目になると、また悩ましい。自分はそんなの気にするつもりなどないが、静内がおそらく、戸惑うことだろう。面倒なことでもある。

「再会がそんなに嬉しいか」

「しつこいぞ、藤沖」

怒ったわけではないが、言葉を少し荒立ててみる。藤沖もそのあたりの呼吸は飲み込んだようで、

「怒るな怒るな。しかし悪いが、これから先はむさい男子連中のみとの合同作業のはずだぞ」

「合同作業とはなんだ。また試合でもするのか」

次の展開をまだ聞いていなかった。藤沖も首を傾げながら答えてきた。

「いや、俺もまだ詳しい話は聞いていない。俺が聞いているのは、腹ごなしにボランティアかなんかをやるらしいという程度だが。たぶん、ゴミ拾いでもするんじゃないのか。このあたりの公園で」

ゴミ拾いなら納得だ。乙彦もそれには異存ない。

「そうか、いい運動だな」

だが、そう考えるとまた疑問が生じる。乙彦は続けた。

「それでこんな短パンをはく必要性があるのか？」

「確かにそうだ」

「ゴミ拾いだったら、学校のジャージで十分じゃないか。修学旅行ではジャージで寝るのが普通だぞ。みな、それで着たきりすずめになればいい」

「そうか、水鳥中学ではそうなのか。俺たちはみな、ホテルの浴衣を着て寝たはずだ」

さりげなく青大附属中学の修学旅行状況が垣間見えた。

「さらにゴミ拾いだけならば、なぜ細かくチーム分けする必要がある？ 全校生徒で拾ったってかまわないだろう」

「場所が狭いんじゃないのか。サボる奴がいるとか」

「なるほどな」

それぞれ想像をたくましくさせてみるが、やはりしっくりこない。

風が冷たく足の間をすり抜けた。ぞくっとする。

「しっかしな、女子連中はまた、観察して騒ぐぞ」

「何を観察するんだ」

「古川あたりがいたら大変なことになっていたぞ。短パンからなにがみえるかにかが見えるのかな」

藤沖は意味ありげにくくと笑った。

麻生先生の指示に従い、乙彦たちは五分ほど歩いた先の大きな公園で全員、整列した。

並んでいるのはA組とB組の、中華料理を一緒に食した連中のみ。つい三十分前まで一緒にいたのだから、空気も和む。後ろでおしゃべりする連中が、麻生先生に軽く拳固を食らわされていた。

「さて、ここに何かがあるか、わかるか」

公園ではあるが、取り立てて何か目立つオブジェがあるわけではない。向こう側には小さな子どもたちが錆びたブランコで遊んだり、低めのジャングルジムによじ登ったりしているのが見える程度だ。いわゆる、普通の正方形な公園に過ぎない。

「公園です」

片岡が見たとおりの答えを返した。麻生先生は満足げに頷いた。時折腹を撫でた。

「で、これが何か、わかるか？」

麻生先生は次に、すぐ側の少し大きめの建物を指差した。かなりすすけているが、それなりに存在感はある。特別難しい問題ではない。乙彦は挙手して答えた。

「公衆トイレです」

「そうだ、関崎。なぜここに来たか、少し見当ついたか？」

しばらく乙彦は公衆トイレの薄汚れた建物を見つめていた。見当がつくようでつかない。まさかとは思うが、やはりその必要性がわからない。恐る恐る、自分なりの答えを出してみる。

「あの、トイレ掃除ですか」

「鋭いな。そうだ、その通りだ。関崎、じゃあまず、お前から先にこれを使え。まずは手にクリームを塗って、準備しろ」

全員からもれる言葉は「まじかよ」「ふざけんなよ」「なんで俺たちが」などなど呪いの数々。だがそれでも、みな言われるがままに麻生先生の差し出すハンドクリームを指先にすりこみ、薄いビニールの手袋をはめていく様は、どことなく哀愁が漂っていた。

——よりによってあれだけ豪華な食事した後に、なんでトイレ掃除なんだ！

呪いたいのはよくよくわかる。見れば、女性教師が引率している女子集団が反対側で絶叫している様子が伺える。それはそうだろう。天国から地獄に突き落とされたようなものである。

——静内はどうしてるんだ？

つい、視線を向けてしまう。存在感のなかったはずの静内が、今はすぐにストレートヘアと一緒に視界へと飛び込んでくる。絶叫女子とは一線をひいているようだが、それでも穏やかに話し掛けている様子だった。宥めている、ともいう。その姿にほっとした。

「先生、女子たちも同じですか」

「そうだ。もちろんあいつらは女子トイレをぴかぴかにするわけだが」

手際よくバケツとブラシを用意した麻生先生は、自分のズボンに膝までたくし上げた。同じく短パンでもよいと思うのだが、さすがに歳を考えたのだろう。女子たちの視線も意識したのかもしれない。そう考えれば自分たちの方が潔いとも言える。

藤沖の溜息と同時に、ぐいと肩を張る姿に、背すじが伸びた。

「わかりました。よろしく願います！」

乙彦はまず、自分から一礼した。なぜかそうしなくてはいけないような気がした。つられたのか片岡、藤沖、その他一同がみな、腰低く頭を下げた。

小さな公園のわりに便器の数は多めだった。しかもみな、いかにも磨いてほしいといわんばかりに汚れがこびりついている。もう昼下がりに言ってもいい時間帯なのになぜ、こんなに汚れているのか理解できない。しかも麻生先生の一声でもって、小便器はB組男子、大便器はA組にと振り分けられてしまった。要するに、優勝チームが一番しんどい仕事をしろちうわけである。あきらかなる差別だ。とはいえ受けた以上は仕方ない。それぞれバケツに水を汲み、なぜか真っ

白な雑巾を浸し、まずはごしごしとこすり始めた。幸いなのはみな水洗トイレだということだろうか。

時折掃除最中に親子連れが飛び込んできて、いたしかたなく掃除の手を止めることもあり。大抵の場合せっかく磨いた便器が元通りやり直し、もまたやりきれない。

麻生先生がひとりひとりサボリチェックをこまめにしていく。わざわざトイレの掃除の手際よいやりかたまで指示を出していく。あまりにも酷い黒ずみには、なんとサンドペーパーまで渡され、こするよう言われた。目の細かいもので、やってみると意外と落ちる。感動だ。

「ほらほら、水の溜まっているところまで手を突っ込んで磨けよ」

隣の個室で……おそらく片岡だろう……麻生先生が説教している声が聞こえる。最初はひたすらしゃがみこすり続けていた乙彦だが、腰と足が痛くなるわ、床の汚れが気持ち悪いわでだんだんいらいらしてくるのを感じる。なんといえればいいのか、かゆいところに手が届かない感覚と言えいいのだろうか。ゴム手袋自体がうっとうしくてならない。

——どうせこんな格好だ。帰ったら着替えりゃいい。

それなりに和式便所の汚れは落ちてきた。足もしびれる。こうなったらもうやけだ。

乙彦は手袋を取り去った。素手でブラシの先端を握った。もろ、汚れた部分に触れるはめになる。幸か不幸か乙彦は潔癖症ではない。

——顔突っ込んで、磨いてやる！

両膝をつき乙彦はぐいと、右手を水溜めの部分に突っ込んだ。入れてみるとひやっとする感触と同時に腹が座ってくるのを感じる。ひたすら取れない汚れをこすり続けた。

「おい、関崎、すごいぞ。ほら、お前らも見習え」

麻生先生が他の連中に乙彦のトイレ掃除姿を見るよう声をかけている様子だ。しかしそんなの気にしちゃいなかった。何度か水を流し、見違えるように汚れが落ちていくのが、

——すげえ、面白い。

そう感じてしまう自分に驚いた。もうこびりついた汚れも、黒ずみも、床のタイルの色みも、清しいほど綺麗になったのに、まだこすり足りなかった。

「関崎、なんであそこまで本気でした？」

窓と壁までご丁寧に水ぶきを行い、結局一時間近くトイレにこもるはめとなった。とことん納得するまでやらないと気がすまない自分の性格だった。麻生先生からもお褒めの言葉もらったものの、同じレベルの掃除を要求された他の連中には申し訳なさも感じていた。みなに「悪い」とだけ頭を下げた。藤沖も片岡も、それほど怒っているわけでもないにしても、ずぶぬれのTシャツと短パン姿でどことなく落ち着かないようだった。

「中途半端がいやだったんだ」

「いやいや、それだけではなさそうだったぞ」

藤沖は石鹸をつけてあぶくをこしらえたつぷりと水で流した。当然、洗面所もB組男子たちの努力のかいあって、いつのまにか銀色に蛇口が光り輝いていた。

「俺もわからない」

「まあ、これでまずはさっさと風呂に飛び込みたいところだな。臭うぞ」

隣の女子トイレはまだ掃除が続いているようだった。声は聞こえないがまだまだ時間がかかりそうな気配ではあった。麻生先生も特に何も言わず、男子連中を引率していった。公園の芝生まで連れて行き、腰を下ろすように指示した。みな、言われる通り、円陣を組んだ。

「みなの中、ご苦労さん」

まずは一言、ねぎらいの言葉。

「いきなり何事かと思っただろうが、まずはみな、文句も言わずよくやり遂げてくれた。さすがうちの生徒だ。誇りに思うぞ」

——反抗できるわけがないだろう。

心でつつこむが、あえて何も言わない。疲れで気力がない。

「今の段階ではよくわからないだろうが、今回のトイレ掃除と豪華絢爛中華料理ランチとは、実はイコールなんだぞ」

——どこがだよ。

乙彦の心の突っ込みよりも早く、B組男子のひとりが丁寧に「どこですか」と問いかけた。みな、わからないことは自分たちですぐに尋ねる習慣がついている連中だ。

「まず、お前らはドッジボール大会で全力を尽くし、優秀な成績を収めた。それゆえにだ、フカヒレ入りのスープだの、黒豚入りのシュウマイだの、胃袋が舞い上がるほどうまいもんを食ったわけだ。それは当然の褒美として、受け取ってよし、だ」

——だからなんでトイレ掃除なんだよ。

青大附属の教師が考えることも理解しがたい。乙彦はあぐらをかきかけの格好でじっと見据えた。答えを知りたい。

「だがそれとは別に、バランスを取る形でこのように便器に顔を突っ込むはめになったわけだ。なんでかわかるか？」

片岡に問い掛けた。首を振る幼い片岡。藤沖が口を開いた。

「いいことがあれば、悪いこともある、そういうことを学べということですか」

「近いが、ちと違う」

乙彦の想像していたことともどうやら違うようだった。かなり藤沖の意見は近いものがあると思うのだが。麻生先生は手の甲で汗を拭きながらゆっくりとあぐらをかいた。乙彦も安心して膝を崩した。

「今はわからないでもいい。だが、この社会の仕組みは学んでおいても損はないぞ」

「社会の仕組み？」

また、なんだかわけのわからない顔をして見あげる片岡に、麻生先生はさらに話し掛けた。

「そうだ。よいことがあれば必ず悪いことがある。だから調子こくな、というのも一理ありだ。しかし、よくよく考えてみる。たった今、お前らが臭い思いしつつトイレ掃除に打ち込んだ結果、どうだ、あの気持ちいいばかりの白さと便器の輝きは、思い出せるか？」

乙彦は顔をあげた。麻生先生の言葉に、何かがぴんときた。どうやら自分だけらしい。

「お前らに負けた連中は安いラーメンを食いに行ったはずだ。値段だけ考えれば、まあ、不公平だな。努力した結果負けちまったんだから、そりゃあしょうがない。だが、あとで食った感想を他の連中から聞いてみる。絶対にうまいと思っているはずだぞ」

片岡が大きく頷いていた。

「そうか、桂さんから聞いたか。高級料理ももちろんうまいが、世の中には安ものと思われているようなものでも、めちゃくちゃ美味というもんもある。腹ぺこ時の揚げたてコロッケー一個八十円のとろけるようなうまさをお前らもよく知ってるだろ？ それと一緒にだ」

つながりそうな気がする。藤沖は微動だにせず耳を傾けている。

麻生先生は締めくくった。

「つまりだ。これから先、高級中華料理のようなもんを食うこともあれば、いきなりトイレ掃除を押し付けられることもあるだろう。けどな、どんなものが与えられたとしても、そこでどんな『うまみ』を見つけ出せるかによって、お前らの人生はぐんと変わってくる。『喜び』とか『めっけもん』とか言い変えてもいいな。どんな出来事にぶつかっても、そこから得るものは確かにある。それを、まずは身体で覚えとけ。ま、そんな気分じゃねえだろうが、それはそれだ。さ、行くぞ。まずは一風呂浴びろ。それから臭いシャツとパンツを洗濯場で洗え。もちろん、手でだぞ」

——手で洗濯かよ！ 小学校の家庭科でしか習ってねえぞ！

乙彦の心なる叫びはみな他の連中が代弁してくれたので、それ以上のことは控えた。

宿に戻ってみると、まだ女子たちは戻っていなかったが、片割れA組男子たちはすでに風呂場に直行している様子だった。

「立村、大丈夫か」

まずは目を閉じている立村に声をかけた。他の奴が「寝てるこいつ」と囁く。

「目、腐らないのかよ」

乱暴に呟く奴もいる。結局まだ昼飯も食べていないのだろう。返事もなかった。こんな状態で次の日の行動は可能なのだろうか。評議の藤沖はちらと一瞥した後、一切無視している。何か意味があるのかとは思うのだが、このままでいいとは正直思えない。

「それはそうと関崎、さっきはずいぶん、仲のよろしいことで」

風呂に入るにあたっての必需品、下着類をひっぱり出していると、いきなり背中にかぶりついてくる奴が約一名。藤沖でも片岡でもない。一テンポ遅れてどうやら静内菜種との関係について邪推したいらしい。タイミングがずれて反応が遅れた。

「何を言いたいんだ」

「いやーお前、もてるなって、なあ」

片割れチームの男子たちが仔細を聞こうとする。いいかげんにしろと怒鳴りたいが、その一方で自分のしたことが誤解を招くのもまた事実である。しかたない。潔く受け入れるしかなさそうだ。藤沖にちらと目配せした。

「ははあ、関崎、また女子といちゃついてたってわけか。ずいぶん硬派と思いきや、女子にもてもてのご様子で」

ちっともいやみが混じっていない風に聞こえた。腹を立てるほどではなさそうだった。

「悪いか」

「悪くはないぞ。ただなあ」

いきなり藤沖が割り込んできた。助太刀を頼んだわけではないが、やはり痒いところに手の届く奴である。新しいトランクを握り締めた手で、乙彦の肩を組んだ。

「ま、事実は事実だ。俺も見た。お前、相当惚れてると見た」

——こいつ、なんだよいきなり！

てっきり味方に回ると思いきや、藤沖の奴、いきなり一発食られるようなことを言う。

その癖、肩に手は回っている。外そうとしても離れない。藤沖は耳元でさらに続けた。片岡がきょとんとして目の前で座っている。

「青大附属に入学して一ヶ月、関崎を巡る女子たちの群れを粒さに追った俺だが、今回こそは落ちたと見たぞ」

「ふざけるな。誤解だぞ」

「いやいや、あれだけ熱烈アピールしている清坂にはつれない態度だったこいつがだ、B組の静内に対してだけは、自分から声掛けてるんだぞ。これはすごいことじゃないか？」

誰もが大きく頷いた。からかう気配がないからわめくわけにもいかない。顔が自然と火照ってくるのがうっとおしい。藤沖はさらにぐるりとギャラリーを見渡しながら、

「それはそうと、片岡。西月、元気なのか」

いきなり目の前にいる片岡に尋ねた。一瞬、息を呑む気配がした。今までない空気だった。

片岡の口許を思わずじっと見つめた。

——なんなんだ、この状況？

乙彦の疑問を打ち消す、あっさりした答えを片岡はまっすぐ発した。

「うん、元気」

ただ、それだけだった。

みな、かたずを呑んで見守っていた。

藤沖はどう出るか？

「よし、わかった」

短く受け答えし、藤沖はそっと片手を片岡の頭に載せた。すぐに離した。まだ沈黙を保っている男子連中に向かい、言い放った。

「よい機会だから宣言しておく。人の色恋沙汰、邪魔はするな。やりたいようにやらせろ。それがA組ポリシーだ」

いきなり視線を逸らし、そっぽを向いて呟いた。

「俺も人のことは言えん」

乙彦は腕を首に回されたまま、藤沖に問い掛けた。

「お前、惚れた女子がいるのか？」

藤沖は返事をしなかった。それがひとつの答えだと、乙彦は解釈した。

みなが急いで風呂場に急ぐ中、乙彦は最後に部屋を出ようとした。

立村にもう一声かけたかった。布団に近づき、

「しんどいようなら俺が先生に言っとくか」

くるりと寝返りを打ち、立村が目を開いた。

「やっぱり起きてたのか」

「いや、今」

嘘ではない風に、水の中で呼吸しているような声を出した。立村はまた目を細め、乙彦に何かを伝えようと口を開いた。荒い呼吸で口を抑えた。

「どうした。吐きそうなのか」

「いや違う、あのさ、関崎」

急いで洗面所かトイレに運んだほうがいいのだろうか。動けず様子を伺うと、立村は小さな声でまた問い掛けた。

「さっき、藤沖が言ったこと、本当か」

「なんだそれ」

「いや、なんでもない。早く風呂行ってこいよ」

また口を抑え、囁くように立村は「ごめん」とだけ付け加えた。

「藤沖が言ったことって、なんだそれ。ありすぎてわからん。もっと端的に言ってくれ」

尋ねても立村は、弱々しく首を振り、

「いや、なんでもない」

繰り返す、目を閉じるだけだった。

仕方なく乙彦も立ち上がり、風呂一式道具を抱え廊下へ出て行った。

——藤沖は何を意図してあんなことを言ったんだ？

人の色恋沙汰に口出しするな、とは見事だ。

そういうのに疎い乙彦にも意は通じる。

——これで、片岡が過去の恋愛沙汰で揶揄される心配はなくなったってわけだ。

青大附属の連中が、乙彦とは全く異なる恋愛観でもって物事を捉えていることは薄々感じていた。男女仲良く付き合うのはごく普通のこと、男女が友情オンリーで繋がることも、またいちやつくのも極々日常なのだ知り始めてそろそろ一ヶ月が経つ。

水鳥中学で同じ出来事が起ころうものなら最後、さぞすさまじいからかいの嵐に見舞われたことだろう。乙彦と静内菜種との語り合いも、本人たちがどう考えていようがもっとひゅうひゅうの嵐に見舞われたことは間違いなかつただろう。

しかし、乙彦にはごくごく自然なからかい文句だけしかぶつけられなかった。

——ガキくさい言い方でスケベネタもなかった。

それが青大附属なのだろうか。ごく自然な流れの中で、クラス内で、何かが認定された、そんな判を押されたような感覚が乙彦に残っていた。クラス評議である藤沖が釘をさしたのだから、おそらく暫くの間、しょうもない突っ込みはされずにすむだろう。人の色恋沙汰に口ばしを突っ込まず、相手を尊重しているという、それはA組ルールとして定められた瞬間だった。

——つまり、藤沖はそう言いたかったのか？

——余計な突っ込みがこれ以上入らないようにという、思いやりか？

乙彦なりに読みはしたが、しかし答えは出せなかった。

——立村もそのあたり、気になったんだろうか。

立村の向けた問いにも答えられず、乙彦はすっかりかゆくなった指先をぼりぼりとかいた。

風呂から上がり夕食までまだ間があった。

「夕食は六時からだから、少し寝てろ」

麻生先生の指示通りに布団を敷いて寝ている奴は、少なくともA組には一人もいなかった。さすがに立村も床上げして所在なさげに膝を抱えて座っている。これ以上寝たら、たぶん今晚は眠れないだろう。余計なお世話か。

「合宿というと何を連想する」

藤沖が仲間数人と掛け合いしている。

「やはり古典的な枕投げじゃないのか」

「この歳で枕投げなんてガキ臭いことやるのかよ」

誰かがまぜっかえす。乙彦も第一声で「枕投げだろ！」そう叫びたかったのだが、残念至極、そういうのはやはり、古い概念らしい。

「それとも布団蒸しか」

「勘弁してくれ。もう高校でそんなレベル低いことやりたかねえよ」

——レベル、低いのか？

やはり乙彦なりにすぐ連想したのはそのあたりだった。水鳥中学の修学旅行でも御多分に洩れず布団蒸しに枕投げ、フルコース楽しんだ。もちろん先生たちからはこっぴどくお叱りを受けたものの、そんなの知ったことじゃない。一昼夜、しっかり貴重な仲間たちとのひと時を楽しまないでどうするというのだ。思わずつつこみたくなった。

——じゃあ、いったいどういうことが高レベルな過ごし方なんだ？

乙彦の問いを待たず、藤沖は偉そうに続けた。

おそらく、乙彦に聞かせようとしている内容なのだろう。

このパターンは入学後一ヶ月でマスターした。それなら聞いてみるのもよいだろう。

「この機会だ、少しクラス内の統一を意識していきたいと俺は思っているんだがな」

「ほうほう」

合いの手が入る。乙彦の顔をちらと見たまま、藤沖は背を反り返らせた。

「ここ一ヶ月、俺もうちのクラスの状況をいろいろ観察してきたんだが、やはりこのままではまずいだろうという印象を得たわけだ」

「なるほどな」

あまり気のりしない相槌。

「だか、正直、どこをどうすればいいか、それはわからない。とりあえず問題としては、うちのクラスがいわゆる英語科で、男女合わせてたったの二十一人という、まとまりやすいんだかまとまりにくいんだか、よくわからない集団だということだ」

「ドッジボールで優勝したってことは、相当な団結力じゃないのか」

乙彦を、今度は他の連中がにやにやして見やる。

「そうだ。否定しないそれは。まあそのあとの便所掃除はろくでもないおまけだったが、それもまあいいことだ。だが、俺が見るからに問題点はいくつかあって、そのうちのひとつが女子たちの存在だ」

照れもせず、さらっと述べた。これが水鳥中学の連中だと「女子」というだけですぐ「すけべーだよなー」「女好きだよなあー」とかなんとか、茶々が入るのが常である。しかしこの部屋にいるA組男子……もっとも一部だが……は、藤沖のしゃちほこばった言葉すらもすんなり受け入れているようだ。決してそれは、乙彦も非とするものではない。

——女子か、ネックになるのは、確かにそうだ。

同じことを乙彦も感じていた。かつての乙彦ならさらにつっこんだことを聞くかもしれないが、それは避けた。まだ青大附属で乙彦は新参者。ここで余計なことを口走り、肝心要のことを聞かないのは勿体無い。

「女子なあ」

「確かにあいつら、使えねえよなあ」

気の強い、頭の回転の速い女子たちが多いと教えてくれたはずの藤沖だが、かなり辛口に女子全体像を言葉で形造っていった。

「うちの学校の女子がもともと、やたらとはしっこい奴が多いのは事実だ。だが問題は、女子連中がそれぞれうちで仲良しグループをこしらえては、それにそぐわない奴を弾いたり、もしくは自分のことばかり考えて利己的な行動を取ることが多い点にある。今のところうちのクラスではそういう問題はないが、これからはわからん。例えばB組の女子たちのようなことが、起こらんとも限らない」

——そういうことか。

合点がいった。頭の中にちらと、目立たぬ顔立ちをしていた静内菜種の姿がよぎった。

一人、納得顔で頷いた。

「そうだなあ、あの清坂が仲間外れにされている状況というのはな、異常だ」

全くよぎらなかつた一人の女子だった。乙彦からするとまだ、清坂美里というのはかつて立村とコンビを組んで評議委員会を守り立ててきた女子のひとりではない。やたらと最近では接する機会が多いが、だからといってそれ以上の意識もない。ねがわくば立村の現状を救ってやってほしいと思わなくもないのだが、それは人のこと、余計な口出しをするとまずい。立村だってそんなおせっかひやかれたがっているとは思えない。

藤沖は相手の言葉に賛意を表した。膝を叩いた。

「そうだ。俺もあれは驚いた。まんざら知らない女子じゃないからなおさらだ。もっとも露骨ないじめと認識されていないし、清坂もああいう性格だから大事にはいたっていないが、だがあれを見ておぞけを振るった男子連中は多いはずだ」

「もっともだ」

——なんでこいつら、他クラスの女子のことで真剣に語ることができるんだ？ しかもまだ夜じゃないぞ。こっそりそういうことをしゃべることがないとは言わないが。

全く別の箇所で乙彦は驚いていた。水鳥では絶対に、考えられない会話である。

しばらく藤沖は、乙彦の知らない女子の名前を出しながら話を進めていた。理解しようにも乙彦とは全く縁もゆかりもない連中の話である。全く見当がつかずついていけない。おぼろげに感じるのは、おそらく藤沖が問題としたいのは特定の女子が清坂をいじめている、ということ以上に、火の粉が隣組のA組に飛んでくるのではという危惧ではという点だ。

「女子は論理的に物事を考えられない性格だ。しかたないことだが、このことでA組の女子連中までもがいじめに走る可能性は捨てきれない。幸いというかなんというか、清坂の味方である古川が評議だから、今のところは特に何も起こっていないが」

なぜかここで異様な笑みをみなもらす。乙彦もなんとなく、感づいた。

「とにかく、ここで一度、男子が男子として確固たる意志を持ち、間違った方向へ女子たちが進みそうになったらその際は断固として阻止するだけの力を持たねばならない。と、俺は考える。どうだ？」

乙彦に問い掛ける藤沖。その通りだとは思う。だがどこかひっかかる。その気配を感じたのか、怪訝そうに藤沖は乙彦の言葉を待っていた。

「いや、それは俺たち自身も自覚しなくてはならないことじゃないか」

「俺たちが、か？」

「そうだ。女子の問題はともかくとして、自分自身が同じ間違いをしないように制しなくてはならないんじゃないか」

さほど深い意味はなかった。ふい、と言葉に出たのをそのまま伝えただけだ。周りの連中もよくわからない顔して、着ているTシャツの端をめくったりしている。ちなみにみな、私服である。水鳥中学ならばみなこのあたり、ジャージで済ませるところである。

「男子がそんなくだらないいじめなどするわけがないだろう。もちろん、そういう奴がいるかもしれないが、それは俺たちがきっちりとした態度を取ればそれでいいはずだ」

「確かに」

そこまで乙彦は言いかけた。と、不意に誰かが部屋の隅から身動きする気配を感じた。まだ動いていない空気がいきなり、戸口まで流れるような感触だ。

立村だった。デニムシャツを羽織るような格好で、ふらふらと外へ出ていった。藤沖たちと語り合っていたみな、一言も口にせず黙って見送っていた。藤沖だけがそしらぬ振りで髪の毛を掻き毟っていた。

——藤沖は気付いていないようだ。

女子たちの言動以上に、いつのまにか立村が英語科の中から浮き上がっている現実を見据えようとしていない。

——しかも、その発端が、藤沖自身だということもだ。

相性の良し悪しはあるだろう。乙彦も以前は総田と陰悪だったのだ、人のことは言えない。

しかし、仮にも評議委員としてクラスをまとめる以上は、仲間外れの同級生を出してはいけないはずだ。おそらく藤沖も正論としてそれは理解しているはずだ。しかし、あえて立村に対して

のみはかたくなな態度を崩そうとしない。

本来ならこの場で藤沖の矛盾を突く必要がある。

しかし同じ男子として、それは決してされたくないことだということも、十分理解しているつもりだ。

それならば、乙彦はどうすべきか。

真夜中に語り合うべき話題をあえて夕暮れ時にしているこのクラスで、乙彦がどういう位置から発言すればいいのかを、まだ判断しかねていた。

「それはそうと、夕飯後は何をするんだ？」

堅苦しい話に閉口していた奴がいたらしく、乙彦の迷いも幸い途中で消えた。話が逸れた。

「もちろんクラス内のミーティングだろう」

あてずっぽで口に出してみると、藤沖は機嫌を直した風になにやにや笑った。

「とんでもない、勉強に決まっている」

「まじかよ！」

その恐れこそ抱いていたものの、教科書持参ではないと聞いていたのでまずはありえないと判断していた。それが甘かったというのだろうか。

「藤沖、勉強というのはいわゆる、教科書を使用するのか。俺は持ってきていない」

乙彦の問いに一同頷くと、藤沖は首を振った。

「関崎、俺がすべて把握していると思っているのか？ 俺もお前らと同じA組の生徒だ。先生方の考えていることをすべてつかんでいるわけではない」

とりあえず、わかっているのは夕食後、いやいやながらも頭を突きあわせて勉強せざるを得ないわけである。乙彦も日々、努力しているつもりではいたが、せめて合宿くらいは……というのも本音だ。さっき風呂に浸かった後の猛烈な疲れが、どどっと押し寄せてきた。

「悪い、まだ六時まで時間あるな」

腕時計を覗き込み、藤沖たちの返事を待たず、乙彦は畳に横たわった。

「身体の限界か、さすがのキャプテンもか」

「俺も、A組の一生徒だ。鉄人じゃない」

自分でも口走っている言葉がよくわからない。全身を伸ばし、一度大きくあくびをした。

そこからは記憶がない。

完全に寝ぼけ眼のまま、藤沖にたたき起こされた。すでに三十分近く時計の針が回っている。ほんの一、二分のはずだったのだが。慌てて起きると藤沖は頭を振った。

「んな、いびきかいて寝ているってのもどうかと思うぞ」

「かいてたか」

「ああ、盛大にな」

乙彦は部屋の中を見渡した。時間が経ったとはいえ、まだ夕食まではさらに三十分くらい間がある。なのになぜか人はまばらだ。さっきまで乙彦たちと語らっていた連中が姿を消している。

片岡もいなかった。もう食堂に陣取っているのだろうか。

「まだ目がうつろな状況で悪いが、この機会に我が学年の人間模様を見せておきたい。起きろ」
また藤沖の命令口調だ。寝起きばなでいらっとする。しかし我慢する。目と鼻と頭がやたらと痛い。顔をこすった。目に手をやると、ねばっとしたものが指にひっついた。

案内はまたも藤沖だった。こんな狭い中で、人間模様も何もあったものじゃない。もっとも藤沖には心に何か期するものがあつたのだろう。つい先ほど藤沖が、乙彦に聞かせるがごとく語つた裏には、後期以降の乙彦に教えておきたい何かがあつたに違いない。

その言い方に腹が立たないわけではないが、実際ちんぷんかんぷんなのも確かなのでここは逆らわずにおいた。

「まず、ここがC組の男子室だが」

ちらっと覗き込んだ。やたらとにぎやかに盛り上がっている気配がする。見ると中にはC組の男子連中……南雲、羽飛、天羽、難波、更科、さらになぜか立村まで混じってだべっている。気付かれぬうちに顔をひっこめて、廊下に戻った。C組男子出入口にはやたらと女子たちがたむろしているので、目立たずにすんだ。

「何か意味があるのか？」

「ある」

藤沖は短く答えた。仔細の説明は一切せず、素早く乙彦を連れてA組の自室に戻った。覗きこむとほんのわずかの間なのに誰もいない。

「てっきり俺たちが食堂に行ったとでも思っているんだろう」

深く考えることもせず、藤沖はふうっと息をついた。

「好都合だ、簡単に伝えておく。関崎は気付いていないかもしれないが、俺たち自身も気をつけねばならないといったお前の言葉は、当たっている」

「わかっていたのか」

何かぴんと来ないが、よく話を聞いてみることにする。

「なぜ、C組にだけ評議委員クラスの連中を固めたのかが俺としてはどうも解せなかった。おそらく考えられるのは、ふたたび青大附中時代の評議委員最優先主義を復古させる恐れをなくするためだったのではとっていたのだが」

やたらと藤沖は面倒くさい言い方をする。乙彦は聞き流した。

「先生連中が考えていることは理解できないが、俺からするとどうもこれから先、C組男子チームの団結力は、関崎にとって若干の脅威となる恐れがある」

「どういうことだ」

脅威もなにも、もともと同じクラスメートだった奴もいるはずなのに、ずいぶん相手を敵としてみているのが乙彦には、それこそ、解せない。

「俺は附属上がりだからさほど気にもならないが、関崎、お前は少し目立ちすぎているかもしれない。目立つことは悪くない。しかし、いろいろと気付かぬところで誤解を生じている恐れも

ある」

「だから恐れとはなんなんだ」

藤沖の言葉にはやたらと「恐れ」が出てくる。その言葉を説明できるほど、発している本人も理解しているわけではなさそうだった。

「つまり、お前が思っている以上に、敵を作っている可能性があるということだ」

——それを早く言ってくれ。

ようやく飲み込めた。つまり藤沖は、乙彦が悪目立ちしすぎていろいろと問題を起こしているのではと心配しているだけなのだ。

納得して額に手をやった。少し汗ばんでいた。

「お前の言う通りだ。バイト先の件は俺もまずかったと反省している」

「いや、それはささいなことだ」

意外にも藤沖はあっさり流した。

「轟のことなら気にするな。あいつはあのご面相だし、女子と捉える必要はない。野郎と一緒に考えればいい。むしろ心配なのは、そう、あいつのことだ」

「立村のことか」

すぐに思いついた言葉を口にすると、思いのほか藤沖は頷いた。

「厳密に言うとそれもある。が、もっと問題は別のところにある」

「もったいぶるな。俺はあまり気が長くない」

「しかたない、単刀直入に言おう」

乙彦が何かを言おうとするのを遮り、藤沖は告げた。

「お前、清坂に惚れられてるぞ」

——何言ってるんだ、こいつ。

全くもって言わんとする意味が理解できない。

これこそ、「解せぬ」だ。

「惚れられてるとはどういうことだ」

「わからないのか。あれだけ清坂がべたべたお前にまとわりついてくる理由を考えれば、一発で答えは出るはずだろう」

「出るわけがない。第一俺は、全くそういった女子に興味はない」

わざとらしく藤沖は声を立てて笑った。思わず腰が浮き上がる。

「なら昼、なんであんなに静内といちゃいちゃしていられたんだ？ 興味がないとは言えないだろう」

「いわゆる、本能としては関心を持つかもしれないが」

自分も男である以上、「異性」としてつい反応してしまう身体だとは自覚している。

しかしそれとこれとは別だ。

少なくとも清坂美里は、乙彦にとっていわゆる「附中評議委員」だった女子のひとりに過ぎない。やたらまとわりついてくるのに閉口したり、わけのわからないことをぶつけられて戸惑っ

たことは認めるが、それを責められても正直困る。いや、百歩譲ってその通り、清坂が乙彦に対して興味を持っているのを認めたとしても、それがなにか意味があるのだろうか。B組の女子に仲間外れにされ、今は別クラスの女子……たとえば古川とか……に構ってもらっている、その延長上に乙彦が置かれているとしたら、それこそたまったものではない。

好きではないが、嫌いでもない。唯一はっきりした関心があるとすれば、
——立村を救ってくれるであろう、数少ない味方のひとり。
それだけだ。

「悪いが、俺は清坂に全くその手の関心を持っていない」

「本当かあ？」

「本当だ。俺は嘘を言いたくないし、言う気もない」

気迫に呑まれたのか、藤沖は腰を落として自分の背中を支えた。

「そんな怒るな。関崎、お前が真っ直ぐな気性だということは、俺もよく知っているつもりだ」

「だったらなぜ、そんな言いがかりをつける？」

「言いがかりではない。今後のための、いわゆるアドバイスだ」

ちらと入り口に視線を向けた後、藤沖は急ぎ早に続けた。

「お前は今、うちのクラスの女子たちから圧倒的な信頼を得ている。これは自覚があるだろう。だが、仮に清坂から色目を遣われてそちらによるめいたら一気にその信頼は失われるに違いない。今のお前の言葉で、まずそういう危険はないだろうという保証は得たが、清坂の性格上どうい
う行動をこれから起こすか想像がつかん。しかもお前は今、静内にベタぼれときている」

「誤解だ。訂正しろ。一度隣に座って話をしただけだろう」

再び膝詰めで抗議した。話の内容だけにぶん殴るわけにもいかないし、藤沖の言いたいことには真理も混じっている。かつての熱血関崎乙彦なら問答無用で黙らせただろうが、すでに藤沖の弟分化している自分にはそこまで感情を高ぶらせることも出来ずにいる。それがいらだたしい。

「お前の本心はわからんが、とにかくうちのクラスの連中はみな、関崎が清坂よりも静内の方を好んでいと察している。おそらく、それは受け入れられているだろう。女子たちの一部がどうい
うかわからんが、とにかくだ」

人の気配がする。藤沖は立ち上がった。すぐに首を振り、小声で囁いた。

「気をつけろ」

——何に気を付けろというんだ？

肝心要のところを告げてもらえないと、こちらとしても判断できない。

今の話など忘れたかのように乙彦と藤沖は食堂へと向かった。

たぶん、昼のゴージャスな料理を体験してしまうと、どんな食べ物でも色あせてしまうのはしかたのないことかもしれない。漂ってくるのはカレーの香ばしいにおいだけだった。

「胃にもたれるな」

からかうように藤沖が呟いた。同意してふと隣を見ると、いつのまにか静内菜種が並んでいた

。ベージュのTシャツとジーンズのみをいたってさっぱりした格好でだった。髪の毛はやはり、きちんとまとめていた。乙彦と目が合い、思わず互いに笑い合った。

「胃薬、ほしいよね」

「ああ、ほんとにな」

「でも、さっきのトイレ掃除で十分過ぎるほど消化したかも」

「ああ、そうだな」

交わした言葉はそれだけだった。すぐにB組女子たちのまとまりに混じっていった静内を何気なく眺めていると、藤沖からまた言葉を吹き込まれた。

「清坂がにらんでいた。気を付けろ」

——気をつけるもなにもあるものか。余計なお世話だ。

知ったことじゃない。たまたますれ違った相手と会話しただけでにらまれるような悪いことはしていない。

一切無視して、片岡の座っている席の隣に陣取った。盛られたカレーにいきなり、片岡が緑色の粉薬を混ぜ始めたのに疑問を感じた。麻生先生が見咎めて質問していた。

「片岡、何混ぜてるんだ？」

「胃薬」

「お前、胃薬とは口から飲むもんだろう？」

「苦い胃薬を混ぜてカレーを食べると、こくが出て美味しいと、桂さんが言ってたから」

——こいつも絶対おかしいぞ。

乙彦は思わず振り返り、B組女子の中から静内の姿を探した。すぐに目が合い、もう一度しっかりと笑いあった。清坂美里がにらんでいるかどうかはわからなかったし、確認する気もなかった。

カレーのおかわりはもちろんした。

もっとも片岡お勧めの「胃薬をカレーに振りかけてこくを出して食べる」ことはしなかったが。

部屋に戻ってきてすぐ、片岡の周囲には興味津々の面でその味わいについて尋ねる輩が集まってきた。乙彦がかまう必要もなさそうだった。

「やれやれ一安心だ」

藤沖と一緒に、宿舎のロビーに腰を下ろした。

「片岡のことか」

乙彦が尋ねると、藤沖は首をかすかに立て揺れさせた。

「ああ。あいつのことだけは俺も手に余っていたからな」

いろいろあるのだろう。ちらと噂で聞いた話からも、かなり複雑な事情を窺い知ることができる。乙彦も無理に聞き出す気はない。ただ片岡は愛すべき奴である。奴の今後にこれ以上の不幸が訪れないことを祈るのは自然なことでもある。

「それはそうと、さっきの話の続きだが」

「いい、十分理解した」

また静内菜種に対する自分の関心を指摘されるのかと思うとうんざりする。たまたま席が近かったこともあって、二言三言会話を交わしただけだというのに、またクラスの連中がにやにやするのは勘弁してほしい。これから普通の話をするにしても、余計な憶測を立てられたりしたらたまったもんじゃない。ここできっぱりと言い切っておこう。

「俺にはそういう恋愛沙汰に時間をまわす余裕なんてないんだ。本当だったら一日も休むことなくバイトをして学費を稼がねばならないことは藤沖も知っているだろう？」

「だが、そういうのは自然の摂理だ。まあいい。それよりも関崎、夜の授業の内容だが、知りたいか？」

いきなり藤沖が話を変えてきた。気になる話題に持っていってくれて助かる。

「聞いたのか？」

「ああ。今先生たちが準備している。各クラスごとに部屋を用意して、全員小さい折りたたみテーブルを前に、どうやら一時間くらい、やるようだ」

「何をやるんだ？ さっきも話したが俺は教科書を持ってきてないぞ」

「持ってこなくていいらしい。筆記用具だけでよしとのことだ」

となると、いきなり小テストでもやらされるのだろうか？ 英語科のみ集められるということは、当然のことだが長文読解あたりやらされそうな気がする。

「しんどいことになりそうだ」

「全くだ。だが大丈夫だろう。曲がりなりにもこれは合宿であって試験ではないと思いたい」

「思いたい、だな」

願望の語尾に思わずふたり、受けた。膝を叩いて思いっきり笑った。

部屋に戻ると、藤沖の予言通り部屋には、十一人分の机と座布団が用意されていた。

しかも、一糸乱れぬ風に。

乙彦がおそろおそろ、部屋に残っていた片岡たちを眺めやると、みないたずらっぽいなながらも責めるようなじましい目で訴えかけてきた。まだ麻生先生は来ていない。藤沖が問い掛けた。

「俺たちがいない間に、麻生先生に全部、準備しろと言われたのか」

「ご名答」

片岡が素直に答える。ふっと笑いが起こり、こしらえ物の恨み節はすぐに消えた。

「それは悪かった」

乙彦が頭をがくりと下げると、藤沖が九十度、腰をしっかりと曲げて後に続いた。同じく笑い声も響き渡り、みな和やかに座布団にあぐらをかいた。

「ここで全員、試験でもやらされるのか」

やたらとふかふかした座布団にしっかりとあぐらをかいて、四隅から飛び出ている細い糸をひっぱりながら藤沖がふたたび片岡に話し掛ける。

「わからないけど、きちんと揃えろって言われた。だから、机全部運んできた」

「それはすまんかった」

おどけて答える藤沖の一言一句に、みな、調子を合わせて笑う。

後ろの一番端っこにいる立村だけが、片膝を立てるような格好でぼんやり時計を眺めているのが気になった。だが部屋の雰囲気はどうも、立村を迎え入れるようなのりではなかった。もちろん立村が英語科から外されているというわけではなく、それなりに話をする奴もいるのだが、藤沖がひっぱる場面となるとどうしても無口になるのはいたしかたないところだろうか。ここで乙彦が無理やりひっぱりこむのも一つの手だが、おそらく立村の性格上、新しい問題を増やすだけだろう。

「しかし、何やるつもりなんかねえ」

「写経だったりして」

「うわあ、そりゃあやだな。あれ、正座してやるんだろ？ 般若心経をほそっこいペンですーとなぞりつづけるなんてな」

——そんな宗教くさいこと、するのかよ。

写経がいかなるものかは知らない乙彦だが、般若心経がお経であって、お坊さんが唱えるものであることくらいは理解している。歴史の時間に習った記憶がある。しかし、青大附属あがりの連中はその「写経」とやらをまるで経験したかのように語る。

「それともヒアリングか」

「まさかだろ。ラジカセなんてねえよ」

——ラジカセか。

写経よりもそちらの方が確率としては高いような気がしなくもない。

「いやいや、そんなことよかさ、中学の時やったろ。中島敦の『山月記』、あれを全員で音読させるとか。なんかめいるぜあれやると」

「ああ、うちのクラスは漱石の『こころ』だったぞ。『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』とか言うんだろ？ したら、受け役の誰かがさ、『馬鹿だ、僕は馬鹿だ』って返すんだぜ」

「まじでそれやったんかよ。すげえ笑える」

——なんなんだ、その「山月記」ってのは？ 夏目漱石くらいなら、名前と作品名だけは暗記してるが.....。

小説をあまり読まない乙彦にとっては、全く理解しがたいネタでもある。

読むならむしろ、スポーツや冒険などのノンフィクションが好きだ。

空想ではなく、嘘がない。

小説などはどれだけ素晴らしく綴られていたとしても、しょせん架空の物語に過ぎない。

乙彦は妄想よりも真実を知りたいタイプである。

——いったいこいつら、中学でどんな授業受けてきたんだ？

そういえば、実力試験での屈辱からそういえばまだ日数も経っていなかった。

——落ち込むことない。俺たち水鳥中学の国語の授業だって、ちゃんと文学作品は取り上げてたぞ。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」や太宰治の「走れメロス」くらいは！

話の内容はころっと忘れていたが、義務としてはこなし記憶が残っている。

ボロがでないように、暫く乙彦は盛り上がる他の連中を観察するのに徹していた。

「お前ら、エネルギー全開もいいとこだ。廊下まで響いてるぞ。ほらほら、全員あぐらなんかかいてねえで、さっさと正座しろ。最初くらいはそうしろよ」

男子全員がすぐに身を正した。麻生先生は青いジャージの上下で素早くスリッパを脱ぎ捨て部屋にあがろうとし、ふと振り返った。

「しかしお前ら、あれだけぎんぎん騒いでいながら、スリッパをしっかりとそろえているってのが、すごいこった」

みな顔を見合わせた。乙彦も藤沖、片岡と頷きあった。そんなお上品な躰をされて育ってはいない。

「まあいい、まずはだ。本日最後はしっかりと、一対一で自分と向きあってだな、心の中をしっかりとぞきこんで、あとはなんも考えずにさっさと寝ろ。あれだけ動いたんだからな、枕投げ選手権なんかやるような気力なんてないだろ？」

——甘い。

麻生先生は明らかに甘く見すぎている。乙彦は断言する。安易もいいとこだ。

——夜は長いぞ。そういうもんだ。

それでも足を崩さず正座していると、だんだん膝と足首のあたりがぴくぴくしてくる。膝頭をひらいてみるが、それでも落ち着かない。かつて正座なんて、法事か学校で体罰受ける時かのどちらかでしかしたことないんじゃないだろうか。乙彦はしばらくその痛みを耐えた。どうも自分だけではないらしいのが救いだっ た。

目の前に配られたのは、一枚の藁半紙。

「いいか。お前ら。書くための紙ならたくさんあるからな。いくらでも持ってけ。これから約一

時間、俺が掲げた題いくつかからどれか選んで、紙いっぱい書き込め」

——作文か。

乙彦も全く想像していないわけではなかった。教科書、辞書の持ち込みなしで行われる授業には作文も入る。得意とは言えないけれども書けないわけではない。さてどうしようか。与えられた題にあわせて書けと言われても、その題がぴんとくるものでなければ困る。

「先生、題はどういうものですか」

乙彦よりも早く、藤沖がすぐに挙手して問うた。

「お前らが好きそうなものを選んできたがな」

思わせぶりに麻生先生は鼻の頭を指でこすった。

「まず『家族について』『友情について』『将来の妻へのラブレター』あ、これはだな、今の彼女に対してじゃないぞ。未来の嫁さんに今から伝えたいことをだ」

ありふれているのか、それともぶっとんでいるのか全く見当がつかない。はっきりしているのは乙彦が決して三番目の題を使用して作文を書くなどありえないということだけだ。

「その他には」

「自分がかつてしでかしてしまった失敗についての懺悔文。これだったらいくらでもネタがみつかるんじゃないのか？ まあこんなとこだ。描きたいテーマとかあるか？ あとそれとだ、いい忘れてたが」

一番肝心なことを言わないでどうするつもりなのだ、この人は。

「その作文なんだが、人に見せるものではない。よって点数なんてもんもつけない。ただ、すべて回収して、学校に保存しておき、一年終了時に返すことにする」

全員、「えーっ？」の大合唱。口をぽかんと開けたまま。

「なんのためにそんなことをするのですか」

後ろの方から質問が飛んだ。ずっとこの合宿中、閉ざされていた声だった。

「立村か」

麻生先生は適当にあしらうように答えた。

「いい機会だ。これからこういった形で、自分のために自分が書いた作文を溜めておいて、読み返すという訓練を行っていく。附属中学の頃は、文集という形を取っていたらしいが、それだと他人様に読ませるためのものになってしまうだろう。まあ、それが悪いとは言わないが」

どうして同じような質問でも片岡には懇切丁寧に語りかけるのに、立村に対しては手厳しいのだろう。特にいびっているというわけではないのだが、声音に硬い氷のような板が敷かれているような流れ方だった。古川こずえの言う通り、生理的に合わないだけなのかもしれないが。

立村は正座を崩さず、その手を机の上で軽く握ったままでいた。

感情を読み取れなかったのは、血の気が引いていたからだろう。

「今、お前らが書きなぐった作文は、十五歳、もしくは十六歳、その時何を感じたかがすべて詰まっている。そしてその自分自身は一瞬一秒ごとに変化していく。こうやって座っている間にも、お前らの成長は止まらない。この瞬間いた自分は、次の一秒後には消えている。思考も、また生き方へのスタンスも、哲学も、すべてだ」

また麻生先生お得意のお説教が始まった。決して暗くならないのが麻生先生の特長。

「まず、この日の自分が何を考えていたかを残すこと、それをまず考えろ」

すでに立村に向かってではなく、麻生先生の視線はすべて乙彦をはじめとする他の男子に注がれていた。或る意味、目立たぬ形での拒絶にも見えた。

「次に、ここに書き残した自分を、一年後の自分がどう見つめるかを少し想像してみろ。その上で、かつての失敗を今の自分ならどう回避するだろうかとか、シチュエーションをいろいろと考えることが、今回のテーマだ」

立村はそれ以上問い掛けることをしなかった。麻生先生も確認を取らなかった。

乙彦も、題名を選ぶことにかまけていて、それ以上他の連中に関心を払わなかった。

——家族より、友情より。

何かがかきんと鳴った。

——一年後の自分が、たやすく片付けていると信じるならば。

乙彦は綴り始めた。シャープの芯はまだ残っていた。消しゴムは出したけれどもほとんど使用することなく、ただ思うがまま、滑りやすくかつ文字の書き込みづらい薄い灰色の紙に殴り書きし始めた。書くことなど、あとは自分の心の動くがままに。

「おいおい、関崎が書き始めたぞ、お前らも続け」

麻生先生に促され、他の連中も仕方なく紙とにらめっこし始めた。

◇ 中学時代の失敗について 一年A組 英語科 関崎乙彦

僕は中学時代、生徒会活動を行っていた。

いろいろ大変なこともあったが充実した三年間を過ごすことができた。

最初は陸上部とかけもちで続けるつもりでいたが、体力と時間の問題もあって、結局生徒会一本に絞った。結果としてそれは正解だった。僕の性格上、ひとつのことに集中すると、他の物事に目が向かないため、虻蜂取らずになってしまいそうだったからだ。それを回避できたのはよかったと思っている。

◇

ここまで一気に書き込み、乙彦は呼吸を整えた。

例えは変だが、身体をほぐすウォーミングアップをしたようなもの。

もともと書くことがそんな好きではない乙彦なのに、なぜかこの瞬間は書かねばならない欲求に駆り立てられている。その原因も自分自身わからない。ただ、麻生先生の言葉に、乙彦の中の火薬庫が火を噴いた、そんな感じに近かった。

◇

精一杯やるべきことを行ってきたつもりだが、生徒会役員同士のいざこざも多く、喧嘩も絶えなかった。特に僕と同じように一年の秋、生徒会副会長に任命された総田とは、最後の最後までいがみ合っただけだった。しかし今思えば僕は、総田からたくさんのことを学んだと感じている。それはすなわち。

◇

ここまで書いたところで、言葉が詰まった。
単純に書いてしまえば、

◇

本来、卒業式の卒業生答辞は生徒会長が読み上げることとなっていた。しかし、僕たちの代に関して言えば、会長が立たずその代わり、生徒会副会長が実質的会長の権限を得る形となっていた。かといってふたりで読み上げるわけにもいかず、卒業式ぎりぎりまでかなりもめた。僕はどちらでもよかったが、

◇

——いや、違う。
初めて、自分の中にメスが入った。
灰色の紙に薄く綴られた自分の文章が、すべて嘘に思えてくる。

——俺は、本当は、自分でやりたくてならなかったんだ。
——総田が降りると言い出すまでは。

乙彦は消しゴムでその一文を消した。
どちらでもよくなかったのだから。嘘は書けない。
一年後の自分がどういう風に受け止めるのか、わからない。ただはっきり言えるのは、たった二ヶ月ちょっと前の段階に答辞のことでこだわっていた自分とは違うというそれだけだった。誰も読まないであろう作文の中に、乙彦はひとり、綴った。

◇

学年トップの成績を保っていたのだから僕が選ばれると思っていた。しかし、全校生徒からの受けがよかったのは総田だった。だから概ね、総田が選ばれるであろうと思っていた。しかし、その話がきた段階で総田は僕に答辞の役割を譲ってくれた。なぜそんなことをしたのか、最初は

馬鹿にされたと思ったけれども、あとである人から教えてもらい気がついた。あれは、総田が僕と三年間過ごしてきたことへの、けじめだったのだということだった。

◇

言葉が伝わらない。「ある人」の名は、佐川雅弘でもあり、そして。

——水野さんは、もう学校に慣れただろうか。

受験が終わり、答辞を渡され、総田に譲られたということにひっかかりを覚えていた乙彦に、雅弘がこっそり耳打ちしてくれた言葉を、この藁半紙に残すべきか、乙彦は迷った。

——おとひっちゃん、総田はさ、きとおとひっちゃんと一緒に三年間生徒会やってきてよかったんだと思っているって。俺、この前聞いたんだ。どうしておとひっちゃんに答辞譲ったんだって。だってそんなことしたらおとひっちゃんばかにしたって怒るだろ？

総田、言ってたよ。おとひっちゃんみたいに、ずっと努力をしつづけることはできないって。それはそれで自分の生き方だけど、これから先、何十年か後におとひっちゃんみたいな奴と出会ったら、もっといい形で友だちになるチャンスがあるかもしれないからってさ。年寄りくさいこと言うよね。でも、なんか、俺、わかるんだ。

——総田くんはきっと、関崎くんと本当は友だちになりたかったらしいの。でも、卒業までいろいろあったし、そんなこと言えないけれど、せめて卒業式前にはきちんと向きあってお互いを認め合って卒業したい、って話していたらしいの。佐川くんが教えてくれたの。

乙彦はしばらく考えた。そして書いた。

——僕は、あの時から総田を認めざるを得なくなった。

総田が、僕以上に人として、大人であるということを知った。

自分と異なる性格の男子を受け入れることのできる、懐の深い男であることを知った。

それにくらべて僕は、最後まで彼を軽蔑したまま卒業しようとしていた。

総田のお蔭で僕はぎりぎり、自分と違う人間をばかにするようなことをしないで、卒業することができた。

本当はもっと、違う言葉で書きたかった。ありふれた言葉だらけ。

自分の内面から湧き出た、ぷちんとはじけたにきびの膿のようなもの。

——俺は、総田に、男として負けた。

だから、高校では、同じ過ちを犯さない。

軽そうに見えるとか、外見とか、そういったもので人間を判断しないようにすると決めた。

中学時代の、ひとつの価値観に凝り固まったままの、つまらぬ人間でありたくない。

誰にも見せない作文だからこそ、ここまで書くことができた。

乙彦は少し付け加え、推敲を簡単に行い、書き上げた藁半紙を四つ折りにした。

「先生、作文はどこに提出すればいいですか」

「おお、関崎、早いな」

他の連中の様子を見ると、みなうんうん唸っていた。どうせ自分しか読むことのない作文だし、書きようなければ悪戯書きしてもいいのにそれをしようとしな。真面目な連中ともいえる。

「じゃあ、この封筒に入れろ」

麻生先生は細いクラフト封筒を手渡した。一緒にスティックのりも取り出した。

「しっかり封をし、自分の名前と学年組番号を入れておけ」

乙彦は一年後の自分宛として、「関崎乙彦へ」と宛名を入れた。裏返し、差出人のところには、本日の日付と時間、そして「新歓合宿第一日目夜 関崎乙彦」と名を記した。

とことんオールナイトするのがもちろん、合宿での礼儀だと思う。
だからこそ、きちんと徹夜のために気合を入れねばならないとも思う。
しかし、いかんせん乙彦の体内時計は完璧に朝四時半起きにセットされてしまっている。
だから、なのだ。
布団を敷いてみな用意されたパジャマに着替え、何か話そうとしたのは覚えている。
藤沖が右隣、片岡が左隣。
立村の姿はなかったことも記憶している。
しかしそこまでだった。
まばたきひとつした瞬間、空にはかすかに朝日が昇りはじめていた。

——つまり、そのままぶっ倒れたってことか。

少し寒さが残るのは、やはり青潟市内よりも気温が低いせいなのか。鳥肌が立っていた。布団をかぶっていたということは、誰かが自分の持ち場まで運んでくれたのだろう。側でみな、死体のように布団を剥いだまま眠りこけている連中をひとさし眺めた後、乙彦はまず大きなあくびをひとつした。腕時計ははめたままだった。覗くとちょうど四時半を回ったところだった。

片岡がなぜか、大の字で布団をけとばしたまま寝ているのには笑えた。

藤沖がいびきかいて気持ちよさそうに眠っているのもあいつらしい。

立村がどこで転がっているのかはわからなかった。

——オールナイトに参加できないのは残念だが、まだあと一日あるな。

前の日はとことん身体を動かし、たらふく飯を食い、一風呂浴び、あれで眠くならない方がまずおかしいだろう。乙彦は寝つきがいい方だし、たぶん、周囲でのおしゃべりも全く聞くことなく眠ったのだろう。いや、眠ったという意識がない。

——あとで藤沖あたりに聞いてみよう。

今日はバイトもない。起床時刻は六時と定められているからあと一時間くらい寝なおしてもいい。しかしそうするにはもう、乙彦の身体が十分過ぎるほど活動したがっている。

——せっかくだし、この辺走ってみたいな。

パジャマのボタンが外れているのをそのまま、乙彦は部屋の開け放たれた窓辺に向かった。なぜか窓のカーテンを閉めずに寝ているところが間抜けである。とはいえ、乙彦はそれに文句を言う気はない。夕焼けに似ていて、ほんのわずかにピンク色に染まる夜明けの空を眺めると、やはりいつも通り準備体操をして、ラジオ体操第一までは終わらせ、そのあといつものように町を一周したくなる。乙彦の、中学時代からの習慣だった。

一応、今日の予定では朝から制服を着て行動することになる。どういう内容なのかは藤沖もよくわからないと話していた。

——けどな、やはり走るならジャージだろう。

素早くジャージに着替え、掛け布団だけたたんだ。

走りたい気持ちだけは先にくる。しかし冷静に考えてみると外にいきなり出るのも問題があるような気がした。この一ヶ月、乙彦もずいぶんやりたい放題やらせてもらい、さほど怒鳴られずにすんではいるけれども、それはもともと校則違反をしでかしていないからのことだ。アルバイトにしてもそうだ。すべて教師サイドに話を通した上で行ったことだ。書類関係もすべて麻生先生の指示通り渡してある。単に、乙彦は大人の言うことを素直に聞いているようでいて、実は自分のやりたいことを押し通しているだけなのかもしれない。他の連中がやるような反抗なんてしていないのに、ほとんどの要求が通じる空間、それが青大附属という場所だった。

初めて、校則違反したい気持ちに駆られた。

足首をひねらないように何度も回し、腹筋・背筋・屈伸を十回ずつ行った。

——やはり、走りたいよな。

身体がうずうずしてくる。体中の水分が蒸発してきそうなくらい、求めている。洗面所で水を飲んだ。喉の渇きだけしか満たされない。

——やはり、これはこっそり、走るべきか。

まず常識的には、許されない行為だろう。

乙彦もその点は十分わかっているつもりだ。

一生徒が、ただ走りたいというだけで、こっそり早朝宿を抜け出しジョギングするなんていうのは決して褒められた行為ではない。許可をもらっておけばまだ話も違うかもしれないが、もう朝が来てしまったのだから、遅すぎる。

そこまで考えて乙彦はふと、膝を叩いた。

——先生方が寝てるわけないぞ。

水鳥中学の修学旅行、さらにさかのぼって小学校の修学旅行。

引率の先生たち、みな、一睡もせずに目の下くまをこしらえていたではないか。

青大附属とはいえ、のうのうと寝ている奴がいるわけない。

それなら、話は早い。

——だめでもともと、話を通してみよう。

時計の針はほんの三十度程度、左へ進んでいた。

もともと乙彦は教師連中を敵だと思ったことがない。教師運が比較的いいほうだったとは思っている。青大附属においても、麻生先生にいつのまにかひいきされくすぐったさすら覚える。他の先生たちにしても、今のところは面白い奴程度にしか見られていないらしい。これから先はわからないが、まずはしばらく優等生のままでいこう。別に乙彦は優等生だとも思っていない、ただのシーラカンス……総田談……だと開き直っているけれども。

だから、取り付かれたかのように反抗する連中の気持ちがわかるようで理解できなかった。最初から話せばいい。納得するまで先生たちに抗議すればいい。それも理屈に合った形で。

そうすればみな、耳を傾けてくれる。

百パーセント受け入れてもらえなかったとしても、七割がたは受け入れてもらえる。

中学時代も教師たちには、受け入れてもらえた。弾いたのはむしろ、全校生徒の方であって、彼らに対してわかってもらうよう語りかけることの難しさの方が、乙彦にはしんどかった。

——麻生先生は起きてるか？

可能性としては七割がた、目覚めているだろう。

乙彦は足音を忍ばせてスリッパをはき、戸をそっと閉めた。

部屋の窓は開けっ放しにしておいた。ぐちゃぐちゃのスリッパを直しておくなんていう、お上品なことをする気はなかった。

そっと、廊下を歩いていく。

かすかに誰かの喋り声が聞こえる。

どうやら本気でオールナイトしでかしたクラスが存在するようだ。乙彦がまばたきひとつでなくした貴重な夜を、そいつらはしっかり堪能したらしい。さりげなく悔しさひとつ。どうやらB組の男子部屋のようなようだった。

——ということは、もう起きてるな。

乙彦が共用の男子トイレ前までたどり着くと、そこにはすでに先客が数名たむろしていた。早起きは乙彦だけではなさそうだ。寄る気はなかったので様子だけ伺った。男子トイレ中でもひそひそ声がしたが、どんな内容なのかは聞き取ることができなかった。

——部屋の中にもトイレがあるのになんでわざわざ、外に出るんだ？ 女子じゃあるまいし。深い追求はしないでおく。急いでいるのだ。

やたらと目覚めの早い男子部屋を通り抜け、ようやく食堂近くの教師部屋に到着した。

乙彦の読み通りだった。

扉をノックし、内側の襖に手をかけようとする間もなく、さっと開いた。出てきたのはやはり、麻生先生だった。乙彦を見て、ぎょっとしたようだった。

「関崎？ どうした」

かなり眠そうではあるが、ジャージ姿ではある。

すぐに身動きできる態勢でいたらしい。部屋の奥には、ほとんど乱れていない布団の上に他の男性教師が二人ほど、同じように身構えていた。

「おはようございます」

まずは一礼し、後ろのふたりにもまた同じく九十度の礼をした。

「これから、いつもの習慣でこの辺を一周、ランニングしたいんですが、許可をもらえませんか」

「ランニング？」

素っ頓狂な声を挙げたのは後ろの若い教師、日暮先生だった。麻生先生は飲み込めないように首をひねりつつ、

「ランニングってお前、まだ夜も明けてないだろう。寝てないのか」

「いえ、寝ました。七時間睡眠はとったはずです」

九時過ぎにこたとひっくり返ったと考えると、だいたいそのくらいは。少なくとも普通の睡眠時間よりは長いはずだ。

「よく眠れたなあ。他の連中は枕投げに命かけてたつてのに。何度注意しに行ったか覚えてないのか」

「眼を開けたら、もう、夜が明けてました」

乙彦は感じた通りのことを言い切った。

「なので、いつもどおり目が覚めました。うちではいつも、朝、青潟駅の周辺を一周してます。一日でもさぼると、身体がなまります」

本当はいつでも陸上に復帰できるように、との思いもあったのだが、現実問題すでにそのことは忘れてる。ただ。身体を動かさないとどうもだるくなってしまいくならないことに頭が行ってしまうので、あえて発散させてしまうというところもある。そんなことを説明はしなかった。

「一日くらい、いいだろう？ 今日もまた疲れるんだぞ」

「はい、それは覚悟してます。ただせっかくなので、提案なんですけど」

乙彦なりの提案を掲げた。

「僕と一緒に、先生も走りませんか」

後ろで大爆笑が起こった。ぽかんとした麻生先生の背で、日暮先生はひたすら、

「麻生先生と、走るってか、おいおい」

布団をたたかばかりにうつぶし、高らかに笑い転がっていた。

「いえ、冗談で話しているわけではありません」

少しかちんときたので、乙彦なりにまずは説明することにした。

「僕は生徒です。ひとりで宿を抜け出して身勝手な行動をするのはよくないことだと思います。集団行動の輪を乱すことはよくないです」

「悪い、関崎、お前が真面目なのはわかるが、明らかに今の提案、冗談にしか聞こえないぞ」

麻生先生の少しあきれたような口調に、乙彦は首を振った。

「僕は真面目に話をしています。ただ、やはり朝走ることは健康にもいいですし、ここは青潟よりも空気も綺麗ですから、きっと身体にもいいと思います。そこで、僕が問題行動をしないよう見張るという名目で、見張り番としてだれかひとり、先生がくっついてくれれば、問題はないんじゃないかと思うんです」

「見張るって、そんなお前信頼されてないけども」

言いかけた麻生先生にまた、乙彦は首を振った。

「違います。僕は、生徒として、きちんと筋を通したいだけです。こっそり抜け出すような姑息な手段を取るのではなく、正々堂々と、きちんと伝えたかっただけです」

「じゃあ関崎、もしお前がそれを許されなかったとしたら、どうする？」

口を少しひきつらせるように、麻生先生は額を抑えながら尋ねた。

「しかたないんで、それなら玄関でラジオ体操と、なわとびをします」

「なわとび？」

また笑おうとする日暮先生を、麻生先生はふりかえり無言で見つめ、また乙彦に向いた。

「縄なんてあるのか」

「はい。運動およびいざという時のために、持ってきました。中学の授業で使ったものです」
きっぱり告げた。

「関崎」

「はい」

「俺は青大附属で教師をして二十年近くになるが」

言葉を切り、もう一度日暮先生に目を向けた。

「集団研修中に生徒から、朝のジョギングに誘われたというのは、生まれて初めての経験だ。日暮先生、どう思う？」

問われた日暮先生は大きく頷きつつ、乙彦をおもしろげに見つめた。

「だろう。筋を通す。きちんと提案する、それは素晴らしい。だがひとつだけお前は学ばないといけないよ」

「申し訳ありません」

「俺が、何歳かということ、もう少し考えてから提案すべきだったな」

独り言のようにつぶやき、

「関崎のやる気はおおいに買う。だが、朝のジョギングで心臓をパンクさせる可能性のある俺には付き合いきれん。ということでだ、日暮先生、悪いが関崎に付き合っ、この辺一周してもらえないか。生徒のやる気にはとことん付き合うが、うちの学校のモットーだ」

「すみません、先生それ、まじですか？俺が走れっていうんですか？」

「ああ、四十を過ぎると身体もがたがくる。日暮先生はまだ若い。身体を張った教育は、若いうちに経験しておいた方がいい。それにこの関崎は、闇討ちなんぞしないから、安心して走ってきてください。さあ、じゃああとは、まかせたよ」

さっきまでへらへらしていた日暮先生は、ぽかんと口を開けたままだった。

日暮先生はD組の担任だった。D組の知り合いがほとんどいないし日暮先生の授業……専門は書道……を受ける機会もなかったのも、どういう人柄かはきいていなかった。ただ、まだ若く、二十代半ばということだけは噂で流れて来ていた。しかし、この人柄みるに、どうも精神年齢は中学生以下じゃないかと思わずにはいられなかった。こういう人がなぜ、青大附属の教師にもぐりこめたのか、謎である。

見た目もかなり細身のかっこつけたがりタイプ男子風。

どう見ても、運動が得意なようには見えなかった。

なくなくジーンズとTシャツに着替えた日暮先生は、麻生先生の、

「じゃ、日暮先生、関崎のナビゲーターをよろしく」

明るく見送りに溜息をつきつつ、玄関へと向かった。乙彦の顔を恨めしそうに眺めて、

「一日くらい、走らなくてたいしたことないだろう？」

「やはり、違います。無理をお願いして、申し訳ありません」

深く乙彦は礼をした。慌てて日暮先生が頬をかたくし教師の表情を浮かべる。

「いや、麻生先生の言う通り、青大附属は生徒たちの自主性を最も大切にしている学校だからな。ただできれば前もって、この研修が始まる前に」

「いえ、本当は徹夜するつもりでしたが、何時の間にか寝てました」

同じ説明を繰り返していると、やはり自分がアホに思えてくる。乙彦はスニーカーの紐を結び直し、もう一度頭を下げた。

「では、先生、よろしくお願いします」

不安げな顔を覗かせたように見えたのは気のせいだったのだろうか。

気のせいでは、なかった。

最初走り始めた段階で、少しまずいとは思ったのだ。

乙彦も最初は軽く流すつもりでいたのだ。

昨日、トイレ掃除をさせられた公園まで走り、その後は適当にぐるりと一周するつもりだった。たいして疲れることもないだろうと甘く見ていた。

気がつくとき日暮先生の姿は後ろになかった。どうやら置いて来てしまったらしい。乙彦は結局、あとからてくてく歩いている日暮先生を捕まえて、もう一周走る形でフィニッシュを迎えた。

いつものペースでちょうどいい疲れが残った程度。しかし、

「悪い、関崎、もう勘弁してくれ。俺は文系なんだ」

などと、わけのわからない言い訳でリタイヤする日暮先生にはなんと言葉をかけたらいいかわからなかった。

朝の空気、太陽の透明な輝き、頬にあたる少しとがった感覚の風、みな、気持ちよいというのにこの先生は、なに一つ受け止めようとしていない。

「先生、申し訳ありません」

ただ、あやまらねばならないような気がした。まだぜいぜい息を吐いている日暮先生と一緒にクールダウンで歩きつつ、しばらく無言でいた。

——二十代でもこんなに疲れるんだ。四十代なら倒れるかもな。

別の意味で自分の読みの甘さに失敗を感じた乙彦だった。

息も絶え絶えの日暮先生を先に玄関へ押し込み、ふとロビーに目をやるとそこには麻生先生が仁王立ちでふたりを迎えた、ように見えた。

「あの、すみません」

麻生先生の表情には憤怒が現れている。それを読み取れない乙彦ではなかった。と同時に、

「あれれ、まあ、誰が捕まってるんだ？」

日暮先生が耳元で尋ねてきた。仮にも担任持っている教師なのに、ずいぶんガキっぽい言い方をする。癪に障ったが、答えぬわけにはいかない。乙彦は、ふたりに一切視線を向けず、反対側の方で別の奴を怒鳴っている麻生先生へと様子を伺った。と同時に、その怒鳴られている奴がやはり、うちのクラスの男子だともすぐに気がついた。

「お前、あれだけ個人行動を控えろと言ったのに、なんでまたひとりで動こうとする？ 関崎を見る！ 関崎はわざわざ朝一番で俺たちの部屋に挨拶に来て、ちゃんと筋を通して朝のランニングに出かけたんだぞ。お前みたいに、ひとりでふらふらとこっそり出かけたわけじゃないんだ！」

乙彦はその男子が、ジャージではなく制服をきちんと着ていることに、少し驚いた。皺もなく、シャツも新しくしているようで襟がぴんと張っていた。スニーカーだけが少し、青く草木で汚れていた。口答えせず、ただ黙って玄関の端で、じっと顔をあげていた。

「うちのクラスの、立村です」

それだけ呟き乙彦は、すぐに麻生先生の前に駆け寄った。

「先生、立村が、なんかしたんですか」

麻生先生が答える前に立村は、乙彦に向かい、首を振る仕種をした。

——何しでかしたんだ、またこいつは！

怒られる理由はどこかにあるのだろう。しかし、一方的に責められたままでいるのを、放置はできない。それが十五年間の人生における、関崎乙彦の矜持だ。

——また黙りこくって、すべてを飲み込んで、いじけさせてはならない。それが立村に対する、俺の、やり方だ。

俯きながら、立村が何かを呟いていた。

その言葉を聞き取ろうとしたが、かすか過ぎてできなかった。

「立村、お前も外に出たのか」

答えはなかった。麻生先生が面倒くさそうに首を振った。

「関崎、お前は部屋にもどってろ」

「もどりますが、こいつも同じ部屋なので、たぶん他の連中が心配してるんでないかと思います」

乙彦はまず、立村をちらと見た後、麻生先生に立ち向かった。

「だから、理由をきちんと聞いて、僕から説明しておく必要があると思います」

「個人の問題だろう。お前も疲れているはずだ。少し休め」

「はい、休みます」

条件反射で答えた。麻生先生の言うことは間違っていないだろう。状況は読めないがどうやら立村は、乙彦と違い自分からひとりで外をうろついていたようだ。乙彦が起きた段階で立村が部屋で寝ていたかどうかは……覚えていない。いないのだが、まさか四時半前に目を覚ますなんてこともないだろう。

「立村、とにかく理由を説明しろ。なんでひとりで、そんな格好で外をふらついていたんだ！」

やはり答えなかった。小さく何かを、また呟き、俯いた。

「いいか、オールナイトして騒いでいたんだったらまだわかる」

麻生先生は乙彦を無視して、立村に問いかけた。

「そういう場合はその場で怒鳴られるのが筋だ。そういう奴もいた。だがその場限りだ」

立村の表情は変わらなかった。

「だが、お前の場合は違う。なんで靴を履いて、ひとりで夜中ふらふらしてたんだってことだ」

「申し訳ありません」

ふてくされた風に立村が詫びの言葉を呟いた。

「顔をあげて言え」

「申し訳ありませんでした」

「だから、そういう心にもない詫びを聞きたいわけじゃないと言ってるだろうが！」

それでも麻生先生は、わめきはしなかった。必死に何かを抑えているようだった。

——なんで外散歩したいんだったら、先生に一言言わなかったんだ？

乙彦は双方の顔を眺めながら、自然に疑問を感じていた。

——よくわからんが、俺と入れ違いか、それとも前かわからんが、ひとりでうろうろしたくなつたんだろう。いや、もしかしたら朝、身体を動かしたかったのかもしれないぞ。身体のために朝、ジョギングするのはよいことだ。

去年、一度、立村の頼みでリレー用の走りをレクチャーしたことがある。確か秋だった。球技

大会でクラス対抗リレーの選手に選ばれ、必死だったらしい立村に泣き付かれた。あの時の走りを思い出すと、それなりにいいタイムは出していたような記憶がある。陸上部でばりばり活躍できるほどではないにしても、鈍足ではなかった。男としては朝一番に身体を動かしたいというのは、自然の要求でもある。

本来ならばここで立村へ「素直に謝れ」としかりつけ、その上で乙彦が連れて帰るのが妥当だろう。自分の立場は規律委員だし、立村がやらかしたことは明らかなる規律違反なのだ。それを厳しく制する必要がある。しかし、一方的に叩きのめすというのも間違っているのではと乙彦は思う。

——先生が怒るのはわかるにしても、部屋に戻って立村の立場がさらに悪化するということもまずい。

乙彦なりに様子を伺ってはいるのだが、日ごとに立村の立場は悪化の一方を辿っている。自業自得といわれればそれまでだが、このままでは一年A組内のモラルが下がり、乙彦および藤沖のモットーとするクラス運営ができなくなる。色々と後ろ暗い過去を持つ片岡が、無事男子たちの輪に入ることができてほっとしている状態ではあるが、藤沖は立村を自分から迎え入れようとする意志を持っていないようだ。となると、乙彦が陰日向なく面倒を見るしか方法はないのではないか。

「先生、立村の件については、僕が後できちんと問いたします」

意を決し、乙彦は二人の間に割って入った。見下ろす格好の麻生先生の前に挟まるかっこうとなった。少し身を引いた麻生先生は、乙彦を手で除けるようなしぐさをした。

「お前とは関係ないだろう。とにかく部屋に戻れ」

「いえ、僕は一年A組の規律委員ですから、規律を乱した同級生にきちんと接する義務があると思います」

「ここで規律委員を持ち出すのか？」

乙彦に話し掛ける麻生先生からは、なぜか身体から発せられる空気がそよいでいるようだった。ついさっきまで立村を怒鳴りつけていた時は、竹刀で思いっきりぶったたいているような気迫に満ちていたというのに。なぜかこの先生は、乙彦に対して不思議と甘い。

「はい。青大附属の規律委員がどういうことを行うのかはわかりませんが、少なくとも間違っていることを許してはならないと思っています」

「それはそうだが」

言葉に詰まる麻生先生の後ろを、そっと日暮先生がすり抜け、奥の廊下を走っていくのが見えた。そんなの気にしているひまなどない。

「ですが、同時に、僕は一年A組のクラスメートとして立村を守る義務もあります」

「義務？」

「はい、クラスで同じ部屋にいた以上、本来ならば規律委員としての僕が立村の抜け出したことに気付くべきでした。そしてすぐ注意するべきでした」

「いや、関崎には責任は」

半ばあきれた風に、麻生先生はいつものどかな声を出した。機嫌はよくなりつつある。理論立ててきちんと話せば、ほらそうだ、ちゃんと大人はわかってくれるもんなのだ。

「先生、ひとつ提案なんです、僕が立村から詳しい事情を直接聞き出して、その後できちんと報告するというのはどうですか。たぶん何らかの理由はあったかと思うのですが、やはり守るべきモラルはあるわけだから、それでもってこれからどういう形でもって、反省していくかを僕と立村なりに考えていけば、たぶん、再発はないと思います」

自分なりに考えた瞬時の発想だ。

杓子定規で融通が利かない自分の性格。

本来ならば「自分が誘ってジョギングに連れ出すつもりだったが、タイミングが合わなくて」くらい嘘を言えればいいのだろう。しかしそれは真っ赤な嘘。嘘をついて守るよりは、真実をきっぱりと言い放ち、間違っていることは間違っていると厳しく道を正させることが大切だろう。規律委員である自分に、それはできる。同時に、ひとつのチャンスでもある。

背中で無言のまま突っ立っている立村に、同意させるべく乙彦は振り返ろうとした。

——無理にでも、頭下げさせて。

部屋に引っ込もう。まずはそれが乙彦の読みだったはずだった。

廊下の奥から駆け込んでくる、男子がひとり。

麻生先生よりも先に、乙彦はそいつの顔を見た。認識した。

——あいつは……？

顔も名前も一致している相手だった。

「麻生先生、すみません、ちょっと説明させておくんない」

——なんだその怪しいイントネーションは。

名前は一致していたが、すぐには出てこなかった。乙彦の背で、動く気配がした。肩あたりに空気が隙間を作ったようだった。

「天羽、お前」

——そうだ、天羽だ。

天羽忠文。一年C組男子で体育委員。かつ。

——立村の後釜で評議委員長となった奴だ。

髪の毛がだいぶぐしゃぐしゃしていたが、制服はきちんと纏っていた。立村と違うのは、その制服がかなり皺だらけというところくらい。いわゆる、男子の格好としてはごく普通。立村だけがしゃれっけあり過ぎるだけだろう。

「何だ、天羽」

すぐに麻生先生は振り返り、半身を向けた。乙彦、立村のふたりにはしっかりと身体をみせたまま。

「C組で何かあったのか」

「いやいや、そんなことではございあせん。てか、立村、お前、タイミング悪すぎるとちゃうのかよ、なああんさん」

全く理解できない方言を遣う。こいつの出身地は青潟ではないのか。笑わせたいのかどうか分からないが、麻生先生は笑わなかった。代わりに溜息をひとつ吐いた。

「用件をまず言えよ」

「ああ、すみませんがなあ。ただちょっと、ねえ、これは男子同士の複雑なもんもありやして」話を逸らそうとしているのか、それともごまかそうとしているのか、それは定かではない。少なくとも乙彦には読み取れなかった。麻生先生にも理解不能だったようで、いらだつらしい。

口調だけは事務的に、

「何が言いたいんだ」

まずはそう尋ねた。

「いやあ、先生、今、俺の提案でもって立村が思いっきりへまやらかしたってことで、ちょっと言い訳させていただきたかったんでやんす」

口調とは裏腹に、天羽は一步一步、麻生先生の前に近づいてくる。妙な圧迫感がある。乙彦に目を向けてはいない様子だった。

「これは男子でないとはわからぬ、事情がありましてですね」

「なんだそれは。早く要点だけ言え」

「つまり、朝の、なにですか」

「なに？」

演技っぽく身体をくねらせようとした天羽だが、ふと乙彦に視線を留めた。一瞬、その目が素に戻った。あ、と思う間もなく天羽はえせコメディアンの仮面をつけた。

「先生、実は俺たち、中学の修学旅行の前からですね、ひとつ、こういう集団活動の時に約束をしとったんですわ」

おもむろに天羽は語りだした。顔には確かに、人のよさそうな笑顔を貼り付けている。しかし、さっきちらと投げかけた冷ややかな視線を、乙彦は確かに受け取った。

「毎朝、四時半に、人気のない男子便所前に集合し、朝のさわやかなお通じを済ませるってことなんだけど、わかるかなあ、わかってくれますよねえ、先生」

言われた意味がわからず、理解するのに乙彦は約一分を要した。

「朝一番のうんちかあ？」

啞然としてたのは、麻生先生も同じのようだった。

天羽は照れもせず、声のトーンもそのままにやけつつ、話を進めた。

「やっぱし、長期間の旅行ともなると、便秘になっちゃって腹も壊しやすいってのがあるわけなんですわ。で、俺たちの先輩にあたる評議の人たちが、前もって朝一番の快腸快便を心がけるよう、早朝一番、きちんとふんばるようとアドバイスしてやしたんす。ただ、やっぱし、男がねえ、あの集団の部屋のトイレでねえ、派手に個室に籠ってふんばるといのはかなり、苛酷な試練ですよ」

「言いたいことはわかるぞ」

なぜか麻生先生は納得顔である。

乙彦は後ろの立村の表情を覗きこんだ。

目を見開いたまま、真正面から天羽を見つめている。乙彦の存在はお留守だった。

「で、考えたんが、俺たちがまず朝一番でお互いの個室タイムには干渉せず順番で心おきなくすっきりしようってことってわけなんですよ。幸いここでは個室が二部屋あったんで、まずはじゃんけんで順番決めて、まあ、その、何ですか」

「で、お前は済ませたのか、天羽？」

真面目くさった口調で問い返す麻生先生に、天羽は笑顔いっぱいであげた。

「もちろんでさあ！ すっきり出すもん出して、もうさっぱり。けどですねえ」

言葉に含みを持たせつつ、立村を指差した。

「こいつ、どうもねえ、厳しかったみたいなんで、そいでリーダーたる俺としては、なんとかしてやらにゃあなあと。ただでさえ一日目は車酔いで半分死人だったわけだし、朝のお通じも詰まっているようならやばいよなと考えたわけであって」

「ずいぶん過保護だな。評議委員同士ってのは」

「友情は血よりも濃いつてことですよ。先生。そこで、俺たちとしては立村にまずその辺を一周くらい走って、水を一リットル飲み干して、まずは便秘を解消してこいと指示したんですよ。俺はそれでちょっとしたふんづまりは治る体質なんで、たぶん立村も大丈夫だろうと見積もってます」

後ろの左肩あたりから声がした。

「違う……」

声は麻生先生、そして天羽に届かなかった。乙彦だけがその言葉を拾った。

「で、立村を散歩に送り出し、俺たちはすっきりした腹をかかえて部屋で二度寝したわけなんです、あー、あー、そうか、そりゃまずかったわな。先生、この件については俺が二百パーセント悪いです。帰ったらそれなりのペナルティ受けますんで、あわれな立村にはそのあたり、お目こぼしを」

「違います」

今度ははっきりと、立村が乙彦の前に一步踏み出した。

「天羽の言うことは、そんなわけではありません」

すぐにちゃらちゃらした口調でもって、天羽がまぜっかえす。

「恥ずかしがらんといてな、立村ちゃん」

「そんな理由ではありません」

「そんなそんな、それよかお前、しっかりと水飲んで、すっきりしてこいよ。くそが出ないとまた車酔いするぞお」

「だから違うって言ってるだろ、なんでそんなありもしないことを」

怒気を露わに立村が食って掛かろうとしたのを止めたのは、

「いいかげんにしろ、立村」

やはり、担任たる麻生先生だった。

「立村。お前はわかってないのか」

さっきの一方的な叱責とは違う、凜とした声で。

「事実かどうか、それはどうでもいい。だが、お前は今、側にいる友だちがなぜ、お前のために駆けつけてくれたのかを、どうして見ようとしらないんだ」

「それは違います」

「ばか者、黙れ」

怒りではなく、冷え冷えたる氷の炎。

「なぜ、関崎がお前をかばおうとしたのか、なぜ、天羽が聞くも恥ずかしいネタでお前の窮地を救いにきたのか、その理由を一度でも考えて、それでお前は、なぜ否定しかできないんだ」

「それは違うから」

「いいかげんにしろ。さっき、関崎が俺とお前との間に割って入ろうとした時、露骨に立村は迷惑そうな顔をしたな。天羽が来た時も同じだ。天羽、お前の言うことをすべて疑うわけではないが、少々話が出来すぎてぞ」

「そんなあ、信じてくれないんですかあ麻生先生」

わざとらしく、それでもトーンは変わらない。そこが怪しかった。乙彦は、俯く立村とにやける天羽、それぞれを交互に眺めた。どちらも、それぞれ、自分の役割に徹し続けている。ただそれがすべて、「演技」にしか見えない。「演技」だからこそ、壊れない。

「天羽、お前の芸人根性かつ元評議委員長たるプライドに免じて、これ以上の追求は控える。朝のお通じを意識するというのは、若いながらも健康的でよいことだ。だが」

くぐもりがちな声で付け加えた。

「残念ながら、伝わらなかったようだ。本当に、残念だ」

麻生先生は背を向けた。立村には目を向けず、

「部屋にもどれ。合宿終了後、改めて話をする」

乙彦と天羽にも、有無を言わずに指で廊下の奥を指差した。

指示されるより早く、立村がそそくさと廊下を駆け抜けていった。顔を俯けたまま、乙彦と天羽には何ひとつ礼も言わず。さすがに乙彦もその態度にはかちんときた。

——あいつ、やはり一度顔を突き合わせて話をしないとまずい。

面子をつぶされてプライドはずたずたなのはわからなくもないが、しかし、それなりに助けようとしたふたりへの態度ではないだろう。思わず握りこぶしをこしらえたのを、天羽が見咎めた。ふたり以外、その廊下には誰もいなかった。

「あのさ、関崎よ」

「なんだ」

「立村が止めたから言わなくておくかとおもったんだがなあ」

にやけ顔はすでに麻生先生のもとへ投げっぱなし。乙彦に向けたのは、少しも笑みのない、鋭い視線だけだった。身構えた。口調が柔らかいままなので、攻撃できない。

「あまり調子こきすぎるのはどうかと思うぞ、関崎」

「なんだと？」

「そんな気ないのはわかってるけどな。ただ、巻き込まれる奴のことも考えてほしいってわけなんだよなあ。正論では物事、回らないの」

「別に俺は正論なんて」

——嘘を言っていないだけだ。

言い返したいが、目の前の天羽はじっと鋭い針のごとき眼差しのみ。

「立村がなんで、とっつかまったのか、教えようか」

真正面からバスの深い声で、一步近づいた。鼻と鼻がくっつきそうなほどだった。

「お前に一言もの申したいという輩を黙らせようと頭下げてたってこと、覚えておいても、損はねえと思ってな」

「どういうことだ！」

血がかあっと昇り、全身が燃える。握りしめたこぶしで思わず天羽の胸倉をつかみそうになり、必死に堪えた。かわりに爪が食い込みそうなほど、激しく睨みすえた。

「関崎、お前が規律委員たるゆえんを盾に取ってあいつと語ろうとしたちょっと前、立村は、関崎に手を出す奴がいたら、俺たちと縁を切ると言い放ってたんだよ、わかるか、その意味」

天羽は静かに続けて背を向けた。

——どういうことだ？

部屋に戻るまでの一分間では、消化できない謎の言葉だった。

なんとかして立村を捕まえて話をしたかった。

——関崎、お前が規律委員たるゆえんを盾に取ってあいつと語ろうとしたちょっと前、立村は、関崎に手を出す奴がいたら、俺たちと縁を切ると言い放ってたんだよ、わかるか、その意味。

もちろん日本語では理解できる。天羽にぶつけられたその言葉が焼きついたまま、放っておいてはいけないとささやきかけてくる。

かといって、どう受け入れればいいのかのさ？

あえて避けようとし、バスの中一番奥の席で眠りこけている立村に、乙彦はいつ近づくべきか様子を伺った。昨日の壮絶すぎる車酔いを繰り返すのなら、さっさと寝てもらえるほうが助かる、そう考えている節が麻生先生にもあった。また、藤沖が相変わらず話し掛けては意見を乞うのに返事をしなくてはならない。

「関崎の伝説がこれでまた、ひとつ、増えた」

移動中のバスの中、前方の席で藤沖が断言した。

「仮に外を走りたいと考えたら、普通はひとりでこっそり抜け出すものだろう。俺もおそらくそうとしか思いつかなかっただろう。少なくとも、あの中年特有の体型を持つ麻生先生をひっぱりだそうとは、決して思いつかないだろうな」

「仕方がない。校則違反をしないことを考えればそれしか思いつかなかっただ」

「なぜ、そこまで校則に拘る？」

「学生なんだからしかたないだろう」

自分でもわけのわからないことを言い返している。部屋に戻っていったとたん、男子部屋のメンバー一同から拍手喝采で迎え入れられたのは言うまでもない。相当、乙彦のしでかしたことは変わったことなのだと、改めて実感した次第だった。

だがそんなのはどうでもよかった。

「それはそうと関崎に聞き忘れたことがある」

いきなり藤沖が声を潜め、乙彦にしか聞こえないように囁いた。かなり無理している。バス内はそれなりにおしゃべりも多く、さほど他の奴らの喧嘩には関心がなさそうだった。

「お前、清坂のちょっかいが迷惑なんだろう」

乙彦は片手の水筒を落っことした。慌てて拾った。

「ほんとに関崎、お前はわかりやすい奴だ」

いつものように肩をぽんぽん叩き、藤沖はさらに声を潜めた。

「昨夜、お前がすんととひっくり返った後、一部の男子たちの間で意見が一致したんだが」

「なんだそれは」

いやな予感がした。こういう切り出し方を藤沖がしてくる時は、たいてい厄介な話が絡んでくる。しかも清坂美里に関してとなれば、おそらく立村の問題も出てくるだろうし、必然、天羽

たち元評議委員会の連中も話題として挙がってくるだろう。ちょうど頭の中をぐるぐるしている別問題と混ぜたくはない。

——俺が寝た後で何勝手に話しているんだ？

目を閉じて覚ましたそのわずかの間に交わされた話、その中の主役が乙彦ならば、利いておくしかない。乙彦はそれ以上つまこまずに黙って話を聞いた。

「俺たちは人の色恋沙汰に口出ししたいわけではないが」

口を切った藤沖は、昨日と同じことを繰り返した。

「だが、早い段階で悪い芽は摘み取らねばという意識は持っている」

——昨日も聞いたぞ。

「いろいろ意見を集めた結果なんだが、お前はしばらくストイックに生きるほうがいいという結論へと達した」

——なんだそのストイックとは。

全く理解できない会話に戸惑いつつ、乙彦はそれでも黙って聞いていた。

「関崎、しばらく俺たちに任せておけ。そのまんまでいろ。どちらにしても今日のプログラムはみな、男子と女子見事に分かれる形となっている。余計な茶々は入れられないですむ」

「そういうことなら俺は最初からストイックなつもりだが」

「お前がそう思わなくとも、周りの連中が否応なしに、関崎のことを軟派にまわそうとしている輩がいる。俺もそのあたりはよくわからんが」

「軟派？」

「すなわち、お前は女子に手が早い奴だということだ」

「ふざけるな！」

まあ落ち着け、と藤沖は乙彦の口に鞆を押し付けた。

「うちのクラスの奴がそんなことを思うとは考えられないが、今の段階で変なイメージがついたら後々面倒だろう。それよりも、青大附属上がりの俺たちがうまく話をつけるから安心してくれ。外部で何がなんだか分からない時期に、勝手にイメージの一人歩きはやはり避けたいだろう」

「それはそうだが、俺は決して間違ったことをしないようにしてきたつもりだが」

「そうだ。お前はさっきの早朝ジョギングと同じく、すべて正々堂々と片付けてきたつもりでいるだろうな」

窓辺の風を藤沖は少しバスに入れるべく、親指の爪程度開けた。

「もちろんそれが間違っているとは言わない。俺もそういう関崎のキャラクター性には興味がある。だが、この学校ではいくつか暗黙の了解というものがあり、少々面倒なところもあるわけだ。とにかく、お前はそのまま好きにやってくれればいい。あとは、評議委員である俺がすべて、面倒を見る」

乙彦が言い返す前に藤沖は話を変えた。応援団結成準備に関するいろいろな事務作業のことばかりだった。一方的に話しつづけるので、いつしか乙彦は何を話していたのかをすっかり忘れてしまった。そう、藤沖が何に対して「面倒を見る」のか、その具体的内容なんて。

バスから降りた。この合宿が始まってから初めて気付いたのだが、先生たちは意識的に男子と女子を分けて行動させているようだった。水鳥中学でそういうことがあるのなら、決してそれは珍しいことではないのだが、青大附属のように日常的な男女の交流がなされている学校において、今回の言動はどうも目立っていた。

食事をする時は大部屋で一緒だから男女の分けなど関係ない。

バス移動もちろん関係ない。

しかし、昨日のトイレ掃除を始め、夕食後の手紙書きもみな、男同士頭を突き合わせて行っている。さらに言うなら、麻生先生は女子の面倒を一切見て居ない。付き添いの保健教師とB組担任の女性教師がみな、まとめている。

別に乙彦にとってそれがどうした、というわけではない。むしろ、女子があまり絡まらない方が気も楽だ。

「しかし、珍しいな」

乙彦は呟いた。隣で藤沖が首を傾げた。

「何をだ」

「青大附属ではやたらと男子と女子が仲良いように見えるが、こういう集団行動では男女別に分けて行動させるのがだ」

「ああ、それはいえてるな」

またしょうもない話題に持っていかれるかと思ったのだが、藤沖はあっさりと頷いた。

「去年の修学旅行で俺たちが相当やらかしたからだろう。それはしかたない。身から出た錆びだ」

そこまで言うか、と思う一方好奇心もある。

「どういうことだ？」

「お前が想像していた通り、青大附属の連中はやたらと男女べたべたすることが多かった。それは中学も同じだ。そののりで修学旅行はなんだかんだ男女混合 チームで行動したわけなんだ。そうしたらもうみな、やりたい放題。ある奴は集団行動すべき時間帯でわざわざふたりっきりのデートをしでかしたり、またあるグループはお見合いじみたことを計画しあったりと、本能で行動してしまったというわけなんだ。女子がモデルにスカウトされたいらしいという話もきいた」

——本能か。

立村にそのあたりは聞いていなかった。今度仲直りが出来たら聞いてみよう。

「先生たちも、その時は特段問題がなかったのと、小さい町だったのでいろいろと手も回して見張っていられたこともあり、その場では大目に見てもらった。だが、その情報はどうやら高校に全部筒抜けだったようで、同じ過ちを犯させないようにということで、こうなったというわけだ」

「俺からしたら、ごく普通のことに見えるが、今までが凄すぎたのか」

「そういうことだ。少なくとも、中学に比べて自由は減って来ている」

乙彦はしばらく藤沖の語った中学修学旅行顛末について想像をめぐらせてみた。しかし、たど

り着けなかった。やはり、まだまだ奥が深い、青大附属という学校である。

天気は決して悪いわけじゃないのになぜまた、せせこましい部屋に押し込められるのだろうか。乙彦たちが連れていかれたのはまたも広々とした公園の芝生だった。しかも、みな、それぞれ距離を置いてシートを敷いている。青い、ぶあつめのものだった。十一人座るわけだからあまり広くなくてもいいはずなのに、無意味にでかい。乙彦と藤沖が麻生先生を手伝い、シートの四隅に固い石をそれぞれ置いた。

全員、立村も含めて思い思いの場所に荷物を置き、陣取った。麻生先生を囲む格好にどうしてもなる。ちらと反対側を眺めると、A組女子たちは他の女子たちとニクラスずつ合同でおしゃべりに盛り上がっている様子だった。しかし声は聞こえない。

——下手な個室よりも、プライバシーが守られているような気がする。

乙彦は木々の向こうでまた男子チームが塊となっている場所を探した。すぐ側には姿が見当たらなかった。麻生先生が乙彦の向かいに座っている。尋ねられた。

「おい、関崎、腑に落ちない顔してるなあ」

「いや、なんでこんなにクラス別に離れているのかというのが不思議なだけです」

「なるほどな。よくぞ気付いた」

麻生先生は真向かい反対側を指差した。

「今日はなかなかよい天気だったから、この広い場所を選んだわけだが、C組の男子たちに関しては通り向かいにあるログハウスを借りることにした。女子たちはニクラスで固まってもらったほうがいろいろと楽なんでそうしてもらったというわけだ」

「ここで何をするんですか？」

また、片岡が素直な目で麻生先生に尋ねた。どうもこの合宿中、妙に麻生先生と片岡は意気投合しているようだった。すでに教師と生徒ではなく、見た感じ、B級グルメに関する熱い意見を交わしている友人同士のようにも見える。楽しげに麻生先生は答えた。

「ああ、片岡、弁当を食うためにこういう場所を取ったわけじゃないのはわかっているな？ 今日、合宿における最大のテーマ・コミュニケーションについて考えたいところだ」

「コミュニケーションですか」

藤沖がやっぱり割り込んできた。いつもこの三人が麻生先生に張り付く格好となる。乙彦はまた立村を探したが、やはり一隅の重し石に手をかける格好で、ひとりでいた。

「ああそうだ。だが、説明よりなによりもまずは実践だ」

ここまでは世間話、その後、麻生先生は教師の顔に戻り、きっぱりと一同に告げた。

「これから行うワークは、二人組になり、一人につき五分の割合で質問を投げかけ、相手について知りたいことをどんどん聞き出していくといったものだ。お前らも中学の時にこういうのをやったことがあるだろう？」

乙彦はない。

「悪い悪い、関崎は初めてだったな。まずは実際やったことのある奴から、組でやってみるか。おい、片岡と藤沖、円の中に入れ。関崎のために藤沖から片岡に、いつもの調子でやってみて

くれ」

やれやれという風に頭を叩きながら、まずは藤沖、次に片岡が輪の中に入っていった。乙彦はその側でいわゆる「ワーク」とはどういうものを観察することにした。

立村は拗ねたように膝を抱えたまま、ぼんやりと遠くを眺めていた。その視線がどこに向かっているのか気になった。女子たちの方ではない、ログハウスのあるという方向でもなかった。時折襟元のネクタイをいじっては、丁寧にブレザーの下に押し込んでいた。

「単刀直入に聞きたいんだが、片岡」

「はい」

きょとんとしつつも、先生の目の前ということも合っただけか真面目に答える片岡。

先生の目の前であろうがなかろうが、片岡に対しては普通に接する藤沖。

「この合宿中、ずっと思っていたんだが、なんでそんなにラーメンやら餃子やら焼き鳥やら、そういうジャンクフードに詳しいんだ？ この機会だ、教えてもらいたい」

てっきり自己紹介っぽいことをやるのかと思っていたが、予測が外れた。

——そういえば片岡の奴、やたらとラーメンに拘っていたな。

一日目の昼食の際にも、麻生先生に熱く語っていた。

おそらく藤沖も乙彦と同じく気付いていたのだろう。さっそく話の穂を継いだ。

「さうとう食べ歩きしたか、それとも相当のマニアに教えてもらったか、どっちかだと思うが、どうなんだろうか」

片岡は素直にぺたんとして伸びている髪の毛をゆっくり揺らした。前髪をつんつんひっぱり、少し落ち着かない様子だった。乙彦と目があつたので、とりあえず頷いておいた。こくっとやはり頷いた片岡は続いて、

「一緒に住んでいる、桂さんという人がいて、その人がやたらと詳しいんだ」

それだけ早口に呟いた。様子を見つめている麻生先生がくくっと声を出して笑った。

「桂さん？ お前の兄さん？」

「みたいな人。で、桂さんは青潟駅前の美味しい店をたくさん知ってて、とんこつ味、しょうゆ味、味噌味、塩味、その他カレー味など、いっぱい調べてくれてるんだ」

「その人は何歳なんだ？」

いきなり、かなりプライベートに突っ込むような質問を藤沖は投げかけた。

「三十代だよ」

「それにしても詳しいな。話を戻すが、それで味を覚えたわけなんだな」

「美味しいものはやはり、美味しいし、それに安いから」

片岡のぼけとした口調が妙に笑いを誘った。同じことは乙彦だけではなく、他の生徒たちも感じていたようで一緒に大爆笑が起こることも多々あった。唯一、立村だけが表情を変えないのは、おそらく車酔いのせいかもしれなかった。

「じゃあお前、うちで料理とかするのか。桂さんが作ってくれるのか」

「もちろん作ってくれる。美味しいよ」

「今度、俺が遊びに行ってもいいのか」

「いいけど、部屋汚いよ」

どこかピントが外れた会話に、また受ける一同。乙彦もさすがに声をあげることはしなかったけれど、改めてこの片岡という奴に愛い奴という印象を強めた。いい奴とか、そういう言葉ではない。どこかあぶなっかしいんだが、憎めない不思議なキャラクターだ。

しばらく藤沖の四角張ったながらも内容は脳天気な質問が続き、五分後に終了した。

「よっし、そんな調子だ。拍手！」

麻生先生は満足げに両手を叩いた。

つまり、このワークとは、

——単純に言っちゃうと、相手にしゃべらせるということか。

乙彦は納得した。そういうことに関しては、飲み込みが早いつもりだ。

——ということは。

「先生、俺にやらせてください」

麻生先生が言葉を発する前に、乙彦は先手を打った。

「おお、大体わかったか。次に片岡とやってみるか」

「はい、でもその前にリクエストしていいですか」

相手役は、ひとりしかイメージしていなかった。

「立村と組ませてください。お願いします」

乙彦は目に力をたっぷり含ませ、こぶしを作った。

明らかに麻生先生は驚きを隠せなかったが、すぐに頷いた。了解のサインだった。

「わかった。立村、そこでそっぽ向いてないで、この中に入れ」

立村の目が乙彦に向かい、大きく見開いた。

同じく、藤沖と片岡も。

「今から、関崎と組んで、お互いについて知りたいことを質問し、答えていくワークを行う。この機会だ、聞きたいことはすべて聞いてしまえ。関崎」

その後、付け加えた。

「立村もだ」

今朝ばたばたした騒ぎの後、一切口を利いていなかった。

へたしたら合宿が終わって後か、と心積もりしていた。

しかし、麻生先生のワークを利用すれば、立村とは誤解をあっさり解くことができるかもしれない。いや、大丈夫だ、解けるだろう。

——ここで俺とあいつとがそれなりの付き合いをしていることをココであっさり話しておけば、これ以上立村が疎外されることもないはずだ。

乙彦は向きあった。正座するのはふくらはぎと膝、足の甲が猛烈に痛くて本当はしたくない。

立村はきちんと、お茶の作法をしっかりと学んだ人のように、形を崩さず畳の上で座っているかのような振る舞いをしていた。乙彦には小さく礼をしたが、一言もものを言わなかった。俯いたままだった。

——話せばわかるはずだ。立村ならば。

この場所で、英語科A組の見守る満座で、立村の今まで乙彦にしてくれたことをすべて説明すれば、きっと伝わるものもあるはずだ。どういう誤解の繰り返しかわからないが、乙彦は青大附属の連中が知らなかった立村の一面を少しは露わにできるはずだ。それさえ成功すれば、今の不毛な空気を少しでも和らげることができるだろう。確信していた。絶対に。

乙彦はまず、呼吸を整えた。

準備運動のようなもの、アキレス腱を伸ばす程度のもの。

「立村、顔をあげてくれ」

ずっと俯いたままの立村に呼びかけた。同時にはっと反応する立村。顔には戸惑いのようなものが現れていた。

「この機会に、俺なりに聞きたいことを聞かせてほしいんだが、いいか」

立村は返事をしなかった。ただ黙って見返した。感情は読み取れなかった。麻生先生が叱咤した。

「立村、返事をしろ」

「はい」

棒読みの反応のみ。これを返事とは言わない。

「本当にいいのか」

静かに立村は頷いた。OKの合図と取っていいだろう。乙彦はもう一度立村の整った口許をじっと見据え、そこにぶちこむべく、言葉を発した。

——やはり、雰囲気があるからな。俺なりに、立村がこれ以上どつぼにはまらないようにするためには、準備をしておいたほうがやはりいいだろうしな。

かつての乙彦とは違い、ある程度、準備が必要だと自覚はしていた。

直球をいきなりぶつけるやり方では通じないだろう。

本当だったら有無を言わず乙彦のいいたい放題で立村を頷かせたいのだが。

それでも一ヶ月で乙彦は、青大附属のやり方を学んだつもりだ。

ただし、言うべきことは言わねばならない。

「今朝のことだが」

乙彦はじっと意識を立村の目に向けた。

「どうしてお前が、ひとりで外にいたのか、C組の天羽が教えてくれたんだ」

明らかに立村の視線は揺らいた。かすかに首を振ろうとしている。膝に置いた手が少し緩んだ。

「立村が部屋に戻った後、天羽が俺に言ったんだ」

「なにをだ？」

尋ね返したのは立村ではなく、麻生先生だった。慌てて「ですます」調に切りかえた。

「最近の、俺の言動が目にあまるものがあるから、少し反省しろということです」

「天羽がか？」

次は藤沖。まずい奴に聞かれてしまった。後から後悔しても遅い。しかし嘘は言えない。目の前の立村がこわばった目つきで乙彦をにらみつけるのを、乙彦は逸らさず答えた。

「俺が一ヶ月、青大附属で目立つことが多い半面、迷惑を他の人たちにかけているらしいということで、忠告されたらしいんだ、立村が」

「はあ？」

男子たちの群れが一斉に疑問の声を挙げた。

「立村が、か？ 関崎、お前にじゃないのか？」

さらにしつこく問う藤沖。本来この一対一の対話は、こういった藤沖のように茶々を入れさせないために行われるものではないのだろうか。乙彦は両手でxの形を作り、黙るようサインを出した。しかし伝わらなかったらしい。

「俺は全然気付いてなかったが、どうやら他のクラスでは鬻鬻を買っていたらしい。そのことについては俺ももう少し知りたい。反省すべきことがあれば、俺はきちんと直すつもりだ」

ここまで一気に言い切り乙彦は改めて立村の反応を伺った。

全く答えがない。

唇を結んだまま、ただ乙彦の様子を見つめている。

——どうして何も言わないんだ？ こいつは？

ここでははっきりと自分なりに主張があってもいい場面だろう。

乙彦なりに賭けに出たつもりなのに、まったくのれんに腕おし。

ただ切なそうに乙彦を見つめるだけだ。

——こんなに女々しい奴か、立村という奴は？

立村の性格がいくら内向的とはいえ、男子ならばもう少しなにかあってもいいはずだ。

本来ならば天羽の発言は乙彦のみに向けられたことであり、周囲に言いふらすべきではないだろう。実際、乙彦からしたらそれは言いがかりにしか聞こえない。状況が許せば、どこかに呼び出すか何かして、一度きちんと話し合いを天羽と取るべきところである。

しかし、立村が乙彦に対する不満の数々を押しえ込み、なんとか丸く治めようとし、そのために自分が理不尽な叱られ方をしている以上、当事者の乙彦には責任がある。

天羽たちの乙彦に対するブーイングには、学校に戻ってから対処するとして、まずは身近な青大附属高校一年A組の中で立村の居場所を作らねばならない。

乙彦は自分の思うがままに、言葉を連ねた。

「俺がどうして天羽たちに嫌われているのかについては、学校に戻ってから考えてみるつもりでいる。いや、嫌われているというよりも、誤解されているだけだと思うから、話し合えば解決すると思う。そっちの問題はどうでもいい」

やはり一言も返ってこない。

「俺が聞きたいのは、今朝、俺のことをかばってくれたにもかかわらず、なぜそのことを直接俺に伝えようとしなかったか、ってことだ。本来なら俺のしくじりでいやな思いをさせているらしいんだから、俺は俺なりにその話を聞いて、反省する義務がある。ただ、俺はまだ青大附属の流儀を知らないから、勘違いしたことばかりやらかしているんだろう。それは教えてもらえればすぐに直す。郷に入れば郷に従えだと、思っている」

やはり立村は唇をかんだままだ。

「だから、立村、お前が今朝、玄関で捕まった時にはっきり、俺と先生に向かって、説明をしてくれればみなわかってくれたはずじゃないかと思う。もちろん、男子連中の前で俺がつるし上げを食っているといったことは、言いづらいとは思いますが、しかしそれは事実なんだから、言うしかないんじゃないのか。仲間を売る わけでもなければ、仮名とかイニシャルとかいろいろあるわけだから、いくらでも説明ができるんじゃないのか。そういうことをせずに一方的にお前の立場が悪化していくのを見るのは、俺はいやだ」

断言した。しかし立村は一切表情を変えなかった。

——どうすればいいんだ。

とことん話し合うのを、立村の方から避けてきている。

一度は語り合う機会もあったけれど、「近寄らないほうがいい」という拒絶めいたものだった。気の合わない奴ならばそれもしかたないとは思いますが、乙彦からしたら立村は気のいい奴だし、これから友情を培っていきたいタイプの人間だ。自分の友だちには今までいないタイプではあるけれども、少なくとも不快感は感じない。

ふつうに友だちでいてほしいと願うのは、おかしいのだろうか。

ひりひりと背中がうずく。

「聞きたいのは、俺のどこに天羽たちはむかついたのかだ。教えてほしい」

乙彦の言葉に、誰もが黙った。

「それと、お前がどうしてかばってくれたのか、その理由も聞きたい」

それさえしゃべらせれば、一年A組英語科においての立村は、正義感の強いい奴だと、誰もが理解してくれるはずだ。まっすぐ、目を逸らさずに乙彦は刺した。

立村は何も言わなかった。それが答えだった。

「ちょっと待て。関崎、今の話よく理解できないんだが、どういうことだ！」

割り込んできたのは予想通り藤沖だった。

「俺の解釈でいくとつまり、お前、C組の連中に因縁をつけられたということか！」

「いや違う。たぶん誤解だろう」

麻生先生の存在などお互い無視している。その麻生先生は無言で生徒たちの様子を伺うだけだった。いったい何を考えているのか想像がつかないがそんなのは どうでもいい。麻生先生は話せばわかる人だと、乙彦は知っている。ここで無理に言い訳しなくてもいい。問題は藤沖の方だ。立村のだんまりをまずは放っておき、藤沖に向いた。

「端的に説明すると、俺がいろいろと目立つことをやらかしたせいで、周りが迷惑しているのに気付かなかっただけだろう。藤沖も前からそれはよく俺に指摘してきただろ？ それと同じだ。ただ今回は俺が知らないところでそういう方はお前らしくない」

一蹴し、藤沖はきっぱりと言い放った。

「すなわち、ここで問題にしなくてはならないのは全く別のことだろう。関崎に対しての不満や鬱屈がもし、附中上がりの生徒に広がっているのならば、そちらを最優先で考えるべきことじゃないかと俺は思うぞ。先生、どうですか？」

麻生先生に向けた言葉だけは「ですます」調だった。このままではまずい。乙彦は割って入った。

「そういう話にもっていくな。今、俺は、この場を借りて立村に聞きたいことを聞いただけであって、それ以上の何もない」

「関崎、お前がいい奴だというのはよくわかっている。気遣いがうまいのもわかっている」
——どこがだ。

全く自分ない美点を誉められてもうれしくない。藤沖はたぶん勘違い大王なのだ。続けた。
「麻生先生、今ここで考えるべきは、立村に質問を投げかけるのではなく、現段階で関崎が置かれた立場について一年A組の中でまず把握することではないでしょうか」

「そうなのか、藤沖」

よくわからない問い返しをした麻生先生に、藤沖自身が戸惑ったようだった。

「あの、つまり、今回先生が仕掛けた一対一の対話ですが、それを追及するよりもまず、そこで出てきた緊急の課題をまず考えるべきではないかというのが、僕の意見です」

——まずい、完全に話が逸れているぞ。

勘違いもいいところだ。割り込もうとするが、藤沖ににらみつけられ黙るしかない。そっと後ろで正座したままの立村に目を向けた。やはり身動きひとつ、しなかった。

——どうすればいいのか？

今、動いている現実。

乙彦が意図した方向から、藤沖がかなり乱暴なやりかたでもって方向転換していく。

それを取り戻したくとも、この場は大人の麻生先生がこしらえたもの。

一生徒の乙彦がかき回すことはできない。

本来ならば乙彦も、男子の仁義として、売られたけんかは買うのが流儀。

天羽には自分自身で向かい合うつもりだった。

それをあえて、教師の同席する場において暴露しさらけだすなんてことは、立村の立場を逆転させるためでなければ、決して打てない手だ。

直球で突っ走りすぎるとか、シーラカンスとか、ブルトナーとかいろいろ言われてきたけれども、この場ではしくじってはならないと思って、ちゃんと自分なりに計画を立てて実行しただけなのだ。

なのに、なぜ、こうなるのか？

本来持っていくべき場所から大幅にずれたまま、問題はいつしか、乙彦を一方向的に責めたてた……ように見えた……天羽たちC組への戦火に変わっていく。

「藤沖、やめろ」

「なぜだ」

「もういい。そういうクラスの大問題にしなくても、それはそれで俺ひとり解決できる」

「だが、これはかなりまずいだろう」

藤沖がそれでもしつこく拘るようにこぶしを作るのを、乙彦は両手を握り締めてシートを叩

いた。

「違う、そういう問題を語りたいのではないんだ。俺はただ」

「立村をかばいたかっただけなんだろう？」

割って入ったのは麻生先生だった。穏やかな表情を浮かべたまま、あぐらをかきなおし、軽く平手でシートを撫でた。

「今の展開なんだが、関崎が立村を指名した段階でだいたい予測はついていた」

麻生先生は乙彦と立村を交互に見ながら他の連中に話し掛けた。

「今朝のこともそうだが、関崎がなんとかして立村を仲間に迎えよう、なんとかしてクラスの一員としてとけこませようと力を尽くしているのは知っていた。だから、この場で説得しようとしたんだな、そうだな、関崎」

声を出せない。返事を待たずに麻生先生は続けた。藤沖を見やった。

「いい悪いは判断できないが、関崎は精一杯のことをした。ただ、この場でやるべきことではなかったんじゃないのかな、という気も俺はする」

「どうしてですか」

尋ねたのはなぜか片岡だった。今度は片岡の頭を撫でた。

「つまりだな、関崎のやろうとしていることは、すぐに片付くことではないだろう。そうだろう、立村。お前がそれは一番よく理解しているはずだ」

立村は最後まで黙りつづけるつもりのようだった。

「だから今回に関しては、あえて水入りにすると、行事軍配として判断したわけだ。藤沖もあせることはない。まだ三年間あるんだ。これからゆっくりと、自分なりに時間をかけて考えていけばいい。俺はA組の担任としてお前らに、言いたいことは包み隠さず言う。また怒鳴る時はこっぴどく怒鳴る。だが、いそいそすべてのことを処理するつもりはない。まだお前らにはぴんときないかもしれないが、時間をかけて考えることが、今のお前らには一番必要だな。まずは、自分なりにやれることをやってみろ」

麻生先生は乙彦に正座して向きあった。

「関崎、お前は今、非常に貴重な経験をしているのはわかっているな」

「はい」

「お前が精一杯走りつづけていることで、周囲の状況が不安定になっているというのは、正直言って、確かにある」

面と向かって言われると、やはり答える。俯いた。

「悪いことではない。青大附属にきて一ヶ月、まだ迷いもあるだろう。だが、迷っていけないわけじゃない。C組の天羽が面白いことを言ってきたようだが、それに対してお前はどう思う？」

先生に言うべきことではなかったのだが、しかたない。嘘は言えない。

「きちんと一対一で話に行きます」

「そうか。天羽ならたぶん、言うべきことをきちんと言うだろう」

立村に皮肉っぽい視線を向けた。

「自分でこれから先、どうするか。それをまずは考えろ。それと藤沖」

今度は藤沖に向き直った。足を崩していた藤沖が慌てて正座する。おかしくて笑ったら周囲もつられたようだった。

「お前も、関崎の面倒を見てもらってありがたいと思っている。だが、少しお前は自分の方に目を向けるべきじゃないのか？ 気になっていたんだが」

「いえ、俺は別に」

口籠もる藤沖。何か思い当たる節でもあったのだろうか。

「今すぐ話すことでもないな。学校に戻ってからにしよう。それと」

言葉を切って、立村に前かがみになり、呼びかけた。

「お前とは、三年間かけて、話をする。覚悟しておけ」

有無を言わせぬ響きが底に敷かれていた。

いきなり片岡が手を挙げた。

「どうした片岡」

「提案なんですけど」

藤沖に話し掛けた。めずらしい。雅弘に似たどんぐり眼をくりりとさせ、

「どうせだったら、麻生先生に質問することにしたら。全員が」

「はあ？」

お間抜けな相槌を打った麻生先生に、藤沖は大きく頷いた。親指を立てて片岡をねぎらい、

「俺たちもこの機会にぜひ、先生に聞きたいことがあります。予定を変更して、今回は麻生先生の質問攻めではいかがですか。みな、賛成か？」

笑い声と共に賛同の挙手。挙げなかったのは立村だけだった。

「ほぼ、絶対多数により決定しました。あとは先生のご了解だけです」

「お前らなあ」

しかし顔は笑っていた。片岡からなる藤沖の提案を受け入れる準備はできているようだった。麻生先生はもう一度片岡の頭をぽんと叩き、

「妙なところで団結力が芽生えてるぞ、このクラス。できてからまだ一ヶ月も経ってないっていうのに、すげえクラスだ」

もう立村が膝を崩したのか、それともかかえたのか、誰も興味を持っていないようだった。

答えを最後までもらえぬまま、乙彦の質問は終了した。

——三年間あるたって、そんな長いこと待ってられる、わけがないだろ。

とにかく、時間を見つけて、これからは捕まえていくしかないだろう。

まずは、天羽との対話を考えよう。

片隅にそっと戻っていき、膝を抱えたまま黙って座っている立村に、乙彦は胸の内で宣言した

。——俺は、お前と三年も待たずに話をする。覚悟しろ。

新歓合宿が終わってからは今まで以上に周囲から、じろじろ見られることが多くなった。

「いい意味でも悪い意味でも、有名人だからな」

その通りだと乙彦も自覚していた。

藤沖が笑いながら、合服と呼ばれるブレザーを脱いだ。すでに半そでだ。

「しかし、うちの学校はなんで」

「お、うちの学校、か」

言いかけたことを忘れてしまい黙ると、藤沖は、

「染み付いているな。心配するなもうお前は青大附属の学生だ。外部だとか内部だとか余計なこと考えるな」

「あ、そうだな」

乙彦は不承不承ながら頷き、やはり半そでのシャツで襟のボタンを開けた。すぐに締めた。話すことを思い出した。

「GWからせいぜい六月半ばの間だけ着る服を、なんであえてそろえなくてはならないのか、俺には理解できない」

「ああそのことか」

いつものこととはいえ、金のかかることの多い学校ではある。藤沖もそのあたりはよく理解していっているようだ。

「結城先輩の命で揃えただろう」

「揃えた、というよりも、もらったというべきだ」

アイドルマニア……もとい、評議委員長として名高い結城先輩になぜか気に入られた乙彦は、いろいろと卒業生たちの残した制服や教科書などを譲ってもらい、なんとかやりくりしていた。両親もさすがにそこまで生徒同士で融通してもらえるとこのに驚き、一度結城先輩のご自宅へ挨拶に行かねばとあせっているようすだった。礼儀としては当然だが、もうひとつ見せてはいけない先輩の一面を知る乙彦としては、悩めるところである。

「だが、大抵の場合、冬服と夏服の二種類で十分なんじゃないか」

水鳥中学の際はそうだったはずだ。工業高校に進んだ雅弘も同じことを話していた。

「どうせ半そでで過ごせばいいことだろう」

「いや、うちの学校の生徒はやたらと潔癖な奴が多い」

藤沖は襟のボタンをふたつ外した。合宿が終わってから三日もたたぬうちに天気はくずれ、雨が降り続くことの多い季節に入った。もともと青潟は、梅雨がないはずなのだが。

「におうとか汚れるとか、やたらと神経質だ。俺からしたら一週間くらい風呂に入らなくても死にはしないと思うが、この前の合宿のように、一日三回も風呂やらシャワーやら浴びたがる人種もおるわけで」

「だいたいわかった」

視線を窓辺の立村に向けた。確か合宿の時は五枚以上アイロンをかけたシャツを持ち込んでい

た奴だ。

「この調子だと近い未来は香水をつけろとか言われそうだな」

「ああ、近い未来」

乙彦は汗ばんだ首筋を軽く叩いた。

「それはそうと、これから補習だな。わからないことはないか」

もう入学してから一ヵ月半なのだから、そういう念押しをする必要はないと思うのだが。

「別にないが」

返事に拍子ぬけした表情でもって藤沖は、付け加えた。

「ああそうだ。お前に言うのを忘れていた」

さて、はてな？ 乙彦は立ち上がりかけた。振り返った。

「C組の連中の件だが、俺がきちんと話をつけてきた。安心しろ」

「なんだそれは」

「合宿で言っていただろう。お前にいちゃもんをつけてきた奴がいたとな」

立村相手に詰め寄った一件のことだ。いやな予感がする。口は災いの元か。

「それがどうした」

「難波に一言、言っておいた。もう余計なことをすることはないだろう」

「どういうことだ？」

気色ばむ乙彦にしてやったりという顔で、

「たいしたことじゃない。ただ、俺は人に露骨な嫌がらせを行うのはいかなものかと伝えただけだ。難波も天羽たちと同じグループだ。そのあたりはすぐに納得したようだぞ」

「別に俺は何もされたわけではない」

「いや、十分すぎるほど証拠は拳がっている。とにかくこれ以上のどたばたは起こらないだろうし、また何かがあればまた俺にまず伝えろと言っておいた」

かちんとくるものがある。うまく言えないのだが藤沖は乙彦が単独行動を取ろうとすると、かならずひとつダメだしをしてくる。決して悪意ではないし本質が単純勘違い野郎であることも理解しているつもりなのだが、やはりむかつくのは否めない。

「俺は頼んだつもりはないが」

「A組の評議委員としてやるべきことを行っただけだ」

——評議委員。

葵の御紋だ。言い返せない。思わずすくむ。藤沖は満足げに立ち上がり、ブレザーを肩にかけた。

「補習、がんばれよ。先に帰るぞ」

乙彦よりも先に教室を出て行った。

——余計なことしやがって。

だいぶ慣れたつもりだが、それでも藤沖の兄貴分吹かしにはいらいらする。

第一、天羽とのいざこざうんぬんは直接乙彦が談判する内容であって、第三者の藤沖に割って

入られるようなことではない。あえて当事者がいるとすれば緩和材の役割を果たした立村だろうが、当の本人は一切係わり合いを拒絶している。現に乙彦は立村と新歓合宿二日目以降一切口を利いてもらっていない。

今もその通り、ちらと立村の顔を覗き込んで片手で合図をしても、気まずそうに頷いてそっぽを向くだけだ。きついことを少々ぶつけすぎたかとは思っているのだが、もう合宿が終わって二週間近く経ったのだから過ぎたことだと流せばそれですむだろうに。藤沖ではないが、やはり立村はわからない奴だ。

いや、立村よりもいらだつのは藤沖の方だ。

——この上下関係、なんとかならないのか。

もちろん乙彦も上下の関係をしっかりと持っているつもりだし、先輩には頭を下げ後輩の面倒を見る、これは普通のことだと思っている。しかし、同級生同士で階級差をつけるというのは少し違うのではないだろうか。あくまでも、平等であるべきだ。

——俺だけじゃない、それは。

英語科クラスに関して言えば、たとえば片岡。本人は特に気にも留めていないようだが、麻生先生のかわいがりぶりは目に余る。えこひいきとささやかれないのは、もともと男子同士そんな細かいことにかまっていられないからであり、乙彦も本来ならば一日で忘れる。気になるのは自分が、クラス内の階級下で腰掛けていような気持ちにしょっちゅうなるからだ。

しかもみな、善意でやることだから、始末が悪い。

乙彦はもう一度立村に軽く手を挙げた。やはり、無視された。

補習教室はころころ変わる。一番多く使われる教室は一年A組だが、時には二年B組、また時には美術室などと指定される。この日はなぜか職員室脇の準備室なところまで来るよう指示されていた。そういう部屋が存在すること自体が乙彦には謎である。

名倉時也が先に席へついていた。狭い教室だがまだ名倉しかきていないのですっきり広く見える。

「早いな」

「用事がない」

ぶっきらぼうに名倉は答えた。

「今日はお前と俺だけか」

「わからん」

こいつはもともと笑わない奴なのだ。入学してから数少ない外部生のひとりとしてつきあってきたのだが、馬鹿話で盛り上がることはなく、むしろ真面目に授業の進捗について相談しあうことの方が多かった。かといって場がしらけるわけではなく、名倉はどことなく茫洋とした雰囲気をかもし出し、いつのまにか乙彦が一方的に語る形となる。

「どうだ、クラスの様子は」

「よくわからん」

名倉は「わからん」を繰り返した。ということは、あんまりなじんでいないのだろう。話

をもっと聞きたいのだが、はたしてどこまで関与していいのかわからない。普段から藤沖に干渉されているゆえの苛立ちかもしれない。乙彦は名倉の席まん前に座り、筆記用具を一式取り出した。

「この前の数学小テストにはまいった」

「本当だ」

「俺は英語科だから語学関係で苦しむのは覚悟していたが」

「普通科でも英語はきつい」

全くだ。名倉との会話で楽なのは、思いっきり勉強に関する愚痴をこぼしても無理やり前向きに話を持っていかれないところだろう。藤沖あたりに同じことを言ってみろ、きっと兄貴面して「さあ、なんでも相談に乗るぞ」とか重たい言葉を押し付けられるに決まっている。

「中間試験ではまともな結果を出したいもんだ」

「もっともだ」

ブレザーをぐちゃぐちゃにして空いた机の上に置いた。同時に戸が開いた。

「あれ、今日はふたりだけなんだ」

さらっと声をかけてきたのは、髪を横側にひとつまとめに束ねた静内菜種だった。

乙彦よりも早く、名倉が

「と、お前だけだ」

あっさり答えた。

静内とは合宿以来、顔を合わせると二言三言挨拶はかわしていた。もちろんその際にさっぱりした会話ですれ違うだけなのだが、笑顔だけは忘れなかった。それを見かけたクラスの女子たちに噂をされているらしいがそんなのは知ったことじゃない。もちろん会話は交わしたけれども。

ただ、ゆっくりと話をするひまはなかった。どうしても周囲の視線が気になるし、乙彦と同様静内もクラスの女子たちとの交流が大切そうだったからだった。

乙彦にも片手を挙げて挨拶をした後、静内は名倉の隣に座った。自然と、斜め正面に顔を見る形となる。

「今日は私たちだけみたいね」

「なんでだ」

「この前のテストで平均点以下、外部生では私たちだけ」

「よく知ってるな」

実際苦労したのは事実なのだから、何も言えない。名倉が異論を発した。

「俺はまともな点を取ったはずだ」

「私たちにはその判断ができないのよね」

静内はため息を吐いて乙彦に問い掛けた。

「全く持ってこの学校の概念って謎」

「もっともだ」

短く会話を交わすのが、静内とのパターンだった。

女子に話し掛けられる時、ほとんどの場合はセンテンスが長く、またただらだとわかりづらいことが多いのだが、静内だけは違う。五十文字以内で話が終わる。それが心地よい。

「どうなんだ、クラスは」

乙彦もそれなりに短く尋ねると、すぐに反応が返ってくる。

「悪くないけど、大変」

「大変か、たとえば」

言葉を溜めて静内はかばんからノートを取り出した。

「人のプライバシーをなんで知りたがるんだろう」

「は？」

「中学時代彼氏がいたかいないかとか、聞かれるのよね」

名倉が咳き込んだ。ずいぶん打って響く反応の奴だ。乙彦にはぴんとこない。

「ふつう中学時代そういう付き合いをするのは、一部だけじゃないか」

「そうよね、でも聞かれるの」

「どう答えるんだ」

「ない」

きっぱり、一点張り。また名倉がうつぶす。呼吸困難になりつつある名倉に笑ってみせ、静内はまたため息をついた。頬杖をついた。ストレートのさっぱりしたひとつまとめの髪を動かさず。

「この学校では男女交際経験のない人がいないみたい」

「それはないだろう？」

「普通はそう思う」

名倉にも同意を求めた。名倉は頷かなかった。もしや男女交際の経験あるのか？ 信じがたい。

「友だちがいるかどうか、と同じレベルの話みたい」

「なにが」

「男女交際が」

「だが、男子としゃべったことがないわけではないだろう？」

乙彦だって、そういう付き合いは別としてクラスの女子と話したことがないわけではない。

そのレベルのことを求められているのか。

静内は首を振った。

「男子とは仲良かったけど付き合うのとは違うでしょう」

「その通りだ」

いきなり口を開いた名倉の、断言口調に驚いた。今度はふたりで名倉を見つめた。返事がないので、乙彦が求めた。

「悪いがその理由を言えよ」

「人気のある女子はいるが付き合いとは違う」

「よくわからんが」

「性格のよい女子ならばそういうのもあるだろう」

乙彦の言葉にはびんとこないらしく、かわりに静内が返した。

「男女の友情は、あると言いたいんでしょう、名倉」

苗字を呼び捨てにした。きりり、と音が響いたような気がした。

——男女の友情。

性格のよい女子相手ならばもちろんあるはずだろう。

乙彦もそれを認めないわけでは決してない。

ただその概念をつかめない。友情とは男子同士との間にあるものだと解釈している。たとえば雅弘であり藤沖であり、また立村であり。そいつらと同じ感覚を持つ女子ならばもちろん、友だちとしての付き合いもするに違いない。しかし今まで乙彦はそういう感覚を女子の中に見出すことができなかった。古川こずえにせよ、清坂美里にせよ、いや、水野五月にしても。それぞれ好ましい一点がないわけではないけれども、やはり違う。

——そんなもの、あり得るのか？

乙彦は問い掛けた。

「ひとつ聞きたい、静内」

身を静内の方に乗り出し、乙彦は尋ねた。

「男女の友情とは、中学時代、存在したか」

静内菜種の返事は一言だった。

「存在したわよ」

付け加えた。

「してる。名倉と関崎となら存在するよ」

開いた窓から冷たい風が吹いた。べたつかないさらりとした感触だった。

——それはどうしてだ？

乙彦の問いを口にする前に、静内の返事が続いた。

「理屈じゃないよ。他の子みたいに理由を追求しないでほしいよ」

「理屈じゃないとは」

「説明しろと言われたら、外部生同士だからってことになるよ。でも」

少し真面目な顔に戻り、静内は指を窓に向け、

「友だちの概念を無理やり説明して何が楽しいのよ」

「もっともだ」

乙彦ではなく、名倉がまた頷いた。

「時間がもったいないよ」

今度は乙彦も納得した。

——時間がもったいない。

「青大附属に来てから、自分が何をしたかをすべて説明しなくてはならないという場面は、あるな」

「聞かなくてもいいことを聞かれるのが面倒なのよ」

「それは正しい」

「女子同士では波風立てるのも時間の無駄だから適当にあわせるけどね」

「いろいろと面倒なことだな」

「関崎、わかる？」

二度目の苗字呼び捨てで、ぽんと出た言葉。

「この学校では女子でも、本人に確認するまでは呼び捨てすることが許されない雰囲気がある。面倒だ」「私は呼び捨てOKよ」

「ありがたい」

名倉は答えず頷くだけだった。乙彦の目にはそれが、了解のしるしに見えた。

静内がそれなりに女子たちとうまくやっていることは知っていた。一方的に清坂美里からつかかってこられて閉口しているということも気付いていた。

言い返せないわけでも、周囲に合わせられないわけではない。ただ、面倒。疲れる。時間がもったいない。だから、時間を節約できる方向を選ぶ。口で説明するよりも、心地よい方を選びたい。男女の友情論を熱く語っている暇があれば、ここでもっと静内と語りたい。男子の友だちと同じように、気の合う同士 苗字なり名前なりを呼び捨てにして、しゃべりたい。

この日、関崎乙彦と名倉時也、そして静内菜種との間になにかの調印がなされた。

なぜか、なんでかなどと野暮な確認などしない。

いつでも苗字で呼び捨てること、それが印だった。

互いにそれぞれのクラスで過ごす時間の合間を見つけては、三人、廊下か図書館かもしくは中庭で集った。もちろん、しょっちゅうではないのだけれどもほんの一、二分語るだけでもそれは友だちとしての会話としてしっかり繋がった。

「名倉は今、クラスの人としゃべったりしないの？」

静内菜種が何気なく尋ねる。

「しない。話題が合わない」

「わかるわかる」

名倉時也も言葉すくなではあるけれども、教室で気の合わない連中とたむろうよりは乙彦や静内と語り合うことを選んだ。おそらく名倉の周辺ではいろいろと面倒な噂が立っていることだろうが、そんなことなど全く気にも留めていない様子だった。

「話題と云って、そんな高級な話なんぞでいいのか」

A組ではそれなりにしゃべることもあり、コミュニケーションに今のところ苦勞のない乙彦は、名倉に詳しく問いただす。

「洋服の話題が出るとついていけない」

「それはあるな」

乙彦は頷いた。青大附高の連中はきっと無意識なのだろうが、ファッションに対して過剰なほど関心を持っているようだった。女子ならまだ理解できなくもないが、同じクラスの男子たちが懸命に、髪の毛の手入れのしかたとか服のコーディネートだとか、さらには店、床屋、美容室に至るまで語り合い始めた時には、さすがについていけなくなった。いつも適当なところで親に全部やってもらっていた乙彦には、腕の良し悪しなどよくわからない。

「洋服は拘る人多いね、この学校。私なんて普段はTシャツとジーンズ」

「そういうのが普通だと思うが」

「まあ、人の好みよ」

確か去年の交流会で、青大附中では規律委員が中心となり制服の着こなしを研究し季刊誌として発行する「青大附中ファッションブック」というのがあると聞いたことがある。しかも編集担当は南雲だったと聞いている。想像するのも不気味すぎて、乙彦はまだ、仔細を確認していない。高校でも同じような本、作るのだろうか。

「うわあ、ファッションブック？ そんなのあるんだ！」

「実際俺も去年、見せてもらった。評議委員の誰かを無理やりモデルにして写真を撮って掲載するらしい」

「それはいやね。評議って、そんなモデルまがいのことまでしないとだめなの？」

「よくわからないが」

あらためて静内菜種の顔と全身をみやった。

決して醜いとは思わないが、いわゆる美人には分類されないタイプだろう。

美しいとか綺麗とかそういうのではなく、顔自体に強烈な印象がない。ただ、浮世絵の女性の

ように線で形作られていて不確かな雰囲気漂っている。もちろんこうやって語っている分には、存在感全開でぶつかってくるのだが。

「静内、安心しろ。お前にモデルの申し込みは来ない」

「すごい失礼！」

軽く拳骨を乙彦の鼻先に突き出すまねをし、静内は吹き出した。手を打って笑う。

「ほんと、青大附属の中を歩いているだけで観光旅行しているような気分になるね」

「歴史の証人も学校の中にはたくさんいるしな」

「そうそう！ カメラがあれば記録とか全部撮っておいて、記録データとして残しておきたいよね。笑える」

ぽつんと名倉がくちばしを挟む。

「カメラマンは俺がやる」

「って、カメラ？ 名倉、写真好きなの？」

「好きでもないが嫌いでもない」

「そうか、じゃあさ今度」

静内は乙彦の肩を叩き、次に名倉の腕をひっぱり、頭を寄せ合った。

「放課後、校内見学ツアーやらない？」

「なんだそれは」

「この学校ってやたらと広いし、中学もあるし、大学だってあるし」

静内の指摘通り、この学校全体は本当に広い。

「中学の校舎も私、まだ、見たことないし。大学に関してはまだ、学食しか行ったことない」

「そうか」

言われてみればその通りだ。乙彦はオリエンテーション早々藤沖に引っ張られてあちらこちら連れまわされたおかげでそれなりに、把握はしている。また交流会を通して中学の校舎は出入りしているし、それほどものめずらしいものではないと思っていた。しかし、静内も名倉も、まだ中学校舎に足を運んだことはないはずだ。

ただ、ひとつだけ心配なのは。

乙彦は小声で確認した。

「カメラは校則で持ち込み可なのか？」

残るふたりは顔を見合わせた。

「そうか、授業に関係ないものは、持ち込み不可の可能性あるかあ」

「俺はこれでも規律委員だから、できれば校則違反はしたくない。が、気持ちはわかる」

ふたり、にやにやして乙彦の顔を見上げている。何か期待されている様子だ。

「とりあえずだ。今日の放課後カメラなしでまず、中学校舎を見学してこよう。俺が案内する」

「誰もカメラなんて持ってないのにね」

思い立ったらすぐに動かないと気がすまない、それが関崎乙彦の性格だ。しょうがない。

静内菜種はこぶしを作って自分の頬のところで、軽くエイエイオーと振り上げた。

決して、英語科A組で過ごす時間が苦痛というわけではないのだ。

教室に戻ればすぐに藤沖を始めクラスの男子連中と、それなりの馬鹿話をする。

最近では藤沖の応援団結成リアルタイム報告が主であるが、それもまた興味深い。

ちらと横目で、ひとり孤独を囲っている立村の様子を伺うのもすでに習慣だ。

規律委員としての仕事もせいぜい、朝一、夕方の週番といったものが中心であって、今のところ「青大附高ファッションブック」作成の話はもちかけられていない。南雲もB組の東堂といつもつるんでいろいろ語っているようで、乙彦との接点は「みつや書店」のみ。

やたらと清坂美里が話し掛けてくることもあるけれども、それなりに流せばいい。他の女子たちと同じ扱いをしているつもりだ。好意を持っているという噂はまだ噂に過ぎない。なら、最初からないも同じだ。

しかし、なぜか、静内や名倉と足を留めて似たような馬鹿話に花を咲かせていると、時間の流れが少しはや回りする。あっという間に時間が過ぎてゆき、名残惜しさの中で教室に戻るはめとなる。

互いを苗字の呼び捨てで通すことに決めてから一週間が経ち、その間に積み重ねられた会話が自然と発火し、ふわふわ燃える。夏が近づいてくる合図のように、汗ばみ、胸躍る。

——まさに俺たちは不思議の国の旅人だ。

いつか静内菜種が教えてくれた「不思議の国のアリス」。合宿以来一度も尋ねていない。ただ、自分たちが青大附属という不思議の国に取り込まれて右往左往していることだけは確かに思えた。静内はその国を旅するに当たって、どういう覚悟を携えて飛び込んできたのだろうか。いつか聞いてみたいことのひとつだった。

——青大附属中学校舎。

ずっと記憶の隅に刺さった、腫れを伴う刺の跡。

ほんの一瞬だけ、かすめた。

——ま、大丈夫だろう。放課後だからみな、帰っているだろう。

中間試験の結果は予想通り芳しくなかった。

最初の一年はとにかく我慢するしかない、と麻生先生もいろいろと言いつけてくれたけれども、やはり五十点以下の点数を目にする羽目になると、気持ちもふさぐ。

自分なりに努力もし、補習にも参加しているつもりではいるけれども、やはり結果が出せないことにはどうしようもない。

「関崎、今日は補習か」

「いや」

藤沖に声をかけられた。たぶん何か言いたいことでもあるのだろう。また説教されるのだろうか。悪いが今日は静内たちとつるんで遊ぶ方を優先したい。乙彦は荷物を鞆とボストンバックにまとめ、素早く教室を出ることにした。

「ははあ、デートか」

「そういうわけではない」

みな、男子連中がいきなりにやりと笑い出す。

静内の真似をするわけではないが、青大附属上がりの連中は幼稚なからかいをかけようとしていない。特に恋愛がらみの話題では男子に限って言えばみな、穏やかに送り出してくれる。そこが妙に女々しくて不思議なところでもあるが、実際当事者に立ってみればそちらの方が色々楽ではある。余計な話をしなくてもよい。

例外、が藤沖だ。乙彦の保護者を買って出ている藤沖には気になるらしかった。

「静内とか」

「いや、もう一人いる」

「どこに行くんだ？」

隠すこともない。違反の品も持っていない。あっさり答えた。

「中学校舎だ」

「呼び出されたのか」

これはしたり。誰に呼び出されるというのだろうか？ 乙彦なりに想像たくましくして返事をした。

「いや、さすがに俺も下級生に呼び出されるような悪いことはしていない」

藤沖は無理に笑いをこらえるように、唇をゆがめた。

「そういうことを言ったのではないぞ、関崎。俺もよく生徒会の後輩たちに相談を持ちかけられて呼ばれることがある。お前は交流会なんかで結構顔出ししているから、そのあたりで呼び出されたのかと思っただけだ」

「残念ながらそれはない」

なるほど、藤沖もしょっちゅう中学校舎に通っているということが判明した。ということは、これから乙彦たちが探検ツアーに出かけても何ら障害はないという結論となる。

「単に、外部生のふたりが一度も中学校舎を見たことがないというから、この機会に連れて行ってやろうと考えたという次第だ」

「なるほどそれはいい案だ」

単純に藤沖は褒めてくれた。

「じゃあまた、明日にでも感想など聞かせてくれ。来週から今度は球技大会の準備だ。そんなにちょろちょろしてられないぞ」

もう拘るのも面倒くさい。いつもの兄貴分的口調を聞き流し、乙彦は教室を出た。すれ違いざま、一緒に扉をくぐりぬけた立村と目が合った。

「立村、また明日な」

「お先に」

立村がいきなり何かを言おうと、口を開きかけた。すぐに首を振った。

気付いて乙彦もすぐ近づいて尋ねた。立村本人が発しようとした言葉、貴重だ。拾わねば。

「どうした、何か言いたいこと、あるんだろう」

「いや、なんでもない」

戸惑いを隠す風に立村はすばやく顔を背け、小声で「じゃ、まあ明日」とだけ呟き、階段を昇っていった。結局、今日も立村の言葉は拾えなかった。

B組の静内を待つため乙彦はまず教室を覗きこんだ。すでに授業は終わっているようだった。だがまだ騒がしく声が聞こえる。主に女子たちのざわめきが聞こえるのだが、静内がその中に含まれているかどうかはわからなかった。出てきた東堂を捕まえ、静内がいるかどうかを尋ねた。

「ちょっと、またうるさいことになってるみたいなんでね」

「またもめてるのか」

「さあ」

あまり東堂とは、規律委員同士とはいえまだ語り合う仲ではない。南雲と気の合うというところからして、まず違おうだろう。乙彦はもう一度黒板側の扉から顔を覗かせた。教室後方でやはり、女子たちが五人ほど、話し合いをしている様子だった。五人集まれば文殊の知恵というが、はたしてそんなのあるのだろうか。その五人の中に静内が混じっているかだけ確認できれば、あとは廊下で待っていればよい。しかしその確認が取れない段階で、ひとり女子の誰かがぼろっと転がり出て、乙彦に駆け寄ってきた。静内ではなかった。

「関崎くん、ちょっと来て」

乙彦は返事をせずに背を向けようとした。いきなり腕にしがみつかれた。清坂美里が強引に教室の中へ乙彦を引きずり込んだ。同時に四人かたまりとなった女子たちの中から、

「ごめん関崎、ちょっと待ってて。名倉にも言っといて」

静内の声がぴんと、響いた。

乙彦も返事をしようとした、その瞬間、腕の肉を思いっきり握り締められた。清坂の手だった。

「他の子に聞かれたくないでしょ。ちょっと言いたいことあるの」

「俺は特に何も無いが」

静内に視線を投げた。早くお互い終わらせたいと、そういう意を伝えたかった。すぐに乙彦の方が無理やり清坂にひっぱられている。少し長めのおかっぱ髪がつややかに輝いていた。

「静内さんをなんで中学に連れて行かなくちゃいけないのよ！」

「見たことないという話だったからだ。それに静内だけじゃない。名倉という奴も一緒だ」

「そういう問題じゃないの！ 問題はね、関崎くんなの！」

清坂は声をささやきかける形にしつつも、語調は荒く続けた。

「関崎くん、青大附中にはね、杉本さんがいるんだよ！ 杉本さんがどんな想いで待っているか、わかってるよね！ ちゃんと！」

——ああ、あの女子だ。

大きなキャベツの切り口のような花を、鉢植えごと持ってきて手渡してくれた、あの女子だ。感情が殆ど動かない人形のような女子。いったい乙彦のどこが気に入ったのか今だに不明だが、ひたすら一途に想いをかけてくれていた女子だ。覚えている。

——立村に懇願されて、俺なりにきちんとけじめをつけたはずだが。

体調を崩し、水鳥中学の用務員室で横になっていた杉本梨南に乙彦は伝えたはずだった。

想いに答えられない旨、伝えたはずだ。

古川こずえによれば、その言葉は伝わっていないとのことだが、それ以上乙彦にできることはなにもなかった。だからそのまま、放置していた。

——だが、しかし。

清坂のまっすぐな瞳と、怒りをも帯びた表情に、言葉が止まった。

「関崎くんがどう思っているかわからないけど、杉本さんはね、ずっと関崎くんのことを好きなままでのよ。今、学校でたったひとりぼっちで戦っている杉本さんにとって、たったひとりの味方が関崎くんなのよ。そう思っていないかもしれないけど、杉本さんにとってはそうなの！」

——いや、立村の方が……。

言いかけてやめた。清坂美里はかつて、立村と永らく交際していた相手なのだ。傷口に塩をみ込むようなことはすべきではない。

「だけど、杉本さん、卒業するまではずっと関崎くんと会わないようにしよう、顔も見ないようにしようって願掛けしてるの！ 願掛けってわかる？ 公立高校に合格するまでは、大好きな関崎くんのことを考えずに勉強に専念しようって！ 杉本さん、頭がいいからそんなことしなくて合格すると思うんだけど、関崎くんにふさわしい自分になって卒業してから、改めて関崎くんに打ち明けるって心に決めてるの。一途なの！」

——いや、話自体はもう、終わったはずでは……。

「私、関崎くんがどう思っているかはわかんないよ。けど、今、関崎くんが杉本さんと顔を合わせるようになってしまったら、あの子がどれだけショック受けて動揺するか、少しでも考えてほしいのよ！ たったひとり、関崎くんがいるからこそ、杉本さんは必死にたえていられるの。でも、でも」

「すでに俺は話を済ませているつもりだが」

「理屈と感情は別なんだから！」

首を激しく振り、髪をさらさら揺らしながら清坂が訴えた。いつのまにか声はゆっくり、大きく響いている。

「関崎くんにふさわしくなってから、関崎くんに誇りに思ってもらいたいから、だからこの一年、がんばるって杉本さん、努力しているのよ！ 色々大変な思いしているの。だからこそ、今、関崎くんたちが中学に行ったら、周りの杉本さんのこと苦手だと思ってる子たちがいろいろといじめるかもしれないよ」

清坂は大きく頷いた。こくと、何かを飲み込んだ。

「静内さんたちを中学の校舎へ案内してあげたいんだったら、せめて、杉本さんたちが修学旅行に向かう、六月の第一週まで待っていてほしいの。その時なら、杉本さんいないから。杉本さんにこれ以上、惨めな思い、させないですむから！ほんとに、ほんとに、杉本さんは関崎くんの

ことを」

教室内へ声は朗々と響き渡っていた。

乙彦にみな視線が教室内から、また廊下から飛び交い、突き刺さっていた。

ずっと清坂を見つめていたが、乙彦はそっと静内に顔を向けた。首を振って、乙彦たちに近づいてきた。

「もういいよ、今日はやめとこ」

また短く、簡潔に告げた。

「名倉も待ってるし、今日は天気もいいから、大学の庭で話の続きしようよ」

簡単に清坂にも。

「そういうことで、お先に」

乙彦が清坂に捕まる前に、さぞすごい話を聞かされていたのだろう。それをほんの一言で断ち切り、静内菜種は他の女子たちに手を振った。明るく「お疲れ！」とだけ残した。明らかに清坂に向けた語調とは違う、温かさが伝わった。

静内がB組内で、清坂以外の女子たちに好かれているのは大体理解できた。

たったひとり、清坂とうまくいかないだけと噂には聞いていたがこれほどまでとは思わなかった。

廊下で不安そうに立ちんぼうしていた名倉を手招きし、静内はわざとらしく溜息をつき、またくすりと笑った。乙彦に両手で「ごめん」のポーズをした。

「何があったんだ」

ぶっきらぼうに名倉が尋ねた。もっともな質問だ。乙彦がどう答えるべきか思案しているうちに、静内があっさりと答えてくれた。

「こういうことが多いから、やっぱり青大附属は不思議の国なのよ」

「つまり」

「うっかり打ち明け話でもしようものなら、あんな感じに放送されちゃうんだね」

さっきの清坂のことを暗にさしているのだろう。

「放送？」

「あのさ名倉、関崎」

三人ならんで廊下を歩き、生徒玄関まで来た。それぞれ別クラスの靴箱で履き替える前に静内は、乙彦と名倉、それぞれの顔を見やった。

「自分の方から言わない限り、決して人のプライバシーを詮索しない！ これ、私たちの間でのルールにしようよ。もちろん、自分から打ち明ける分には喜んできくけどね」

静内にしては長いセンテンスで、提案された。

「ということで、今の話題は関崎の個人的事情だから、もう終わりにする。ってことでどう？ 異論ある？」

「異議なし」

すぐに名倉からの返答があった。了解。乙彦に異論のあるわけがなかった。

「助かる」

一言だけ、乙彦なりの礼を伝えた。もう三人の話題に、杉本梨南の話題も清坂美里の叫んだ言葉も、浮かび上がってこなかった。

——だが、聞いてたんだろう。

すでに噂として流れていたのかもしれない。黙っていてもいつか知れ渡ることにはなっていただろう。乙彦が一年前、杉本梨南に懸想されていたことを。そして、今だに思われつづけているらしいということ。恋愛事件に巻き込まれてしまった過去は決して、勲章とは思えない。できれば封印しておきたい過去だった。

——静内は、清坂の言葉を聞いていたはずだ。いや、もしかしたら俺が来る前に詳しくそのあたりの事情を説明されていたかもしれない。

いや、それも静内菜種に対するプライバシーの侵害となる。これ以上の追求は控えなくてはなるまい。頭の上に余計な記憶というショウジョウバエのようなものがもし、飛び交っているならば、すぐにぱちっと叩いてつぶしてしまいたかった。消してしまえるものなら、消してしまいたかった。

——どこらへんまで聞いているんだ？ 本当に、興味がないのか？

読めなかった。静内が名倉相手に、大学内の探検ツアーについて相談をしている際、乙彦は静内の頭に吹き込まれた幾つかの記憶をどうやったら消すことができるかを、少し真剣に考えていた。

「ちょっと休もう」

言い出したのは名倉だった。三人で大学構内をあちらこちら探検し、初代校長の銅像だとか、卒業生寄贈のぼたん園とかを発見した。片手に大学案内をそれぞれ持っているのは、静内菜種が学生部に立ち寄り手に入れてくれたから。高校の入学案内とは若干異なり、観光地案内といった雰囲気漂う豪華な表紙だった。

「そうだね、座るかあ」

「もう疲れたのか？」

乙彦からすると、まだまだ探検したりないところが多々ある。青潟大学の校舎自体はちんまりしているのだが、その分外庭、中庭にゆとりがある。また意味不明な銅像や絵画も目につくところに張り巡らされている。ひとりで歩いていたらたいして気にも留めなかっただろうが、静内の鋭い観察力によりひとつひとつが浮かびあがってくる。今まで返事をしてきたのは乙彦だけだったので、名倉も退屈したんだろう。

「少し頭を整理したい」

名倉はすぐに煉瓦積みの花壇に腰掛けた。もう咲き終わったらしいチューリップと、まだろうじて花開いているパンジー、少しずつ太い茎を伸ばし始めているひまわり、中途半端に咲き乱れていた。名倉の隣にすぐ静内が腰掛け、自然と次は乙彦が。男子ふたりが静内を挟む格好となった。

「ごめん、私、こういう歴史感じるもの見つけると見境なくなるのよ」

「歴史というよりも変なもんだろう」

茶化したのは名倉だった。無口な奴だが、意外と切り返しがうまい。

「ほんとよ、変なもんばかり」

「カメラ、次回は用意しよう。ただし、日曜に」

乙彦をちらと覗きこみ、名倉は頷いた。

「休みの日じゃ、校則関係ないかってとこだよね」

「一本獲られた」

仕方ない。頭を下げた。今度は静内が吹き出した。

「なんかさ、名倉って何気なく、鋭いところ突くよね」

「悪いか？」

「悪くない。だからおもしろいでしょが」

いつのまにか三人の間で役割分担がなされていた。割り振ったわけではないのだが、切り込み隊長がなんとなく静内で、その言葉を受けて答えるのが乙彦、そこからさらにつっこみを入れるのが名倉。今のところ特に問題はない。

——しかしだ。

さっき、清坂美里にかみつかれんばかりに訴えられた、あの場面を思い出す。

静内と怪しいオブジェを発見しては騒いでいた時には忘れていられた、あの感覚。

——いくら過去に拘らないとしてもだ。

しばらく静内と名倉が、センテンスの短い会話でオブジェ関連の復習を行っている間、乙彦は襟元のボタンを二つ開け、大きく溜息を吐いた。

——あれだけ騒がれたら、いつかは静内たちの耳にも入るだろう。

名倉はまだクラスと馴染んでいない。とはいえ、全く友だちが居ないわけでもない。おそらく今学期中には噂も届くだろう。さらに静内。八十パーセントの可能性で乙彦を巡る一年前の出来事を聞いているに違いない。しかも、かなり偏った情報として、だ。

——事実なんだからしかたないが。

嘘ならあっさり和无視をしてもよい。

しかし、半分事実で半分嘘、となるとどんなものだろう。

清坂ひとりだったらあっさり訂正してそれ以上の展開はない。うるさく付きまとわれたらきっぱりと「やめろ」と最終通告をすればよい。もともと乙彦にとって清坂というのは、友人の付き合い相手であると共に、同じ規律委員のメンバーであるだけだ。

だが、しかし。静内菜種は。

——面倒だ、片付けよう。

具体的になにがどう、と言えない場合は、さっさと口に出してしまった方が楽である。

第一、どうせみんなにばれることなのだ。

静内自身は人のプライバシーに触れる気なしとついさっき言い放った。ありがたい。だがあとあと噂になった後で嘘か誠かすべてを説明しなおす手間を考えれば、さっさと話をしておいた方がずっと楽である。事が起こってから面倒な話をするよりははるかに。だから。

「静内、名倉」

二人を呼び戻した。

「なによ関崎」

「プライバシーのことだが」

「さっき言ったでしょ、そんなのどうでもいいって」

つまんなさそうに静内が答える。が、その目は穏やかだ。何かを訴えるようなものなどない。まさに「どこにでもいる」顔なのだが、乙彦にはそれが希少価値に思える。

「お前に聞きたいわけじゃない。俺が話したいから話すんだ」

「あらそう」

ここいらで少し、静内の反応にぴくりとしたものが見えた。横にゆわえたまとめ髪は動かず、まゆにかかった前髪だけがかすかに割れた。

「静内、さっきあの女子になんて言われた」

まずは聞いてみた。あっさり「清坂」と呼ぶには、静内たちと同じ段に並べてしまうような気がして抵抗があった。さらりと返事あり。

「清坂さんのことね」

「だいたい事情は聞いているだろうが、あとで説明するのは面倒だからここいらで」

「繰り返して何が楽しいのよ」

かわそうとする静内の脇から、「いや聞かせろ」と促したのはやはり、名倉だった。

「聞きたいか」

「教えてもらえるものは聞くのが礼儀だ」

「もっともだ」

語って楽しいことでは決してない。ないのだがこれから先、親友づきあいしていくならば、いろいろと迷惑をかける可能性もあるだろう。なら最初から、「迷惑かけるがごめん」とだけ伝えておくのも悪くはない。

「事実関係だけ話しておく。判断はまかせる」

どうせ、それだけでは終わらないだろうが。ちらと静内は乙彦を見やり頷いた。

「一年前のことだ。俺が水鳥中学で生徒会の副会長をやってた関係で、ここの中学に顔を出していたことがあった」

乙彦は切り出した。

「水鳥中學生徒会と青大附属の評議委員会が組んで、交流会を行おうという話がまとまっていたんだが、いろいろ詰める問題もあり、三回か四回くらい集まって話し合いを行っていたんだ」

「だから詳しくあったんだね」

短く、的確な相槌を打つ静内。名倉は黙って聞き入っていた。

「俺は一度行った場所ならばすぐ覚える」

「自慢するねえ」

事実なのだからしょうがない。乙彦は続けた。

「俺も不思議なんだが、その際に下級生の女子に気に入られてしまった」

「なんかそうらしいね」

と、言うことはすでに静内は事情を把握しているということだ。歩き回った後のせいか唐突に汗が噴きだしてくる。

「好意をもたれたのはありがたいが、俺にはそういうことに対して興味がなかった」

「あっさりしてるね」

大して反応がないことが手ごたえなさ過ぎる。思っていたよりも自分は、静内の反応を知りたがっていたのだろうか。そんなわけがない。たいしたことじゃない。言い聞かせ次に進んだ。

「だから、断った。結論はそれだけだ」

「ふうん」

「だが説明不足だったようで、伝わっていないと思われているのではと、あの、清坂……さんは言っている」

結局、「さん」を清坂につけることにした。おさまりがやはい悪かった。

「だいたい把握したよ」

静内は数回こくこく頷いた後で、肩を揺らして溜息を吐いた。

「関崎も苦労してるね」

「俺は苦労していないが、どういう話、聞かされてるんだ」

「女子同士の話聞いてどうするのよ」

「誤解を避けたいだけだ」

「今、関崎が話したこととほぼ変わらないよ」

あっさり答えた静内に、さらに食い下がった。

「俺と話したこととか」

「そう。たいしたことじゃないよ。たまたま他の子と放課後の予定話をしていたら、彼女が話し掛けてきただけ」

ここでさりげなく清坂のことを「彼女」と形容したところに、意味を感じる。

「クラスで話をするとはそうそうないだろう」

主語がなくてもあっさり通じた。

「私、ファッション興味ないから会話がかみ合わないのよ。それだけなんだけど」

「俺もあまり服には関心ない」

「見たらわかるそれ」

思いっきり笑った。宿泊研修のジーパンとトレーナー姿を思い出せば、あっさり納得だ。

「静内、今のうちに言っとく」

笑いが収まったところで、忘れぬように伝えた。

「もし、これから先、清坂さんに何か言われたら、俺に言え。一応、向こうのことは去年から顔見知りだから、話はできる。同じ規律委員だしな」

「何言ってるのよ、関崎。勘違いしないでよ」

まだ笑いの残りかすを残したまま、静内は答えた。

「あんた、私があの人にいじめられてると勘違いしてない？」

「いや、いじめをするとは」

元、にせよあの立村の恋人だった相手だ。そんな汚い手を使うような女子ではないだろう。言葉濁すと静内はきっぱり言い放った。

「女子グループが分裂しているだけの話じゃない。そんなことにエネルギー使うのもったいない」

「だがな、俺が噂に聞いている話では」

言いかけた乙彦を、静内は軽く足先蹴って制した。

「ストップ！ これ以上個人情報に立ち入ること禁止！」

おふざけにも似ていたが、断固たる拒絶の意が感じられた。

乙彦がまた言い返そうと身をしっかりと九十度に向けた時だった。

「静内、俺も関崎に賛成だ」

乙彦の話が始まってからずっと沈黙を保っていた名倉が、ティッシュを摘んで鼻を抑えながら立ち上がった。一步近づいた。乙彦と静内を割る位置についた。

——なんなんだ、こいつ。

もともと名倉は口数こそ少ないが、喋る時はきっちり話すタイプである。

しかしなんで。

「女子はいろいろ面倒だ。気を付けろ。特に附属上がりの女子は」

「決め付けなくてもいいじゃないの」

さらりと逃げ準備をする静内。しかし逃がさないのは名倉だった。乙彦が「個人情報」という葵の御紋で遮られたものを、名倉はあっさりと入手していく。

「お前ら、奈良岡という女子を知っているか」

「誰それ？」

知らない。乙彦も首をひねったが、思い当たらなかった。別のクラスの子だろうか。

「今年の三月まで、青大附属にいた。卒業してから医者になるため別の高校に進学した」

——医者になるため、別の高校に、か？

「青澗大学には医学部がないから、しょうがない」

脈絡のない話題に乙彦はついていけなかった。手を挙げて、「名倉」と呼びかけた。

「いったいどういう繋がりなんだ、悪いがもっとわかりやすく説明してくれ」

「この学校の女子はあくどい奴が多いから気をつけろというのが結論だ」

——名倉、何を言いたいんだ？

「あくどいかなあ？ じゃあ私は？」

「親玉だ」

——全くわからん。

ふたりのはてなマークをそ知らぬ顔して、名倉は突っ立ったままとつとつと説明し始めた。

「奈良岡とは小学時代の同級生だった。顔は不細工だが性格は悪くない」

「女子に不細工って言うのはやめなよ」

静内の茶々をあっさり無視。

「奈良岡は青大附中に進学したが、そこで女たらしの男子に交際を申し込まれた」

「古風な言い方するね」

まったくだ。名倉の話は事実だけの羅列だが、あっさりまとめてもらえると興味が湧く。乙彦は静内に寄り添う格好のまま、名倉の言葉に耳を澄ませた。

「それは奈良岡のせいじゃない。だが、この学校の女子は、悪いのは奈良岡だと決め付けた」

「本当？ それ本当だったら酷い話だよ」

たぶん本当の話なのだろう。ただし、似たような話は水鳥中学でもよく聞いた。珍しいことではないだろう。あえて相槌を打たずに聞いた。

「それで結構嫌がらせをされた、その女子たちに」

「奈良岡さんって子が？」

「そうだ。最後はその女たらしもきちんと奈良岡を守る努力をしたんでおさまった」

「かっこいいなあ。そうか」

細かく相槌を打ち続ける静内とは違い、乙彦は早く結論を聞き出したかった。

「で、結局何を言いたいんだ？ 名倉」

「この学校の女子は、集団になったら危険だ」

「危険だと？」

名倉の言葉ははっきり、端的だった。

「静内はクラスの女子連中を甘く見ている。あいつらが束になってかかってきたら、何をされるかわからない。気を付けろ」

「なあに言ってるのよ。誰が束になってかかってくるって」

脳天気を受け流す静内菜種だが、さらにしつこいのは名倉時也。かなりくどい。

「つまり、あいつらは、気にいらぬ奴に対しては、とことん叩きのめしにくるから、お前も気をつけろ。それだけだ。あ、それと」

乙彦に目を向けた。

「関崎の言う通り、何かあったら関崎に言え」

「なんでそんなことする必要あるのよ？」

いきなりくすくす笑い出した静内に、名倉はしゃがみこみこぶしを突き出した。

「でないと、この学校、生きていけないぞ」

——なんで俺に言え、なんだ？

隣で笑い転げている静内を横目に、乙彦は名倉の顔を覗き込んだ。

いったいなぜ、いきなり、なのか？

「名倉、ひとつ聞きたい。なんでそんな話した？」

顔を挙げた名倉に尋ねると、即答された。

「ひとりで戦っていけるほど、この学校の連中は甘くない。特に女子連中」

「戦う必要なんてあるのか」

もちろんそういういじめが存在していたとするならば当然だろう。しかし、そこまでの展開が静内に巻き起こるとは思えなかった。何かあればもちろん、力にはなるが。

「この学校でやたらと男女交際の話が出るというのは不思議だという話を、さっきしていたが理由はわかる。つまり、誰か一人の女子に一人の男子が守りにつかないと、攻撃されるのがこの学校の特徴なんだ」

「いや、それはないだろう？」

ずいぶん短絡的な発想に思えた。もともと名倉が青大附属の連中に心を開かず孤高を通しているのは聞いていた。話題がないわけではないのだからもっと語ったっていいだろうと思っていた。しかし、今の話を聞いて大体、名倉の青大附属に対する感情を理解できたような気がしてきた。つまり、幼なじみをいじめた連中を恨んでいるのだろう。だがそれでも疑問は残る。

「じゃあなんでそんな、めんどくさい学校に入学した？」

「奈良岡が、このまま青大附高に入学するはずだったからだ」

言葉をとぎらせた後、名倉はじつと乙彦と静内に小声で、しかしはっきりと伝えた。

「奈良岡の付き合っていた奴は、あいつを捨てて、別の女子を選んだからだ」
しばしの沈黙の後、静内はしみじみとやわらかい笑顔でもって答えた。
「名倉、あんた、その奈良岡さんって人のナイトとして入学したってこと」
照れ隠しなのか、名倉は急に立ち上がり背を向けた。

図らずも、乙彦と名倉、ふたりの「プライバシー」が明らかにされた。

——次は、静内が何か言うか？

乙彦は、背を向けている名倉の背を眺めながら、左隣で感動しているらしい静内の様子を、左肩で感じ取ろうとした。口を開く気配を感じたかった。

「さ、そろそろ移動して、さっきの続き、やろうか！」

——言う気ないのかよ。

読みは外れた。まだ静内は語る気、さらさらなしのようだった。

最近やたらと、千代紙に似た柄の小物を持ち歩く男子が目につく。

主に自転車のキーホルダー、または時計のバンドなどにさりげなく施されている。

中にはなぜか下敷きの中に敷き詰められているケースも見受けられる。

女子ならともかく、男子がなぜそんな少女趣味に走り出したのか、乙彦には皆目見当がつかなかった。しかもそういうものを持ち歩いている輩の多くは、普段から男気たっぷりの硬派野郎が中心だ。少なくとも自分で選んだわけではなさそうだ。

「ご名答、関崎、鋭いね」

六月も後半に差し掛かった放課後、球技大会も無事終えた一週間後。

古川こずえが乙彦の疑問に答えてくれた。こういう話題はさすがに静内菜種では埒があかない。多少の下ネタ攻撃を覚悟して尋ねれば、すぐにわかりやすい答えが返ってくる。

「自分の趣味でないのに、なぜみんな女の子っぽいグッズを持ち歩いているか、となると答えはひとつ。彼女の趣味だよ」

「だが、女子でもああいう和風のものを持ち歩く奴はそういないだろう」

乙彦は座り込み、スニーカーの紐を縛り直した。合宿に引き続き男子バレーボール大会で優勝したA組のリーダーとして、それなりに全力投球したつもりだが、いかんせんしばらく身体を動かしていなかったこともあり思いっきりなまっていた。それゆえの筋肉痛が残っている。まずいまずい。その流れで少し腰を浮かし、大きな石の上に座りなおした。古川も立ったまま空を見上げた。

「じゃあ問題。そういう千代紙細工にはまった女子ってどういう子たちだと思う？」

「かなりしとやかなタイプだろうな」

たとえば、水野五月あたりならばお似合いとも思うのだが、まかりまちがっても古川こずえではありえないだろう。目が合うと同時に、古川は吹き出した。

「その、私じゃあありえないよ、って顔、なんとかしなよ。まあいいけどさ、千代紙柄のグッズって、どういうところに売ってて、どういう時に買うかってこと考えるとおのずと答えがでるんでないの」

「どういうところ、か。旅行か。たとえば古都とかいわれるような場所か」

「かなり近いよ。そうそう」

「旅行ということは」

なるほど、わかったぞ。乙彦はすぐに答えを見出した。

「修学旅行の土産か」

「ご名答！」

「だが、俺の知る限り修学旅行は三年の秋と聞いている」

結城先輩からの情報なので確実なはずだ。古川は首を振った。

「あんたさ、青大附属は高校だけじゃないよ。中学だってあるんだよ」

「中学……そうか！」

そうだった。三週間前は中学の修学旅行だと、清坂美里がちょろっと話をしていたではないか。興味がなかったので忘れていた。

「そういうことよ。なんか話によるとさ、中学の修学旅行で、可愛い千代紙細工をこしらえる体験学習があったんだって。それでみな、いろいろこしらえてね、彼氏にプレゼントしようって思ったらしいのよ」

「だが、そんなのをもらって喜ぶ男子というのは、いるのかふつう」

「ま、なんとも思っていない男子だったら、そうだろうね。でもねえ」

声を潜めて古川はにやにや笑う。

「世の中広いのよ。なんでも、千代紙細工の体験工房側に、縁結びで有名な神社があってさ、言い含められたらしいのよ。『好きな人にここでこしらえた千代紙細工をプレゼントすると恋が実る』ってね。それってこじつけというか、そこの商品を買って帰れっていうか、露骨な商売根性を感じるよね。でも、中学の子って純情じゃんよ。私らみたいにすれてないよ。だから、必死にプレゼントしたってわけ。それが、あの結果よ」

「そんなのを信じるのか」

乙彦には信じがたい価値観である。頭を冷やして考えればそれは当たり前のことだ。だいたい男子に乙女心くすぐる小物をプレゼントして、果たして喜ばれるかなんて、考えられないことではないか。同じ修学旅行のプレゼントを考えるのならば、定番の木刀とか、せいぜいペナント、いや一番よいのはお菓子類の食べ物じゃなかろうか。いくら商売上手とはいえ、あっさり騙されるのがなんだか間抜けに見える。

「男子は馬鹿にするかもしれないけどさ、女子にとっては必死なんだよ」

はたして恋する乙女らしく、古川こずえは乙彦をたしなめるよう続けた。

「好きな人には振り向いてもらいたいし、好きになってもらいたい、自然なことじゃないの。ま、それを受け入れたうちのクラスの男子の一部なんぞ、こうやってぶらぶらさせて歩いているわけよ。狸のなんとかとおんなじくね」

「狸とは関係ないだろう」

いつもの下ネタを受け流しつつ、思い出した。そういえば休み時間すれ違ったB組の東堂が、ごつい指先にどう考えても似合わない、千代紙もよりの真っ赤な指輪……指貫ともいう……をはめ、規律委員であるにも関わらず違反カードを切られていた。しかも、それを発見した先生たちは怒りもせず、大爆笑しながら何度も没収した指輪を摘み上げて語り合っていた。ちなみにすぐ、返してもらえたようだが。

「ああ、東堂ね。あいつの彼女って色々と悪さしてる子らしいんだけどね」

頼みもしないのに語るのが古川である。

「東堂の愛でなんとか更生させようとしているわけよ。両方の親の公認。彼女も何考えてるかわからないけど、やっぱり気持ちはあるんだね。規律委員の彼氏に喜んで校則違反させちゃうような指輪だもん」

「更生させねばならないような女子がいるわけか」

「まあ、噂よ噂。とにかく、修学旅行も一段落したとこだし、我が後輩ちゃんたちは夢の跡」

指をくわえてまた流れる雲を見つめ、古川こずえは溜息をついた。

「修学旅行中ってさ、やたらとみんなおおっぴらにいちやついちゃうんだよね。関崎もそうじゃなかった？」

「いや、そんなことはない」

断じて。納得顔で古川は頷いた。

「悪い悪い、そうだよねえ、あんたがまさかさ、ふたりっきりでホテル一夜過ごしたり、オールナイトしたりするわけないよねえ」

「中学生がそんなこと、するわけないだろう」

全く下ネタ女王の妄想力には、驚くべきものがある。

「そんな、するわけないって決めつけるのもどうかと思うけど、とにかく修学旅行四泊五日というのはカップルが増える増える、すごいだよ」

——そんなの知ったことか。

やはり、青大附中と水鳥中学の修学旅行、捉え方は異なるというわけだ。

別に古川を捕まえて、千代紙細工流行の謎を解きたかったからではなかった。
理由はちゃんとある。

乙彦は安売スーパーで見つけた缶コーヒーを一本取り出した。古川に渡した。

「サンキュー！ いきなりどうしたのさ」

「少し、教えてもらいたいことがある」

膝を開き、少し前かがみになる。両手を膝頭に置く。

「なによいったいやぶからぼうに」

「最近、藤沖の様子、変だと思わないか」

単刀直入に意見を乞う。古川は答えず、乙彦から受け取った缶をくるくる手のひらで回した。
しかたない、具体的に問う。

「端的に言うとだ、昼休み、立村とすれ違った時、めずらしく藤沖があいつに声をかけていた」

「それは確かに珍しいかもね。ただガンつけてるだけかもよ」

「もちろんその可能性は高いが」

入学してから今日まで、藤沖と立村との関係は冷戦状態。いつ雪融けするのかは全く予測つかない状態だった。もちろん乙彦もそのことは重々承知しているし、そう簡単に決着がつく問題でもないのだと認識している。

しかし、この一週間ほど、その関係に若干の変化が生まれたこともなんとなく感じていた。「感じる」というのは曖昧すぎて、尻が落ち着かない響きではあるのだが、どうもおかしい。さらに詳しく説明する必要があるようだ。乙彦は両手を組み合わせ、古川に話し掛けた。

「今まで藤沖はかたくなに立村を軽蔑していたわけだが、どうもここ一週間ほど変だ。どこがどうと、具体的には説明しづらいんだが、とにかく藤沖の腰が低くなっている」

「和解を考え始めたんじゃないかって言いたいわけね」

どうやら古川も心あたりがあるらしい。ブラウスの半そでに重ねた薄いベストを前にひっぱり

ようなしぐさをした。

「まあそういうことだ」

「関崎もずいぶん鋭く見てるね」

「なんだ、気が付いていたのか」

古川はその問いに答えず、缶コーヒーのプルトップを開けた。くいと飲んだ。喉が鳴った。

「私は藤沖よりも、立村がずいぶん強気に出てるなと思ってたけどね」

——立村がか。

そこには気づかなかった。伝える必要はない。古川が勝手にしゃべってくれる。

「立村ってもともと人の顔色うかがう性格でしょが。だから藤沖の理不尽きわまる態度も耐えてきたようだけど、そうだね、確かにこの一週間くらい、卑屈さがなくなってきたよね」

「卑屈、か」

乙彦からすると、あの応援団結成に向けて日々努力に余念のない藤沖が、いきなり無口になってきたことの方が驚きだった。もちろん球技大会中はかなり懸命に走りまくっていたし、乙彦にもそれなりに兄貴風吹かせたりもしていた。しかし、この数日は特に。

——俺にもそういう話してこないな。

肩を怒らせて乙彦を弟分扱いするような言動がめっきり減った。

もちろんそれはありがたいことではあるのだが、自分だけではなく立村に対してもその接し方が変わって来ているとすれば、またそれはそれで考えるものがある。

「古川、お前は藤沖と評議委員会で一緒だろう。何か変わったことでもあったのか？」

「同学年同士ではないよ。私も悪いけど藤沖よりも別の方に興味あるし」

——ああ、C組だな。

さすがに毎度聞かされていると野暮なので、古川の恋事情には首をつっこまないでおいた。本人もそのあたり飲み込んでいるようで横道に話を逸らさなかった。

「けど、それ言われてみると気になるところはあるよね。わかった。私も少し注意して見とくよ。あいつも評議委員やるのは前期のみと割り切っているからねえ。何か考えるとこあるのかもよ。ほらほら、応援団結成準備で頭の中真っ白だとか」

「それは可能性として高い」

古川へ返事しながら、乙彦はあるひとつのことに気がついていた。

自分が「変だ」と感じたもの、それは直感だろう。男子たるもの、女子のように「なんとなく」という価値観で判断すること自体抵抗があるのだが、今回の藤沖に関して言えばどうしてもなんとなく、ぴんとくるものがある。それを理論で分析してみるよりも、あえて「なんとなく」思考の得意な女子に協力を仰ぐのは、決して間違ったことではないのだと。

気付かずに一年前の乙彦は、あえて水鳥中学において女子たちと受けよく情報を得ていた総田に腹を立てていたものだった。あれも今思えば、理論優先になりがちな男子の視点を、あえて女子の目線で捉え直すというひとつの手段だったのかもしれない。

——あえて同じ過ちは犯すまい。

だから今日は、古川に声をかけた、というわけだった。

「男子のことはよくわかんないんだけどさ、関崎」

何か思いついた風に、唇を尖らせ、古川が尋ねてきた。

「藤冲到彼女って、いたっけ」

——いないはずだが。

宿泊研修でもそんなこと話していたはずだ。少なくとも乙彦はきいていない。

「いないはず、だよねえ」

乙彦の答えを待つまでもなく、古川は自分ひとりで答えを出すと、

「私もそういった噂、聞いたことないし、とすると、恋愛問題じゃあなさそうだね」

「なんでそちらに結びつくんだ」

全く、古川の発想たるもの、とっぴ過ぎてわけがわからない。切り捨てようとして慌てて遮る。こういう女子発想こそ、総田が取り入れてきたものだ。乙彦自身も忘れてはならない。

「どうしてそういう発想となったんだ」

「いやね、よくあるのよ女子同士だと。好きな男子を通して恋の鞘当ってのがね。でもなあ、まさか立村相手に三角関係こしらえるような趣味もないだろうしね」

絶対に乙彦には考えられない発想である。

「あと考えられるのが、よくできた彼女に藤冲がほだされて、天敵・立村と仲直りするように口説かれたのか。でもそれも考えずらいよね。仮にも藤冲たる男子がよ、まさか、女子の一言でころっと態度変えるとはねえ」

確かにありえない仮説ではある。根拠もなんもない。

古川の想像力には敬意を表するとしても、実際役には立たない発想であることがはっきりした以上突っ込む必要は感じない。

「けどさ、関崎」

黙った乙彦に古川はさらなる質問を浴びせ掛けてきた。

「あんたとしては密かに、これってラッキーと思ってない？」

「何がだ」

「これであんた、藤冲到借金返せるってね」

「俺は何も藤冲から金を借りていない」

わけもわからず言い返すと、古川は笑いながら首を振った。

「もうさ、入学してから藤冲到ばあんたのこと、何から何まで面倒みてきてくれたでしょうよ。教科書の買い方から青大附属の暗黙たる了解とか何もかもね。ほんっとお兄ちゃんみたいよねえ」

「別にそれはしてもらいたいわけではない」

口ではそう切り返せたものの、投げ込まれた言葉の小石、その先がとんがっていてちくりと痛い。そしらぬ振りを装った。

「まあうちの学校ってさ、いろいろと面倒見いい奴が多いからね。ただ、気をつけな。あんたは

ありがたく思ってるかもしれないけどさ、藤沖はたぶん、ほっといてもらいたがってるよ」

——俺もそう思うが。

あえて返事をせずにいると、古川はさらに続けた。

「いまさ、ちょっとひとつ、思い当たる節があるんで調べてみようと思うんだけど、ちょっとばかり付き合ってもらいたいんだけどさ」

腕時計をチェックした。まだ四時台だ。

「時間は空いている」

「じゃあ行くか。中学に」

「今からか？」

思わず口に出てきそうであせった。今日、乙彦はカメラを持ってきていない。一緒に案内してやりたかった静内や名倉のため、写真を撮っておきたかった。

「なあにアホなこと言ってるのよ。中学校舎の写真撮ってなにが楽しいのよ。早くしないとちょっと時間なくなるから、ほらさっさと行くよ！」

背中をどん、と叩かれた。さっきおごった缶コーヒーはとっくの昔に空となっているようだ。古川が空き缶をもてあそびながら、

「どっか捨てるところないかなあ」

屑籠を探していた。一度校門を出るとすぐに見つかった。乙彦が指差すと古川は、約一メートルほど離れたところから投げ入れた。指を鳴らして叫んだ。

「ホールインワン！」

——何がホールインワンなんだ。

全く、女子とは言わず、古川こずえ、こいつも謎な人物のひとりである。

——なぜ中学校舎へ向かうのか？

二週間くらい前、静内と名倉を誘い出かけようとした場所なのだが、清坂に止められそれっきりになっていた。もちろん、清坂の言う通りなのであえて控えたのだが、古川にそれを伝えると

「大丈夫よ。杉本さんはさっき、立村が連れ出したはずだしね」

とっくに確認したようなことを口にした。

「あんたが杉本さんに気持ちがないというのを確認しているから言うけどさ、関崎」

さすがに小声、古川はかすれた声で囁いた。

「杉本さんのことを一番心配してるのは立村しかいないからさ」

「やはり、そうか」

なんとなくそれはわかるような気がした。

「修学旅行でまた、杉本さんいろいろ辛い思いしたらしいからね」

想像はつく。あれだけ男子に嫌われた女子が、四泊五日の旅行中にトラブルへ巻き込まれないわけがない。いつか佐賀はるみから聞かされた杉本梨南のその後についても、決して明るい見通しが立っているようには思えなかった。気持ちはないにしても、不幸になることは決して願って

いない。乙彦としてはただ、どうか、杉本梨南が穏やかに時を過ごすことを祈るのみである。

古川に誘われて、中学校舎を隔てる格好の雑木林をくぐりぬける。まだ太陽は夏陽に近くなりつつあり、日が落ちるのもまだまだ先のはずなのに、なぜか木々が鬱蒼としていて薄暗い。光が爪の先程度しか落ちてこない。誰もいない。

「不審者に教われてきゃーなんてことにならないとも限らないし、私も乙女」

「俺が保証する。それはありえない」

「ああら、関崎ってばずいぶん言うねえ」

——静内に鍛えられた、ともいう。

古川は立ち止まった。乙彦もつられ、古川の真後ろで足を留めた。

「関崎、あんた、今年の中三の子たちが修学旅行で何やらかしたかってこと、聞いてないよね」

「ああ全然」

情報が入ってくるわけがない。

「千代紙細工の縁結びの話すら知らないなら、そりゃそうよね」

溜息はつかずに、ゆっくり深呼吸し、古川はじっと乙彦を見据えた。

「藤沖が生徒会長だったことは、知ってるよね」

「もちろんだ。俺も水鳥中学の副会長だ」

「ああそう、それじゃあさ」

受け流され、また続けられた。

「ちょっと気になってさ。最近藤沖、うちら高一チームよりも、中学の生徒会室に通うことが多いかもな、って思ってね」

「はあ？」

「もともとあいつ、生徒会長だから、後輩たちが気にならないわけないと思うんだ。ほら、立村が杉本さんにずっとくっついていてのと同じよ。藤沖も藤沖でね、いろいろ考えるとところああると思うんだ」

「確かに俺もそうだ」

——内川があのままアホな御代官様と町娘のコントをやらかしてないかどうかなどがな。

頭の中にぼよんとした内川の平和な顔が浮かんだが、すぐに古川の声で打ち消された。

「あんたはどうでもいいのよ。関崎。それより、ちょっと、まさかとは思うけど」

言葉を切った。考え直したらしい。首を振った。

「ごめん、まずは状況を確認してから、それから私の推理、言うわ。下手な想像でもって、名誉毀損なんてやらかしちゃったら、やばいもんね」

——なんのことだ？

放課後、時間があるから付き合っているものの、それに意味はあるのだろうか。

——中学と藤沖と生徒会と、最近の変わりようと、どう繋がるんだ？

こればかりは、飛躍しすぎる発想の持ち主古川こずえに任せるしかない。

闇深い林から抜け出ると、まだ昼色の太陽が空に輝いていた。時計の針は四時半をまだ、回っ

ていなかった。

四年前、中学入試で初めて訪れた時は、ストーブもないのになぜ玄関が暖かいのかが不思議だった。同じく、その後交流会の準備関係で足を運んだ時は、なぜみな急須でお茶を汲んでくれるのかが謎だった。出入りした場はせいぜい教室と生徒会室、あとは体育館と奥の準備室のみ。じっくり中を除き見る機会はほとんどなかった。

上靴は用意していなかった。古川こずえがスリッパを職員玄関から持ってきてくれた。

「私たち、もうほとんど顔パスだしさ。あんたたちが今度遊びに来る時は、ちゃんと職員玄関から入って、来館者ノートにちゃんと名前書いておかなくちやなんないからね。忘れるんじゃないよ」

「そういうものか」

まあ、卒業生でもないのだからそれは当然だろう。乙彦は脱いだ靴をそのままボストンバックに押し込んだ。次回からはビニール袋を持参しよう。ついでに静内、名倉にも指示しておこう。

極太柱で支えられたロビーの真中にはやはり、ベンチが用意されていた。

柱周りには誰かの描いた人物画が大量に張り巡らされていた。

目を留めると、すぐに古川が解説をしてくれた。

「ああ、あれね。今D組にいる金沢っていう奴がね、学校側から頼まれて全部描いてくれたんだよね。前も話したかもしれないけど、金沢ってものすごい天才画家野郎でさ、今でも大学の美術関係特別授業受けに行ってるくらい。有名な画家の先生たちにも最近では声をかけてもらってるみたいだよ」

「そうか」

芸術は全く門外漢の乙彦だが、とにかく絵がうまいということだけは認識した。

「さ、まずはなつかしの図書館へGO！」

古川こずえと図書館とのつながりがどこから来るのか正直わからなかった。まさか中学の図書館でありながらエロ本を並べているとか……いや、いわゆる江戸時代の「春画」あたりならありえないこともない……妄想が頭をよぎった。

「あんた、さすがに下ネタ女王の私でも、そこまでしないよ」

疑念をすぐにさとられたのか、豪快に古川は笑いこけた。

「中学時代私、委員会やってなかったからね。かわりに、図書局に入ってたのよ」

「局？」

「そう。部活の延長みたいなもんよ。委員会が強い青大附中だけど、やっぱり委員会よか三年間安心して所属していられるとこの方がいいって感じあるし、私は図書局に入ったってわけ」

図書委員というものがどうやら存在しないらしい。

「同じことでね、放送局もそうよ。放送局も有志が集まるわけだしね」

そういえば放送委員も選出しなかった。

「人それぞれよ。おかげさまで、私はの一んびり図書局で過ごしたわけだし、刺激の少ない日

々だったわよ」

「刺激、か」

ちゃきちゃき委員会活動で走り回っている方が、古川には向いているような気がするのだが、本人にはそれなりに思うところもあるのだろう。

三階まで階段を昇り、左端の大教室まで連れて行かれた。乙彦に、
「悪いけどあんた、その辺で本読んでな。ちょっと挨拶してくるからさ」
適当に席まで連れて行かれ、古川の鞆を預けられ、そのまま去られた。

図書室、というよりも図書館だろう、これは。

青大附属高校の図書館と比較するとこじんまりとしているが、同じ校舎内に設置されている図書室として考えるとまさに広い。教室、五部屋分はあるのではないだろうか。しかも、書棚が多すぎる。たぶん初めて使用しようとする奴は迷うこと確かだろう。

——中学生が歴史書なんか読めるのか？

——数学関連のこんなわけのわからん専門書、読めるのか？

驚くべき蔵書の多さと種類の細かさ。

——しかも英語の原書まであるぞ。

いつぞや、立村が卒業式の答辞を英語で読み上げたという話を聞いたが、これだけ原書が日常的に並んでいれば、自然と覚えるような気がした。もっとも、乙彦にとってそれは無理難題であるのだが。

まずは、「歴史」書籍に向かい、「青潟市史」と金文字輝く分厚い本を抱えて机に置いた。同じ机についている中学の生徒たちは大して興味も持たず、それぞれの会話に専念している。乙彦も気にせずそれを開いた。文字が細かすぎて、すぐに読解を断念した。

——明日、静内に教えてやろう。

歴史好き、特に地元・青潟の歴史に興味津々の静内ならさぞ喜ぶことだろう。

一度開いたものを閉じるのも面倒で、乙彦はしばらくそのままにしておいた。

——古川はいったい何を調べるつもりなんだ？

乙彦が藤沖の変調について尋ねたのは、これが最初のはずだった。

前から違和感がないわけではなかったけれども、女子の古川から情報を得たほうがいいのではと思ったのは今日が初めてだ。ふつう男子同士、相手の様子がおかしければ気軽に「よお、どうした」くらい声を掛け合うし、もしくはほっておく。それでいいと今までは思っていた。

しかし、立村に対して、いきなり下手に出だした場面にはやはり驚いた。

しかもその声のかけ方が、

「立村、少しいいか」

とかいった、実に腰のひくいものだったからなおさらに。

その後の立村がどう対応したかまではわからないが、それ以来どことなく藤沖と立村との間に緩和したのを感じはじめていた。

——古川の言う通り、和解の糸口になるのならいいと思う。

藤沖が自分なりに考えるところあって、それを選んだというのならそれはそれでよいだろう。できれば乙彦としては、その流れを応援してやりたい。藤沖に対しても、また立村にたいしてもだ。

男子連中にそれを頼むのは基本として難しい。だから古川に声をかけてみた。

同じ評議委員ということもあるし、それなりにいい方法を見つけられそうな気がしたからだった。ただそれだけのはずなのだが。

——なにか、違和感があるぞ。

それがどこから来るのかは自分でもわからない。理屈では判断できない。ただ、古川が雑木林の中で少し思い詰めたような口調で話したのだけが、気に掛かる。

——まあいい、じきにわかるだろう。

乙彦はしばらく、青潟市がまだ「市」と呼ばれていない時代の成り立ちを目で追いはじめた。やはりわからなかった。

だいたい十分くらい待たされたろうか。

「お待たせ」

古川が戻ってきた。素早く乙彦のとなりに座り込んだ。

「どうだった」

言葉を返さずに、古川は胸ポケットから生徒手帳を取り出し、一行走り書きし、乙彦に渡した。

——生徒会室に行く。証人として、つきあって。

「証人？」

「ちょっと、けりをつけないとまずいからね」

「は？」

親指を立て、かばんをかかえ、古川は「GO！」ともう一度告げた。

つられて乙彦も立ち上がった。行く前に「青潟市史」を本棚に戻すと古川から、「あんたって渋い本好きだねえ」

しみじみと呟かれた。

別に好きで読んでいるわけではないのだが。

生徒会室には何度か足を運んだことがある。その場でおそらく藤沖とも顔を合わせているはずだ。何名かは持ち上がりで役員に選ばれているだろうし、誰かかしら知り合いはいるだろう。

「どうだろうね。今の生徒会長は佐賀さんだってことくらいは知ってる？」

「ああ」

雅弘を通じてそのあたりは。

「あとさ、副会長に霧島って奴もいるけど」

「それは知らない」

「じゃあほとんど知らないんじゃないの。まあいいよ。かえってそれの方が気も楽だし」

二階に下り、そのまま生徒会室へと向かう。その道筋は覚えているのだがただ付き従うだけというのがどうも落ち着かない。

古川は生徒会室前でしばらく様子を伺っていた。引き戸で、声らしきものは聞こえるが具体的にどういう話題なのかはわからない。

「佐賀さんはいるかもね」

「いたらまずいのか」

「まずいね。用あるのは、霧島だけ」

霧島、とは誰だろう？ それに乙彦を「証人」とせざるを得ないとは？

「俺がいない方がいいじゃないのか」

「違うって。あんた、青大附属上がりじゃないでしょう。だから、中立の立場で話をまとめてもらえるってこと。あ、そうだ言うの忘れてたけど」

古川は乙彦へ、声を潜めて囁いた。

「今から霧島と三人で話をするつもりなんだけど、その場で私が話したことは、絶対藤沖たちに話すんじゃないよ。立村にもね」

「内容によっては、そうするが」

言いよどむと溜息ひとつつかれてしまった。

「まあいいよ。関崎は嘘のつけない男だしね。まかせた。じゃ、行くよ」

引き戸をノックし、古川は細く開けた。

「すみません、悪いけど、霧島を呼んでくれる？」

古川こずえの顔と名前が知られていたのか、それとも後輩に懐かれていたのかわからないが、しばらく戸口で女子同士の楽しげな挨拶が交わされていた。相手は佐賀ではないらしい。中は覗けなかったが、すぐに色白のほそっこい男子が姿を現した。鞆を持っていた。

「古川先輩、お久しぶりです」

「あんたの姉さん、元気？」

整った王子様面が、一瞬にして崩れた。吐き出すようにそいつは、

「自分のレベルにふさわしい場みたいですね、ったく」

苦々しく呟いた。

「またあの女がご迷惑を」

「そんなことないよ。それよか、ちょいとあんたに聞きたいことあってさ。まずはその辺の教室で話、したいんだけど」

「かまいません。生徒会の仕事はほぼ終わっております」

丁寧な言葉遣い、少し甲高い声。それでいて妙に気品のある顔立ち。

芸能人としても通用しそうな雰囲気をもし出している、とは思う。

だがどうも、上っ面の言動に思えるのは乙彦だけだろうか。

その男子は乙彦をげげんそうに見た。すぐに古川が紹介してくれた。

「こいつが生徒会副会長の霧島。再来年、あんたの後輩になること確定中。そいで霧島、こいつは外部入学で青大附高にきた、噂の熱血野郎、関崎。次期生徒会にかかわってくることはほぼ確定だから、覚えておきな」

「なんていう紹介なんだ」

思わずぼそっと呟くと、霧島も少し顔をしかめたものの、すぐに乙彦へ頭を下げた。

「霧島、真です。青大附中二年、生徒会副会長です。お見知り置きを」

古川に紹介された以上のことを説明しようがなく、乙彦はただ「こちらこそ」としか返せなかった。

すれ違う女子たち……もちろん中学生なのだが……が、古川と顔を合わせては、

「古川先輩！」

とあどけなく駆け寄って来て、ついでに乙彦の顔を覗き込んで去っていく。その繰り返しに暫く啞然としてたら霧島が話し掛けてきた。

「青大附属高校では、今、どの委員に」

ずいぶんやぶから棒に聞いてくるものだ。隠すことはないのであっさり答える。

「規律委員だが」

「ですと、南雲先輩、東堂先輩、清坂先輩とご一緒に」

驚いた。高校の委員会名簿がすでに流されているというのだろうか。声も出さずに頷くと、

「藤沖先輩からは、お噂伺っております」

ときた。やはり藤沖は元生徒会長、それなりに後輩たちの面倒を見たりもするのだろう。しかし勝手に乙彦の噂が流れているというのは、決して気持ちのよいことではない。

「いろいろ、ご苦労もおありかと」

「だいぶ慣れたが、やはり公立中学とは違うな」

ありのままの感慨を述べた。

「そうですか」

一階まで降りた。渡り廊下を伝い、真中あたりからなる道をするする降りた。ちょうどアジサイの花が満開で、夕暮れの陽射しの中、やわらかく輝いていた。まだ男子も女子も、うろうろしている。古川が腕時計をちらりと見て、

「どうせ今日は日が長いし、六時くらいまで大丈夫かもね」

「大丈夫です。生徒会はいつも七時くらいまでやってます」

すばやく古川が、ひとかかえもある大きな石のまとまった場所を確保した。大理石なのかそれとも何か別の種類の石なのかはわからないが、三つほど巨大椅子のような格好でアジサイを取り囲んでいた。ちょっとしたスペースにはなる。廊下から丸見えなのか、時折覗き込む生徒たちもいる。

「御用とは」

ずいぶんかしこまった言い方をしつつ、霧島は廊下側の石に腰掛けた。次に古川が鞆を膝に載せて座り、証人役の乙彦は黙ってそのとなりに。

「いやね、年増のおばさんがさ、余計なこと言うのはなんかと思ったんだけどね。おせっかいしにきたってわけ。迷惑承知できたから、あとで悪口言われるのはしょうがないけどさ」

「年増といっても、たかが二歳差でしょう」

——その通りだ。

乙彦も霧島に続き心の中で突っ込んだ。どうもこの霧島という男子、中学二年にしてはずいぶん慇懃無礼なところのある奴だ。もちろん乙彦も完璧レディーファーストが出来ているとは言わないが、それでもいわゆる「おごりたかぶり」の体現者という気がしてならない。古川はあまりそんなの気にならないらしく、話を続けた。

「単刀直入に言うわ。霧島、あんたさ、渋谷さんを生徒会室から追い出したってのはどういうことなのさ。もう高校の方にも噂になってるんだけどね」

「藤沖先輩からですか」

動揺することもなく、さらに霧島はさらりと答えた。

「いやいや、あいつは言わないよ。ただ、藤沖のすることなすことがね、ちょっとおかしいんでないのって思ったんでね。中学のことに口出しするのはおばさんとしてもしたくないけど、うちのクラスにも影響が出てくると、ほら、やっぱり、面倒でしょが」

「先輩のクラスは、英語科ですね」

ぴしゃり、と霧島は切り替えした。

「そうだけどさ」

「それなら、立村先輩も、いらっしゃるということですね」

——立村？

一瞬疑問が生じたが、すぐに納得した。立村は中学時代、評議委員長だった。知らないわけがない。霧島は乙彦に一切視線を向けず、しゃちほこばった格好で王子様スマイルを浮かべた。女子にはやたらと受けがいいが、男子にはどうも気持ち悪さが襲ってくるという独特の笑みだった。

「立村先輩にお聞きになったらいかがですか」

「なんでいきなり話が飛ぶのよ。あのねえ、霧島、私が聞きたいのはねえ」

古川はやはり上級生らしく、口を挟ませなかった。

「あんたが女子に対して潔癖で、ちょっとした失敗も許せないという気持ちを否定してるんじゃないのよ。あんたのお姉さんのこと知ってるし、わからないでもないけどさ」

「恐れ入ります」

ほんとにこいつ、何様のつもりなのだろうか。もし霧島が乙彦の後輩なら、まず朝のジョギングにつき合わせて、一発気合を入れてやりたいところだ。うまくいえないが何かが足りない。

「でもさ、あんたが渋谷さんにしたことは、遠く離れた第三者から見ると、いじめだよ」

言い切った。霧島の王子さまスマイルは崩れない。

「少なくとも、私の聞いた範疇での情報をまとめると、そういうことになるよ。霧島、私はあの

渋谷さんのこと決して好きじゃないし、むしろ性格もよい子とは思えないし、あんたがあの子をうざったいと思っている気持ちはわからなくもないんだよ。けどね、その気持ちがわかるわかんない以前に、あんたの行動はまがうことなく、『いじめ』でしかないのよ。いじめられる側にも問題がある、と言われればまあね、私もわからなくもないよ。彼女のやってきたことを考えればさ。でもでもねえ」

全くわけのわからないことを古川こずえは訴えつづける。

「いじめ」とはなんなのか？

なによりも、霧島がその渋谷とかいう女子をいじめているとは？

第一、その渋谷とはどういう女子なのだ？

その前提条件すらわからないというのに、どうやって証人になればいいというのだろうか？

口をはさみたいが、そのタイミングがわからない。乙彦が感じるのは、古川が懸命に後輩女子をかばって、いじめの張本人らしい霧島に改心を訴えているという善意のみである。古川を応援したい気持ちはあるが、はたしてそれは正しい訴えなのか、判断することもできない。

「おそらく古川先輩は、正しい情報を得てないから、そういうことをおっしゃることができるでしょう」

鼻でせせら笑うようなしぐさをし、ちらと乙彦を見やった霧島。

「確かに僕は、女子に対して要求は高い方だと自覚してます。古川先輩もご存知の通り救いようのない姉を持っていたからなおさらでしょう。それでも今、姉は自分のレベルを自覚し、それに見合った生活をしているので僕はそれ以上、何も言うつもりはありません」

「あんた、姉ちゃんに対してさ、それはないじゃんよ」

「ただ、生徒会に入ってからさきちんとした女子がいることも知りました。すべてがだらしない、恥知らずの女子ではないこともです。だから僕は、すべての女子が愚かではないと認識しております」

さすがに乙彦もその言い分にはかちんときた。

女子の話し方がわけわからないというのなら、まだ納得する。しかし霧島の言い分はどう考えても暴力的な男尊女卑から来るものだろう。仮に霧島の姉が非常識きわまる女子だったとしても……古川もそれをなんとなく認めているようだ……口にしていいことと悪いことがある。

「それは言い過ぎだぞ」

乙彦は割って入った。となりで古川が「あんたは黙ってな」と腕をつねるが、蚊が留まる程度のもの。払いのけた。

「その考えは改めろ。どういう事情があるかはわからないが、人間として見下すような言い方は慎め」

「人間として、ですか」

さらに言い返そうとしたが、今度は古川に足の指を蹴られ黙らざるを得なかった。

「霧島、あんたがさ、女子を嫌うのはいいよ。けどね、それが嵩じていじめるってのはよくないよ。どうせ、渋谷さんの人気は十一月までで、霧島がその後は自動的に会長さんでしょ。あと

半年のがまんじゃない」

「半年も、あるんですよ」

顔をしかめ、首を振る霧島。

「それにさ、こういったらなんだけどさ、霧島」

古川は感情を爆発させるでもなく、さらに説得を繰り返した。そここのところが乙彦には謎だ。大抵の女子ならば、おそらく霧島の男尊女卑説を聞かされた段階でぶちきれぬだろう。そういうのが全く気にならないというのが、かわっている。

「ああいうことを修学旅行中しちゃったらね、もう、女子としては強気ではられないよ。どんなにお高い性格だったとしても、あれだけ周囲にばれちゃあね。男子が思っているよりも女子って、その手の失敗、尾を引くもんなんだよ。男子だと笑い話ですむけどさ」

「反省など、見受けられませんが」

「あんたに見えないだけだよそんなの。今はまだ噂だけでおさまってるからいいけど、もし霧島がそういった理由で渋谷さんを生徒会から追い出した、ということが判明したら、女子たちから顰蹙買うのは目に見えてるね。したらどうすんの。生徒会長にすらあやうくなっちゃうよ」

なだめるように穏やかに、それでもさっぱりと。

身動きせずに話を聞いている霧島へ、古川は大きな溜息をつきつつ、

「旅館で世界地図描いちゃうくらい、誰にでもあることじゃん」

霧島の王子さまスマイルに匹敵する、さっぱりした笑顔で語りかけた。

「私だってさ二年の宿泊研修でやばくなって、バスの中バックの中にジャーってやったことあるしさ、みんな多かれ少なかれ一度は通ってきた路じゃないの。見逃してやんなよ」

——旅館で世界地図？ まさか？ 中学の修学旅行だろう？ それも、女子だろう？

乙彦が古川の言葉を解する前に、霧島は笑みを保ったまま言い放った。

「僕には経験がありませんので、理解したいとも思いませんが。ただ、僕は彼女がしでかした失敗そのものだけを軽蔑しただけではありません」

「そのもの、だけってねえ」

「古川先輩、今から詳しい事情を説明します。申し訳ないのですが、もう少しお時間をいただいてよろしいですか」

混乱している乙彦へも、霧島は頷いて了解を求めた。

「ひとつ確認していいか？」

どうも青大附属の連中は回りくどい言い方で説明したがるくせがある。そうせざるを得ないのはわからなくもないが、乙彦にはもう少しわかりやすく説明がほしかった。自分なりにまとめた答えを、まずは確認したかった。

「端的に言うとだ。生徒会所属の渋谷という女子が修学旅行中に寝小便したということが、すべての発端なのか」

古川は肩から力を落とし、霧島は堂々と、それぞれ頷いた。

「修学旅行と生徒会活動とは関係ない話のはずだが、その渋谷という女子をなぜ生徒会から追い出さねばならなかったのか、その理由をまず説明してもらいたい。もちろん、なんらかの理由があるからだろうが」

「もちろんです！ありがとうございます」

いかにも「わかってもらえましたか！」と言わんばかりの微笑みを振り向けると、霧島は古川ではなく乙彦に姿勢をただし、語り始めた。

「端的に言うのだ。生徒会所属の渋谷という女子が修学旅行中に寝小便したということが、すべての発端なのか」

古川は肩から力を落とし、霧島は堂々と、それぞれ頷いた。

「修学旅行と生徒会活動とは関係ない話のはずだが、その渋谷という女子をなぜ生徒会から追い出さねばならなかったのか、その理由をまず説明してもらいたい。もちろん、なんらかの理由があるからだろうが」

「もちろんです！ありがとうございます」

いかにも「わかってもらえましたか！」と言わんばかりの微笑みを振り向けると、霧島は古川ではなく乙彦に姿勢をただし、語り始めた。

——まじかよ。そんなことあるのか。

乙彦の本心を見抜いたかのように霧島は、しゃちほこばったまま説明を始めた。

「僕は渋谷先輩がなぜそういう失敗をしでかしたことについては興味がありません。どうでもいいことです。憤りを感じているのはその後のことです」

声を高らかに。

「僕が仕入れた情報によると、その出来事が明るみに出たのは修学旅行が終わって二日目のことだ、そうです。信頼できる情報筋によりますと渋谷、いやSさんとしておきますが」

いきなりイニシャルを使い出す。

「なんでも、宿泊先から弁償の要求があったそうです」

「何を弁償するんだ？」

「お察しの通り、汚れた布団一式です」

「そりゃそうだろう」

それは納得した。霧島はさらに語調を強めた。

「学校側との間でどういうやり取りがあったのかはわかりませんが、その張本人と親が謝るのは当然のことです。さっそく呼び出されたそうです」

「渋谷さんが？」

「の、親が、です」

古川は確認程度の相槌を打っている。何か思うところあるのか、かばんを抱えたまま顎にこぶしを持っていき、首をかしげている。

「ご愁傷様、だとは思いますがね。そりゃ当然そうするしかないよね。けど、素朴な質問なんだけど、その情報って本当に信頼できる情報筋なの？ 霧島、確認してないよねえ」

「僕は見てませんが、他の生徒から聞いてます」

言い放ち、霧島はさらに仔細を説明し始めた。

「ただし、修学旅行終了後二日目の段階では、当然何が起こったのかははっきりしたことはわかりません。学校側も好き好んでしつけのなっていない女子が存在することを表明したくはないでし

よう。当然、隠すつもりだったと見受けられます」

「そうだよねえ、修学旅行でのおねしょなんてさ、私だって死にたくなるよ」

穏やかに、でも鋭くつつこんでいく古川。聞きたいことはあるのだろうが、なぜか霧島に一方的に語らせようとしている。女子にしては珍しい。

「知ったことではありません。その一件が明るみに出たのは、一週間後、別の人が生でかした失態として、噂が広まったからです。その人は……」

「あぁいい、これ以上個人の名前出さなくたっていいよ」

いきなり古川が押し留めた。不承不承、霧島も飛ばして話を進めた。

「とにかく、別の三年女子がしくじってふとんを汚してしまい、それを隠そうとして押し入れに布団を押し込んで出発し、しかもその際シーツをSさんのところに押し込んでごまかそうとした、という噂が流れたのです」

よくわからない。乙彦はもう一度聞き返した。

「どういうことだそれは。関係ない女子が濡れ衣を着せられたとでもいうことか」

「その通りです。噂は全く根拠のないところから流れてきたようですが、たまたまその女子が嫌われ者だったこともあり、周囲はその話を信じ込んでしまったそうです。実際、修学旅行から三週間経った今でも、布団汚しの犯人はその三年女子なのに、Sが犯人扱いされてしまい親まで呼ばれてしまったという説を学年ほぼ八十パーセントは信じ込んでいる様子です」

確かに、ややこしい話である。

しかし、ひとつ疑問がある。

——霧島はなぜ、噂を嘘だと断言しているんだ？ 八十パーセントが新しい説を信じ込んでいるということは、こいつもそれを鵜呑みにして不思議はないはずだが。

乙彦もおそらく、そう考えるに違いない。何か、決定的な証拠がない限りは。

補足説明および質問をしてくれたのはやはり、古川だ。

「霧島に確認したいんだけど、どうしてSさんが布団版伊能忠敬と決め付けられるわけ。私もいろいろなところから話聞いているけど、どっちにしても証拠がなくってグレーゾンのままなんだってというのが現在のところ一番信じられてる説みたいよ。まあ、私も結論はやっぱりSさんだろうと思うけどさ」

「まず、濡れ衣を着せられた三年女子はきっぱり否定しているそうです。当たり前ですよ。また、修学旅行後のSの態度が実にみじめたらしいもので、どう考えてもあれは黒であるというのを体現しているでしょう。その他もっと具体的な証拠も持っていますが、あえてここでは言いません」

——その具体的証拠とはなんなんだ？

聞きたい。古川が振ってくれないものか。

「まあね、濡れ衣の彼女もとばっちりって顔、してたもんね。でもどうしてその濡れ衣がはれないの？ 彼女に直接はっきり否定しろって伝えたんだけどね、『信じたい奴らには信じ込ませておけばいいんです。私は何を調べられても恥ずかしいところなどありませんので』って堂々たる態度だったもん。それがかえってまずいのかな、って気はするんだけど」

「そうですね、確かにあれはまずいです。だから僕の方から、きっぱりと意思表示したわけですよ」

霧島は膝に手をおき、生真面目な顔ではっきり言い切った。

「とっくの昔に、あなたのでかした姑息な言動を僕はすべて知っているし、そんな人間とこれから先生徒会活動なんぞしたくないと、ですね。それだけを生徒会室にて伝えたところ、さすがにSは狼狽していましたよ。あれから、用事がない限りSは、生徒会室には来なくなりましたね。僕としては、仕事がかどるので助かります」

すでに霧島は、渋谷のことを「先輩」とも「さん」ともつけず、ただ「S」とだけ呼んでいた。

——つまりこういうことか？ 渋谷という女子は修学旅行中に寝小便をしでかして、それを隠そうとして悪あがきしたにもにもかかわらずあとでばれた。ところが中学の連中はあとから流れたありもしない噂を信じ込んでいる。義憤を感じた霧島は、ぶちぎれて渋谷を生徒会から追い出した。これが真相か？

まとめてみれば単純な話だ。

乙彦も確かにその気持ちは理解できる。

決定的な証拠に関する説明がないのは少し説得力に欠ける。しかし、古川の結論も「渋谷＝当人」として出ているわけだし、全く根も葉もないわけではないのだろう。霧島本人も、別のルートから確実な情報を得ているとすれば、七割から八割方、渋谷の失態として結論付けてもよいはずだ。

しかし、噂の方が今だに生き残っているというのはどういうことだろう。

「全く根も葉もない噂ならば七十五日で消えるはずだ。まだ三週間だから二十七日しか経っていない以上、黙っていれば噂も消えるんじゃないか」

乙彦は霧島に語りかけた。

「いえ、学校側および、生徒側はできれば噂の相手がしでかしたことであれば一番無難におさまると考えているくらいがあります。青大附属という学校はことなかれ主義で有名です。救いようのない馬鹿な生徒を退学させず、卒業式までおいてやったり、殺人未遂を学校内で起こした生徒を転校させてごまかしたり、下着泥がいるにも関わらずそいつの親の金で結局はうやむやになったりとですね。今回の一件は過去の青大附属事件簿に比べれば、ささいなことではありますが、こういうことが表沙汰になれば少しはこの学校も風通しがよくなるのではないですか」

「下着泥？ 殺人未遂？」

思わず問い返す。夕陽がだんだん濃くなる中、石とアジサイの色合いが滲んできた。

「そうです。先輩たちの代ですよ」

古川に問う。無表情のままている。

「そうなのか？」

「後で説明するよ」

あっさり流された。むしろ心ここにあらずといった風に、今日何度目かの溜息を古川はついた

。

「霧島」

だいぶ人も少なくなった。そろそろおいとましないとまずそうだ。古川は立ち上がりながらまた、やさしく霧島に話し掛けた。

「あんたが怒るのは無理ないよ。わかるよわかる。今日私がここに来たのはさ、あんたを責めるためじゃないんだよ。こんなくだらないことで、生徒会長のポストのがすなんてばかばかしいじゃないのさ。あんたがそういう風にはっきり言い切った以上、渋谷さんももう覚悟決めてるだろうし、それに濡れ衣の彼女もなるようになるさって感じのようだし。だからさ」

肩にぽんと、手を置いた。

「いいかげん、許してやりな。心広いところ見せてやってさ。そしたらうちの学校内で密かに思い当たる節のある女子たちがさ、感謝するよ。霧島くん男前ってね」

「そんなレベルの低い女子たちに騒がれてもなんとも思いません」

「あっそ。それでもいいけどね、ただこれ以上渋谷さんを仲間外れにしていたら、どんなに正当な拒絶理由があっても、即、『いじめ』のレッテル貼られるよ。早いうちに、誤解とっておいたほうが身のためだよ」

「古川先輩、ではお伺いしますが」

いきなり霧島が向き直った。きっと目が釣りあがっている。王子さまスマイルなんて過去の話、乙彦も身構えた。

「嘘をついて他人に自分のしでかしたことをなすりつけようとする、そんな人間と同じ空気を吸いたいとお思いですか？ 僕はいやです。一瞬たりともそんな人間と席を同じくしたくはありません」

ふかぶかと一礼した後、

「ご助言、ありがとうございます。それでは失礼します」

すたすた中庭の出口へ歩いていこうとし、また振り返った。古川に大声で呼びかけた。

「立村先輩によろしくお伝えください」

——なぜ、立村なんだ？

アンテナがびくりと反応した。いつのまにか汗も引き、すっかり空も赤味が黒味へと移行しつつあった。かといって暗いわけでもない。

古川にスリッパを職員玄関へ返してもらい、乙彦ひとりだけ先に生徒玄関から出た。

一年前の自分を観るはずだったのに、なぜか霧島の姿には違和感を覚えてしまった。あの口調もそうだが、どうも自分の過ごしてきた水鳥中学と違う空気に戸惑ってしまったという方が正しいのかもしれない。

「お待たせ。悪いね」

「古川、いきなりだが」

「つきあわせて申し訳なかったよ」

古川がすぐ駆け戻ってきた。時計を覗きこみ、「うわ、もうこんな時間だ」と慌てている。「あの霧島って子ね、やたらととんがってるように見えるけど、結構つらい思いして来てるんだよね。自分で自分を守るので精一杯って感じ？ かなり先輩に対して失礼なことわめてたけど、大目に見てやってよ」

「だが」

乙彦の言いたいのはそういうことではない。しかしくちばしをはさませてもらえない。「あんたには何がなんだか分からない展開かもしれないけど、私からするとたぶん、だいたい、こういうことかなってことは見当ついたよ」

「どこが？」

またわけのわからないことを言い出す古川に、どう対応していいかわからない。

「俺には、中学旅行の騒ぎがどうして古川に関係あるのかがわからないが」

「そうだよ、まあ、わからなくたっていいじゃない」

「藤沖や立村に関係のあることなのか？」

古川は黙った。ゆっくり俯きながら歩いていた。乙彦もさらに押した。

「古川、お前が今日、あえてここに来ようとした理由とはなんなんだ？ なにも後輩たちの思い出話を聞かせてもらうだけじゃないだろう？」

やはり黙っていた。古川にしては珍しかった。

「さっきちらっと話していたな。高校の方にもその話題は影響があるとか。それにだ」

言葉を切り、本当に気になった一点を。

「霧島もやたらと立村の話をしていたが、関係があるのか？」

ぴくんと古川が立ち止まった。目を向けはしなかった。

「立村がこの一件に関係あるんだな。それと藤沖も」

「ちょっと待った関崎！」

語気荒く、古川が怒鳴った。

「これ以上はさ、まだ確定したわけじゃないんだから、うるさく聞くんじゃないよ」

「連れてきたのは古川の方だろうが」

「今日はね、あんたが一度、中学の校舎を見てみたいって言ってたから連れてきたんだって、それで終わらせたっていいじゃんよ。それで来年の生徒会長になるであろう、霧島を紹介したんだってこと、それでいいじゃん」

「そんなことだけじゃないだろう！」

荒れればこちらも荒れる。

「中学のことは俺も正直どうだっていい。寝小便やらかしたんだったら干して旅館に弁償すればそれでいい。俺が知りたいのはそれと藤沖、立村の方とどう関係があるのかってことだ。古川、関係なくてあんな真面目に話をしようとするわけが、ないだろう？ 霧島がこれ以上渋谷とか言う女子をいじめさせないようにするとか、その程度の話題じゃないだろう？」

すっかり顔の表情が読み取れない路端、乙彦は真正面から古川を見据えた。立ちはだかった。

「不確かな情報、集めてどうするのよ」

「藤沖と立村を和解させるきっかけになるかどうか、判断する」

「無理かもしれないよ」

もう数え切れないくらいの溜息をまた、ひとつもらした。

「どうせ、あんたの耳にも入ることだしね。私も隠し事は好きじゃない。ただ、もうひとつ確認してからでないとね、すべて話をするにはできないよ」

「ここまで熱心に古川が調べるということ自体に意味があるはずだ」

「じゃあ、関崎。私がいいと言うまで、このことは絶対に他の連中に言うんじゃないよ。ひとつだけ、教えるから、約束しな」

周りを見渡した。古川の顔はもう影のみで薄く揺らいでいた。乙彦はその答えを待った。

「濡れ衣着せられた三年の女子って、杉本さんなんだ」

——立村の出番は、確かにある。

古川の瞳を覗き込み、乙彦は約束を守る証に、しっかり頷いた。

藤沖はやはり、この数日間とほぼ変わらない陰気な雰囲気をつたえていた。

「お前、疲れてるのか」

乙彦がかつて何度も言われた言葉を投げかけると、すぐにいつもの兄貴口調に戻る。

「関崎に比べたらちょろいもんだ。俺がそんなに疲れているように見えるのか」

「ならいいが」

さっさと終わらせ、乙彦は授業の準備をしつつ、次に立村へ近づいた。

宿泊研修以来若干、話し掛けずらい雰囲気がなきにしもあらずなのだが、ここは無理やり明るく声をかける。

「おはよう、立村」

「ああ」

うつろな目で乙彦を見上げる。別に乙彦に対して何か、きつい眼差しはとんでこない。

——何があるんだ、いったい。

知らないふりして席に戻ると、入れ替わりに藤沖が立村の前に向かうのが見えた。何かを話し掛けているが会話は聞こえない。ただ、小さく立村は首を振っていた。

——ありえない光景だ。

古川に指摘されなければたぶん、すぐに見逃しただろう。

もともと立村は、藤沖に嫌われていることを感じていたのだろう。強気で何か物申すといったことはほとんどしなかったはずだ。乙彦に対してのみ、他人のふりしろだのいろいろと文句をつけてくるけれども、それはしつこいくらい乙彦がコミュニケーションを取ってくるからだろう。無視する奴および、嫌う奴には最初から近づかない性格のようだった。

しかしながら、確かにおかしい。

藤沖が真摯に何かを訴えようとしているのはわかるが、それをきっぱりと拒絶している立村の言動には、潔さすら感じる。かといってそれが何なのかは乙彦にも判断できなかった。

古川を探し、ノート片手に近づいてみる。

「誰にも言うんじゃないよ」

まずは挨拶代わりに釘をさされた。珍しく下ネタを振って来ない。

「今日確認してみて、はっきり言った方がよいと判断したら、あんたに話すよ」

「お前の判断か」

「そ。嘘は言いたくないよ。あんだって嘘を聞きたくはないでしょうが」

その通りではある。しかし乙彦には情報が少なすぎるのも事実。

「俺が判断するというのはまずいか」

古川はしばらく口を閉ざしたが、首を横に振った。

「まずい。外部生を差別するわけじゃないけど、あんたには状況が読めてない」

「読むもなにも、あの現場で得た情報以外何を信じればいいんだ」

「あのねえ、関崎」

何か、言おうとしたらしいがすぐにまた、溜息をついた。乙彦の顔を見るとむしように溜息が洩れるらしいとのことだ。

「とにかく、あんたは黙ってな。もう少し、情報を集めた段階であんたにも話せると思うからさ。高校だけならともかく、中学まで巻き込んでいる以上、あまり無責任なことも言えないからね」

——証人とかなんとかいって引きずり込んだのはどっちだ。

乙彦は喉まで出かけたが飲み込んだ。今の段階で古川と関係が悪化するの、できれば避けたい。

霧島の言い分も男子の価値観で考える限り、理解できないこともない。

——だらしのない女子を好まないのは確かにわかるが。

古川とのやり取りを踏まえて考える限り、霧島の姉も相当酷い性格の持ち主だったのだろう。また、女子としての礼儀をわきまえない連中にむかむかしてくるのも、乙彦にはよくわかる。だからといって、修学旅行の失態を一方的に糾弾するのは、間違っていると思う。

少なくとも、生徒会内で行うべきではない。

嫌うなら嫌うで、霧島個人の判断で行えばいいことだ。仮にその、渋谷とかいう女子が、失敗を他のクラス女子に押し付けようとしたのならば、それを罰するのは学校側であり、被害を被った宿側だろう。いくら感情的に渋谷を嫌っていたとしても、それを公の場で叩きのめすというのは、古川の言う通りいじめである。

——その、押し付けられた女子がああ、杉本さんとすれば。

立村の出番が用意されるのは当然とも言える。

このあたりよくわからないところではあるが、中学の後輩たちと立村たちはそれなりに交流もあるのだろう。藤沖が生徒会長だったというのももちろん関係しているだろうし、立村も前期評議委員長だったのだから。自然と、霧島とのやりとりもうかがえる。必ずしもそれは喜ばしい内容ではないのかもしれない。だが、霧島は帰りがけに「立村先輩によろしく！」と口走ったではないか。となると、立村に対して露骨な敵意は薄いと見た。

——つまり、霧島は、立村と、その件でなんらかのやりとりがある。

さらに言うなら、霧島は最初、「藤沖先輩から聞かれたのですか」っぽいことを口にしていた。このあたりでもすでに、藤沖が状況を把握し、なんらかの形で中学生徒会に介入した可能性がある。

——しかし、証拠も何もない。

どう繋がっていくのだろう。立村と藤沖が同時に中学生徒会側と繋がりを持っていて、生徒会役員の個人的失敗をきっかけに力関係が崩れてきているらしいとは、だいたい読めるのだが、いったいどうしてそうなったのかが全く見当つかない。

もっとも、古川はそのあたり、ほぼ把握しているようだが。

——そんな中学のことなんかどうでもいいだろうに、けどなんでだろうか。

第一、あまりにもくだらなさ過ぎる。

修学旅行で寝小便したからといって、そんな人前でさらさなくたっていいだろうに。

こういったらなんだが、本当によくあることじゃないか。

どうせ笑い話になって片付くたぐいのものなのに、なぜ霧島は意固地になって相手女子を痛めつけようとするのだろうか。それに押し付けられた杉本梨南だって、なんのことやらといった顔で流しているらしいし、それだけ堂々としていたら噂も落ちつくはずである。むしろ当の本人である渋谷の方がしょぼくれているらしいし、それならそちらをかばう方が先決だろう。

実に、全くわけがわからない。

無事、授業も終わった。あれから藤沖と立村との間にはやりとりもない。

かわす話題も近づいてきた期末試験の山掛けくらいのものである。

「関崎、今日は補習なんだよね」

「そうだが、なんでだ？」

「やたら楽しそうじゃん」

古川に呼び止められた。何が楽しいというんだろうか。まあ、始まるまでは静内たちとかけあいなしながら過ごすので、いやというわけではないが。

「たいしたことじゃない」

「あ、そっか。じゃあまた」

それ以上呼び止められず、古川はすぐ立村へ声をかけに向かった。いつものことだがクラスから浮き気味の立村を、古川はそれなりにフォローしてやっているようだった。そうでもしないと麻生先生からも嫌われている立村の、居場所がない。

「じゃ、またな、立村」

乙彦も挨拶だけはしようと近づいた。古川とやり取りしている最中の立村をちらと見たとたん、その目つきのきつさに驚いた。乙彦の声など聞いていない。古川にたたきつけるように、声は小さめながらも憤っていた。

「古川さんも、俺が藤沖の言いなりになれって言うのかよ！」

「話をまずは聞きなさいよ。判断するのはそれからでいいじゃんよ」

「うるさいな。俺には俺の考えがあるんだから、放っといてくれ」

「まったくあんたさあ、いいかげん中学生みたいなこと言ってるんじゃないの。ほんと言っちゃなんだけど霧島の方があんたより何千倍か大人だよ」

「二言目にはガキ扱いかよ、いいかげんにしろよ」

——本当に、あの立村かよ。

古川を相手に噛み付いている姿は、乙彦がかつて見ていた立村のものではなかった。

もう少し話のわかる、多少納得がいかない時であっても、相手のことを立てる努力はしている奴のはずなのに、いったいなんだろうかあれは。まるでだだっこだ。古川ではないが、中学二年

の霧島の方がずっと、大人である。

しかしそんな心の声を立村に聞かせる気もなく、乙彦は返事を待たずに補習教室へと向かった。どうせ古川に文句言ったところで、方針変えてくれるでもないのだから。

——いや、待てよ。

一瞬、立村の言葉がひっかかった。

——あいつ、「俺が藤沖の言いなりになれって言うのかよ！」とか言ってなかったか？

やはり、古川は何かを立村に説得しようとしていたのではないのか？

気になる。

藤沖の頼みごとを、古川は把握している。改めて援護射撃をしようとしている。それを立村はかたくなに断っている。ただ具体的にそれが何なのかはわからなかった。

——しょうがない。とにかくあとで古川に聞いてみよう。

一度頭をざっくり振った後、乙彦は補習教室へと向かった。今日の教室はなぜか音楽室だった。まず、水鳥中学では考えられないシュチュエーションだった。

期末試験が近いせいか、この日は二年、三年の生徒もそれぞれ場所を陣取っていた。同学年だとだいたい顔がわかるのだが、上級生ともなると全く見当がつかない。一礼するのは後輩としての礼儀だと思うのだが、げげんな顔をして見られるだけ。しかたないので、すでに後ろの席で語りあっている静内と名倉のもとへ向かった。他の外部生たちはまた別のグループで固まっている。

「関崎、悪いけど、宿題のノート、見せてもらえる？」

「かまわんが」

静内が乙彦のノートを見たがるのは決して答えを丸写しするためではない。最初、勘違いして断ったり説教したりもしたのだが、どうやら自分の出した答えを照らし合わせたいだけのことらしい。

「関崎くらいしかいないもんね、どんな風に解いたのって聞けるのは」

「他の女子たちはなんて言うんだ」

「みな、私自信ないからってごまかすだけ。具体的な質問に答えようとしな」

他の外部生たちにも聞こえないよう、声を潜めた。

「そんな難しいこと聞いているつもりないんだけど、自分に責任が降りかかってくるのがいやなのね」

「そういうものか」

尋ね返したのは名倉だった。すでに名倉も答えを静内に見せていたらしい。数学の少し難しい問題が提示されていた。

ざっと静内のノートと見比べた結果、どうやら一、二ヶ所計算ミスがあったようで数値が異なっていた。簡単に説明し、事足りた。

「サンキュ、早い」

「時間の節約だ」

「ところで、関崎」

静内が名倉と顔を合わせながら、にやにやして尋ねてきた。

「昨日さ、関崎、誰と歩いてた？」

いきなりすぎる。驚いた。もっとも静内はちっとも怒っていない。怒る由もないのだが。

「どこと言われても、もっと具体的に言えよ」

「中学の校舎」

なんだ、古川と歩いていたところを見られただけか。内容はともかくとして、特に隠すこともない。乙彦はあっさり答えた。

「うちのクラスの古川と、クラス関連の相談があって出かけただけだ。そうだ、静内」

言うのを忘れていた。

「中学の図書館に『青潟市史』とかいう分厚い歴史の本があったぞ。今度、名倉を含めて読みに行こう」

あっけにとられた風にふたり、口を開けていたが、その後お笑いし出した。静内の笑い声で他の生徒たちがちらとこちらを振り向いたが、それ以上のことはなかった。

「ごめんごめん、笑っちゃって」

「そんな面白いことを口走ったつもりはないが」

名倉がすぐに説明を加えた。笑いこけている静内が語るには、無理があった。

「お前が女子と一緒に歩いていると聞いて、静内のクラスの女子たちが懸命に、やきもち妬かせようと話し掛けてきたらしい」

「なあにがやきもちよね。もう、あきれの通り越して、笑っちゃう」

静内がひくひく笑いの発作を押さえようとし、胸を叩いた。咳をした。

「うちのクラスの人たちが、入れかわり立ちかわり、私が関崎に文句を言いにどうしていかないのかって、しつこく聞くのよ」

「なんで言わなくちゃなんないんだ？」

「さあ？ 適当に流してたんだけど」

全く訳がわからない。それはお互い様のようなだった。もともとプライバシーにあまり関わらないのが主義という静内だけに、あまり乙彦へつつこむ気もなさそうだった。

「クラスがらみの事情があるので、詳しいことは話せないが、静内が文句を言う必要はない。むしろ、お前のために資料を集めに行ったということで感謝されてもいいはずだ」

きちんと言い切ると、静内はこっくり頷いた。親指立てて、「OK、OK」と繰り返し、

「サンクス、関崎。ぜひ次回は三人で」

名倉とも頷きあい、終わらせた。

大教室での補習は、ひとりひとりに大学生たちがついて、個人指導を行う形式なのでさほど時間もかからなかった。静内が頭を悩ませていた数学の問題も、どうやら担当の学生が教えてくれてすぐ片付いたらしい。乙彦も名倉も同じだった。

「今日はね、二年、三年の人たちがメインみたいよ。私たちは早く帰ってもよさそう」

「そうか」

さぼることは考えていないにしても、早めにあがることのできるのならそれに越したことはない。乙彦はさっそく荷物を片付けた。時計を覗きこむとまだ二十分しか経っていない。四時を回ったばかりだ。

「静内、名倉、噂の中学図書館に行ってみるか」

声をかけてみた。静内から妙な噂の話が聞かされて気になったのもあるが、実際このふたりは一度も中学校舎に行ったことがないわけだし、連れていってもいいのではないかという気がした。古川のように卒業生は顔パスらしいが、乙彦たちはやはりそういうわけにもいかないだろう。だったら三人でまとまって行動するのがよいだろうし、好感も持たれるに違いない。

案の定、ふたりはしっかり乗ってきた。すでに出発準備完了。

「悪いけど私、方向音痴だから、ナビゲートよろしく」

「東西南北はわかるだろ」

「磁石がないと生きていけないの」

——それは重症だ。

なら、離れるな、そう厳命するしかない。

問題なく乙彦、静内、名倉は音楽室を出た。委員会もそれほど活動することなく、せいぜい朝夕の週番を月一度こなせばいい程度。二ヶ月半が経ち、なんとか空いた時間を見つけることができるようになった。たとえばこんな風に。

不意に右腕を捕まれた。静内かと思った。息が止まった。

——いったいなんだ？

脇を見た。隣にいたはずの静内を押し除けるかのように、古川こずえが割って入っていた。いつのまにか背後に潜んでいたようだった。すぐ振り払った。

「声をかけろ。それが礼儀だろう」

「あとであなたには土下座して謝る。悪いけど、あんたに頼みたいことがあるんだ。ちょっと付き合っほしいんだ」

いきなり真面目な顔で、背では静内と名倉を隠すようにして古川が訴えた。乙彦がふたりの様子を古川の頭ごしに伺うと、あっけにとられて顔を見合わせているだけだ。それはそうだろう。乙彦だって声が出ない。

「A組と可愛い後輩ちゃんたちのためなんだ。あとでちゃんと、私から筋は通すからさ。とにかく今すぐ来てほしいんだ。関崎、急いで」

「立村のことか」

話がわからないわけではない。だが、乙彦だけではなく、大切な友だちを突き飛ばすようなことをされたままつきあうわけにはいかない。焦りの色が顔に浮かび上がっている古川には悪いが、言わねばなるまい。

「俺にも先約がある」

「それはわかってる。でも」

「立村たちのことならもちろんなんとかしたい、だがひとつだけやることやってくれ」

乙彦は古川を、ふたりの方向に向くよう手で指示した。

「まずは、いきなり割り込んできたことを、このふたりに謝ってくれ。話はそれからだ」

一瞬息を飲んだ古川は、じっと乙彦を見上げた。筋を通してほしいというだけなのだが、相当悔しそうに見えた。どこか違和感があった。

「いきなり邪魔して、ごめん。今、クラスのことに関崎に力を借りなくちゃならないことがあって」

言いかけた古川を、静内はちらっと見た後すぐ乙彦に笑いかけた。歯牙にもかけないといった風に、

「名倉とその辺で遊んでるよ」

いつものように短いフレーズで答えた。名倉も頷いた。

「悪い。すぐ戻る。待っててくれ」

今日は最優先で静内たちと遊ぶ約束をいたのだ。守るのは当然だ。

——だがなんでだろうか。

もう一度頭を下げ「ごめん」と伝えた古川に、苛立ちを感じてしまう。

もちろん、古川が駆け込んできたのにはそれなりの理由があるのだろうし、それが緊急を要するものならば当然の行動とも理解している。恐らく何らかの事情が判明し、古川はなんとしてもそれを乙彦に報告しようと思ったのだろう。

だが、タイミングが悪すぎる。

よりによってなぜ、静内たちのいる時に。

「あんたが怒るのはわかるよ。申し訳ない」

「別に怒ってはいない」

「顔に書いてるよ。それよか」

古川も乙彦の不満を感じているのだろう。下手に出ている。

「あんたに頼みたいことってというのはさ、立村をこれから、説得してほしいんだ」

「何をどう」

杉本梨南が絡んでいる以上、立村が精一杯かばおうとするのは当然の流れに思えた。古川は中学修学旅行の噂を肯定し、濡れ衣を杉本に着せたままにしろというのだろうか。それはいくらなんでも、酷すぎるのではないか。それよりも相手側ときちんと話し合いをさせて、互いに納得した上で真実を明かすのがベストだろう。乙彦なりの判断ではそういう結論が出ていた。

「理不尽なことをあいつに説得したくはない」

「そうだね、理不尽だよ。でもさ、関崎。正しいこと以上に守らなくちゃいけないことがあるんだよ、今回の事件ではね」

そんなのがあるだろうか？ 嘘を吐くことで守られるものなんてあるのだろうか。もちろんその場しのぎにはなるだろうが、いずればれる。乙彦は決してそれに組する気はない。

廊下を足早に歩きながら、古川は小声で説明を続けた。

「例の一件は、霧島の言い分が正しい。はっきりとした証拠があるからね。それでありながらなぜ学校側も杉本さんのしでかしたことにしようとしてるか、わかる？」

「嫌われているからではないのか」

可哀想だが、他の連中から聞く限り、それは事実だ。

「そんな感情的なことで動いたりしないよ。仮にも大人だよ。あ、これから大学の校舎に行くから外に出て待ってな」

「大学？」

突っ立ったまま、乙彦は尋ねた。足を止めずに古川は女子用の靴箱すのこに立った。

「立村、今日は、大学の教授に英語の作文かなんかを添削してもらって言ってたからさ。大学で待ち伏せてとっつかまえる。そこで、とことん、あいつを説得する」

立村が大学の講義をすでに単位なしとはいえ、受講しているのは前から聞いていた。

「だが俺だったら、どんなことがあっても、説得に応じる気はない。あらゆる方向から考えても、濡れ衣を着せられたまま中学卒業まで耐えろというのは、根本的に間違っている」

「関崎！」

いきなり古川が両手で乙彦の頬をがっしりつかんだ。叩いた、のではなく、おにぎりをこしらえるような格好で握り締めた、といった方が近い。

「どんなに正しくたってね、最優先されちゃうことが、あるんだよ」

「手を離せ。それと、最優先されるとはなんだ」

乙彦の方から無理やり古川の両手をはがし、底から出る深い声で尋ねた。

気持ちが全くないとはいえ、一度は縁をもった女子が惨めな噂で傷つくのを許すことができない。同時に、その女子を命がけで守ろうとする立村を阻むことはなおさらできない。むしろ、可能ならば古川に対抗したいくらいだ。

古川は両手をぶらんとぶら下げた。

「死なせたら、終わりなんだよ」

——死なせたら？

「詳しくは立村と一緒に、あんたにも話す。一刻を争うことだから、とにかく大学まで走るよ」
言い終わるや否や、古川は乙彦より早く、猛スピードで駆け出していった。

追いかけた乙彦の頭の中で、古川の残した言葉が切れ切れに響いていた。

——この学校の連中、やたらと「自殺」とか「死」とか、そんなことを意識して生きてるのか。

今までの乙彦には全く見えない言葉だった「自殺」と「死」が、青大附属の中では何事もない顔をしてそれぞれの頭の上を飛び回っていた。

どこで奴を捕まえるべきか、すでに古川は考えていたらしい。

「立村は伝書鳩みたく同じ道しか通らないから、ここで大丈夫」

「伝書鳩というのは失礼じゃないか」

確かに立村の性格上、同じ道を通って帰ることは当然だと思う。

しかし、乙彦が思うにそれは、

「男子なら大抵は、よほどのことがない限り違う道を通ったりはしない」

「ああ、関崎も同類だよ。わかる、わかる」

軽口を叩きながら五分ほど待った。大学の校門前で、少し汗ばんだ額をごしごしこすりつつ、乙彦は古川の様子を伺った。ここに来るまでの間、新しい情報を教えてもらったわけではないし、乙彦もあえて尋ねなかった。ただ静内と名倉には悪いことをした。あとできちんと乙彦なりの気遣いをせねばと思う。

「あんたら、仲いいよね」

いきなり、古川が乙彦につぶやいた。無表情だった。事実だし答えるしかない。

「ああ」

「外部生同士、話が合うわけ？」

「当然だ」

「特に、静内さんとは？」

「当たり前だろう」

自分でもなぜ、そう答えてしまうのか説明ができなかった。古川は何かを聞いたように口をしばらく動かしていたが、

「ま、人は人ってことだよね」

またぼつりと呟いた。

それにしても、古川の言動については正直、疑問符がついてしまうところがある。

——内部生の考えは俺にもよくわからないが。

先ほどちらと口走ったところからして、古川は立村を説得しようと思っているように見受けられる。つまり、杉本梨南へ濡れ衣を着せっぱなしにしろ、と言いたいのだろう。

——しかし、それは許されないことだろう。それに古川の性格上ありえないことだろう。

乙彦も同じクラスで三ヶ月近く過ごして来て古川こずえという女子の性格が、なんとなく好ましく思えるようになってきた。好きというよりも、「慣れ」だろうか。古川のいきなりかます強烈な下ネタトークすら、今はごく普通の挨拶に感じられる。また他の女子たちの言動と比較してみるとやはり、正論をしっかりと訴えているところが納得できる。

——少なくとも、べたべたつるむタイプじゃない。

友だちが少ないわけでは決してないし、それぞれのグループでちょこちょこ飛び回り愛想よく振舞っている。しかし特定のグループでべったりと女ボスになるタイプでもない。同じ要領で男

子グループにも混じってはしゃべっていく。藤沖とも評議委員同士、それなりにうまくやっている様子だ。第一、乙彦にも平気で「あんた、今日の朝はちゃんとあんたのあれ、仕事してた？」などと声かけていくような女子だ。

八方美人といえればそれまでだが、特定の女子チームに加わって人を叩きたがる性格ではない。その点、静内とはまた別の意味でいい奴と思える。

そんな古川がだ。

——嘘をつくと、立村に勧めるのか？

乙彦の推理からすると、そう言う風にしか読み取れない。

——自殺がどうのこうのとか言ってたが。

この辺もまだあえて聞いていない。

——古川の性格上ありえないとは思いますが、しかし。

もしも立村に古川がとんでもない要求をした場合、乙彦はあえて立村の肩を持つ必要がありそうだ。そのための証人であり、第三者ということならば、放課後これからの時間を費やすのも意味のあることだ。

立村は、乙彦の、青大附属におけるもっとも長い友人だ。

友人のためなら期末試験の点数など、諦めても差し支えないものだ。

突然古川が黙って校舎前から現れた人影を指差した。

「なんだ？」

聞いてみてすぐ気付いた。小さな影が校舎の出口からちらついているが遠目から見てもあれは立村だった。大学生たちと違うのは、青大附属の制服を身に纏っているところ。さらに折れそうなほどほそっこいところ。

「悪いけど、あんたは右、私は左で押さえるからね」

「押さえるもなんも」

「あいつ、私ひとりだったらなめてさっさと振り切って逃げるけど、関崎が一緒だったら言うこと聞くよ。さ、行くよ」

走りはしなくて、はや歩き。大またで古川は、真正面から立村に迫った。

いくらでも逃げようのある距離なのに、立村はそこから立ちすくんだまま、動かなかった。

——刑事ドラマかよ。

まるで犯罪者を捕らえにいく刑事コンビのひとりのようだ。しかも、先輩に置いてきぼりにされそうな後輩デカという、情けない役割ときた。古川刑事が立村の腕を静かに押さえた。もちろん手錠はかけなかった。

立村は逃げなかった。ただ乙彦が近づいてくるのをけげんそうに見つめていた。

「立村、言っとくが俺は」

答えを待つかのように立村は頷いた。鞆と一緒に英英辞書を抱えて、古川に押さえられた片腕をそのままにしていた。

「事情がよくわからん。だが、話を聞いた上でお前が正しいと判断したら、すぐに味方につく。それだけは信じる」

「味方、か」

「たとえ古川相手でもだ」

きっと古川が乙彦をにらみつけた。裏切り者、ユダかお前、とでも言いたいのか。だがこれは関崎乙彦である以上、否定できないことでもある。

「古川、事情をまず聞かせてくれ。その上で俺は、どちらの考えに与するかを判断する」

「あんた、私に協力してくれるんじゃないか？」

「俺は結局、お前から立村からも、それと藤沖からも事実を聞かせてもらっていない。判断材料が少なすぎる」

もう一度、立村を見やった。どういうやりとりが古川との間にあったのか、それはわからなかった。乙彦が感じたのは、立村が古川の挑戦状を受ける気ありということだけだった。それは、自信のなすすべなのだろう。男子たるもの、最初から負けを覚悟して勝負するつもりなぞない。立村も外見のなよなよしたところでごまかされているけれども、内部に存在している核は、れっきとした男だ。乙彦は二年前、それを、水鳥中学の図書準備室でしっかりと目撃した。だから、古川よりははるかに深く、それを見通せる。

「じゃあ、立村。言いたいことあるなら、とことん聞くよ。その代わり、デスマッチだから、その辺覚悟しときな」

初めて立村が口を開いた。古川に向かい、

「どこで話すんだ」

確認するかのよう、重く呟いた。上に羽織った薄いブレザーが夕陽に透けて腕の形が覗いていた。

「ベストなのはホテルだけだよ、誤解されたくないよね。関崎もいるし、この面子で3Pってのもね」

立村の顔に露骨なこわばりが浮かんだように見えた。

「だからカラオケボックス行こう。歌い放題の、見つけたからさ」

「了解」

「ちょっと待て。カラオケボックスだと金が掛かるだろう」

口を挟むのは、乙彦がカラオケボックスなどといった場所に足を踏み入れたことがないからだった。できるだけ、金のかかるところは避けたいのだが。せめて人気のない公園とか、スーパーの休憩椅子とか、いろいろあるだろう。最悪の場合は乙彦の部屋を提供してもいい。そこまで言おうとしたが、古川に制された。

「安心しな。学生は一時間九百円で歌い放題。三人でボックスに入るから三百円もらえれば終わるよ。ま、それ以上になったら誘った私が払うからさ」

男の面子、丸つぶれである。立村はその説明を聞かずにふたりを置いて、さっさと自転車置き場へと向かった。古川がすばやく乙彦に声をかけた。

「あいつの後ろについて自転車漕いでよ。私が先頭走るからさ。あいつも覚悟決めてるようだし

、逃げはしないと思うけど、ケツに関崎がいるだけで圧力かけられるしさ」

「古川、繰り返すようだが、俺はまだ、どちらの味方でもない。おごられる気はない」

「いいよ。とにかく、今日はとことん立村と話をさせてもらう場所が必要なんだって。けどあいつと二人でしっぽりしけこむわけにもいかないしさ。あんたがいるだけで、たぶん話もきちんとまとまるよ。悪いね、関崎」

——カラオケボックス自体、校則違反じゃないのか？

言いかけた言葉を飲み込んだ。古川の言う通り人の「命」が掛かっているのなら、校則違反も今回だけは仕方がないことに思えた。いや、たぶん、行くことそのものは禁止されていないはずだ。思い直して少しほっとした。

——しかし、3Pってなんだ？ パズルをやって頭突合せながら話しても、まとまるとは思えないが。

全く、青大附属の内部生が考えることはわからない。

それから先はすべて、古川こずえの思うがままに動いた。立村も不承不承ながら、自転車置き場から銀色の愛車を引っ張り出し、乙彦も中学時代から使っている三段ギア付きの自転車を、古川はいわゆる女子好みの、ハンドル前に籠がセットされているものを。

「三段ギア、ね」

しっかりチェックされてしまった。古川はすぐ立村の肩に手をやると、

「悪いけどあんた真中で走りなよ。逃げる気ないと思うけどさ」

囁くが、すぐそっぽを向かれてしまった。しかたなく乙彦も言われたとおりに自転車へまたがり、立村の真後ろにつく格好で漕ぎ始めた。まだ太陽は落ちていない。夕暮れにも、まだほんのちょっと、間がありそうだ。自転車の輪がからから回る影が、まだ薄い。

乙彦も青潟市の地理については決して疎いほうではなかった。だいたい学校近辺から駅前あたりまではだいたい見当がついた。しかし、駅を過ぎて後、古川が進んでいく道はどこか曲がりくねっていて、もちろん一度も通ったことなどなく、しかも乙彦が今まで感じたことのない妙な息苦しさのただよう空気が籠っていた。

信号で一度止まり、そっと振り返ってみた。

車が一台も走っていなかった。

車用の信号上には「本品山」と札があり。

——品山地区か。

今日の前にいる立村と、その町の繋がりははっきりしていて、でもその道のりはどことなく遠く、別世界のように思えた。乙彦が品山地区について知っていることと言えば、二十年以上前に、子どもが何人か誘拐され戻ってこなかったとされる神かくし事件の現場だったらしいということくらいだが、そこに自分の友人と言える立村が存在していることとその記憶とは、どうしても繋がらなかった。

古川が自転車を留めた。

いかにも工事現場といった風な黄色い柵が張り巡らされ、その奥には貨物列車のコンテナのよ

うなものがたくさん並んでいた。特に彩りはなく、てっきりどこかの貨物自動車停車場かと思ったくらいだった。

「ここだったらあんたも安心して、語れるでしょ」

立村に古川はコンテナを指差した。

「あの中がカラオケボックスになってるのよ。完全個室だからさ」

——カラオケボックス？ コンテナがか？

乙彦と立村、ふたりを引き連れて古川は足早にコンテナへと向かった。さっきまで青瀉駅近くでは照っていた太陽が、完全に夕闇へと切り替わっていたのを感じた。

てきぱきと古川は受付で手続きをし、すぐに番号札を持って戻ってきた。古川の説明通りこのコンテナが個室となっているのだという。無言のまま三人で「5」と番号が振られているコンテナへと向かった。中に入ると自動でぱちんと灯りがついた。上には頼みもしないのにミラーボールが回り始めた。冷房はしっかり掛かっている。が、息苦しい。

「面倒だから、とりあえずなんか一曲、歌ってみる？」

立村は首を振った。小さな部屋でまず腰を下ろす。

「あんたに歌えなんて誰も言ってないよ。関崎、とりあえず景気付けに、どう？」

「俺が歌うのか？ 何をだ」

とてもだがそんな脳天気なことをやらかす余裕なんてお互いにはないはずだ。手元の黒い革張りバインダーを広げ、縦書きの歌詞をざっと眺めてみるが、題名だけ知っていてもしょうがない演歌ばかり。いまどきの流行歌は一曲もない。

「ここね、まだレーザーカラオケ、入ってないんだよね。でもまあいっか。歌い放題だしさ。関崎も歌いたくなったら勝手に機械を操作してくれればいいよ」

——それはないだろう。

わりと広めの室内だったが、やはり三人入ると空気はよどむ。靴を脱がず、まず奥に立村が、真中に古川、戸口側が乙彦で並んだ。

「時間ももったいないから、さっさと話すよ立村」

ウーロン茶が届く前に、古川が口を切った。

「あんた、藤沖の言い分を聞かないで逃げるのはいいかげんやめなよ」

立村は黙ったまま、テーブルを見据えた。すぐに届けられたウーロン茶にも手を付けなかった。氷がかすかにちろちろグラスの中で音を立てた。

「あの藤沖がプライドかなぐり捨てて、あんたに頭下げてるんだよ。少しそれ、考えてやりなよ」

乙彦は膝に置いた歌詞カードバインダーを取り落とした。

「藤沖が、頭下げてるってどういうことだ！」

立村の表情は変わらなかった。

「関崎、あんたにも説明するから、まずは私の話を聞きなさいよ」

腰を下ろし、まずはストローで一気にウーロン茶をすすった。喉が渴いていた。

「関崎にあえてついてきてもらったってのはね、単に立村、あんたを囲い込むためじゃないってことは、わかっているよね。この問題が、杉本さんに絡んでいるからってことだってこと」

「だったら俺が話すことは何もない」

初めて立村が言い返した。

「俺なりに、自分なりの考えで行動していることを、古川さんに責められる筋合いはない」

——どうということなんだ？

しばらく乙彦はこのふたりの会話に集中することにした。

青大附属に来て覚えた知恵。

人の話をとことん聞いてから行動すること。

知らない相手だったら仕方がないが、自分は立村をはじめ藤沖、古川、さらに言うなら杉本梨南とも細い糸で繋がっている。だったら、ベストを尽くしてよい方向にもって行きたいのは当然のことだ。

古川が語り始めた。背をぴんと伸ばし、立村だけに身体を向けた。

「立村、あんたが杉本さんを守ってやりたい、ってのはよくわかるよ。あんないいかげんな噂に巻き込まれて傷ついているであろう、杉本さんの味方でありたいってのはね。私もこの前杉本さんに会ってきたけど、あの子は強いね。本当に可愛いよ」

立村は返事をせず、また貝となった。

「それに、言っちゃなんだけどあの渋谷って子、今までの話を聞く限り自業自得だって気がするね。おねしょしちゃったことはとにかくとして、よりによってなぜ、自分のやらかしたことをごまかそうとしてパニックになるかってね。悪いけど私があんたの立場だったらきっと、杉本さんの味方になったと思うよ。冗談じゃない。美里も言ってたけど、当然ぶちぎれてあたりまえ」
「だろう？ 古川さん、そう思うだろ？」

じっと立村が顔を上げ、言い切った。

「俺の言い分は間違っていない」

「そうだよ、立村。正論だったら当然そうだよ。けど、それでもさ」

古川の背筋は伸びたままだった。

「それでも私は、あんたに言わなくちゃいけないと思ってるんだ。立村、あんたが杉本さんをかばって、事実関係を中学の生徒全員に報せた場合、人がひとり死ぬかもしれないんだよ」

「死ぬ？」

言葉の終わりが少し消えた。立村の首がかすかに傾いだ。ミラーボールの細切れな光が立村の頬に当たっては消え、すぐに刺さった。

「あの藤沖がプライドかなぐり捨ててあんたに頼み込みにきたのはね、あの渋谷さんって生徒会書記の子を救いたいから、それだけなんだよ」

「ちょっと待て！」

ふたたび乙彦は割り込んだ。そうしなくてはいけない何かが突き上げた。

「藤沖が、例の女子を、救いたいからということか！」

ちょっとだけ黙りこみ、古川は頷いた。乙彦を振り返ろうとはしなかった。続けて語られた言葉を、乙彦は古川の背中にぴったり張り付くようにして聞いた。

「何度も言うけど、私は渋谷さんという子の味方になりたいから言ってるわけじゃない」

しつこいくらい繰り返した。

「なんで杉本さんの部屋におねしょふとんが持ち込まれていたのかとか、そういうわけのわかんないトリックが仕掛けられてたりしたもんだから、最初みな混乱してたらしいよね。もっとも心あたりなんて全然ない杉本さんからしたら、そんな濡れ衣、知ったことじゃなかったようだしさ。堂々としていたところもあるだろうし。でも、どっちにしても真実はひとつ。立村だってそれは信じていたでしょう」

まだ立村の返事はない。黒い、白い、それぞれのミラーボールの欠片が降り注ぐ。

「もし、渋谷さんが杉本さんみたいに強い根性持っている子だったら、たぶん立ち直れるんじゃないかって私も思う。自分で自分のしでかしたことを責任取って大切だよ。けど、渋谷さんは、それができなかつたんだよ。それ、わかるでしょう」

——それが、まさか。

思い当たる言葉。それが「死」。

乙彦には遠い未来の、考える気もまだない一文字。

「もちろん、私が聞いた内容は本当だかどうかかわからないよ。けど、少なくとも杉本さんは、同じ立場に置かれた時、決して死のうとは思わないよ。きちんと、責任を取ることができるんだよ。女子同士、可愛い後輩として、そう信じるよ。渋谷さんが自殺未遂をしでかしているとか、それでも学校には通おうとしていて、精神的にぼろぼろになっていて。そういう状態を学校側でほっとくわけ、いかないじゃないのさ」

立村が顔を上げ、じっとにらみつけるようにまた俯いた。

古川は動じていない。

「杉本さんを知っている人たちは、あの子がそんなことしでかすわけがないってわかっているよ。そう信じてくれている子がたくさんいる。あんただってそのひとりでしょう、立村。だから杉本さんならきっと、強く生きてくれる。噂なんてばかばかしいって無視してくれる。絶対に死のうなんて思ったりしない。杉本さんなら、絶対に大丈夫。だけど、あの渋谷さんは耐えられそうにないし、今この瞬間にも、藤沖が見張っていない限り、かみそりで手首を切ってしまうかもしれない、そんな状態なんだよ」

「古川さんは言っただろう。それは自業自得だってさ」

立村がかすれた声で言い返した。

「それに、どうして杉本が、噂に負けないで自殺未遂なんてやらかさない強い女子だってこと、決め付けられる？」

「あんた、杉本さんのこと、信頼できないわけ？ あれだけ可愛がってたら、それだけあの子の強さ、わかるでしょうが」

「強いなら、ほっといてもいいってことか！」

いきなり立村が鋭く言葉を切り出した。今まで俯いていたその顔には、明らかに火が燈っていた。ミラーボールの光の欠片がさらに立村の表情へ刺青のようなものを施していくかのようだ。身が凍った。動けなかった。古川の背に張り付いたまま乙彦は、次の立村の言葉を待った。

「最初に俺も言うておく。俺もその話を一番最初に聞かされた時、杉本にはっきり言うてある。現場の状況を確認できない以上、俺はその噂を否定はできない。イエスかノーか、その事実がどちらであっても、俺は杉本に対しての態度を変える気はない」

「あんた、それって女子の心を逆撫でしまくる内容じゃないのさ！」

——いや、確かに立村の言い分は正しい。

思わず頷くと、立村の凍った視線が乙彦に飛び、少しだけ和らいだように見えた。

「だから修学旅行で何が起こったかなんか、俺はそんなの関わる気なんてさらさらない。ただ、その噂を黙って耐え忍べと命令する奴らには、堂々と立ち向かえ、とだけ伝えてある。杉本の正義に基づいて、それは当然のことだろう」

「悪いけど立村、あんたの言うてること、全然わからないよ」

女子にはどうしても伝わらないのだろう。乙彦にはよく理解できる思考なのだが。

「古川さん、杉本が去年、どれだけ惨めな思いをさせられたか、話は聞いているだろう」

「もちろん、あんたからも美里からも」

「もしあの時、杉本が手首を切っていたら、同じようにみな、同情したか？」

古川こずえは引かなかった。

「杉本さんは決して弱い子じゃない。そんなことするわけない。私はあの子を信じている」

「いいかげんにしろ！」

一、二度首を振り、立村が立ち上がった。決して物を投げるでもなく、荒々しくもなく。ただ、その燃える炎はかつて乙彦が見たものと同じだった。目の前でストレートパンチを食らわされひっくりがえった雅弘を見ているのと同じ光景だった。

——まずい。

乙彦も腰を浮かしかけた。が、膝を古川の片手で思いっきり叩かれた。力が抜けまた座り込む。大丈夫だろう。あの時は雅弘が相手だったが、目の前の古川は下ネタ好きでも一応女子だ。手は出さないだろう。

「話は簡単だろう。杉本が何もしてないのに、濡れ衣着せられたから、どちらが白か黒かはっきりさせたいと思っている。そこでもうひとりの噂の張本人と一度さしで話をしたい。それできちんとけりをつけて、終わらせたい。そのどこがまずいんだ？ 相手が逃げ回っていて、それで曖昧なまま噂だけが飛び交っている。その間の杉本の、いわゆる精神的苦痛ってどうなるんだ？」

学校側は杉本が青大附属から来年いなくなるとわかっているから、多少のことはがまんしてもらえばいいとでも思ってるんだろう。けどさ、杉本を勝手に強い女子扱いして、もし壊れたらどうする？ 古川さん、杉本が百パーセント、自殺しないと切り切れるその根拠ってなんだよ。

ありもしない噂に耐えられるだけのずぶとい神経を持っているって、そう断言できるのはなんでだ？ 信じているからって言ったよな。信じているってその根拠はどこにある？ 見た目が強そうだから、たかがこの程度の悪口では傷つかないって決め付けてるのか？ 自分でもない相手を、勝手にそう決め付けられる、その根拠ってなんだよ。俺には全く理解できない」

「立村、あんた、自分で今、何言ったかよく、覚えておきな。それともうひとつ。藤沖と渋谷さんの関係、一年前の立村と杉本さんにそっくりだよ」

古川こずえは冷静なままだった。

「どういうことだよ！」

「話は簡単だってこと。あんたが一年前、必死になって杉本さんを守るため駆けずり回っているその姿が、今の藤沖とそっくりだってこと。藤沖はね、生徒会の後輩だった渋谷さんを守るため、他の後輩たちの軽蔑も覚悟の上で、あんたに土下座したんだよ。いい、わかる？ あんたが藤沖の話の聞こえとしないのは、立村、あんたの逃げであり、みっともない復讐でしかないよ。立村と杉本さんを傷つけた奴らに対して、やっとなんかあみろって言い放つチャンスを手放すもんかって意固地になってる、そっちの方がずっと醜いよ」

「醜い？ 復讐？ 俺はただ」

いきりたつ立村に古川は言い放った。

「復讐したい気持ちはわかるよ。けど、全く理由も聞かないで一方的に藤沖を無視することはないじゃないって言いたい。藤沖が必死になってあんたと和解したい、あんたの気持ちをようやくわかったって、そう言いたいってこと、どうして想像できないわけ？ あんたと藤沖との間になにがあったかは聞かないけど、あいつが渋谷さんのことを通して、ようやく立村の気持ちを理解したと感じたんだったら、また新しい関係が作れるんじゃないの？ 私は女子だしさ、男子の気持ちなんて全然わからないよ。けどね、立村のように、やっといばれる立場になったから、藤沖の気持ちを蹴飛ばしたままでいるっていうんだったら、私は悪いけどあんたを軽蔑するよ」

ふたりの言い合いがエスカレートする中、割り込むことすら罪に思える。

——俺は当然、立村の味方だが。

やはり男女の差だろう。明確に立村は、杉本梨南を守るための理由をきちんとあらわしている。ただ盲目的に杉本梨南の味方としてつくのではない。してても、してなくても、どちらにしてもまず人間関係は変わらないことを明言している。その上で、白黒ははっきりつけたがっている杉本を支援する。それもまた、もちろん、自然なことだろう。もちろん渋谷という女子が不安定な精神状態のため、それに耐えられないというのならそれはそれでしかたないことだ。だからといって濡れ衣を着せられたまま、耐えろというのはやはりおかしい。どういう理由があっても、受け入れるべきではない。

しかし、藤沖がからんでくると少し事情も変わってくる。

——あいつが立村に土下座しようとした理由が、それなのか。

もちろん古川の言葉を鵜呑みにはできないにしてもだが。

生徒会時代の後輩をかばおうとするその気持ちゆえに、立村と対話を求め、できるだけ穏便に

済ませようとする男気は理解できなくもない。藤沖の性格から考えて、おそらく正論で納得できる場所は引くだろう。きちんと相手を立てて話をすれば、立村も理解するだろう。しかしそれをあえて嫌がる理由を古川は、「やっといばれる立場になったから、藤沖の気持ちを蹴飛ばしたままにいる」と表現した。立村と杉本梨南との繋がりと、噂に聞く杉本の言動を考えるとおそらくそうしたくなるような出来事が一年前に起こったのだろう。だが、それも決して正しいことではない。お互い、真摯に向かい合い、話し合いをすればそれこそ「話は簡単」だ。立村と藤沖とは理解し合えるだろうし、中学の後輩たちの問題も落ち着く。古川が恐れているような「人が死ぬ」ことへの不安もなくなるだろう。

第三者からみると、こんなに簡単なことなのに、なぜふたりは言い争うのだろうか。

——かつて俺と総田とがやりあっていた時も、こう見えたんだろうか。

こういう時、側で観ていた雅弘はなにををしていたらろうか。

——あいつなら、きっとこの場でこうするだろう。

——「おとひっちゃん、いいかな、俺」とか言うな、きっと。

無意識のうちに乙彦は、かつて雅弘が側でしたようなことを、していた。

「悪い、一曲、歌わせてくれ」

立ち上がり、肩ほどもあるどでかいカラオケ装置の電源を入れた。さっき取り落とした歌詞カードファイルを拾い上げ、唯一歌えそうな「砂のマレイ5主題歌」をボタンで入力した。使い方は説明シールを見ながら行えば簡単だ。マイクの電源もONにした。かるくハウリングがしたけれども、指で叩いてすぐ整った。

「とりあえず、聞いてくれ、頭が冷えるだろう」

すぐにイントロから歌詞部分に入ったので、歌うしかなかった。

マイクの使い方は慣れている。しょっちゅう水鳥中学生徒会の行事で握っていたから。

ただ歌ったのは初めてだった。初めて、マイクを通して歌った時の声を聞いた。

身体全体に、力が漲った。目の前のふたりを無視し、乙彦は天井のミラーボールに向かい、何時の間にか覚えていた振り付けでとことん身体を動かしていた。

曲が終わったとたん、拍手が鳴った。

当然客はふたりだけだった。

——少しは頭が冷えたか？

決して自分が音痴だとは思わないが、いきなりわけのわからない言動をしたことに、ふたりがどう反応するか、正直想像できなかった。ただ二人の激しい言い合いを一旦クールダウンさせるためには、なんらかの形で空気の入替えが必要だった。それが、乙彦の判断では目の前のカラオケだったにすぎない。

「関崎、お世辞でなくて、本当に上手だ」

「私も同感。あんたってさあ、やっぱり」

言葉を切った古川の顔には、つい三分前までよぎっていた能面のようなものは消えていた。い

つものあっけらかんとした笑顔が浮かんでいる。そのままふと、立村をちらりと見た。立村も戸惑った風にまた俯き、それでもまた細かく頷いている。

——今がチャンスだ。

乙彦はすばやく、立村と古川の間に割り込んだ。というよりも、古川を押し出す格好になった。

「古川、今の話を聞く限り、俺は立村の味方になるわけだが」

「あんた、せっかくだいい歌歌ってくれたくせに、いきなり現実に戻すってことないっしょうが」

いや、そんなわけではない。改めて立村とも顔を合わせた。気まずそうにまた目をそらす。

「だが、事情は大体把握した。俺も一年A組の規律委員として、一言言わせていただくが、すべてを丸く収める方法はあるんじゃないかと思う。あくまでも俺は立村の味方だが、藤沖にも並々ならぬ恩がある」

ふたり、頷いている。きっと乙彦を藤沖の弟分として見ているに違いない。

「だから、俺なりの案をひとつ、聞いてもらえないか。あ、もしよければまた、あとで歌っていいか？ 腹から声を出すってのは、本当に気持ちいいな。部屋でパズルするよりも面白い」

笑いこけている古川を無視し、立村は頷き、ウーロン茶に手を伸ばした。

氷は完全に溶けきっていた。

「時間延長、しとくよ」

古川こずえが一度外に出ている間、立村とふたりきりとなった。

「関崎、音楽、いくつだった」

「もちろん五だ」

「だろうと思った」

これから語らねばならぬ気の重い話題とはうらはらに、乙彦を褒めようとする立村の態度がつかみ取れなかった。とはいえ、音程が取れることを褒められるのは嬉しい。実際、音楽は好きだった。

「関崎」

ウーロン茶をちらっと見た後、立村は背を正し、こぶしを膝に置いた。またちらちらとミラーボールの破片が膝とテーブル、そして頭にちらつく。乙彦も釣られて膝を割った。

「なんだ」

「ひとつだけ頼みたい」

「何をだ」

「信じてやってほしい」

言葉を切り、唇を少しひっぱるように一文字に結んだ。視線はやはり乙彦へしっかり伸びたままだった。乙彦を尻糸でひっぱっているような感じだった。

「今日、ここに来たのは古川さんと不毛な言い合いをするためではないんだ。俺なりに、関崎に、真実と思われることを知ってもらいたい、そう考えたからなんだ」

「お前も真実だと思っているのだろう？」

少し曖昧な言い方で乙彦も返した。

「俺は、客観的にしか判断できない。現場にいない以上、どれが事実なのかわからない。その上で俺なりの判断で行動している。だが、噂だけが一方的に流れてきたらおそらく、多くの生徒は杉本を疑うだろう」

「俺も現場にはいなかった」

当たり前のことを伝えた。

「今から、俺は関崎にできる限りの説明をする。古川さんも言うことは言うが、根本的には杉本を信じていると思う。だから、関崎だけは、それを信じてもらえないか」

「なぜ……だ？」

「それは」

言いかけて、ぐいとウーロン茶を半分飲んだ。完全に氷は溶けきっていた。

「お前にだけは、信じてほしいと杉本が思っているからだ」

——俺だけに？

次の問いがこぼれるまえに、古川がポテトチップスを一袋抱えて戻ってきた。

「受付で売ってたから買ってきたよ。まあ、まずは食いなよ」

ぱりぱり食って盛り上がる気分でもないのは言うまでもない。一時間延長で余裕があるとはいえ、金のかかる場所だ。時間は無駄にはできない。まず乙彦から始めた。

「古川、今始めて知ったことを、もう一度確認したいがいいか」

「いいよ」

「藤沖がその、やらかした女子をかばっているというのはどういうことだ」

「ほら、あいつ元生徒会長だったでしょう。だからよ」

そこで立村がぼそりと呟いた。

「そんなに仲が良かったとは思わなかったな」

「ごもつとも。はっきり言って、私も、驚いたわよ」

古川は頷き、二枚分のポテトチップスをつまんだ。よりによって一番でかいやつを持っていきやがった。

「関崎もわかっていると思うけどさ、藤沖は硬派野郎じゃん。秋にはなんとしても応援団を打ち立てようと燃えている熱血男。私の知る限り、女っ気も全然ないし、どこでストレス解消してるんだかってよく聞いたもんよ」

——古川の下ネタ攻撃にさらされてたというわけだ。

「だからさ、いきなり藤沖があの彼女と一緒に図書館で勉強しだしたりとかさ、一緒に帰り始めた時には驚いたわよ。とうとうあの藤沖にも春が来たのかって。でもよりによって嫌っていた渋谷さんに手を出すなんて、特に例の噂がある渋谷さんになんでって、みんな不思議がってたわけよ。基本としてうちの学年女子は、杉本さんびいき。渋谷さんの話にみなざまみろって思ってたところあったみたいよ」

あまり渋谷という女子は好かれていなかったらしい。

「藤沖もまあ、なんというか、女子たるものはやまとなでしこであるべきと信じていたところあったみたいでね。気が強くてうるさい子は苦手だって前々から宣言してたよ。私みたいな男のパーツについて詳しい女子はおよびじゃないんだってさ。ま、友だちとしてはいいけど、彼女にはねえって感じ」

——男子なら大抵そういうものではないか？

いきなり水野五月のお下げ髪姿がよぎった。

「そんな奴がよ？ なぜいきなり、渋谷さんといちゃついているのかって不思議に思うじゃん。人様の恋愛沙汰には口出しなんてしたかないけど、まあ、状況チェックはしてたわけ。そしたら、ひよんなきっかけで渋谷さんの状況が判明しちゃって」

「状況？」

「手首切るのを繰り返してるって。それ心配で、見張ってるらしいって」

立村は古川が戻ってくるなり、また無言のままウーロン茶をすすっていた。

「手首を切る、というのが、すなわち自殺未遂なのか？ 単に夕食の準備で指を切ったとか」
思いっきりけりを入れられた。すねをひっこめた。

「関崎、料理をする時手首に包丁、近づける？ あんたアホなこと言ったら男のシンボル切り落とすよ。なことはどうでもよくてさ、とにかく、藤沖はひとりの女子の命を守るがために毎日寄り添っているらしいのよ。いったいどこでそんな殊勝な気持ちになったのかわからないけど、あのきんきんうるさかった渋谷さんが、とてつもない大失敗で一気にプライドも地に落ちてか弱くなったのを見て、感じるどころあったんでないの」

——それはわからなくもないが。

強気な女子よりも、少し自信を喪失した女子の方が助けたくなる、というのは自然の摂理だと思うのだが。古川には理解しがたいのだろうか。

「さらに言うとき、二年の霧島、ほら、この前会った子。あいつにずっと渋谷さん恋焦がれていてしつこくアタックしていたみたいなのよ。けど霧島は最初からタイプじゃないって面しててさ、きつく無視。例の事件前からもともと渋谷さんのことなんか興味なかったのに、さらにばれちゃってからはそれプラス、『だらしのない女子』の烙印まで押されちゃったみたい。まあね、霧島はね、女子に関しては好みがるさい性格だしね。決して渋谷さんはブスだと思わないけど、霧島は女子のルックスなんて二の次って言い放ってるよ。姉貴で裏を見すぎたのかもね」

つまり、渋谷という女子は、修学旅行の寝小便をきっかけにプライドと恋を失ってしまったということなのだろう。一年上の藤沖が、あまりにも悲惨な渋谷の状況を見るに見かねて面倒を見ていた、というのが事実だろう。自殺未遂までしている、とどこで気付いたかにはあえて触れないでおいたが、やはり人の命を最優先で考えるならば、付き添うなり面倒みるなりはしたくなるのが人情ではなからうか。

——だが、恋愛感情とは別のはずだ。

後輩への思いやりこそあれ、それ以上のものには思えない。

「だよねえ、私も最初、そう思ったんだ。まずは藤沖の話はそっち置いとくとして、次、杉本さんのことね」

話が飛ぶのは古川の、いや女子のくせだ。

「立村、言いたいことないの」

「古川さんが言い終わってから言う」

やはり立村は控えめなままだった。

立村の言動は賢い男子としてはごく普通のことだ。

まず、古川と対等にやりあうには情報が必要だし、足をすくわれないように注意深く振舞わねばならないのもまた一理ある。今回はどう考えても立村の方が正論を訴えているにも関わらず、この調子だと古川に言い負かされてしまう。もちろん自殺未遂を繰り返している女子の件や藤沖のことなども考えると、難しい部分も認めるが。

——俺ももう少し事情を聞いてからにしよう。

「杉本さんはね、最初はそんなの知ったことかかって顔して無視してたわけよ。すごいよ彼女。修学旅行後、杉本さんの泊まっていた部屋からおねしょふとんが発見されたって噂が派手に流れ

てさ。やはり話にみな飛びつくわけよ。杉本さんを嫌っている男子たちにとっては都合いい情報だしね。でも、思い当たる節なんて全然ないのになあに考えてるんだかって顔しつづけていたのよね。ところが」

立村にちろっと視線を流す古川。ミラーボールの閃光で埋もれている。

「なんかあったらしいのよね、生徒会がらみで。霧島もそのあたりは聞いてなかったみたいだけど、立村なら詳しいんでないの」

「別にそんなことはない。俺はただ、これ以上誤解されるようだったら、白黒つけに行ったほうがいいのではないかと助言しただけだ」

驚いた。

——おい、立村がか？

言葉には出せなかった。

「まあ、正論だわね。この際聞くけど、どうしてよ」

「お互い、きちんと話し合っておけば問題がないだろう。思い当たる節がない、と言い張っているのは杉本だし、イエスかノーかは直接顔を合わせればはっきりするだろう」

「じゃあ聞くけど、立村。あんたが杉本さんにそんな助言をしたばかりに、かの生徒会長・佐賀さんまで顔を突っ込んでくるってのはどういうことよ」

——佐賀生徒会長？

かつて、雅弘の憧れの君だった佐賀はるみ。思わず飛び出してきた名前に戸惑う。

「佐賀さんは杉本を疑ったらしいからな。それはきっちりと白黒つけておいた方がいいだろう。もっとも、なかなか相手が逃げ回って話にならないらしい。佐賀さんがかばって、かえって杉本が疑われるはめになっているはずだ」

「まあねえ、佐賀さんは生徒会仲間の渋谷さんの方が大事だろうしねえ。で、かつての親友に罪をなすりつけると、それは失礼よねえ」

乙彦は割って入った。勘違いしているようだ。

「罪をなすりつけたわけじゃないだろう。どちらが正しいか、情報が少なすぎて判断できなかっただけじゃないのか？」

「関崎、あんた、面食いかい？」

ぴしゃりと撥ね付けられた。

「とにかく、佐賀さんは渋谷さんをかばい、それが噂で流れ流れて、とうとう杉本さんの分が悪くなっちゃったわけよ。渋谷さんの精神ぼろぼろ状態も、周囲からはありもしないおねしょの噂でショックを受けたからだって解釈になりつつあるし。一部、霧島のように判断している奴もいるけど、結局みな、自分たちに都合のよい結論を求めるわけだから、もう八割方、杉本さんは不利。学校側も、グレーゾーンのまま、なんとか人の噂も七十五日で片がつくよう祈ってるよね。杉本さん側の噂も消さず、かといって渋谷さんが犯人だというのも証明せず。生殺しのまま、みな卒業してもらえることを祈ってるというわけ」

古川は一気に三枚ほど、ポテトチップスをかじり尽くした。

——噂、か。

目の前に座っている立村はまだ、何も言わない。

白黒をつけさせようとけしかけるとは、正直想像できなかった。

もちろん、真実をはっきりさせるためにはそれがベストだとは思う。

だが、もしそれが成立してしまったとすれば？

自殺、とまでいかなくとも、精神的に追い詰めることにはどうしてもなるだろう。

同時に。

——もしそんなことをさせてしまったら、たがいのセコンドにあたる藤沖と立村との関係は修復不可能になる。

古川の訴える可愛い後輩たちへの想いとは全く離れたところで、乙彦はそのデスマッチを観察していた。直接繋がりのない女子たちよりも乙彦にとっては、同じクラスで同じ教室の空気を吸い、本来ならば友情を培っていけるであろう立村と藤沖の方が大切だ。

——藤沖は硬派で筋の通った奴だし、かといって世間を全く知らないわけではない。話はわかる奴だ。立村もわかりづらいところはあるが、決してむかつく奴ではない。ふたりともA組の同級生として、これから一緒にやっていきたい相手だ。できればこのふたりがうまく繋がってくれば、これから先の高校生活はきつとうまく行くはずだ。委員会活動にしてもだ。立村はいろいろあったにしても、元青大附中の評議委員長だ。このまま朽ち果てるのは勿体無い。さて、俺なりにどう動けばいいんだ。

乙彦は頭の中をもう一度、整理した。

——白と黒をはっきりさせることは必要だ。

どう考えても、これは結論だ。動きようがない。

——しかし、相手を死なすわけにはいかない。

大命題である。

ひとつ、提案してみることにした。

「古川、ひとつ聞きたい」

「なによ」

「その、杉本、さんはなんと言ってるんだ」

あきれた顔で古川は繰り返した。わかってるじゃないというような顔で。

「私が正しいことはわかる人にはみな、わかっているし、無理に騒ぐ必要なんてない、ってね。でも、佐賀さんに何か言われた時にはかっとなっちゃたらしいけどね」

「つまり、わかる人にわかってもらえれば、いいのか」

首を傾げ、古川はまた立村を見据えた。

「立村、そう言ってたってことだよね」

立村も頷いた。返事はない。

「じゃあ、古川は結論としてどうもって行きたいわけなんだ？」

「結論ねえ」

また、言葉を選ぶように、ミラーボールをつんつん指差した。

「事情は今の説明でほしい把握した。つまり、古川としては、現状の噂をそのまま流しておいて、七十五日の噂消滅まで何もしないでおこう、そう言いたいんだな」

「露骨だねえ。でもそうさ、その通りだよ」

かなり露骨なのはそちらの方じゃないか、そう言いたい。

「渋谷さんがこれ以上手首をかみそりで切らなくなるまでは、とにかく杉本さんにがまんしてもらうしかない、そう判断したわけよ」

ずっと立村が割り込んだ。

「杉本はそうしたらひとりだけ惨めな思いをしろってわけか！」

「違う違う。だから、誰か杉本さんをかばってあげられるような場所をこしらえてやるのよ。斬り込み隊長はあんた、立村ね。今、私が聞いている限り、杉本さんには新しい友だちがいるって東堂から聞いてるよ。はたからは危なっかしいらしく見えるけど、けっこう楽しそうだって。あの子たちは少なくとも杉本さんのことを嫌ったりしないし、こんなくだらないおねしょ騒ぎになんて耳傾けたりしないよ。だから、それでいいじゃないってこと。立村が杉本さんのためにやってあげたことと一緒に」

このあたりは中学がらみの出来事らしいのでよくわからない。だがあまりしつこく尋ねると、自分がひそかなる「葉牡丹の彼」扱いされてしまう。それは避けたい。

立村の反論は続いた。

「俺が杉本の同級生だったらまだなんとかできるさ。だが今はどうしようもないだろ？ 今の杉本の友だちも、俺の知る限り、かなりとんでもない女子らしいと聞いている。もちろん東堂が気に入っているくらいだからそれはそれでいい人だとは思いますが」

「しょうがないよ。立村、あんたはこういう顔しててもついているものついてるからしょうがないけどさ、女子っていうのはね、本当に信じてくれる人がひとりだけでもいれば、ちょっとくらいの辛い思いはがまんできるもんなんだよ。こういったら変だけどさ、あれだけ杉本さんがいじめられて来て、先生たちにも無視されて、たったひとりで戦ってきて、それでめげずに青大附中へ通って来てるのはね、たったひとり、はっきりした味方がいたからなんだよ。立村、あんたはそれ、わかってるよね」

事情は決してここで深追いしてはならない。酷い目にあうのはわかりきっている。

「だからといって、ありもしないことを叩かれて噂を七十五日待てというのは、人間としておかしいだろう？ 七十五日ったら、何ヶ月だ？」

「二ヶ月程度だ」

すぐに乙彦が答える。無視された。

「学校側は、夏休みもあるしすぐに話は立ち消えになるだろうと思っているからそんな流暢なことが言えるんだ。だが、杉本はもともといろいろ不利な立場に立たされる女子だってこと、古川さんも知っているだろう？ 佐賀さんが生徒会長に立ってからはなおさらだ。青大附属に高校以降もずっといる渋谷さんを大切に守って、どうせ公立に出て行く杉本なんかどうだっていい、っ

て思ってるのか？ 杉本のプライドもなにも、ずたずたにしてもたいして問題ないと考えているのか？」

「杉本さんはそんなに弱くない、だからあえてそう私は提案してるんだよ。立村は杉本さんのことをか弱いと思いついでるけどさ、そんなくだらないことで壊れないよ。女子の方が強いんだよ。こういう時はさ」

「古川さん、それは間違っている、杉本は」

「何もあんた、そうやって女子を下に見たがるのやめなさいや」

——なんだか論点がずれてきているぞ。

つまり、立村としては、なんとしても杉本梨南の名誉を守ってやりたいわけだ。

杉本梨南に着せられた濡れ衣を晴らすことこそ、最大の義務と認識しているわけだ。

一方、古川としてはそれを認めた上で、渋谷という女子が死を選ぶ可能性をなんとしても阻止したいわけだ。

これももちろん、わからないわけではない。

だが、これ以上どうすればいいのか。

だんだん、口がむずむずしてきた。乙彦ならばこんなうだうだした展開など好まない。

もっとわかりやすく、すっぱり突っ走りたい。

——簡単じゃないか。

ふたりの言い合いにけりをつけるべく、乙彦は立ち上がり、テーブルに置きっぱなしのマイクを突きつけた。電源をオンにしたままだったので、思いっきりガラスの衝撃音を拾い響いた。

「直接、杉本さんにどうしてほしいかをどうして聞かないんだ？」

ふたり、あっけにとられて乙彦を、他人顔で見つめた。

——何もそう、変な顔で見ることはないだろう？

結論からどんどん言うことにしたので、文句は後回しに。

「だいたい話はつかんだ。立村、古川。お前たち二人の言い分はよくわかった。だが、結局一番ないがしろにされているのは、杉本さんじゃないのか？」

「関崎、それは俺に対して言ってるのか？」

静かだが、きっぱりと立村が問うた。乙彦も目を見つめて頷いた。

「そうだ。第三者の目から見ると立村、お前は杉本さんの立場を代弁しているように見えるが結局は古川の言う通り、藤沖へしっぺ返しを食らわせているように思える。女子たちの件はおいといても、藤沖に対してはもっと、話を聞いてやるべきだと俺は考える」

反論を諦めたのか、立村は黙った。

「それと古川、お前も杉本さんからいろいろ話を聞いてるといえるが、結局何を彼女が求めているのかが、正直はっきりしない。周りはいろいろ取りざたするが、学校なり周囲なりの意志ばかりが働いて、本来杉本さんがお前らにどうしてほしいのかがさっぱりわからない」

少し大袈裟だが、実際乙彦が感じたことでもある。

「まずは、それを確認すべきじゃないのか」

「でもさ、そんなのわかりきってることじゃないのさ」

古川がやはり反論してきた。予想通りだ。

「女子からしたら、恥ずかしい噂なんてさっさと忘れてほしいに決まってるじゃん。杉本さんだって本当は白黒つけたいじゃん。でもそうしたら」

「それはお前らの思い込みだぞ。もしそれが外れていたらどうするんだ」

乙彦は一気に叩きこんだ。

「俺ならまず、杉本さんの要望を聞く。その上で、俺がどうしてほしいかを訴える」

そこで立村が、挑むような口調で乙彦に尋ねた。

「関崎なら、どうしてほしいと、あいつに言うんだ」

古川に言うよりも口は軽く回った。

「人も死なせずにすんで、プライドも守られる方法を、一緒に考えてほしい、とだ」

つまり、そういうことなのだ。

話を聞く限り、杉本梨南はかなり冷静にこの状況を捉えている風に見受けられる。

もし噂に聞く最低女子だとしたら、とっくの昔に渋谷の首根っこを押さえつけて白状させているか、それとも派手に自分が犯人ではないことをアピールしては 鬻 鬻 を買っているだろう。無視、という手段を冷静に選ぶことのできる女子ならば、むしろ冷静沈着に話を持って行って、この事態をどう収めるか、提案させる というのがひとつのやり方ではと乙彦は思う。

「ただ、彼女にも、すべての事情は伝える必要がある。藤沖が毎日見張りをしないといけないほど渋谷という女子が追い詰められていることなどは必ずだ。その上で、これから先ベストな方法を取りたいのだが、いかがだろうか、と持っていく」

「ベストな方法ねえ」

古川が茶化す。

「もちろん、その方法でも渋谷という女子が傷つくのならしょうがないだろう。だが、人間、誰だってあったかい気持ちはあるはずだ。人前で寝小便の布団をさらすような真似はしないだろう。立村、そんな女子じゃ、ないんだろう？」

立村は答えなかった。ただ黙って乙彦を見つめた。

「方法だったら、たとえばだ。俺ならまず、藤沖、立村が立ち会う中で女子同士の対面をさせて、その上で話し合いをさせる。もし必要だったら彼女たちの友だちを同席させてもいい。とにかく、とことん話し合わせる」

「どつぽにはまるよそんなことしたら」

「人間同士、心があるはずだ。そんなことで壊れたりなんかしない」

さらに続けた。

「その場所をあえて、学校の外なり、人目につかないたとえばこういうカラオケボックスとか、そういうところに設定する。そこでばれないように話をすれば、まずこれ以上酷い噂は広がら

ない。その上で互いに納得した声明文を発表するなり、そのまま七十五日を待つなり、それぞれの価値観で判断すればいい。あとは、女子同士で決めることだ。本来信頼するとは、そういうことじゃないのか、立村」

言いたいことは言い切った。じりじりとミラーボールの回る音が響く。飲み物もポテトチップスもすでに空だ。乙彦は自分のウーロン茶を飲みきった。改めてふたりの様子を伺った。それぞれ考え込んでいるのかと思いきや、全く視線を逸らすことないのはなぜだろうか。

「信頼、ねえ。立村、あんたどう思う」

「杉本自身の、判断か」

短く呟いた立村の様子は、こわばっているようだった。何かがぐさりと刺さったのだろうか。俯いて唇を噛んでいた。

「私は、関崎の案、なるほどなって思うけどさ。話せばわかってくれる子だとは、思うよ」

「筋は通すからな」

「私ら先輩たちがわたわたするよか、直接杉本さんにどうしてほしいかを聞くのは、確かに早道だよ。あの子、学年トップ今だに守ってるしさ。賢い子だからどうしてほしいかは答えてくれると思うよ」

あっさり納得されたのには驚くが、それより気になるのは立村の方だった。いきなり項垂れんばかりに頭を下げ、こぶしを膝に置いている。そして立ち上がった。財布を取り出し、千円札をテーブルに置いた。

「時間、まだあるだろう。関崎、もう少し歌っていけ」

それだけ言い残し、俯いたまま鞆を抱え、立村は部屋を出て行った。

なぜか、古川は止めようとしなかった。

「ああわかったよ。あとでもっかい電話で連絡するよ」

乙彦が腰を浮かしかけたのを、さらに古川はマイクを手に押し付けながら囁いた。

「あんたの案、採用。話を立村と煮詰めて、杉本さんと三人でまず、本人の意志を聞くところからやり直すよ。それよか、まだ二十分以上間あるよ。ほら、演歌かなんか、歌いなよ」

マイクの誘惑に、乙彦は抗し切れなかった。歌ったことはなくても、聞きなれた演歌ならまだたくさん歌詞本に載っていたから。

——立村は、果たして受け入れるだろうか。

——それ以上に、立村は、なぜあんなに衝撃受けてるんだ？

わからなかった。しかし、それ以上考えなかった。立村がわかりづらい奴というのは、初対面の頃から承知していることだった。

家に帰ってから親兄弟に、「カラオケというものの衝撃」について語りつづけ、あっけにとられた家族をよそに今度は雅弘に電話をかけた。残念ながらまだ学校から帰ってきていないようだったので、また改めると連絡した。

——これは、なんとしても、校則を遵守するという形のもとで、家族を巻き込んで通うしかない。

夕食中もカラオケにおける、腹から声を出すことの快感についてしゃべりつづける乙彦に、しばらく黙って聞き入っていた父が、ぽそりと呟いた。

「それなら、乙彦、試験が終わったら連れて行くか」

兄、弟、三者で顔を合わせて頷いた。母が笑いをこらえるようにしてご飯のお代わりを盛っていた。誰も、校則違反を犯したのではとか、無駄遣いしたのではとか、怒鳴る者はいなかった。やはりそこが、我が家なのだろう。

「私には、関崎の家庭環境って信じられないよ」

次の日、さっそく静内と名倉を捕まえて「今度ぜひ、カラオケにいこう」と誘ったのは言うまでもなかった。バイトが終わってすぐに学校へ向かうから、必然、朝一時間目までは余裕がある。生徒玄関で静内たちに事情を説明すると、ぽかんと口を開けたまま静内が呟いた。

「父さん母さんが、OK出したの？」

「もちろんだ。俺もやはり、こういうことはきちんと許可を得て、みんなで楽しむことこそ義務だと思う」

「義務かよ」

また隣で啞然としたままの名倉が続く。乙彦は力強く断言した。

「そうだ。俺も昨日は事情があっただけで得なかったが、純粹に歌うことの楽しさを思い出させてもらえる場所というのは、やはり快感だ。ただ、どうしても金がかかるのと、あまり教育上よくないと思われるのも確かだろうし、それなら大人たちにきちんと筋を通して、一緒に楽しむことを勧めただけだ。たぶんうちの親たちも、歌うことは好きはずだ。しょっちゅう宴会でカラオケに付き合わされていると聞くからな」

「だけどさあ」

そこまで言いかけて、静内がくくっと声を立てた。

「それ、想像がつくから、妙におかしいよ」

「だな」

名倉はそれ以上言わなかった。ふたりとも「じゃあ次回はぜひ一緒に」と続かなかっただけが乙彦には不満だった。あの闇の中、とことん語り合いたい友だちといえ、まずは雅弘、そしてこのふたりのはずだった。立村とは昨日、少しだけだが本心を垣間見ることができたし、歌うこと自体が苦手そうなので別の場を設けてもいい。

カラオケの話はもちろんしたけれど、それ以外のことはさすがに口に出せなかった。

中学の修学旅行で寝小便をしでかした女子がらみの問題、なんていうのはやはり、まずいだろう。静内、名倉はもともと外部生だし、仔細を知る機会もそうないだろうが、乙彦の倫理からすると黙っているべきではと判断した。

ただし、いきなりふたりとの約束を破って古川こずえと行動を共にしてしまったのも事実だ。埋め合わせをしたい気もした。持ち出してみた。

「埋め合わせ？」

「そうだ。俺の記憶する限り、いきなりの予定変更でお前たちに迷惑をかけたのはこれで二度目だ」

いつもタイミングが悪い。なぜかわからないが。

「そんなの夏休みでいいよ」

「いや、それだとたぶん、俺が忘れる」

忙しいとつい、後回しになる。静内と名倉、ふたりとも困った顔でもって首を傾げた。

「でも、三人で一緒になんかするってのは、面白いね」

「だろう？」

「提案」

いきなり静内が笑顔で手を挙げた。もちろん、教室と同じように、指名した。

「夏休みの自由研究一緒にやろうよ」

「自由研究？」

名倉と同時に聞き返した。

「この学校では夏休み、自分たちのやりたい研究を自由にレポートにして提出するというのがあるらしいよ。他の子から聞いたけど、ファッション研究とか絵とか写真とか、なんでもありなんだって。だったら、私たちも好きなことやるのはどう？」

「釘刺しておくが、カラオケ研究はだめだ」

名倉が厳かに言った。

「悪い、俺もそこまで路を踏み外していない」

しかし、静内の話ももっともだった。夏休みに宿題が出ないわけがないと乙彦も覚悟はしていたが、いきなり自由研究とぽんと出されても、きっと途方に暮れていただろう。乙彦の性格上、何かの提案を出してそれに集中するのは得意だが、全くさらの状態で「何かをやれ」と言われても困る。これは中学時代、悔しいが思い知らされてきたことである。

そのたたき台を、三人で相談しつつ、作る。

面白い。

乙彦はもちろん賛成した。

「静内、お前、何をやるつもりだ」

「あんたたちが反対しなければ、青潟の街にある銅像の写真撮影と、その歴史とか面白いと思うんだ。それか青潟という街の歴史をもう少し突っ込んだりとかね」

——やはり歴史がらみだな。

静内の考えからすると、それも当然だろう。乙彦はさほど歴史に興味がある方ではないが、全く知らないことを頭ごなしに無視はしたくなかったし、なによりも静内の価値観を深く知る機会じゃないか、とも感じる。思えば顔を合わせることは多くなったけれどもなかなかクラス別の弊害で、語る機会は少ないと思う。

「名倉、どう思う」

「一口乗った」

異存はない。この段階で夏休み自由研究は決定した。

あくびをしながらA組の教室に足を踏み入れる前に、くっと息を止めた。

——これからどうするかだ。

カラオケで歌いまくりすぎて、今朝になるまで気付かなかったのだが、はたして古川は、

——藤冲到、俺が事情を知っていることを、伝えてあるのだろうか。

ひっかかるころがあった。

もちろん藤冲も、問題の渋谷という女子を見張りがてら連れ歩いているということだし、乙彦以外でもその話は流れている可能性がある。たまたま気付かなかったのは乙彦が外部生だったからだけかもしれない。内部上がりの連中同士ではまた別の情報が流れているのだろう。

——だが、しかしだ。

とりあえずA組の状況は問題ない様子だ。誰も藤冲のことを「やーい、お前の女は寝小便たれだ！」とかいってからかうことはない。また立村についても同様。陰口は叩かれているらしいがそれだけのようでもある。とにかく、うまくはいつている。

——まずは知らん振りで通すがいいか。

ポーカーフフェイスは苦手だが、事情が事情だ。しかたない。

「藤冲、おはよう」

無理に顔をひきつらせて声をかけたこと、気付かれなかったようだった。

「ああ」

片手を挙げて机に向かい、藤冲はなにやら英語の問題集を解いていた。見たことのない表紙の副読本っぽいものだった。日本語は混じっていない原書のようなようだった。

「熱心だな」

「仕事だ」

短く答えた。あまりしつこく聞くのはためらわれた。

乙彦のみた限り、藤冲の様子には昨日に引き続き憂いのようなものが漂っている。ほんのかすかだが、いつものような兄貴風ふかす態度がなくなっている。もちろん乙彦にはそれでちょうどいいのだが、昨日古川たちから聞いた話と重ね合わせるとやはり気に掛かる。

「藤冲、ちょっと顔、貸しな」

タイミングよく、古川が藤冲の頭を軽くはたいた。男子たちにはそれが彼女なりの挨拶だという。それに続く下ネタトークも欠かさない。

「どしたのあんた。ちゃんとしぼってきたのかい？ フレッシュミルク」

一瞬、男子たちの頬にゆるみが漏れる。みな、わかっているわけだ。

「何だ」

「廊下、悪いけど出な。例の件」

それだけの会話だった。ちらっと乙彦に片手を振り、古川は藤沖の腕をがっしり取り、廊下へ出ていった。

「古川がやると色気ねえよなあ」

聞こえよがしに誰かが呟く。

「腕組んで歩いてるって感じじゃあねえよ、あれ。連行するって感じだぜ」

さっきまで潤んでいた空気が、一気に笑いで和らいだ。確かに、藤沖と古川は評議委員コンビとしてカップルに勘違いされても不思議はないはずだ。なのに、そうならない。昨日の立村と古川との間もそうだった。

期末試験も近い。かなり気合を入れて勉強しなくてはならないのも自覚している。バイトもだいぶ慣れてきて、作業の流れも頭で考えず体で進められるようになってきた。ひとつのサイクルができるまでが一苦労だったが、今はその流れがつかめているせいかだいぶ楽になった。

その分、放課後以降は若干余裕も出てきている。

夕方バイトするよりもその点はよかったのかもしれない。

ただ、成績がどうしても上がらない。どうしても平均点を越すのがやっとの自分の点数には、目が慣れてこない。中間試験が乙彦の学生生活において最低の数字だったことを考えると、今度の期末こそなんとかしなくてはならない。

乙彦はぎりぎりにもぐりこんできた立村へ声をかけようとして腰を浮かした。同時に立村も振り向いた。目が合った。薄い制服のジャケットを脱ぎ、椅子の背にかけた。珍しかった。立村がYシャツとネクタイのみで授業を受けるのは、あまり見たことがなかった。さすがに暑かったのだろう。そろそろ短い雨の時期も終わり、一気に太陽の照りつけがちくちくささる感覚が残る。

やはりぎりぎりに古川と藤沖も戻ってきた。話が終わったのだろう。

古川から聞くまでは、やはり黙っていることにした。

「関崎、悪いけど相談」

何時来るか、待ち構えていた。たぶん昼休みあたりに声がかかると思っていたのだが、意外と早かった。なんと授業二時間目終了後だ。乙彦が顔を挙げると、

「ちょっと交換日記しよ」

「交換日記？」

「そ、かわいいじゃん。ってことで、このノートよろしく」

差し出されたのはちっとも可愛くない大学ノートだった。灰色の表紙で一回り小さい。文庫本タイプといえば近いだろうか。古川は声を潜めた。耳元にしゃがみこんだ。誰かの視線でちくりとやられたような気がしたが、それは気のせいだろう。

「絶対、なくすんでないよ。さっきの理科、私、ノート全然取らないでこっち書いてたんだからね。わかった？」

「それはまずくないか？ 期末試験の山になるところがかなり出てたぞ」

「だからそれはあとであんたにノート貸してもらえばいいだけ。悪いけど関崎、次の世界史の授業、今度はあんたがノート取らないでそっち読んでてよ」

——そんな自殺行為、できるか。

乙彦は受け取り、古川の目の前で一気にノートを開いた。外に見えないよう立てて素早く読み取った。古川の書いた文字は、思ったよりも読みやすく、行動よりもはるかに女子っぽかった。

——関崎、昨日は君のワンマンショー、楽しませていただきどうもね。とりあえずその後の結果と今後の予定について全部書くから、覚悟するように。

まず、結論から言うと、今朝私が私の提案で杉本さんが納得。および関崎の案ですべてが決まったという形。ぱちぱちぱち。と言いたいところなんだけど、立村だけがご機嫌ななめ。そりゃしょうがないよね。とにかく、話はついたけど、問題はこれから山積み。

「今朝？」

「そ。あんたがひたすら古本と格闘している時間帯にね、彼女とあいつと三つ巴で話し合いしたってわけ。関崎の提案通り。悪いけどあとはあんた、ノートで読んでちょうだいな」

別に口頭で話したってまずくないだろうに。しかたなく続きに目を通した。側に藤沖と立村がいる。ふたりにもしこの内容がばれたら古川はどう、言い訳するつもりなのだろう？

やましさいっぱいで溢れそうなまま、ページをめくった。

——あんたの熱唱をたっぷり聞かせてもらった後、さっそく立村と杉本さんと連絡を取り、善は急げってことで朝六時に学校で話し合いを持ちました。期末も近いしさ、片付けるんだったら早めの方がベストと思ってさ。で、一時間半くらい語り合った結果、杉本さんがあっさり納得してくれた。杉本さんは、信頼できる人たちが信じてくれればそれでいいから、勝手な噂にはこれ以上嘯み付かないって言ってくれたわけ。

ただ、この点が重要なんだけど。

杉本さんは本当だったら、渋谷さんを捕まえて白黒はっきりさせたい。本当だったら生徒会室できっちり話を付けたいんだけど、そんなことしたら渋谷さんが手首をまた切ってしまう恐れあり。だから学校内ではしない。それは納得してくれた。

ただし、杉本さん個人としては、どうしても直接、渋谷さんと決着をつけなくちゃ気がすまないところもある。そりゃあまあそうだよな、杉本さんとしたら、濡れ衣着せられてただでさえまいてるのに。さらにその濡れ衣をもう少しがまんして着てもいい、と覚悟してくれたんだから、お礼のひとつくらいあったっていい、とは思うよね。

どちらにしても杉本さんの希望としては、渋谷さんとさしで話をしたい。

きちんとふたりの間ではっきり話し合いを持って、その上で受け入れたい。
彼女の要求はね、つまり関崎の提案と一緒によ。ほんと、びっくりしちゃったよ。

そこで次の問題として、杉本さんと渋谷さんをどこで話し合わせるか。
難題ってのはそこなのよ！ 関崎！

だってそうじゃないのさ。学校内じゃあまずだめじゃん。中学校舎だったらその内容がばれちゃって、かえって修羅場になっちゃうかもしれないしさ。

かといって、どこかの喫茶店も、やっぱり他人の目があるし。

関崎の提案通りこの前のカラオケボックスがベストかな、とは思うんだけど、問題はお金がかかるってこと。やはり、そう簡単には連れて行けない。まさか関崎の家を借りるわけにもいかないし、ほんと困ってる。私の家でもいいけど、弟がいるからあまり後輩の下ネタをしゃべるわけいかないしさ。私のことなら別にいいけど。

夏休みに入るのを待つのもひとつだけど、できればお互いのためにさっさと片をつけたいし、まずは場所探しで頭の痛いこの頃。関崎、なんかいい案ないかな？

それと、もうひとつ。

立村がご機嫌斜めな理由はね、私が杉本さんにぶつけた殺し文句なんだわ。

「関崎は、杉本さんが潔白なんだって信じてくれてるよ」

ってね。軽い気持ちで言っただけなんだけど、どうもそれが杉本さんにはきゅーんとしちゃったみたいで、こっくり頷いてくれたんだ。

しばらく立村があんたに変な態度取るかもしれないけど、それはさ、単なるやきもち。大目に見てやりなよ。どうせあんたは静内さん一筋だしそれは時間が来れば杉本さんもわかるはず。立村しか選ぶ相手がいないんだって覚悟してくれるはず。そこんところだけよろしく。

最後に藤沖について、ひとつ。

あいつがなぜ、あんなに渋谷さんへ拘るのは私も謎のままなんだけどね。

どちらにしても、関崎の案通りにまずは五人（私、杉本さんと付き添いの立村、渋谷さんと付き添いの藤沖）でどこかで集まることにします。杉本さんはふたりきりで、って訴えたけど、絶対にとんでもないことになるからそれは却下。たぶん渋谷さんの保護者と自認してる藤沖は許さないだろうね。で、立村もそうなるべくつけなくちゃいけないし、あの四人だけで語り合うなんて想像するのも怖いから私が中立でお立ち合い。

どうだろう？ 関崎？ いい案あったら、ノートに書いて返してちょうだいな。

以上、ノートに綴られたものをすべて読み終わり、乙彦は古川に顔を向けた。

まだ、授業は始まっていなかった。藤沖の「起立・礼・着席」も聞こえていなかった。

古川の心配は取り越し苦労だったというわけだ。ついでに乙彦の読みがぴたりと当たった、そういうわけだ。

——よかったじゃないか。

まず、一安心というところだ。乙彦からすると後輩女子たちの問題よりも、立村がこれ以上問題を大きくしたくない、と判断したことの方が大きかった。杉本梨南なりに判断した結果を尊重したのは正しいと思う。不必要に外野をたきつけることなく、かといって泣き寝入りするのではなくきちんと話し合いを持ち、白黒をはっきりさせる。どちらにしても杉本には不利な結果ではあるけれども、渋谷の命を救った……というのは大げさか……という事実は偉大だ。自分で泥を被る代わり、きちんとそれなりの礼を尽くしてほしいと願うのもまた本心なら、それはそれできちんと決着をつければいいことだ。

——それに、立村と藤沖ともうまく話し合いのテーブルにつかせることができる。

なによりも、これが一番だ。

ふたりの不仲で一年A組の空気はかなりよどんでいる。その状況を打破するきっかけともなればそれはそれでベストだ。立村も昨日のカラオケボックス討論会において、かなり本音で古川に言い募ったように見えた。藤沖の性格上、表面でつらっと流されるよりも、包み隠すことのない気持ちでぶつかって言いたいことを言えば、きっと理解し合えるのではないだろうか。おそらくふたりのこれまでの展開を聞く限り、単なる誤解に思える。心から憎みあって縁を切ったわけではなさそうだ。それなら、後輩たちのトラブルを解決するのと一緒に、自分たちのわだかまりも押し流してしまえばよい。一対一で語り合うこと以上に、人間関係を良くする方法はないと乙彦は思う。

——あとは、話し合いの場所の確保だな。

カラオケボックス内では「俺の部屋を提供する」と口走ったが、知らない女子をふたりも家に入れるわけにはいかないだろう。関崎家の連中に割り込まれる可能性大だ。これも却下となると、夏休みを待って空教室を押さえるか、それともカラオケボックスか、だろう。金がかかるとはいえ、話の内容からいって五人が演歌をうなって盛り上がるとは考えにくいので、一時間でなんとかするのはないか。

——立村と藤沖のためにも、場所確保は慎重に選ばないとまずい。野郎ふたりが腹を割って話し合えて秘密が保たれる場所となると、あとは公園か、神社か、図書館か。

自分ひとりではいい場所が浮かばない。これはひとつ、事情を伏せた上で静内、名倉に相談してみたほうがよさそうだ。どうせあいつらとはまた放課後、顔を合わせるだろう。今朝の自由研究の話ももう少し煮詰めたい。それに、もしそういった秘密の場所が見つければ今後は、自分たちも利用したっていいわけだ。

乙彦はノートを世界史の教科書下に隠し、すぐ授業ノートを開いた。あせることはない。考え

るのは放課後でいい。まずは期末試験を乗り切らねば。

期末試験一週間前となった。毎度のことながら部活および委員会活動はテスト期間中止となり、その代わりに外部入学者たちへの補習は毎日二時間ほどたっぷりと行われた。補習が多いということは、すなわち宿題も倍、さらにクラスの授業から引っ張り出される宿題もさらに重なるわけだ。さすがの乙彦も、この時期は休み時間ひたすら寝るしかなかった。

「もうやだ、眠い！」

五時半過ぎにようやく開放され、乙彦は半分意識朦朧となりながら立ち上がった。隣で叫んでいるのはもちろん静内である。なぜか落ち着いてノートを取っているのが名倉だ。自分たち三人を比較してみると、一番成績がよいのは名倉だった。要領がいい……ようには全く見えないのだが。

「名倉、悪い、山かけて！」

「俺に頼まれても困る。わからん」

ぶっきらぼうに名倉も答える。乙彦も同意する。

「山をかけてもそれが解けなければ話にならないだろう」

「もう、関崎も正論言うのいいかげんにしろっ！」

ふくれっつらの静内をさりげなくからかうのが面白かった。

「俺でよければいくらでも山かけするが」

「何言ってるのよ。関崎はすべて、隅から隅まで必要なとこだって言うだけ」

「しょうがない、教科書全ページ、範囲に入っているんだ」

とは言うものの、乙彦も今だ、青大附属独特の試験方式には戸惑っていた。

いわゆる「暗記物」の要素が少なすぎる。

歴史関係にしても、中学までなら語呂合わせで年号を覚えたりするだけでなんとかなり、必要な事件や出来事および人物名を暗記すればことたりた。記憶力には自信のあった乙彦だが、今の授業ではそれ以外の要素も要求される。

「俺には理解できない問題がたくさん出てくる以上、どうしようもない」

乙彦は先日実力試験で手も足も出なかった問いを思い出した。

「なぜ、まだ習っていない明治維新のごたごたをからめて日常の学校生活と比較して小論文を書かねばならないんだ」

「ああ、あれね、私もあれ、わけわかんなかった」

「単に、人間関係を自分の生活と重ねあわせればいい」

また、賢い名倉が投げやりに答える。そういえば名倉はその問いで満点をとったはずだ。

「お前どういう風に答えた？」

「友だちで坂本竜馬に似ている奴がいる。そいつが中学時代何をやったかを書いた」

——どういう奴だ？

名倉はそれ以上、友人の坂本竜馬似男について語らなかった。一応、中学歴史の授業で坂本竜馬が明治の夜明けに向けて活躍した人物とは諳んじている。が、それ以上の関心はない。歴史上

の人物とはみな、教科書のページに太文字で綴られるだけの存在だった。

「ああ、そうか！　そういう風を書けばよかったんだ！　先生たちも答え教えてくれなかったし、損したな」

静内は悔しそうに指を鳴らし、鞆に教科書とノートをつっこんだ。

正直、今回の期末試験に関しては、もしそういった小論文タイプの問題が出たとしたら諦めるしかないと思っていた。その代わり、試験範囲は狭いので一気に丸暗記し、それでしのぐつもりだった。来年以降狙うつもりの奨学金も、今の状態では厳しい。なんとかしたいとは思っているが、それをどうやって乗り越えるか、そのすべが見つけられない。

「とにかく、先生たちも、今年はとにかく『自分で考える習慣』を身に付ける訓練の年とか言ってるし、それに甘えるしかないよ」

生徒玄関へ向かい、そそくさと靴を履き替え、静内が悟った風につぶやいた。

「なんでも私たち外部生は、試験勉強は人一倍して来ているから知識はたくさん持ってるんだって。ただ、それを活用するテクニックを知らないんだって。だから、一旦すべてをご破算にする必要があるのだという話」

めずらしく静内が長くしゃべっていた。相当焦りがあるのだろうと推測した。

「関崎、あんたも言われてない？」

「まあ、麻生先生はあまり気にしないタイプだが」

女子と男子とではやはり、指導に違いがあるのだろう。あまり気にすることはなかった。話を変えてみることにした。

「それよりもだ。静内、夏休みの自由研究だが、どうする」

「そうだね、そうなんだけどね」

空を見上げ、名倉の顔を覗き込み、「どうする？」と尋ねた。

「お前、決めろ」

「私が決めるんだったら、青潟市の歴史オンリーになるよ」

「それでもいい」

実は名倉もあまり深く考えていないのではないか。乙彦にはそんな気がした。

——要は三人で集まる口実が欲しいだけのことだ。

自覚はあった。三人だと、クラスの重たるい人間関係から逃れていられる。藤沖と立村とのこれからを考える必要もなく、しゃべりあえる。しかもそれは三人、事情はそれぞれ違えど同じような部分を背負っているのだ。

——しかし、どうするか。場所をどこにするか。

古川こずえからも仔細を聞かせてもらったものの、乙彦は第三者の立場を崩していないためそれ以上口を出せずにいた。なによりも、藤沖にどう声をかければいいのか見当がつかないし、藤沖自身も乙彦にはあえてそのことについて一切触れなかった。乙彦がどういう立場にいるのかを、藤沖も薄々気づいていないことはないと思うのだが、不自然すぎるほど、触れない。しかたな

く乙彦も、クラスの平和な話題なり期末試験なりに悩むだけとなる。

——期末試験が終わってから、大学のどこか空き教室を使うのがベストだというが、どうなんだ？ もし可能なら、確か雅弘と一緒に新井林たちと話をした、体育器具室みたいな秘密の部屋とか、あのあたりはどうなんだろう？ 中学の校地内だが、卒業生連中がもぐりこむのは問題ないと思うが。

なにせ、問題が問題。自殺の可能性大の女子が混じっている。となると、なんとしても人に気付かれない場所で集わねばなるまい。やはりベストはカラオケボックスだろう。それぞれ別々に集まれば、なんとかなりそうだ。乙彦はそう思うのだが、古川がうんと言わない。

「もっと、安全なところにしたいんだよね。困った。関崎、いい案ない？」

あるわけがない。

できるだけ早急に話し合いを終わらせて、すっきりした気持ちで夏休みに入りたい。

乙彦だけではなく、他の連中も同じだろう。

——立村が俺を連れて行った、「おちうど」とかいう店はどうなんだ？ あいつの顔でただで使えと聞いたが。食べ物もずんだもちとか出てくるし、女子を連れて行くにはいいんじゃないか？

いろいろ、それなりに思いつくところがないわけではないのだが、古川の求める条件には合致しないようだ。

「おーい、関崎、話、聞いている？」

「悪い、ぼーっとしてた」

ぱちんと頭をはたかれた。もちろん静内だ。代わりに説明するのはやはり名倉。

「今、期末試験対策の話をしていた」

「なんだそれは」

すっかり忘れていた。忘れたかったという方が正しい。

「お前は英語科だからわかるだろうが、今回はヒアリングの試験が行われるらしい」

「テープ聞かせて問題解かせるのか」

英語科の授業では頭がアルファベットで埋まりそうなほど、英会話オンリー、日本語なしのテープを聴かされた。もっともそれを理解しているのは一部の生徒たちのみ……立村や片岡クラスの成績上位者……であり、古川や藤沖にはちんぷんかんぷんだとか。もちろん、乙彦もついていけないわけがない。

「まさかと思うが、書き取りやるのか」

「たぶんそういうことになりそう。ラジカセで三回、読まれる文章を聴いて、それを筆記するって。ま、試験でやったよね」

「やったやった」

立村の試験対策情報および問題集、ヒアリングカセットテープでなんとかしのいだ入学試験、貯金が残っていればなんとかなりそうだ。

「でも、評議の人たちに聞くと、とてつもなく今回の試験は、長い文章書く訓練させられるみた

いだよ」

「俺にどうしろという」

家のラジカセで繰り返し特訓するより他に。静内がまた、名倉を促すよう頷く。

「ヒアリング訓練を、やらないか？ と、静内は誘っている」

——誘っている？

全く違う文脈に、なんでひっかかってしまうのだろう。乙彦は戸惑った。静内、名倉の言わんとする意味は簡単なことなのに。

——それにしてもこいつら、やたらと目と目で会話してないか？

最近、例の事件もからんでなかなか乙彦もしっかり三人行動することが少ない。

——別に俺はどうでもいいが。

何か、気になる。ちりちりする感覚を無視して話を聞いた。静内がすぐに説明に入った。

「私一人だと、ヒアリング対策なんてどうしようもないし。だから、三人で徹底的に特訓、しない？ 関崎は英語科だし、そのあたり、慣れてるだろし」

つまり静内は、聞き取り訓練を三人で徹底してやろう、と提案しているのだ。三人で、がみそだ。

「そうか、そういうことか」

繰り返した。

「このままだと、英語の成績どこまで落ちていくか想像つかないし。ひとりでやっても落ち込むし。だったら三人で顔突き合わせて、テープ聴いて、書き取りやって、それぞれ答案交換して点数付け合ったりするのは、どう」

「なるほど、それはいい案だ」

乙彦は手を打った。さっき叩かれた後頭部が痒かった。

「だが、テープはどうする」

「学校で借りられるみたい。でしょ、名倉？」

「そうだ。職員室の手前にヒアリング用テープ置き場がある。そこで名前を書いて借りていけばいい」

そういうところがあるとは知らなかった。やはり名倉という男、只者ではない。

「それならどこでヒアリング訓練するんだ？ どこかからラジカセを借りてきて、教室でやるのか」

「目立つ、ね」

少しだけ静内の表情が曇った。

「妙にガリ勉トリオと思われるのも、なんかさ」

「俺たちのどこがガリ勉だ。最下位から脱出するためあがってるだけだぞ」

「真実をはっきり言うのはやめなよ関崎」

とかいいつつも、静内の穏やかな顔には笑顔が浮かんでいた。名倉ではなく、乙彦に向けられている。さっき感じたいがいがしたものはとっくに消えていた。

「一応考えているのは、視聴覚教室を借りるという手だ」

名倉がまた、ぼそりと呟いた。

「視聴覚教室？」

英語科の乙彦には馴染みある部屋だが、何せ広い。第一、生徒たちに貸してもらえるものなのか。そこまで考えて、はたと気が付いた。

——ここは青大附属だ。中学ですら、生徒会と評議委員会との交流会のために、教室を提供していたんだ。なら高校で禁止するわけがない。

自分はまだ、青大附属の価値観で物事を判断できていない。こういう時、忘れたようにスニーカーの中の小石をかかとで踏んづけたような痛みを感じる。

「へえ、借りられるの」

「調べた。早いもの勝ちで借りられる」

早い。思わず乙彦も力瘤を片腕で作った。

「あの広い教室を三人で使い放題か」

「外部生同士、真面目に勉強したいからだと言えば、麻生先生もいやとは言わないだろう」

「名倉、お前よくわかるな」

担任が別のはずなのに、すでに名倉は麻生先生の性格を把握している様子だ。

「関崎の、合宿早朝ジョギング事件で閃いた」

「結局ここか、俺がきっかけか」

乙彦が声を挙げると静内がまた、笑った。

「善は急げ。職員室、行ってこよう。申し込もうよ」

校門までもう少し。少し夕暮れ色が迫りつつある中、静内が勢いよく生徒玄関に駆け戻っていた。乙彦も追おうとした。

「関崎」

いきなり呼び止められた。もちろん、名倉だった。

「お前も行くだろ？」

「行くが、言っておく」

朴訥な口調だが、きっぱりと。

「俺はお前を応援する。忘れるな」

尋ね返そうと口を開きかけた乙彦に、名倉は静内を指差した。

「行け、追っかける」

静内にはすぐ追いつき、まだ開いている職員室まで駆けのぼった。そそくさと部屋使用許可証をもらおうとする静内を制しながら乙彦は、まず麻生先生の席に向かった。

「テスト一週間前は、入室禁止なんだが、どうした」

ひょいひょいと、乙彦の背中を入り口まで戻しながら麻生先生は半そでシャツを肩まで捲り上げながら尋ねた。

「あの、視聴覚教室を」

いつもらしからぬ静内の口調を意外と感じつつ、乙彦は続けた。

「ヒアリングの訓練を、俺とこの静内と、あと名倉、三人で行いたいので視聴覚教室を借りたいんです」

「まさかと思うが今日はだめだぞ」

「もちろん明日以降です」

なんで静内がそこまで必死にヒアリング訓練に拘るのか、その理由を知りたい気もしたが、あとで聞けばいいことだろう。とにかくここは、名倉ではなく自分がきちんと申しこむべきだろう。曲がりなりにも英語科の生徒なのだから。

麻生先生は腕を組み、なんどかにやにやしながら頷いた。

「外部生同士、いい心がけだ。関崎もやるなあ。静内、中華料理店での出会いもなかなかのものだなあ」

からかわれていると感じたのか、口をつぐんでしまった静内。

「中華料理はおいしかったのですが、それとは関係ありません」

「悪かった悪かった。お前もだんだん、紳士のありかたを学んでいるようで結構だ。さて、待ちに待った回答なんだが、うーむ、少し難しいぞ」

「どうしてですか？」

不意に静内が、力の抜けた声で問い返した。

「だって、評議委員会でも、いろんな委員会でも、申し込めば借りられるって聞いたのに」

「関崎、静内、名倉。実はな」

後ろ手で職員室の戸を締めながら、麻生先生は説明してくれた。

「もちろん視聴覚教室は借りられる。だが、それにはいくつか条件があつてな」

「どんな条件ですか？」

ここらへんを問うのが名倉だった。乙彦も続いた。

「難しいことじゃない。いいか関崎、なんで委員会関連の連中が教室を借りられるか、知ってるか？」

「委員会だからではないですか」

それ以外思い当たる節はない。すぐに名倉が答えを出した。

「人数ですか」

「ご名答。その通りだ。名倉、お前それだけ頭が働くなら、もっとクラスの奴らの前でさらけ出してみろ」

余計な一言で、名倉は黙り込んだ。痛いところを突かれたのだろう。こいつが今、どういう立場にいるのか、深入りはしていないが薄々想像はつく。担任外の生徒とはいえ、顔と名前を完璧に覚えている麻生先生に乙彦は恐れ入った。水鳥中学ではさすがに生徒会副会長だった乙彦を知らない先生はいなかったが、担任から外れた生徒のことを細かくチェックしていた先生はいなかった。

「人数ってなんですか」

「つまりだ関崎。お前たち三人だけで視聴覚教室を使わせるわけにはいかないんだ。電気代もか

かるし、それなりに準備も必要だ。最低でも、そうだな、十人は欲しいな」

「十人も、ですか」

呟いたのは静内だった。完全に落胆の面持ちだった。目立たない顔が、さらに地味になっていくような感じがした。その場に引き止めたい。乙彦はもう一度、確認した。

「十人、集めればいいんですか」

「さらにその面子の中に、視聴覚教室の機器操作ができる奴がいれば、完璧だ。そうだな、そうだ関崎、藤沖あたりを誘ったらどうだ？ お前らならいくらでも、仲間集められるだろ？ それから改めて申請し直せば、すぐにOK出してやるぞ。そうだ、もうひとつ大切なことを言い忘れていた。その日、同じ目的で申し込んでいる奴がいるかどうかにもよる。上級生でもやはり、同じ目的で視聴覚教室を借りたいと申し入れるグループがいるからな。これもまた、早いもの勝ちだぞ。別にビデオを見るわけでないなら、それはそれでOKだ」

悄然とした静内の姿に、言葉もなかった。

——なんでそんなに、落ち込んでるんだ？

乙彦からしたら、そんなに地の底まで突き落とされたような顔して帰るようなことでもないように思う。同じことを名倉も感じていると思うのだが、なぜか寄り添うように静内の側にいる。ひとり、取り残されている感がある。

——どうでもいいんだが、くっつきすぎだぞ。

また、ちりちりと心の奥で焦げる音がする。すでに夕陽もだいぶ西に落ち始めている。

「要は十人集めればいいんだらう？」

「集めれば」

小声で静内の返事。

「クラスで少し、声かけてみるか」

「いいよ。無理しなくて」

「静内、どうした」

「なんでもない」

「なんでもなければそんな落ち込まないと思うが」

やはり女子はわからない。一番感覚が近いはずの静内ですら、時々こんな精神不安定な言動を起こす。そういう時、どう接していいかわからないのが乙彦だった。わかっているのは名倉だった。この差がどうしても挽回できない。

「そんなにヒアリングに燃える理由というのが、俺にはわからんが、クラスで何かあったのか。静内、お前そんなに英語苦手じゃないだろう」

「そういう問題じゃない。ごめん。変だね」

俯いたまま先頭を歩きつづける静内に、また寄り添う名倉。

「とにかく、そんなにやりたいんだったら俺は全力でメンバーを集めるからもう少し待ってろ。英語科だったらいくらでも来ると思う」

「そういう問題じゃないよ。関崎」

ふと、静内が立ち止まった。校門の前で、長い髪をしゃらしゃらと降った。いつのまにか解いていた。

「ろくに話もしたことない子たちと、一緒に集まるだけだったらふだんの補習と変わらないよ。私は、関崎、名倉と三人で、気兼ねなく話がしたかっただけ」

「それだったらいつでもできるじゃないか」

少なくとも乙彦は、いつでも受け入れる準備が出来ているつもりだ。わけがわからない。なぜ、視聴覚教師に拘るというのだろう。

「そうだね、あんたの言う通りだね」

静内はそれ以上何も言わず、歩き始めた。やはりわからないまま乙彦も続いた。名倉が一度、乙彦を振り返り、モアイ像に似た面持ちで頷いた。

——確かに、三人でいることは多いが、語ることは少ない。

静内と名倉、そして自分。

外部生同士という繋がりが異様に濃くなっていくのは感じていた。

時々、乙彦の感覚が青大附属上がりの友だちとずれていることを思い知らされる。

特に、例の事件などは最たるものだった。

乙彦からしたら、いくら可愛がっている後輩の問題とはいえ、そこまで第三者が首をつっこんでいいものか、正論をひっくり返すような古川の言動はどんなものか、疑問を持たずにはいられない。しかし、それが青大附属なのだ。青大附属の中では、乙彦が今まで培ってきた価値観が時々全否定される瞬間がある。足元がぐらついて、こけそうになる。

でも、静内と名倉、ふたりの外部生と語り合う時は、その不安が一掃される。

たとえくだらないギャグやつっこみに徹してる時ですら、その場が「青大附属」であることを忘れさせてくれる。他にも外部生はいるのに、なぜか乙彦にはこのふたりにしかシンパシーを感じなかった。女子っぽい甘い言葉は苦手だが、乙彦にとってふたりが「親友」以上の何かであることは確信していた。

だが、語る機会が、少なすぎる。

その飢え、確かに感じる。

「静内、だったらこういうのはどうだ？」

前の方で、名倉が語りかけていた。相変わらずとつとつとした語り口だが、滑らかだ。

「名前だけ他の連中に貸してもらおうのはどうだ」

「でも、それは嘘になるよ、名倉」

「関崎の知り合いの名前を並べてもらって、それで頭数十人を揃え、その上で申請する。だが当日は俺たち三人だけで、あとの連中は用事があって休む、というのはどうだ」

「そこまでしてまで私も、無理に」

静内が乙彦を振り返った。長い髪が揺れた。夕陽が一杯に髪の毛を照らしていた。

「嘘はつきたくない。俺もそれは賛成できない」

そこまで言い切った瞬間、瞼に何かが横切った。何かの炎の色だった。太陽が燃えるような明るさ、ゆれるような、泣きそうな炎。小学時代のキャンプファイヤー、中学時代のフォークダンス、そこに燃え盛る紅炎。ちろりと、何かが揺らいた。

——嘘をつかなくてもいい！

——頭数は揃えられる。

——いや、何よりも、すべてがこれだと片付くぞ！

三人で語り合うこともできるし、視聴覚教室も借りられる。静内がこれ以上落ち込まずにすむし、もうひとつの問題も……。

「静内、名倉、悪い。いいことを思いついた。少し待ってくれ」

乙彦は公衆電話ボックスを探した。校門を出てすぐ右脇にあるはずだった。ポケットの中には十円玉が少し多めに入っている。緊急時に連絡がつけられるように、電話をかけられるように。こういう時に役立つとは思わなかった。公衆電話ボックスの緑色の受話器に飛びつき、ガラス戸の向こうに静内と名倉のげんなりした表情を垣間見ながら、乙彦は生徒手帳の電話帳部分をめくった。中に何故か、一方的に無理やり書き付けられた、古川こずえ宅の電話番号が記載されている。それを押した。二コール目ですぐに出た。

——はい、古川です。

声は確かに、古川こずえのものだった。明るく軽い。

「関崎だが、古川、今、時間あるか」

——ええ？ 関崎、あんたどうしたの？

明らかにうろたえている。しかしガラスの向こうに静内がいる以上、そんなことを考えている暇はない。息をつかせずに続けた。

「立村と藤沖たちの、話し合いの場が見つかった。視聴覚教室を借りよう」

——視聴覚教室って、意味が読めないんだけど、なによあせって。

「視聴覚教室の準備室に籠れば、いくらでも話し合いができるだろう？ その間、俺たちは視聴覚教室のブースでヒアリングの特訓をやる。別部屋だから、どちらにしても俺たち三人がいる間は、誰にもじゃまされずに話し合いができるはずだ」

まくし立てた後、古川はしばらく沈黙した。乙彦はその間、じっと静内菜種だけを見つめていた。長い髪と、切れ長の目と。側の名倉時也は視界に入っていなかった。耳に入ってくる古川こずえの声が、少し呆れかげんだったことも、気にならなかった。

——「俺たち」って誰のことよ、関崎。

「俺と、静内と、名倉だ」

——そうか、静内さんね。

ひとりごちた古川、乙彦は持っている十円玉をすべて投入口に流し込んだ。

——悪いけど関崎、最初から説明して。

——関崎、事情はよっくわかったよ。とにかくこの件は明日、私と藤沖と、あと立村に話して了解もらうから。あんたが余計なことしゃべらなくても問題ないようにしとくから、わかった？

電話で一区切りつけた次の日、店のバイトを終えた乙彦は朝一番、静内と名倉を待ち構えるため生徒玄関のロビーに立った。最近では早朝の眠気を覚ますコツも覚え、一時間目から二時間目にかけては絶好調のまま頭を保つことができるようになった。たいしたことではない、久田さんが毎朝、缶コーヒーをおごってくれるようになっただけのことだ。珈琲自体はあまりおいしいと思ったこともないのだが、バイトを始めてからは味覚が若干、変わってきたようだ。

八時過ぎ、少しずつ生徒たちが集まってくる。知り合いのクラスメートも、また先輩たちも、わずかずつではあるが増えてきている。毎朝声をかけてくれるのはまず、結城先輩だ。

「おやおや、今日もお早いおめざめとな」

独特の「麻呂様口調」……テレビの時代劇に登場する公家の言葉に似ているので乙彦が勝手に付けた……でにこやかに手を振る結城先輩。もちろん一礼した。

「おはようございます」

「いろいろと苦勞も絶えぬようじゃが、期末試験が終わったらまた、うちに来なさい。いろいろと語りたいこともあるでなあ」

社交辞令か、それとも本心か、そのあたりは不明である。

こういう場合は「本心」として受け取るのが乙彦のやり方だ。

「今年の夏休みは、家族旅行の予定がありません。補習がなければ大丈夫です」

「その言葉、しかと聞き届けたぞよ」

満足げにまた片手を挙げ、結城先輩は脂ぎった頭を指でなでつけながら階段を昇っていった。どことなく麻生先生に似ているように見えた。

——俺の提案はまんざらでもないと思うが。

静内と名倉には仔細を説明できず、怪訝に思われたようだがしかたない。

人数集めと称してまず、藤沖や立村に声をかけ、その他関係者を集めて十人用意し、視聴覚教室を予約する。その上で奴らなりの話し合いをしてもらい、乙彦、静内、名倉の三人でのんびりしゃべりながらヒアリングの特訓をする。一番それが、丸く収まる方法ではないだろうか。

——どちらにしろ、俺たち三人は直接関係ないわけだ。

「関崎、おはよ」

頭を働かせていると、真正面にいつのまにか静内が立っていた。

「ああ」

今日の静内は髪の毛をなぜかふたつ分けしていた。珍しい。乙彦は見たことなかった。

「あれ」

「どうしたの」

「いや、なんでもない」

胃のあたりがちくつとしたのを、気づかないふりをした。話をすぐに始めればいい。乙彦は静内を手招きし、隣に座るよう指示した。半そでのブラウスに細いリボンの静内は、少し堅い顔をしたままその通りにした。

「昨日の件だが、たぶんうちのクラスの連中と合同でやることになる」

「ありがとう」

俯いたまま静内は答えた。喜んでいる風に見えないのが気になる。

「だから、どちらにしても部屋は借りられる」

「ありがとう」

あれだけ昨日は泣きそうな顔して訴えていたのに、どうしたのだろう。もっと喜んでくれてもいいはずなのだが。低血圧で機嫌が悪いのか。

静内はもう一度、頬にえくぼをこしらえた。小さく頷いた。

「ごめん」

「謝るな。俺がそうしたかっただけだ」

はっとした風に顔を挙げる静内。少し火照っているように見えた。このところ夏がぐんぐん近づいて来ているせいか、汗っかきになりつつある自分。やはり静内も感じているのだろう。そうだ、そうだ。

「とにかく、俺に任せろ。それとあと、名倉にも話をしとく」

乙彦はそこまで言い切った。ふと、何かが足りないような感じがした。

「一応、十人集めるんだよね」

「そうだ。たぶん名目上十人揃った段階で、書類を麻生先生に提出してくる。それとだ」

「それと？」

顔を合わせ、なぜか頷きあった。タイミングが合っただけだった。

「俺たち三人は好きなことしてればいい。あとの七人には別の用事があるから、気にするな」

「関崎は関係ないの」

「ない」

断言した。静内の前では、当然だ。

「とにかく俺たち外部生は、なんとしても赤点を逃れて、来年の奨学金を狙わねばならないからな」

「そうだね」

やっと静内に笑顔が戻ったようだった。やはり、友だちとはいえ女子の感情はわかりづらかった。それでもよかった。笑ってしゃべること以上に、静内に望むべきものはない。

名倉を待って同じ話をするつもりだったが、静内がさっさとB組の教室に向かったので、しかたなく乙彦もA組に向かった。扉が開けっ放しになっていた。かすかな風が吹き抜け、さっと汗を払われたような感触が残った。視界に入る前に、古川から声をかけられた。

「関崎、おはよ」

「ああ」

昨日の話題になるのはわかりきっていた。気が少し重いが仕方ない。鞆を自分の机に置き、他の連中に聞かれないよう古川の席に近づいた。野郎連中はまだ到着していない。

「昨日の件はすべて、打ち合わせ完了」

「打ち合わせって、もう終わったのか？」

いや、もちろん古川が「話しておくよ」と口にした以上、手はずを整える気はあると思っていた。しかしまだ一時間目も始まっていないというのに、なんでだろうか。

「当たり前じゃん。あんたから電話が掛かって来て、それからすぐ藤沖と立村に連絡とって、話をつけたよ。時間がないしさ。とりあえず藤沖と昼休み、書類提出してくるよ」

「いや、俺たちのヒアリング練習が目的なわけだから俺が出すのが当然じゃないか」

古川は首を振った。

「違うって。麻生先生はね、視聴覚教室の使い方がわかる奴が二人以上欲しいの。先生が付き添って使い方をあだこうだって教えなくちゃいけない面倒なこと、したくないの。だけど私と藤沖なら、こう見えても評議だし、藤沖があんたのフォローをするために立ち上がったってことにしとけば、丸く収まるじゃないの」

「そういうものなのか」

「とにかくあんたは、静内さんとデートしたいんだってのが顔にありありと描いてあるからね。しかたない、そっちに集中しな。ヒアリングって何聴くんだか。ねえ」

「デートではない。デートとは一対一でするものだが、もうひとり、名倉もいる」

口をぽかんと開けたまま、古川は吐息をついた。

「別にいいけどさ。ま、外部生三人が恋のABC聞き取り訓練をしているんだったら、他の奴らも怪しまないだろうしね。視聴覚教室にはあんたら三人が籠って、私たちは準備室を占拠してればいいってわけか」

「準備室を使うのか」

「そういうこと。昨日あんたが言ってたでしょが」

古川は声を潜めつつもきっぱり答えた。

「あんたたちがお勉強している間に、奥の準備室で私と、立村と藤沖、その他妹ふたりを連れ込んで、決着つけるってことよ。まあ、あんたは詳しいこと知ってるけど、静内さんともうひとり誰だったけ、とにかく外部生にはわかんないもんね。まさかと思うけど関崎、話してなんかいないでしょうね！」

「話すわけがない。関係ないことを話してどうするんだ」

そこまで言ったところで、男子が数人入ってきた。片手を挙げて挨拶をした後、自分の席に戻り朝学習の準備をした。女子と話し込むのはやはり、怪しまれる。

——俺の提案がそのまま通ったな。

あくまでも、古川の判断で、だが。

——だが、藤沖はともかくとして、立村が頷いたのか？

杉本梨南が納得し、立村も不承不承ながら了解したというのは聞いていた。立村も筋を通したということだろう。乙彦からしたら、真実はともかくとして、藤沖との関係が修復されるのを見るのが嬉しかった。女子たちのことは彼女たちに任せるとしてもまずは、立村と藤沖が納得するまで語り合ってほしいと願う。その上でもし、手助けすべきところがあれば、ぜひ乙彦も協力したいと思う。

——静内もこれで、英語のヒアリングでいらいらしなくてすむだろう。

ふと思いが当たったのだが、静内が昨日やたらと不安がっていたのは乙彦と同じく、来年以降の特待生もしくは奨学金制度を狙っていたからではないだろうか。何度かその話をしたことはあった。詳しい家庭事情は聞かない約束なので突っ込んでいないが、乙彦の見た限り静内もさほど裕福な家庭の子女には見えなかった。やはり、本当ならば自分で学費を稼ぎたいという気持ちもあるだろう。できれば奨学金も欲しいだろう。そのあたりで悩んでいるのではあるまいか。とすると、ヒアリングという足枷でパニックを起こしそうになるのも理解できる。成績が悪い方とは聞いていないが、附属上がりの連中と比較すると外部生の自分たちが遅れているのも、認めざるを得ない。

——もしあいつが悩んでいるんだったら、俺も多少は手伝えるということをおあとで言っておこう。数学に関しては名倉に敵わないかもしれないが。

後ろの扉からまたふたりほど教室へ入ってきた。すぐ後ろの席に着いた。藤沖だろう。

「藤沖、おはよう」

言いかけて脇の通路に目を留めた。立村が黙って通り過ぎていった。相変わらず、暑さを感じていないのか薄いブレザーを肩にかけたままだった。藤沖がその姿を目で見送っていたのに気づいた。

思わず口をついていた。

「立村と、来たのか」

藤沖は乙彦の顔を黙って見つめた。いかつい顔は相変わらずだが、気がつけば頬が若干こけている。知らず知らずのうちに心労が溜まっていたのだろうか。毎日顔を合わせているのに気づかないままだった。例の事件について聞かされていなければ、今この瞬間も気づかなかったに違いない。

——どう答えればいいのか。

男子としてここで取るべき態度はいくつかあるが、まず知らん振りして流すこと。もしくはすべて事情を知っていると伝えること。相談に乗るべきか否かについてはもう答えを出している。余計なことを言う気はない。ただ、

「藤沖、俺はお前の味方だ。それ以上、何も言うな」

向こうが言い訳をしないですむような場はこしらえておいてもいいだろう。

「俺は、どちらにしてもヒアリングの訓練をしないとまずい。だから、それだけだ。手続きの方、悪いが、頼む。古川にも話してある」

もう一度藤沖は乙彦を眼力いっぱいに見つめた。にらむ、に近い。

「わかった」

乙彦にかすかに頷いた風に見えたのは、気のせいだろうか。

期末試験一週間を切ったにも関わらず、クラス内はのんびりムードが漂っていた。むしろ水鳥中学にいた頃の方がかなり殺気立っていたような気がする。

給食を平らげ、すぐに古川と藤沖が連れ立って教室を出て行った。やはり高校ともなるとみな大人で、男女とも行動であっても、意味なくひゅーひゅー騒いだりはしない。

「立村」

乙彦は呼び止めた。またいつものように立村は、教室を出て行こうとしていたからだった。いつも立村は、C組に居座っては天羽や南雲と話をしているようだった。もちろんそれを止める権利などないが、今だけはそれも許されるような気がした。

感情を押し殺したまま、立村が立ち止まった。返事をしなかった。かまわず乙彦は続けた。

「古川から聞いたと思うが」

「わかっている」

「そういうことだ」

機嫌が露骨に悪い。しかたない、それは覚悟の上だ。

「とにかく、場所は整えた。あとは関知しない。とことん藤沖と話せ」

「関崎、お前」

何かを言いたそうに口を開きかけた立村を遮った。立村相手にする時はいつも、乙彦が言いたいことを先に言い放っているような気がした。

「話し合えば半分は片付くことだと俺は思う。いいか、立村、お前たちが本音をぶつけ合っている間、俺は一切他の連中を準備室に近づけたりしない。いわば門番だ。俺と一緒にヒアリングをやってる連中にも事情は一切説明していない。だから、もし声が聞こえてもその事情がどういふところから来ているのかはわからないはずだ」

「俺が言いたいのはそういうことじゃない」

「どういうことだ？」

「関崎、お前は、誰の味方なんだ？」

立村の問いに迷ったのは不覚だった。

「杉本の立場が悪化するかもしれないのに、そんなこともわからないほど、関崎、お前馬鹿じゃないだろ？」

カメラの中のフィルムが一瞬の光でおしゃかになったのと同じ状態。

今までずっと撮りつづけていた写真の数々が、一瞬のうちに真っ白くなる。

——立村はあの、例の、葉牡丹の女子のことだけしか考えていない。

乙彦の知っている立村は、おしなべて冷静だった。いろいろなトラブルに見舞われようと、表面上はすべての感情を押し殺し処理するタイプだろう。乙彦に対してもその通りだ。嫌われようとするのも、すべて一緒だ。

だが、その仮面が壊すきっかけはいつも、杉本梨南のこと。乙彦の目の前で、雅弘を殴りつけた時もそうだった。

今回の出来事も、もちろん理不尽な内容ではある。だが、藤沖の再三の頼みを蹴るような冷たい奴ではないはずなのに、杉本梨南がからんできたとたん強気に出る。

そう、杉本梨南がいるからこそ。

そしてその杉本梨南が慕っているのが、信じられないことだが、乙彦自身だということも承知している。どんなに断ったとしても、止めることはできなかった。

乙彦は決して彼女の想いを受け入れることはない。断言できる。

ただ、目の前で苦しそうに訴える立村は、そのことを知らない。伝えていない。

——俺が、彼女のことを横取りしようと思っ込んでいるのか。そんな馬鹿なこと、あるわけない。ないが。

まっすぐ見ていればそんなことありえないとわかるだろうに。だがわからないならこの機会に言うしかない。

「立村、一度しか言わないから聞け」

乙彦は一步近づいた。声は低く、他の連中に聞き取られないように。

「お前が大切にしている相手を奪うつもりは一切ない。俺が今後関わりたいのは立村、お前自身であって、側にいる他の女子たちには関心がない」

「……のことも、そうなのか」

かすれた声で立村が問い返した。

これ以上繰り返す気はなかった。

「その通りだ」

杉本梨南には関心がない。そのことだけはきっぱりと伝えておきたかった。

——そうすれば、立村は俺に余計な気遣いをしないで、やりたいように動くことができるはずだ。

古川の説得通り動くとすれば、杉本は例のおねしょ事件の張本人の罪を許すことにしたという。杉本梨南は傷ついているだろう。今までは乙彦が杉本梨南に関心があるから、あえてセーブしてきた部分もあるだろうが、全く興味がないとその本人が断言した以上、もう気兼ねなく彼女を想うことができるはずだ。その鍵を乙彦は渡したはずだった。

「わかった、ただ、関崎、ひとつだけ約束してくれないか」

立村は唇を噛んだまま、ずっと乙彦に訴えた。ほとんど口が開かない。腹話術のような喋り方だった。

「なんだ？」

「B組の女子とは、彼女の前では、まだ付き合わないでほしいんだ」

——B組の女子？

すぐ思いついたのは静内菜種だった。ここ数日しょっちゅう一緒に行動しているし、誤解されているくらいがあるのだろう。親友ではあるが、立村の考えているような「付き合い」ではない

。話すものにもない。やましきもない。ここまで考えて、はたと気がついた。

——いや、立村がB組の女子と呼ぶとすれば、もうひとりいる。

清坂美里のことだ。

今どうかわからないが、清坂美里とは長い付き合いだったはずだ。友だちづきあいしているだけでも伝えられているが、三年間の繋がりには恋愛沙汰だけで片付くものでもないだろう。友情とはそういうものだ。もしかしたら立村は、清坂が一方向的に乙彦へ話し掛けてきたのを誤解しているのだろうか？ 違う、断じて違う。これも早い段階で否定しておかねばなるまい。乙彦はきっぱり答えた。

「いや、俺は清坂にも全く興味がない。話すこともない」

立村がまた言葉を続けようとしたのを、遮ったのは、今度は古川だった。いきなり目隠しして「だーれだ！」などとガキくさいことをするのはやめてほしかった。

「関崎、悪いけどねえ、例の件、期末試験前日にお願いするよ。立村、あんたもね」

「期末前日？」

乙彦と同時に立村も尋ね返した。

「あんたたち、今回の期末は悪いけど捨てて。期末試験前日しか視聴覚教室が空いてないのよ。表の理由が理由だから、試験前日でも構わないだろうってことになっちゃったけど、その点、許して」

立村をじっと見つめるのは、古川の後ろに黙って突っ立っている藤沖だった。いきなりまた風でカーテンがふくらんでいた。その風もまだ、立村との間には通り抜けないようだった。無言のまま男子ふたりが感情を込めずににらみ合う中、乙彦は古川の立てた予定を黙って聞いた。

「期末試験前日の放課後、たぶん部活動の連中もいなくなるだろうし、いたとしても上の学年の人だけだからさほど噂にはならないよ。あんたたちが視聴覚教室に籠ってA B C Dやっている間に、私と立村、藤沖が彼女たちを伴って準備室に入る。話し合いが終わるまで悪いけどあんた、静内さんといちゃついてOKよ。誰も来ないように見張ってもらえればいいからさ。あと、ひとつだけ」

力を込めて古川こずえは念を押した。

「美里にだけは、絶対に、言うんじゃないよ。ややこしいことになるからね」

——言うわけないだろう？

同じことを古川は立村にも念押ししていた。奇妙なものだ。どうしてそんな秘密裏に行くべきことを他の女子に漏らしたりするだろうか。あえて話す必要が出てくるとすればそれは、その場にいるであろう静内だろうし、全く関係のない清坂にばらす必要があるとは、乙彦には全く思えなかった。立村がまた、ちらと乙彦をまぶしそうな眼で射た。

それから期末試験前日までの準備は、すべて藤沖と古川の手で執り行われた。

本来だったら乙彦が言い出しっぺなのだから、当然仕切るべきところなのに、正直納得がいかなかった。藤沖にも、もちろん古川にも文句を言うものの、

「いいのいいの、ここは附属上がりの私たちがやった方がうまくいくんだから」

「そうだ、お前は何も知らないだから、安心しろ」

——安心しろとはどっちのことだ。

乙彦は不承不承ながらも、そのまま任せることにした。

なにせ、事情が事情なのでどんなことがあっても他の生徒、および教師たちにばらすわけにはいかないのだ。乙彦も自分がポーカークフェイスを保てない性格だと自覚はある。もし麻生先生あたりに「どうしていきなり、藤沖と古川と、中学の女子たちが混じるんだ？」みたいなことを聞かれたら、まずい。嘘をつけない乙彦の顔色を見破るだろう。

——仕方ない。任せるしかない。

古川が話してくれた通り、麻生先生には「外部生および後輩たちの試験対策を、内部生の自分らが協力してやりたい」というメッセージを伝えたのだという。もともと藤沖が乙彦を面倒みていたことは承知しているし、さらに古川が立村と藤沖との関係を心配していたのも伝わっていたらしい。全く問題なくことは進んでいた。

「関崎、いい友だち持ったな」

麻生先生が乙彦に声をかけてきた。春から脂ぎったその額が、油をひいたフライパン状態に陥っている。やはり、夏なのだ。

「藤沖たちなら、視聴覚教室の使い方もわきまえているしな。まあ、この機会に顔を突き合わせて勉強するのもいいだろう。三年の後輩たちも、それなりに高校の授業内容を知っておくきっかけにもなるしな。いいだろう」

——本当のこと、全く気づいてないな。

ほっとする反面、罪悪感が溢れる。ばれないうちに乙彦は頭を下げ、さっさと席に戻った。

立村の様子をまた伺った。

「立村、お前、今日の放課後、来るだろう」

念のために尋ねてみた。無表情なのはいつものこととはいえ、心なしか唇がまっすぐ一直線に結ばれているように見えた。さすがに七月に入るとブレザーは着られない。ネクタイだけはしっかりしめている。乙彦を見上げ、こくりと頷いただけだった。

「ならいい、わかった」

額に手を当てるようにし、髪の毛をかきあげた立村に、乙彦はそれだけ伝えた。

——あいつは決して約束を破ったりしないだろう。

杉本梨南のためならば、決して。

予定でいくと、まず藤沖と古川がヒアリング用のテープを十本ほどと、鍵を用意してくれることになっている。視聴覚教室の場合、それぞれふたり席が用意されているが、隣同士は厚い仕切りで遮られているので隣で何をしているかは基本として見えない。机にはカセットレコーダーとヘッドホンマイクが常備されていて、授業の際は録音用のテープを持参し、そこに吹き込む。発音練習の際によく用いる。

最初はてっきり、ラジカセを持ってきて三人で書き取り練習をするものかと思っていたのだが、藤沖に言わせると「あれだけ立派な設備があるのに使用しないのはもったいない」とかで、「教師側の机からヘッドホンに直接流せばいいだろう。テープはたくさんあるから、切れたらその都度入れ替えればいい。関崎ならすぐ使い方もわかるだろう」

確かにその通りだ。実際ヒアリング訓練を予定しているのは乙彦のほか、静内と名倉だけだ。あとの連中は教師席真後ろに用意されている準備室に、壁一枚隔てる形で籠る。もちろんそこですべての話し合いを行う。

「まあ、関崎はこれ以上、何も言わないでいいよ。あとは私たちがさ、片付けるからね」

古川の冷静な言葉に、乙彦もそれ以上考えるのをやめた。

期末試験まで、あと一日。実はほとんど準備が進んでいないなんて、なんてさまだ。

六時間目の授業が終わるチャイムが鳴った。もともと試験であろうがなかろうが、ぴりぴりした雰囲気のない英語科だが、この時だけは違った。少なくとも乙彦には、関係する連中の表情が若干こわばっているかのように見えた。もちろん、自分もそうに違いない。

「藤沖、じゃあな、先行くからな」

他の男子たちが軽く声をかけていく。藤沖も手を挙げて答えた。

「こずえ、ねえねえ今日、一緒に図書館で勉強してかない？」

危険人物、清坂美里が廊下で古川に話し掛けている。髪の毛をまたふたつに結わえている。あの髪型を見ると、乙彦はむしょうにもやもやしたものを頭の中に感じる。

「ごめん、今日はさ、藤沖たちとちょっとクラスのこと打ち合わせあるんだ」

「えー、試験前なのに？」

「そうなのよ、面倒なクラスよねえ」

知らん振りして、乙彦は荷物を片付けた。斜め前の立村はまだ席についたまま、ぼんやりと正面を見つめている様子だ。廊下からはさらに清坂の食い下がる声が聞こえる。

「関崎くんも？」

「そりゃ、規律だからね。ちょっといろいろとA組同士で準備があるのよ。またさ、帰ったら電話するよ」

——しかし女子というのは。

乙彦は耳をそばだてながらつくづく思った。

——あれだけ毎日しゃべっていながら、今度は電話でも話するのかよ！

清坂との話も一段落ついたようで、古川は教室に戻ってきた。まず立村の席に向かい、なにか耳打ちした。立ち上がった立村は乙彦に静かな目線を向け、紙のようなのっぺらぼうの表情で教室を出て行った。さらに近づいてくる古川。乙彦は待ち受けた。真後ろには藤沖もいつのまにかいて、ふたりの評議委員に包囲されるかっこうとなった。

「ということで、関崎」

「ああ」

「今から、テープ持ってくるからさ、先に視聴覚教室行ってな」

「わかった」

「あ、それと、静内さんたちとは別行動しなさいよ」

顔を見合わせて藤沖と頷いた。

「美里がまだその辺、うろうろしているから」

「この前も話したがそれは関係ないだろう」

「ばかだねえ関崎、何言ってるのさ！ 今ここで説明してる暇ないから、さっさと行きな！ それと藤沖、あんたは」

言葉を切った。

「わかっている」

「じゃあ、さっさと行きな！」

教室を飛び出したのは、藤沖の方が早かった。

「脱兎のごとく、だな」

思いついた言葉をぽろりと呟く。古川も受けた。

「そうだね。理由はともかく、本気だね」

せっかく静内に、自分なりの英語限定山掛けノートを渡そうと思ったのだが、空振りであつてもおもしろくない。以前、水鳥中学にいた頃は雅弘に全教科用意してやったものだった。雅弘が英語を特に苦手としていたことを知っていただけに、かなり綿密にこしらえたつもりだった。あの雅弘が理解していたのだから、静内なら一発でわかるだろうに。

——どうせ視聴覚教室で会うだろう。

気にはなるがあえて知らん振りを通した。三階まで階段を昇った。途中の踊り場で二年生と顔を合わせ一礼した程度、あとはさほど生徒もいなかった。いつもなら音楽室からもれ出る吹奏楽部の練習曲でうるさいのだけれども、それすらなかった。もちろんざわめきは葉を揺らす風のそよぎで消えることはない。窓もほとんど開け放たれている。しかし、歩いていくにしたがって廊下には深い影が濃く浮かび上がってきた。じんわり、汗が滲んだ。

——藤沖は何も言わなくとも、なんとかするだろう。問題は立村だ。

いきなり眠気が目元に沁みしてきた。乙彦は片腕をぐるっと回し、駆け足で視聴覚教室に入った。すでに静内と名倉が教師席のまん前に陣取っていた。名倉が立ち上がり、

「お前、ここに座れ」

いつものようにぶっきらぼうに指示を出した。静内の右隣だった。名倉は乙彦の真後ろに座り

なおした。

「テープは古川が持ってくると話していた」

「そうなんだ」

あっさり答えた静内は、戸を指差した。

「開いてたから入ったけど、誰もいなかったよ」

「集合までに時間がかかるらしい」

なぜ、とは誰も問わなかった。乙彦も伝えていなかった。

名倉が立ち上がり、乙彦の机にセットされたヘッドホンを取り上げた。いきなりかぶせてきた。遮断はされない。音はしっかりと聞こえる。

「これを食え」

どう見ても朴訥な名倉が自費で購入してきたとは思えない、花柄の菓子箱を机に置いた。ご丁寧にピンクのリボンまであしらってある。規律委員たる乙彦には、教室内での飲食禁止を破る気はないのだが、友だちからの土産をもらうという当然の感謝はある。

「ああ、ありがとう。どこか行ったのか」

「もらった」

静内にも箱を見せて、目で尋ねた。言葉はなくにやにや笑う。説明してくれた。

「名倉の彼女が送ってきたんだって。手作り」

「手作り？」

それ以前に名倉の彼女とは誰なのだ。憧れの女子が青大附属中学から医者養成専用の高校に進学したとは聞いていた。しかし、付き合っているとは聞いていない。

「あいつは、クッキーを焼くのがうまい。まじでうまい。食え」

「俺は規律委員だからここでは食えない。が、喜んでもらう。ありがとう」

「静内にも渡したぞ」

手作りクッキーとは、なかなかしゃれたことをする女子である。だがバレンタインデーやホワイトデーの季節とはまたずれているようだが。静内がすぐに注釈を入れた。

「名倉の誕生日プレゼントよ」

「お前、七月生まれか」

肯定も否定もしなかった。静内の手元を覗き込むと、すでに箱を開けて手をつけた後がある。クッキーはハート型、星型、∞の形、その他いろいろ。確かに手が込んでいる。しかも分量がはんぱではない。ぎっしり、一部のクッキーが壊れるくらい詰め込まれている。

「お前、先生に見られたら呼び出し食らうぞ」

からかうつもりで声音を使うと、静内も言い返した。

「今、これからのことが、十分校則違反でしょう」

——まあ、確かにな。

しつこいようだが、事情が事情だ。だからあえて何も二人に告げなかった。

しかし、今の静内の口調からして、もしかしたらこれからの集まりに関する事情を知っているのではないだろうか。確認してみた方がいい。

「静内、お前、今日なんでうちのクラスの連中が名前を貸してくれたのか、聞いたのか。たとえば古川とか」

静内は首を振った。今日はロングヘアを一本にまとめた、いつものスタイルだった。ブラウスの襟元にちらりと、銀色の細いものが覗いた。もちろん校則違反だろうが、ここで責める気はない。

「A組の人とはあまり話さないよ。ただね、逐一教えてくれる人がB組にはいて」

「クラスの女子たちか」

名倉が顔をしかめた。ということは名倉も事情を知っているということか。

「事後申告で申し訳ないけど、知ってる」

「中学女子の、一件ということもか」

静内と名倉は大きな溜息を吐いた。それ以上の答えはなかった。

——なんだ、知ってたのか。

一番長い溜息を吐いたのは乙彦だった。一瞬重たくなりそうな空気が、すっと柔らいた。

「もちろん、そのことは誰にも言う気ない。けど、関崎、事情を無理に隠さないでもいいから、安心して」

名倉も口にクッキーを詰め込みながら、「そうだ」と呟いた。

「悪い」

「けど、私たちには全く関係ないことだから、今日はとことんヒアリングやろうよ」

「そうだな」

乙彦はノートを取り出した。静内と名倉ふたり分用意したコピー紙二枚を挟み込んであった。

「これが俺の考えた、明日の英語の山かけ答案だ。使え」

「サンキュ」

ふたりとも合掌して受け取った。何か仏様にされてしまったような気がする。

とはいえ、テープが届かないと始めようがない。なぜこの部屋でのヒアリングについて、静内がなぜ拘ったのか、正直わからずじまいではあるが、乙彦のとなりでとりあえずは機嫌よさそうなのでよしとしよう。

すぐ側の扉が開いた。思わず振りかえってしまった。

——まずい、知らん振りすべきだった！

乙彦が後悔したのは、次の瞬間だった。

杉本梨南が立村を背に、ひとり、立っていた。

——俺はどうすればいいんだ。

立村も無表情だが、さらに上をいくのっぺらぼうな女子。

頭のとっぺん近くまでポニーテールに結い上げ、白いショールのようなものを羽織っていた。

制服の形がさすがに高校のものとは異なっている、灰色と茶色を混ぜ合わせたような奇妙な色合いをしている。しかし、変わっていないのはその眼差し。にらみつけて、相手を寄せ付けないような瞳は、乙彦も苦手だし、他の男子はもっといやなものだろう。

目と目が合い、逸らすタイミングも逃した。

ここでいきなり顔を背けたら無視することになってしまう。

かといって、事情を知っている乙彦が明るく「こんにちは」と呼びかけるのも、何か妙だ。

後ろで静内と名倉も、杉本梨南を見つめている。

——なんとかしてくれ、立村……。

さすがに杉本梨南よりは背丈のある立村が、耳元に何かを囁いた。顔をそっと寄せるようにして、入るよう促した。同時に乙彦へ首を小さく振り、頷いた。

「なんだあいつ」

「うちのクラスの立村だ」

「あの人が」

静内が小声で何かを確かめるよう呟くのが聞こえた。立村のことを、隣のクラスの静内が知らなかったとは思えなかった。

杉本の後ろについて、準備室へ向かった。杉本梨南はいきなり一礼をし、そのまま俯いた。顔をそっと両手で覆うように、まっすぐ教師席の真後ろを歩いていった。側で囁きつづける立村の呟きが、まん前の席にいる乙彦にははっきり聞き取れた。

「大丈夫だ、杉本」

手を触れることはなく、ただ囁くだけ。しかし響いた。風のざわめきすら消すことはない。

「関崎にはまだ、付き合っている相手はいない。あの人は、関係ない人だから」

言葉が途切れると同時に、乙彦に今度は、凜とした感情の籠った瞳を向けた。

ぽかんとしている間に、ふたりは視聴覚準備室へ吸い込まれていった。

隣で黙ってクッキーを食っている静内を伺った。

後ろで慥然としたまま両腕を組んでいる名倉に振り返った。

手元には、重たいクッキーがリボンのかかったまま、残っている。

「関崎、聞いていい」

「どうした」

静内はクッキーをそっと机の上に置いた。

「今、『関係ない人』っていうの、私のことかな」

言葉に詰まった。そうだ、立村の言葉を聞いていたのは、乙彦だけではなかった。黙るしかなかった。静内も俯いたまま指を絡めていた。

——何で立村の奴、静内の前でわけのわからんことを言うんだ！

九十パーセント、事実ではある。乙彦には付き合っている相手がいなし、静内も現段階では

そういう相手ではない。ないが、露骨に「関係ない」はないだろう。

現に、静内の様子は、女子そのものの落ち込みだ。

「わかった、立村にはあとで文句を言っとく。元気出せ」

「いい、言わないで。それよりも」

また途中で遮られた。後ろの扉がまた開いた。懲りたので振り返りはしなかった。そのまま静内を見たまま乙彦は、クッキーを一枚所望した。

見ないようにしたつもりではあったが、視界の隅にどうしても入ってしまう。

まず、藤沖とその影に隠れるようになかった。女子がひとり。

顔は見ないように努力したつもりだ。髪にヘアバンドが刺さっている。おかつぱ髪だった。

その後ろに、古川が付き従っていく。うまく隠すように覆い被さろうとしている風だったが、準備室に入る前に気がついたのか、すすっと乙彦の座っている席に近寄ってきた。露骨に敵愾心露わにしている名倉を気にせず、ちらとたたみ終わった紙箱を見つめた。乙彦に十本ほどカセットテープを渡した。一本だけ残し、素早く教師机のカセットにセットした。また戻ってきた。

「これ、もしかして、彰子ちゃんの手作りじゃん！」

名倉に話し掛けている。反応をあえてしないと決めたのか、名倉は無視している。

次に乙彦の手元を、カセットテープごと見下ろした。

「そういえば南雲も持ってたよ。けどなんで関崎が持ってるわけ？」

最後に静内の机前に立った。まだ動揺が収まらないのか、言葉が出ない静内。おそらくだが、静内は古川タイプの女子が苦手なタイプに違いない。不必要な下ネタなどぶつけないでほしいと祈った。

「彰子ちゃんの手作りクッキー、美味しいんだよ！　ひとつ、ちょうだい」

静内が返事を躊躇している間に、ひとかけら摘んだ。あっという間に口に放り込んだ。

「名倉、彰子ちゃんに連絡つくようだったら伝えといて！　私たちも美味しくいただきましたって！　うわーラッキー！　彰子ちゃんってすごい性格いい子だったんだよ。きっと寮生活のストレス解消のために、作ってみんなに送ったんだね。あの色気づいたすい君が襲ってないといけどね。じゃあ、悪いけど、よろしく！」

ほぼ九割、意味不明。

三人、ただあっけにとられたままだった。下ネタなしでノックアウトされることは、珍しい。手元のカセットテープが到着したのだから、すぐにヒアリングの訓練をしなくてはならないとわかっているのだが、古川こずえの強烈な一撃にぶった押されたままだった。

「何で俺と奈良岡のことを知ってるんだ」

返事しようのない問いを名倉が呟いた。そんな乙彦にもわからなかった。

「とにかく、まずは静内のクッキーを全部食おう。それから、やろう」

「えー、私のを全部あんた平らげる気？」

おどけた風に静内が声を挙げた。

「お前には俺の分を全部やる。それでいいか、名倉」

「異存はない」

まだたっぷり残っているクッキーを、三人で摘んだ。さくさくしていて、言われる通り美味しい。無言で口の中に放り込んでいるうちに、やがて準備室から激しい泣き声が響き渡ってきた。女子の声だった。何か物を言っているようだが、聞き取れなかった。

「ごめんなさい、だって」

静内だけが聞き取ったらしい。それが合図だった。三人、そのままヘッドホンを耳に当てた。乙彦が教師席に向かい、藤沖から教えてもらったとおりにボタンを押した。席に戻りヘッドホンを当てるほんのわずかな間に、静内の言った通りの声が響き渡った。

——私、私、お願いします、ごめんなさい。助けてください。

杉本梨南の声でないことだけは、確実だった。

乙彦はヘッドホンから流れてくる英語の会話をじっくりと耳に入れた。すぐに謝る声は耳奥で打ち消された。そうでなくてはならなかった。それが、藤沖と立村とを対話させる最大の条件だったからだった。

騒ぎは視聴覚準備室の中に封印されている。

——聞いてはならない。

乙彦は意地でヘッドホンから流れる英会話を聞き取ろうと努力していた。

いったんテープが最後まで回りきると、すぐに立ち上がりカセットデッキでひっくり返す。

うっかり聞いてしまうんでないかとひやひやしたが、すでに隣の部屋で声は潜められている様子で、それ以上約束を破ることはなかった。

三人の間でも、暗黙の了解でヒアリングのこと以外の会話を控えていた。

静内がかすかに笑って書き込んだ英語の答案を乙彦に渡す。乙彦は真後ろの席の名倉に、名倉は静内に。それぞれ解答集を用意して、赤ボールペンでチェックする。

「静内、俺が言うのもなんだが、お前、もう少し英語勉強したほういいと思うぞ」

返しながら乙彦は正面から伝えた。

「苦手なのよしょうがないよ」

「半分以上、書き取れてないだろ」

苦言だが誰かが言わないとしょうがないだろう。実際乙彦が赤を入れた静内の答案だが、全くといっていいほど、文章の書き取りが完璧に行われていない。主語、述語まではなんとか拾えているのだが、それ以上のセンテンスになると全く聞き取れなかったらしく、単語の頭文字をかるうじて書き取るのみ。これが本番だったら、断言してもいいが赤点どころの騒ぎではない。

「俺も人のこと言える身分じゃないが」

乙彦は名倉から渡された答案をちらっと見た。ほぼ百パーセント書き取ったつもりだったが、かなり単語のスペルミス、およびケアレスミスの嵐だったようで、五十点台。自分も本当は静内相手に説教なんてしている暇なんてないのだ。

「静内、お前そんなに英語苦手だとは思わなかったが」

「頭にあることを書くだけなら平気。聞き取るのが苦手なのよ」

「だからあんなにヒアリング特訓にこだわったわけだな」

泣きそうになりながら必死に静内が、麻生先生に向かって視聴覚教室を借りるべく頼み込んだのはおそらく、自分の弱点克服を切実に願っていたからだろう。そうとしか思えない。

「名倉、それにしてもお前は何点だ？」

確か静内が点数をつけたはずだ。最初に静内をちらっと見てから尋ねると、

「ほぼ満点」

「九十八点だ」

名倉はてらいもなく答えた。こいつはやはり、秀才なのだ。どうみてもそうは見えないが。

「お前、どういう勉強している？」

「ラジオの英語講座を聞いている」

「それだけか？」

「それだけだ」

信じられない。もっと何か特訓しているに違いない。静内がつんつん名倉を指差して、
「名倉、例の彼女から教えてもらってる？」

「教えてもらってはいない。ただ、参考書や問題集、どういうものを使っているかは聞いた」

もう半分以上食べ終わった、やたらとバターのきいたクッキー。乙彦はつまんで口に放り込んだ。外部生同士、成績の差をさほど感じることは今までなかったのだが、期末試験前日になり初めて気づく、それぞれの差。静内が手抜きをするタイプの女子ではないと知っているし、おそらく単にヒアリングが苦手なだけなのだろう。しかも、乙彦のように英語科で特訓しているわけでもなければ、名倉のように例の彼女からの協力を得ているわけでもない。青大附属において、勉強という点では頼るものがないわけだ。

——このままだとやはり、まずいだろう。

別に人のことだ、おせっかいだとは思う。思うのだが、

——俺も立村に受験の時、いろいろ協力してもらってここまで来たんだ。今度は俺が静内に、立村みたいなことをしてやる番かもしれない。

勝手に使命感が湧いた。

「静内、俺の提案だ。ぜひ呑んでほしい」

ついでに、名倉にも。言葉には出さず頷きあった。

「自由研究の時間をもう少し増やして、俺とヒアリング訓練をやろう」

「関崎、と？」

いったん息を飲み、静内の表情が空になった。

「名倉、お前ももちろん来るだろう」

「来るが」

「だったら話は簡単だ。名倉、お前が聴いてるラジオの英語講座のテープ、録音して毎日持ってこい。ラジカセは俺が持ってくる。どこかの公園か図書館かで、やろう」

同じくぽかんとした名倉は、突然唇を震わせた。笑っているようにも見える。いきなり乙彦のクッキーをまとめて三枚持ち去った。

「了解した」

ちらっと静内に頷いてみせた。だからどうしてこのふたり、やたらと意思を通じさせているんだろうか。乙彦の知らないところで、やはり何か語り合っているに違いない。

——何話しているんだろうか。

「関崎にしごかれるわけよね」

「でないと、まずいだろう？」

「了解。よろしくお願いします」

ふたたび静内は頬にえくぼをこしらえた。

その表情が糸として乙彦の何かをひっぱった。きゅうと、前かがみになりそうだった。

準備室の戸が開いたのは、その直後だった。

視聴覚教室は窓を開けっ放しにしていたのでさほど暑苦しくはなかった。あったかい、そんな感じだった。しかし準備室から固まった熱気の雲みたいなのが流れて来て、さすがに乙彦も振り返った。人間の汗が濃縮されたようなにおいがつんとした。臭い。

最初に出てきたのは藤沖だった。やはり壁際にヘアバンドをした女子を隠すようにしたが、乙彦と目が合い立ち止まった。

「関崎」

「ああ」

「期末試験が終わるまで待ってくれ」

「何をだ」

問い掛けてみて愚問と悟った。藤沖の性格上、黙りっぱなしで通すわけもない。すぐに乙彦は答えた。

「わかった」

額には麻生先生ばりの汗が流れていた。藤沖が身体を斜に向けて女子を促し、鞆をぶらさげたまま外に出るのを乙彦は見送った。どうしてもその女子の顔を見てしまったわけだが、わりとさっぱりした、うりざね顔の品のある雰囲気とそのしでかしてしまったこととのギャップに戸惑った。

——さっき泣いていたのが、あの女子か。

生徒会役員というだけなら素直に「ああ」と納得するが、布団に派手な地図を描いてしまいおろおろしてしまうようなタイプには見えなかった。

——藤沖は、きちんと立村と話をしたんだろうか。

乙彦が一番気にしていたことを、本当は確認したかったのだが。

次に現れたのは、予想に反して古川こずえだった。

静内が慌てて机に向かい直している。気を遣っているのだろう。まあ、この件に関してはそうしてもらった方が助かるのも事実だ。古川が乙彦の通路脇に立ち、小声で報告してきた。

「終わったよ、一通り」

「無事、か」

「まあ無事に、ね」

後ろを振り返った。相当暑かったのだろうと推測する。スカートを両手で心持もちあげ、ぱんぱんと揺らした。もちろん見せるようなみっともない真似はしなかった。

「ご協力、感謝」

「立村たちは？」

唯一中に残っているのはあのふたりのはずだ。古川は頷いた。

「話をしているよ。悪いけどもう少し残っててよ」

「俺たちが、か？」

「当たり前じゃないのさ。ま、これで無事にことが済んで、めでたしめでたしよ」

ちっともめでたしめでたしとは思えない目つきで古川は乙彦の持っている残りのクッキーをく

すねた。もう残りは一枚しかない。

「ほんと彰子ちゃんのクッキーは美味しいよね。それにしてもあんた、ずいぶんお勉強はかどったようだねえ。明日の試験対策万全？」

「万全とは言えない。やはりヒアリングは難しい」

「あっそう。もう私、今回の期末捨てる覚悟だからどうでもいいけど。あんたのことだから今回は満点狙ってるんでしょ」

「もちろん毎回満点を狙うつもりで受けている」

生真面目に答えたように見えたのだろうか、古川はお得意の溜息を吐いた。

「あんたの性格だったら、どういう事件の当事者になっても、試験では全力尽くすんだらうね」

当たり前のことをなぜ聞くのだろう。乙彦は片手を振って出て行く古川を見送った。少なくとも古川に関してはそれほど、気兼ねなく眺めることができた。

「関崎」

「なんだ？」

古川が姿を消すのを待つように、静内が顔を挙げた。

「英語科の人たちとは、私たちみたいな勉強会やったりしないの」

真顔で問い掛けてきた。素直に答える。

「しない」

「なんで？」

「授業で顔を合わせて、休み時間に情報交換する程度だ。みな、苦労しないでやれる連中だ」

よく考えると藤沖と立村以外と、勉強方法について語り合ったことはない。ヒアリング対策など、静内が言い出さねば考えることもなかったらう。いや、名倉を含めたこの三人の話題がどうして学業中心になり、しかも楽しく盛り上がってしまうのかが不思議だった。他の奴からみたら異様かもしれない。

「そう」

「人のことより静内、お前は明日のヒアリング試験のことをもっと真剣に考えろ」

「なによ、いきなり偉そうに」

「俺と同じく奨学金を狙うんだったら、今からやらないとまずいぞ。俺は二年以降の奨学金を狙うからな、お前もそうだらう」

後ろでまた笑いを噛み殺すような声がする。名倉の奴、いったい何を考えているのだろう。妙にもやもやする。帰り、聞き出してやろう。

「奨学金か、ほしいよね」

「茶化すなよ」

静内は否定しなかった。その後黙って、乙彦の返した答案に目を通していった。指で間違いの印がついたトメハネの赤を、押していった。

見るべきか見ないべきか迷った。

残りの二人はなかなか現れなかった。

話し合いが長引いているのだろうか。

古川は無事に話がついたと言った。だが古川の視点はあくまでも、第三者としてのものだ。

あれだけ激しく泣きじゃくった女子がいた以上、何も起こらずに片がついたとは思えない。

それに、「話がついた」のは杉本梨南と渋谷という女子のふたりだけかもしれない。乙彦の望んでいる、立村と藤沖との間の問題はどうかだっただろうか。それが片付かない以上、問題は解決したとは言わない。少なくとも乙彦の中では。

食い入るように準備室の出口を見つめた。会話が聞こえてきた。聞かないふりはできなかった。はっきりと立村と杉本梨南との声を聞いた。姿は見えないが、はっきりと棒読み口調の音が聞こえた。

「立村先輩、先ほども申しあげましたように、私は平気です」

「本当に、いいのか？ 何度も聞くが」

「私が真実しか述べていないことは、私が一番よく知っております。ですからあの頭の悪い男子たちや、話をゆがめようとする生徒会の女子たちが何を言おうが、私はまっすぐ真実を貫いて参ります。先輩にこれ以上、ご心配いただくなくても結構です」

——科白みたいな喋り方だな。

いつぞやの、葉牡丹を手渡された時の告白科白を思い出した。あまり楽しい記憶ではない。

立村が弱々しくも、叫ぶように呼びかけている。

「これから周りが、誤解を煽り立てても杉本は言い返す権利がなくなるんだぞ、それを受け入れられるのかよ！」

「はい、かまいません」

全く揺れることなく棒読みの科白は続く。

「私は、あの方が信じてくださっていることを知ってます。それで十分です」

「高校の奴らが杉本を信じて、中学の奴らが嘘を信じたらどうするんだよ。だから俺が言った通りに」

言いかけた立村を、杉本は遮ったようだった。

「完璧な方に私の真実を認めていただけなのです。それ以上何も必要ございません」

教室中にその宣言は響きわたった。さっきの泣き声とはまた別の次元で、くっきりと焼きついた。そして現れたのは、ポニーテールに結い上げた杉本梨南の真正面からの姿だった。

ふたたび乙彦と顔を合わせた。同じくふたたび、後悔した。

——なんてこっち見てるんだ……。

二回も同じミスをやらかすとは、学習能力なし。あやうく自己嫌悪に陥りそうだった。

杉本梨南は乙彦をまた、にらみつけるように見つめた。

何度されても慣れない、その瞳。

突如、口が丸く動いた。身体が硬直したように、まさに人形のような動き方で歩を進めようとしている。運動会で行進時、足と手が一緒に出るかのようだ。乙彦に深く、一礼をしたが急にまた顔を覆った。入ってきた時と同じように目を隠してジグザグに戸まで歩いていった。なぜ、いきなり顔を隠すのか。照れ隠しというには少し、奇妙な仕種だった。恥ずかしいというよりも、顔を押しさえることに決めているというような機械的動作だった。

——なんなんだ、いったい。

人間というよりも、ロボットが歩いていくのを眺めたようだった。

杉本梨南という女子の特徴を知らないわけではないのだが、何度接してもやはり人間らしい雰囲気を感じられず、戸惑うばかり。一度は恋心を告白されたのだから乙彦も、もう少し別の感情が動いてもよさそうなのに、なぜか「人間」かつ「女子」への興味が湧かない。杉本からは「好意」ではなく「興味」をもたれているだけのような気がしている。そういう場合にどう反応すればいいのかわからない。

姿が消え、ほっとしたのもつかの間、隣と後ろの席で同じく見送っていた静内と名倉に、返す言葉もなかった。

「関崎、『あの人』って」

静内が小声で問おうとしたが、乙彦は拒否した。

「俺は『完璧な奴』じゃない。だから、違う」

乙彦は立ち上がった。

「悪い、様子見てくる」

立村ひとりならば乙彦が様子を見に行っても問題はないだろう。改めて開け放しの準備室に足を踏み入れた。大量の電子器具とシンセサイザーの器具のようなボタンだらけの機械と、大量のビデオテープと。押しつぶされそうな圧迫感の中、やはり立村は床に座り込んでいた。脇に鞆を置いたまま、ひざを抱えていた。

「立村、終わったか」

黙って立村は乙彦を見上げた。カラオケボックスの際と同じ仕種だった。

「話し合いは、できたか」

もちろん乙彦の意図することは「藤沖と」だった。頷いた。

「ならよかった」

「よくない」

吐き出すような口調で、横を向き立村が言い捨てた。

「嘘をつかせて、真綿で首を締めるような真似して、これが話し合いなのかよ！」

「お前さっき、終わったと言っただろ？」

「不平等条約を呑まされただけだ」

「不平等条約とは日本とアメリカのあの条約か」

「そんなこと違うのはわかっているだろう」

怒る気力も無くしているかのようだった。半そでシャツが完全に汗で透けていた。顔色は紙のような白さそのもの。すべてのエネルギーを使い果たし、立てない状態と見た。

「関崎、お前はどうかんだ？」

いきなり問われた。

「お前だけは、杉本を信じてやってくれたか？ 俺が知っている情報はすべて両サイドから提供した。その情報を比べてみて、やはり、杉本の言い分が正しいと判断したか？」

——判断するものにも。

乙彦は首を振った。さっき自分が静内に向かって答えたものとおなじことを答えねばならなかった。

「俺は、信じるものにも、事情を理解できていない。だから、彼女が思っているように、彼女の真実を信じているわけではない」

決して、立村以上に杉本梨南の身の潔白を信じているわけではない。

ただ、知らないだけだ。

杉本梨南が思い込んでいるような「完璧」な男では、ない。

杉本梨南が見ている関崎乙彦は、「完璧」でかつ「杉本を理解し、信じている」男子のはずだ。違うのに。その二点を備えているのは今、準備室の中でひとり取り残されている立村ひとりしかいないのに。

乙彦は立村と同じ目線で座り込んだ。

「立村、お前は信じていると伝えたんだろう。それで十分じゃないか」

一瞬、立村の瞳が大きく動いた。ぬめったような光がゆらいだ。

「十分なわけないだろう！」

かすれた声でそれだけ答え、立村はよろりと立ち上がった。立ちくらみで壁にぶつかり頭を打っていた。

「お前大丈夫か？」

「痛いだけだ」

手の甲で目を拭い、鞆の柄を握り直し、立村はそれ以上乙彦を振り返らず出て行った。

乙彦も追わなかった。男子同士、これは鉄則だった。

涙が出るほど悔しい時は、自分で自分を解決すること。それを見守る。

親友と思える男への、当然の礼儀だった。

——こんなかっこうで膝をかかえたまま、立村は何を考えていたのだろうか。

——本当に、すべてことがすんだのか？

疑問は残る。乙彦もさっき立村がしていたのと同じ格好で、膝をかかえた。低い視線に映る物は綿ぼこりと大量のコードの山。絡んだコードがあちらこちらに見受けられた。

——藤沖は約束を守る奴だ。試験が終わってから、あいつからの話を待とう。

もう少し、クラスの平和を期待するには時間がかかりそうだ。判断した。

立ち上がり、乙彦は準備室の戸を締めた。静内と名倉がまた、ひそひそ話をしていた。

——だからいったいなんで、俺のいない時に限ってべたべたしてるんだこいつらは！

乙彦の内心を知ってか知らずか、静内菜種は鞆を抱えて立ち上がった。名倉に頷いてみせた後に

「関崎、今日は一緒に帰ろう」

まっすぐ、少し硬く声をかけてきた。

」

いつものことなのになんで静内の奴、妙に緊張した顔しているのだろう。そして名倉もなぜ、やたらと静内を相手に内緒話ばかりしているんだろう。

「あたりまえだろう」

乙彦もそのつもりだったから、それだけ答えた。今からひとりで帰ろうなんてそんな選択肢、最初からあるわけがない。

試験前日までが修羅場だったにも関わらず、試験そのものはあっという間に終わった。

答案も即、次の日返却されみな阿鼻叫喚に教室は満たされた。

——中間とほとんど変わらないのか。

あれだけ努力をしたにも関わらず、乙彦のもとに戻ってきた点数はわびしいことこの上なかった。唯一の心の慰めは、いわゆる赤点とよばれる追試対象となる科目がなかったことだろうか。それだけは救われた。

「藤沖、どうだった」

五教科すべてが帰ってきた直後の放課後、振り返り乙彦は促した。相変わらずしかめっつらの藤沖は、自分の後頭部を何度か叩きながら答えた。

「まあ、こんなものだとは思うが。準備不足だ」

——あの後、試験勉強どころじゃなかつたろうな。

視聴覚教室での一件を知る乙彦には、それ以上尋ねる必要などなかった。

もっとも藤沖の場合は元が附属上がりだから、乙彦のような外部生とは状況もまた違うのだろう。他クラスから試験問題の山掛け情報などももらっていると聞く。乙彦も頼めばもらえたのかもしれないが、正攻法以外考えたくなかつたのであえて何もしなかつた。

「関崎、お前はどうだった」

「赤点は免れた」

——俺も墮落したな。

かつては水鳥中学学年トップだった自分が口にすることは思えない自虐の言葉。

しかし、努力を一切しなかつたわけではない。

手を抜いたわけでもない。

それゆえの結果ならば、あきらめもつく。夏休みに挽回するしかない。静内の英語ヒアリング力をしごくという名目で、自分も力をつける努力をせねば。少なくとも、

——名倉よりは成績をよくしとかなないとまずい。

静内に「何偉そうなこと言ってるの、名倉よりも成績悪い癖に」とは言われたいだろうが、やはり心ひっかかるものがある。何かあると静内が乙彦よりも名倉に相談を持ちかけるのを見るのは、やはりおもしろくない。

「関崎、関崎」

いきなり教室に戻ってきたのは、いったん帰ったはずの片岡だった。くせのないするんとした髪の毛を少し乱し加減にして飛び込んできた。まだいた数人の女子たちが、身体を斜にして避けるような形をとった。

「忘れ物か、片岡」

藤沖を見て、「あ」と小声で呟いた後、また乙彦に向かい、

「今、うちに電話かけたんだ。桂さんに」

「どうして」

「だって、俺、英語、トップだったんだ」

乙彦が反応する前に、藤沖が大きく頷いた。すぐにぴんときたらしい。このあたりよくわからない。

「そうだな、今回は片岡が最高点だったぞ」

「それ言ったら、桂さん、今日、焼肉、焼いてくれるって！」

——焼肉？

桂さんというのは片岡の兄貴分かつ保護者にあたる男性だ。乙彦には少々理解しがたいのだが、現在片岡はその桂さんの管理下のもと、高層マンションの最上階の部屋で暮らしているのだそうだ。そしてこの態度を見る限り今だ信じられないのだが、片岡は青潟で名の知られた「迷路道」というアパレル会社の社長子息だという。金持ちイコール高慢ちき、というイメージは、片岡によって簡単にぶっこわされた。乙彦からしたら片岡は、単なる弟分である。

「そうか、焼肉か！」

「うんそれでさ、関崎」

話割り込もうとする藤沖が妙に馴れ馴れしい。片岡もそれに気づいたのか、懸命に乙彦ひとりへ話し掛けようとする。

「焼肉で桂さんがお祝いしてくれるって言ってるから、関崎、うちに遊びに来てほしいんだ」

あくまでも、乙彦ひとりに伝える言葉に聞こえた。しかし関係ない態度をとるのは藤沖だ。乙彦が口を開く前に話をいきなり進めようとする。

「そうか、それはめでたいことだ。関崎、行った方がいい。行くだろ？」

「今日、これからか」

誘われたからにはぜひ行きたいのだが、夕食はいらないと家に電話をしなくてはならない。関崎家のルールだ。それに、これから例のふたり……静内と名倉……と夏休みの予定を立てる約束をしているのだ。まずはそちらを優先してからにしたい。その説明をするつもりだった。なのに藤沖は意気込んで、

「関崎、万難排してでも行ったほうがいいぞ。片岡、そうだな」

「え、万難？」

片岡の戸惑いなど全く意に介さず、

「そうだ。道がわからないな。わかった、片岡、俺が関崎を連れて行くから安心しろ。俺もお前の家をぜひ見てみたいしな。それに話を聞いた限りだと桂さんという人は食いものに関してかなりマニアックな好みを持っているそうだし、ぜひ俺も話を聞いてみたい。いいか、一緒に行くぞ、わかったか」

「あ、うん」

気迫に飲み込まれた片岡は、まんまるいどんぐり眼を大きくして、頷いた。

——頷くしか、ないだろう。

またも肩をぽんぽんと叩かれつつ、乙彦も了解した。

「ありがとう」

「よかった」

笑顔を取り戻した片岡は、また背を向けて教室から飛び出していった。時間も何も告げずに、猛スピードで。藤沖に改めて確認した。

「お前本当に、片岡の家、知っているのか」

「評議委員を馬鹿にするな。俺はクラスメートすべての住所と通学路を把握している。これは義務だ」

とんでもない義務である。乙彦はとてんだがしたくない。

「片岡の家はそんなに遠くない。歩いてでもいけるが、やはり自転車で行くのがいいだろう。関崎、何か用事があるのか」

「すぐに戻るつもりだが、一応ある」

「そうか、どのくらいの時間かかるんだ」

「十五分かそのくらいだ」

本当は一緒に図書館で予定を煮詰めたかったのだが、そうもいかなさそうだ。

「だったら自転車置き場で待ち合わせよう。片岡はまだこの辺にいるだろうから捕まえて、俺がどのくらいに行けばいいかを確認しておく。お前は用事を済ませたら自転車置き場に戻って来い」

——なんだかまた、俺を弟分扱いしようとしているな。

暫く影をひそめていた藤沖の兄貴風。いつもならばそれも重たく感じたりするのだが、なにせ例の一件を知っている以上、それもあまり気にならない。交換条件、というのはあまり綺麗な言い方ではないのだが、それに近いものがあるのかもしれない。

「わかった。後から行く」

まずは家に電話をかけ、夕食不要の連絡を入れることにした。

その後で、もちろんロビーで待ち合わせていたふたりと語るのだ。

いつも帰り際、時間をうまく作って集まるようにしていた。特に試験後は夏休みまで補習が休みになることもあり、自主的に集わないとなかなか顔を合わせることができない。乙彦が提案し、ふたりが了解した。

試験答案が帰ってきた直後、やはり互いの結果は気になるもの。

開口一番、乙彦は静内に告げた。もろ、本心だ。

「覚悟はしてたがな」

「まあね」

特別扱いされているとはいえ、外部生にとってのこの状況はあまりよろしくない。

静内も溜息をつきながら、首を振った。具体的な点数は口に出さなかったが、努力はやはり実を結ばなかったようである。また名倉と目を合わせる。

「で、ヒアリング効果はどうだったんだ」

問い詰めてみた。

あれだけ手伝ってやったのだ。効果なしなんてことは、いくらなんでもないだろう。

「なんとか平均点は越えたかな」

「それだけか」

「そういう関崎は？」

「人のことは言えないが」

平均点以上は取った。が、他の科目……特に文系……がめちゃくちゃな点数だったため、トータルでは中の下だろう。情けない話だが、入学したての実力試験で同じ六十点を取った時よりもショックは薄い。慣れてしまっているのだろう。それが悔しかった。

「自分のレベルがだんだん下がっているような気がするな」

「そんなこと言ったら私なんかどうするの」

お互い溜息を吐いている中、名倉だけがひとり余裕をもって頷いている。理由は明白だ。名倉は外部生内でトップの成績だったのだ。乙彦や静内だけではない、外部生トータルで、だ。ただし附属上がりの生徒と比較するとどうしても中の上止まりのようだが。

「とりあえずは夏休みだな」

「そうだね。関崎はアルバイトするの」

「もちろんだ」

「夏休み中、午前中は学校で講習があるけど、出るよね」

「ああもちろんだ」

「じゃ、その後で、自由研究だね」

静内は明るい声で答えた。試験前の動揺めいたものは消え、さっぱりした口調が戻って来ていた。短いセンテンスで返事をするところもそうだった。会話しやすい女子に戻ってくれば乙彦としても楽だ。静内には他の女子たちにはない、軽さがある。いいかげんな意味での「軽さ」ではなく、風のようにさっぱりした流れが心地よい。

「英語もやるからな。静内、二学期はそれなりに結果出さないとまずいだろう」

「わかってる」

「英語と言えば」

それまで二言三言しか言葉を返さなかった名倉が、思い出したかのように尋ねてきた。乙彦に対して、

「今回の試験で、英語の学年トップ、入れ替わったな」

「ああ、だがあれは入れ替わったとは言わない」

訂正しておいた方がいい。立村の名誉のためだ。

「立村は期末試験、二日間とも休んだ。だから不戦敗という奴だ」

立村の体調が悪そうなのは、視聴覚準備室で見た様子を思い起こせば確かにそうだったとも思う。最初はずる休みかと勘繰ってしまったが古川の言う、

「立村はねえ、夏に弱いよ。いつも死んだ顔して学校に出てきてるんだけどね。今回はいろいろあって、ぶっ倒れたみたいだよ。羽飛たちC組連中があいつの家に見舞いに行くって言ってたから、聞いとくよ」

事情を信じることにした。いくらなんでも、自分の思うような形に話がまとまらなかっただけで、大切な試験を放棄するような男ではないだろう。なにせ附属 中学時代は英語限定学年トップを突っ走り、現在も大学の英文科講義を受講する権利を持つ。そんな奴なのだ。そう簡単に自分の栄光を手放したいとは思わないだろう。

どちらにしても、追試を受けてまた別の形で評価されるに違いない。

「今日は関崎、放課後どうするの」

「これからその英語トップを奪った奴の家で御馳走になる」

乙彦の言葉に、静内がまた驚いた口調で尋ねる。

「御馳走って、なんで」

「わからんが、俺と藤沖に食いに来いと誘ってきた」

事実をその通りに述べた。

「要するに遊びに行くということね」

「ああ、端的に言えばな」

静内の顔に何か無理をして笑うようなそぶりが見えた。ずきんと来る。目をそらせただけなのだが、妙に気になる。試験も終わったことだし、静内も三人で何か腹持ちのいいものを食に行きたいのだろうか。まあ、夏休みになったら家に呼ぶのもいいだろう。

「静内、夏休みになったらな」

乙彦が言いかけると、遮るように名倉がとつとつと答えた。

「休みに入ったら、仲間うちでパーティーがある。来い」

「パーティー？ 名倉、なんかその言い方、似合わないよ」

確かに似合わない乙彦も思うのだが、名倉は真剣である。

「奈良岡が帰ってくるから、あいつの家で誕生パーティーがあるんだ。とにかく、静内も来い」

——こいつ、静内を誘っているのか？

頭の奥がきんと鳴ったが、すぐに、

「もちろん関崎もだ」

付け加えてくれたので、気にしないことにした。言い忘れなど、よくあることだ。

しばらく夏休みの予定なども話をし、十五分経ってから即、

「悪い、そう言う訳でまた、明日話そう」

ふたりに手を挙げ、まずは自転車置き場へ向かい、そのまま藤沖を待った。

まだ来ていなかった。

真夏の太陽が自転車のサドルおよびハンドルを熱し、乗るのがしんどい。それでも自分にとっては貴重な足だ。鞆をくくりつけた。

——しかし、そんなに嬉しいものか。

念願の英語学年トップを取りはしゃいでいるように見える、片岡司に思いをはせた。

——もちろん、はしゃいでいるというわけじゃないだろうが、ああも単純に「焼肉で桂さんが

お祝いしてくれるって言うてるから、関崎、うちに遊びに来てほしいんだ」って言うのはどんなもんなんだ？ たまたま隣に藤沖がいたから、半ば強引に割り込んでくれたからいいようなものの、いったい片岡の奴、女子たちのお誕生会みたいなことしたがるんだ？

立村不在の期末試験なのだから、暫定一位だと本人もわかっているはずだ。もともと片岡は立村のことを露骨に嫌っていたし、それは嬉しいだろう。乙彦も理解できないわけではない。ただ、焼肉焼いてお祝いするようなことなのか、とつつこみただけだ。

——藤沖も、片岡の家にそんな行きたかったのか？

これも意外だった。片岡が乙彦に懐いているのはわかるし、乙彦も決して嫌いなタイプではない。いろいろと噂……下着泥事件など……も聞いているが、すでに禊を行ったという結論に達しているので気にはならない。だが、なんで藤沖も片岡と仲良くしたがるのだろうか。評議委員としての義務、だけではなさそうさ。

——俺の見た感じだと、片岡、かなり迷惑そうだったが。

思い過ごしであればとも思う。どちらにしても藤沖に連れていってもらわないことには、片岡の家にたどり着けるわけがないのだ。

——だが、かえっていいかもしれない。

乙彦は空を見上げた。まだらな雲が空を埋め尽くしていた。いわゆるこれは「層積雲」というものではないだろうか。地学の授業で習った知識を思い出した。見た感じ青空は広がっているのだが、この雲が出てくるということは明日あたり、大雨になりそうな予感がする。

——あいつもいろいろ、大変なことが多いにちがいない。こういう形で気晴らしするのも悪くはない。

詳しい事情をこちらから聞き出す気はない。藤沖が試験前日に約束した「事情を話す」件についても、ややこしそうなのであえて口にはしなかった。乙彦としては目的ひとつだけ。

——あの件で、立村との関係がうまくいってくれるといいんだが。

複雑な状況はまだ修復されていない様子だが。今日の焼肉パーティーで少しでもそのヒントになるものがつかめればと思う乙彦だった。立村の方が歩み寄る姿勢をこれ以上見せない以上、動くことを期待できるのは、藤沖だけだから。

「悪い、待たせた」

汗をだらだらに流し、藤沖が駆け込んできた。律儀にも全力疾走している。

「いや、たいして待っていない」

シャツは見事に背中へべたりとくっついていて、濡れたままの洗濯物を着たという感じだった。改めて気がついたが、乙彦も似たようなものだ。すでに汗だくだくなのだが、動いているとそれも感じない。

「やばいくらい熱いな」

自分の自転車サドルに手を触れてみて、藤沖も顔をしかめた。

「ハンドルも火傷しそうなほど熱いぞ」

「とてもだが、乗る気にはなれないな」

ひとりごちた後、藤沖はネクタイをひっぱがし、ポケットにつっこんだ。乙彦にも促した。

「お前もいいかげんネクタイ取れ」

「そうだな」

言われてみれば、このネクタイもかなり重たかったのだ。放課後だしもういいだろう。襟からはずし、同じくポケットに突っ込んだ。

「片岡の家は近いから、歩いていこう。帰りに自転車だけ取りに戻ればいい」

「それもそうだな」

夜になれば熱せられた自転車も少しは冷めるだろう。改めて乙彦は藤沖の賢さに舌を巻いた。やはりこいつは上に立っただけあって、頭の回転が速い。

鞆を改めて持ち直し、乙彦は藤沖の歩くまま、着いていった。

どちらともなく黙って歩いていた。視聴覚教室の出来事を口に出さない方がいい、という判断を乙彦なりにはしていたが、無理に触れないのも居心地が悪かった。まだ熱い太陽とそれを和らげる風に首筋を交互に刺されるようで、乙彦は何度も首をひねった。

「関崎、先日は、悪かった」

口を切ったのは藤沖だった。

「何をあやまる」

「視聴覚教室の件だ」

乙彦は立ち止まり、藤沖を見た。歩きながら返事するのは礼に欠けているような気がした。藤沖も同じことを考えたようで、やはり足を止めた。

「古川から聞いた。お前がすべて提案してくれたこととな」

「いや、たまたま俺はヒアリング特訓するつもりで」

言いかけると遮られた。

「もちろん、その事情も聞いている。だが、関崎の提案がベストだった。感謝する」

「たいしたことじゃない」

藤沖は乙彦に頭を下げた。神社で参拝するのと同じくらい、深々と。

「約束通り、今からすべてを話したいが、聞いてくれるか」

「ああ、もちろんだ」

再び黙ったまま校門を出た。中学校舎の裏まで何も言わなかった。いつか立村に連れてこられた喫茶店「おちうど」のあるあたりまでそのまま歩いた。暫く歩きつづけていると不意に砂利道が現れ、その後ろいっぱい青々とした林が現れた。少し暗かった。たくさんの葉のアーチが、完全に夏日を遮っていた。一気に背中が冷えた。

藤沖は背を向けたまま、乙彦に向かい手を挙げた。すぐに下ろした。

「俺のやったことは、論理的にも倫理的にも間違っていると思うか」

「論理？ 倫理？」

「間違っている。俺はそう思う。だがそうした」

言い切った後、藤沖はぐっと顎を引くようにして、じっとにらんだ。

「後悔はしていない」

「なぜだ」

深く考えず、ただ問うただけだった。しかし藤沖には別の圧力を加えてしまったらしい。また目つきが深く、怖くなった。

「俺の勝手な罪滅ぼしにつき合わせてしまった。申し訳ない」

「あやまれることもないが、罪滅ぼして誰のだ？」

わからないだけだった。決して責めるつもりはなかった。

「霧島の姉にだ」

——霧島？ あの、中学生徒会副会長のあいつか？

言われた意味がつかめなかった。古川と三人で話し合った際の記憶を巻き戻そうとした。ほとんどおぼえていない。理解できない。

「自殺未遂した女子が、俺たちの代にいたと言っただろう」

「聞いた」

「それが、霧島の姉にあたる女子だ。関崎が生徒会と評議との交流会に来た時、お茶を運んだ髪の毛の長い女子がいたのを覚えているか？」

「女子はたくさんいたのですべてを覚えているわけではないが、清坂ではないな」

藤沖は首を振った。

「お前の記憶している青大附属上がりの女子で、もっともきれいだと思った奴を思い出してくれ。青大附属に入る前に会った女子限定でだ」

——芸能人顔？

まったくたどり着けない迷路。勝手に藤沖はゴールを定めて言い切った。

「そいつが霧島の姉だ」

藤沖はしばらく俯いたまま、ゆっくりとポケットに手をつっこんだ。

「関崎も事情は古川から聞いているだろうが」

乙彦の顔を見ないまま続けた。

「この問題は俺が会長をやっていた頃から火種が存在していた。きっかけは生徒会改選の際に起こったトラブルが原因だ」

「聞いたことはある」

確か、立村が後期評議委員長の座を明け渡すはめとなったのが、この事件と聞いている。

「だが、お前が聞かされていることとは、事情がおそらく違う」

ひっくり返すようなことを藤沖は口にした。

「俺は次期生徒会役員を選ぶ際、一切口出しをしなかった。評議を初めとした委員会の場合は、早い段階で委員長教育を先輩が後輩に施したりすることもあったが、俺はそういうやり方が気に入らなかった。あえて、すべて、捨てておいた。誰が会長に選ばれたとしても先輩としてそれ以上言うべきことではないと判断していたわけだ」

——非常に、俺にとっては耳の痛い話だ。

無理やり内川を水鳥中学の生徒会長に引きずり込んだ乙彦としては、黙って聞いていた。

「その結果、生徒会長には佐賀が、副会長には霧島が入った。残りのポジションを他の生徒会役員たちが占めたのは思っていた通りだ。俺なりに、それはそれでまあよかろうと考えていた。佐賀の噂は新井林を通じて耳にしていたし、非常に賢い女子であることは俺も確認する機会があったしな。どちらにしても、会長に関しては異存はなかった」

「副会長には、異存があったのか」

藤沖は首を振った。

「ない。俺の鼻屑目もあるのだろうが、霧島は頭の切れる逸材だ。多少、男尊女卑的思想が強いところもあるが、あいつの外見である程度はごまかしがきく。生徒会役員としては完璧だろう」

——そうだろうか？ 明らかに鼻屑目だ。

実際の霧島と会話を交わしたことのある乙彦には疑問が残った。が、黙っている。

「だが、問題は他の生徒会役員だ」

言葉を切り、しばらく考え込む。

「まず、霧島を引きずり込むきっかけは、あの女子が……わかるな」

名前を出そうとしなかった。おそらく、渋谷という例の女子のことだろう。乙彦は頷いた。藤沖ははたして、ふたりきりの時にどういう呼び方をしているのだろうか。乙彦に対しては「あの女子」で押し通すつもりのようなようだった。

「あの女子が、霧島を口説いたらしい。口説いたと思い込んでいる。霧島自身はそれを否定しているが、生徒会入りするきっかけにはなっただろう」

「口説いたとはどういうことだ？」

「つまり、あの女子は、霧島に惚れていたというわけだ」

わかりやすく一行でまとめた。

「霧島との接点を持たせるために、生徒会役員へ引きずりこもうとしたわけだ。霧島も、自分の姉が関わっている評議委員会を敵視していたせいか、生徒会役員への立候補には異存がなかった。そこで、あっさり立候補したわけだ。ただし、本人の意思としては会長にだが」

——一年生が会長に立候補か。

ますます、内川のお気楽な満面の笑顔が思い浮かぶ。あいつ、相変わらず馬鹿やっているんじゃないだろうか。心配だ。

「だが霧島は副会長に」

「そうだ。霧島は佐賀に惚れていた。だから、相手に花を持たせざるを得なかった」

「ちょっと待ってくれ！」

乙彦の知っている青大附属中学事情細工が、頭の中でがしゃんと壊れた。遮らざるを得なかった。

「霧島が、か」

感情の籠らない返事が返ってきた。

「そうだ。詳しいことは知ったことではないが、とにかく霧島は佐賀を、女子でありながら心底崇拜している。これは今でも、だ」

「崇拜？」

頭の悪い女子は大嫌いだ、といわんばかりの言動を覚えている。もちろん乙彦も霧島の気持ちが理解できないわけではないのだが、少し過度ではないかと感じたのも事実である。また、佐賀はるみに対して「賢い」という形容詞が不釣合いな感じがしたのもある。礼儀正しく、どこことなく水野五月に似た雰囲気のもの腰の柔らかさが印象に残る、それだけだが。

「霧島は、礼儀正しい女子が好みなんだな」

「いや、賢い女子が好きだけだ。あの女子のように、自分の興味を惹こうとして、無駄な努力を繰り返す相手ではなく、きちんと男子を立てて、思いやりを持って接しようとしてくれる、そういう女子が、霧島は好みだった。そのことをあの女子は、最後まで気づこうとしなかった」

「あの女子」と呼び慣わす藤沖。わざと渋谷のことを無機質にしようとしているようだ。

半分わかったようでわからない。だが聴くのは礼儀だ。

「生徒会役員が無事改選された後、佐賀生徒会長によって規律正しく運営されていった青大附属中学生徒会だが、唯一の問題はあの女子と霧島との争いだった。もちろんあの女子は、自分をアピールするためにわざと頭がよさそうに振舞おうとしたのだろう。それは理解している。だが、第三者および霧島からみればそれは、すべてお見通しだ。無駄な努力と、軽蔑とがぶつかり合い、空気は険悪になっていたようだ。俺も会長を降りてからはほとんど生徒会室に立ち寄りなかったので、伝聞でしかないが」

「俺は生徒会から引退しても、しょっちゅう通っていたが」

乙彦の言葉を思いっきり無視して、藤沖は語りつづけた。

「表向き、生徒会はうまくいっていたようだ。評議委員会が握っていた権力を、ある意味『大政奉還』という形でもって取り戻し、今でも規律はしっかりと守られる形で運営されているはずだ。だが、あの女子が必死に、賢さをアピールしようとするほど、霧島はうんざりし、嫌悪感を持った。霧島は話していたな。あいつの姉にそっくりだと」

話が最初に繋がった。乙彦は藤沖の隣に近づいた。

「顔がか」

「違う。自分の置かれた立場、および能力を省みない言動が、だ」

確かに、乙彦と古川こずえとの会話でも、霧島は繰り返し「愚かな女子」を激しく罵倒していた。その中に例の寝小便しでかした渋谷という女子が混じっているのは承知していたが、そこに潜む憎しみは自分自身の姉から出ていたものなのか。また、その姉は藤沖にとって、心の片隅に残る淡い思い出。果たして藤沖は、何を言いたくて長い説明をしているのだろう。

「俺も、霧島が迷惑がる気持ちは理解できた。卒業してから何度か生徒会室に足を運んで、霧島や佐賀の相談を受けていた。俺にとって生徒会という場所は、かけがえのない場だった。それがくだらないいざこざで汚されるのはたまったものではなかったからだ」

「だが、藤沖、お前は」

言いかけた。藤沖の気持ちは、その霧島の姉のもとに存在していたのではなかったのか？

「霧島は姉にそっくりだ。やたらと自分を大きく見せたがるが、結局のところ気弱なところを隠しているだけだ。また外見も瓜二つだ。姉弟同士が憎しみあっているのは実のところ、合わせ鏡の部分があるからではないかと、俺は観察している」

言われた意味が全くわからないが、まずは聴く。

「それぞれの話を聞いて、俺もさすがに先輩として介入を必要だと感じたあたりで、修学旅行の時期となった。それからの出来事は、古川がリアルに説明してくれただろう」

乙彦は頷いた。

生徒会役員経験のある乙彦にはもちろん、藤沖の心理は全くもって他人事ではない。

自分が確かにあの場所で精一杯戦った、その記憶が今の乙彦を支えている。

藤沖もおそらく、同じなのだろう。

同じ場所でぶつかり合ったそのフィールドが、いとおしい。

同時に、かつての自分たちと同じように、不器用な格好でばたばたやっている後輩たちを見ると、どうしても手を出さずにはいられなくなる。なんとかしろ、そう怒鳴りたくなる。もちろんその後しっぺ返しを食らわされるのは自分なのだが。

「霧島は性格的にも潔癖だ。さらに、しつこく迫られて鬱陶しいあの女子を追っ払うチャンスとも思ったのだろう。幸い、生徒会長の佐賀が機転を利かせてうまくとりもったが、結局のところあの女子の居場所は、どこにもなくなってしまった。結果としては杉本が泥を被るということで話がつき、なんとか幕を下ろせそうだが、事実がばれない保証はない。また、あの女子が手首を

切らないという保証もない。霧島が一切、あの女子を受け入れないと決めた以上、どこかに逃げ場所を用意しなくてはならない。俺が、非常識とわかっていながらも理不尽な願い事をしたのは、そういうわけだ」

「そう言うわけだと言われても、正直俺にはわからないが」

話を終わりにするつもりだとしたら、乙彦には消化不良のままでいるということになる。

「確認させてくれ。霧島が例の寝小便事件をうまく利用して、彼女を生徒会から追い出そうとしたと、そういうことなのか？ それを藤沖、お前は了解したのか？」

「そうせざるを得ない」

「となると、ひとりの女子に丸ごと罪をかぶせることになる。下手したらその女子はずっと軽蔑されたまま、卒業することになる」

「一言もない」

藤沖は言い訳しなかった。思わず乙彦もいきり立った。真正面に立ち、ぐっと接近した。暑苦しかった。

「そうせざるを得なかった状況があったんだな」

答えがなくとも、それしか返答がないことはわかっていた。

頭の上を完全に青葉が覆い、しばらく烏が鳴いていた。

知らぬ存ぜぬで嘘八百を飲ませようと藤沖が考えているはずがない。

堅物でいけば乙彦ととんとんだろう。

そんな藤沖がなぜ、杉本梨南に罪をかぶせようとしたのだろうか。

霧島の姉に懸想していたからなのか。

霧島の姉が自殺しそうになったのを救うことができなかったからなのか。

そして、その弟をかばおうとするのはなぜなのか？

いやなによりも、なぜ渋谷というその女子を、守ろうと思ったのか。

乙彦は思いついた言葉で、つなげて口にした。

「霧島の姉の事を教えてくれ。藤沖、お前がそんな理屈に合わないことをしてしまうほど、その女子はすごかったのか」

「すごい、というのは変な言い方だ。少し言葉を選べ、関崎」

感情を交えずに藤沖は言い返した。

「何かの理由で間違っこの学校に入ってしまった、苦労していた。成績は悪かったが今のお前のように日々努力を重ねていた。だが、結局は青大附属から出て行くことになった」

「それは聞いた。俺が聞きたいのは」

「もしかしたら、俺たちは彼女のためにもっと早い段階で何かできることがあったのではないかと、それを今改めて思う。学校を追い出される前に救うことはできなかったのかとな」

淡々と続ける藤沖。若葉が揺れる。顔に影がかかる。

「だが、霧島の姉は今、可南女子高校へ行っていると聞いたが」

「ああ」

「青潟市内で暮らしているんだ、住所も知っているだろう。いくらでも、今から守ることはできるだろう」

「いや、できない」

「なぜだ？」

乙彦の問いに、藤沖は顔を挙げた。かすかに頬をゆがめた。

「名前を出さないが、うちの学年の男子ひとりが命掛けで、彼女を守っている」

「誰だ？」

「お前が知る必要はない。ただ奴は、今でも命がけで、守り続けようとしている。もちろんできる範囲でだが。彼女が二度と死を選ぶことのないように、できるだけのことをしているようだ。霧島とも直接連絡を取り姉の様子を聞いているようだ」

そこまで一気に言い切った後、藤沖はぽつりと呟いた。

「俺の出る幕などない」

——藤沖は本気で、霧島の姉を。

いくら恋愛沙汰に疎いことを自覚している乙彦でも、察することはできる。

「彼女のことはどうでもいい。だが俺は、元生徒会長として、同じ形で退学してしまう生徒を出したくはなかった。どんなに理不尽なやりかたであったとしても、俺が守るのはひとつの義務だ。生徒会における霧島の立場や、その他いろいろなしがらみを考慮し、俺が判断したのがこのやり方だ。俺は軽蔑されるだろう。だがそれが望みだ」

「軽蔑？ 誰にだ？」

問い返す乙彦に、吐き捨てるように、

「俺の価値観を知る、すべての奴らにだ。俺はもう、立村を軽蔑する資格を失った」

「ちょっと待て、立村を軽蔑する資格とはなんだ」

慌ててさらに問い返した。やはり藤沖は青大附属の人間である。男子であっても話がどんどん広がってってしまうのはなぜなのか。藤沖は苦みばしった顔で無理に微笑んだ。

「自分の居場所を得るために、他人をずたずたに傷つけた挙句それを隠してもぐりこもうとした、そのことが俺は許せなかった。だからあいつとは縁を切った。だがその一方で俺は同じことをしようとしている。そのことを認める以上、俺はあいつと同じ、人間として許しがたいことをしているということだ。しかも、それを俺は正当化し、反省などせずにそのまま押し切る覚悟でいるわけだ。こんなやり方を関崎、お前は認められるか？」

「認められない」

反射的に答えた。また、苦笑いを浮かべて藤沖は頷いた。

「お前ならそう言うだろうと思った。だから、お前に、先に話した」

じっと乙彦を見据えて、ポケットから両手を出した。鞆はいつのまにか足元に置いたままだった。

「後でいろいろ噂が流れてくる前に、お前にだけは本当のことを話しておきたかった。その上で軽蔑されるのなら、本望だ。俺は今まで生きてきた中で、卑怯な嘘だけはついたことがないとい

うのが誇りだったが、結局は立村と同じ穴の貉だった。どちらにしてもばれるだろう」

自嘲しつつ、また俯いた。乙彦の視線から目を逸らそうとする。唇をかんだまま、ずっと真横を見つめた。こぶしがいつのまにか形作られている。表情は、草の陰に遮られて読めなかった。

——藤沖はなぜ、俺にそういうことを話したんだろうか。

じっと視線を逸らさぬまま、乙彦は考えた。

——俺に嫌われるためか。立村と同類だというのが自分で許せないからか。

言葉の端々に現れる「立村と同類になってしまった」ことへの怒り。それが藤沖自分自身に向けられている。激しく自分を責めると同時に、立村の過去の言動を怒っている。

——そんなに、藤沖は立村のことが許せなかったのか。

ふたりの不仲については、古川から聞いた話でしか判断できない。どんな話を聞いたからといって、ふたりを嫌うつもりなどない。ただ、今回の出来事に対して、藤沖がとったスタンスを素直に受け入れることは難しいと感じただけだ。ひとりの女子に罪を押し付けるのはどういふものか、しかも立村が納得していない状況においてだ。

——俺は、藤沖が今回とった行動を納得していない。

——だが、藤沖と縁を切るつもりはない。

それを伝えねばなるまい。

「藤沖、俺はそんなことでお前を軽蔑するつもりはない」

乙彦はまっすぐ、動かず、はっきり発した。

「お前のしたことを正しいとは思えない。それは俺の本音だ。だが、今の話でそうせざるを得ない事情があったことだけは理解したつもりだ」

「関崎、お前は」

いかつい藤沖の顔に浮かんだものは、明らかに驚きだった。口をぽかんと開けている。

「これから俺たちが考えるべきは、『これからどうするか』ではないのか？」

「これから？」

「そうだ」

言い切った。

「俺もどうすればいいか今の段階ではわからないが、藤沖が考えている以外の方法でまだ道は見つかるはずだ。それをこれから、考えていかないか」

両肩に手をかけた。軽く揺さぶった。

「まずは片岡の家に行って、焼肉を食わせてもらってから考えよう」

「関崎、本当に、俺を軽蔑しないのか？」

「しない」

藤沖の肩に手をかけた瞬間、ぐるっと何かが逆回り回転しはじめたような気がした。

汗ばんだシャツの下から感じるぬくもりに、弱々しい揺れを感じた。

——もしかしたら藤沖が俺にやたらと肩を叩いたり触ったりしてくるのは、俺がガキっぽく見

えだからなんだろうか？

瞬時に消えた、その分析。乙彦はすぐに忘れた。もう一度藤沖に伝えた。

「悪いが、片岡の家に、連れて行ってくれないか」

「ああ、わかった」

慌てて藤沖が歩き出した。後ろからゆっくりと乙彦はついていった。この林に足を踏み入れるまで押さえられていたはずだが、何時の間にか乙彦の手に戻って来ていた。指示を出すのはいつのまにか、「兄貴分」だった藤沖から「弟分」だった乙彦に移っていた。

本当は藤沖を交え、片岡とも少し話をしたかった。

「藤沖、お前、片岡はいい奴だと思うだろう」

乙彦が振ると藤沖はその通りと答えた。

「ああ、面白い奴だ」

「野郎連中とはうまく行っているが、このまま女子たちから総すかんを食っているというのはまずいと思う。二学期以降、俺としてはなんとかしたい」

「俺も同感だ」

いろいろな問題をしでかした片岡だけに、そう簡単に事は運ばないだろう。乙彦も他の方面から話を聞いているので、その点については覚悟しているつもりだ。しかし何もしないわけにはいかない。幸い夏休みが入るので、ゆっくり考える余裕はある。

「しかし、どんな肉を食わせてもらえるんだろうな」

藤沖の頭にはすでに、焼肉パーティーのことしかないようだった。

「関崎も聞いたらどう？ あいつの兄貴分にあたる人ってのがラーメン屋やら屋台やらそういうのにめっぽう詳しいらしい。舌も肥えている。ということで片岡もそのあたりには非常に詳しいはずだ。ホルモン焼きなどもあるかもしれないぞ」

「ホルモン焼き？」

乙彦には初めて聞く焼肉の名だ。

「精力がつくらしいぞ」

「それはいいな」

運動能力がアップするのだろう。それは嬉しいことである。

さっきまでの重苦しい話題を払拭するかのようになり、ふたりは語りつづけた。語っていれば、考えずにすむ。無理に藤沖と立村との今後を考えなくてもすむ。まだ時間はたっぷりあるのだ。

藤沖の話していた通り、それほど時間はかからなかった。住宅街の奥にやたらと背の高いマンションが突っ立っていて、街の雰囲気とつりあわないような印象を受けた。全体として背の低い家が多い中、一軒だけずっと天を見上げざるを得ない。

「最上階の部屋だと聞いている」

「地震や火事が起きた時には大変だな」

「非常階段はあるらしいぞ」

それはあるだろう。聞き流し乙彦はマンションに入ろうとした。が、ガラスで遮られていて中に入れない。自動ドアのはずなのだが。

「ああ、ここでは一度、片岡に連絡をいれ、管理人さんに開けてもらうシステムだ」

慣れた風に藤沖は、管理人室の小窓へ声をかけ、

「すみません、片岡さんをお呼びください」

頼んだ。

「そんな面倒なことをしなくてはならないのか」

「いろいろ事情があるらしいぞ」

すぐにガラスドアが開き、藤沖は管理人さんに礼を行って入っていった。乙彦も続いた。正面のエレベーターが下りてくるのを待った。

「俺は片岡の、学校で見せる脳天気なところしか知らないが」

「同じくそうだ。だが、奴の背負っている事情は相当たるものがある」

あえて乙彦はそのようなことには耳を貸さずにきた。だが、家へ遊びに行くだけなのにこんなに面倒なことをしなくてはならない家庭というのは、相当、いろいろあるのだろう。

エレベーターが開いた。誰も乗っていない。さっさと藤沖は最上階のボタンを押した。

「実は、片岡の家に呼ばれるのは、おそらく関崎が最初だろう」

「そうなのか？」

意外だ。藤沖の思い違いではないのか？

「いや、あれでも片岡は、友だちを厳選しているきらいがある。たぶんだが、兄貴分のお世話役の人が指示しているんだろう。まるで、どこかのやんごとなき人々のような家庭だが、そういうのもある」

「あいつのどこがやんごとなき奴か？」

乙彦にはやはり、まだまだ未知の場面が多々続きそうだった。第一、ぽよんとした顔でもって乙彦に、英語学年トップを獲ったことを自慢しているような片岡を、どう考えれば「やんごとなきお方」と思えるのか？

「まあ、あいつは面白い奴だ。楽しみだ」

藤沖は特にそのことについての返答をせず、ゆっくりと開いた戸から降りていった。

ノックをせずにインターホンを押し、藤沖が「藤沖と関崎です」と答える。すぐに開いた。片岡かと思いきや、

「よお、藤沖、待っていたぞ。早く入れ！」

脂ぎった額がまた一段と臭いそうな人がいた。

「麻生先生……」

藤沖と顔を見合わせた。どういうことなんだろうか。二時間ほど前に顔を合わせた担任教師とはいえ、放課後に改めて会うには心の準備がいる。絶句するしかない。すると後ろから無理やり藤沖が、

「まあ、入れよ」

促した。しかたあるまい。さっき手に入れたはずの主導権がまた取り戻されてしまったようである。腹もすいた。少しいらだつ。

「おーい、関崎たち来たぞ！」

マンションなのに自宅と同じくらい広いたたき、そして脇にはよくわからないが家族写真の数々が張り巡らされている。靴は三足、しかも一足は小さめ二十三センチのスニーカーだ。

「女子がいるんですか」

藤沖が麻生先生に、靴の紐を解きながら尋ねた。

「ああ、B組の泉州が焼肉名人ぶりを発揮してるぞ。藤沖は知っているか」

「はあ、一応」

乙彦には尋ねなかった。当然か。一緒に靴を脱ぎながら、広い廊下の奥から聞こえるはしゃぎ声が女子であることを確かめた。てっきり片岡だけかと思っていたのだが、ちと反応に困る。麻生先生は乙彦の肩を叩いた。

「いやあ、夏だしな、汗だらだらに流しながらうまい焼肉ホルモン焼きを食いたいなあと話していたんだが、今回はご相伴させてもらうことになってなあ。ほらうまそうなおいがるだろう？」

確かにいかにも焼肉焼きたて！という感じのにおいが流れてくる。胃袋がよだれをだらだらに流しそうである。しかし、よりによって担任の教師の目の前で野獣の如く食いまくるなんてできるわけがない。やはり、気を使わざるを得ない。

そんなの全く気にしていない麻生先生は、シャツとランニングのみ汗だくのまま、

「片岡、さあ二人分、焼くぞ！」

氣勢を上げた。

「泉州についてはあとで説明する」

「紹介、でなくてか」

「ああ、このあたり少しややこしい」

まったくわからないが、いろいろ事情があるのだろう。無理に聞き出す必要もない。

「お前はただ、ひたすら食いまくってればいい。麻生先生もいきなり俺たちに説教するような野暮なことはしないだろう。だがしかし」

廊下はゆったりと広い。しかし絨毯はやたらとほこりっぽい。油っぽいにおいでだんだん自分たちが焼かれているような気がしてきた。麻生先生に案内されて右側の部屋に入る。

「おお、若人よ！」

奇妙な声を挙げて、鉄の箸を振り上げたのは、麻生先生に瓜二つの男性だ。

——あ、確か、片岡を迎えにきてた人だ。

めがねを外しているからすぐには気づかなかった。この人は桂さんらしい。目が細い。ランニングシャツ一枚でこれまた脂ぎった顔でもって生肉をひっくり返している。その側で、

「片岡、あんたの友だち来たよ、ほら、そんなにちょこまかしてるんじゃないよ！」

どすの利いた声で威嚇する……ように見える……のは、髪の毛ポニーテールのせいたかのっぼ姉さんだ。膝丈のジーンズと白いTシャツ姿。乙彦と藤沖を観ても対して関心を持たなかった。乙彦も、彼女に覚えはなかった。

「あれが泉州だ」

「ああ」

台所というよりも、むしろ広い食堂のようなスペースだった。だいたい十畳くらいはあるだろうか。台所とテーブルがU型に繋がっていて、そこからどンドン皿が出てくる出てくる。しかし

片岡はぽかんとしたまま、開いたスペースに広げたこたつテーブルに向かい、黙って座っている。手伝いをなぜしないのか、が非常に気になる。乙彦たちを見あげて、こっちへ来いと手招きをする。

「俺たちも手伝わなくてもいいのか」

「いいよ。だって泉州さん、桂さんと話がしたいんだから」

客人として座っていてもいいということらしい。乙彦の性分としてはこういう場合、自分から積極的に動くべきだと思うのだが、片岡が首を振るのでしかたなく腰を下ろした。焼肉用のホットプレートと別に、網焼き用のコンロが脇に設置されていた。

「もう食べたのか」

「うん」

「じゃあ、あとは」

「お前たちの分と、あと桂さんと泉州さんが食べる分」

ということは、ふたりは料理に没頭しているというわけか。それって許されることなのか？

「片岡、手伝わなくて本当にいいのか？」

「いいよ」

「麻生先生だって手伝っているじゃないか」

「先生は、肉の好みがあるさ。だから自分で選んでいるんだ」

——いいのかそれで。

部屋の中にはきれいな絵がたくさん額縁に守られ飾られている。台所方面は整っているのだがいかんせん、床に座ったとたん妙にくつろげてしまう。とてもだが片岡を「やんごとなき」とは言えないだろう。だがしかし、やはり落ち着かない。ここはやはり手伝うべきではないだろうか。それも片岡を引きずりこんで。それが客人としての態度ではなかろうか。

藤沖にも意見をもらいたいところだったが、いつのまにかあぐらをかいている。

腰を浮かせるのもタイミングが合わない。しかたなく乙彦は肩膝を立てる形で腰を下ろした。

あっという間に焼肉第二弾の準備が整ったようだ。乙彦たちの前に、網焼きのコンロがどんと設置され、自分たちが手を出す間もなく桂さんと麻生先生、そしてせいたかのっぽのお姉さんの手により生肉が並べられていった。薄い肉、やたらと分厚い肉、さまざまだが焼きたてのにおいに理屈はいらない。赤味がだんだん白っぽい色に変わりしのを待ちながら、ひたすら藤沖の言うように食いまくった。食べている間に難しい会話は必要ない。

「うまいだろ？ な、うまいだろ？」

本来そのことをアピールすべきは桂さんの方だと思うのだが、麻生先生が熱く肉のうまみについて語りだす。

「桂さん、ほんとにいい肉選びましたねえ」

「もちろん！ 安くてうまいところを押さえるのが俺のポリシーですぜ」

全くわからない話を大人ふたりが熱く語っている。一応は担任教師と親代わりのはずなのだが、この部屋では単なる焼肉愛好家に成り下がっている。目の前に自分の教え子がいることすら忘

れている。はっきり言って乙彦には理解不能である。むしろ英語のヒアリングの方が聞き取りやすいような気がしてならない。しかも大人ふたり、暑苦しい。生徒三人は身を寄せた。ちなみに泉州という女子は桂さんにべったりひっついていて、片岡が気を利かせたのもわからなくはない。

「お前ら、ほらほら、野菜も食え！」

「そうだ、司、お前ちっともねぎ食ってなかっただろ！」

怒鳴られるのを聞き流し、片岡は乙彦に囁きかけた。藤沖を無視してである。

「あのさ、僕の部屋で、遊ぼうよ」

「遊ぶ？」

口の中がもさもさする不思議な感触の肉を噛んで、急いで飲み込んだ。

「だって、みんな、僕にお説教ばかりしようとするから」

確かに。それは自然だろう。もっとも乙彦としても、

「それはお前がちっとも手伝わないからじゃないのか？」

そのくらいは言いたくなる。

「そんなんじゃないよ」

「片付けるくらいやらなくちゃなんないんじゃないのか？」

片岡はふくれっつらをして乙彦をにらんだ。何文句言いたいんだろうか。こういう場面において手伝わないということ自体、乙彦には非常識に思える。藤沖にも同意を得ようとしたのだが、ふと気づくと哀れなり、麻生先生にとっつかまって説教されている最中だ。

「いいか、藤沖、まずこの牛モツを食え。新鮮だぞ」

さっき乙彦が口の中ですくすくするのを見て、謎の肉を進められている。

「お前も評議としてよくがんばったなあ。偉いぞ」

「ありがとうございます」

テーブルの上に並んでいるびんをチェックした。ビールをはじめアルコールは存在しない。

「まだまだまとまりの悪いクラスだが、まだ二年半以上ある。ゆっくり進めるぞ」

「はい」

言葉少なに、礼を述べる藤沖。ちらと乙彦を牽制するように睨み、

「今、この場でいいですか」

喉を大きく動かした後、告げた。

「少し早いのですが、後期の評議委員は、できれば関崎に任せたいんです」

麻生先生の反応よりも先に、乙彦はむせた。なぜか背中をどンドン叩いたのは片岡だった。その後ろでなぜか笑い転がっているのは桂さんと泉州だが、果たして藤沖の言葉に反応したからなのかはわからない。それにしても、もつとかいう肉、乙彦の味覚には合わなかった。

あきれた顔で乙彦を眺めた後、藤沖は一気にウーロン茶を飲み乾した。

「先生にも先日からお話していた件ですが、俺は夏休み明けの秋の体育祭をめぐりに、応援団を立

ち上げるつもりです。すでに体育の郡山先生（こおりやま）には顧問に就任していただきたいとお願いしています」

「おいおい、いきなりどうした」

寝耳に水らしい。乙彦は藤沖の様子をじっと見守った。隣にちょこんと片岡も続いている。

「郡山先生からそういう話はまだ聞いていないが」

「正式なお願いではありません。ですが、夏休み明けには改めてお願いするつもりです」

藤沖は断言した。

「ただ、青大附属には中学高校大学を通じて、応援団がないという話を聞いています。また、応援団そのものを嫌う雰囲気、特に大学にはあるとも先輩たちから伺ってます」

「そうだなあ、イデオロギー的なものはあるだろうな。青潟大学の校風から言って、応援団の持つ規律性を受け入れる余裕がないというのもあるだろう」

「大学はまだ先のことなので、俺もまだ考えてません。ただ、せっかく気合を入れてがんばっている運動部の生徒たちや、大会に参加する文化部の生徒たちを応援するパフォーマンスはあってもいいと、俺は思います。それは決して、イデオロギーの問題ではないです。先生はご存知かもしれませんが、青大附中内には二年前より、『青大附中スポーツ新聞』という壁新聞が発行されてます。俺の一年下に当たる、現在評議委員長の新井林という」

言いかけたところ、麻生先生はうんうん頷いた。乙彦は当然、知らない。頷けない。

「ああ、噂は聞ってるぞ」

「はい、あれも新井林が自主的に始めたことで、それが少しずつ回りを巻き込んでいき、いつのまにか公認された形となりました。後輩に頭を下げるのはかなり悔しいですが、俺は、その行動力において彼を尊敬します」

新井林健吾のことを思い出した。

冬の体育館で、ふたり並んで二十周ほど走りつづけた、交流会準備の午後を。

最後は全力尽くして倒れ込み、ふたりで握手した、熱い思い出だ。いい奴だった。

——長距離には強い俺だったが、新井林はかなり食らいついてきた。あの根性で「スポーツ新聞」を発刊したというわけか。すごい。それにくらべてうちの内川は……。

思い出すと情けなくなるので、ここで思い出を止めて置いた。

桂さんと泉州のふたりが別の鍋で野菜ばかり食いつづけている。聞かれていない様子だ。

「そうか、わかった。だが、応援団のイメージははっきり言うが、あまり芳しいもんじゃない。それだけは覚悟しておいたほうがいいぞ」

話を一通り聞いて、麻生先生は頷いた。また牛もつ肉をさらにたっぷり盛り込んだ。

「強制的なイメージですか」

「そうだな。教師の、しかも担任の俺が言うのもなんだが、人間は命令されるのを嫌う生物だ。とかいいながらも、そうされることによって成り立っているのが社会でもあるが。もし藤沖が応援団を結成するのならば、まずやるべきことは『どういう団員を集めたいのか』をはっきりさせることだ」

話しながらも口はしっかりとともぐもぐ言わせている。藤沖はいつのまにか正座している。
「でないだ、やたらと物を壊したがる生徒だとか、威張りたがる奴とか、思ってもみない奴らが集まってくる。本気で青大附属を応援したいのかどうか、それをきっちりと見極めることだ。そのための目を養うことだが」

「はい、わかっています」

神妙に藤沖は答えた。麻生先生はたれを小皿にたっぷり注いだ。

「あくまでも、俺個人の考えだが、藤沖、お前はもう少し結成の時期を延ばしたほうがいいように思う。もちろん、応援団そのものは喜ばしいものだ。気合が足りないからなあうちの学校の生徒たちは！ だから、ケツをひっぱたく意味でもそれは必要だろう」

「反対、でしょうか」

少し、弱々しい藤沖の答え。

「だが、いきなり学校全体の応援をする前に、まず足元を固める必要があるんじゃないのか？ まず、うちのクラスの応援体制を整える、また同時に団結力を持たせること。それを二学期以降の目標としてまずクリアすることが必要に感じるぞ」

「うちのクラスをですか」

「そうだ。お前もよくわかっているだろうが、まだまだ英語科の連中は他人行儀なところが抜けていない。特に女子たちとの繋がりが弱い。これを何とかしたいと一学期の間、藤沖といろいろ相談してきたが、やはりこれは長期戦でやるしかないと腹をくくったよ、俺は。少しずつ、時間をかけて、これから先どうやってよい関係を作っていくか、それをまずはA組で藤沖が組み立てていく方が、後々応援団を運営していくに当たってプラスになるんじゃないのか」

「はあ」

かなり不満そうだが、素直に答える藤沖。きっと本心はそう思っていない。

「麻生先生のおっしゃることはごもっともだと思います。ですが」

また乙彦を見た。頷いた。

「俺は正直、評議委員向きではないです」

「おいおい、なんだいきなり」

「すべてのクラスメートに対して、公正な立場で接する自信はありません」

「……立村にか」

ぎょっとした顔で藤沖が黙り込む。乙彦と片岡は顔を見合わせた。

麻生先生は肉くさい溜息を、たっぷり吐いた。どうでもいいんだが、焼いている時の肉のにおいと、口臭と化したにおいとどうしてこうも違うのだろう。

「はい。ですが、逃げる気はありません」

藤沖は言い切り、乙彦を手招きした。しかたなく並ぶ。

「この一学期中、俺なりに考えた結果です。俺はA組の評議委員として、クラス全員を一丸とさせるための努力はしてきました。ですが、どうしても公平さに欠けた判断をしてしまいます。これは自分でも自覚があります」

「自覚があるなら直せばいいだろう？」

「はい、もちろんです。俺はそうします。ですが本当は俺よりも適任者がいます」

乙彦の肩を叩いた。藤沖のいつもの癖だ。身体をこわばらせたまま乙彦は黙っていた。

「関崎、こいつは外部生ですが、俺よりも器はでかいし、何よりも先入観なく人を見られる力を持っています。たまに突っ走ってしまうこともあります。この一学期の間俺は関崎を観察してきて、本来なるべき評議委員はこいつなんだと思うにいたりました」

「おい、藤沖いきなりなんだよ。俺は規律委員に」

また言いかけた乙彦に、藤沖は肉の吐息で黙らせようとした。

「附属上がりの俺たちにはどうしても、中学の出来事を基準にして物事を判断してしまう癖があります。もちろん俺も、その先入観は捨てるよう努力します。ですが、このままいいかげんなままA組の運営を俺が行っていくよりも、まっさらなままでうちのクラスを見つめていける関崎に、早い段階でバトンタッチしたいと考えています。もちろん、俺がA組を見捨てるわけではなく、クラス内を運営する力を早い段階で、譲りたいだけです」

麻生先生は頷きつつ、口を動かしつつ、聞いていた。

「関崎にはその意志を早い段階で伝えてあります」

事実ではある。頷いた。麻生先生と目が合った。

「麻生先生、現在クラス内の問題のひとつとして、立村の孤立化を挙げられてましたが、俺もそれは正直なんとかしなくては、とは思います。ですが、俺自身どうしても、受け入れられない価値観の持ち主を受け入れるほど、器はでっかくないです」

「それを広げる努力は」

「もちろんしますが、その前に卒業してしまう可能性もあります」

切り返した。

「今、俺たちが考えるべきは、一刻も早くクラスから孤立した立村を迎え入れる体制をこしらえることです。俺にはその力がない以上、まずそれができる関崎を迎え入れたいと考えます。その上で、俺は、俺なりに自分の器をでかくするよう努力します。先生、関崎なら絶対にやりとげてくれます。まだ後期改選まで時間がありますが、その時は応援、よろしく、お願いします」

いきなり藤沖が乙彦の後頭部を思いっきり下に押し下げた。

——藤沖は、早く応援団を結成したいんだな。だからだ。

今の話の内容から判断するに、藤沖の心はすでに、二学期以降の応援団結成に向かっている。しかし麻生先生からやんわりとストップをかけられた以上、なんとしても前に進みたい。そのための理屈として、乙彦を引っ張り出したのではないか。

——だが、その気持ちはよくわかる。

日々、応援団への想いを語る藤沖に「なんで俺をいいカモにして！」と怒る気はさらさらない。むしろ、そこまでして自分の目標を達成しようとする藤沖に、ほほえましいものすら感じた。やっぱり一本気なところが、自分と同じなのだろう。

「関崎、お前はどうかんだ？ もし、藤沖からバトンタッチされたら」

「される前から、立村に関する件は何かしたいと思ってます」

乙彦もしゃちほこばったまま、答えた。付け加えた。

「ですが、藤沖が一刻も早く応援団を結成したいのだったら、俺は協力します」

「協力するとは？」

麻生先生の箸が、乙彦の小皿に向いた。

「評議委員を受けます」

おなかの底から答えた。

藤沖に向かった。

「事情はよくわかった。その時は全力で協力する」

どちらからともなく握手をした。汗ばんでいた。ぎっちり握り締めた。

「いいか、今の話、絶対に言うなよ、片岡」

「言わないよ」

桂さんと泉州さんが二人の世界をこしらえて野菜を食らっている間、藤沖は片岡に念を押しした。何度もこくこく頷いているのに、しつこく続ける。

「絶対にな。西月にも言うなよ」

「……なんで」

吹き出したのは麻生先生だった。やはりこの場面では笑えない乙彦だった。

「西月に話したら、泉州にばれるだろ」

「でも、まだ口、利けないままだよ」

「ばかもの！ 手紙って手があるだろ！」

「あ、そっか」

口を押さえて片岡は改めて大きく頷いた。

「わかった、約束する」

「それにしてもまだ、あいつはしゃべれないのか？」

声を潜めたまま、藤沖は片岡にささやいた。かろうじて乙彦も聞き取れた。

「うん。ずっと、筆談。でも、うちで毎日、勉強いっぱいしてるって母さん言ってた。すごく頭いいって」

「そうか」

それ以上は尋ねなかった。向こうから話をしない限り、乙彦は知らないふりをすることに決めていた。水鳥中学時代は決して自分が選ばないやりかた、でも今の乙彦はそれを必要だと理解していたつもりだった。片岡の事情が乙彦には想像しきれないものだということも、感じていた。共通するのはただ、焼肉が美味しいと感じること。今の共通点さえ楽しめればいい。また、理解しあう時間は、たくさんある。藤沖の守るべき後輩のことも、立村と杉本のことも、片岡の事情も。それはまだ、じっくり向きあっていけばいい。

「じゃあ俺、洗い物します！」

乙彦は立ち上がった。空になった鍋と皿と小皿をまとめて盆に載せた。野郎全員が立ち上がらなくても、ここはひとりで全部洗うのが客人としての務めだと、改めて思った。

一学期終業式が終わった。

特段、珍しいこともなかった。

「関崎、お前、青大附属だからってみな、変わったことをするもんだって決め付けてるんでないの？」

「そういうわけではないが」

古川こずえがスカートのひだを摘み上げ、膝丈でひらひらさせながら乙彦に話し掛けてきた。

「ただ、通知表を教室で受け取らないというのは珍しいと思うぞ」

「あっそっか。初体験だねえ」

「大抵は教室にてきちんと手渡しされるのが筋じゃないのか」

「昔なつかしのスタイルを求められてもさあ」

古川はにやにやしなながら、ぱふっとスカートを膝に広げた。

「今この場でさ、つうしんぼの結果見て、落ち込むよかいいじゃんよ」

「どちらにしても、家で見ることになるんだろう」

青大附属の場合、通知表は後日、保護者名義で送付されることとなる。乙彦が見る前に、両親が内容を確認する形となる。さぞ両親はショックを受けることだろう。決して手抜きをしたわけではないけれども、やはりつらいものがある。学年トップ以外の結果を両親はこれまで見たことがなかったはずだ。

「うちはたぶん、お通夜だろう」

「お互い様よ。それよか関崎、これからさみんなで、学食で食ってかない？」

「みんなったら誰だ？」

藤沖や片岡が入っていないことは確かだろう。藤沖は例の女子と落ち合うためさっさと教室から出て行った。片岡は終了の鐘が鳴るやいなや、猛ダッシュで廊下へ飛び出していった。乙彦も本当は廊下に出たかったのだが、古川に呼び止められてしかたなく話しているに過ぎない。

古川は指を折って数え始めた。

「ええと、羽飛、天羽、難波、更科、あと美里に……」

「悪い、先約がある」

いったいこいつはこのメンバーに乙彦が混じる気あるのかと思っ込んでいるのだろうか。ありえないだろう。古川も無理強いはしなかった。

「あっそうか。しょうがないよね」

今度こそ乙彦は教室を出ようとした。どちらにしても古川とは夏休み中、クラス内の問題および後期以降の引継ぎについて相談しなくてはならない。連絡を入れたいとは思っている。しかし今すぐ話す内容ではあるまい。背を向けようとして、ふと尋ねた。忘れていたことがあった。

「古川、その面子の中に立村はいるのか？」

「いないよ」

短く返事が返ってきた。

「たぶん中学校舎に行ったんでないの、中学も同じく今日が終業式だしね」

「そうか」

事情を知る古川はそれ以上言わなかった。

——立村とは話をまだしていない。

あの視聴覚教室でのひと時以来、立村は乙彦を避ける。もちろん試験中休んだり、その後の追試なども続いたりなどで、物理的な暇がないというのもある。また体育の授業などでいろいろとすれ違う機会もあるのだが、露骨に逃げようとする。声をかけようとするだけで、背を向ける。

——そんなにやましいことがあるのか。

乙彦からしたら、きちんと話をしないまま夏休みに突入したくはない。

もっとも逃げられたままとしても、そのままあきらめる気はさらさらない。

どちらにしても立村とぶつかり合わない限り、互いに前には進めないだろう。

考えてみれば、急ぐ必要はないのだが早めに片をつけたい気持ちの方が強かった。乙彦の気性でもある。

——捕まえられるようなら、まずは中学校舎に行ってみるか。

七月終わり際の太陽はまぶしく、痛い。風が弱い。

藤沖の口からはっきりと、乙彦を後期の評議委員に推す意思を表明された。

麻生先生と片岡がそれをはっきり耳にしている。

もちろん他のクラスメートにはまだ公表されないだろうが、噂が流れるのは時間の問題だろう

。

そのあたりは乙彦も承知している。

しかしもうひとつの思惑を、まだ乙彦は隠したままにしている。

——立村を、後期の規律委員に押し込む。

藤沖がそれをすんなり呑むとは思えない。他の女子たちの反応も正直読めない。

——だが、やり遂げないことには。

どちらの方面から検討してみても、それが一番ベストな方法に思えた。

かつては青大附中の評議委員長を勤めた奴を、このまま野に放したままではもったいない。

だれよりもそれは、附属上がりだった連中が感じていることではないのか。

乙彦はゆっくりと歩を進めた。自転車置き場には寄らなかった。そのまままっすぐ中学校舎へ向かった。

できれば杉本梨南とは顔を合わせたくなかった。事情は十分理解しているつもりだが、実際何を答えればいいのか自分でもわからない。

——それになんだ？ 俺と静内とは関係ないというのはなんだ？

気になっていたことだが、つい聞くのを忘れていた。

聞いておきたかった。忘れていた。いい機会ではないか。

中学校舎の校門をくぐった。高校はすでに足元からなじんだ感覚がしみわたるが、中学に関してはまだ客人のままだった。

何度入ってみても、少しばかり緊張が走る。

砂利道を踏みしめ一度立ち止まると、あちらこちらに白いシャツ姿の男子が散らばっている。ほとんどもちろん中学の生徒だが、一部高校生も混じっているようだ。中にはシャツを脱いでランニング姿でうろうろしている奴もいる。女子はスカートをはいているという以外、特に目につくところはない。乙彦の視界に限って言えば、その中に立村も杉本も、また藤沖もいなかった。

——いないのならば、あとで電話をかけるなりすればいいだろう。

古川の話につられてきてしまったが、よく考えれば立村が必ず来ている保証なぞないのだ。

「関崎先輩」

後ろから呼びかけられた。立村でも、藤沖でもなかった。

「霧島か」

「覚えていただけて、光栄です」

おそらく同じ歳だった頃の乙彦なら決して遣えないであろう礼の言葉、それを霧島はさらりと述べた。しわのほとんど残っていないシャツをしっかりと腰で締め、暑さにもかかわらず汗の少ない顔で霧島は一礼した。

「俺は、一度会った人の顔は忘れないたちなんだ」

「僕も同じです」

ちょこっと張り合う言い方をしたものの、すぐに霧島は改めて穏やかな口調に変えた。

「関崎先輩には改めて、お礼を申し上げますつもりでした」

「別に俺は何も、お礼を言われるようなことはしていない」

少し甲高い声で霧島は否定した。

「いえ、今回の一件においては、関崎先輩のおかげでまとまったと言って過言ではありません」

「俺が何をした？」

もし視聴覚教室の一件を挙げるならば、それはたまたまのことだろう。何よりも不思議なのは霧島がなぜそのことを知っているかということである。

「さきほど立村先輩ともお話ししました」

「立村が？」

乙彦が問い返すと、霧島はすぐに、また中学二年生らしからぬ言い方で提案してきた。

「もしよろしければ、説明させていただきませんか」

——こいつ本当に、中学生なのか？

「青大附属中学生」という不思議な生き物を見るようだった。やはり乙彦にとってこの学校は、アリスのワンダーランドだった。

しかも連れて行かれようとするところは学校内ではない。

「内密にしたいので」

もちろん事情はよくわかっているなのでそれは理解できなくもない。霧島の立場からすると、生徒会副会長でかつ外見からくるミーハーファンも多い。

乙彦の顔はおそらく知られていないだろうが、壁に耳あり障子に目あり。

一般生徒にとってはたいしたことじゃないのだろうが、生徒会役員としてはやはり落ち着かないのであろう。

「ここなら人もいないので」

「確かにいないな」

さほど歩いたわけでもない。霧島は近くの神社を指差した。

「ここは夜になると何かが出るらしいので、女子は特に寄り付きません」

「まあ、それはそうだ」

「来るとしても年寄りだけです」

ずいぶん渋い趣味である。

「どちらにしても、うちの学校の生徒はきません」

切り出した霧島は、乙彦に一礼し、稲荷神社の赤い鳥居裏まで手招きした。白い神狐の像が二体、こちらを見守っている。

「関崎先輩のおかげで、一件落着きました。ありがとうございます」

改めて頭を下げられても困る。理由がわからないし、なぜこうも簡単に頭を下げるのが平気なのだろうか。もちろん何かきちんと理由があるのならばわかるが、霧島の下げ方にはどこかうさんくさい匂いがする。どこが、と聞かれると乙彦も答えられないのだが。

「繰り返すが、俺は何も役立つようなことはしていない」

「立村先輩から話をすべて伺いました」

霧島は切り出した。神狐の隣でそのままきちんと立ったまま。

「今回の話し合いをきちんと、外部の教師たちにばれないように行う案を出してくださったのは関崎先輩だと聞いています」

「ああ、それはたまたまだ」

説明があいまいなようだ。乙彦がそれなりの説明をしようとするさえぎられた。

「もちろん関崎先輩はそうおっしゃるでしょうが、僕が目から見るとそれは謙遜のし過ぎです。もしも関崎先輩が手を差し伸べてくださらなければ、青大附中生徒会最大のスキャンダルとして大恥をかかされることになったでしょう」

「あくまでも個人的な問題だと思うが、そう片付かなかったのか」

乙彦が尋ねると、霧島は神狐と顔を見合わせて頷いた。

「はい。関崎先輩はご存知ないのですか。藤沖先輩からどこらへんまで？」

「とりあえず、片付いたということだけだ」

「藤沖先輩はご自分の恥を隠したいらしいですね」

「やめろ。仮にも自分の先輩だろう？」

声を荒げるとまた霧島は神狐に向かい首を振った。

「僕は、能力ある人間以外は認めません。今回の一件を通じ、藤沖先輩の能力には疑問を感じま

した」

「その言い方は失礼だ」

「失礼かどうかは、今から僕の話を一通り聞いてからにしてください」

自分より二歳下とは思えないその態度。

——こいつはいったい……！

自然と握りこぶしを作っている。人が誰もいないのだ、一発張り倒すくらいでもいい。藤沖は乙彦にとってかけがえのない友だ。後輩にそこまで罵倒される相手では決してない。

しかし、違う言葉が勝手に飛び出した。

「わかった、説明しろ」

さらっと目が合ったその神狐は、妙に顔立ちが整っている。

——こいつは狐か。

「僕が渋谷先輩に対して嫌悪感を強く感じていたのは事実です。ですがそれは個人的感情であって生徒会の中に持ち込むつもりはありませんでした」

切り出したが、すぐに神狐を見つめた。乙彦へ目を向けるのがしんどそうだった。

「ですが今回の事件を通じて、人に自分のしでかした不始末を押し付けようとする人間と仕事をするのにどうしても耐えられませんでした。周囲の人たちは僕が潔癖すぎると言いますがはたしてそうでしょうか？ 生徒会という組織は小さなチームであり、その中でレベルの低い人間が混じることによりどうしても不協和音が起こります。それは生徒会役員経験をされてらした関崎先輩も、よくお感じだと思います」

「不協和音は確かにある。がそれはレベルの問題ではない」

乙彦の言葉を聞き流す霧島。

「生徒会役員の任期が切れるまでの間はそれも耐えねばなりません。もちろんそれは承知しています。義務ですから。ですがせめて、まともに働いている人間の邪魔をしないでほしいと要求するのは果たして間違っているのでしょうか？ 僕が彼女に要求したのは、自分の立場をわきまえ、僕および佐賀先輩の邪魔をせずに黙っていてほしい、というそれだけです。しかしそれを彼女は無視しました。それどころかさらに自分を押し出そうとし、僕たちが拒絶すると今度は自殺未遂などで憐れみを乞おうとする。ついには藤沖先輩をも色じかけで落とし、自分の味方をこしらえて、結局自分の罪を隠してしまった。そういう人間を果たして軽蔑せずにすむでしょうか？」

「霧島、お前は物事を偏った捉え方しているのではないのか？」

思わず乙彦が発すると、霧島はまた神狐に向かい首を振った。乙彦の目はまだ見ない。

「僕が男尊女卑主義者と思われているのはしかたないことです。僕はただ、レベルの低い人間を嫌うだけです。それは男女関係なく、藤沖先輩のようにあっさり渋谷先輩の誘惑を避けられなかった人間も含めて考えていることです。女子であっても人間には佐賀先輩なり、古川先輩なり、人間として受け入れられる人は確かにいます。そういう人間以外を僕は認めたくないそれだけです」

「じゃあ俺はどうなんだ？ なぜ、藤沖の友人である俺を、受け入れようとする？」

霧島は答えなかった。すぐに話を逸らした。

「とにかく僕は、残念ながら生徒会副会長という立場上、元生徒会長である藤沖先輩の言い分を受け入れざるを得ませんでした。悔しいことですが、二年の歳の差はあまりにも大きい。藤沖先輩に頭を下げられて、すべてを丸く治め、ふとんに地図を書いた張本人が別の女子であることをやんわりと認める立場を守らざるを得ませんでした」

「藤沖が説得しにきたのか？」

「そうです。藤沖先輩は、土下座をして僕たち生徒会役員たちに頼み込みました。そこまでされて、足蹴にするほど僕は上下関係を軽くみてはおりません。しかたなく、僕は佐賀会長の意向を受け入れ、だんまりを通したわけです。ただし条件として、渋谷先輩には一切役員として行事に口出しをしてもらわないこと、いわゆる幽霊生徒会役員のような存在に甘んじていただきたい、それだけは伝えました」

「藤沖が、土下座までしたのか！」

乙彦は神狐の耳をつかみ、一步前に出て叫んだ。

浮かんだその映像を認めたくなかった。あの藤沖が、下級生たちに対して土下座したという場面を、一瞬たりとも映したくなかった。

——藤沖が、まさか土下座……？

いや、きっとそれは事実だろう。乙彦もそれはうすうすわかっている。それだけのことをしてまでも、渋谷という女子を守りたい思いが奴にはある。

自分がひっぱってきた青大附中生徒会にて軽蔑されてしまうという犠牲を払っても、なんとかしたかったのだ。

霧島は薄笑いを浮かべた。

「おっしゃる通り、僕も驚きました。藤沖先輩はおそらく、渋谷先輩に色仕掛けで落とされたに違いありません。全く、男子たるものなぜ、女子の色香に弱いのでしょうか。最初は正當にその女子のレベルを認定していたのに、突然何かとち狂い守ろうとする言動が、僕には理解できません。そうです。藤沖先輩は最初、露骨に渋谷先輩を軽蔑していました。正しくその真価を見極めていたはずですが、それが、突然なぜ、あの女子を守ろうという言動に出たのか？ 同じ行為を僕はつい最近身近にて確認しましたが、それは相手が特殊だからだと納得していたはずでした。しかし、それがひとり、ふたりでないとすると、いったいこの学校にモラルというものは存在するのでしょうか？」

口を片端、くいと引いた。

「犯人を曖昧なままにして幕を引くことに僕はどうしても納得いきませんでした。ですがそれを受け入れざるを得ない。しかし立村先輩の助言により、僕はあえてこの屈辱を耐えることにしました」

「立村はどんな助言をしたんだ？」

「結論を言ってしまうと、『どんなに隠したところで、明るみにされない事実はない』ですね」
霧島はさっぱりと答えた。

「事実だが、あたりまえのことだ」

「そうですね、関崎先輩ならそうおっしゃるだろうと思っていました」

乙彦をкаろうじて「先輩」扱いしてはいる。しかし、乙彦にその感覚はない。

「僕は今まで立村先輩を、できそこないの評議委員長経験者としか思っていました。しかし立村先輩のおかげで僕たち生徒会に本来あるべき権限を取り戻すことができたばかりか、きわめて平和な形で学内を運営している実情を見逃すわけにはいきません。さらに、正々堂々を掲げてきた藤沖先輩が、自分の誇りを捨ててまでも真実を曲げようとし、僕たちも納得いかぬままにそれを受け入れねばならない！ ですが立村先輩は、たとえそうだったとしても、いずれ真実は白昼の下明らかになるはずと語っておられます。そのために僕たちがあえて、何も言わずに正々堂々と振舞いつづけることにより、いずれ答えはわかる人に伝わるものだと、断言されました」

——立村がか？

耳にはまた、ぐるぐると渦を巻く音が響いた。

「以前の僕なら、ばかばかしいと切り捨てたでしょう。しかし、いくつかの例を挙げられて説明されたならばそれを受け入れないわけにはいきませんでした」

「いくつかの例とは？」

「僕の、姉です」

初めて霧島は、神狐ではなく乙彦にうなづいた。

「聞いたことがある」

「ろくでもない噂ばかりでしょうが、事実です。学力を含めた低レベルの能力しか持たないくせに、コネで青大附属に入学し、当然中学卒業と同時に附属高校への進学を拒絶されたことに逆恨みし、わざとらしく自殺未遂をやってのけ、たくさんの人たちに迷惑をかけた女です。現在は可南女子高校という別名女子刑務所に押し込まれてますが、僕からすればまだまだ甘い。僕の家族に対してあの女がしたことの数々は、永遠に償われることはないでしょう」

「自分の家族にそこまで言うのは間違いだぞ」

「関崎先輩ならそうおっしゃるでしょうと思っていました。ですが僕の母が精神を病む寸前まで追い込まれ、かつ周囲から自殺未遂させるほどに追い詰めた家族として見られる苦しみ、僕たちは精一杯姉に対して尽くしてきたのにそれを無視される立場。すべてを否定された家族の苦しみを理解してもらえとは思いません」

乙彦は黙った。

「僕の姉も、本来ならばうまくごまかす形で高校進学させられても不思議はありません。しかし、能力の欠如はどんなに隠したところであらわになるものです。その他いろいろな事件を踏まえて、この場に存在すべきではない人間と判断された以上、それは当然追い払われるべきなのです。個性の違いではありません。人間としてのレベルの違いです」

霧島の端正な顔が赤らんだ。すうっと汗がにじんでいる。王子様然としたその顔に険しいもの

を見たのは初めてだった。

「どんなにごまかそうとしても、真実は僕の姉の件と同じくくはっきり浮かび上がるはずです。僕はそれに賭けることにしました」

「立村がそんなことを言ったのか！」

——違う、どう考えても間違っている。人間をレベルで区分けするなんて間違いだ！

叫びがどうしても喉からあふれそうになる。

「はい。立村先輩はご自分の例を出してそう語られました」

霧島は乙彦の目を見た。鋭かった。

「あいつの言う自分の例とはなんだ？」

「立村先輩が小学校時代に犯した罪が、三年後にしてすべてが明らかになったという事実です。藤沖先輩から聞いていないのですか？」

「聞いたことはある」

「ならば繰り返しません。立村先輩はこれから先、高校以降十字架を背負っていかれるおつものようです。それが正しいと僕は思いません。藤沖先輩が使い物にならない以上、能力のある人間がきちんとあるべき地位に立つべきです。数少ないまっとうな価値観を持つ立村先輩には、できるだけ早く表舞台に戻っていただきたいということを僕は伝えました」

「あいつはなんて答えた？」

「『期待するのなら、関崎にしたほうがいい』とだけ、おっしゃいました。今のところは特に動くつもりはなさそうです」

「だから俺に声をかけたというわけか」

「僕も以前から、そのように思っておりましたので」

まだ声変わりが終わりきっていない、甲高い声で霧島は答えた。一瞬神狐のしっぽを握った。その手を乙彦は振り払った。

「いいかげんにしろ！」

神社の境内には誰もいなかった。だから思いっきり怒鳴ることができた。隣の神狐と同じ顔を霧島はしていた。

「いいか、人間にレベルなんてない。習ってないのか日本国憲法も福沢諭吉も！」

溜めてきたこれまでの苛立ちを、一気にぶつけた。

「藤沖の言動を納得いかないというならばそれはわかる。俺も納得がいかないからな！ だがそれを人間レベルの問題としてなぜ決め付けようとするんだ？ 学力や運動能力で人間の価値を決め付けるような教育を青大附属はしているのか？ それとも霧島、お前の一方的な思い込みか？」

お前の姉さんの事情も噂でしか聞いていないが、成績が悪いという理由で切り捨てられるなんて考えがそもそも間違いだ。少なくとも俺は水鳥中学時代、そういう発想はしていなかった」

ここまで言いかけたが、すぐに首を振った。違う、嘘が混じっている。勢いがうせた。

「……いや、間違いだ。俺も昔はそういう思い上がったことを言っていた。決して霧島、お前を責められない」

「思い上がってなんかいないですよ」

「いや、違う。俺は自分と違う個性の人間を同じように見下していた。見た目人間レベルを判断していたこともある。成績が良いということでできない奴を軽蔑していた。だがしょせんそれは俺の勘違いだった。そのことに気付いたのは中学卒業間際だ。お前のことを怒鳴る権利はない。だが」

両手を握り締めた。あの頃の自分なら殴りつけていた。でも殴る権利がないということも理解していた。あの頃と同じく人間レベルで見下していた自分が、今、霧島の姿で側にいる。

「お前は一刻も早く気付け！ 人間は成績や能力だけで判断されるべきじゃないんだってことを理解しろ！ 貴重な中学時代を無駄にするな！」

「無駄にされたのですか」

冷静な受け答えだった。

「三年もだ」

中学三年間、生徒会役員だったあの頃に。

「気に入らない奴がいるのは当然だ。藤沖のやり方が納得いかないのも、立村の意見に共感するのもお前の自由だ。だが、気に入らないからといってすべてを見下すというのは間違いだぞ！ 軽蔑する以外にもっと別の気持ちを持つことはできないのか？ 怒ってもいい、怒鳴ってもいい、どうしてぶつけようとしないんだ？ お前は納得いかないとどうして藤沖に言わなかったんだ？ あいつは話をすればわかる奴だぞ。それくらい、同じ生徒会役員だったんだからわかるだろう？」

「関崎先輩」

静かな声で、霧島は受けた。

「先輩のご助言、確かに」

「わかっているのか！」

「はい、ただ先輩は、まだご存知ないのではないですか？」

「何をだ」

「心底腐っている人間が、いるということをです。更生なんて全く期待できない、疫病神から身を守ることが間違っているとは思いません。ですがそういう人と出会う機会がないのなら、お分かりにならないのは仕方ないことです」

霧島は一礼した。最後に言い残した。

「お話しさせていただき、立村先輩がおっしゃる通りの能力ある先輩だと、改めて納得しました。どうぞこれからもよろしくお願いします」

「お前正気か？」

あれだけ怒鳴ったにもかかわらず表情が変わらない。

「価値のある先輩とは、これからもお付き合いさせていただきたいので」

やはり乙彦の言葉は、届かなかったようだった。

霧島のことを軽蔑はしない。しないが間違っていると思う。

——立村はどういうつもりであいつに接触したんだろうか。

神狐の顔をひっぱたいてみた。さっき触った時には気がつかなかったが、太陽の熱でかなり熱せられていた。やけどすれすれの感覚に慌てて手を放した。

——立村も、間違っている。

黙っていても真実があらわになるからではない。間違っていない真理だ。

——確かにばれるだろう。本当のことは黙っていても知られるだろう。藤沖の言動も、その渋谷とかいう女子のしたことも。霧島の姉のインチキ入学も。

だが、再起不能になるほど、叩きのめされる必要はない。立村のように、

——過剰なほど、自分を罰することはイコール、逃げることじゃないのか？

乙彦には受け入れられない考えだった。霧島も言ったではないか。これから先、立村が表舞台に立つことを期待すると。能力ううんぬんは別として、立村を必要とする場所は確かにあるのだ。だからこそ、罪を意識するのならばなおのこと、

——立村は戻ってくるべきだ。逃げ出したすべての場所に。

時計を覗き込むとまだ一時半だった。乙彦はポケットから先日、久田さんからもらったテレホンカードを取り出した。生徒手帳にメモした立村の電話番号を探した。

——品山の近くなら、今日はまだ、自転車で行けるだろう。

まずは腹を満たそう。まずは学校に戻り自転車をもち帰り、その後であいつの家に電話をかけよう。捕まるまで何度でも。

——夏休みに入るまでに、伝えるべきことを、急いで告げよう。霧島に訴えたことと同じことを、言葉を変えて。

一ヶ月前、古川こずえに連れて行ってもらったカラオケボックスが、確か品山の方だった。一度通った道は忘れない。乙彦はまだ午後になりきれない日の光を背負い、自転車をこぎ続けた。

——立村と、夏休みが始まる前に会うんだ。

制服は家に脱ぎ捨ててきた。いつものジーンズと白いTシャツのみ。袖があるのも邪魔で、方までロールアップした。しかし自転車を漕ぐうちに自然と垂れ下がってくる。汗がだらだら流れるが、それを拭き取るのもうっとおしい。

一度思い立ったら止められないのが自分の性格だ。青大附高に入学してからもそれは一切変わっていない。ただ、どうしても少し考えねばならない一呼吸は必要だと、思うようにはなった。つっ走る前にはタイヤがパンクしていないかを調べるとか、前もって電話をすとか。

——さっきはいなかったが、そろそろ着いているころか。

家で焼きそばを一気食した後、立村宅に電話を入れた。まだ戻っていなかったようで、コール音だけが耳元に響いた。もちろんその後でどこかに出かけたのかもしれない。古川たちが主催したという一学期打ち上げに参加したのかもしれない。

ならば、本人が在宅かどうか確認してから走ればいい。それを待ってられないのがやはり今までの乙彦だった。

——待っていたら日が暮れる。俺も夜は夜でやりたいことがある。

まずは品山まで向かい、それから考えよう。

先日のカラオケボックスまで辿り付いた。ここいらで一息つく。

実は試験が終わってから、家族で……半ば乙彦が説得した形となるが……五時間くらいたっぴり歌いまくったので迷うことはなかった。最初は渋っていた癖に結局一番盛り上がっていたのが父と兄だ。とにかく、歌は家族の共通語だということがよくわかった。

そんなのはどうでもいいことだが、そこで先日席を同じくした立村は、果たして何を思っているのだろう。まずはもう一度電話をかけてみることにした。公衆電話を路沿いに探すとピンク色のチラシが巻きつくように張り付いているボックスを見つけた。外が見えない状態だ。自転車を脇につけて、ボックスに入った。入って後悔した。こりゃ蒸し器だ。

半分酸欠状態になるのを覚悟して、テレホンカードを差し込んだ。ポケットに押し込んだ生徒手帳を取り出し、立村の電話番号を探す。

すぐに繋がった。今度は直接、奴が出た。

——はい。

「立村か？ 関崎だ」

電話の主はしばらく黙ったが、かすれた声で返してきた。

——関崎か。

「そうだ」

——何か用か。

「お前と直接話がしたい」

——いきなり言われても。

「いや、お前の家の側まで来ている。この前のカラオケボックスの近くまで自転車で来た」

また黙った。どうも立村という奴は、困ると黙る。

「だから、これからお前の家に行きたい。住所録は持っている」

一応、青潟市内の地域地図は頭に入っている。たぶん勘で行けるとは思うのだが。

——来るのは構わないが。

「わかった。じゃあ今から行く」

——ただ、行き方本当にわかるのか？

感情を平べったくした声。電話の細かな雑音に絡まって、さらに読み取れない声。たぶんそれが立村の思いやりだとはわかっているつもりである。

「品山駅まで行くが、そこまで迎えに来てもらえるとありがたい」

——わかった。

乙彦は電話を切った。押しかけるようなものなのだが、野郎同士遊びに行く場合、大抵このパターンじゃないだろうか。立村だからこそ、わざと気を遣ってやったところもあるのだが、やはり男子の定石にたがわず奴もあっさりOKしてくれた。

てっきり電話口でがしゃんと切られるかと覚悟をしていたのだが。

ボックスから出てきて、両手を真上にあげ、ゆっくりと深呼吸をした。しゃべっている時は意識しなかったが、あと五分くらい籠っていたら完全にぶっ倒れていただろう。自然の熱さが心地よいなんて、狂っている。

しばらく車道を走ると、青いプレートで「品山駅」への道案内が現れた。それに沿って漕いでいくと今度は舗装されていない路に出る。めげずに漕いでいくとようやく線路が見え始めた。沿って走れば品山駅はすぐそこだった。屋根のある小さな駅だった。

まだ立村の姿はなかった。

——そりゃそうだな。電話をかけたばかりだ。

どのくらい駅から立村の自宅が離れているのかはわからないが、そうそうすぐに来られる距離ではないだろう。実に今日は漕いだ。太ももが張ってきた。

しかし、立村はこの距離を毎日自転車で通っているというわけだ。

それだけで十分尊敬に値すると思う。

乙彦はまず、駅の待合室で水のみ場を探した。まさか缶ジュースを買うなんて不経済なことできやしない。猛烈に喉が渴くのは、路すがら土ぼこりを吸い込んだからか。しかしない。

——水道の水でもいいか。

売店や自動販売機に並ぶ色とりどりのジュースを横目に乙彦は、男子トイレに向かおうとした

。後ろの方で、自動販売機から缶の落ちる音がした。唾を飲み込もうとすると呼びかけられた。

「関崎」

立村が、冷えたコーラの瓶を片手に立っていた。

この炎天下の中、半そでのデニムシャツの上に水色のパーカーを羽織っている。

「これ」

差し出されたコーラを受け取った。瓶の回りにはたっぷり水滴がくっついている。それだけで手がひんやりした。快感だ。

「ありがとう」

立村は何も言わず、待合室の椅子に腰掛けた。乙彦もその隣に座り、コーラ瓶の口をひねった。半分飲み乾し、立村に瓶の口を向けた。

「お前も飲めよ」

「いい、いらない」

俯き首を振った。

「人が口をつけたもの、食べたり飲んだりするの、苦手なんだ」

ずいぶん潔癖症なところのある男である。めずらしい。

「いや、別に、関崎が汚いとかそういうわけじゃない」

「だいたい想像はつく。わかった。全部飲ませてもらう」

それだけ喉は渴いていた。すべて飲み干してもまだまだ腹には余裕があった。

駅にはまだ列車が到着しないようで、人もまばらだった。

「この時間はあまり人がいないのか」

「この駅からは、あまり乗らない」

立村は頷き答えた。

「急行の停まる本品山駅まで自転車で行ってそこから乗るパターンなんだ」

つまり品山駅は鈍行しか停まらない駅ということである。それならしかたない。

しばらくコーラの炭酸が腹でふくれるのを待ち、黙っていた。立村は今のところ乙彦に対して「なんで来たんだ？」という問いを発していない。むしろそう聞かれる方が自然だと思っていた乙彦は正直、戸惑う。聞きたいなら聞けばいい。こちらにも目的があってここまで自転車を漕いだきたわけなのだから。

「関崎」

「なんだ」

一分くらい間が空いたろうか。立村が正面をじっと見据え、声を発した。

「聞いていいか」

「ああ」

「関崎はこの前の、あの女子と、付き合っているのか」

——あの女子って、おい、静内のことか？

立村の発した思いがけない言葉に、乙彦はコーラ瓶を落っこした。割れなかった。あわてて拾った。立村がそれを受け取りそのまま抱いた。

「あの女子というのは、誰のことだ」

「視聴覚教室で、隣にいた、B組の」

名前を出さなかった。諦めるしかないだろう。静内菜種のことだろう。外見については何も言わない。

「付き合いはいない。いないが、友だちだ」

「本当に、それだけか」

立村はまた正面に目を移し、小声で問うた。なんで目を見ようとししないのだろう。見られてもやましいことはないのだが。特に静内に対しては。

「ない。あいつは面白い、いい奴だ」

「あいつ、か」

また立村は一人ごちた。

つい、静内に対しては男子と同じ人称で呼んでしまうくせがある。野郎感覚で捉えてしまいたくなる。その口癖が出てしまう。

「別に青大附属では珍しくないだろう、そういう友だち関係は」

「そうだな、確かに」

立村が俯き加減に、そしてゆっくり尋ねた。

「なら、これから先、付き合うつもりはあるのか」

「わからん」

これも正直に乙彦は答えた。

「なぜ、そう思う？」

「先のことはわからないからだ」

静内がどう思うかは別として、これから先付き合いの形が変化することは、可能性としてかなり高いはずだ。今のところ、静内が乙彦のことを「親友」と断言してくれている以上、すぐその関係が変わるとは思えない。

「なら、杉本とこれから先……」

立村が言いかけた。すぐに断ち切らせた。

「ない、去年の二月に話したことは、変わっていない」

食い下がられた。やはり立村は乙彦の眼を見ようとししない。霧島と同じだ。

「先のことはわからないだろう？」

「わからないが、これは俺の確信だ」

こっちを見ようとししない立村の横顔を、乙彦は見据えた。夏の高校生男子に似合わない色の白さが蠟人形のようなだった。表情は変わらなかった。

「そうか。杉本に対しては、変わらないのか」

「それは去年話したはずだ」

本来この話題も、立村の家で持ち出すつもりではいた。静内の前で「この人は関係ない」とか

というわけのわからないことを言われた以上、きちんとその意味を問いただしたかったからだった。しかし、いきなり切り出された以上は、この場が公共スペースであろうとも関係ない。話を受け止めるべきだと思う。なぜ立村が、ここでいきなり話を持ち出そうとしたのかも理解しかねるところがあるのだが、それを掘り下げる余裕はない。

「俺が関崎にこんなことを頼むのは、間違っているかもしれない。だが、頼む」

コーラ瓶を床に置くと立村は周囲を見渡し、小声で乙彦へ向き直った。今度はきちんと目を見た。

「これから先、お前が誰か他の女子と付き合った場合、できる範囲でいい、杉本の前に見せないような付き合いにしてくれないか」

「前に見せられないとはどういうことだ？」

言われた意味が理解できない。問い返すと立村はまた、左右を見た。乙彦の見る限り、側には老夫婦が二組ほど、次の鈍行列車を待っているだけのようだったが。

「杉本は、来年の三月で青大附属から出て行く。予定通り、公立高校試験を受験して、他の学校に進学するはずだ。もう青大附属には戻ってこない。でもせめて、公立の試験が終わるまでの間、杉本をこれ以上不安にさせたくない」

「どこの高校を受けるんだ」

「青潟東。本条先輩の進学先だ」

——やはり、公立のトップ高校を受けるのか。

しかし、公立の試験というと三月初旬だったはずだ。乙彦は念のために確認した。

「立村、つまり俺に来年の三月まで、静内と付き合うなど言いたいのか」

頷いた立村を、次の瞬間乙彦は思いっきりはたいた。本気ではないがもちろん頭のとっぺんだ。立ち上がり外を指差した。

「ちょっと来い、外で話すぞ」

「いや、外はまずい」

「こんな薄暗いところで話していたら、いつまでたっても埒が明かないだろうが！」

ひなびた駅の待合室で、しけた恋愛沙汰の話なんて聞きたくもない。

うじうじした話をするよりは、きちんとお天道様の元、言いたいことをきちんと伝える方が何倍もすっきりする。人の目も見ないで、わけのわからないことをぐじぐじ言うよりも。霧島と神狐を相手に怒鳴り散らしたあの時間の方がずっとさっぱりしていたはずだ。

「話をするだけだ。お前がなんでいきなり、静内に対してわけのわからないことを言ったのか、その理由を論理だてて聞きたいだけだ」

見境なくかっとなったわけではない。もし本気で血が昇っていたら、たぶんその場で張り倒していただろう。一年前までの乙彦ならたぶんそうしていた。さっきの霧島に対してもおそらく、そうしていただろう。

立村にせよ、霧島にせよ、怒鳴るだけでは通じ合えない。

青大附属の生徒たちすべてに通じるものがある。

それを乙彦は、あえて正攻法でぶち壊そうとしてしまう。

少しずつ作法はわきまえてきたとはいえ、やはり自分は水鳥中学出身の関崎乙彦なのだ。変わっていない。

腕を捕まえ、乙彦は立村を駅の外へひっぱり出した。

いやいやながらも、それでも無理じいではなかった。

しかたなく連行されたという風に外へ出たとたん、くいと立村の足が止まった。

「どうしたんだよ」

一気に全身がトーストされるような熱と共に、重たく動かない立村の腕。

もう一度ひっぱろうとしたが、やはり動かなかった。

自転車置き場に向けられたその視線の先。

見えたのは、タンクトップにずるずるのボンタンをはいている男子高校生の集団だった。中にはきちんと細い腰の部分でベルトを締めている男子もいるのだが、どうしても体格のよい奴ほどボンタンも形が決まっているために、目だってしまう。決して珍しいものではない。水鳥中学でもたまに総田とそのお仲間一段がこんな格好をしていた。

「立村？」

問いかけに答えなかった。立村は一步、駅の中へもぐりこもうとし、また足を止めた。別に目の前のボンタン短足集団がガンをつけにきそうな気配はない。ただ駅の片隅でのんびんたらしと缶ジュースを飲んでいるだけだ。煙草を吸っているわけでも、シンナー袋に口をつけているわけでもない。

「どうした」

乙彦は立村の側に戻り、耳元に問い掛けた。

「なんでもない」

「なんでもなかったら、外に出られないなんてことはないだろう。あいつらと何か、因縁でもあるのか」

「……自転車はあそこに置いたのか」

全く関係のない答えを立村はした。

「ああ、鍵もかけてある」

「家に、まず案内する。自転車で行こう」

完全に蛇ににらまれた鼠状態といえ、一番正しいのか。

——こいつなぜ、いきなりこんなに、気弱になったんだ？

もともと立村は強気で怒鳴ったりするタイプではない。

唯一、雅弘相手にストレートパンチを食らわせたことくらいだろう。巷の噂でも、腕っ節の部分で立村の武勇伝を聞くことはない。ただ、藤沖や古川から、小学校時代にやらかした派手なけんかの話を聞くに留まる。おそらく、やられるほうだったのだろう。

だが、それでもすでに三年以上経っているはずだ。

顔を見上げると血の気は完全に退いている。

硬直したその身体は何を覚えているのだろうか。

——やはり、あの噂は本当だったんだな。

乙彦は確信した。イエスかノーか、そのあたりは不明だが、立村が追い詰められるだけ追い詰められ、窮鼠猫を噛む状態でしでかした大事件の噂、あれはきっと、本当だ。その後自分の罪におののいて、今だ自分を罰しつづけているその結果が、今の青ざめた立村の姿に相違ない。

話を聞くのは、無理に外ではなくても、家の中でもできる。

まず乙彦ができることは何なのか。

「立村、自転車、取りに行くか」

乙彦は腕を立村の肩に回し、強く背中を押した。はっきり言い放った。木の人形が倒れそうになるかのように、びこびこと歩き出した立村に、乙彦はさらに続けた。

「なにかあったら、俺が加勢する。堂々と取りに行け」

ガンつける必要はない。乙彦の見る限り、いかにも不良っぽい格好の連中は決して立村を叩きのめそうとしててぐすね引いて待っているわけではなさそうだった。ただ、たまたま、そこにいるだけ。よくよく見ると駅の側には小さな交番も建っている。怖がる必要なんてない。ただ、立村ひとりが、過去の罪に自分を閉じ込めて震えているだけなのだ。

第三者の目から見ると、それがくっきりと読み取れる。

一年前の自分ならば、決して理解できなかったものが浮かび上がる。

ボンタン集団は、立村の肩を強引に抱いた乙彦に一切邪魔をしようとはしなかった。ちらとこちらを見てひそひそ話をしてはいたが、ただそれだけだった。ただ直接触れる立村の背中の震えは、今だ止まっていなかった。自転車のハンドルを握り締めた時も、乙彦の遠目から見ても、まだ引きつった表情は元に戻っていなかった。震えたまま全速力、先頭を切って走る立村を、乙彦はそのまま自転車で追いかけた。猛スピードで走り続けないと、おびえきった立村を捉えることはきっとできなさそうだった。

立村の自転車に先導され、舗装されていない路を走った。駅から離れていくに従って立村も落ち着いてきたようで、何度か乙彦を振り返っては問い掛けるような表情を見せた。そのたびに乙彦は、首を振った。

「家には誰もいないから」

草むらのならされた路で並んだ時、立村が呟いた。やはり自分の家へ連れて行くつもりなのだろう。それはそれで構わないと思うのだが、ふと見あげれば太陽が気持ちよく降り注いでいる。暑いといえば暑いのだが、だんだん風がするすると混じり始めていてどこことなく心地よい。

「いや、外でいい」

自然と言葉が飛び出していた。信じられない奴と言わん顔で乙彦を見る立村。

「暑いだろう？」

「夏だから、暑いのが当然だ」

「それはそうだが」

立村は自転車のスピードを落とし、ゆっくり止めた。乙彦も続いた。

あらためて立村の様子をじっと伺う。

——さしで話をつける時、相手のステータスエリアには入らないこと。

これこそ男子の鉄則だ。ぶつかり合う際に決して忘れてはならない一点。いくらこちらの言い分が正論だとしても、相手に有利な場所で勝負をすると大抵不利な結果となる。これは青大附属に来て改めて知ったルールのひとつだった。

——立村の家で話を進めたらたぶん、あいつは自分の殻に籠ってしまう。

——入学当時、あいつに連れられていった喫茶店の時のように。

乙彦も立村の性格を少しずつ把握しつつあった。もちろん逃げようとするのなら無理に追いかけてはいけないとも思う。思うのだが、しかし今だけはきちんと向きあって話をすべきだろう。英語科一年A組の今後についても。また、立村本人のためにも。

周りを見渡すと、側の小路角に「品山小学校」と立て看板を発見した。通学路らしいが人気は全くない。自然の中、というわけではないのだが、雑草がふくらはぎ近くまで広がっていて、木陰を頼むような樹木も見当たらない。コンクリートよりはましだが、かんかん照り付けていることは事実。また汗が流れるのをたっぷり感じた。

「ここで話したいことがある」

乙彦は真正面から言い切った。細い肩をかくりと落とし、立村は頷いた。

「話は聞くよ」

かといって、何から話せばいいのだろう？

——こいつ、一体俺に対して何を構えているんだ？

切り出し方を間違えたら最後、立村はぱたりと心を閉ざしてしまう。

そして乙彦もこういう場面に慣れていない。

もっというなら、立村タイプの内気で人見知り激しい男子と親しく付き合ったことも、次つはあまりない。もう少し自分から歩み寄ってくれるようなところがあればまた別なのだが。

「単刀直入に言おう。俺は、立村、お前に復活してもらわないと困る」

まずは、一気に言い放った。全身が燃える感覚あり。伏目がちに立村は聞いていた。

「復活するとは、つまり、お前に英語科の運営する立場、つまり、委員に戻るべきだということだ」

相手に聞かれたわけでもないのに、説明をしてしまう。やはり立村は黙っていた。

「それは、俺ひとりが考えていることではない。藤沖も、古川も、それと他の連中も、あと麻生先生もだ」

「まさか、それはないだろう」

感情の籠らない声で立村は言い返してきた。怒りも何もない。だから読めない。

「お前がそういう声を聞こうとしないからだ。とにかく、後期以降このまま英語科の平のままにしていることは、許されないと見え」

「関崎、そんなことを伝えるために、品山まで自転車を漕いできたわけか」

やはり何も心の響きを感じない声が返ってきた。

「ああそうだ。一番のテーマはこれだ」

すんなり受け入れられるとは乙彦も思っていなかった。また一番伝えたいことというのを絞り込むこともできなかった。ただ思いつくままに述べただけである。しかたなく乙彦は続けた。どこからともなく蝉の声が頭の上から響き渡ったが、まだほんのわずか。会話するに支障はない。

「お前がいろいろ事情を抱えていて、そのためにしかたなく身を潜めているということは、この一学期でよくわかった。藤沖からも、古川からも、その他いろいろなところからも話は聞いている。だが、外部生の俺からしたら、だからといってこのまま元評議委員長だったお前が、このまま何にもしないで過ごすのは間違っているように思う」

「間違っていないさ」

「いいや、間違っている！」

断言したところ、立村はすっと目を上げて乙彦を見据えた。かすかに火がついたようだった。だがこの程度の点火では、まだまだ逃げられる。とことんぶつけるしかない。

「立村、お前なら今の英語科のクラス状況がどういうものかわかるだろう？ 藤沖は後期、評議委員を降りるかもしれないと話している。応援団結成の準備だそうだ。自然と男子評議委員のポストが空くはずだ」

「もう関崎に後釜は決定していると聞いているが」

——やはり知っているのか。

意外ではあったが、さもありなんと思える。附属生同士のアンテナは乙彦が想像している以上に鋭いらしい。特に、元評議委員長だった立村のネットワークはかなり広いのだろう。

「もし推薦されたら受ける覚悟はある」

「そうか」

立村は短く答えた。再び黙りこくった。

「だが、あくまでもそれは仮定の話だ。知っているだろうが俺は、バイトで授業料を稼がねばならない立場だし、仮に評議委員を受けたとしても百パーセントこなせるかどうかはわからない。もちろん努力はする。手抜きはしない。だが、それをひとりで背負うというのは難しいと知っている」

「古川さんがいるだろう、それに」

「女子と男子とでは違う」

遮り、続けた。

「まだ、後期改選は先のことだし、藤沖の応援団の件もまだ時間がかかりそうだとはいっている。だが、仮に俺が評議に立った場合、外部生の立場ですべてを把握するのは不可能だ。だから、あえて、頼みたい。俺と一緒に、英語科のために立ち上がってほしい」

「なぜ？」

また、かすかな声で、正面から問い掛ける立村。なぜ羽織のパーカーを脱がないのだろうか。なぜ、ほとんど汗をかいていないのだろうか。周囲の雑草とほぼ変わらないまっすぐ加減で、両手を軽く組み、祈るような格好でいるだけだ。

「お前には、それができるんだということが、俺にわかっているからだ！」

「関崎はまだ、俺について本当のことを知らないからそう言えるんだよ」

さとすように、穏やかに。

「俺にそういう権利がないことは、すでに藤沖や古川さんから聞いているんだろう？」

「ああそうだ。噂だけは聞いている。しかし俺は、実際この眼で見て、感じたことしか信じない。立村、俺は一年前、うちの中学の図書準備室で見た、あの場面を忘れてはいないんだ」

言うつもりではなかった言葉が、芝居がかった風に飛び出してきた。

口にしながら思い出した、あの光景を。中学二年・二月。図書準備室で立村が初めて示した、男としての激しい怒りの姿を。

——あれは、雅弘が悪かった。

弟分の雅弘をかばうことができないほど、まっすぐな炎が燃え上がりあの場を焼き尽くしたように見えた。たとえ誤解だったとしても、乙彦は立村に土下座して雅弘への許しを請うたことを後悔してはいない。へりくだったんじゃない。言葉では言い表せない、何かの雷のようなものだった。

乙彦は、立村の右こぶしをちらと見た。

女子とほとんど変わらない、ほっそりしたもの。あの手が。

「この前の一件で、やはり立村は変わっていないと確信した」

——守るべき女子のためには、ためらうことなく烽火をあげる。

——それが立村の本質だ。

立村の心に密かに燃えているまっすぐな炎に気づいている奴は、決して少なくはないだろう。周囲のごたごたにかき消されているから誰も気づかない。でも、藤沖にせよ古川にせよ、復活を期待しているという霧島にせよ、誰かかしら立村の隠している何かに気づいているのではないだろうか。またそれを引き起こせる 場面というのが、他人の恋愛沙汰であり下級生の尻拭いだけ

では、勿体無さ過ぎる。ほんのわずかの人間しかそれに気づかないという現実を、なんとかしなくてはなるまい。附属生がどう思っているかわからないが、乙彦は外部生だからこそ、そのいびつさを強く感じている。そのためには。

「さっき霧島と話をしてきたが、あいつもお前の復活を願っているようだ」

「まさか」

一笑に伏そうとする立村を、乙彦は目を離さずに続けた。

「あいつは正直、視界が馬なみに狭すぎると思うところもある。俺も二年前はそうだった。だがそんなあいつがお前のことを評価しているのはすごいことだ」

返事をしない立村。

「だが、そんなのはどうでもいい。俺はお前が密かにいろいろ動いていて、天羽に俺のことを嫌われないように頼んでいたり、規律委員会の中で俺が浮かないように南雲へアドバイスをしてくれたりとか、いろいろ話を聞いている。俺が授業中ぶっ倒れて保健室に運ばれた時も、お前真剣な顔をして、轟さんを誤解しないようにと懸命に訴えていただろう？ 正直そのことも納得はしていないが、俺からしたらそこまで幅広く手を回して、学校の中でうまく俺が生き抜いてこれるようにしてくれた手腕に感服する」

「皮肉か？」

かすれた声。乙彦ははっきりと否定する。

「違う。俺はあてこすりなんかしない。裏表はない人間だ」

「裏表、あってわるいのか」

訳のわからない言葉を立村は問い返した。あっさり乙彦は流した。

「さっき俺が言った、いろいろな噂は、お前の悪口だけではない。立村、お前が俺や他の連中のためにどれだけ陰で尽くしてくれているか、そういうことも混じっている」

「尽くしているわけじゃないさ」

「お前がどう言おうが、俺からしたら相当すごいことをしている。もし俺がそのことを知らないままだとしたら、すべて今までの出来事は自分の人徳だと勘違いしていただろう。もし俺が立村の現在の姿をそのまま信じていたとしたら、後で俺は人の見る目がないことをいやというほど思い知らされていただろう。中学時代から、立村を知っていてよかったと改めて思う」

「違う、関崎。中学時代の俺は、幻想だ」

「幻想？」

いきなりわけのわからないことを言い出す立村に、リズムを狂わされた。

「俺は、青大附属に入る資格なんかないんだ。関崎、もう知っているだろう？ 藤沖からも聞いているだろう？ 合格取り消しになるようなことをやらかしたにも関わらず、周囲に隠蔽してもらってなんとかもぐりこんだ人間だってことをさ」

「隠蔽だと？」

聞き捨てならない言葉に、戸惑う。

「さっき通ってきたサイクリングロードと、川ベリを見ただろう」

「ああ、見たが」

「あのあたりで俺は、同級生を一人、再起不能の怪我をさせた」

静かに、蝉の叫びにかき消されそうな声で。

「すでに誰もが、そのことを知っている」

「誰もって誰だ」

「青大附属の同級生ほぼほとんど、品山小学校の卒業生なら、すべてだ」

乙彦は続けて尋ねた。

「謝ったのか」

立村は答えなかった。首を小さく振った。とたん、乙彦の中の爆竹が鳴った。

「馬鹿野郎！」

蝉が泣き止んだ。怒号に息が止まったらしかった。立村がゆっくりと乙彦をにらみつけた。手ごたえはあった。

「どういう理由があるにせよ、まずは自分のしでかしたことに対して頭を下げるのが礼儀じゃないのか？ 立村、お前四年間も、何もしていないのか！」

肩を揺さぶった。自分でもいきなり沸き立った憤りの納め場所を見つけられないでいる。

「なぜ、なぜ謝らないんだ！」

「謝りたくないからだ、悪いか」

「悪い、絶対に悪い！」

肩に食いこむくらい、ぎしっと握った。揺さぶった。

「立村、お前がなぜ、そんな卑屈におどおどしているか、その理由、わかるか？ お前、本来自分がすべきことを片付けてないからだ！」

「どういうことだよ！」

肩から手を払いのけた。立村の瞳にいきなり宿ったぎらついたもの。点火した。

「何も知らないくせに、なんで勝手なことを言い出すんだ！」

「ああ、俺は何も知らない。噂だけだ。だがさっき、駅から出てくる時、なんでお前、不良スタイルの連中の前で足がたがた言わせてたんだ？ あいつらがお前のしでかしたことを知っているから、怖いのか？」

唇を結び、ただ真っ直ぐにらみついている立村を乙彦は受け止めた。

「相手に再起不能の怪我をさせたとわかっているんだったら、まずは頭を下げて、土下座しろよ。それもしないで、ただ怖がって、青大附属で震え上がっているだけか。何もしないで、ただただびくついているだけか！」

返事はない。乙彦を激しい眼差しで見据えるだけの立村を、もう一度肩をつかみ揺さぶった。

「それで、ずっと四年間、ごまかしてきたわけか！」

「わかっただろう、そういう人間が、俺だってことをさ」

「そうやって、また、またまた、逃げるつもりか！」

誰もいない。声が響くだけ。吸い取るのは足元に生える丈の高い雑草群と、真っ青な空。卵色に広がる太陽のもやと。再び蝉が鳴き出した。一旦、呼吸を整えた。肩から腕に手をかけなお

した。立村の頭を無理やり自分に向けさせ、乙彦は告げた。

「行こう」

「どこに」

「その、怪我をさせた相手のうちにだ」

「なぜ」

「俺と一緒に、そいつの家の玄関先で、土下座して謝ろう」

一言ずつ、ゆっくりと、伝わりと信じて。

「相手がどういう反応するかはわからない。半殺しにされるかもしれない。それでも、青大附属で今だにおどおどびくびくしているよりは、何千倍もましだ。なにかあったら、その時は俺が全力で守る。お前が、過去の間違いをきちんと認めて、まっすぐ立っていこうとする、そういう男なんだということを、証明する。藤沖がわけのわからない怒り方をしたのは、単にお前が人を怪我させたことを隠したからじゃない。謝らなかったことが許せなかっただけだ。あいつもお前がきちんと筋を通して、すべきことをしたら、きっとわかるはずだ。そういう奴だろう？ だから、今、やるべきことをやりに行くんだ。そいつの家、どこなんだ！」

一気にまくし立てた。自転車の置いてある場所まで立村をひっぱっていこうとした。首筋が思いっきり焼けている感覚がありひりひりしてきたがかまいはしない。と、いきなり下へ腕がひっぱられた。引きずられそうになりふらつき、立村を見た。

「何も知らないくせに、勝手に決めるなよ！」

叫ぶと同時に、心にゃ心にゃと立村が崩れ落ちた。倒れるというよりも、砂の塔がさらさらとこぼれていくような感じだった。乙彦が慌てて近づき、しゃがみこむと立村は、かぶりを降りながらぺたんと地べたに座りこんだ。頭を抱えるようにして、地面にへばりついた。息が荒い。身動きしなくなった。

「立村、おい、熱にやられたのか」

額に手を当ててみた。かすかに伝わってくる熱がじわっとくる。そのくせなぜか、汗を殆どかいていない。日射病になりかけているようだ。部活の時間ならすぐに水分補給を行わせて横にさせるのだが、こんな草むらでは中途半端に寝せるわけにもいかない。

「立てるか？」

ゆっくり、大きく、頷いた。軽度のような。救急車を呼ばなくてもいい。

「歩けるか？」

また頷いた。ゆっくりバランスを取って立ち上がろうとする。その片腕を乙彦は取った。足がおぼつかないのは見ていてよくわかる。またしゃがみこもうとしている。口を押さえている。

「吐き気がするのか」

「.....それほどでも」

「ここからお前の家まで、どのくらいかかる？」

「三分もかからない」

意識がもうろうとしているようだ。これは急いで屋根のある場所へ移動しないとまずい。こう

いう場合すべきことは簡単だった。乙彦はしゃがみこみ、立村の両腕を無理やり自分の両肩に乗せた。

「おぶされ。行き方だけ上で案内してくれ」

「関崎、それは、自転車は」

「そんなのあとで引っ張ってくる。三分程度ならすぐに持ってこれる」

嫌がる気配を感じるが、そんなこと言ってられやしない。乙彦は半ば強引に立村の両腕を背負う格好とし、「ん」と息を止め背負いあげた。

「関崎、いい、いいよ」

「日射病にやられてぶっ倒れる奴なんて陸上部ではざらだ、介抱するのは慣れている。安心しろ」

嫌がろうが何を言おうが、こういう場合はさっさと行動してしまうに限る。

この調子だと肩の上から案内をしてもらうのも難しいだろう。

幸い、立村の自宅町名、および番地はここからすぐ側のような。住所表示板がすべてわかりやすく張り巡らされている。無理に立村から聞き出さなくても、無事たどり着けそうだ。

「立村、住所だけ言ってくれ。あとはわかる」

もう観念したのか、暴れずに立村は肩の上で、囁くように自宅住所を呟いた。

「品山町……」

「ここを、曲がって、それから真っ直ぐ、とにかく真っ直ぐ」

半ばあの世に片足突っ込んだような状態で呟く立村を、乙彦はひよこひよこおぶって歩き続けた。いやがる立村を無理やり背負った段階で足腰に来るだろうとは思っていたが、想像以上に軽かったのですいすい進むことができた。だいたい三分くらいで辿り付いた。

「ここかお前の家は」

返事かわりに立村は顔を背中に押し付けてきた。頷いたのだろうと解釈した。立村を下ろした。何とか立つことはできそうだった。俯き、目を上げずに

「ごめん」

そう呟いたように聞こえた。

「当然のことをしただけだ。それよりお前大丈夫か」

立村は頷いた。パーカーのポケットから鍵らしきものを取り出し、ふらふらと戸口へと向かう。ついていくと乙彦に振り返り、

「家に、来るだろう？」

問い掛けた。

「まだ、話すこと、あるんだろう」

「まあな」

乙彦なりに、炎天下のもと語るだけのことは語ったつもりだ。もちろんまだ言いたいことはたくさんあるけれども、日射病でふらふらの立村に拷問をかけようとするほど乙彦も悪魔ではないつもりである。

——ここからは、無理に話すわけでもないからいいだろう。いくらでもまたチャンスはある。

無理に勝負をかけなくてもいい。まずはハーフタイム。立村がどういう部屋でごろごろしているのかを見るのも悪くない。真っ白い壁に覆われた、二階建ての家。すでにひまわりや名前の知らない花がここかしこに全力で花開いていた。ビタミンカラーの力強さを必要としているのは、この家の住人である立村じゃないかと。ふと思った。

入る前に自転車を運ぶことを思い出し、立村と一緒に行きたがるのを無理やり止め、乙彦はひとつぱしりしてきた。自転車を漕ぎながら片方の手でもう一台の自転車を引っ張るというのはなかなかしんどかったが、もと来た道を辿ればよいだけの話であってなんとかなった。

立村が黙って乙彦を玄関先へ招き入れた。

「自転車はこの辺に置いていいか」

「悪い、申し訳ない」

「謝る必要はない。当然のことだ」

無表情ではあるけれども、ほんの少し目を伏せている。そのまま乙彦を案内してくれた。

玄関のたたきには靴らしきものが自分と立村のスニーカーしか並んでおらず、やたらと曲線の多い柱や天井のど派手なシャンデリアや、ガラス瓶に色のついた砂を詰め込んだ飾り物やら、い

かにもおしゃれな母親のいそうな雰囲気ではなかった。

——片岡の家とは違う。

マンションの最上階に位置しながら、中は焼肉の匂い漂う生活感いっぱいの空間とは全く異なる。少なくとも十五歳の男子が暮らしている気配が薄い。乙彦からすると、柱の傷のひとつかふたつくらい、もしくはクレヨンで落書きして消せなかった分とか、そういうものが残っていても不思議ではないのだが。

「家には誰もいないから」

尋ねる前に立村は小声で呟いた。奥の部屋のドアを開いた。自分の部屋らしい。乙彦が足を踏み入れる前に覗き込むと、異様なほど綺麗に整頓された、乱れのほとんどない空間がどんと広がっているのが見えた。「広がっている」は誇張ではなかった。ステレオとベッド、そして本棚。極めて簡素だった。洋室なのだが、座布団が用意されている。扇風機が回りっぱなしで、窓は開け放たれている。暑苦しくはない。

——こいつは整理整頓マニアか。

本棚にも目を留めた。天井から足元までびっしりと本で埋められている。そのうち殆どは「世界文学全集」「日本文学全集」「百科事典」といった類のものである。漫画や娯楽系統の本は一冊もない。

——立村、漫画読まないのか？

乙彦も漫画は好きな方だし三人兄弟でそれぞれ回し読みするのは日常のこと。しかし、そういうくだけたものがひとつもないのはどういうことだろうか。

思いついて、尋ねてみた。立村が座布団を手で示しながら頷いたので座りながら。

「立村、野球とか、やらないのか」

「やらない」

「サッカーもか、陸上もか」

「嫌いだからしない」

「どうせ部活をしないのなら、運動部に入るという手もあるのにどうして」

「集団活動が嫌いなんだ」

聞いた後で愚問と気づいた。それは当然だ。クラスの行事すら鬱陶しいと思う立村が、運動部の汗のおいと馴染むとは思えない。

「サイダーがあるから持ってくる」

「ありがとう」

やはり、一働きした後は、飲み物がほしい。自分の家に戻ってからは立村もだいぶ体調が落ち着いたようで、極めて普通に身動きしていた。甘えることにする。

——このあたりがいじめられた原因なんだろう。

真上をじっと眺めた。やはりシャンデリアがぶら下がっていた。さらにベッドのカバーは薄い水色。いやベッドカバーなんてものを利用すること自体が乙彦には信じ難い。かける手間、というものを面倒くさいと思わない立村の性格かもしれないが、やはり十五歳の男子が自然にするこ

とではない。

——そういえば立村は、新歓合宿の時もアイロンをきちんとかけてあるシャツを用意してきたな。

母親にやってもらならまだしも、立村の場合は確か父子家庭のはず。自分でしっかりそういう手間をかけることができる、というのがまず信じ難い。

——女子ならともかく、男子でそういうことを気遣う奴がいたら、大抵の奴は妙だとか変人だとか思うだろう。青大附属が変人に対して寛容なのはわかっているがそれでもだ。

青大附属中学に合格しもぐりこむことができたのは、立村にとっては幸運だったろう。

——立村のような個性を受け入れられる学校は、そうそうない。

——小学校の連中はきっと、立村をどう扱っていいかわからなかったんだらう。

乙彦なりの結論を出した。極端に潔癖で神経質な立村の性質を、どうやって青大附属という場で受け入れていけばいいのか、わかる奴はそうそういないだろう。担任の麻生先生だってさじを投げる寸前なのだから。しかし、このままでいいとは思えない。比較的環境としては恵まれている青大附属の中で、なんとしても立村の本来持つ力を発揮させる方法を考えねばなるまい。麻生先生や藤沖が頼りにならない……とまではいわないが……現状において、動くのはやはり乙彦しかないだろう。自然に与えられたひとつのチャレンジ、なんとかしなくてはならない。

立村が運んできたラムネをまずは一気に半分ラッパ飲みした。ちゃんと中のボールを瓶の首あたりにてくぼんでいる部分に落とすようにして、すいすい飲んだ。

「器用だな」

「どうやって今まで飲んでたんだ？」

当たり前なことだと思っていたのだが。立村はわざわざグラスにちょぼちょぼと移しかえながら、

「なかなか出てこないだろう。サイダーが」

「そういうのはガキの頃にみな習うだろう？」

「誰に習うんだ」

「友だちとかだ」

乙彦の場合は、近所に住んでいた三年上の男子だった。ラムネのラッパ飲み方法だけではなく、近所の駄菓子屋でどうやってあたりくじを引き当てるかとか、牛乳瓶の丸いキャップを集めてメンコをやるにはどうすればいいかとか、遊びの常識を覚えてもらうのはむしろ当然のことだった。

説明すると立村はわけのわからない顔でもってグラスを見つめ呟いた。

「そんな友だちなんていないからわからない」

沈黙が生まれ、続いた。

しばらく乙彦は立村に言葉をかけあぐねていた。

——根本的に何かがずれているんだ。

ずれているのは青大附属の生徒すべてに言えることではあるのだが、しかし乙彦からすると立

村の感性は、一般的男子高校生とは異なりすぎているように思える。

もちろんその感性を、乙彦自身は受け入れるつもりでいる。

しかし、他の連中にそれを要求することはまずできないだろう。

いきなり立村が姿勢を正し、乙彦に対峙した。

それまで片膝を立てたまま、無言でグラスのラムネをすすっていたのにだ。

「関崎、この機会に聞きたいことがある」

「なんだ」

「聞きづらいことかもしれないが、重要なことなんだ」

「俺は隠し事をしない人間だ」

「なら、信じる」

正座し、グラスを持っていた手を軽く握り、平たいテーブルの上へ載せた。凜と見据える。

「関崎」

「だからなんだ。言いたいことあるならはっきり言え」

想像がつかないので、じれったくなる。テーブルを指で叩いた。

「あの、静内さんとは付き合っていないんだらう？」

頭のとっぺんだけがかあっと熱くなった。いきなりフライパン状態。

——こいつ、いきなり何を聞くかと思ったら、そんなことか！

反射的に言い返していた。

「今は付き合っていないが、それ以上もそれ以下もない」

「今は、ということは将来は」

「そんな先の見えないことを断言するほど、俺は無責任ではない」

ないが、言葉が濁りそうになる。静内菜種が視聴覚教室で、立村の心ない言葉に傷ついていた表情を思い出してしまう。なぜか自分がその時かっとなってしまったことも、今は不思議と受け入れられる。聞くのをたった今まで忘れていたのが、かえって変だ。

「俺も立村に聞きたい。なぜ、この前の視聴覚教室でお前は、俺と静内との関係を勝手に邪推するような言い方をしたんだ？」

「そんな言い方をしたつもりはない」

「『俺と静内とは付き合っていない』などと話していただろう。もちろんそれは事実だが、人に話すべきことでもないだろう。第一俺は立村に、そういう話をしたことは殆どない。たまたまそれは事実だったが、これから先勝手に事実関係を捏造されるのは俺としては不愉快だ」

「それは俺が悪かった。申し訳ない」

素直に立村は謝った。拍子抜けしてしまい、それ以上突っ込めない。

「なら改めて聞きたい。これから先、関崎が静内さんと付き合う可能性は何パーセントくらいある？ 大体でいい。七十パーセントか、それとも」

「だからそれが邪推だと言うんだ！」

テーブルをひっぱたいた。ラムネの瓶、くぼんだ部分を握り締めた。底で叩いた。

「立村、お前仮に友だちに対して、『お前は俺のことを親友だと思っているのか？ 親友になる確率は何パーセントくらいか？』とか聞くか？ そんな阿吽の呼吸でもなければわからないようなことを、なぜ聞きたがるんだ。それに第一、俺が静内と付き合うかどうかを知って、立村になんの利益がある？」

利益、と口に出してみても気がつく。言葉が詰まる。

——あの、杉本という女子にそのことを話す必要があるとすれば、確かに立村としては知っておきたい気持ちがあるだろう。

おせじにも色恋沙汰に詳しいとは言えない乙彦だが、立村の杉本梨南に対する一途さは知っている。同時に杉本梨南が乙彦へ相変わらず一途な思いを抱えていることも、そして乙彦がそれを受け入れる気を持たないことも。

杉本梨南の公立高校入試が終わるまではその事実を伝えたくないと、立村はかつて訴えていた。それは外部入学者である乙彦も、理解できない感情ではない。

だが、第三者にこれから先、自分が取るかもしれない言動を決め付けられたくない。それも本心だ。静内とこれからどうなるのかを考えるのは乙彦の役目であり、立村ではない。

「変なことを聞いてしまって申し訳ない。俺は決して関崎に口出しするつもりで聞いたんじゃないんだ。あの、妙なことを言うようだけど、杉本に対してその、気持ちがないということは」

「その通りだ。変わりない」

強調しておいたほうがいい。

「わかってる。関崎の言いたいことは、理解しているつもりだよ。無理に杉本の気持ちを受け入れてくれとは、決して言っていない」

それはそうだろう。立村の心の動きは表明するまでもなく明らかだ。乙彦はただ頷き次の言葉を待った。

「ただ、もし関崎が本気でこれから静内さんと付き合いたいというのだったら、俺は杉本にきちんと事実を伝えるし、そうでなければまた」

「立村、何度言ったらわかるんだ！」

扇風機の風を背中にめいっぱい浴びながら乙彦は怒鳴った。ふつうの言い方では通じない。

「そんな未来のことなんかわかるわけないだろう！ 第一俺にそんなことを考える暇があると思うのか！ 俺はまずクラスの今後とお前の復活と藤沖と片岡の平和と、とにかくたくさんのことを考えなくてはならない立場なんだ。さらに言うなら、奨学金狙いの成績アップの方法やら、バイト先の売上にどうやったら貢献できるかとか、うちの親のすねをこれ以上かじらない方法はあるかとか、そんな付き合う付き合わないの問題を考えている暇なんてない」

「それならば、付き合う可能性はないだろう」

念を押す立村の瞳は、まっすぐ貫いてくる。この目をもっと、立村自身の問題において見たかった。どうしてこいつは、他人のことに対してのみ一生懸命になれるのだろう。

「だから言っただろう！ もしかしたら別の恋愛沙汰に巻き込まれている可能性だってゼロじゃないわけだ。数限りないパラレルワールドの中の選択肢の中にあるわけで、それが全くなくなる

わけじゃない。いや、ありえないとは思いますが俺が何かの拍子で別の誰かに惚れて速攻深い関係になる可能性だってないわけじゃあない。つまり、何があっても不思議ではない。藤沖があの、寝小便したという女子と付き合ったことも、半年前の俺たちならまず思いつかないことだが、実際そういう未来はやってきた。俺にそれを見通すことはできない。お前に勝手に決め付けられたくはない。俺の言いたいのはそれだけだ！」

言い忘れたことがある。付け加えた。

「立村、俺のことはどうでもいい。お前の方こそ本当はあの女子と」

——杉本梨南と……。

言いかけたところで、いきなり立村が立ち上がった。グラスにはまだサイダーが残っていた。

「もう一本持ってくる」

乙彦の質問には答えず、立ちくらみをこらえるようにこめかみを押さえた。

「関崎、悪いが、もう少しここにいてくれ」

てっきり帰れと怒鳴られるかと思っていた。ぽかんとしたまま乙彦は空のラムネ瓶を手渡した

。

部屋に取り残された乙彦は、立村が出ていった後立ち上がって窓辺から外を眺めてみた。花の終わったあじさいが、濃い緑の葉に囲まれ干からびていた。どうやら裏口の近らしい。風がなめらかに部屋へ注ぎ込んでくるのを感じる。扇風機も「弱」程度でまわして十分なようだ。名前のわからない木々が塀の前を囲い、その向こう側で自転車が数台通り過ぎる気配を感じた。軋む音と、小さなベル。

——そういえば、あいつをおぶって歩いている間、誰にも会わなかったな。

品山は人気のない町だった。

今通り過ぎた自転車がせいぜい、目立つくらいだった。

——こんな誰もこないようなところで、夏休みずっと籠っているのか。

——もちろん、青大附属の連中とは遊ぶだろうが。

——駅前に出るのも一苦労だろう。

やはり、夏休み中はこまめに乙彦の方から誘う必要があるようだ。立村がなんと言おうとも、乙彦は面倒をみようとした。補習および宿題よりも優先順位は高い。

呼び鈴が部屋に響いた。

——あいつの親か。

急にびしっと背を伸ばさなくてはという気にさせられる。

初対面の相手とあっては、やはり緊張する。

しかもこんなシャンデリアだらけの家に住む家族なのだから。想像がつかない。

「関崎、あのさ」

ドアを開け、立村がまず先に入ってきた。

「ちょっと、いいか」

また無表情なままでいる。ラムネを取りに行くと言っていたくせに手ぶらのままだ。乙彦が立ち上がろうとするのを手で制し、

「もう少し、そこにいてくれないか。頼む」

同じことを繰り返し、振り返った。

「入っていいよ」

身体を斜に向け、後ろで待っているふたりを招き入れた。

黄色いワンピース姿の女子と、緑色のTシャツ姿の男子とを。

「関崎くん？」

清坂美里が呆然とした表情で、乙彦の名を呼んだ。

後ろで見守りつつ立村が、もうひとりの男子と話をしている。

——C組の男子評議の、羽飛だ。

ちらと、乙彦を厳しい視線で射た。

——なぜだ？

挨拶もそこそこに、清坂と羽飛が乙彦を囲むような格好で座った。立村だけが戸口で三人をひとりひとり確認するようにして、

「サイダー持ってくるから、少し待ってて」

そそくさと去った。

「あいつ何考えてるんだ？ なあ？」

いきなり乙彦へ話をふってきた羽飛。同じことを考えていたらしい。頷いた。

「さっき自転車の音がしたので誰か来るのかとは思ったが」

厳密には気がついただけなのだが、嘘ではなかった。乙彦の言葉に清坂が反応してきた。

「え？ 私たちが来るの気づいてたの？」

背後の窓を指差し乙彦は説明した。

「軋む音がした」

「耳がいいのね」

別にそういうわけでもないと思うが、否定することもないので黙っていた。

「いきなり俺たちが来たのでびびっているのも当然だと思うけどなあ」

「いや、びびりはしない」

ここで牽制しておく。羽飛はたいして気にも留めずに続けた。清坂が妙に真面目な顔をして男子ふたりの様子を見ている。男子相手だとさほど重たくもないのだが、どうもこの清坂の態度が暑苦しいのは気のせいだろうか。そのようにしておこう。

「俺たちな、終業式終わってからうちうちで遊んでたわけなんだよな。立村も誘うつもりだったけどああいう奴だから、強く俺が言わないと来ないだろ？」

思わず共感する。空気が少し緩まった。羽飛はにやっと笑った。

「だもんでな、天羽たちも含めて俺が留守電入れておいたんだ。連絡しろって」

「留守電か」

ちなみに関崎家では今だに黒電話である。そんなハイカラな機能はついていない。

「そしたら立村から連絡が来てな。俺たちだけここに来てって言われたわけだ」

「青潟駅あたりで集まっていたのか？」

「いや、この近くのカラオケボックスだ。古川がしゃべってたぞ。関崎、マイク一度握ったら離さない性格だってな」

「マイクは離すがカラオケは好きだ」

事実なので否定できない。いったい古川こずえは陰で乙彦のことをどう話しているのだろうか。女子のおしゃべりはどうしようもないものだとして理解はしているけれども、どこまで情報が広がっているのか計り知れないものがある。

清坂がスカートを少し広げるようにして足を崩した。

「つまりね、天羽くんや難波くん、こずえとかあと他にも何人かいて、みんなで盛り上がってい

たのよね。立村くん、いつもこういう集まりって来たがらないんだけど、結構品山からも近いし、だったら来てくれるかなって声かけてみたってわけなのよ」

「古川あたりが誘ったのか？」

なんとなくそんな気がした。世話好きの姉さんだし、弟分と呼ぶ立村を少しは馴染ませねばと気遣ったのかもしれない。古川こずえはその點頭の働く女子だ。

羽飛が手をぼんぼん打って認めた。

「千里眼かよお前、そうそう、その通り。古川にやいのやいの言われて、それで電話かけてみたら折り返しカラオケボックスに掛かって来てな、今すぐ来いとか言われてな」

「関崎くんと会わせたかったのかなって、今思ったけど」

また清坂が口を挟んだ。

「ま、これも縁だ。お前もこれから来るか？」

「どこにだ」

「カラオケボックス。喉がうずうずしてるんだろ。古川が言ってたぞ」

「今はいい」

天羽や難波など、乙彦を密かに敵視している連中と無理に和む気はなかった。

「まあいっか。それよか関崎、いつから来てた？」

「ついさっきだ。話があったから呼び出した」

嘘ではない。あっけにとられるふたりの様子が何かぴんときない。

「話って？」

「英語科の今後を考える上で、話したいことがあったからだ」

曖昧にぼかすのは正直、乙彦の流儀ではないのだが。食いついてきたのは清坂だった。

「立村くんのことで何か、またもめたの？」

「今はもめているわけではないが、これから先のことを考えて一度、腰を据えて離したいと思ったただけだ」

全くもって事実。嘘は話していない。もちろん例の藤沖たちをからめた事件について話す気はない。反応のあやふやなところを見ると、清坂たちは例の視聴覚教室の出来事について仔細を耳にしてはいないようだ。ということは話さないほうがよい、と判断した。

——ということは、立村がこのふたりを呼び出したということか。

いくら偶然とはいえ、お膳立てがきちんとしすぎている。何かたくらんだのではないかと邪推したくなる。しかし羽飛と清坂の顔を見ている限り、そんなあくどいことは考えていないようにも見えた。特に清坂は乙彦と対面してぎょっとした様子だった。

——紹介でもするつもりなのか。

そうとしか思いつかない。もともと立村を含めたこの三人は、中学時代同じクラスであり、特に親しい友人同士だったと聞いている。しかも、清坂は立村と恋愛感情を共有していたはずである。もちろん立村を見る限り、その気持ちは薄れているのだろうと判断しているが、よき友であることには変わりないのだろう。だから、わざわざ立村の家まで来たのだろう。

もっとも別クラスだ。話を親しくする機会はそうそうない。ないが、後期評議委員を務める場合どうしても羽飛とはつきあう必要が出てくるだろう。それを見込んで……古川あたりから情報を得て……後期評議委員に立候補するであろう乙彦を今のうちに紹介しておきたいと考えたのだろうか。考えられないことはない。中学時代、評議委員長としていろいろと裏工作を行う立場にあった立村ならば、それなりに思うところもあるのかもしれない。

——だが、あくまでも俺の想像に過ぎない。なんでなんだ？

なんでだろう。何も並んでいないテーブルを前に乙彦は、羽飛と会話を交わしつつ探りを入れることに専念した。

とはいえ、同じ高校の生徒同士、共通の話題には事欠かない。藤沖の様子にもちらと話が向いた。切り出したのは清坂だった。

「関崎くん、そういえば、藤沖くんと仲よかったんだっけ？」

「あいつはいい奴だが」

「藤沖くんの彼女の話、聞いている？」

どうやらおしゃべり古川こずえも、親友の清坂美里に事件の真相は伝えていないようすだ。

「存在だけは聞いている」

「やっぱりそうなんだ。みんな変だと思ってるんだね」

羽飛が少しかだけ無関心を装うように窓を眺めた。

「今日も誘ったけど来なかったしね。彼女にべったりくっついてるってもっぱら噂なんだけど、ちょっと信じられなくて」

目を離したらまた、自傷行為を繰り返すかもしれない彼女のことだ。心配でならないのは当然だろう。余計なことを口にすればどつぼ。あえて黙っていた。

「こずえにも聞いたけど、知らないみたいだしね。関崎くんなら知ってるかなって思って」

「美里、わかるわけねえだろ。野郎同士はなあ、女子と違って誰と誰が付き合ったとかそんなことで真剣に悩まねえの！」

茶々を入れる羽飛。視線はやはり窓を向いたまま。清坂が言い返した。

「だってさ、藤沖くん最近様子変なんだもん。評議をやめてもいいとか変なこと、言ってるって噂聞いたよ」

「古川からか」

「ううん、他の子から」

やはり古川は、大切なことには口が堅いと見た。清坂はまた足をたたみなおすようにして話を続けた。

「応援団作りたがっているのは聞いていたけど、準備が必要じゃあない？ なのに、いきなりいろんな先生に話を持っていったりしているし、評議委員会にもあまり積極的に参加しなくなるし。どうしたのかなって。関崎くん、なんか知らない？」

やはり古川の言う通り、藤沖は例の事件をきっかけに委員会活動へ身が入らなくなったのだろう。応援団結成の話は前からあったことだし、清坂もそのあたりは知っているようだ。しかし

古川にも念を押されている。清坂美里には一切話をするなど。

「それにしても、立村おせえなあ」

半ば強引に羽飛が割り込んだ。叫び加減に、

「あいついったいどこまでサイダー取りに行ってるんだ？」

「いわゆる、ラムネの瓶だったが」

乙彦は指でラムネ瓶のデザインをなぞって説明した。

「ラムネ？」

「瓶の中にビー玉が入っている奴だ。首のくぼみにそれを落としこんで飲む」

わけのわからないといった顔で清坂は羽飛と顔を見合わせた。

羽飛の言う通り、確かに立村が戻ってこないのは変だ。

乙彦も自分なりの推理を試してみた。

「立村の家には地下室あるのか」

やはりふたり首を振った。

「貴史、そんな話聞いたことある？ 私ないよ。さすがに」

「俺も」

外国映画でよく、高級ワインを置く部屋が地下室に用意されているという場面を目にするので、もしかしたらと思っただけである。外した。

同時にドアが開いた。立村が一本だけラムネ瓶を持ち戻ってきた。

「お前どこまで買いに行ったんだ？」

それには答えず、立村はそれを羽飛の真正面に音立てず置いた。乙彦と清坂の前には何も置かなかった。

「清坂氏」

いきなり呼びかけた。清坂も口を少し尖らせるようにして、

「なあに」

答えた。すっと立村の顔を見上げた。立村は自分の左肩を差すような手振りで呼んだ。

「ちょっと」

「なんだろ」

乙彦と羽飛を交互に見ながら立ち上がり、立村のもとへ向かう。スカートがふんわりと広がった。立村の顔をあらためて見た後、

「なあに」

もう一度尋ねた。すぐに立村は何かを清坂の耳に囁いた。とたん、大きな瞳を見開き清坂が激しく首を振った。言葉を発しなかった。

「おいおいなに内緒話してるんだ？ やらしいなあ」

からかうように羽飛が声をかける。しかし無視されている。さらに立村が聞き取れない声で何かを囁いている。傍目にはいちゃついているようにも見えるのだが、時々乙彦を見やるのがひっかかる。聞こえるのは清坂の、

「そんないきなり！」

とか、

「だって、そんなことできるわけじゃない！」

とか、とにかく戸惑う様子だけ。

「だって立村くん、そんなこと」

かすかに立村が首を振った。もう一度乙彦の顔をまっすぐ見据えた。

激しい炎を見た。

——あれは。

雅弘をぶんなぐる直前のものに、なんとなく似ていた。

「俺しか言えないだろう！」

厳しく、びしりと。そしてゆっくり、今度は乙彦にきっちり向かい、清坂をそっと前へ差し出すようなしぐさをした。触って押し出すのではない、さっと、流すように手を差し伸べた。

「関崎、話は終わった」

短く告げた。

「清坂さんを家まで送ってくれ」

清坂は呆然としたまま、乙彦の真正面で立ち尽くしていた。立ち上がったのは乙彦よりも羽飛の方が早かった。

「立村お前、何を考えてるんだよおいおい、美里も一緒に連れて来いとか言ってたくせに」

「これから話す」

有無を言わず、立村は黙らせた。乙彦にも、

「清坂さんと一緒に帰ってくれ」

また命令口調で繰り返した。こういう「～しろ」というような命令形の言葉は正直好きではない。ないのだが、滅多にそれを使わない立村が口にすると、自然と体が動いてしまう。かろうじて尋ねた。

「なぜだ」

「関崎と話は終わった。清坂さんがお前に話があるそうだ」

「俺はまだ言いたいことがあるが」

「夏休み後でもいいだろう。とにかく、今は一緒に出ていってくれ」

「その言い方はないだろう？ お前の方から引き止めておいてだ」

わけがわからない。この部屋の中にいる奴らで、立村の意図することを理解できるものがあるだろうか。乙彦には判断がしかねた。

「今から羽飛と話をする。聞かれるのはまずいんだ。だから」

失礼すぎるその言動にかちんとくる。言い返したい。

場を治めたのは清坂美里の一声だった。

「関崎くん、話があるの。一緒に帰ろう」

すっと背を向けた。

「美里、お前も何を」

名前で呼ぶ羽飛。確かこのふたりは幼なじみだったと聞いている。

「あとで説明するよ。貴史ごめん」

片手を挙げ、そのまま振り返らずに姿を消した。立村が向こう側……おそらく玄関だろう……の方へ視線を向けた後、乙彦にも頷いてみせた。

「話を、聞いてやってくれ」

かすれた声で立村は囁いた。腕を取り、黙って玄関まで連れて行った。すでにサンダルに履き替えた清坂が乙彦を待っていた。黄色いワンピースは大きく花ひらいたひまわりのようだった。スニーカーの紐を縛ろうとする乙彦の頭越しに清坂美里は、立村に呼びかけていた。

「立村くん、ごめんね」

一瞬言葉を切り、

「ありがとう」

もう一度立村は、かすかな笑みを持って頷いているようだった。乙彦が頭を挙げた時、ふたりの間にどことなくやわらかな空気が漂っているように感じた。友情なのか、それとも一度は付き合ったことのある恋愛感情なのか、それはわからない。ただ、今まで短絡的に判断できるような繋がりでないことだけは確かだった。邪魔する気はなかった。

立村は玄関で見送るのみだった。清坂美里が自転車の鍵を外し、ゆっくりと自転車を押して歩いた。送るだけならば、さっさと青湍駅まで自転車に乗っていけばいい。それだけなのになぜか清坂は、わざとゆっくり歩こうとする。

「このあたり危険なのか」

「って、立村くんは言うよ。昔神隠しがあったんだって」

顔を向けず、そのまま清坂は答えた。

「だが昼間だろう。危険でもないだろう」

「関崎くん、私を送るのはいやなの」

困った。気が進まないのは事実だ。黙っていると清坂はまた俯いた。

「そうだよ。最初っから私に興味なさそうだったもんね」

「顔と名前は知っている」

「私がしつこくアプローチしたから当然だよ」

かぼそく呟き、くいと唇の端を引き上げた。

「知ってると思うけど、私、中学時代、立村くんと付き合ってたの」

「聞いている」

「でも今は、別れてるの。別れるというより、仲のいい友だちに戻ったの」

それは今の言動を見ていればよくわかる。

「立村くん、きっと気づいたんだね。すごく立村くんって繊細で、ふつうの人が感じないようなことに気がついて、それでなんとかしようとして私や貴史や先生たちに怒られてたの」

「何に気づいたんだ？」

またわけのわからないことをいう。だから乙彦はこの清坂美里が苦手なのだ。

「でも、今は、感謝してる」

「何をだ」

「気づいてくれてたんだってこと。わかる？」

「わからん」

女子の言うこともさることながら、立村の思惑も見当がつかない。どうやら清坂にはなんらかの考えがあったらしいとは気づいたが。

「私が、関崎くんのことを好きだってこと」

——これが目的か！

懸命に避けようとしてきたこのシュチュエーション。

乙彦も全く気づかないわけではなかった。だから折りを見つけてはその気持ちが全くないと説明してきたつもりだった。しかし、思わぬところで足をすくわれてしまった。考えてみれば自然だ。そういう形に持っていくとは思わなかった。いやなよりも、以前の彼氏だった立村自身がお膳立てしようとは！

言葉が出ず、自転車を留めたまま立ちすくむ乙彦に、清坂は畳み掛けた。

「立村くんは、自分のことよりも人のことを最優先で考える人なの。だから、私の気持ちを気づいた時、きつとなんとかしようって気になったんだと思うの。でも、関崎くんは気づいてないよね。伝えなくちゃ何もわかんないよね」

一気に、溜めていたものを吐き出すように。勢いに押された。

「いつか、関崎くんにはっきり、こう、言いたかったの。でも、関崎くんと静内さんと色々噂があったから……でも、言わなくちゃわからないってこともあるし、それに別のクラスだから私がどういう人間だってこともきつと知らないと思うんだ。いい噂じゃないって、こずえからも聞いてるし、だから、ここではっきり言いたかったの」

「気持ちは嬉しい。ありがとう。あの、だが」

言葉を選び慣れていない。答えは一瞬のうちに「NO」である。それをそのまま即答すべきだと乙彦は思う。余計な夢を与えることなく、きちんと自分の気持ちを伝えて、その上で受け入れられない旨伝えるべき。杉本と同じ思いをさせるべきではない。

「関崎くん、静内さんと付き合うつもりなの？」

清坂はまっすぐ切り込んだ。

「まだ、付き合って、ないよね？」

「付き合ってはいないが、そんなことを考えている暇がない」

「暇なんてつくなくなっちゃったっていいの。学校で顔を合わせるだけで十分よ。そんな難しいことじゃないよ、付き合うって。ただ学校でおしゃべりして、ただたまにどこかでお茶したり」

「そういうのはあまり、好きじゃない」

断り文句を言いそびれそうだ。もしや立村は、この迫力に押しきられたのだろうか。

「じゃあ、まだ私にも、チャンス、あるよね。私のこと、知ってもらう機会、あるよね」

「高校時代はまだ長いから」

「今すぐじゃなくても、好きになるかも、しれないよね！ 何パーセントかわからないけど」

「将来のことはわからないが」

つい口走った言葉が命取りだった。飛びついてきた。釣り針の極上の餌になってしまった。

「だよね！なら、もしかしたら将来、私のこと好きになる可能性もないわけじゃないってことよね！」

「もちろん確率でいけばそうだが」

まずい。乙彦は清坂美里の言葉を遮り、正面から告げた。

「申し訳ない。気持ちは嬉しいが、俺は今のところ清坂さんの気持を受け入れられない」

「今は、でしょ」

「今ではなく、恐らく将来においてもだ」

はっきり、逃げ隠れもない科白で断ち切ったつもりだった。

清坂美里はまったく驚く様子を見せなかった。

「そう、やっぱりそうなんだ」

すうっと空を見上げた。青空とまっすぐな瞳と、鮮やかなビタミンカラーのワンピースが一枚の絵として切り取られている。思わず乙彦は見とれていた。

もし、静内をライバル視している立場の女子でなければ、もしくは立村の元彼女でなければ、心惹かれることもあったのだろうか。一瞬だけ自問自答してみたが、やはりNOの答えしか伝わってこなかった。何かが違う。伝わってくるリズムや会話の流れ感が、いわゆるクラシックとポップミュージックとの差くらい、はっきり異なっている。話の内容を調節することならできかもしれないが、指揮者の拍子を無理やり変更することはできそうにない。

「関崎くん、将来って、まだ見えない先だよね」

「そうだが」

「それ、私もそうだけど、関崎くんにも、見えないんだよね」

「そうだな」

指を空に指し、そのままつぶやいた。

「今わかっていることは、私が関崎くんのことを好きだってことと、関崎くんは私のこと好きじゃないってことだけ。将来どういう気になるかってことは、お互いわからないよね」

「それはそうだが、だから将来と」

付け加えたつもりだった。

「じゃあ、『今』はまだ、あきらめる必要がないよね。だって関崎くんはまだ、私のことをそれほど知らないし、静内さんとも付き合っていないし、杉本さんとも付き合っていない。他の誰ともまだ付き合っていないんだもんね」

——何を言い出すんだ？

また突拍子もない発言に硬直し、足が動かない。清坂は乙彦に向き直った。凜とした態度と、確固たる覚悟を感じさせるような瞳でまっすぐ見据えた。

「私は、関崎くんのことを、自分が納得するまで好きでいつづけるから。それは私の意志だから。送ってくれなくてもいいよ。今日、伝えたかったこと、全部言ったもん。じゃあね」

鮮やかに自転車をカーブさせ、片足でけんけん乗りをした後乙彦を尻目に、清坂の自転車はまっすぐ川べりの路を通り過ぎていった。川の方から柔らかい風がふいてくる。緑と、水色と、そしてきらめく太陽。清坂美里という女子にはそのすべてがあふれている。夏の風をそのまま浴びた光り輝く、おそらく自分以外の男子ならばきっと心惹かれるであろう女子のはずなのに。

——どうすればいいんだ？

乙彦はひとり取り残された後、改めて自転車を漕ぎ始めた。

入学してたった三ヶ月というのに、なんでこんなに女子たちにちやほやされるのだろう。

——シーラカンスとか言われていた俺がだ、いったいなんで。

客観的に見れば、水鳥中学時代、女ったらしのように見えた総田幸信のような立場にいるのかもしれない。正直なところ不本意ではあるが、決して遊びでそういう言動をしているつもりではない。かつての関崎乙彦ではなくなったわけじゃない。女子たちと話をしている時よりも、むしろ男子連中と語り、外部生チームと馬鹿話をしあい、クラス運営の今後について真剣に討論している時の方がずっと自分らしく生きているような気がする。

自分の意図とは別に、何かが翻弄され、ぐるぐる回っている。

こういう場合、はたしてどう反応すればよかったのだろうか。かつての杉本梨南に対して接したやり方がまずく、いまだに尾を引く展開となってしまったのは自分のミスである。反省している。しかし、その反省を元に二度目接した清坂美里に対しては、いったいどう接すればよかったのか。気持ちがない、将来的にもおそらく感じることはない、そういう言葉すらもすりぬけてしまったとしたら。

いや、それをたくらんだ大元が、

——立村だったのか。

元彼女の気持ちを見抜いて、わざわざ呼び出し、無理やり押し付けて帰らせるなどというやり方をすると、汚いというべきかそれとも「彼女思い」というべきなのか。いやいや、立村なりの、乙彦に対する意趣返しなのだろうか。かつての青大附中評議委員長として、陰でいろいろ立ち回り、今回の藤沖たちに関する一件においても重要な役割をいまだ果たしている立村は、まだまだ裏の実力者として存在しているのだろう。少なくとも乙彦にはそう思えた。

だが、正直今のところ、もう考えるのはめんどうくさかった。

第一、明日から夏休みなのだ。

もちろん夏休み中立村を放置しておくつもりはさらさらないし、藤沖や片岡、その他いろいろ青大附属の連中とは時間を見つけて話をする機会はあるだろう。だが、せっかくの夏、青空を辛

臭い語り合いのみに費やすのは勿体無い。そんなことよりももっと、照りつける太陽の下で走り回り、ボールを追いかけ、思いっきり汗をかく。そちらの方がずっと秋に向かって希望的な展開を待つことができそうだ。静内や名倉とともに自由研究の準備だってある。立村たちとは違うまっすぐなやり方で乙彦は、すべての問題を切り込んでいく、そういうことだってできるはずだ。

清坂の言葉に関しては……今、言うだけのことは言った。

NOの返事だけは、はっきり伝えた。

今のところ清坂にするべきことは、見つからない。未来を待とう。

——そうだ、同窓会をやろう。

乙彦は頭を切り替えた。自転車の向かう先は青潟駅だった。

——雅弘に手伝わせて、連絡つく連中と集まってなにかやろう。その辺の公園で集まってもいいし、学校の教室を借りてもいい。まずは雅弘に声をかけるか。

たぶん雅弘は夕方、レジ打ちの手伝いをさせられているはずだ。乙彦以上に顔は広い雅弘のことだ。きっといくらでも人を集められるだろう。もしかしたら生徒会役員だった連中とも連絡がつくかもしれない。まさかとは思いますが総田あたりも来るだろうか。

まだ日の暮れない空をまっすぐ見つめつつ、乙彦はペダルを漕いだ。品山から離れれば離れるほど、中学の同窓会計画は頭の中でどんどん組み立てられていった。

乙彦は自転車を漕ぎ、品山駅まで出た。ちゃらちゃらした格好の男子女子たちが夕暮れの駅前通りをたむろしているのは相変わらずだった。そこからまっすぐ車道に入り、青潟駅まで一気に進むことにした。一度来た路はなぜかそれほど長く感じない。青潟駅前の佐川書店に足を向けた。その途中だった。

白いセーラー服に紺のスカーフ姿の女子ふたり組とすれ違った。珍しく二人とも見覚えのある顔だった。乙彦は立ち止まった。

ひよりは少しパーマがかかった髪を一本に結い上げている、透けるような色の白い女子、またその隣はおさげ髪を綺麗に整えた、はつかねずみのような表情の……。

小さな手提げと一緒に、真っ白い花の束を新聞紙に包んだまま抱えていた。抱えるのも重たそうだ。その花束に顔を覆い隠す格好で隣の女子とふたりささやきながら歩いている。

その花の名は乙彦にはわからない。ひまわりではない、葉牡丹でもない、菜の花でもない。

豆粒みたいな白い花がいっぱい、見た目、ふわっと軽そうだ。

——もしかして？

念のため横顔を確認した。

——水野さんだ！

認識するより先に、思わずその名で呼び止めた。

「水野さん！」

三歩ほど、ふたり組が離れた後だった。振り返った水野さんの顔は最初、きょとんとしていた

けれども乙彦と気づいたのか、微笑んで小さく礼をした。

——水野さん、よかったな。

高校受験の失敗で、水野さんが憔悴しきっていた合格発表の日を、乙彦は覚えていた。

意に染まぬ高校であっても、水野さんは乙彦のよく知っていた笑顔で、同じ学校の友だちと楽しそうに微笑んでいる。それだけで十分だ。

向こうには連れもいる、これ以上近寄って言葉を交わす必要もなかった。

乙彦は片手を挙げ、そのままふたりを見送った。

瞼の裏に焼きついたひまわりや葉牡丹や菜の花や、油絵の具で塗りたくられたようなたくさんの花の色。すべて水野さんの抱えていた白い花束の色で埋め尽くされていった。

白く、白く。

高一—学期編 完結

青立狩 高一・一学期編

<http://p.booklog.jp/book/78024>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyouaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78024>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78024>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ